

頭註 國譯本草綱目

第八冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修・校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

考定者牧野先生頻々旅行せられ爲めに名物の考定充分ならず時々先生の手を煩はし體裁は整うたものゝ其間正誤すべき點も必ず之れあらんと思ひますので此等は後とで追補する事とし發行期日切迫の爲め不取敢本册の刊行を敢てしたやうな次第です

昭和八年二月二十日

春陽堂

頭註國譯本草綱目　第八册

目次

本草綱目菜部第二十七卷

菜部第二十七卷目錄……一二

柔滑類

菠薐（赤根）……一

蕹菜……三

菾菜（莙薘）……五

東風菜……八

薺……九

菥蓂（大薺）……一二

繁縷……一四

雞腸草……一八
苜蓿……二一
莧……二三
馬齒莧……二九
苦菜（苦賈）……三六
白苣（生菜）……四二
萵苣……四四
水苦……四七
翻白草……四八
仙人杖草……五〇
蒲公英（地丁）……五一
黃瓜菜……五六
生瓜菜……五七
落葵（藤菜）……五八

蕺菜（魚腥草）……六一
蕨……六三
水蕨……六六
薇……六七
翹搖（巢菜）……六九
鹿藿（野綠豆）……七一
灰藋……七三
藜……七六
秦荻藜……七七
醍醐菜……七八
茅膏菜　雞侯菜　孟娘菜　優殿
芋……八〇
野芋
土芋（土卵）……八六

薯蕷（山藥）……八七
零餘子……九五
甘藷……九六
百合……九七
山丹（紅花菜）……一〇四
草石蠶（甘露子）……一〇五
竹筍……一〇八
酸筍……一一四

本草綱目菜部第二十八卷

菜部第二十八卷目錄……一一三
蓏菜類
茄……一一七
苦茄……一二五
壺盧……一二五

苦瓠……一三〇
敗瓢……一三六
冬瓜……一三八
南瓜……一四七
越瓜（稍瓜）……一四八
胡瓜（黄瓜）……一五〇
絲瓜……一五三
天羅勒
苦瓜……一六一
水菜類
紫菜……一六四
石蓴……一六五
石花菜……一六六
鹿角菜……一六七

龍鬚菜……一六八
睡菜……一六九
芝栭類
芝……一七一
木耳……一八一
杉菌……一九〇
皂莢蕈……一九〇
香蕈……一九一
葛花菜……一九四
天花蕈……一九四
蘑菰蕈……一九五
雞㙡……一九六
舵菜……一九七
土菌……一九七

鬼蓋　地芩　鬼筆
竹蓐……二〇二
藿菌……二〇三
蜀格
地耳……二〇五
石耳……二〇六

本草綱目果部第二十九卷

果部第二十九卷目錄……一—三
五果類
李……二〇九
徐李
杏……二一五
巴旦杏……二二二
梅……二二三

榔梅……二三四
桃……二四五
栗……二七一
天師栗……二七八
棗……二七九
仲思棗……二九二
苦棗……二九三

本草綱目果部第三十卷

果部第三十卷目錄……一
山果類
梨……二九五
鹿梨……三〇四
棠梨……三〇六
海紅……三〇八

木瓜……三一〇
樝子……三一九
榠樝……三二一
榲桲……三二三
山樝（山査）……三二五
菴羅果……三三一
柰……三三三
林檎……三三六
柹……三三九
椑柹……三四八
君遷子（牛奶柹）……三五〇
安石榴……三五二
橘……三六〇
柑……三七八

橙……三八二
柚……三八五
枸櫞（香櫞）……三八九
金橘……三九一
枇杷……三九三
楊梅……三九八
櫻桃……四〇一
山嬰桃……四〇五
銀杏（白果）……四〇七
胡桃……四一二
榛……四二三
阿月渾子……四二六
櫧子……四二七
鉤栗……四二九

橡實（櫟子）……四三〇
槲實（槲若）……四三六

本草綱目果部第三十一卷

果部第三十一卷目錄……一
夷果類
荔枝……四四一
龍眼……四五〇
龍荔……四五四
橄欖……四五五
木威子……四六一
菴摩勒……四六三
毗梨勒……四六五
五斂子（陽桃）……四六六
五子實……四六八

榧實……四六八
海松子……四七三
檳榔……四七七
大腹子……四八八
椰子……四九一
無漏子(波斯棗)……四九七
桄榔子……五〇〇
莎木麪……五〇三
波羅蜜……五〇五
無花果……五〇七
文光果　天仙果
阿勃勒……五〇九
沙棠果……五一〇
棎子……五一一

韓日……五一二
都桷子……五一三
都念子……五一四
都咸子……五一六
摩厨子……五一七
齊墩果　德慶果
韶子……五一八
馬檳榔……五一九
枳椇……五二〇

本草綱目果部第三十二卷

果部第三十二卷目錄……一
味類
秦椒……五二七
蜀椒……五三一

崖椒……五四四
蔓椒……五四五
地椒……五四六
胡椒……五四七
畢澄茄……五五四
山胡椒
吳茱萸……五五六
食茱萸(辣子)……五七〇
鹽麩子……五七四
咸平樹　酸角　鹹草
醋林子……五七八
茗(茶)……五七九
皐蘆……五九四

本草綱目菜部　第二十七巻

本草綱目菜部目錄第二十七卷

菜の二　柔滑類四十一種

菠薐 嘉祐 即ち赤根。　蕹菜 嘉祐　菾菜 嘉祐 即ち莙薘。　東風菜 開寶
薺 別錄　菥蓂 本經 即ち大薺。　繁縷 別錄　雞腸 別錄
苜蓿 別錄　莧 本經　馬齒莧 蜀本
苦菜 本經 即ち苦蕒。　白苣 嘉祐 即ち生菜。　萵苣 食療　水苦蕒 圖經
翻白草 綱目　仙人杖草 拾遺　蒲公英 唐本 即ち地丁。
黃瓜菜 食物　生瓜菜 圖經　落葵 別錄 即ち藤菜。
蕺菜 別錄 即ち魚腥草。　蕨 拾遺　水蕨 綱目　薇 拾遺
翹搖 拾遺 即ち巢菜。　鹿藿 本經 即ち野綠豆。　灰藋 嘉祐　藜 綱目
秦荻藜 唐本　醍醐菜 證類　茅膏菜、雞侯菜、孟娘菜、優殿を附す。
芋 別錄 野芋を附す。　土芋 拾遺 即ち土卵。　薯蕷 本經 即ち山藥。
零餘子 拾遺　甘藷 綱目　百合 本經

山丹 日華 即ち紅花菜。　草石蠶 拾遺 即ち甘露子。

竹筍 蜀本

酸筍 綱目

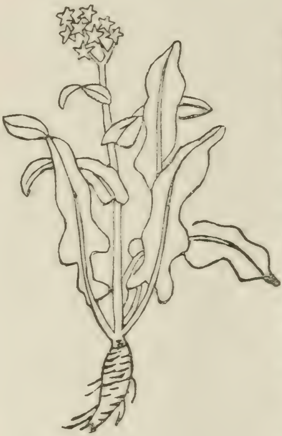
右附方　舊三十四　新一百一十。

菜の二　柔滑類四十一種

菠薐（宋嘉祐）

和名　はうれんさう
學名　Spinacia oleracea, L.
科名　あかざ科（藜科）

釋名　菠菜（綱目）　波斯草（綱目）　赤根菜



〔菠薐　――赤根菜――〕

愼微曰く、按ずるに、劉禹錫の嘉話錄に『菠薐の種は西國から出たもので、ある僧がその子を持つて來た。もとこれは頗陵國で種植するといふ意味の言葉が訛つて波稜となつたものだ』とある。

時珍曰く、按ずるに、唐會要に『太宗の時、(一)尼波維國から波薐菜を獻じた。紅藍に類し、實は蒺藜の如く、火

（一）尼波維ハ尼波羅ノ誤。尼波羅ハ西藏

で熟すれば能く食味を益す」とあるがこの物だ。方士は隱名で波斯草と呼ぶさうである。

(二)〔集解〕 時珍曰く、波稜は八月、九月に種ゑれば冬の食料に供する備となる。正月、二月に種ゑれば春の蔬の備となる。その莖は柔脆で中が空になり、その葉は綠で膩にして柔く厚く、直く一尖を出し、旁に兩尖を出して、鼓子花の葉の形狀に似てゐるが、長く大きく、その根は長さ數寸あり、太さは桔梗ほどで色が赤く、味は更に甘美である。四月に薹が起つて一尺ばかりになり、雄と雌とがあつて、莖に就いて碎けた紅花を開き、叢簇して顯でないが、雌には刺のある蒺藜子のやうな實を結ぶ。その子を種ゑるには研り開いて種ゑるもので、さうすれば浸脹し易く、必ず月の朔日が過ぎると生える。やはり一の特異である。

菜及び根 (三)〔氣味〕 【甘し、冷、滑にして毒なし】 士良曰く、微毒あり、多食すれば人をして脚弱ならしめ、腰痛を發し、冷氣を動ずる。豫め腹冷を患ふ者は必ず腹を破る。䱉魚と共に食つてはならぬ。霍亂を發すものだ。汁を取つて霜を煉り、砒、汞を制し、雌黃、硫黃を伏す。

ト印度ノ中間、ヒマラヤ山脈地帶ノ一國ナリ。

(二) 木村(康)曰ク、〔原植物〕はうれんさう Spinacea oleracea, L.(Chenopodiaceae)

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕Wehmer: die Pflanzenstoffe II Aufl. ニヨレバ Spinacea oleraceae, L.ノ成分ハ次ノ如クニシテ一九ノ文獻ヲアグ。即チ葉ハ、結晶性葉綠素、カロチン、レチチン及ビ一六・二五%ノ窒素ヲ含有スル蛋白質スピナチン、二種ノ無害サポニン其ノ他微量ニ沃度、硼素、鐵、燐酸等ヲ含ム。而シテ「フイチン」ハ之ヲ含マズ。全組成ハ%ニテ表ハセバ、水分約八九―九三、含窒素物二・二―三・七、粗纖維〇・八―〇・九、脂

防〇・三―〇・五、糖〇・一及ビ他ノ無窒素物二・八―三・五、鐵〇・〇一、灰分一・六―二。乾燥物質ハ灰分一六―一八、含窒素物一九・四、糖一・四、鐵〇・一三。又冬季ノ該品ハ灰分一・九―三・一、有機物質九・六―一三・三、鐵〇・〇九―〇・〇二一ナルニ對シ水分八六・七―八九・五。又微量ノニッケル及ビ「コバルト」ヲ驗出セルアリ。灰分中Na_2O三一―三九、K_2O九・七―二三、CaO一〇・六―一三、Cl四・八―七・八、P_2O_5八・七―一二、SO_3四・四―九、MgO五・三―七・五、Fe_2O_3二―四・六、SiO_2三―五九。發芽時ノ種子ハ酵素ゲンチオビアーゼ、ツエロビアーゼ及ビ「リヘナーゼ」ヲ有ス

【主治】【五臓を利し、腸、胃の熱を通じ、酒毒を解す。丹石を服する人はこれを食ふが佳し】(孟詵)【血脈を通じ、胸膈を開き、氣を下し、中を調へ、渇を止め、燥を潤ほす。根が就中良し】(時珍)

【發明】詵曰く、北方人は肉、麪を食ひ、これを食つて即ち平調を得る。南方人は魚鱉、水米を食ひ、これを食つて即ち冷する。故に多食すれば大小腸を冷すものだ。

時珍曰く、按ずるに、張從正の儒門事親に『凡そ一般に、久病で大便が澀滯して通ぜぬもの、及び痔漏の人は、常に菠薐菜の類を食ふが宜し、滑なるところから竅を養つて自然に通利する』とある。

【附方】新一。【消渇引飲】日に一石ほど飲むものには、菠薐根、雞内金等分を末にし、一日三回、米飲で一錢を服す。(經驗方)

蕹菜

蕹(ヨウ)を去聲に發音する。(宋嘉祐)

和名 ようさい
學名 Ipomoea reptans, Poir.
科名 ひるがほ科

食用植物誌ニヨレバ

産地	水分	蛋白質	脂肪	其他ノ無窒素物	纖維	灰分
内地	93.91	2.30	0.27	1.65	0.57	1.30
臺灣	93.339	1.706	0.30	3.462	——	1.173
歐洲	88.47	3.49	0.58	4.34	0.93	2.09

又Welmer ニヨレバ同屬ノ S. glabra, Mill. ハ葉ニ「カロチン」、發芽時ノ植物體ニ「グルタミン」ヲ含ミ、又 S. inermis, Mnck. ハ「カロテン（カロチン）ヲ乾燥物質中〇・一六〇％含ム

〔應用〕はうれんさうハ食用トシテ珍重サル。

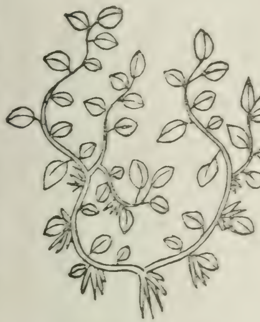
〔蕹菜〕

（一）木村（康）曰ク、

【釋名】時珍曰く、蕹は壅と同じ。この菜はただ壅して作るものだから壅といつたのだ。

【集解】（一）藏器曰く、蕹菜は嶺南で栽培する。蔓生で白花を開き、茹として食料になる。

時珍曰く、蕹菜は現に金陵、及び江夏地方で多く蒔く　その性は濕地が適し、霜雪を畏れ、九月土窖中にかこひ入れて三四月に取出し、糞土で壅ふて置くと節節から芽生え、一本で一畦に成るものだ。幹は柔く蔓のやうで中が空だ。葉は菠薐、及び鏨頭の形に似てゐる。味は短い。猪肉と共に煮て肉の色が紫になるまで煮ると味が佳し。段公路の北戸錄に『その葉は柳のやうだ』といつたのは誤だ。



〔蕹菜〕

按ずるに、嵇含の草木狀に『蕹菜の葉は落葵のやうで小さい。南方地方では、葦を編んで筏にし、小孔をあけて水上に浮べ、それに子を下して水中で種植する。

〔原植物〕ようさい、あさがほなIpomoea aquatica, Forsk. (Convolvulus reptans, L.)

すると萍のやうになつて根が水面に浮び、成長すると莖、葉がみな葦筏の孔から出て、筏と共に水上を上下してゐる。南方に於ける一種の異つた蔬菜だ』とあるところを見ると、この菜は水、陸いづれも生ずるものである。

〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【胡蔓草の毒、卽ち野葛の毒を解す。煮て食ひ、また生で擣いても服す】（藏器）【擣汁を酒に和して服すれば産難を治す】（時珍）記載は唐瑤の方にある。

〔發明〕藏器曰く、南方人は先づ蕹菜を食つて後に野葛を食ふ。この二物は相伏するので自然に苦まないのだ。汁を取つて野葛の苗に滴せばその場で萎死する。かやうに相殺するものだ。張華の博物志に『魏の武帝は野葛を一尺まで噉つた』とあるが、これは先にこの菜を食つたものであらう。

菾菜 菾の音は甜（テン）である。（別錄中品）

和名 たうぢさ
學名 Beta vulgaris, L.
科名 あかざ科（藜科）

〔校正〕嘉祐の莙蓬菜を併せ入る。

【釋名】 **莙薘菜** 時珍曰く、菾菜、卽ち莙薘であつて、菾は甜と通ずる。その味に因んだものだ。莙薘の意味は判らない。

(一)【集解】 弘景曰く、菾菜とは現に鮓蒸に作るに用ゐるものだ。

恭曰く、菾菜の葉は升麻の苗に似てゐる。南方の地では(二)炰蒸して食ふ。大いに香美なものだ。

保昇曰く、苗は高さ三四尺、莖は蒴藋のやうで細稜があり、夏盛にして冬枯れる。その莖を灰に燒いて淋し取つた汁で衣を洗へば玉のやうな白色になる。



——莙薘〔菾菜〕——

士良曰く、葉は紫菊に似て大きく、花は白い。

時珍曰く、菾菜は正月、二月に種を下し、宿根からも自生する。その葉は青白色で、白菘菜の葉に似てゐるが短く、莖もやはり相類するが、ただやや小さいだけだ。生でも熟しても食へるが、微し土氣がある。四月に細かな白花を開き、結實の狀態

(一) 木村(康)曰ク。〔原植物〕ふだんさう、たうぢさ Beta vulgaris, L. (Chenopodiaceae)〔備考〕Wehmer ニヨレバ B.vulgaris ノ母植物ハ殊ニ南部歐洲ノ海岸ニ野生スル B. maritima ト考ヘラレ栽培ニヨリ多クノ變種ヲ生ジタルモノナリト。

(二) 炰ハ炰ノ異體字、蒸煮セル料理名ナリ。

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕Wehmer ノ die Pflanzenstoffe II Aufl. ニヨレバ Beta vulgaris ニツイテノ研究少ナカラズ、アゲル所ノ文獻一五四ニ及ブ。B. vulgaris var. Rapa (Zuckerrübe) ハさたうだいこん卽チ甜菜ニシテ(一)葉ハ蔗糖、デキストローゼ、レブロ

ーゼ、マルトーゼ、ベタイン、プロピラミン(?)、僅微ノ、ヒドロカフエイン酸、グルタミン、豐富ニ蓚酸鹽、アンモニア鹽類及ビ「チモーゲン」トシテノ「ザアスターゼ」ヲ含ム。インベルターゼ、オキシダーゼ及ビ他ノ酵素或ハ痕跡ノ「フオルムアルデヒド」二種ノ「サポニン等ヲ存ス。又灰分ハ(%) CaO 二〇—三〇、SiO_2 一〇—三三、Na_2O 一〇—一五、K_2O 一〇—二五、P_2O_5 二—三、SO_3 二—五、Fe_2O_3 一—三、MgO 七—一〇、Cl 三—一二ヨリナリ、動搖甚ダシキモノナレドモ亦 Cu B C_3 Rb 等ヲ含ム。

(二)種子ハ水分九・七%、乾燥物質ハ(%)ヌクレイン三・

は茱萸の梂のやうだが、輕虛にして土黃色をなし、内に細子がある。根は白色だ。

(三)〔氣味〕「甘く苦し、大寒、滑にして毒なし」禹錫曰く、平にして微毒あり、冷氣の人は多食してはならぬ。氣を動ずるものだ。先に腹冷を患つた人が食へば必ず腹を破る。

〔主治〕「時行壯熱。風熱毒を解す。擣汁を飲めば瘥える」(別錄)「夏期にこの菜で粥を作つて食へば、熱を解し、熱毒痢を止める。擣き爛らして灸瘡に傅ければ痛を止めて瘥え易い」(蘇恭)「擣汁を服すれば冷熱痢に主效がある。又、血を止め、肌を生ずる。また諸禽獸傷にこれを傅ければ立ろに癒える」(藏器)「湯に煎じて飲めば、胃を開き、心膈を通じ、婦人に宜し」(大明)「中を補し、氣を下し、脾氣を理し、頭風を去り、五臟を利す」(嘉祐)

根〔氣味〕「甘し、平にして毒なし」〔主治〕「經脈を通じ、氣を下し、胸膈を開く」(正要)

子〔主治〕「半生に煮て擣いた汁を服すれば小兒の熱を治す」(孟詵)「醋に浸して顏に揩れば粉滓を去り、潤澤にして光あらしめる」(藏器)

一六、蛋白質一七・二五、アミーデ五・七六、グリッエリーデ一七・八、フイトステリン（ヒヨレステリン）〇・九六、レチチン〇・四六、澱粉一九・六、ペントーゼ類三、粗纖維一・九、無窒素物二四・七、蓚酸鹽類〇・三九、灰分四・九九（內、P_2O_5 一・七、K_2O 一・〇九、CaO 〇・二三）、又オキシダーゼ、ヂアスターゼ、インベルターゼ、チロジナーゼ、カタラーゼ、サポニン等ヲ有ス。子殼中ニ一八・八五%ノ「ペントザン」ヲ含ム。
(三)根ハ卽チ糖ヲ製スル原料トナル部分ニシテ含水炭素類、有機酸類、蛋白質及ビ含窒素分解成績物及ビ其他ノモノヲ有シ、ソノ組成(%)ハ水分八一・三（七四・

【附方】　新一。【痔瘻下血】蓮子、蕓薹子、荊芥子、芫荽子、萵苣子、蔓菁子、蘿蔔子、葱子等分を、大鯽魚一個を鱗、腸を去つて中に裝藥して縫合し、銀石器に入れて上下から火をかけて煉熟し、放冷して末にし、一日二服、二錢づつを米飮で服す。

東風菜（宋開寶）

和名　しらやまぎく
學名　Aster scaber, Thunb.
科名　きく科（菊科）

【釋名】　**冬風**　志曰く、この菜は春に先じて生ずるから東風なる名稱がある。一には冬風と書くが、その意味は冬氣を得てゐるといふことだ。

【集解】　志曰く、東風菜は嶺南の平澤に生ずる。莖は高さ二三尺、葉は杏葉に似て長く、極めて厚く軟く、表面に細毛がある。煮て食ふに甚だ美味だ。

時珍曰く、按ずるに、裴淵の廣州記に『東風菜は、花葉は落妊娠に似て莖は紫だ。肥肉で羹にして食ふに宜し。香氣は馬蘭に似て味は酪のやうだ』とある。

【氣味】　【甘し、寒にして毒なし】　【主治】　【風毒壅熱、頭痛目眩、肝熱眼赤。

八―八八)、含窒素物一・二四(〇・五四―二・四九)、脂肪〇・一〇(〇・〇二―〇・二三)蔗糖一二・二五(三・三五―一七・三六)、其他ノ無窒素物二・九二(一・八五―六・三七)、粗纖維一・一六(〇・六五―二・〇七)、灰分〇・九九(〇・二六―一・九四)汁液中ノ糖ノ存在ハ約一七―一九%。B. vulgaris var. crassa. ノ根ノ組成(%)ハ水分八八(七五・四―九四・三)、含窒素物一・二六(〇・四七―三・六五)、脂肪〇・一三(〇・〇二―〇・四五)、無窒素物八・六三(五・七四―一〇)、粗纖維〇・八九(〇・三九―二・一四)、灰分一・〇四(〇・五九―二・七七)汁液中蔗糖凡ソ五―一二%、一%未滿ノ葡萄糖及ビ蓚酸鹽約

羹、臛に入れて食へる」(開寶)

薺 (別錄上品)

和名　なづな
學名　Capsella Bursa-pastoris, Moench.
科名　十字科

釋名　**護生草**　時珍曰く、薺は生えて濟濟たるものだから薺といつたのだ。これを護生草といふは能く衆生を護るといふ意味だ。釋家でその莖を取つて挑燈杖にし、蚊、蛾を辟ける。



〔薺菜〕

(一)**集解**　普曰く、薺は野中に生ずる。
弘景曰く、薺は類が甚だ多い。此にいふは現に一般に食ふもののことだ。葉を葅、羹にするが、やはり佳味である。詩に『誰か謂ふ荼苦なりと、その甘きこと薺の如し』とはこのものだ。
時珍曰く、薺には大、小數種あつて、小薺

は薺、花、莖が扁くして味が美し。その最も細小なるものを沙薺と名ける。大薺は科、葉がいづれも大きくして味がそれほどでなし。その莖が硬くして毛あるものは菥蓂と名け、味は甚だ佳くない。いづれも冬至後に苗が生え、二三月に莖が起つて五六寸になり、細かな白花が整整として同じやうに開く、その結ぶ莢は小萍のやうだが三角があり、莢の中の細子は葶藶の子のやうだ。その子を蒫——音は嵳(サ)——と名け、四月に收める。師曠が『歳甘甘ならんと欲して先づ薺を生ず』といつたのはこれである。菥蓂、葶藶はいづれも薺の類であつて、葶藶は草部の隰草類に記載してある。

(二)〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【肝を利し、中を和す】(別錄)【五臟を利す。根は目痛を治す】(大明)【目を明にし、胃を益す】(時珍)【根、葉の燒灰は赤白痢を治するに極めて效がある】(甄權)

〔附方〕舊一、新二。【暴赤眼】痛脹し、磣澀するには、薺菜根を杵いて汁を滴す。(聖惠)【眼に瞖膜を生じたるもの】薺菜の根と莖と葉とを洗淨し、焙じ乾して細末にし、毎夜就寢時に先づ眼を洗つてから、その末を米ほど挑げ取つて兩方の大眥頭

〇・〇七%。

〔東風菜〕

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕しらやまぎく、Aster scaber, Th.

〔薺〕

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕なづな Capsella Bursapastoris, L. (Moench.) (Cruciferae)

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕全草ハ「ヒヨリン」及ビ「アセチールヒヨリン」「フマール」酸、「イノシツト」等ヲ含有ス。「Bombelon」氏ハ止血有效成分トシテ「ブルシン」酸ヲ記載セリ。果皮中ニハ「ヂオスミン」ナル配糖體ヲ含有ス〔藥理〕全草ノエキスヲ溫血動物ニ注射スレバ血壓下降シ呼吸筋ノ痙攣等ヲ惹起ス其ノ症狀ハ「アセチルコーリン」ノ作用ニ一致ス。又切離セ

ル腸管又ハ子宮ヲ著シク緊縮セシム。〔藥用〕全草ハ利尿解熱ノ效アリ(民間)又「クリム」氏ニヨレバ止血作用ヲ有シ子宮肺等ノ出血ニ對シ「ヒドラスチス」根或ハ麥角ニ代用スル價値アリト。

成分文獻

H. Boruttan und H. Cappenberg: Arch. Pharm. 259,33 (1921)
L. Zackmeister und P. Szécsi: Ber. 54, 172 (1921)
E. Bombelon: Pharmaz. Ztg. 33, 151(1888)
O. A. Oesterle: Schw. Apot. Ztg.60, 441 (1922); 藥誌大正一二(494) 266 O. A. Oesterle und, G. Wander: Helv. Chim. Acta, 1925 (8) 519.

に置き、澀痛を久しく忍べば膜が自ら落ちる。(聖濟總錄)【腫痛腹大】四肢枯痩し、尿澀するには、甜葶藶を炒り、薺菜根と等分を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを陳皮湯で服す。ただ二三丸で小便が淸くなり、十餘丸で腹が故のやうになる。(三因)

薺實 普曰く、三月三日に採つて陰乾する。士良曰く、また菥蓂子とも名ける。四月八日に採收するが良し。周王曰く、凶作の歳には、子を採つて水で調へて塊にし、それを粥に煮、餅にすれば甚だ粘滑だ。

〔氣　味〕【甘し、平にして毒なし】權曰く、氣を患ふものがこれを食へば冷氣を動ずる。詵曰く、麪と共に食はれない。人をして背悶せしめるものだ。丹石を服する人は食つてはならぬ。

〔主　治〕【目を明にする。目痛】(別錄)【靑盲で物の見えぬもの。五臟の不足を補す】(甄權)【腹脹を治す】(吳普)【風毒邪氣を去り、壅を治し、瞖を去り、熱毒を解す。久しく服すれば物が鮮明に視える】(士良)

花 〔主　治〕【席下に布けば蟲を辟ける。又、蚊、蛾を辟ける】(士良)【陰乾し

藥用文獻

C. Grimme: Pharmaz. Zentralhalle, 1919 (69) 237; 248; 藥誌(大正一〇(四七〇)三五; H. Buttanu. K. Cafpenberg: Arch. Pharm. 1921 (259) 33.

新藥「ビスチブルツン」(獨逸 Horstein & Co.)ハなづな及びやどりぎノ有效成分ヲ抽出シタルモノニシテ子宮出血、月經過多症ソノ他腸出血、喀血等ニ止血藥トシテ應用セラル。(邦産藥用植物)

〔薪蓂〕

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕なづな Capsella Bursa pastoris, Moench. (Cruciferae)ぐんばいなづな Thlaspi arvense, L. (Cruciferae)

て研末し、日に二錢つつを棗湯で服すれば久痢を治す】(大明)

薪蓂 音は錫覓(シャク)ミヤク)である。(本經上品)

和名　おほなづな
學名　Capsella Bursa-pastoris, Moench. forma.
科名　十字科

校正 草部より此に移し入る。

釋名 **大薺**(別錄) **大蕺**(本經) **馬辛** 時珍曰く、諸名の意味は解し兼ねる。呉普本草には又、一名析目、一名榮目、一名馬駒といつてある。

(一) **集解** 別錄に曰く、薪蓂は咸陽の山澤、及び道傍に生ずる。四月、五月に採つて暴乾する。弘景曰く、今は處處にある。これは大薺の子のことで、方に用ゐることは甚だ稀だ。

保昇曰く、薺の葉に似て細い。俗に老薺と呼んでゐる。

恭曰く、爾雅に『薪蓂は大薺なり』とあり、註に『薺に似たもので、俗に老薺と呼ぶ』とあるが、しかしその味は甘くして辛くない。

臓器曰く、本經に『薪蓂、一名大薺』とあるを、蘇氏は爾雅を引いて註したが、

案ずるに、大薺といふは葶藶のことで菥蓂ではない。菥蓂は大きくして扁く、葶藶は細くして圓い。二物は甚だ別なるものだ。

○頌曰く、爾雅には葶藶を蕇——音は典（テン）——といつてある。葉はみな薺に似たもので、一名狗薺といふ。菥蓂とは大薺のことで、大體に於て二物いづれも薺の類である。故に一般には多く細別し得ないのでかかる疑問を惹起したのだ。古今の眼目の方に多く用ゐてある。

○○時珍曰く、薺と菥蓂とは一物である。ただ大、小の二種に分れるだけであつて、小なるを薺といひ、大なるを菥蓂といひ、菥蓂には毛がある。故に功用も共に同じいのであつて、陳士良の本草にも、やはり薺實、一名菥蓂と謂つてある。葶藶と菥蓂とは同類だが、ただ菥蓂は味が甘く、花が白く、葶藶は味が苦く、花が黃であるが異ふのだ。或は菥蓂、卽ち甜葶藶だともいふが、やはり通ずる。

苗（三） 氣味 【甘し、平にして毒なし】 主治 【中を和し、氣を益し、肝を利し、目を明にする】（時珍）

菥蓂子 氣味 【辛し、微溫にして毒なし】 ○恭曰く、甘いもので辛くはない。

（三） 木村（康）曰ク、〔成分〕Thlaspa arvense, L. ハ刺戟性ノ硫黃ヲ含ム成分ヲ有ス。Oragendorf: Heilpflanzen, 253.

普曰く、神農、雷公は辛しといひ、李當之は小溫なりといふ。之才曰く、蔓荊實、細辛と配合するが良し。乾薑、苦參を惡む。一には苦參が使となるといふ。

【主治】【目を明にする。目痛で涙の出るもの。痺を除き、五臟を補し、精光を益す。久しく服すれば身を輕くし、老いず】（本經）【心腹腰痛を療ず】（別錄）【肝の患者の積聚、眼目赤腫を治す】（甄權）

【附方】舊一、新一。【眼目熱痛】涙が出て止まぬには、菥蓂子を擣き篩つて末にし、就寝時に銅簪で少量を目に點入する。熱涙、及び惡物が出て甚だ佳きものである。【眼中の弩肉】方は上に同じ、夜毎に點ける。（崔元亮海上方）

繁縷（別錄下品）

和名　はこべ
學名　Stellaria media, cyr.
科名　なでしこ科（石竹科）

【釋名】䕷縷（爾雅）蔜　音は敖（ガウ）である。蘩縷（郭璞）滋草（千金）鵞腸菜　時珍曰く、この草は莖の蔓が甚だ繁り、中に一縷がある。故に名けたのだ。俗に鵞腸菜と呼ぶは形の形容である。滋長し易いから滋草といふ。古樂府に『樂を

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕うしはこべ Stellaria aquatica, Scop. (Caryophyllaceae) はこべら S. media, Cyr.

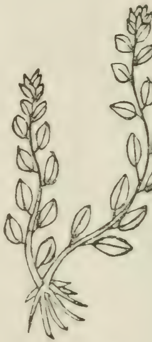
爲す時に及ぶべし、何ぞ能く來滋を待たん』とある滋とは草の名で、即ちこの草のことだ。

〔集解〕別錄（一）に曰く、繁縷は五月五日の日中に採り、乾して用ゐる

恭曰く、これは雞腸のことだ。多く溼地の坑渠の側に生ずる。流俗には通じて雞腸といひ、雅士は總て繁縷と名ける。

詵曰く、繁縷、即ち藤である。又、恐らく白軟草がそれらしい。

保昇曰く、葉は青く、花は白い。苗を採つて藥に入れる。



〔繁縷〕——鵞腸——

頌曰く、即ち雞腸である。南方に多くあつて、田野の間に生じ、澤に近い下溼の地にも或はある。葉は荇菜に似て小さく、夏、秋の間に小さい白黄色の花を生ずる。その莖梗は蔓になつてゐて、斷てば絲縷がある。又、細くして中が空であり、雞腸に似てゐるところからこの名を呼ばれる。本草には繁縷と雞腸とを二條に別けてあり、蘇恭はそれを一物だといつたが、謹で按ずるに、郭璞註爾雅に「蔜、䕷縷」、一名雞

腸草」とあつて實は一物である。現に南、北に生ずるものは、或はその土地の肥、瘠に因つて不同であるところから、世間で二物と疑ふのだ。しかし葛洪肘後方には、卒淋を治すとして『雞腸、及び繁縷を用う』とある。さうして見るとまたこれは二種の物のやうでもある。その用途は概して血を主とする。故に一般に食して宜し。

時珍曰く、繁縷、即ち鵞腸であつて雞腸ではない。下濕の地に極めて多く、正月苗が生え、葉は大いさ指頭ほどあり、莖細くして蔓を引き、斷てば中が空で絲のやうな一縷がある。蔬にして食へば甘くして脆かだ。三月以後に漸く老いて細瓣の白花を開き、小實を結び、稗粒ほどの大いさで中に葶藶子のやうな細子がある。吳瑞の本草に、黃花のものが繁縷、白花のものが雞腸だとしてあるが、やはりさうではない。二物は蓋し相似たものだが、但し鵞腸は味が甘く、莖が空で縷があり、花が白色だ。雞腸は味が微し苦く、咀めば涎滑で、莖中に縷がなくして微紫色だ。花も紫色である。これを以て區別される

(二)【氣　味】【酸し、平にして毒なし】權曰く、苦し。時珍曰く、甘く微し鹹し。詵曰く、溫なり。思邈曰く、黃帝は『組鮓に合せて食へば消渴を發し、人をして多

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕Stellaria media ノ全草中ニハ約一三・二%ノ灰分

ヲ含ム。コノ灰分中K_2O三六・六(或ハ又四五・四〇)、CaO一四(或ハ四・八)MgO二一・八(或ハ八)、Na_2O 六・九(或ハ四・八)、Fe_2O_3二・六(或ハ二・一)P_2O_5七(或ハ一二)、SO_3二・九(或ハ二・一)SiO_2三・六(或ハ一〇・七)、Cl九・八(或ハ一〇・五)「サポニン」ハ之ヲ欠キ、種子ハ〇・八%ノ油脂ヲ含ム。Wehmer: d. Pflanzenstoff II Aufl. 306.

〔薬用〕民間ニテハ全草ヲ婦人産後ノ浄血薬及ビ催乳薬トシテ煎用ス。往時ハ之ヲ食鹽ト混合シ焼キテ歯磨粉ヲ製造セリ。(食用植物誌)(邦産薬用植物)

く忘れしめる』といつた。

【主治】【積年の悪瘡、痔の癒えぬもの】(別錄)【血を破り、乳汁を下す。産婦が食ふがよし。産後腹に塊痛があるには、酒で炒つて汁を絞つて温服する。又、暴乾して末にし、醋糊で和して丸にし、空腹に五十丸を服すれば悪血を取下す】(藏器)

【發明】弘景曰く、この菜は、五月五日に採り、暴乾して焼いて屑にする。雑瘡を療するに有效だ。また百草に雑へても服す。ただこの一種だけではない。

詵曰く、悪瘡を治する神效の功があつて、搗汁を塗る。菜にして食へば人體を益する。五月五日に採つたものに限つて效驗がある。

詵曰く、能く悪血を去る。久しく食つてはならぬもので、血が盡きる恐がある。

【附方】舊一、新三。【食治に因つて髭を黒くする】繁縷を虀にして久しい間食ふ。能く髭髪を黒くする。(聖惠方)【小便卒淋】繁縷草を兩手に滿つるほどを水で煮て常に飮む。(范汪東陽方)【産婦に塊のあるもの】痛むには繁縷を用ゐる。方は前項の通り。【男子の陰瘡】莖、及び頭が潰爛して忍び難く痛み、久しく瘥えぬには、五月五日の繁縷を焼き焦して五分、新に出したばかりの蚯蚓屎二分を入れ、少量の水を

入れて和して研り、餅にして貼り、乾けば易へる。酒、麪、五辛、及び熱せる食物等を忌む。甚だ效がある（扁鵲方）

雞腸草（別錄下品）

和名　きうりぐさ
學名　Trigonotis peduncularis, Benth.
科名　むらさき科（紫草科）

【校正】もと草部に在つたものを唐本でこの部に移し入れた。

（一）【集解】弘景曰く、人家の園庭にもこの草がある。小供はこれを取り、挼んだ汁で蜘蛛網を捋り、至つて粘るやうにしてそれで蟬を粘し取る。

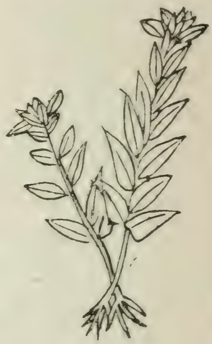
恭曰く、これは繁縷であつて、この一條は餘分のものだ。

時珍曰く、雞腸は下濕の地に生じ、三月苗が生え、葉は鵝腸に似て色が微し深く、莖は紫を帶び、中が空でなくして縷がない。四月に小さい莖が出て五出の小さい紫の花を開き、小さい實を結び、その實の中には細かな子がある。その苗は蔬に作つても鵝腸に及ばないものだ。故に別錄では繁縷をば菜部に列したが、この草をば

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕たびらこ きうりぐさ Eritrichium pedunculare, DC. = Trigonotis peduncularis, Bth. (Boragineae) うしはこべ Stellaria aquatica, Scop. (Caryophyllaceae) 〔備考〕食用植物誌（七七）ニたびらこハ

漢名ヲ鷄腸菜トス。ソノ嫩莖葉ヲトリ煠キテ食ス。又菜蔬ヲ瓜揉ミノ如クニナシテ此草ノ生汁ヲ加フレバ胡瓜ノ香アリテ頗妙ナリ。薩摩ノ人ハ常ニ之ヲ食フ。又葉ヲ以テ粥ヲ製ス。古來春ノ七草ノ一ニ數ヘラルル草ニシテほとけのざトモ呼べリ。但シ同名アリ混ズベカラズト。尤モ最近牧野博士ニヨレバ春ノ七草ノたびらこハこおにたびらこヲ正條ナリトスト。

草部に列したのは右の理由に因つたのである。蘇恭がそれを識らずして、疑つて一物となしたのは誤だ。生で嚼めば涎滑なものだから蟬を粘し取れるのである。鵞腸は生で嚼んでも涎がないからやはり自ら區別し



〔雞腸〕

得る。鄭樵が通志に『雞腸は蓼に似て小さく、その味が少し辛い。繁縷ではない』といつたのは當を得てゐる。又、石胡荽にも雞腸草なる名があるが、これとは同物でない。

【氣味】【微し辛く苦し、平にして毒なし】權曰く、苦し。之才曰く、微寒である。

【主治】【毒腫。小便利を止める】(別錄)【蠼螋溺瘡を療ず】(弘景)【遺溺に主效がある。手、足傷水の爛れを洗ふ】(甄權)【五月五日に灰にして鹽に和し、一切の瘡、及び風丹の遍身痒痛を療ず。また搗いて封じ、日に五六囘易へるもよし。菜として食へば人を益し、脂膏の毒氣を去る。又、燒いて疳䘌に傅ける。汁を取つて蜜を和

して服すれば、小兒の赤白痢を療するに甚だ良し】(孟詵)【研末し、或は灰に燒いて齒に揩れば宣露を去る】(蘇頌)

附方　舊二、新七。【小便利を止める】雞腸草一斤を豆豉汁の中で煮て米を和し、羹、及び粥に作つて頻りに食ふ。(食醫心鏡)【小兒の下痢】赤、白には、雞腸草の搗汁一合に蜜を和して服す。甚だ良し。(孟詵食療)【氣淋脹痛】雞腸草三兩、石韋を毛を去つて一兩を、毎服三錢づつ水一盞で煎じて服す。(聖濟總錄)【風熱牙痛】浮腫し、發歇し、元臟の氣虛せるもの、小兒の疳蝕には、雞腸草、旱蓮草、細辛等分を末にし、毎日三回づつ擦る。これを祛痛散と名ける。(普濟方)【發背で死せんとするもの】雞腸草を搗いて傅ける。(肘後方)【反花惡瘡】雞腸草の研汁で拂ふ。或は末にして猪脂で調へて搽る。極效がある(醫林正宗)【一切の頭瘡】雞腸草を灰に燒き、鹽を和して傅ける。(孟詵食療)【漆瘡の瘙痒】雞腸草を搗いて塗る。(肘後方)【射工に中てられたとき】瘡となりたるには、雞腸草を搗いて塗る。日を經て癒える。(盧氏方)

苜蓿（別錄上品）

和名　うまごやし
學名　Medicago denticulata, Willd.
科名　まめ科(荳科)

【釋名】 **木粟**（綱目） **光風草** 時珍曰く、苜蓿を郭璞は牧宿と書いた。それはその宿根から自生し、牛、馬を飼牧するによいものとの意味である。又、羅願の爾雅翼には木粟と書いた。その意味はその米が飯に炊けるからだ。葛洪の西京雜記には『樂遊苑には苜蓿が多く、風がその間に在つて常に蕭蕭然たるものだ。日がその花を照すと光采があるので懐風と名け、又、光風と名ける。茂陵地方では連枝草といふ』とある。金光明經ではこれを塞鼻力迦といつてある。



〔苜　蓿〕

(一)【集解】 弘景曰く、長安中には苜蓿園といふがあつた。北方の地では甚だこ

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕むらさきう

まごやし Medicago sativa, L. (Leguminosae) うまごやし、まごやし M. denticulata, Willd. (Leguminosae)

(一) 大宛ハ古國名、今ノ露領中央亞細亞ブルハナノ地ナリ。
(二) 陝隴ハ陝西、甘肅ノ地ナリ。

れを重ずるが、江南では甚だこれを食はない。それは味がないからだ。外國には苜蓿草といふ目の治療に用ゐるものがあるが、それはこの類の草ではない。

詵曰く、彼の地方ではその根を採つて土黄芪とする。

宗奭曰く、陝西に甚だ多く、牛、馬を飼ふに用ゐ、嫩い時は人もこれを食ふ。宿根があつて、刈つて了ふとまた生えるものだ。

時珍曰く、雜記には『苜蓿はもと(一)大宛に出たもので、漢の使張騫が携帶して中國に歸つたものだ』といふが、しかし今では處處の田野にある。(二)陝隴地方ではやはり栽培するものもあつて、年年自生するのを苗を刈つて蔬にする。一年に三回刈れるもので、二月に苗が生え、一科が數十莖になり、莖は頗る灰藋に似て、一枝に三葉あり、葉は決明の葉に似て、小さくして指頂ほどの艶やかな綠碧色だ。夏、及び秋に入つて細かな黄色の花を開き、小さい莢を結び、圓扁旋轉して刺があり、數箇の莢が累累となる。老いれば黑色になり、内に穄米のやうな米があつて、それは飯にもなり、また酒にも釀し得る。羅願は此を以て鶴頂草としたが、誤だ。鶴頂とは紅心の灰藋のことだ。

（四）【氣　味】【苦し、平にして澁し。毒なし】宗奭曰く、微甘にして淡し。詵曰く、涼なり。少し食ふが好し、多く食へば冷氣をして筋中に入らしめ、人を瘦せしめる。李廷飛曰く、蜜と共に食へば人をして下痢せしめる。

【主　治】【中を安じ、人を利す。久しく食ふてよし】（別錄）【五臟を利し、身を輕くし、人を健にし、脾、胃の間の邪熱の氣を洗ひ去り、小腸を通ずる。諸種の惡熱毒には、煮て醬を和して食ふ。また羹に作るもよし】（孟詵）【大、小腸を利す】（宗奭）【乾食すれば人を益す】（蘇頌）

根【氣　味】【寒にして毒なし】【主　治】【熱病の煩滿、目黃赤、小便黃、酒疸には、擣いて一升を服す。人をして吐利せしめて癒える】（蘇恭）【擣汁を煎じて飲めば沙石淋痛を治す】（時珍）

莧（本經上品）

和名　ひゆ
學名　Amarantus inamoenus, Willd.
科名　ひゆ科（莧科）

【釋　名】時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『莧は莖、葉がいづれも高く大き

（四）木村（康）曰ク、〔成分〕Medicago sativa, L. ハ、ソノ種子中ニハ「カラクトーゼ」ヲ生成スル「ゴム」質、「スタヒオーセ」ヲ含ミ、蛋白ノ含量ハ約三七％脂肪油ハ七・六三％、其他諸種ノ酵素、酸類ヲ含ム。乾燥植物中「スタヒリヂン」、「ヒスチヂン」、「リシン」等ヲ蛋白質ノ分解物トシテ有シ、其他有毒「サポニン」「アルフアルフアサポニン」ヲ含ミ、又一種ノ苦味質ヲ有ス文献ハ Wehmer: Pflanzenstoffe II Aufl. 539 ニ四〇ヲアグ。

くして見易い。故にその文字は見に從つたので、指事の文字である』とある。

(一)【集解】別錄に曰く、莧實、一名莫實、細莧も亦同じ。(二)淮陽の川澤、及び田中に生ずる。葉は藍の如し。十一月に採る。



〔莧〕

李當之曰く、莧實、卽ち莧菜である。

弘景曰く、莧實とは白莧のことで、それゆゑに『細莧も亦同じ』『葉は藍の如し』といつたものだらうと思はれる。細莧とは糠莧のことで、食つては勝れてゐるが、いづれも冷利である。霜がかかると熟するところから『十一月に採る』といつたのだ。又、赤莧といふがある。莖が純紫色で、食ふには堪へない。馬莧といふは別の一種であつて、地に布いて生え、實は至つて微細である。俗に馬齒莧と呼ぶ。恐らく莧實ではない。

恭曰く、赤莧、一名蕢——音は匱(キ)——といふ。經に『莧實、一名莫實』といつ

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕いぬびゆ Amarantus Blitum, L. (Amarantaceae) ひゆ、ひやうな、こびゆ A. mangostanus, L. いぬびゆ、のびゆ A. Blitum, L. var. oleraceus, Hook. f. 〔備考〕ひゆニハ種類多シ、あかびゆ(赤莧)、むらさきびゆ(紫莧)、とらびゆ(白莧)はなびゆ(五色莧)等アリ。

(二) 淮陽ハ漢ノ國又ハ郡名。今ノ河南省淮陽縣ノ西ニ故城アリ。

(三) 野莧
和名 いぬびゆ
學名 Amarantus Blitum, L.
科名 ひゆ科(莧科)

てあるが、莧の字は誤ではないかと思はれる。

保昇曰く、莧には凡そ六種あつて、赤莧、白莧、人莧、紫莧、五色莧、馬莧である。人、白の二莧の實は藥用となる。赤莧は味の辛いもので、別に功用がある。

頌曰く、人莧、白莧倶に大寒である。また糠莧ともいひ、また胡莧といひ、或は細莧といふが、その實は一であつて、ただ大なるを白莧といひ、小なるを人莧といふだけだ。その子は霜が降りてから熟し、細くして色が黒く。紫莧は莖、葉が通じて紫なもので、吳地方ではこれで瓜を染める。諸莧中でただこれだけが毒がなく、寒でない。赤莧は花莧ともいひ、莖、葉は深赤色で、根、莖はまた糟漬にし、貯藏して置いても食へるが、甚だ美味だ。味は辛い。五色莧といふは今は一向に稀なものだ。細莧は俗に野莧といひ、猪が好んで食ふ。また猪莧と名ける。


〔野莧〕

時珍曰く、莧はいづれも三月に種を撒く、六月以後には食へなくなり、老いると

（四）木村（康）曰ク、「成分」Amarantus ノ類ハ概シテ硝石ニ富ミ又「ベタイン」ヲ含ム。Wehmer: d. Pflanzenstoffe II A-ufl. 324.「應用」主トシテ葉ヲ食用トス。古來藥用ニ供ス。（食用植物誌）

莖が抽き出て人の長ほどになり、穗になつた細花を開き、穗中の細子は扁くして黑く光り、青葙子、雞冠子と見分けがつかぬ。九月にそれを取收める。細莧、卽ち野莧であつて、北方地方では糠莧と呼ぶ。莖柔く、葉細く、生えると子を結び、味は家莧に比して更に勝る。俗に青葙苗を雞冠莧と呼び、これも食へる。それは草部に記載してある。

菜　［氣　味］（四）【甘し、冷利にして毒なし】恭曰く、赤莧は辛くして寒なり。鼎曰く、莧は、氣を動じ、人をして煩悶せしめ、中を冷し、腹を損ずる。鼈と共に食つてはならぬ、鼈癥を生ずるものだ。又、鼈肉を豆ほどづつ取つて莧菜で封じ裹み、土坑中に置いて土で蓋ひ、一夜を經ると盡く變じて小鼈になる。機曰く、この說は屢〻試みたが實際の結果がなかつた。

［主　治］【白莧は氣を補し、熱を除き、九竅を通ずる】（孟詵）【赤莧は赤痢、射工、沙虱に主效がある】（蘇恭）【紫莧は蟲毒を殺し、氣痢を治す】（藏器）【六莧いづれも大、小腸を利し、初期の痢を治し、胎を滑する】（時珍）

［發　明］弘景曰く、人莧、細莧はいづれも冷利である。赤莧は赤下を療ずるけ

れども、食ふには堪へない。方に莧菜を用ゐることは甚だ稀だが、斷穀の方中に時に用ゐる。

頌曰く、赤莧は微寒である。故に血痢に主效がある。紫莧は寒ならず、諸莧に比して毒がない。故に氣痢に主效がある。

詵曰く、五月五日に莧菜を收取し、馬齒莧と和して細末にし、等分を妊婦に與へて常服させると出產を容易ならしめる。

震亨曰く、紅莧は血分に入つて善く走る。故に馬莧と共に服すれば能く胎を下す。或は煮て食へば人をして產し易からしめる。

附方　舊三、新四。【產後の下痢】赤、白には、紫莧菜一握を切つて煮た汁に粳米三合を入れて粥に煮て食ふ。立ろに癒える（壽親養老書）【小兒の緊唇】赤莧の擣汁で洗ふが良し。（聖惠）【漆瘡搔痒】莧菜の煎湯で洗ふ。【蜈蚣の螫傷】灰莧葉で擦れば止む（談野翁方）【蜂蠆の螫傷】野莧を挼んで擦る。【諸蛇に螫されたとき】紫莧の擣汁一升を飲み、滓を塗る（集驗方）【射工に中てられたとき】傷寒のやうな狀態となり、寒熱し、發瘡して一个處に偏在し、普通の狀態と異なるものには、赤莧を取

つて莖、葉を合せて搗き、その汁一升を飲み、一日に二回服す。（集驗方）

莧實【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【青盲。目を明にし、邪を除き、大、小便を利し、寒熱を去る。久しく服すれば、氣力を益し、饑ゑず、身を輕くする】（本經）【白瞖を治し、蚘蟲を殺す】（別錄）【精を益す】（大明）【肝風寒熱、瞖目黑花】（時珍）

【發明】時珍曰く、莧實と靑葙子とは同類の異種だ。故にその目を治するの功もやはり彷彿たるものである

【附方】新一。【大、小便を利す】莧實を末にして半兩を二服に分け、新汲水で服す。（聖惠）

根【主治】【陰下の冷痛が腹に入れば腫滿して人を殺す。搗き爛らして傅ける】（時珍）

【附方】新一。【牙痛】莧根を晒し乾し、焼いて性を存し、末にして揩り、再び紅燈籠草根の煎湯で漱ぐ（孫氏集效方）

馬齒莧（蜀本草）

和名　すべりびゆ
學名　*Portulaca oleracea*, L.
科名　すべりひゆ科（馬齒莧科）

釋名　**馬莧**（別錄）　**五行草**（圖經）　**五方草**（綱目）　**長命菜**（同上）　**九頭獅子草**

時珍曰く、その葉は馬齒のやうに竝んでゐるもので、性が滑利で莧に似てゐるから名けたものだ。俗に大葉のものを㹠耳草、小葉のものを鼠齒莧と呼ぶ。又、九頭獅子草と名ける。その性が久しきに耐へて燥し難いところから長命の稱がある。寶藏論、及び八草靈變篇に、いづれも馬齒龍牙と名けてある。又、五方草と名けるはやはり五行の意味である。



〔馬　齒　莧〕

頌曰く、馬齒莧は莧類として取扱はれてはあるが、苗、葉は莧と全然相似てゐな

い。一名五行草といふは、その葉が青く、梗が赤く、花が黄、根は白く、子は黒いからである。

藏器曰く、別錄に馬齒を莧と同類としてあるが、二物は異つてゐるものだから此には別品として扱ふことにした。

（二）〔集解〕弘景曰く、馬莧は莧とは別の一種であつて、地に布いて生え、實は至つて微細なものだ。俗に馬齒莧と呼ぶ。やはり食へるもので、少し酸い。

保昇曰く、この物には二種あつて、葉の大なるものは用ゐるに堪へない。葉の小なるものは節葉の間に水銀があつて、十斤毎に八兩、乃至十兩以內を有するものだ。それで至つて燥し難い。槐木槌で碎き、東面して日光に向けて作つた架の上で晒すべきもので、かくすれば兩三日で幾年か乾したもののやうに乾く。藥に入れるには莖を去るべきもので、莖には效力がない。

斅曰く、凡そ使用するには大葉のものを用ゐてはならぬ。これは馬齒莧ではなく、また水銀もない。

時珍曰く、馬齒莧は處處の田園や野原に生える。莖が柔かで地に布き、細細とし

（二）木村（康）曰ク、〔原植物〕すべりひゆ、とんぼぐさ、みんぶとき Portulaca oleracea, L. (Portulacaceae)

て對生する。六七月に細花を開いて小さく尖つた實を結び、實の中に葶藶子のやうな形狀の子がある。一般には多く苗を採つて煮曬して蔬にする。方士は採取して砒を伏し、汞を結し、丹砂を煮、硫黄を伏し、雄を死し、雌を制す。それには別に一定の方法がある。一種の水馬齒といふは水中に生える。形狀は相類したもので、やはり汋いて食へることが王西樓の菜譜に記載してある。

菜　（二）

氣味　【酸し、寒にして毒なし】恭曰く、辛くして溫なり。宗奭曰く、一般に多く食ふ。しかし性は寒にして滑するものだ。

主治　【諸腫瘻、疣目には擣いて揩る。痃癖を破り、消渴を止める】（藏器）【能く陽を肥し、人をして食を思はざらしめ、婦人の赤、白下を治す】（蘇頌）【汁を飲めば反胃、諸淋、金瘡流血を治し、血癖、癥瘕を破る。小兒に就中良し。汁を用ゐて緊唇、面皰を治す。馬肝、射工の毒を解し、塗れば瘥える】（蘇恭）【白尸脚、陰腫を治す】（保昇）【膏に作つて濕癬、白禿、杖瘡に塗る。又、三十六種の風に主效がある。粥に煮たるものは痢、及び疳痢を止め、腸痛を治す】（孟詵）【これを服すれば天年を長くし、髮を白からしめず、癧瘡を治し、諸蟲を殺す。生で擣いた汁を服すれば、

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕Portulaca oleracea, L. ノ全草ハ水分九二—九五、含窒素物一—二・二、脂肪〇・三—〇・四、無窒素物一・三—二・二、粗纖維一—一・四、灰分一—一・六ノ組成（%）ヲ有ス。Wehmer: d. Pflanzenstoffe II Aufl. 301.
〔應用〕莖ト葉トハ共ニ煮テ食ヒ又湯煮シテ和物トナス。時ニ酸味噌ニテモ用

フ。サレド多食スベカラズ。古來藥用ニ供セリ（食用植物誌）

惡物を利下し、白蟲を去るものだ。梳垢を和して丁腫を封じ、又、灰に燒いて陳醋滓を和し、先づ灸して後に封ずれは根が出る】（開寶）【血を散じ、腫を消し、腸を利し、胎を滑し、毒を解し、淋を通じ、産後の虚汗を治す】（時珍）

【發明】時珍曰く、馬齒莧の諸病に主效のあるは、いづれもただその血を散じ、腫を消する功力を取るのである。

頌曰く、多年の惡瘡で、あらゆる方を用ゐて瘥えぬもの、或は痛焮して已まぬものには、いづれも馬齒を擣き爛らして傅ける。兩三回に過ぎぬものだ。この方は武元衡相國から出たもので、武氏が西川に住んだとき、自身に脛瘡を苦み、焮痒して堪へ得ず、あらゆる醫方も效がなかつたが、京へ移つてから、部下の宮吏がこの方を呈したので、それを用ゐて瘥えた。李絳がこの事實を兵部手集に記載してある。

【附方】舊十五、新二十三。【三十六風】結瘡するには、馬齒莧一碩、水一碩を煮取つた汁に蜜蠟三兩を入れ、重煎して膏にして塗る。（食療）【諸氣不調】馬齒莧で粥を煮て食ふ（食醫心鏡）【疫氣の禳解】六月六日に馬齒莧を採つて晒乾し、元旦に煮熟して鹽、醋と共に食ふ。疫癘の氣を解し得るものだ。（唐瑤經驗方）【筋骨の疼痛】風

濕氣、楊梅瘡、及び婦人(三)月家の病に拘らず、先づこの藥を用ゐて疼を止め、然る後に適當の治療を施す。乾馬齒莧一斤、濕馬齒莧二斤、五加皮半斤、蒼朮四兩を舂き碎き、水で湯に煎じて洗滌し、急に葱、薑を擂り爛らして熱湯を沖ぎ、それを三椀服して暖にして汗を取る。立ろに痛が止まる。(海上名方)【脚氣浮腫】心腹脹滿し、小便澀つて少きには、馬齒草に少量の粳米、醬汁を和して煮て食ふ。(食醫心鏡)「男、女の瘧疾」馬齒莧を擣いて手の(四)寸口に(五)紮する。男は左、女は右。【產後の虛汗】馬齒莧の研汁三合を服す。もし無き場合には乾いたものの煮汁を用ゐる。(婦人良方)【產後の血痢】小便不通で臍腹の痛むには、生馬齒莧菜の杵汁三合を煎沸し、蜜一合を入れて和して服す。(產寶)【小兒の血痢】方は上に同じ。(心鏡)【肛門腫痛】馬齒莧葉、三葉酸草等分を湯に煎じて熏じ洗ふ。一日二回で有效である。(瀕湖方)【痔瘡の初期】馬齒莧を生鮮のものと乾けるものとに拘らず煮熟して急に食ひ、湯で熏洗する。一个月內外でその孔が閉ぢて愈える。(楊氏經驗方)【赤、白帶下】老婦、少婦、妊婦を問はず、悉く服するがよし。馬齒莧を擣き絞つた汁三大合、雞子白二箇を取り、先づ溫めて熱くなつたとき莧汁を下して微溫にして頓に飲む。二回に過ぎずして癒

(三) 月家ハ月經ノ障礙ヨリ發スル諸病。

(四) 寸口ハ手首一寸ノ處ノ脈動部位。王叔和脈經ニ曰ク『從魚際至高骨卻行一寸其中名曰寸口』。

(五) 紮ハ經ヘ縛ルコト。

える。(崔元亮海上方)【陰腫痛極】馬齒莧を擣いて傅けるが良し。(永類鈐方)【中蠱で死せんとするもの】馬齒莧の擣汁一升を飮み、幷に傅ける。一日四五回。(壽域)【腹中の白蟲】馬齒莧を水煮し、一盌に鹽、醋を和して空腹に食ふ。少頃して白蟲が盡く出る。(孟詵食療)【緊脣、面皰】馬齒莧の煎湯で每日洗ふ。(聖惠方)【目中の息肉】淫膚、赤白膜には、馬齒莧一大握を洗淨し、芒硝末少量を和し、綿で裹んで上に載せ、頻りに易へる(龍木論)【風齒腫痛】馬齒莧一把を嚼み、その汁で漬ける。卽日に腫が消く。(本事方)【漏耳諸瘡】耳の內外の惡瘡、及び頭瘡、肥瘡、瘑瘡を治する黃馬散——黃檗半兩、乾馬齒莧一兩を末にして傅ける。(聖惠)【項上の癧瘡】外臺では、馬莧を陰乾して燒いて硏り、臘猪脂で和し、暖めた泔で洗ひ拭つてから傅ける。○簡便では、瘰癧のまだ破れぬを治するに、馬齒莧と靛花とを共に擣いて一日三回摻る。【腋下の胡臭】馬齒莧を杵いて蜜で和して團にし、紙で裹んで厚さ半寸に泥固して日光で乾し、燒いてから硏末し、少量づつを蜜を和して餠にし、先づ生布で揩つてから、藥を脇下に夾む。極めて痛むを久しく忍び、然る後に手巾で兩臂を勒する。一日一回用ゐ、瘥えるを度とする。(千金方)

【小兒の火丹】火のやうに熱し、臍を遶れば人を損するものだ。馬莧を擣いて塗る。(廣利方)【小兒の臍瘡】久しく瘥えぬには、馬齒菜を燒き研つて傅ける。(千金)【豌豆瘢瘡】馬齒草を燒き研つて傅ける。須臾にして根が藥を逐つて出る。出ぬときは更に傅ける。(肘後)【丁瘡腫毒】馬齒菜二分、石灰三分を末にし、雞子白で和して傅ける。【反花惡瘡】馬齒莧一斤を燒いて研り、猪脂で和して傅ける。【蛀脚臁瘡】乾馬齒莧を研末し、蜜で調へて傅ける。一夜にしてその蟲が自ら出て神效がある。(海上方)【足趾の甲疽】腫爛せるには、屋上の馬齒莧、(六)崑崙の青木香、印城の鹽等分を和勻して燒いて性を存し、光明硃砂少量を入れて傅ける(外臺祕要)【瘡の久しく瘥えぬもの】積年瘥えぬには、馬齒莧を擣き爛らして封ずる。汁を取つて煎稠して傅けるもよし。(千金)【馬に咬まれた瘡】心に入りたるには、馬齒莧を煮て食ふ。(聖惠)【射工溪毒】馬齒莧の擣汁一升を服し、滓を傅ける。一日四五回で良し。(崔元亮海上方)【毛蟲に螫されたとき】赤痛して止まぬには、馬齒莧を搗き熟して封ずるが妙である。(靈苑方)【蜂蠆に螫されたとき】方は上に同じ(張文仲方)【蜈蚣の咬傷】馬莧汁を塗る。(肘後)【小兒の白禿】馬齒莧を膏に煎じて塗る。或は灰に燒い

(六) 崑崙トハ馬來地方チイフ。

て猪脂で和して塗る。(聖惠方)【身體、面部の瘢痕】馬齒莧湯で一日二回洗ふ(聖惠方)【雜物の眯目】出ぬには、東墻上の馬齒莧を灰に燒いて研細し、少量を眥頭に點ければ出る。(聖惠方)

子　[主治]【目を明にする。仙經にこれを用ゐてある】(開寶)【天年を延べ、壽命を益す】(孟詵)【青盲、白瞖。邪氣を除き、大小腸を利し、寒熱を去る。一升を末に擣き、一匙づつを葱、豉を用ゐて粥に煮て食ふ。或は米糝、五味を著けて羹に作つて食ふ】(心鏡)

[附方]　新一。【日中の出淚】或は膿を出すには、馬齒莧子、人莧子各半兩を末にし、綿で裹んで銅器中で蒸熱し、大眥頭の膿水の出る處を熨す。五十回づつ熨するを標準とする。久しく試むれば自ら出なくなる(聖惠)

苦菜(本經上品)

和名　のげし
學名　Sonchus oleraceus, L.
科名　きく科(菊科)

[校正]　嘉祐の苦苣、苦蕒を併せ入る。

〔釋名〕 **荼** 音は塗(ト)である。(本經) **苦苣**(嘉祐) **苦蕒**(綱目) **游冬**(別錄) **褊苣**(日用) **老鸛菜**(救荒) **天香菜** 時珍曰く、苦、荼とは味に因つて名けたものだ。冬から春を經るものだから游冬といふ。許氏の說文には苣の字を藘と書いてある。吳地方では苦蕒と呼ぶが、その意味は詳でない。嘉祐本草には『嶺南、吳地方では苣を植ゑて食物に調理し、苦苣と名ける』といつてあるが、また苦苣、及び苦蕒の條を重複記載してある。本書では併記した。



〔苦蕒 —白苣も同じ—〕

〔集解〕 別錄に曰く、苦菜は益州の川谷、山陵、道旁に生ずる。冬を淩いで死れぬ。三月三日に採つて陰乾する。(一)

桐君藥錄に曰く、苦菜は三月に生え、扶疎たるもので、六月に花が葉から出る。莖は直く、花は黃である。八月に黑き實があり、實が落ちて根が復た生え、冬枯れ

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕のげし、けしあざみ、はるののげし Sonchus oleraceus, L. (S. ciliatus, Lam.) Lactuca amurensis,

Reg. (Compositae) あきののげし L. brevirostris, Champ. (L. squarrosa, Miq.) やくしさう L. denticulata, Maxim. たかさごさう L. versicolor, Sch. Bip. たかさごさう L. chinensis, Makino. やくしさう L. denticulata, Maxim. var. typica, Maxim. にがな L. dentata, Makino var. Thunbergii, Makino.

ぬ。

○恭曰く、爾雅には『荼は苦菜なり』とあり、易通卦驗玄圖には『苦菜は寒秋に生じ、冬を經、春を歷、夏を得て乃ち成る。一名游冬といふ。苦苣に似て細く、これを斷てば白汁がり、花は黃に、菊に似て、所在にある』とあつて、その說は桐君と略ぼ同じである。苦蘵も俗にまた苦菜と名けるがこの荼ではない。

○保昇曰く、春花さき、夏實る。秋に至つて復た花を生ずるが實らず、冬を經て凋まない。

○宗奭曰く、この物は、月令に『四月、小滿節後に苦菜秀づ』とあるそのものだ。四方いづれにもあつて、北方地方に在るものは冬になると凋み、南方に生ずるものは冬も夏も常に青い。葉は苦苣のやうで狹く、綠色がやや淡い。折れば白乳汁が出る。味は苦い。花は野菊に似て、春、夏、秋みな旋つて開く。

○時珍曰く、苦菜、卽ち苦蕒であつて、人家で栽培するものを苦苣と呼ぶが、實は一物だ。春初に苗が生え、赤莖、白莖の二種あつて、その莖は中が空で脆く、折れば白汁泔が出る。葉は花蘿蔔菜の葉に似て、色は綠に碧を帶び、上の葉が莖を抱い

(三) 木村(康)曰ク、「成分」乳液ヲ含ム。

てその稍葉は鸛の嘴に似てゐる。葉毎に叉が分れ、攢挺して葉を穿つたやうな狀態だ。開く黃花は綻びそめた野菊のやうで、一个の花に結ぶ子は一叢になり、茼蒿子、及び鸛風子のやうだ。花が開かなくなつてから子を取り收める。その子には表面に白い毛茸があり、その茸が風のまにまに飄揚して、落ちた處に生える。

士良曰く、蠶蛾が出た時に折り取つてはならぬ、蛾子をして青爛せしめるものだ。蠶を扱ふ婦人もこれを食ふことを忌む。さやうなわけで、野苦苣は五六回拗むと後に味が反つて甘滑になり、家苦蕒に勝るものだ。

「正誤」 弘景曰く、苦菜とは茗のことをいふのではないかと思ふ。茗、一名茶であつて、冬を凌いで凋まず、飲に作つたものは人をして眠らざらしめる。

恭曰く、詩に『誰か謂ふ荼苦しと』とあつて、苦菜の異名である。陶氏は荼を茗だと思つてゐるが、茗といふは木類である。按ずるに爾雅の釋草に『荼は苦菜なり——音は途(ト)——』とあり、釋木に『檟は苦茶なり——音は遲遐の切(チア)——』とある。二物は全然別物であつて、比例し得ないものである。陶氏の説は誤だ。

菜(三) 「氣味」 【苦し、寒にして毒なし】 張機曰く、野苣を蜜と共に食つては

ならぬ、人をして肉痔を作さしめるものだ。時珍曰く、脾、胃の虚寒の人は食つてはならぬ。

【主治】【五臓の邪氣、厭穀——厭は延叶の反（エフ）と發音する。伏の意味である——胃痺。久しく服すれば、心を安じ、氣を益し、聰察にし、臥すことを少くし、身を輕くし、老に耐へる】（本經）【腸澼、渇熱、中疾、悪瘡。久しく服すれば、饑寒に耐へ、氣を豪にし、老いず】（別録）【十二經脈、霍亂後の胃氣煩逆を調へ、久しく服すれば、力を强くし、冷ではあるが甚だ人を益する】（嘉祐）【擣汁を飲めば、面目、及び舌下黄を除く。その白汁を丁腫に塗れば根を拔く。癰上に滴せば立ろに潰れる】（藏器）【瘊子に點ければ自ら落ちる】（衍義）【蛇咬に傅ける】（大明）【目を明にし、諸痢に主效がある】（汪機）【血淋、痔瘻】（時珍）

【發明】宗奭曰く、苦苣は擣汁を丁瘡に傅けて甚だ效驗がある。青苗を陰乾して冬期の備とし、末にして水で調へて傅ける。

時珍曰く、按ずるに、洞天保生録に『夏三月には苦蕒を食ふが宜し。能く心を益し、血を利し、氣を通ずる』とあり、又、陸文量の菽園雜記に『凡そ痔を病むもの

は苦苣菜を用うるが宜し。或は生鮮のもの、或は乾いたものを熟爛するまで煮て、湯と共に器中に置き、一枚の板を横に載せてその上に坐し、先づ熏じて後に洗ひ、冷えれば止め、日に數回洗ふ。屢〻用ゐて有效であつた」とある。

附方 新六。【血淋、尿血】苦蕒菜一把を酒、水各半で煎じて服す。(資生經)【血脈不調】苦蕒菜を晒乾して末にし、二錢づつを溫酒で服す。(衞生易簡方)【喉痺腫痛】野苦蕒の擣汁半盞、燈心を湯に浸して捻り取つた汁半盞を和勻して服す。(普濟方)【對口惡瘡】野苦蕒の擂汁一鍾に薑汁一匙を入れ、酒を和して服し、渣を傅ける。一二回で癒える。(唐瑤經驗方)【沙虱の毒に中つたとき】沙虱は、水中に在つて人が澡浴するとき身體に著き、皮裏に鑽入するもので、當初には皮の表面に正赤色の小豆、黍、粟ほどに現はれ、摩すると刺すやうに痛み、三日經つと寒熱し、發瘡し、毒がもし骨に入れば人を殺すものだ、嶺南にこの物が多い。中ると直ちに茅葉で刮り去り、苦菜汁を塗るが佳し。(肘後方)【壺蜂の叮螫】苦蕒汁を塗るが良し。(摘玄方)

根 **主治** 【赤、白痢、及び骨蒸。いづれも煮て服す】(蘇頌)【血淋を治し、小便を利す】(時珍)

花子［氣味］『甘し、平にして毒なし』［主治］『中熱を去り、心神を安ずる』（宗奭）『黃疸疾には、花と子と共に研細して二錢を水で煎じ、一日二回服するが良し』（汪穎）

白苣（宋嘉祐）

和名　しろぢさ
學名　Lactuca sativa, L. var.
科名　きく科（菊科）

［釋名］**石苣**（綱目）　**生菜**　時珍曰く、白苣、苦苣、萵苣は俱に煮烹しては食へず、いづれも生で挼んで汁を去り、鹽、酢を拌ぜて食ふべきもので、通じて生菜といへるが、白苣がやや美味だ。故にこの物だけが專ら稱されるのである。王氏の農書にはこれを石苣といひ、陸機の詩疏には『靑州ではこれを芭といふ、生でも食へ、また蒸茹にしてもよし』とある。

(一)［集解］藏器曰く、白苣は萵苣に似て葉に白毛がある。

時珍曰く、處處にある。萵苣に似て葉の色が白く、折れば白汁がある。正、二月に種を下し、四月に苦蕒のやうな黃花を開き、結子もやはり同じである。八月、十

(一)木村(康)曰ク、〔原植物〕かきぢさ、ちしや、ちさ、ちしやな Lactuca Scariola, L. var. sa-

tiva, Bisch. (L. sativa, L.) (Compositae) きくぢしや Chicholium Endivia, L.

月に再種し得るものだ。故に諺に『生菜、園を離れず』といふ。按ずるに合璧事類に『苣に数種あつて、色白きをば白苣といひ、色紫なるをば紫苣といひ、味苦きをば苦苣といふ』とある。

菜 氣味 【苦し、寒にして毒なし】 炳曰く、平なり。冷氣を患ふ人がこれを食へば腹冷するが、やはり人を苦しめ損するほどには至らない。産後には食つてはならぬ。人をして中を寒し、小腸を痛ましめるものだ。思邈曰く、酪と共に食つてはならぬ、蟲䘌を生ずる。

主治 【筋骨を補し、五臟を利し、胸膈の擁氣を開き、經脈を通じ、脾氣を止め、人をして齒白く、聰明にして睡を少からしめる。煮て食ふがよし】(孟詵) 【熱毒、酒毒を解し、消渇を止め、大、小腸を利す】(寗原)

附方 舊一。 【魚臍瘡】その頭が白くして、腫に似て忍び難く痛むには、先づ頭、及び四畔を針で刺破り、白苣汁を孔中に滴すが良し。(外臺祕要)

萵苣（食療）

和名　ちさ
學名　Lactuca sativa, L.
科名　きく科（菊科）

釋名　**萵菜**　**千金菜**　時珍曰く、按ずるに、彭乘の墨客揮犀に『萵菜は(一)萵國から渡來したものだからかく名けたのだ』とある。

(二)**集解**　藏器曰く、萵苣に白きものと紫のものとあつて、紫のものは燒煉の藥に用ゐる。



〔萵　苣〕

時珍曰く、萵苣は、正、二月に種を下し、肥に最も宜く、葉は白苣に似て尖り、色はやや青く、折れば白汁があつて手に粘る。四月に薹が抽き出て高さ三四尺になる。それを皮を剝いて生で食ふと胡瓜のやうな味だ。糟漬にして食ふも良し。江東地

(一) 萵國、未詳。
(二) 木村（康）曰ク、〔原植物〕かきぢさ、ちしや、ちさ、ちしやな Lactuca Scariola, L. var. sativa Bisch. (L. sativa, L.) (Compositae)

方では鹽で晒し、壓實して置いて贈答品に供し、それを萵筍（くわしゆん）と呼んでゐる。花、子いづれも白苣と同じ。

萊　【氣味】【苦し、冷にして微毒あり】李廷飛曰く、久しく食へば人の目を昏（くら）くする。冷を患ふ人は食ふべきものでない。

時珍曰く、按ずるに、彭乘は『萵苣は有毒で、あらゆる蟲が敢て近かぬ。蛇虺（じやき）がこれに觸れると目が瞑して物が見えなくなる。人がその毒に中（あた）つたときは薑汁を以て解す』とある。

藏器曰く、紫萵苣は有毒だ。燒煉の材料として用ゐる。

丹房鑑源に曰く、苣萵は硫黃種を用ゐて砂子を結し、硃砂を制す。又曰く、紫色の萵苣と土を和し、器に作つて火で煆（や）けば銅のやうになる。

【主治】【五臟を利し、經脈を通じ、胸膈を開くの功が白苣と同じ】（藏器）【氣を利し、筋骨を堅くし、口氣を去り、齒牙を白くし、眼目を明にする】（寧原）【乳汁を通じ、小便を利し、蟲、蛇の毒を殺す】（時珍）

【附方】舊一、新五。【乳汁不通】萵苣菜（くわきよさい）を酒で煎じて服す。（海上方）【小便不通】

萵苣菜を擣いて臍上に傅ければ通ずる。(衞生易簡方)【小便尿血】前記の方に同じ　甚だ效がある。(楊氏方)【沙蝨水毒】萵苣菜の擣汁を塗るが良し。(肘後方)【蚰蜒の耳に入りたるとき】萵苣葉の乾いたもの一分、雄黃一分を末にし、糊で棗核大の丸にして生油を蘸け、耳中を塞いで引出す。(聖惠方)【あらゆる蟲が耳中に入りたるとき】萵苣の擣汁を滴入すれば自ら出る。(聖濟總錄)

子　藥に入れるには炒つて用ゐる。　[主治]【乳汁を下し、小便を通じ、陰腫、痔漏、下血、傷損で痛むを治す】(時珍)

[附方]　舊一、新五。【乳汁の行らぬもの】萵苣子三十箇を研細して酒で服す。○又ある方では、萵苣子一合、生甘草三錢、糯米、粳米各半合で粥を煮て頻りに食ふ。【小便不通】萵苣子を擣き、餅にして臍中に貼れば通ずる。(海上仙方)【腎黃で金のやうになりたるもの】萵苣子一合を細研し、水一盞で五分に煎じて服す。(外臺祕要)【陰囊㿗腫】萵苣子一合を擣いて末にし、水一盞で煎じて五沸して溫服する。【閃損腰痛】趁痛丸――白萵苣子を炒つて三兩、白粟米を炒つて一撮、乳香、沒藥、烏梅肉各半兩を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを嚼んで熱酒で服す(玉

檢微義）【髭髪の生ぜぬもの】癤瘡疱上の髭髪を生ぜぬには、先づ竹刀で刮損してから、萵苣子で猢猻薑末を拗して頻りに擦る（摘玄方）

水苦蕒（宋圖經）

和名 かはぢさ
學名 Veronica Anagallis, L.
科名 ごまのはぐさ科（玄參科）

校正 外類より此に移し入る。

釋名 謝婆菜（圖經） 半邊山



〔水苦蕒〕

（一）**集解** 頌曰く、水苦蕒は宜州の溪澗の側に生ずる。葉は苦蕒に似て厚くして光澤があり、根は白朮に似て軟い。二八九月にその根を採つて食ふ。

根

氣味【微し苦く辛し、寒にして毒なし】

主治【風熱上壅の咽喉腫痛、及び項上の風癧には、酒で磨つて服す】（蘇頌）

（一）木村(康)曰ク、〔原植物〕きつれあざみ Saussurea affinis. Spr. (Hemistepta lyrata, Bge.) (Compositae) かはぢさ Veronica Anagallis, L. (Scrophulariaceae)

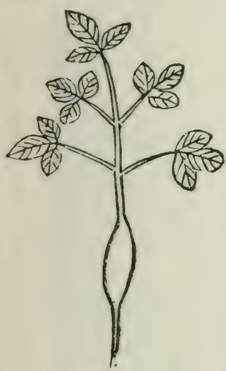
翻白草（救荒）

和名　つちぐり
學名　Potentilla discolor, Bunge.
科名　いばら科（薔薇科）

【釋名】**雞腿根**（救荒）　**天藕**（野菜譜）　時珍曰く、翻白とは葉の形を以て名けたもの、雞腿、天藕は根の味を以て名けたものだ。楚地方ではこれを湖雞腿といひ、淮地方では、これを天藕といふ。

【集解】（一）周憲王曰く、翻白草は高さ七八寸、葉は硬くして厚く、鋸歯があり、背白く、地楡に似て細長く、黄花を開く。根は指の太さほど、長さ三寸ばかり、皮は赤く肉は白く、兩頭が峭く尖つてゐる。生で食ひ、煮熟して食ひ、いづれもよし。

時珍曰く、雞腿兒は澤に近き田地に生じ、高さ一尺に盈たず、春生えて莖弱く、一莖に一葉あり、葉は尖長で厚


〔翻白草〕——雞腿——

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕かはらさいこ Potentilla chinensis, Ser. (Rosaceae) つちぐり、つちな、ぶくりやうさう P. discolor, Bge. P. multifida, L.

く、皺紋、鋸齒があり、表面は青く、裏面は白く、四月に小さい黄花を開き、結子は胡荽子のやうで中に細子がある。その根の形狀は小さい白朮の頭のやうだ。赤皮を剝ぎ去ると、その肉は白色で雞肉のやうだ。これを食つて見ると粉がある。小兒が生で食ふ。凶作の年には一般にこれを掘つて飯に和して食ふ。

根 氣味【甘く微し苦し、平にして毒なし】主治【吐血、下血、崩中、瘧疾、癰瘡】（時珍）

附方 新七。

一【崩中下血】湖雞腿根一兩を擣き碎き、酒二盞で一盞に煎じて服す。（瀕湖集簡方）【吐血の止まぬもの】翻白草を五六科づつ㕮咀し、水二鍾で一鍾に煎じて空心に服す。【瘧疾寒熱】翻白草根五七個を酒で煎じて服す。【無名腫毒】方は上に同じ。【疔毒の初期】已に成つたものとまだ成らぬものとに拘らず、翻白草十科を酒で煎じて服す。汗を出して癒える。【全身の疥癩】端午の日の午の刻に翻白草を採り、一握づつを水で煎じて洗ふ。【臁瘡の潰爛】端午の日の午の刻に翻白草を採り、洗つて貯藏し、一握づつを湯に煎じて盆に盛り、周圍を圍んだ中に居て熏じ洗ふが有效だ。（劉松石保壽堂方）

仙人杖草（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【校正】草部より此に移し入る。

(一)【集解】○藏器曰く、仙人杖は劍南の平澤に生じ、葉は苦苣に似て叢生する。陳子昂の觀玉篇の序に「予が補闕喬公に從つて北征したとき、夏四月中、(二)張掖に暫時滯在した。そこの河洲の草木には他に異つたものとてはなかつたが、ただ仙人杖が往往にして叢生してゐた。この草は予の家代代服食したものだから、從前から服餌してゐたので、喬公にその功能を話すと、公も納得されてそれを食はれた。ところがある人が喬公に「これは白棘だ」といつたので、公が予にまたそれに就いて訊ねられた。そこで觀玉篇を作る」とある。

○頌曰く、仙人杖といふ同名のものに三種あつて、一種は菜類、一種は枯死した竹筍の色の黑いものをいひ、一種は枸杞の一名仙人杖がそれである。此にいふ仙人杖は菜茹に作るものだ。白棘は木類だからこれと紛ふべきわけはない。或は『喬公の

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕はそばおきののげし Lactuca laciniata, Mak. forma indivisa, Mak.

(二) 張掖ハ漢ノ郡名、今ノ甘粛省甘涼道ノ地ナリ。

所謂白棘は枸棘のことだ』といふが、それは枸杞にして針のあるものだ。本經には枸棘に白棘なる名がない。又、その味が苦いものだが、この菜は味が甘い。かうして見ると如何にも草木には類が多いから辨別が困難で、人をして疑似の言に惑はしめ、眞物を僞物と思はせるやうなことも無理もないことである。これは子昂の論に詳細に述べられてある。

時珍曰く、別に仙人草といふがあり、小庭や階段などの間に生えて、高さ二三寸のものがある。又、仙人掌草といふ石壁の上に生えるものがあるが、いづれもこの草とは同名の異物だから判別を正確にせねばならぬ。いづれも石草類に記載してある。

氣味　【甘し、小溫にして毒なし】　主治　【茹に作つて食へば痰癖を去り、風冷を除く】(大明)【久しく服すれば長生し、筋骨を堅くし、人をして老いざらしめる】(藏器)

蒲公英（唐本草）

和名　たんぽぽ數種
學名　Taraxacum spp.
科名　きく科(菊科)

〔校正〕草部より此に移し入る。

〔釋名〕**耩耨草** 音は搆糯(コツジユ)である。**金簪草**(綱目) **黄花地丁** 時珍曰く、名稱の意味は判然せぬ。孫思邈の千金方には鳧公英と書き、蘇頌の圖經には僕公罌と書き、庚辛玉冊には鵓鴣英と書いてある。俗には蒲公丁と呼び、また黄花地下と呼ぶ。淮地方ではこれを白鼓釘といひ、蜀地方ではこれを耳瘢草といひ、關中ではこれを狗乳草といふ。按ずるに、土宿本草には『金簪草、一名地丁』とある。花は金簪頭のやうであり、獨脚で丁のやうだからかく名けたのだ。

(二)〔集解〕保昇曰く、蒲公英草は平澤、田園中に生じ、莖、葉は苦苣に似て、斷てば白汁があり、生で噉へる。花は單菊のやうで大きい。四月、五月に採る。

頌曰く、處處にある。春初に苗が生え、葉は苦苣のやうで細刺があり、中心に一莖が抽き出で、莖の端に一花を出す。花は黄色で金錢のやうだ。俗に訛つて僕公罌といふがこれである。

宗奭曰く、卽ち今の地丁である。四時常に花があつて、花が罷むと絮が飛び、絮の中に子があつて落ちた處へ生える。それで庭院の間にいづれもあるなので、風に

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Taraxacum officinale, Web. (T. Dens-leonis, Desf.) (Compositae) せいやうたんぽぽ Taraxacum officinale, Web. var. genuinum, Koch. たんぽぽ Taraxacum platycarpum, Dahlst しろばなたんぽぽ T. a-

吹かれて來るのだ。

時珍曰く、地丁は江の南北に頗る多く、他處にもあるが、嶺南には絶えて無い。科が小さく、地に布き四散して生える。莖、葉、花、絮いづれも苦苣に似てゐるが、ただ小さいだけである。嫩苗は食へる。庚辛玉冊には『地丁は、葉は小萵苣に、花



〔蒲公英〕
——地丁——

は大旋蕾に似て、一莖が上に三四寸聳え、斷てば白汁がある。二月に花を採り、三月に根を採る。汞を制し、三黃を伏し得るものだ。紫花のものがあつて、大丁草と名ける。これは太行、王屋の諸山に出る。陳州にはまた燒金草と名くるがあつて、能く硃砂を煆く。一種の相類して花なきものを地膽草と名け、やはり三黃、砒霜を伏し得る』とある。

苗〔二〕

氣味【甘し、平にして毒なし】

主治【婦人の乳癰、水腫には煮

Ibidum, Dahlsted. t.

〔備考〕せいやうたんぽぽハ春季ソノ開花時ニ先ダチ花本ノ萌芽ヲ具ソル全草ヲ根ト共ニ採集シ乾燥セルモノヲ生藥トシテ歐洲各國ノ藥局方ニ採用セラル。

〔二〕木村(康)曰ク、〔成分〕Taraxacu-

m officinale ノ根中ニハ、パラヒドロオキシフエニル醋酸、三・四、ヂヒドロオキシ桂皮酸、パルミチン酸、セロチン酸、油酸、リノール酸、タラクサステロール、ホモタラクサステロール、クルイチアノール及ピコリン等ナリ。本邦產ノモノハ未ダ化學上ノ檢查ヲ經ザレドモ恐ラクハ歐洲產ト異ナルコトナカルベシ。F. B. Power & H. Browning: J. Chem. Soc. 1912 (100) 2411.

〔應用〕從前ハ頗ル有效ナル解凝藥、淨血藥、發汗藥及ビ強壯藥ト認メラレ、下腹部ノ分泌ヲ促シソノ閉塞ヲ緩メ殊ニ膽汁ノ分泌ヲ旺盛ナラシ

汁を飲む。またこれで封ずれば立ろに消する】(恭)【食毒を解し、滯氣を散じ、熱毒を化し、惡腫、結核、丁腫を消す】(震亨)【牙に擦れば鬚髮を烏くし、筋骨を壯にする】(時珍)【白汁を惡刺、狐尿刺瘡に塗れば癒える】(頌)

【發明】杲曰く、蒲公英は苦寒である。足の少陰、腎の經の君藥であつて、その經に屬するものには必ず用ゐる。

震亨曰く、この草は土に屬し、黃花を開き、味は甘く、食毒を解し、滯氣を散じ、よく陽明、太陰の經に入り、熱毒を化し、腫核を消するに奇功がある。忍冬藤と共に湯に煎じ、少量の酒を入れて佐として服すれば乳癰を治す。服し罷んでから睡けを催すがその功の現れだ。睡が覺めて微し汗すれば病が平安を得る。

頌曰く、惡刺を治する方が孫思邈の千金方に記載してあつて、その序に「予(思邈)は貞觀五年七月十五日の夜、左手の中指の背を庭木に觸れたが、曉頃には甚しく痛んで忍び難く、十日經つ間に痛は日に深く、瘡は日に高く大きくなり、色が熟した小豆の色のやうになつた。嘗て先賢の論にこの方のあることを聞いてゐたので、そこでそれを用ゐて治療すると手を下すに隨つて癒え、痛も除き、瘡も瘥え、十日

ムルノ效アリトシテ用ヒラレタレドモ現今ハ其ノ用途大ニ縮少セリ。生藥（局方Radix Taraxaci cum Herba）ハ專ラ蒲公英越幾斯（局方）ヲ製シ解熱、淨血、發汗、健胃、强壯劑トス。民間ニ於乳不足ニ葉ヲ浸シモノニシテ食シ、乳腫ニ全草ヲツキタヾラカシテ貼クレバヨシトイフ。根葉共ニ食用トナスベク又獨逸等ニテハ根ヲ刻ミ焦ガシテ珈琲代用品トナストイフ。（日本藥局法註解、生藥學、邦產藥用植物、食用植物誌參照）

ならずして故のやうに平復した』とある。楊炎の南行方にもその效が記載されてあつた。

○時珍曰く、薩謙齋の瑞竹堂方に、牙に擦つて鬚髮を烏くする還少丹といふがあつて、この草の功を熱心に說いてゐる。蓋しその能く腎に通ずる點を取つたものだ。故に東垣李氏はこの草を少陰の本經に必用の藥だといつたのだが、しかし本草の著者達はこの意味を知らなかつた。

〔附　名〕新五。【還少丹】昔、越王が嘗て異人に遇つてこの方を得、極めて能く齒牙を固くし、筋骨を壯にし、腎水を生じた。凡そ年まだ八十に及ばぬものがこれを服すれば、鬚髮が黑く返り、齒の落ちたものが更生する。年少にしてこれを服すれば、老年に至つても衰へぬ。この方に遇ふことを得るものは仙道に宿緣のあるものだ。これは珍重すべきものだから輕輕しく泄してはならぬ。蒲公英一斤を用ゐる。一名構耨草、又、蒲公罌と名け、平澤中に生じ、三四月に甚だあり、秋後にも花を開くことがある。根を連ね葉を帶びて一斤を取つて洗淨し、天日に當らぬやうにして晾乾して斗子に入れ、解鹽一兩、香附子五錢の二味を細末にして蒲公草內に

入れて一夜淹け、分けて二十團にし、皮紙で三四層に裹んで札定し、六一泥、卽ち蚯蚓糞で法の如くに固濟し、竈中に入れて焙乾してから、武火で煆いて全部紅くなるを程度として冷して取出し、泥を去つて末にし、朝夕牙に擦つて漱ぐ。吐いても嚥んでもそれは自由である。久しきに亙れば效がある。（瑞竹堂方）【乳癰紅腫】蒲公英一兩、忍冬藤二兩を擣き爛らし、水二鍾で一鍾に煎じて食前に服す。睡が覺めれば痛が去る。（積德堂方）【疳瘡、疔毒】蒲公英を擣き爛らして覆ふ。卽ち黃花地丁である。別に更に擣汁を酒に和して煎じて服し、汗を取る。（唐氏方）【多年の惡瘡】蒲公英を擣き爛らして貼る。（救急方）【蛇螫腫痛】方は上に同じ。

黃瓜菜（食物）

和名　にがな
學名　Lactuca dentata, Thunb.
科名　きく科（菊科）

〔釋名〕**黃花菜**　時珍曰く、その花が黃、その氣が瓜のやうだからかく名けたものだ。

〔集解〕(一)　頴曰く、黃瓜菜は田澤に野生し、形は油菜に似て、ただ味が少し苦

(一) 木村（康）曰ク、「原植物」にがな L.

actuca Thunbergiana, Maxim. こおにたびらこ Lampsana apogonoides, Maxim. おにたびらこ Crepis japonica, Bth. (Compositae)

（一）木村（康）曰ク、

〔原植物〕たびらこ、

い。取つて羹、茹にすれば甚だ香美だ

　時珍曰く、この菜は二月に苗が生え、田野にいづこにもある。科は小さくして薺のやう、三四月に黄花を開く。花と莖、葉とはいづれも地丁と同じだが、やや小さいだけで、一科に數花を開き、細子を結び、地丁のやうに花が絮にならない。野人はこれを茹ひ、また採つて鵞の雛を飼ふ。



〔黄瓜菜〕

【氣味】【甘く微し苦し、微寒にして毒なし】

【主治】【結氣を通じ、腸、胃を利す】（汪頴）

生瓜菜（宋圖經）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

（二）【釋解】頌曰く、生瓜菜は資州の平田、陰畦の間に生ずる、春苗が生え、長

かはらけな Trigonotis peduncularis. Benth. (Braginaceae)

さ三四寸、叢をなして生え、葉は青くして圓く、白莧菜(はくけんさい)に似てゐる。夏紫白色の花を開き、細かな實を結び、その色は黑く　味に生瓜の氣があるからかく名けたものだ。

【氣味】【甘し、微寒にして毒なし】



〔生瓜菜〕
——資州——

【主治】【走注して頭面、四肢を攻むるもの、及び陽毒傷寒で壯熱し頭痛し、心神煩躁(はんさう)するものに胸膈を利す。擣汁を飲む。又、生で擣いて腫に貼る】(蘇頌)

落葵（別錄下品）

和名　つるむらさき
學名　Basella rubra, L.
科名　つるむらさき科(落葵科)

【釋名】　蔠葵（爾雅）　藤葵（食鑑）　藤菜（綱目）　天葵（別錄）　繁露（同）　御菜（俗）　燕脂菜　○志曰く、落葵(らくき)、一名藤葵。俗に胡燕脂(こえんじ)と呼ぶ。

時珍曰く、落葵は葉が冷滑で葵のやうだから葵なる名稱を呼ばれたのだ。釋家では御菜と呼ぶ。また藤兒菜ともいふ。爾雅には『蔠葵は繁露なり』とあり、一名承露といふ。その葉が最も能く露を承け、その子が垂垂たるもので、露を綴つたやうでもあるところから露なる名稱が生じたのであつて、蔠、落の二字は相似てゐるから、落の字は蔠の字の訛かとも思はれる。按ずるに、考工記に『大圭は終葵首なり』とあり、註に『齊人は椎を謂つて蔠葵といふ。圭首六寸を椎となす』とある。これで見ると、この菜もやはりその葉が椎頭に似てゐるから名けたものかも知れぬ。



〔落葵―藤菜〕

〔一〕【集解】弘景曰く、落葵はまた承露と名ける。人家で多く種ゑる。葉はただ飪、鮓となるだけで、食つては冷滑だ。その子は紫色で、婦人がそれを粉に漬け、それを顏に傅けて化粧品とするが、藥に入れることは稀だ

（一）木村（康）曰ク。〔原植物〕つるむらさき Basella rubra, L. (Basellaceae)

保昇曰く、蔓生で、葉は圓く厚くして杏葉のやう、子は五味子に似て、生では青く熟すれば黒い。所在にある。

時珍曰く、落葵は三月に種ゑ、嫩苗は食へる。五月に蔓が延び、その葉は杏葉に似て肥えて厚く、軟滑だ。蔬にしても肉を和してもいづれもよし。八九月に細かな紫花を纍纍と開き、結實は大いさ五味子ほどで、熟すれば紫黒色になる。揉んで汁を取ると燕脂のやうに紅く、婦人はそれで顔の化粧をし、唇に點け、また布などの物を染めて、胡燕脂といひ、また染絳子といふ。但し久しく經てば變色し易いものだ。

葉　氣味　【酸し、寒滑にして毒なし】時珍曰く、甘く微し酸し、冷滑である。脾冷の人は食つてはならぬ。弘景曰く、曾て狗に齧まれたことのある者がこれを食へば終身瘥えぬ。

主治　【中を滑し、熱を散ず】（別錄）【面脂に作り得る】（蘇頌）詵曰く、子を取り、蒸して日中に暴乾し、皮を挼み去つて仁を取り、細研して白蜜を和し、それを額に塗れば立ろに鮮かにして華かな化粧になる。

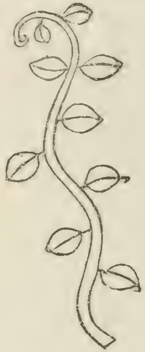
(一) 木村(康)曰ク、(原植物)どくだみ、じふやく Houttuynia cordata, Th. (Sanruraceae)

蕺 音は蕺(シフ)である。(別錄下品)

和名　どくだみ
學名　Houttuynia cordata, Thunb.
科名　はんげしやう科(三白草科)

【釋名】 **菹菜**(恭) **魚鯹草** 時珍曰く、蕺の字を段公路の北戸錄には蕊——音は戢(シフ)——と書いてある。秦地方ではこれを菹子(そし)といふ。菹と蕺とは發音が相近い。その葉には鯹氣(せいき)があるところから俗に魚鯹草と呼ぶ。

【集解】(一) 恭曰く、蕺菜は濕地、山谷の陰處に生じ、また能く蔓生する。葉は蕎麥(けうばく)に似て肥え、莖は紫赤色だ 山南、江左地方では好んで生にして食ふ。關中ではこれを菹菜といふ。



〔蕺菜——魚腥草——〕

保昇曰く、莖、葉いづれも紫赤で、英(はな)に臭氣がある。

時珍曰く、按ずるに、趙叔文の醫方に「魚鯹草、即ち紫蕺(ししふ)は、葉は荇(かう)に似て、その狀態は三角で一邊は紅く一邊は青い。

猪の飼糧になる。又、五藏、卽ち五毒草といふがあつて、花、葉は似てゐるが、ただ根が狗脊に似たものだ。草部に記載してある。

葉(三)　[氣味]【辛し、微溫にして小毒あり】別錄に曰く、多く食へば人をして氣喘せしめる。弘景曰く、俗の語り傳へに、蕺を食へば人の脚が利かなくなるといふが、恐らく氣閉するに由るからであらう。現に小兒がこれを食ふと脚痛を覺えるものだ。詵曰く、小兒がこれを食へば三歲にして行步し得ぬ。久しく食へば虛弱を發し、陽氣を損じ、精髓を消す。思邈曰く、もと脚氣のある人がこれを食へば一生癒えない。

[主治]【蠼螋尿瘡】(別錄)【淡竹筒內で煨熟し、擣いて惡瘡、白禿に傅ける】(大明)【熱毒癰腫、瘡痔脫肛を散じ、痁疾を斷ち、硇毒を解す】(時珍)

[附方]　舊一、新六。【背瘡熱腫】蕺菜の擣汁を塗り、孔を留めて熱氣を洩し、冷えれば易へる。(經驗方)【痔瘡腫痛】魚腥草一握の煎湯で熏じ洗ひ、その上で痔を草で揜へれば癒える。ある方では、洗つて後に枯礬に片腦少量を入れて傅ける。(救急方)【疔瘡で痛むもの】魚腥草を擣き爛らして傅ける。一二時の間は痛むが、草を

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕全草中〇・〇〇四九%ノ精油ヲ含有ス。此精油ハ本植物特有ノ臭氣ヲ含有セズ。其ノ主成分ハ「メチルノルマルノニルケトン」、「ミルツエン及ビ少量ノ「カプリン酸等ナリ。篠崎英之助—工化大正一〇(二四)五五七。村上信三—(藥學會總會)日本藥報大正一五(九)二四。

〔藥用〕民間ニテどくだみハ化膿、腫物、創傷等ニ效アリトシ廣ク用ヒラル。生葉ヲ揉ミテ貼布シ又ハ煎汁ニテ洗滌ス。淋疾又ハ尿道炎ニ單味

ニ又ハ種種他藥ト配合シ煎服ス（邦產藥用植物）。又地方ニヨリ葉或ハ根ヲ食用トス。

取り去つてはならぬ。痛んで後一二日で癒える。徽人の所傳の方である。（陸氏積德堂方）【小兒の脫肛】魚鯹草を泥のやうに擂り、先づ朴消水で肛を洗つてから、芭蕉の葉にその藥を塗つて置いてそれに坐れば自ら入る。（永類方）【蟲牙の痛み】魚鯹草、花椒、菜子油等分を擣き勻ぜ、泥少量を入れて和して豆大の小丸に作り、牙の左右に隨つて耳中を塞ぎ、兩耳を交る交る換へる。一時に雙方を塞いではならね。耳氣を閉づる恐がある。一晝夜間塞いで取つて看て、細蟲がついて出て來るときは奏效したものである。（簡便方）【瘧疾の斷截】紫蕺一握を擣き爛らし、絹に包んで全身を摩擦する。睡つて汗が出て癒える。發作せんとする前一時に試みる。（救急易方）【惡蛇蟲傷】魚鯹草、皺面草、槐樹葉、草決明を一處に杵き爛らして傅ける。甚だ效がある。（同上）

蕨（拾遺）

和名　わらび
學名　Pteridium aquaticum, Kuhn.
科名　うらぼし科（石韋科）

【釋名】 虌　時珍曰く、爾雅に『蕨は虌なり。菜の名なり』とあり、陸佃の埤雅には『蕨は初生には葉なく、狀雀足の拳の如く、また人の足の蹶の如し、故にこ

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕わらび Pteridium aquilinum, Kuhn. (Pteris aquilina, L.) (P. esculenta, Forst.) (Filices) たいわんぜんまい Osmunda regalis, L. (Filices)

れを蕨といふ』とある　周秦では蕨といひ、齊魯では鼈といふ。初生にはまた鼈の脚にも似てゐるからである。その苗を蕨萁といふ。

〔集　解〕(一) 藏器曰く、蕨は山間に生ずる。根は紫草のやうだ。一般に採つて茹として食ふ

時珍曰く、蕨は處處の山中にある。二三月芽を生じ、小兒の拳のやうな狀態に拳曲し、長ずれば展開して鳳尾のやうになり、高さ三四尺になる。その莖を嫩い時に採取し、灰湯で煮て涎滑を去つて晒乾し、蔬に作ると味が甘滑だ。また醋でも食へる。その根は色が紫で皮の內部に白粉がある。擣き爛らし再三洗澄して粉を取り、粔籹にして皮を盪し、線にして食ふと、色が淡紫で甚だ滑美だ。野人は凶作の年に掘り取つて治造するが、それは製法が粗末で饑饉を凌ぐだけだから味は佳くないわけだ。詩に『彼の



〔蕨〕

〔二〕木村(康)曰ク、〔成分〕旱蕨ノ組成ハ水分九一・一八%、粗蛋白質二・八三%、粗脂肪〇・一三%、粗纖維三・二七、可溶無窒素物一・四一%、灰分一・二八%。(食用植物誌)
「應用」秋ヨリ冬ニカケテ根莖ヲ掘リトリテ水飛シ澱粉ヲ製ス蕨粉是ナリ。早蕨ハ食用トナリ、又之ヲ調ヘ熱湯ヲトホシ日乾

南山に陟つて言にその蕨を采る』とあり、陸機は『これはその物を祭に供するので采つたのだ』といつてある。さうすれば蕨を用ゐるといふことはただ凶作の年の糧にするだけでもなかつたのだ。紫萁といふ蕨に似た一種は、花があつて味が苦い。これは迷蕨といふもので、初生にはやはり食へる。爾雅にはこれを月爾といひ、三蒼にはこれを紫蕨といひ、郭璞は『花繁、月爾』紫蕨は拳曲して繁盛するものだから月爾なる名があるのだ』といつた。

萁及び根 〔二〕「氣味」【甘し、寒、滑にして毒なし】詵曰く、久しく食へば人をして目暗、鼻塞、髮落せしめる。又、冷氣の人が食へば多く腹脹する。小兒が食へば脚弱になつて歩行不能になる。思邈曰く、久しく食へば瘕となる

「主治」【暴熱を去り、水道を利し、人をして睡らしめる】(藏器)【五臟不足の氣を補し、經絡、筋骨の間の毒氣を壅す】(孟詵)【根の燒灰を油で調へて蛇、蠨の傷に傅ける】(時珍) 蠨は音蕭(セウ)蟲の名である。

「發明」藏器曰く、多食すれば陽氣を消する。故に人をして睡らしめ、人の脚を弱からしめるのだ。四皓は芝を食つて壽く、夷、齊は蕨を食つて夭したといふ

シテ保存用ノ乾蕨ヲ製ス。

からもとより良物ではない。干寶の捜神記に『郄鑒が丹徒に鎮したとき、二月出獵した　その時ある軍卒が蕨を一枝折つて食つた。すると心中淡淡たるを覺え、疾となり、後に一小蛇を吐いた。その小蛇を屋前に懸けて置くと、乾くに隨つて蕨になつた。そこでこの物は生で食つてはならぬものだといふことを悟つた』とある。

時珍曰く、蕨が人體に益なきわけは、その性が冷にして滑なるがためで、能く水道を利し、陽氣を洩し、降にして升ならず、人の眞元を耗する。四皓が芝を采つて心逸し、夷、齊が蕨を采つて心憂ひたといひ、壽し夭するといふも蕨には何の與るところあらう。陳藏器氏の話も迂闊なことではあるまいか。然も饑ゑて死に瀕した者が蕨に賴つて活力を續け天年を延長するとすれば、また濟生の功があるではないか。

【附　方】　新一。　【腸風熱毒】蕨菜花を焙じて末にし、二錢づつを米飲で服す。

（聖惠）

水　蕨（綱　目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕みづわらび みづにんじん Ceratopteris thalictroides; Brongn.
〔應用〕みづわらびノ嫩苗ハ食用トナル。

(一)〔集解〕 時珍曰く、水蕨は蕨に似て水中に生ずる。呂氏春秋に『菜の美なるものに雲夢の葟あり』とあるはこの菜のことだ。葟の字の音は豈(ガイ)である。

〔氣味〕 【甘く苦し、寒にして毒なし】

〔主治〕 【腹中の痞積には煮て食ふ。一二日で悪物を下す。雜食を忌む。一个月餘にして佳し】(時珍) 衞生方。

薇（拾遺）

和名　ぜんまい
學名　Osmunda biformis, Makino.
科名　ぜんまい科(薇科)

〔校正〕 草部より此に移し入る。

〔釋名〕 **垂水**(爾雅) **野豌豆**(綱目) **大巣菜** 時珍曰く、按ずるに、許愼の說文に『薇は藿に似たり。乃ち菜の微なるものなり』とある。王安石の字說には『微賤のものの食ふものだ。それでこれを薇といふ。故に詩に采薇といふ言葉で戍役を賦んである』とある。孫炎の爾雅の註には『薇草は水旁の面に生じ、枝、葉が水に垂れる。故に垂水と名ける』とある。巣菜に就いては翹搖の條下に記載する。

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Vicia gigantea, Bge. (Leguminosae)すずめのゑんどう V. hirsuta, Koch. (Ervum hirsutum, L.)ぜんまい Osmunda regalis, L. var. Japonica, Milde.

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕食用植物誌(五一九)ニヨレバ干ぜんまいノ組成%ハ水分六・二〇、蛋白質二〇・二六、脂肪〇・四九、無窒素物四一・九六、纖維二〇・二五・灰分一〇・七四。

(一)【集解】藏器曰く、薇は水旁に生じ、葉は萍(ひやう)に似たものだ。蒸して食へば人を利す　三秦記に『夷、齊はこれを食ふこと三年にして顔色が異らなかつた。武王がこれを誡(いまし)めたので食はずして死んだ』とある。



〔薇〕

——野豌豆——大巢菜——

李珣曰く、薇は海、池、澤中に生ずる水菜である。

時珍曰く、薇は麥田中に生じ、原澤にもある。故に詩に『山に蕨、薇あり』といつたので、水草ではない。卽ち今の野豌豆(やゑんどう)であつて、蜀地方ではこれを巢菜といふ。蔓生で、莖、葉、氣味はいづれも豌豆に似てゐる。その藿は蔬にし、羹に入れて、いづれも宜し。詩に『薇を采り薇を采る、薇亦た柔止』とあり、禮記に『豕に芼(すす)むるに薇を以てす』とあるはいづれもこの物である。詩疏にこれを迷蕨とし、鄭氏の通志にこれを金櫻芽としのたはいづれも謬(あやまり)だ。項氏は『巢菜に大、小の二種ある。大

〔應用〕嫩苗ヲトリ煠デ淘ハシテ後調ヘ食フ。通常乾シテ貯フ卽チ干薇ナリ。又蕨ト同ジクソノ根莖ヲ掘リトリタタキテ水飛シテ澱粉ヲトリ、餅ニ作リ粮トナスニ味蕨粉ニ優ル（食用植物誌）。

なるものは卽ち薇であつて、それは野豌豆にして實らぬもの、小なるものは卽ち蘇東坡の所謂元修菜である』といつた。この說は當を得てゐる。

〔二〕氣味　【甘し、寒にして毒なし】

主治　【久しく食すれば饑ゑず、中を調へ、大、小腸を利す】（藏器）【水道を利し、浮腫を下し、大腸を潤ほす】（珣）

翹搖（拾遺）

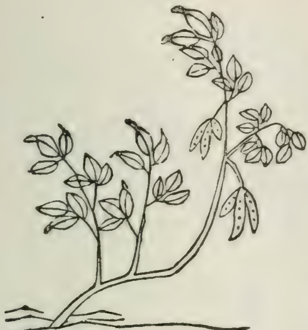
和名　のゑんどう
學名　Vicia sativa, L. etc.
科名　まめ科（荳科）

釋名　**搖車**（爾雅）　**野蠶豆**（綱目）　**小巢菜**　藏器曰く、翹搖は、幽州地方では苕搖といふ。爾雅に『杜夫は搖車なり』とある。俗に翹車と呼ぶそのものだ。蔓生し、葉は細く花は紫で、食へるものだ。

時珍曰く、翹搖とはその莖、葉が柔婉で翹然として飄搖するやうな狀態のものだからかく名けたのだ。蘇東坡は『菜の美なるものは蜀鄕の巢、故人巢元脩がこれを嗜んだのに因んで元修菜といふ』といひ、陸放翁の詩の序には『蜀の蔬に兩巢があ

る。大巣は豌豆にして實らぬもの、小巣は稻田中に生ずる。吳地にも多く、一名漂搖草、一名野蠶豆といふ。油で煠て米糝で綴つて草花と名けて食ふと佳味なものだ。羹にして尤も美味である』といつてある。

〔集解〕(一)藏器曰く、翹搖は平澤に生じ、蔓生で勞豆の如く、花は紫である。



〔翹搖〕
—小巣菜—

時珍曰く、處處いづれにもあるが、蜀地方では秋種ゑて春採り、老いた時に耕轉して田を壅する。故に薛田の詩に『剩へ豌巣を種ゑて晩田に沃す』といつてある。蔓は勞豆に似て細く、葉は初生の槐芽、及び蒺藜に似て色が青黃だ。花を著けんとしてまだ蕚の固まらぬ際に採つて蒸して食ひ、酒を點し鹽を下し、芼羹にし餡にする。味は小豆藿のやうだ。三月になつて小さい紫白色の花を開き、豌豆に似て小さい角子を結ぶ。

(一) 木村(康)曰ク、(原植物)すずめのゑんどう Vicia hirsuta, Koch. (Ervum hirsutum, L.) やはずゑんどう、からすのゑんどう Vicia sativa, L.

(三)〔氣味〕【辛し、平にして毒なし】詵曰く、煮て食ふが佳し、生で食へば人をして水を吐かしめる。

〔主治〕【血を破り、血を止め、肌を生ずる。擣汁を服すれば五種の黄病を療ず。瘥えるを度とする】(藏器)【五臓を利し、耳目を明にし、熱風を去り、人をして輕健ならしめる。長く食つても厭かず、甚だ人に益あり】(孟詵)【熱痺を止め、血を活し、胃を平にする】(時珍)

〔附方〕新二。【血を活し、目を明にする】漂搖豆を末にし、一日二回、甘草湯で二錢を服す。(衞生易簡方)【熱痺の止まぬもの】翹搖の杵汁を服す。(廣利方)

鹿藿(本經下品)

和名 たんきりまめ
學名 Rhynchosia volubilis, Lour.
科名 まめ科(荳科)

〔校正〕草部より此に移し入る。

〔釋名〕**鹿豆**(郭璞) **䕬豆** 音は勞(ラウ)である。また蹽とも書く。**野綠豆**

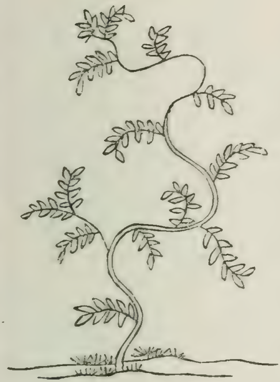
時珍曰く、豆の葉を藿といふ。鹿が喜んで食ふからかく名けたものだ。俗に䕬豆と

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕Vicia hirsuta ノ種子ハ青酸ヲ生ズル物質ヲ含有ス。ソノ組成(%)ハ水分一〇・七、無窒素物五一・七〇、含窒素物二七・二、脂肪〇・七、粗纖維六・四、灰分三・二四。V. sativa 等ノ種子モ青酸ヲ成生スル物質ヲ有ス。Wehmer: d. Pflanzenstoffe, II. Aufl. 563.

呼ぶ。豋と鹿とは發音が相近い。王磐の野菜譜には野綠豆と書いてある。爾雅に『蔨——音は卷（ケン）——は鹿藿なり。その實は莥——音は紐（チユウ）——』とあるがこの物だ。

〔集解〕(一) 別錄に曰く、鹿藿は汶山の山谷に生ずる。

弘景曰く、方藥には用ゐない。一般にも識るものがない。ただし葛苗を一名鹿藿といふ。



〔鹿藿〕——野綠豆——豋豆——

恭曰く、この草は所在にある。苗は豌豆に似て蔓を引き、長く粗い。一般に采つて菜にするが、やはり微に豆の氣がある。山間の住民はこれを鹿豆と呼ぶ。

保昇曰く、鹿豆は生で噉へるもので、五月、六月に苗を採つて日光で乾す。郭璞註爾雅に『鹿豆は、葉は大豆に似て蔓延して生え、根は黃色で香しい』とあるがこの物だ。

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕たんきりまめ、きんちやくまめ Rhynchosia volubilis, Lour. (Leguminosae)

（三）木村（康）曰ク、〔藥用〕民間ニテハ全草及莢果ヲ煎用スレバ祛痰ノ效アリト。（邦產藥用植物）

時珍曰く、鹿豆とは野綠豆のことで、また豐豆と名ける。多く麥地、田野中に生じ、苗、葉は綠豆に似て小さく、蔓を引いて生え、生でも熟しても食へる。三月淡い粉紫色の花を開いて小さい莢を結ぶ。その子の大いさは椒子ほどで黑色だ。煮て食へ、或は麪に磨り餅にして蒸して食ふ。

〔氣味〕（三）【苦し、平にして毒なし】〔主治〕【蠱毒、婦人の腰腹痛で不快なるもの、腸癰、瘰癧、癧瘍氣】（本經）【頭痛を止める】（梁の簡文帝の勸醫文）

灰藋 音は狄（テキ）である。 （宋嘉祐）

和名　しろあかざ
學名　Chenopodium album, L.
科名　あかざ科（藜科）

〔校正〕原は草部から穀部に移し入れてあつたが、本書ではまた此に移し入れた。

〔釋名〕**灰滌菜**（綱目）**金鎖夭**　時珍曰く、この菜は、莖、葉の上に沙のやうな細灰があつて、枝、葉が翹趯してゐるからかく名けたのだ。梁の簡文帝の勸醫文には灰藋菜と書いてあるが、それを俗に訛つて灰條菜とした。雷公炮炙論にはこれ

を金鎖夭といつてある。

〔集　解〕（一）藏器曰く、灰藋は熟地に生じ、葉の心に白粉があり、藜に似てゐるが、ただ藜は心が赤く、莖が太くして杖にもなるもので、藥に入れては白藋に及ばない。その子で炊いた飯は香しく滑かだ。


〔灰　藋〕

時珍曰く、灰藋は處處の原野にあるもので、四月に苗が生え、莖に紫紅の線稜があり、葉は尖つて切込みがあり、表向は青く背面は白く、莖心、嫩葉は表裏共に白灰がある。蔬としてやはり佳し。五月に漸次に老いて、高さは數尺になる。七八月に細かな白花を開き、結實は簇簇として毬の如く、中に細子がある。蒸し暴して仁を取り、飯に炊き、また粉に磨つて食へる。救荒本草に『結子の穗になるものは味が甘く、穗の散じたものは微し苦い。墻下、樹下に生えたものは用ゐられぬ』とある。

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕あかざ、しろざ Chenopodium album, L. (Chenopodiaceae)

〔修治〕斅曰く、灰藋、卽ち金鎖夭葉は、蔓翠を撲つと往往金星のあるものが用ゐるに堪へる。白青色のものならば、それは妓女莖といふもので用ゐられない。金鎖夭を使用する場合には、莖の高さ二尺五六寸のものを妙とする。長過ぎ短過ぎるものではいづれも使用されない。凡そこれを使用するには水に觸れてはならぬ。根を去つて日光で乾し、布で拭つて肉毛を去り盡し、細かに剉んで焙乾して用ゐる。

時珍曰く、妓女莖、卽ち地膚子苗であつて、灰藋と莖は相似てゐるが葉が同じくない。やはり蔬になる。詳細は本條に記載してある。

莖葉(二)〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【惡瘡、蟲、蠶、蜘蛛等に咬まれたるには、擣き爛らして油で和して傅ける。また煮て食ふもよし。湯にして疥癬、風瘙を浴する。燒灰を齒孔中に入れば蟲䘌を殺す。含漱すれば甘瘡を去る。灰の淋汁で瘜肉を蝕し、白癜風、黑子、面䵟を除く。肉に著けば瘡になる】(藏器)

〔附方〕新一。【疔瘡惡腫】野灰藋菜の葉を灰に燒き、瘡の皮を撥破してから唾で少量を調へて點ける。血の出るを度とする。(普濟)

子仁〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【飯に炊き、麪に磨つて食

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕Ch. album ノ全草ハ「ロイチン」(モト「ヘノポヂン」ト稱セラル)、「ベタイン」、揮發油、「ヒヨレステリン」類似體等ヲ含ム。ソノ組成(%)ハ水分八〇・八、含窒素物三・九四、無窒素物八・九三、粗纖維三・八、脂肪〇・七六、灰分三・一、種子ノ組成(%)ハ水分九・七六、含窒素物一一・八、脂肪三・八、無窒素物三六・五、粗纖維一五、灰分(?)二三。Wehmer: d. Pflanzenstoffe II Aufl.

へば三蟲を殺す』（藏器）

藜（綱目）

和名　あかざ
學名　Chenopodium album, L. Var. centrorubrum, Makino.
科名　あかざ科（藜科）

【釋名】 **萊**（詩疏） **紅心灰藋**（玉冊） **鶴頂草**（土宿本草） **臙脂菜** 下文に詳記する。

（一）【集解】 時珍曰く、藜は處處にある。卽ち灰藋にして心の紅いもののことで、莖、葉がやや大きい。（二）河朔地方では落藜と名け、南方地方では臙脂菜と名け、また鶴頂草ともいふ。いづれも形態と色とに因んだ名稱である。嫩い時はやはり食へるものだから、昔はこれを藜藿といつたのだが、靑粱と同じくなく、老いれば杖になる。詩に『南山に臺あり、北山に萊あり』とあり、陸璣の註に『萊、卽ち藜であつて初生には食へる。（三）譙沛地方では雞蘇を萊といひ、三蒼には茱萸を萊としてあるが、いづれも同名異物だ』といつた。韻府に藜を落帚としたのはやはり誤だ。寶藏論には『鶴頂、龍牙はその頂鶴の如く、八九月子と共に取收め、外丹の術に材料として用ゐる』

283.

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕あかざ Chenopodium album, L. var. centrorubrum, Makino. かはらあかざ、あかあかざ。〔應用〕葉ヲ食用トス

（二）河朔トハ今ノ河北省地方ヲ指ス。

（三）譙沛ハ今ノ江蘇省沛縣、徐州地方ヲ指ス。

とある。

葉 〔氣味〕【甘し、平にして微毒あり】時珍曰く、按ずるに、庚辛玉册に「鶴頂は陰草であつて、擣汁で粉霜を煮、燒灰の淋汁で粉霜を煎じ、礬石を伏し、草砂を結し、硫を制し、汞、及び雌黃、砒石を伏す」とある。

〔主治〕【蟲を殺す】(蕭炳)【湯に煎じて蟲瘡を洗ひ、齒䘌を漱ぐ。擣き爛らして諸蟲傷に塗る。癜風を去る】(時珍)

附方 新一 【白癜風】紅灰藋五斤、茄子根莖三斤、蒼耳根莖五斤をいづれも曬乾して灰に燒き、水一斗で煎じた湯で淋した汁を熬つて膏にし、別に好き乳香半兩、鉛霜一分、膩粉一分、錬つた牛脂二兩と和勻し、毎日三回塗る(聖惠)

莖 〔主治〕【燒灰と荻灰、蒿灰と等分を水で和し、蒸して汁を取つて煎膏し、疣贅、黑子に點け、惡肉を蝕す】(時珍)

秦荻藜 (唐本草附)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

一 木村(康)曰ク、〔原植物〕Chenopodium sp.?

〔釋名〕 時珍曰く、按ずるに、山海經に『秦山に草あり、藜と名く。荻の如く、以て葅となすべし』とある。これが即ち秦荻藜だ。蓋しこれも藜の類だから、その名稱もやはり此から生じたのだ。

〔集解〕 恭曰く、秦荻藜は下濕の地に生じ、所在にある。人の噉ふものだ。詵曰く、この物は生菜中に於て最も香美なるものである。

〔氣味〕 【辛し、溫にして毒なし】 〔主治〕 【心腹冷脹。氣を下し、食物を消化す。醬、醋で和して食ふ】(唐本) 【氣を破るに甚だ良し。又、末にして酒で和して服すれば心痛し、悒悒として塞滿するの氣を療ず】(孟詵)

子 〔主治〕 【腫毒には、末に擣いて醋で和し、封じて日に三回易へる】(孟詵)

醍醐菜(證類)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

〔集解〕 時珍曰く、唐愼微の證類本草にこれを收載してあるが、形狀の考證がない。ただ雷斅の炮炙論に『形は牛皮蔓に似たもので、これを掐むと乳汁が出る。

(一)茅膏菜
和名　いしもちさう
學名　Drosera peltata, Sm. var. lunata, clarke.
俗名　いしもちさう　丹(茅膏菜丹)
(二)雞侯菜
(三)孟娘菜
共ニ未詳

香甜にして頂に入るものだ。採取したならば、苦竹刀で細かに切り、砂盆に入れて膏のやうに研り、生絹を用ゐて汁を挼み出し、暖飲する」とあるが、しかしやはり何病を治するともいつてない。

【氣味】【甘し、温にして毒なし】【主治】【月水不利には、葉を擣いて汁を絞り、酒を和して煎じて一盞を服す】(千金)

【附方】　舊一。【傷中崩赤】醍醐の杵汁に酒を拌ぜて煎沸し、空心に一盞を服す。(千金方)

【附錄】　(一)茅膏菜(拾遺)　藏器曰く、味甘し、平にして毒なし。煮て服すれば赤白久痢に主效がある。茅中に生じ、高さ一尺、毛があり、油膩のやうに人の手に粘る。子は角になつてなる。

(二)雞侯菜　○又曰く、味辛し、温にして毒なし。久しく食すれば中を温め、氣を益す。顧微の廣州記に「嶺南に生ずる。艾に似て二月苗が生える。雞羹にして食ふに宜いものだからかく名けたのだ」とある。

(三)孟娘菜　○又曰く、味苦し、小温にして毒なし。婦人の腹中の血結、羸瘦、男子

の陰囊濕痒に主效があり、陽道を強くし、人をして歩行を健ならしめ、睡らざらしめ、虚を補し、痔瘻、瘰癧、癭瘤を去る。四明の諸山に生じ、冬、夏常にあり、葉は升麻に似て莖が四角だ。山間の住民は採つて茹にして食ふ。

優殿　又曰く、味辛し。溫にして毒なし。中を溫め、惡氣を去り、食物を消化する。安南に生じ、その地の者は種ゑて茹にする。南方草木狀に『合浦に優殿といふがあつて、その地ではそれを栽培し、豆醬で食ふ。芳香で味の好いものだ』とある。

芋（別錄中品）

和名　さといも
學名　Colocasia esculenta, Schott.
科名　てんなんしやう科（天南星科）

【校正】菜部より此に移し入る。

【釋名】**土芝**（別錄）**蹲鴟**　時珍曰く、按ずるに、徐鉉の說文の註に『芋は吁といふやうなことで、葉が大きく、根が實してゐるさまが人を吁と駭かせるといふ意味だ。吁の音は芋（ウ）であつて、疑怪の貌である』とある。史記に卓文君が『岷山の下、野に蹲鴟あり。死に至るまで饑ゑず』といつたとあり、註に『芋のことだ』

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕はすいも Alocasia indica, Schott = Colocasia indica, Kth. さといも、いも、はたけいも Colocasia antiquorum, Schott. (Aroideae) はすいも C. gigantea, Hook. f. 〔備考〕さといもニハ品種多ク、わせいも、いへがしら、たうのいも、えぐいも等アリ。

とある 蓋し芋の魁の狀態が鴟の蹲坐した有樣のやうだからだ。芋魁を東漢書には芋渠と書いてあるが、渠と魁とは同じ意味である。

(二) **集解** 弘景曰く、芋は錢塘に最も多い。生では毒があり、味は薟であつて食へない。芋を種ゑて三年採らずに置くと梠芋となる。又別に野芋といふがあつて、老芋と名ける。形葉は同一物のやうに似てゐるが、根はいづれも人を殺すものだ。

恭曰く、芋には青芋、紫芋、眞芋、白芋、連禪芋、野芋の六種あつて、その類は多いけれども苗はいづれも似たものだ。莖は高さ一尺餘、葉は大いさ扇ほどあつて荷葉に似て長く、根は薯蕷に類して圓い。その青芋といふは子が多く、細長くして毒が多く、頭灰汁で煮て更に水を易へて煮熟すれば食へるものだ。白芋、眞芋、連禪、紫芋はいづれも毒が



〔芋〕

少く、煮れば喫へる。肉と共に羹にするが甚だ佳味である。蹲鴟が滋養饒だといふは蓋しこの物をいつたのだ。野芋は大毒があるから喫つてはならぬ。關陜には諸種の芋が到る處にあるが、山南、江左にはただ青、白、紫の三種があるだけだ。

頌曰く、今は處處にあるが、閩、蜀、淮、楚で就中多く栽培する。種類は多いけれども、概して性能、效果は相近い。蜀川に產するものは形が圓くして大きい。狀態が蹲鴟のやうなものとは芋魁をいふのだ。彼の地ではこれを栽培し、糧食に當てて凶作を凌ぐ。江西、閩中に產するものは形が長くして大きく、その細なものは卵ほどで魁の旁に生える。食つてはこれが就中美味だ。凡そ芋を食ふにはいづれも栽培して作つたものでなければならぬ。その野芋といふものは大毒があるから食はれない。

宗奭曰く、江浙、二川のものは最も大きくして長い。京洛のものはやや圓くして小さいが、しかし味が佳く、他の地のものは及ばない。心から苗の出るそのものを芋頭といひ、その四邊に附いて生えるものを芋子といふ。八九月已後に掘つて食ふ

時珍曰く、芋はその屬が多いけれども水、旱の二種であつて、旱芋は山地で栽培

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕食用植物誌（四三一）ニヨレバいもの組成（%）ハ、

し得るもの、水芋は水田に蒔植するものである。葉はいづれも似てゐるが、ただ水芋が味が勝れてゐる。莖もやはり食へる。芋は花を開かぬが、時に或は七八月頃に開くものがあつて、莖が抽き出て黄色の花を出す。その花は旁に一の長萼があつて護る有樣が半邊蓮の花の形狀のやうだ。按ずるに、郭義恭の廣志に『芋には凡て十四種あつて、君子芋といふは魁が大きくして斗ほどある。赤鸇芋、卽ち連禪芋といふは魁が大きくして子が少く。百果芋といふは魁が大きくして子が繁生し、一畝から百斛の收穫を得る。青邊芋、旁巨芋、車轂芋の三種はいづれも魁が大きくして子が少く、葉の長さは一丈餘ある。長味芋といふは味が美く、莖も食へる。雞子芋といふは色が黄だ。九面芋といふは大きくして美味でない。青芋、曹芋、象芋はいづれも食へないもので、ただ莖だけが葅になる。旱芋といふは九月に熟し、蔓芋といふは枝の上に生じ、大なるは二三升ほどの大いさだ』とある。

芋子　（三）〔氣味〕【辛し、平滑にして小毒あり】大明曰く、冷なり。弘景曰く、生では毒があり、味が蔹にして食はれない。性は滑にして石を下す。服餌家では忌むところのものだ。恭曰く、多く食へば宿冷を動ずる。宗奭曰く、多く食へば尅化

品名	水分	蛋白質	脂肪	無窒素物	纖維	灰分
青芋	81.20	2.00	0.30	15.10	0.70	0.80
九面芋	68.81	2.70	0.29	25.69	1.15	1.28
いもがら	22.34	4.08	2.10	41.03	21.63	8.83

傷、吉村—東京帝大農大紀要、明治二八(一一)二〇七。Youngken: Amer. Journ. Pharm. 1919 (91) 198. 參照。

〔應用〕根莖及ビ生又ハ乾シタル葉柄ヲ食用トス。根莖ヲ止瀉劑トシテ用ノル他蟲螫、腫癰、湯火傷、瘰癧、疥癬ヲ治シ、拔刺、毒蛇咬傷、雁

し難く、滯氣し、脾を困する。

〔主治〕【腸、胃を寛にし、肌膚を充て、中を滑する】(別錄) 【冷で喫へば煩熱を療じ、渇を止める】(蘇恭) 【人を肥白ならしめ、胃を開き、腸閉を通ずる。産婦が食へば血を破る。汁を飲めば血渇を止める】(藏器) 【宿血を破り、死肌を去る。魚と和して煮て食へば甚だ氣を下し、中を調へ、虚を補す】(大明)

〔發明〕詵曰く、芋は、白色のものは味なく、紫色のものは氣を破る。汁に煮て喫へば渇を止める。十月後に晒乾して取收め、冬期に食へば病を發せぬ。その他の時期には食つてはならぬ。又、鯽魚、鱧魚と和して臛にするが良し。久しく食へば人の虚勞無力を治す。又、煮汁で膩のついた衣服を洗へば玉のやうに白くなる。

大明曰く、芋は、葉を用ゐて共に煮てから水を換へて再び煮て始めて食へる。

〔附方〕舊二、新二。【腹中の癖氣】生芋子一斤を壓破り、酒五斤に二週間漬け、空腹に一升づつを飲めば神の如き良效がある(韋宙獨行方) 【身體の浮風】芋の煮汁で浴し、半日間風に當らぬやうにする(孟詵食療) 【瘡を風の邪が冒したとき】腫痛するには、白芋の燒灰を傅け、乾けば易へる(千金方) 【頭上の軟癤】大芋を擣いて傅

婦心煩胎動、腫物等ニ用ノ(植物成分ノ研究)

けれぱ乾く。(衛生方)

葉莖 【氣味】【辛し、冷滑にして毒なし】【主治】【煩を除き、瀉を止め、姙婦の心煩、迷悶、胎動不安を療ず。又、鹽で研つて蛇蟲の咬傷、幷に癰腫毒痛に傅け、及び毒箭を署ふ】(大明)【梗で蜂螫を擦るが尤も良し】(宗奭)【汁を蜘蛛傷に塗る】(時珍)

【發明】 愼微曰く、沈括の筆談に『處士劉陽が王屋山に隱居したとき、一箇の蜘蛛が蜂に螫されて地に墜ち、腹が鼓脹して裂けるほどになつたが、徐に草の中に入り、芋梗を嚙み破つて瘡をその嚙んだ處に當てて磨つてゐたが、良久して腹が消いて故のやうになつたのを見た。それから蜂螫を治するに效驗を擧げるやうになつたので、それはこの事から起つたものだ』とある。

【防方】 新一。【黃水瘡】芋苗を晒乾し、燒いて性を存して研つて摻る(邵眞人經驗方)

(三)野芋
和名 くはずいも
學名 Alocasia macrorrhiza, Schott.
科名 てんなんしやう(天南星科)

【附錄】 (三)**野芋** 弘景曰く、野芋の形葉は芋と似てゐる。芋を種ゑて三年採らずに置けば梠芋となる。梠の音は呂(ロ)である。いづれも能く人を殺す。誤つて食

へば煩悶して垂死の狀態に陷るが、ただ土漿、及び糞汁、大豆汁を飲めば活きる。

藏器曰く、野芋は溪澗(けいかん)の側に生える。人の種ゑて作るものではないが、根、葉は相似たものだ。又、天荷といふがあつて、やはり相似て大なるものだ。

時珍曰く、小なるものを野芋といひ、大なるものを天荷といひ、俗に海芋と名ける。草部毒草類に詳記してある。野芋の根は辛く、冷にして大毒がある。醋に摩つて蟲瘡、惡癬に傅ける。その葉を搗いて毒腫に塗る。初期の無名のものは直ちに消く。また蜂蠆(ほうたい)の螫傷を治するにこれを塗るが良し。

土芋（拾遺）

和名　くずいも
學名　Pachyrhizus erosus, Urban.
科名　まめ科

【校正】　草部より此に移し入る。

【釋名】　**土卵**（拾遺）　**黃獨**（綱目）　**土豆**

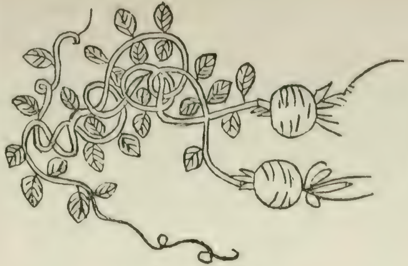
（一）【集解】　臟器曰く、土芋は蔓生で、葉は豆のやう、その根は圓くして卵のやうである。鵽鳩(たいけつ)は食つて後にいよいよ吐く　人は食はれない。又曰く、土卵は蔓生で

（一）木村（康）曰ク、（原植物）かしういも　けいも、べんけいいい

も、Dioscorea sativa, L. form. domestica, Mak.(Dioscoreaceae)

芋のやうだ。人は灰汁で煮て食ふ。

恭曰く、土卵は小芋に似て肉が白く皮が黄だ。梁漢地方では黄獨と名ける。蒸して食へる。



〔土芋〕土——卵

根　気味　【甘く辛し、寒にして小毒あり】　主治　【諸藥毒を解し、生で水に研つて服すれば悪物を吐出し、それで止む。煮熟して食へば甘美なもので、飢ゑず、人の腸、胃を厚くし、熱嗽を去る】(藏器)

薯　蕷　（本經上品）

和　名　ながいも
學　名　Dioscorea Batatas, Decne.
科　名　やまのいも科(薯蕷科)

校　正　草部より此に移し入る。

釋　名　**藷藇**　音は諸預(ショヨ)である。**土藷**　音は除(ジョ)である。**山藷**(圖

經）　**山芋**（吳普）　**山藥**（衍義）　**玉延**　吳普曰く、藷薁、一名藷薯、一名兒草、一名修脆。齊魯では山芋と名け、鄭越では土藷と名け、秦楚では玉延と名ける

頌曰く、江閩地方では單に藷と呼ぶ。その發音は殊（シュ）及び韶（セウ）のやうである。また山藷ともいふ。山海經に『景山、北に少澤を望む。その草藷薁多し』とあつて、藷薁の音は薯蕷に同じだからこれは一種のものだ。ただ字を或は殊と發音すると或は諸と發音するとの異で、或はその場合の語の遣ひ方で輕重があり、或は言葉の傳承の訛であつたらう。

宗奭曰く、薯蕷は、唐の代宗の名が預といつたところから諱を避けて薯藥と改め、又、宋の英宗の諱が署といつたところから山藥と改め、全然本來の名稱の形がなくなつて了つた。このまま將來長い歲月の間には山藥を別種の物と誤り考へるやうなことがないとも限らないから、詳記して置く。

〔集解〕　別錄に曰く、薯蕷は嵩高の山谷に生ずる。二月、八月に根を採つて暴乾する。

普曰く、臨朐の鍾山にも生ずる。始めて生えたときは莖赤く蔓細く、五月に白花

(一) 木村（康）曰く、

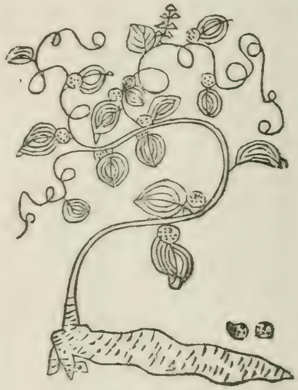
〔原植物〕 ながいも Dioscorea Botatas, Dcne. (D. divaricata, Blnc.)(Di-

oscoreaceae)〔備考〕薯蕷（山藥）ニやまのいも D. japonica, Thbg. ヲ充ツルハ非ナリ。シカレドモ本邦ノ生藥ハ殆ドやまのいもヲ用フ。牧野富太郎—植物研究雜誌、四卷六號一三九。

を開き、七月に青黃の實を結び、八月にそれが熟して落ちる。その根は内が白く外が黄で芋に類する。

◯弘景曰く、近道の處處にある。東山、南江にはいづれにも多くあつて、掘り取つて食ひ、それで糧に充てる。南康地方のものは最も大きくして美味だ。服食にもこれを用ゐる

◯恭曰く、この物には兩種あつて、一は白くして且つ佳味だ。日光で乾して粉に擣いて食ふが大いに美味で、且つ疾を癒して補する。一は青黑で



〔薯蕷—山藥〕

味は甚だ美でない。蜀道のものが就中良し。

◯頌曰く、處處にあるが、北都、四明のものが佳し。春苗が生え、蔓延して籬に援り、莖は紫、葉は青くして三尖があり、白牽牛の葉に似て更に厚くして光澤がある。夏細かな白花を開き、大いに棗花に類する。秋葉の間に實を生じ、その形狀は鈴の

やうだ。今は一般に冬、春に根を採る。刮つて見て白色のものを上とする。靑黑のものは役に立たぬ。近頃汴洛地方で栽培するが、極めて割の好いものだ。春宿根の頭を取り、黃沙に牛糞を和して畦を作つて種ゑると苗が生え、竹の枝で援を作つてやると高さ一二尺になる。夏期に頻りに漑ぐとその年の內に食へるやうになり、極めて肥えて美味になる。南方にある一種は山中に生じ、根は細くして指ほどの極めて緊り實したもので、刮り磨つて湯に入れ、煮て塊にすると散らぬやうになり、味が更に眞美である。これを食へば就中人を益し、農家で畑に種つたものに過ぐるといふことだ。又、江湖、閩中の一種は、根は薑芋の類のやう、皮が紫で、一箇の重量數斤ほどの極めて大なるものがあり、皮を削り去つて煎煮して食ふと、これも美味だが、但だ性が北地のものよりも冷なるだけだ。彼の地の者は諸と呼んでゐる。南地のものと北地のものとでは或は相異があるので、形類に差別があるのだらう。

甄權曰く、按ずるに、劉敬叔の異苑に『薯蕷を野人は土諸といふ。根は旣に藥に入れるものであり、又、食へるものだ。人の植ゑるものは種ゑるところの物に隨つて像るのである』とある。

時珍曰く、薯蕷は、藥に入れるには野生のものを勝れりとし、食品としては栽培したものを良しとする。四月に苗が生えて蔓が延び、莖が紫、葉は綠で、葉は三尖があり、白牽牛の葉に似て更に光潤だ。五六月に穗になつた淡紅色の花を開き、簇つた莢を結ぶ。莢は凡て三稜が合成し、堅くして仁がない。その子は別に一方の旁に結び、形狀は雷丸に似て大小一定せず、皮の色は土黃色で肉が白色だ。煮て食へば甘く滑かでその根と同樣である。王旻の山居錄に「曾て山芋の子を得た。荊棘の子のやうなもので、食つては更に根に勝る」とあるが卽ちこの物である。霜後に子を取收め、それを取つて置いて種ゑ、或は春期に根を採つて截つて種ゑる。いづれも生える。

【修治】頌曰く、白根を採り、黃皮を刮り去つて水に浸し、白礬末少量を糝ぜ、一夜經て淨洗して涎を去り、焙じ乾して用ゐる。

宗奭曰く、藥に入れるには生で乾したものを貴ぶ。故に古方にはいづれも乾山藥を用うとある。蓋し生では性が滑であつて藥に入れられず、熟しては氣を滯してただ啖へるだけだからだ。その法は、冬期に布で手を裹んで竹刀で皮を刮り去り、竹

篩に盛つて簷(つき)の風の當る場所に置き、日光に當らぬやうにし、一夕に五分乾く位にして全く乾いてから取收める。或は焙籠に入れて微火で烘(あぶ)り乾すも佳し。

斅曰く、凡そこれを使用するには、平田に生えて二三紀のものを用ゐてはならぬ。必ず山中に生えて千紀を經たものに限り、皮が赤くして四面に鬚のあるものが妙である。採取したならば銅刀で赤皮を削り去り、涎を洗ひ去り、蒸(む)して暴乾して用ゐる。

根 (三)【氣味】「甘し、溫、平にして毒なし」 普曰く、神農は甘し、小溫なりといひ、桐君、雷公は甘し、涼にして毒なしといふ。之才曰く、紫芝が使となる。甘遂を惡む。

【主治】「傷中、虛羸(きよるゐ)を補し、寒熱邪氣を除き、中を補し、氣力を益し、肌肉を長じ、陰を强くす。久しく服すれば、耳、目を聰にし、身を輕くし、饑ゑず、天年を延べる」(本經)「頭面の遊風、頭風(づふう)、眼眩に主效があり、氣を下し、腰痛を止め、虛勞、羸瘦を治し、五臟を充て、煩熱を除く」(別錄)「五勞、七傷を補し、冷風を去り、心神を鎭め、魂魄を安じ、心氣不足を補し、心孔を開達し、記憶を善くする」

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕ながいもハ粘液(ムチン)ヲ有シ、「グルコザミン」、「チロジン」、「ロイチン」「グルタミン」酸等ヲ出ダス。ソノ組成(%)ハ水分七七―七―七九、澱粉一六―一七、蛋白質一・五―二・五、細胞物質一―一・五、灰分一―二及ビ糖、脂肪合シテ凡ソ一%。又やまのいもハ「ムチン」、「アラ

ントイン」、「アルギニン」、「コリン」等ヲ含有シ又一種ノ「ヂアスターゼ」ヲ含ム。大島金太郎、田所哲太郎―化誌、明治四五(三三)一三一、東農誌、同年(四)二四三、片山嵓―藥誌、明治四一(三一五)四四六、石井―東大農科大學紀要、明治二八(二)九七。其他 Wehmer: d. Pflanzenstoffe II Aufl. 168 參照。

〔應用〕藥用ノ他食用トシテ喜バル。

(甄權)【筋骨を強くし、泄精(せつせい)、健忘に主效がある】(大明)【腎氣を益し、脾、胃を健にし、洩痢(せつり)を止め、痰涎を化し、皮、毛を潤ほす】(時珍)【生で擣いて腫硬毒に貼れば能く消散する】(震亨)

【發明】 權曰く、凡そ人の體の虛羸を患ふものにはこれを加へて用ゐるが宜し。

詵曰く、男子の精力を利し、陰力を助ける。熟煮して蜜を和し、或は湯煎にし、或は粉にし、いづれも佳し。乾して藥に入れるが更に妙である。ただ麪に和して餺飥(たく)にすれば氣を動ずる。それは麪毒を制し能はざるがためである。

李杲曰く、山藥は手の太陰に入る。張仲景の八味丸に乾山藥を用ゐたのは、その涼にして能く補する點を利用したものだ。また皮膚の乾燥を治するには、これを用ゐて潤ほす。

時珍曰く、按ずるに、吳綬は『山藥は手、足の太陰の二經(けい)に入り、その不足を補し、その虛熱を淸す』といつた。又按ずるに、王履の溯洄集には『山藥は手の太陰に入るけれども、しかし肺は腎の上源であつて、源に旣に滋がある以上、益なき筈はないのであつて、これが八味丸に用ゐてその陰を强ふする所以である』といつて

ある。又按ずるに、曹毗の杜蘭香傳には『薯蕷を食へば霧露を辟け得る』とある。

附方　舊一、新十。【虛損の補益】顏色を益し、下焦の虛冷、小便頻數、瘦損無力を補す。薯蕷を沙盆中で研細し、銚中に入れて酒一大匙で香しく熬り、旋や酒一盞を添へて攪き勻ぜ、毎朝一服。空心に飲む。(聖惠方)【心腹虛脹】手足厥逆し、或は苦寒の劑を飲んで、物を食はぬ先から嘔き、飲食慾なきには、山藥を半生半炒にして末にし、一日二回、米飮で二錢を服す。大いに功效がある。鐵器、生のもの、冷えたるものを忌む。(普濟方)【小便數多】山藥を礬水で煮、白茯苓と等分を末にし、水で二錢を飮服する。(儒門事親)【下痢禁口】山藥を半生半炒にして末にし、二錢づつを米飮で服す。(衞生易簡方)【痰氣喘急】生山藥を擣き爛らして半椀に甘蔗汁半椀を入れ、和勻して頓に熱飮する。立ろに止む。(簡便單方)【脾、胃の虛弱】飮食を思はぬには、山芋、白朮一兩、人參七錢半を末にし、水糊で小豆大の丸にし、四五十丸づつを米飮で服す。(普濟方)【濕熱虛泄】山藥、蒼朮等分を飯で丸にし、米飮で服す。大人、小兒いづれも宜し。(瀕湖經驗方)【腫毒の初期】泥を帶びた山藥、蓖麻子、糯米等分を水に浸して研つて傅ければ散ずる。(普濟方)【胯眼の臖瘍】山藥、沙糖を共に

擣いて塗れば消く。豫め麪を四圍に塗つてからこれを塗る。（簡便單方）【項後の結核】或は赤腫硬痛するには、生山藥一挺を皮を去り、蓖麻子二箇と共に研つて貼る。神の如き效がある。（救急易方）【手、足の凍瘡】山藥一截を泥に磨つて傅ける。（儒門事親）

零餘子（拾遺）

和名　むかご
學名　Bulbillus of Dioscorea Batatas, Dcne.
科名　やまのいも科（薯蕷科）

【校正】草部より此に移し入る。

【集解】（一）藏器曰く、零餘子は、大なるものは雞子ほどあり、小なるものは彈丸ほどである。葉下に在るもので、生で晒乾する。功用は薯蕷よりも强い。薯蕷に數種あつて、これはそのうちの一である。

時珍曰く、これは卽ち山藥の藤上に結ぶところの子であつて、長きものもあり圓きものもあつて一定せぬが、皮は黃、肉は白で、煮熟して皮を去つて食へば山藥に勝り、芋子よりも美味である。霜後に取收める。地に墜ちたものはやはり根を生じ易い。

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕ながいも Dioscorea Batatas, Dcne.（Dioscoreaceae）〔備考〕前項ノ肉芽ナリ。むかごト言フ。

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕食用植物誌（三七九）ニヨレバむかごノ組成（%）ハ水分六五・六三、蛋白質二・四八、脂肪〇・〇

(二)氣味　【甘し、溫にして毒なし】　主治　【虛損を補し、腰脚を強くし、腎を益す。これを食へば饑ゑぬ】(藏器)

甘藷(綱目)

和名　あめりかいも、さつまいも
學名　Ipomoea Batatas, Lam. et var. edulis, Makino.
科名　ひるがほ科(旋花科)

(一)集解　時珍曰く、按ずるに、陳祈暢の異物志に『甘藷は交、廣の南方に產し、民家では二月を以て種ゑ、十月に收穫する。その根は芋に似てやはり巨魁があり、大なるものは鵞卵ほど、小なるものは雞、鴨の卵ほどで、紫皮を剝き去ると肌肉が正白で肪のやうだ。南方の地ではこれを米穀、果に當てて食ふ。蒸しても炙いても香美なものだ。初のうちは甚だ甜いが、久しく經てば風に當るのでやや淡くなる』とある。又按ずるに、嵇含の草木狀には『甘藷は薯蕷の類である。或は芋の類だともいふ。根、葉はやはり芋のやうで、根の大いさは拳ほどある。甌で蒸煮して食ふと味が薯蕷と同じく、性は甚だ冷ではない。珠厓では耕作を業とせぬものがただこれを種ゑ、蒸し切つて晒して收藏し、それを糧糗にして藷糧と呼んでゐる。海中の人

三、其他無窒素物二八・二四、纖維二・二九、灰分一・三三、

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕さつまいも Ipomoea Batatas, Lam. (I. fastigita, sweet.) (Convolvulaceae) さつまいも、りうきういも、からいも、I. Batatas, Lam. var. edulis, Makino.

の壽命が長いのは五穀を食はずして甘藷を食ふがためだ』といつてある。

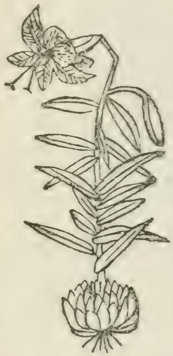
〔二〕氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【虛乏を補し、氣力を益し、脾、胃を健にし、腎陰を強くする功は薯蕷に同じ】（時珍）

百合（本經中品）

和名　ゆり
學名　Lilium spp.
科名　ゆり科（百合科）

校正　草部より此に移し入る。

釋名　**䪥**　音は藩（ハン）である。**強瞿**（別錄）　**蒜腦藷**　別錄に曰く、一名摩羅、一名重箱、一名中逢花。吳普曰く、一名重邁、一名中庭。弘景曰く、百合を俗間では一般に強仇と呼ぶ。仇、即ち瞿であつて、聲が訛つただけだ。時珍曰く、百合の根は衆くの瓣で合成されてゐるものだ。或は『專ら百合病を治するものだからかく名けたのだ



〔百合〕
──山丹は花が紅い──

〔二〕木村（康）日ク、〔成分〕食用植物誌（八二）ニヨレバ甘藷ノ組成（%）

種類	水分	蛋白質	脂肪	無窒素物	纖維	灰分
內地產	66.28	1.35	0.19	澱粉 24.60 葡萄糖 4.17	1.48	0.39
同白藷	64.24	1.48	1.08	32.82	0.97	0.63
同赤藷	65.56	1.84	0.36	28.01	0.19	0.78
同乾品	4.96	1.71	0.76	82.62	7.65	2.30
臺灣產	77.824	1.238	1.238	19.572	0.571	0.599
外國產七種平均	69.16	1.71	1.71	25.93	1.283	1.12

といふが、やはりそれでも通ずる。その根は大蒜のやう、その味は山薤のやうだから俗に蒜腦藷と呼ぶのだ。顧野王の玉篇には、やはり『藷とは百合蒜のことだ』とある。この植物は花、葉、根いづれも四方に向ふものだから强瞿といふ。凡そ物の旁生するを瞿といふので、その意味は韓詩外傳から出てゐる。

〔集解〕(一) 別錄に曰く、百合は荊州の山谷に生ずる。二月、八月に根を採つて陰乾する。

弘景曰く、近道の處處にある。根は葫蒜のやうで、數十片が相累つたものだ。一般にやはり蒸煮して食ひ、これは蚯蚓が相纏結しくて變化したものだなどといふ。やはり服食に堪へるものだ。

恭曰く、この物に二種あつて、一種は葉が大きく、莖が長く、根が粗く、花が白い。これは藥に入るに宜きものだ。一種は葉が細くして花が紅色だ。

頌曰く、百合は三月に生え、苗の高さ二三尺、簳は粗くして箭の如く、四面に葉があり、雞距のやうだ。又、柳葉に似て色が青く、莖に近い部分が微紫色で、莖端は碧白だ。四五月に紅白の花を開き、その花は石榴嘴のやうで大きい。根は葫蒜の

(一) 木村(康)曰ク、さゝゆり Lilium japonicum, Th.(Liliaceae) てつぽうゆり L. longiflorum, Th. L. Brownii, Mielle. L. formosum, Franch. L. sutchuense, Franch.
〔應用〕地下ノ鱗莖ヲ食用或ハ藥用トス。食用トナスニハ野生ノモノハ一度畑ニ移シ肥大セシメテ後用フト。

やうで二三十瓣が重疊して生える。又、一種は花が紅黄で黒斑點があり、葉は細い。葉間に黒子のあるものは藥に入れられない。按ずるに、徐鍇の歳時廣記に『二月、百合を種ゑる。その法は、雞糞を用ゐるが宜し。或は「百合なるものは蚯蚓が化成したもので、そのために雞糞を好むのだ」といふが、その邊の關係は判らない』とある。

時珍曰く、百合は一本の莖が直線に上に伸び、四面に葉が生え、葉は短竹葉に似たものだ。柳葉には似てゐない。五六月に莖の端に大なる白花を開く。その花は長さ五寸、六出で紅蕊が四方に垂れ、下を向く。色はやはり紅くない。紅いものは葉が柳に似て、これは山丹である。百合の結實はほぼ馬兜鈴に似て、その內部の子もやはり似てゐる。その瓣を種ゑるもので、蒜を種ゑる方法のやうにする。山中のものは宿根から年年自生するものだ。この物は盡く蚯蚓が變化したものといふわけはない。蚯蚓の多い場所に盡く百合があるといふことを聞かぬ。その話は恐らく出鱈目だ。

〔正誤〕宗奭曰く、百合は莖の高さ三尺ばかり、葉は大柳葉のやう、四方に枝

が攢(あつま)つて上り、その頂端に淡黃白の花を開き、四垂して下に向つて覆ひ、長蕊があり、花心に檀色があり、一枝毎に頂端に五六箇の花を著ける。子は紫色で圓く、棓子(ばいし)のやうで枝葉の間に生じ、葉毎に一子づつあつて、花の中にないのはやはり一の特異點である。根は卽ち百合であつて、色は白く、その形は松子のやうに四面から攢(さん)生(しやう)し、中間から苗が出る。

○○時珍曰く、寇氏の所說のものは卷丹であつて百合ではない。蘇頌が所傳の藥に入れるに堪へずといふそのものだ。此にその誤を正して置く。葉が短くして濶(ひろ)く、微に竹葉に似たところがあり、花は白くして四垂するものが百合である。葉が長くして狹く、尖(とが)つて柳葉の如く、花は紅くして四垂せぬものは山丹である。莖、葉は山丹に似て高く、花は紅に黃を帶びて四垂し、上に黑斑點があり、その子が先づ枝葉の間に結ぶものは(二)卷丹(けんたん)である。卷丹は四月を以て子を結び、秋期に花を開き、根は百合に似てゐる。その山丹といふは四月に花を開き、根は小さくして瓣が少い。蓋し一類中の三種である。吳瑞の本草に『白花のものを百合と名け、紅花のものを强仇と名ける』とあるは何を據(よりどころ)としたものか判らない。

(二) 卷丹
和名　おにゆり
學名　Lilium tigrinum, Ker.-Gawl.
科名　ゆり科（百合科）

根

氣味　【甘し、平にして毒なし】權曰く、小毒あり。

主治　【邪氣、腹脹、心痛。大、小便を利し、中を補し、氣を益す】(本經)【浮腫臚脹、痞滿寒熱、通身疼痛、及び乳難、喉痺を除き、涕涙を止める】(別錄)【百邪鬼魅で涕涙して止まぬもの。心下の急滿痛を除き、脚氣、熱欬を治す】(甄權)【心を安じ、膽を定め、志を益し、五臟を養ひ、顚邪、狂叫、驚悸、產後の血狂運を治し、蠱毒の氣を殺す。脇癰、乳癰、發背、諸瘡腫】(大明)【心急黃には、蜜で蒸して食ふが宜し】(孟詵)【百合病を治す】(宗奭)【肺を溫め、嗽を止める】(元素)

發明　頌曰く、張仲景の百合病を治するものに百合知母湯、百合滑石代赭湯、百合雞子湯、百合地黃湯といふがある。凡その四方は病名が百合で百合を用ゐて治するのであるが、その意味は判らない。

穎曰く、百合は、新なるものは蒸すもよく、煮るもよく、肉に和するが更に佳し、乾けるものを粉にして食ふが最も人を益す。

時珍曰く、按ずるに、王維の詩に『冥に百合に搜到し、眞に重肉に使當す』果して涙を止めて無からしむるに堪へたり、望汪の目を縱にせんと欲す』とあるは、

蓋し本草の百合涕淚を止むとある說を取つたものだ。

附方　舊三、新十三。【百合病】百合知母湯——傷寒後の百合病で行住座臥定らず、鬼神などのあるやうな狀態で、已に發汗せるものを治す。百合七箇を泉水に一夜浸し、翌朝更に泉水で一升に煮取り、また知母三兩を泉水二升で一升に煮て、百合汁と共に再び一升半に煮取つて分服する。○百合雞子湯——百合病で已に一旦吐して後のものを治す。百合七箇を泉水に一夜浸し、翌朝更に泉水二升で一升に煮取り、雞子黃一箇を入れて二回に分服する。○百合代赭湯——百合病で已に一旦下して後のものを治す。百合七箇を泉水に一夜浸し、翌朝更に泉水二升で一升に煮取り、また代赭石一兩、滑石三兩を水二升で一升に煮取り、百合汁と共に再び一升半に煮取つて二回に分服する。○百合地黃湯——百合病でまだ汗、吐、下を經ぬものを治す。百合七箇を泉水に一夜浸し、翌朝更に泉水二升で一升に煮取り、生地黃汁一升を入れて共に煎じて一升半を取り、二回に分服する。（いづれも仲景金匱要略方）【百合變渴】發病後一ヶ月を經過して變じて消渴となるには、百合一升を水一斗に一夜漬け、汁を取つて病人を溫浴し、浴し畢つてから白湯餅を食ふ。（陳延之小品方）【百合

腹滿」痛むには、百合を炒つて末にし、一日二回、方寸匕づつを飲で服す。(小品)【陰毒傷寒】百合を煮た濃汁を一升服するが良し。(孫眞人食忌)【肺臟の壅熱】煩悶し、欬嗽するには、新百合四兩を蜜で和して軟に蒸し、時時に一片を含んで津を呑む。(聖惠方)【肺病の吐血】新百合の擣汁に水を和して飲む。また煮て食ふもよし。(衞生易簡)【耳聾、耳痛】乾百合を末にし、一日二回、二錢を溫水で服す。(千金方)【髮の白きを拔いて黑に換へる】七月七日に百合を取つて擣き熟し、新瓷瓶に盛つて密封し、門上に挂けて百日間陰乾し、毎に白きを拔き去つて摻れば黑きものを生ずる。(便民圖纂)【遊風隱疹】楮葉で摻動してから、鹽泥二兩、百合半兩、黃丹二錢、醋一分、唾四分を擣き和して貼る。(摘玄方)【瘡腫の口を穿かぬもの】野百合を鹽と共に擣いて泥にして傅けるが良し。(應驗方)【天泡濕瘡】生百合を擣つて塗る。一二日にして安し。(瀕湖集簡方)【魚骨哽咽】百合五兩を研末し、蜜、水で調へて頸項を圍んで包住する。三五回に過ぎずして下る。(聖濟)

花【主治】【小兒の天泡濕瘡には、暴乾して研末し、菜子油で塗るが良し】(時珍)

子

主治 【酒で炒り、微(すこ)し赤くして研末し、湯で服すれば腸風下血を治す】(思邈)

山丹(日華)

和名 ひめゆり
學名 Lilium concolor, Salisb.
科名 ゆり科(百合科)

釋名 **紅百合**(日華) **連珠**(同) **川強瞿**(通志) **紅花菜**

集解(一) 詵曰く、百合の紅花のものを山丹と名ける。その根は食つては甚だ良くなく、白花のものに及ばない。



〔卷丹〕

時珍曰く、山丹は、根は百合に似て小さくして瓣が少く、莖も短小だ。その葉は狹く長くして尖り、頗る柳葉に似たもので、百合とは逈(はるか)に別なものだ。四月に紅花を開き、六瓣で四垂でない。やはり小さい子を結ぶ。

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕ひめゆり Lilium concolor, Salisb. (Liliaceae) すげゆり L. tenuifolium, Fisch. ひめゆり、きひめゆり、あかひめゆり、L. concolor. Salisb. var. parthenocion, Bak. 〔應用〕地下ノ鱗莖ヲ食用或ハ藥用トス。

燕、齊地方ではその花跗のまだ開かぬものを採つて乾し、紅花菜と名けて販賣する。卷丹は、莖、葉は同じだがやや長く大きく、その花は六瓣で四垂し、山丹よりも大きく、四月に子を枝葉の間に結び、秋に入つて花を頂端に開くが、誠に特異である。その根は瓣があつて百合に似てゐるが食へないものだ。別の一種である。

根【氣味】【甘し、涼にして毒なし】正要には平なりといつてある。【主治】【瘡腫、驚邪】（大明）【婦人の崩中】（時珍）

花【氣味】根に同じ。【主治】【血を活す。その蕊を疔瘡、惡腫に傅ける】（時珍）

草石蠶（拾遺）

和名　ちよろぎ
學名　Stachys Sieboldi, Miq.
科名　脣形科

【校正】草部より此に移し入る。

【釋名】**地蠶**（日用）　**土蛹**（餘冬錄）　**甘露子**（食物）　**滴露**（綱目）　**地瓜兒**　○時珍曰く、蠶、蛹はいづれも根の形を以て名けたもの、甘露は根の味を以て名けたも

のだ。或は葉上に滴つた露から生ずるものだといふが、予（時珍）が嘗て栽培したところではその說のやうな事實はない。その根は長大なもので、救荒本草にはこれを地瓜兒といつてある。

〔集解〕（一）藏器曰く、陶氏は蟲部の石蠶に註して『旣に俗間で用ゐるは草の根で黑色のものだ』といつた。按ずるに、草石蠶は高山の石上に生じ、根は簪のやうで上に毛があり、節は蠶のやう、葉は卷柏に似てゐる。山間の住民はこれを取つて食ふ。

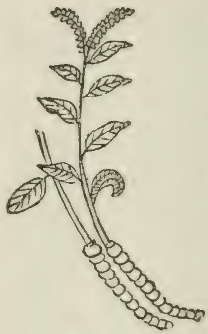
○頌曰く、草の根にして蠶に似たものをやはり石蠶と名ける。福州に產し、現に信州の山石上に四時常にある。その苗は青く、やはり節がある。三月に根を採つて用ゐる。

○機曰く、草石蠶は徽州に甚だ多く、土地の者は地蠶と呼んでゐる。肥白にして節が促り、大いさは三眠の蠶ほどで、下濕の地、及び沙磧の間に生じ、秋期に耕犂すると地中一面にみなこの物だ。それを取收めて醋で淹け、葅にして食ふ。冬期にも掘つて取る。

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕ちよろぎ、ちようろぎ Stachys Sieboldi, Miq. =(S. affinis Bunge) (Labiatae)〔應用〕連珠狀ノ根莖ヲ食用或ハ藥用トス

頌曰く、地蠶は郊野の麥地中に生ずる。葉は薄荷のやうで、少し狹くして尖り、文が微に皺んで光澤を缺く、根は白色で蠶のやうな狀態だ。四月に根を採り、水で瀹いて鹽を和し、菜として茹ふ。

時珍曰く、草石蠶、卽ち今の甘露子であつて、荊湖、江淮以南の野中にあり、人家でも栽培する。二月に苗が生え、長きは一尺に近く、莖が方で節に對して狹葉に齒があり、いづれも雞蘇のやうだがただ葉が皺んで毛があるだけだ。四月に小花を開き、穗になつてさながら紫蘇の花穗のやう、結子は荊芥子のやうだ。その根は連珠になつて老蠶のやうな狀態をなす。五月に根を掘つて蒸して食ふと、味が百合のやうである。或は蘿蔔滷、及び鹽菹水で貯藏すれば黑くならぬ。また醬で漬け、蜜で貯藏するもよし。これは菜となるものであるが、又、果にもなる。陳藏器が、石蠶の葉は卷柏に似てゐると言つたその物はこれとは別物だ。



〔草石蠶—甘露子〕

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕ちよろぎ、ちようろぎ Stachys Sieboldi, Miq. = (S. affinis Bunge) (Labiatae) 〔應用〕連珠狀ノ根莖ヲ食用或ハ藥用トス

のだ、或は葉上に滴つた露から生ずるものだといふが、予(時珍)が嘗て栽培したところではその說のやうな事實はない。その根は長大なもので、救荒本草にはこれを地瓜兒といつてある。

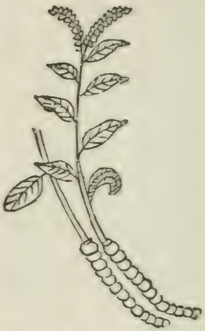
〔集解〕(一)藏器曰く、陶氏は蟲部の石蠶に註して『既に俗間で用ゐるは草の根で黑色のものだ』といつた。按ずるに、草石蠶は高山の石上に生じ、根は簪のやうで上に毛があり、節は蠶のやう、葉は卷柏に似てゐる。山間の住民はこれを取つて食ふ。

頌曰く、草の根にして蠶に似たものをやはり石蠶と名ける。福州に產し、現に信州の山石上に四時常にある。その苗は靑く、やはり節がある。三月に根を採つて用ゐる。

機曰く、草石蠶は徽州に甚だ多く、土地の者は地蠶と呼んでゐる。肥白にして節が促り、大いさは三眠の蠶ほどで、下濕の地、及び沙磧の間に生じ、秋期に耕犂すると地中一面にみなこの物だ。それを取收めて醋で淹け、葅にして食ふ。冬期にも掘つて取る。

頌曰く、地蠶は郊野の麥地中に生ずる。葉は薄荷のやうで、少し狹くして尖り、文が微に皺んで光澤を缺く、根は白色で蠶のやうな狀態だ 四月に根を採り、水で瀹いて鹽を和し、菜として茹ふ。

時珍曰く、草石蠶、卽ち今の甘露子であつて、荊湖、江淮以南の野中にあり、人家でも栽培する。二月に苗が生え、長きは一尺に近く、莖が方で節に對して狹葉に齒があり、いづれも雞蘇のやうだがただ葉が皺んで毛があるだけだ。四月に小花を開き、穗になつてさながら紫蘇の花穗のやう、結子は荊芥子のやうだ。その根は連珠になつて老蠶のやうな狀態をなす。五月に根を掘つて蒸して食ふと、味が百合のやうである。或は蘿蔔滷、及び鹽菹水で貯藏すれば黑くならぬ。また醬で漬け、蜜で貯藏するもよし。これは菜となるものであるが、又、果にもなる。陳藏器が、石蠶の葉は卷柏に似てゐると言つたその物はこれとは別物だ。



〔草石蠶〕
—甘露子—

根　〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】　時珍曰く、生で食ひ、また多く食つては宜しくない。寸白蟲を生ずるものだ。諸魚と共に食へば人をして吐かしめる。

〔主治〕【酒に浸せば風を除き、血を破る。煮て食へば溪毒を治す】（藏器）　【焙じ乾せば走注風に主效があり、血を散じ、痛を止める。その節もまた末に擣いて酒で服するがよし】（蘇頌）　【五臟を和し、氣を下し、神を淸す】（正要）

竹筍（蜀本草）

和名　たけのこ
學名　Bamboo Sprouts.
科名　禾本科

〔校正〕　拾遺の木部にある桃竹筍を併せ入る。

〔釋名〕　**竹萠**（爾雅）　**竹芽**（筍譜）　**竹胎**（說文）　**竹子**（神異經）　時珍曰く、筍の字は竹に從ふ旬の諧聲の文字で、陸佃は『旬の內を筍といひ、旬の外を竹といふ。故に文字は旬に從ふのだ』といつた。今竹を妒母草といふが、その意味は、筍は生えると一旬と六日にして母と齊しくなるといふのだ。僧贊寧の筍譜に『筍、一名萠、一名篛、一名蘿、一名茁、一名初篁』とあるはいづれも會意である。俗に笋と書く

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕またけ、にがたけ、からたけ Phyllostachys bambusoides, S. et. Z. =P. reticulata, C. Koch. (Gramineae) ほていちく P. bambsoides var. aurea, Makino. まうそうちく P. mitis, Riv. はちく P. puberula, Muuro. かんちく Arundiaria marmorea, Makino.
〔備考〕右諸種ノ嫩芽即チ筍ヲ用フルナランカ。

(二) 行鞭ハ節每ニ伸

が、それは正しくない。

集解(一) 弘景曰く、竹は類が甚だ多い。筍は實中竹、篁竹のものを佳しとする。藥としては用途のないものだ。

頌曰く、竹筍は、諸家は苦竹筍だけを最貴としてあるが、然し苦竹には二種あつて、一種は江西に產するものだ。本が極めて粗大で、筍の味は甚だ苦くして啖はれない。一種は江浙、及び近道に產するものだ。肉は厚くして葉が長く濶く、筍の味は微苦である。俗に甜苦筍と呼ぶもので、食品として宜きものだが、やはり藥に用ゐるといふことは聞かない。

時珍曰く、晉の武昌の戴凱之、宋の僧贊寧にいづれも竹譜の著があつて、凡そ六十種の產地、發筍の時期を擧げてあるが、それぞれ不同がある。詳細は木部の竹の條に記載してある。

筍そのものには食へるものと食へぬものとある。概して北方の地には竹が鮮く、ただ秦、蜀、吳、楚以南だけに多い。竹には雌雄があるもので、但だ根上を看ると第一枝の雙生してゐるものは必ず雌であつて、筍がある。土地の者は竹根から(二)行

ビテ成育シツツアル有様ナイフ。

鞭する時に掘取つた嫩いたものを鞭筍といふ。江南、湖南地方では、冬期に大なる竹根下のまだ土から出ぬものを掘つて冬筍といふ。東觀漢記に苞筍といつたものだ。いづれも生鮮で食へるもので、珍品である。その他では南方の地で淡乾したものを玉版筍、明筍、火筍といひ、鹽を用ゐて曝したものを鹽筍といふ。いづれも蔬として食へる。

按ずるに、贊寧は『凡そ筍を食ふには、譬へば藥を修治するやうなもので、適法であれば人を益するが、これに反すれば損することがある。これを採取するには風と日とを避くべきもので、風に當れば本が堅くなり、水に入れば肉が硬くなり、殼を脱して煮れば味が失ひ、生で刃を著ければ柔を失ふ。煮るには久しく煮るがよく、生では必ず人を損ずる。苦筍は久しく煮るがよく、乾筍は汁を取つて羹にして茹ふがよく、蒸すが最も美味であり、煨いても佳し。味の蘞なるものは人の咽を刺戟するが、先づ灰湯で煮てから再び煮れば良し。或は薄荷數片と共に煮ても蘞味を去る。詩に「其の蔌伊れ何ぞ、惟だ筍、及び蒲」といひ、禮に「加豆の實、筍菹、魚醢」とあるところから見ると、筍の蔬とされたことは餘程久しいものである』といつた。

諸竹筍 (二)［氣味］【甘し、微寒にして毒なし】藏器曰く、諸筍はいづれも冷血、及び氣を發する。瑞曰く、筍は、羊肝と共に食へば人をして目盲せしめる。

［主治］【消渇に水道を利し、氣を益す。久しく食ふがよし】(別錄)【膈を利し、氣を下し、熱を化し、痰を消し、胃を爽にする】(寗原)

苦竹筍 ［氣味］【苦く甘し、寒なり】［主治］【睡らなくし、面目、幷に舌上の熱黃、消渇を去り、目を明にし、酒毒を解し、熱氣を除き、人を健にする】(藏器)【心煩悶を理し、氣力を益し、水道を利し、氣を下し、痰を化し、風熱脚氣を理す。いづれも蒸煮して食ふ】(心鏡)【出汗、中風失音を治す】(汪頴)【乾いたものを燒いて研り、鹽を入れて牙疳に擦る】(時珍)

［發明］時珍曰く、四川・叙州、宜賓、長寧に產する苦筍は彼の地で珍重し誇とするところで、宋の黃山谷の苦筍の賦に『僰道の苦筍は兩川に冠冕たり、甘脆、愜當、小苦にして味を成し、溫潤、縝密、多く啖つて痟せず。肴を食ふにこれを以て啓迪し、酒客これが爲めに涎を流す』といつてある、蓋しかやうに誇を示したものであつた。

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕食用植物誌ニヨレバまだけ(四九〇)ノ筍ノ組成(%)ハ水分九一・七九、蛋白質二・五九、脂肪〇・一一、澱粉一・二三、糖分〇・五〇、無窒素物一・五八、纖維一・一〇、灰分一・一〇。まうさうちく(四九二)ハ水分九〇・二一、蛋白質三・二八、脂肪〇・一三、澱粉一・三七、糖分一・九三、纖維〇・九〇、灰分一・〇一。

篁竹筍　［主治］【消渇、風熱、氣力を益し、腹脹を消す。蒸し、煮、炒つて食ふ。いづれも宜し】(寗原)

淡竹筍　［氣味］【甘し、寒なり】［主治］【痰を消し、熱狂、壯熱、頭痛、頭風、并に妊婦の頭旋、顛仆驚悸、溫疫迷悶、小兒の驚癇天弔を除く】(汪頴)

冬筍　筀筍　［氣味］【甘し、寒なり】［主治］【小兒の痘疹の出ぬには、粥を煮て食はす。毒を解し、發生の義がある】(汪頴)

［發明］　詵曰く、淡竹筍とは卽ち中母筍であつて、美味ではあるが、然し背悶、脚氣を發する。箭竹筍は新なるものは食へるが、陳きものは宜くない。諸竹筍は多く食へばいづれも氣を動じ、冷癥を發するが、ただ苦竹筍だけは逆氣に主效があり、疾を發せぬ。

頴曰く、筍は竹瀝と功が近い。ある人は素と痰病を患つたが、筍を食つて癒えた。

瑞曰く、淡筍、甘筍、苦筍、冬筍、鞭筍はいづれも久しく食へる。その他の雜竹筍は性味一定せず、多く食つては宜くない。

宗奭曰く、筍は消化し難く、人體に益はない。脾病にこれを食ふは宜くない。あ

る小兒が乾筍三寸ばかりを食ひ、喉中に噎して壯熱し、喘し、粗ぼ驚のやうな狀態だつたが、驚の藥を服しても效がなく、後に筍を吐出したが、それから諸證が定まつたのであつた。この物はかやうに消化し難いものである。

時珍曰く、贊寧の筍譜に『筍は甘美ではあるが、しかし大腸を滑利し、脾に益なきもので、俗にこれを刮腸篦といふ。惟だ生薑、及び蔴油は能くその毒を殺す。世間で蔴滓を竹叢に沃げば次の年には凋疎になるがその驗である。蘄州の叢竹、毛斑竹、匡廬の扁竹、澧州の方竹、嶺南の篩竹、篣竹、月竹の諸筍はいづれも苦く靭くして食ふに堪へない』とある。時珍は常に、俗醫が痘を治するに、往往筍湯を勸めて飮ませ『能く痘を發するものだ』といつてゐる事實を見るが、蓋し實は痘瘡は大腸を滑利してはならぬものだ。筍には刮腸といふ名稱さへあるのだから、暗暗裡にその害を受けるので、その被害者の幾許なるやは測り知れぬ。くれぐれも戒めねばならぬことだ。

桃竹筍（拾遺）藏器曰く、南方の地ではこれを黄筍といふ。灰汁して煮れば食へるが、さなくば人の喉を刺戟する。その竹は叢生し、種類はさまざまある。時珍曰

く、桃枝竹は川、廣地方に産する。皮が滑で黄に、犀紋があり、骨のやうに痩せ、四寸にして節がある。これは敷物に作れるものだ。

【氣味】【苦し、小毒あり】【主治】【六畜の瘡中に蛆あるには、擣き砕いて納れば蛆が盡く出る】（藏器）

刺竹筍　時珍曰く、交、廣地方に産する。叢生で、大なるは周圍二尺、枝、節みな刺がある。夷人はこれを種ゑて城壁の代りとし、その竹を伐つて弓にする。根の太さは車軸ほどある。一名芭竹といふ。

【氣味】【甘く苦し、小毒あり。これを食へば人の髮を落す】（竹譜）

酸筍（綱目）

和名　ほしたけのこ
學名　Dried Bamboo Sprouts.
科名　禾本科

【集解】時珍曰く、酸筍は粤南に産する。顧玠の海槎錄に『筍の太さ臂ほどある。摘取つて沸湯で泡けて苦水を去り、冷井水中に投じて二三日浸して取出すと絲縄のやうな縷になる。それを醋で煮て食へる。好事者が中國へ持ち歸つたものは珍

稀なものとされてゐる』とある。

［氣味］【酸し、涼にして毒なし】［主治］【湯にして食へば渴を止め、酲を解し、膈を利す】（時珍）

本草綱目菜部第二十七卷 終

本草綱目菜部

第二十八卷

本草綱目菜部目錄第二十八卷

菜の三　蓏菜類十一種

茄 開寳　苦茄 拾遺　壺盧 日華　苦瓠 本經

敗瓢 綱目　冬瓜 本經　南瓜 綱目　越瓜 開寳 卽ち梢瓜。

胡瓜 蒸菰 卽ち黄瓜。　絲瓜 綱目 天羅勒を附す。　苦瓜 救荒

右附方　舊二十五　新一百零八。

菜の四　水菜類六種

紫菜 食療　石蓴 拾遺　石花菜 食鑑　鹿角菜 食性

龍鬚菜 綱目　睡菜 綱目

菜の五　芝栭類十五種

芝 本經　木耳 本經　杉菌 圖經　皂角蕈 綱目

香蕈 日用　葛花菜 綱目　天花蕈 日用　蘑菰蕈 綱目

雞㙚 綱目　舵菜 綱目　土菌 拾遺　鬼蓋 地芩 鬼筆を附す。

竹蓐 食療　雚菌 本經　蜀格を附す。　地耳 別錄

石耳 日用

右附方　舊七　新二十六。

互攷諸菜

香薷　紫蘇　紫苑　蘩菜　牛膝苗　防風苗　薄荷　荏蘇　馬蘭

蔞蒿　澤蘭根　地黃苗　諸葵　蔛菜　酸模　菖蒲　牛蒡苗　青葙苗

龍葵　決明　甘藍　蘿藦　紅花苗　車前苗　萱草　蘆筍　茭筍

蘋　海苔菜　獨帚苗　羊蹄　蒲筍　蓴菜　荇　薺頭蒿　昆布苗

昆布　地菘　蓼芽　海藻　王瓜　百部　藕絲　蘘荷　蒻頭

芡莖　菱莖　豆藿　豆芽　豆莢　豆腐　罌粟苗　椿芽　槐芽

蕪荑　枸杞　皂莢苗　楡芽　槿芽　櫻芽　五加

菜の三　蓏菜類十一種

茄

音は茄（カ）で（宋開寶）ある。

和名　なすび、なす
學名　Solanum Melongena, L. var. esculentum, Nees.
科名　なす科（茄科）

釋名　**落蘇**（拾遺）　**崑崙瓜**（御覽）　**草鼈甲**　頌曰く、按ずるに、段成式は『茄の字の音は加（カ）であつて、これは蓮の莖の名稱だ。現に茄菜と呼び、その發音を伽（カ）といふやうにするが、由來が判然せぬ』といつた。

時珍曰く、陳藏器の本草に『茄、一名落蘇』とあるが、名稱の意味は詳でない。按ずるに、五代貽子錄には酪酥と書いてある。蓋しその味が酥、酪のやうだといふので、その意味が通ぜぬこともない。



〔茄〕

杜寳の拾遺錄には『隋の煬帝は茄を改めて崑崙紫瓜といつた』とある。又、王隱君の養生主論の瘧を治する方に乾茄を用ゐ、名を諱いで草鼈甲といつてあるが、蓋し鼈甲は能く寒熱を治するものであり、茄も能く寒熱を治するものだからである。

〔一〕【集解】頌曰く、茄子は處處にある。その類に數種あつて、紫茄、黃茄は南、北を通じてあり、白茄、青水茄はただ北方の地だけにある。藥に入れるには多く黃茄を用ゐ、その他はただ菜茹とするだけである。江南の一種の藤茄といふは、蔓になつて生え、皮は薄く、壺蘆に似てゐる。これも藥用に供するといふことを聞かぬ。

宗奭曰く、新羅國に產する一種の茄は、形は雞子のやう、淡光微紫色で蔕が長く、味が甘い。今は中國に已に到る處にある。

時珍曰く、茄を栽培するには、九月に黃熟したときに取收めて洗淨し、曝乾し、二月に至つて種を下し、移植すべきものであつて、株は高さ二三尺になり、葉は大いさ掌ほどある。夏から秋になつて紫花を開き、五瓣相連り、五稜縷の如く、蕊は黃、蔕は綠で、蔕がその茄を包み、茄中に瓤があり、瓤中に子があり、子は脂麻のやうだ。その茄には圓くして栝樓の如きあり、長四五寸のものがあり、青茄、紫茄、白

〔一〕木村(康)曰ク、〔原植物〕なすび　なす Solanum Melanogena, L. (Solanaceae) Solanum Melanogena, L. var. esculentum, Ness.
〔應用〕なすびノ果實ハ食用トシ又其汁ハ皮膚ニ發生スル魚ノ目チ治スルニ用フ。

茄などあつて、白茄は銀茄とも名け、更に青きものに勝る。諸茄は老いればみな黄になるもので、蘇頌が黄茄を以て一種と見做したのはその考察が不十分だつたのだ。王禎の農書に『渤海茄なる一種は、白色にして堅く實し、番茄なる一種は、白くして扁く、甘く脆かで澀くなく、生でも熟しても食へる。紫茄なる一種は、形は紫で蔕が長く、味が甘い。水茄なる一種は、形が長く、味が甘く、これで渴を止め得る』とある。洪容齋の隨筆には『浙西の通常の茄は、いづれも皮が紫で、その白いものをば水茄といひ、江西の通常の茄はいづれも皮が白く、紫なるものをば水茄といふ。妙なものだ』とある。劉珣の嶺表錄には『交、嶺の茄樹は冬を經て凋まず、二三年にして漸次に大樹となるものがあつて、その實は瓜のやうだ』とある。茄葉を摘んで路上に布き、灰で圍んで置くと子が必ず繁る。これを嫁茄といふ。

茄子 [氣味] 『甘し、寒にして毒なし』 志曰く、凡そ久冷の人は多く食つてはならぬ。人を損じ、氣を動じ、瘡、及び痼疾を發する。李廷飛曰く、秋後に食へば多く目を損ずる。時珍曰く、按ずるに、生生編に『茄は性が寒利である。多く食へば必ず腹痛し、下利し、婦人は能く子宮を傷める』とある。

主治　【寒熱、五臟の勞】(孟詵)【溫疾、傳尸勞氣を治す。醋で摩つて腫毒に傅ける】(大明)【老いて裂けたものの燒灰は乳裂を治す】(震亨)【血を散じ、痛を止め、腫を消し、腸を寛にする】(時珍)

發明　宗奭曰く、畑に作る蔬菜中、これだけは益なきもので、開寶本草にはどこにも主治が記載されず、ただ人を損ずることだけを說いてある。後世には、これを治病に用ゐる方法といふもあるけれども、それは結局本草の正文と合致點のないものだ。耕作者はまた暖な場所で糞壤を厚く加へ、かくて小滿の節の前後に高い値段で售つてゐるが、かやうに天然の時期に隨はぬものだから、人を損ずることが益〻多い。『時ならざれば食はず』といふ、迂濶にしてはならぬことだ。

震亨曰く、茄は土に屬する。故に甘くして喜く降る。大腸の動じ易き者はこれを忌む。老いたる實は乳頭裂を治す。茄根を煮た根で凍瘡を漬ける。折つた蒂の燒灰は口瘡を治す。いづれも奇效を獲るもので、みな『甘は以て火を緩にする』の關係に因る。

時珍曰く、段成式の酉陽雜俎に『茄は腸、胃を厚くし、氣を動じ、疾を發する』と

あるが、蒸し茄なるものは性滑にして腸、胃を厚くせぬことを知らなかつたのだ。

【附　方】　舊五、新十。【婦人の血黄】黄茄子を竹刀で切つて陰乾して末にし、二錢づつを溫酒で調へて服す。（摘玄方）【腸風下血】霜を經た茄を蔕の付いたまま燒いて性を存して末にし、毎日空心に二錢匕づつを溫酒で服す。（靈苑方）【久患下血】大茄子三箇を用ゐ、一箇づつを濕紙で包んで煨熟し、瓶に入れて無灰酒一升半を沃ぎ、蠟紙で封閉して三日間置き、茄を去つて暖めて飲む。（普濟方）【腹内の鼈癥】陳醬茄兒を燒いて性を存し、麝香、輕粉少量を入れ、脂で調へて貼る。（壽域方）【卵癩偏墜】雙蔕の茄子を部屋の入口の上に懸け、出入にそれを瞰む。茄が（二）薦すれば患部もまた薦し、茄が乾けばやはり乾く。又ある法では、雙茄を門上に懸け、毎日兒を抱いてそれを視て、二三回釘でその上に鍼する。十餘日で消する。（劉松石保壽堂方）【大風熱痰】黄老茄子の大なるものを多少に拘らず新瓦に盛つて土中に埋め、一年を經て盡く化して水となつたとき取出し、苦參末を入れて共に梧子大の丸にし、食事を終つて就寝する時、酒で三十丸を服す。甚だ效がある。この方の出所は江南地方で傳へられたものである。（蘇頌圖經本草）【腰脚の拘攣】腰脚風、血積冷で筋急拘攣し、疼

（二）薦トハ物ノ鮮ナラズ貌。

痛するには、茄子五十斤を取つて切り洗ひ、水五斗で煮て濃汁を取り、滓を濾し去つて更に小鐺中に入れ、一升以内に煎じてから、生粟粉を入れて共に煎じ、稀稠が適當な程度になつたとき取出して攪ぜ和し、更に麝香、朱砂末を入れて共に梧子大ほどの丸にし、毎日林木酒で三十丸づつを送下し、暮に近く再服する。一个月で痊えるもので、男、女通用していづれも效驗がある。（圖經本草）【磕撲の青腫】老黄茄の極めて大なるものを一指の厚さほどに切片し、新瓦で焙じ研つて末にし、二錢匕づつを溫酒で調へて就寢時に服す。一夜にして消盡して痕迹がなくなる。（勝金）【墜損跌撲】血を散じ、痛を止める。重陽の日に老茄子百箇を取り、蒂を去つて四片に切り破り、消石十二兩を擣き碎いて津の外に洩れぬ器に先づ茄子を一重鋪いてからその上に消石一重を下し、かく全部を重ね鋪いて紙數層で密封し、淸淨な場所に安置し、新磚で下を承け上を覆ふて地氣に犯されぬやうにし、正月後に至つて取出し、紙二重を去つて日中に曝し、逐日此の如くして二三个月に達し、茄が已に爛れた頃を度つて瓶を開いて傾け出し、滓を濾し去つて別に新器中に入れ、薄綿で頭を蓋ふてまた曝し、膏に成つたところで用ゐ、半匙づつを酒で調へて空腹に飲み、一日に

再服する。惡血が散するので痛が止んで癒える。もしその膏が久しきに亙つて硬く乾いたときは飯飲で化動して用ゐる。(圖經本草)【發背惡瘡】前記の方を用ゐ、酒で半匙を服し、更に膏で瘡口の四圍を塗る。水のやうに冷えるを覺えて瘡が乾いて瘥える。その根本が膚腠に在るものも內消する。(同上)【熱毒瘡腫】生茄子一箇を割いて一分を去り、瓤を去つて二分を鑵子の形のやうにして瘡上に合せれば消する。もし已に膿が出たものならば二回用ゐて瘥を取る(聖濟總錄)【牙齒の腫痛】隔年の糟茄を灰に燒き、頻頻と乾いたまま擦れば立ろに效がある。(海上名方)【蟲牙疼痛】黃茄種を灰に燒いて擦れば效がある。(摘玄方)【喉痺腫痛】糟茄、或は醬茄を細に嚼んで汁を嚥む(德生堂方)【婦人の乳裂】秋期の冷茄子を裂開し、陰乾して燒いて性を存し、研末して水で調へて塗る。(補遺方)

蔕 主治 【灰に燒いて二錢を米飲で服すれば、腸風下血の止まぬもの、及び血痔を治す】(吳瑞)【燒灰は口齒の瘡䘌を治す。生で切つて癜風に擦る】(時珍)

發明 時珍曰く、癜風を治するに、茄蔕に硫、附末を蘸けて摻るは、その血を散ずる點を取るのである。白癜には白茄蔕を用ゐ、紫癜には紫茄蔕を用ゐるは、

その類に従ふだけだ。

附方 新一。【風蛀牙痛】茄蒂を灰に燒いて摻り、或は細辛末等分を加へて日日に用ゐる。(仁存方)

花 主治 【金瘡、牙痛】(時珍)

附方 新一。【牙痛】秋茄花を乾して旋て燒いて硏り、痛處に塗れば立ろに止む。(海上名方)

根 及び **枯莖葉** 主治 【凍瘡皴裂には、湯に煮て漬けるが良し】(開寶)【血を散じ、腫を消し、血淋、下血、血痢、陰挺、齒䘌、口蕈を治す】(時珍)

附方 新八。【血淋疼痛】茄葉を熏じ乾して末にし、二錢づつ溫酒、或は鹽湯で服す。隔年のものが就中佳し。(經驗良方)【腸風下血】方は上に同じ。米飲で服す。【久痢の止まぬもの】茄根の燒灰、石榴皮等分を末にし、沙糖水で服す。(簡便單方)【女陰挺出】茄根を燒いて性を存して末にし、油で調へて紙上に置き、それを筒に捲いて內に入れる。一日一回試みる。(乾坤生意)【口中に蕈の生じたるもの】醋で口を漱ぎ、茄母の燒灰、飛鹽等分を米醋で稀く調へて時時に擦る。(摘玄方)【牙齒

の齲痛】茄根の擣汁を頻りに塗る。○陳茄樹の燒灰を傅ける。豫め露蜂房の煎湯で漱ぐ。(海上名方)【牙痛の場合牙を取る】茄の科を馬尿に三日間浸して晒し、炒つて末にし、毎にそれを牙に點ければ落ちる。眞に妙である。(鮑氏方)【夏期の趾腫】行走不能なるには、九月に茄根を採り收めて簷下に懸け、逐日湯に煎じて洗ふ。(簡便)

苦茄(拾遺)

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

〔一〕【集解】藏器曰く、苦茄は嶺南に野生する。樹は小さくして刺がある。

子【主治】【醋で摩つて癰腫に塗る。根も湯にして浴するがよし。又、瘴氣に主效がある】(藏器)

壺盧(日華)

和名　ゆふがほ
學名　*Lagenaria vulgaris*, Ser.
科名　うり科(葫蘆科)

【釋名】**瓠瓜**(説文)　**匏瓜**(論語)　時珍曰く、壺は酒器であつて、盧は飲器で

(一)木村(康)曰ク、〔原植物〕まるばのほろし　まるばのひよとりじやうご Solanum Dulcamara, L. (Solanaceae) var. macrocarpum, Maxim.
〔備考〕まるばのほろしハ綱目ノ記載「樹小ニシテ刺有リ」ニ合セズ。

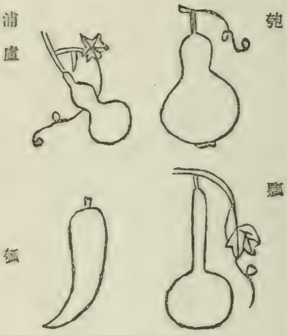
ある。この物はそれぞれその形に象てゐるもので、また酒、飯の器ともなるものだから、そこでかく名けたのだ。俗に葫蘆と書くは正しくない。葫とは蒜の名、蘆とは葦の屬のことである。その圓きものをば匏といひ、また瓢ともいふ。その物が水に浮ぶこと泡の如く、漂ふが如くだといふに因んだのだ。凡そ蓏の屬はいづれも瓜なる稱を以つて呼ばれる。故に瓠瓜、匏瓜といふのだ。古代には一般に壺、瓠、匏の三名をみな通して稱せられ、當初には區別がなかつたものだ。故に孫愐の唐韻に『瓠、音は壺(コ)又音は護(ゴ)瓠は𤬅瓢なり』とある。陶隱居の本草には瓠甊と書いて『これは瓠の類だ』といひ、許愼の説文には『瓠は匏なり』といひ、また『瓢は瓠なり。匏は大腹の瓠なり』といつてある。陸機の詩疏には『壺は瓠なり』といひ、また『匏は瓠なり』といつてある。莊子には『五石の瓠あり』とある。諸書に言ふところはその



〔壺盧〕

匏　ふくべ、すみとりふくべ、かんぺうゆふご
瓢　ひさご、つるくび
蒲盧　へうたん
瓠　ながゆふがほ
（一）木村（康）曰ク、「原植物」ゆふがほ

字がみな壺と同音であつたらうと思はれる。而るに後世では、越瓜のやうに長くして首と尾と同じものを瓠——音は護（ゴ）——といひ、瓠の一頭に腹があつて長柄のものを懸瓠といひ、柄なくして圓く大きく、形の扁なるものを匏といひ、匏にして柄短く腹太きものを壺といひ、壺にして腰細きものを蒲蘆といひ、それぞれ名稱を變へて區別し、古代とは逈に異ふのであるが、現に詳細に參考するに、その形狀はそれぞれ同じくないが、苗、葉、皮、子の性味の點は同一である。故に茲には條章を分けぬことにした。懸瓠といふは今一般にいふ茶酒瓢そのものである。蒲蘆といふは今の藥瓠盧そのもので、郭義恭の廣志にはこれを約腹壺といつてあるが、それは腹が束ね約つたやうになつてゐるからだ。これにも大、小の二種がある。



〔諸壺〕

（一）〔集解〕弘景曰く、瓠は冬瓜と氣類同輩である。又、瓠瓢といふがあつて、こ

Lagenaria vulgaris, Ser. (Cucurbitaceae)
〔應用〕ゆふがほノ果實ハ乾瓢ヲ造ルニ用フ。

れも瓠の類である。小なるものをば瓢と名け、食つては瓠に勝るものだ。これ等はいづれも水道を利す。所以に夏期にこれを食ふ。概して冬瓜に及ばない。

○恭曰く、瓠と瓠瓤、冬瓜とは全然類例すべきものではない。この三物は苗、葉は相似てゐるが、實、形が異ふ。瓠は形が越瓜に似て長さ一尺餘あり、頭と尾と相似たもので、夏期中に熟し、秋末には枯れる。瓠瓤は形狀、大小一定せず、夏末に始めて實り、秋中に熟し、取つて器とするには霜を經てからでなければならぬ。瓠は甜瓠瓤と體性の相類するもので、喫つては倶に冬瓜に勝る。陶氏がこの點まで說明しなかつたのは不十分だ。これ等は原種の各、別なるものである。

○時珍曰く、長瓠、懸瓠、壺盧、匏瓜、蒲盧は、名狀は異ふがその實は一類のものの變態で、處處にある。ただ遲、早の差異があるだけだ。陶氏は『瓠は冬瓜と氣類同輩だ』といひ、蘇氏は『瓠と瓠瓤とは全然類例すべきものでない』といつたが、いづれも十分に憑るに足らぬ。この數種は、いづれも正二月に種を下し、苗が生えると蔓を引いてはびこり、その葉は冬瓜の葉に似てやや團く、柔かな毛があり、嫩い時は食へる。故に詩に『幡幡たる瓠葉、これを采りこれを烹る』とある。五六月

に白花を開き、結實は白色で、大小、長短それぞれの差異があり、瓢中の子は齒のやうに列んで長い。これを瓠犀といふ。竊に謂ふに、壺、匏の屬は旣に烹、晒して食物にもなり、又、器にもなり、大なるは甕盎として用ゐられ、小なるは瓢、樽として用ゐられ、要舟としては水に浮べることも出來、笙としては奏樂にも用ゐられ、膚、瓤は豕の飼料になり、犀瓣は燭に澆ぐにも用ゐられ、その利用範圍の博いものである。

壺瓠 [氣味] 【甘し、平、滑にして毒なし】恭曰く、甘し、冷なり。多く食へば人をして吐、利せしめる。扁鵲曰く、脚氣、虚脹、冷氣を患ふものは、これを食へば永く除けない。

[主治] 【消渴、惡瘡、鼻、口中の肉爛痛】(思邈)【水道を利す】(弘景)【熱を消す。丹石を服する人に宜し】(孟詵)【煩を除き、心熱を治し、小腸を利し、心、肺を潤ほし、石淋を治す】(大明)

[發明] 時珍曰く、按ずるに、名醫錄に『浙人は瓠瓜を食つて多く吐瀉す。これを發暴と謂ふ。蓋しこの物は暑期に壅成するものだからであつて、ただ香薷と共

に食へばそれを免れる』とある。

附方　新一。【腹脹黃腫】亞腰壺盧を子共に燒いて性を存し、一箇づつを食前に溫酒で服す。酒を飲めぬものは白湯で服す。十餘日にして效が現はれる。(簡便方)

葉　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【茹にすれば饑に耐へる】(思邈)

蔓　鬚　花　主治　【解毒】(時珍)

附方　新一。【胎毒の預解】七八月、或は三伏の日、或は中秋の日に壺盧の鬚の環子脚のやうなものを剪り取つて陰乾し、除夜に湯に煎じて小兒を浴すれば痘の出るを免れる。(唐瑤經驗方)

子　主治　【齒斷が或は腫れ、或は露れて齒が搖き、疼痛するには、八兩を牛膝四兩と共に用ゐ、五錢づつを水で煎じ、一日三四回含漱する】(御藥院方)

苦瓠　(本經下品)

和名　にがひさご
學名　Lagenaria vulgaris, Ser. forma.
科名　うり科(葫蘆科)

釋名　**苦匏**(國語)　**苦壺盧**

(一) 木村(康)曰ク、
(原植物)へうたん
Lagenaria vulgaris, Ser. var. Gourda, Ser.
(藥用)へうたんノ種子ヲ解熱、肺炎及ビ腸カタルニ用フ。(植物成分研究)

(一)**集解** 別錄に曰く、苦瓠は晉地に生ずる。

弘景曰く、今の瓠であつて、忽ち苦くして、膽の如く食へないもののことだ。別に一種の物が生じてあるといふのではない。又、瓠瓢といふがあるが、これも瓠の類である。

恭曰く、本經に論ずるところのものは都てこれ苦瓠瓢のことだ。陶氏が瓠中の苦いものと謂つたのは大なる誤である。瓠中には時に苦いものもあるが、それは藥には用ゐない。主たる療效もないもので、また喫ふわけにも行かぬものだ。瓠と瓠瓢とは原種がそれぞれ別であつて、甘いものが變じて苦くなるのではない。

保昇曰く、瓠、卽ち匏であつて、甘、苦の二種があり、甘きは大きく、苦きは小さい。

機曰く、瓠、壺には、原種として甘いのだが忽ち變じて苦くなるものがある。俗に、雞糞で壅ひ、或は牛、馬が踐みつけると變じて苦くなると謂ふ。陶氏の說にも所見があるので、盡く非なりとするわけにも行かない。

時珍曰く、詩に『瓠に苦葉あり』といひ、國語に『苦匏は材たらず、人に於て共

に濟すのみ』といふは、いづれも苦壺を指していつたものだ。卽ち苦瓠のことであつて、瓠と壺とは同音であるが、陶氏は瓠を護の發音としたから解釋が穩ならぬこととなつたわけだ。應劭の風俗通に『穰を燒けば以て瓠を殺すべし』とあり、或は『瓠を畜ふるの家は穰を燒かず、瓜を種ゑるの家は漆を焚かぬ』ともいふ。物の性の相畏の關係である。蘇恭は『苦瓠を服して分量を過し、吐、利して止まぬには、黍穰灰汁を用ゐて解す』といつたが、蓋しこの意味を取つたのだ。凡て苦瓠には細理にして黶翳なき瑩淨なるものがある。これならば佳いのであつて、爾らざるものは毒がある。

瓤及び子　氣味　【苦し、寒にして毒あり】　主治　【大水で顏面、四肢の浮腫するものに水を下し、人をして吐せしめる】(本經)【石淋を利し、呀嗽囊結、疰蠱、痰飮を吐す。又、煮汁で陰を漬ければ小便不通を療ず】(蘇恭)【煎汁を鼻中に滴せば黃水を出し、傷冷、鼻塞、黃疸を去る】(藏器)【蚘蟲を吐す】(大明)【瘻疽、惡瘡、疥癬、齲齒の蟲䘌あるものを治す。又、汞を制し得る】(時珍)

附方　舊八、新十七。【急黃病】苦瓠一箇に孔を開け、水で煮て攪ぜ、汁を取つ

て鼻中に滴し入れる。黄水を去る。(陳藏器)【黄疸腫滿】苦壺盧瓤を大棗の量ほどを童尿二合で一時浸し、二箇の酸棗ほどを取つて兩鼻中に納れ、深く氣を吸つて黄水の出るを待つが良し。○又ある方では、瓠瓤を黄に熬つて末にし、一日一回、半錢づつを服す。十日にして癒える。しかし吐くものがあるからよく注意する必要がある。(傷寒類要)【大水脹滿】頭面が洪大するには、瑩淨にして適當な苦瓠の白瓤を用ゐ、捻つて豆粒ほどを麪に裹み、煮て一沸して空心に七箇を服す。正午になると水を一斗出すものだ。二日にして水が自ら出て止み、大いに瘦せて瘥える。二个年間は鹹きものを忌む。○聖惠では、苦壺盧瓤一兩を微し炒つて末にし、毎日粥飯で一錢を服す。【通身の水腫】苦瓠膜を炒つて二兩、苦葶藶五分を擣き合せて小豆大の丸にし、五丸づつを一日三回服す。水が下つて止む。○又、苦瓠膜五分、大棗七箇を擣いて丸にし、一回三丸を服し、人が十支里歩行するほどの時間を隔ててまた三丸を服し、水が出たならば更に一丸を服すれば止む。(いづれも千金方)【石水腹腫】四肢みな瘦削するには、苦瓠膜を炒つて一兩、杏仁半兩を炒つて皮尖を去り、末にして糊で小豆大の丸にし、一日三回、十丸づつを飲で服す。水が下つて止む。(聖濟總錄)

【水蠱の洪腫】苦瓠瓤一箇、水二升を煮て一升にしてから、丸になるまでに煎じて小豆ほどにし、十丸づつを米飮で服し、小便が利するを待つて小豆羹を作つて食ふ。水を飮んではならぬ。【小便不通】脹急するには、苦瓠子三十箇を炒り、螻蛄三箇を焙じて末にし、一錢づつを冷水で服す。（いづれも聖濟總錄）【小兒の閃癖】苦瓠のまだ破れぬものを取り、煮て熱せしめ、解き開いて熨す。（陳藏器本草）【風痰頭痛】苦瓠膜の汁を取り、葦管で鼻中に灌入する。その氣が腦門に衝するために、須臾にして惡涎が流下し、その病は立ろに癒えて根を除く。昏運を起しても疑惑するに及ばぬ。乾けるものを浸した汁も效がある。その子を末にして吹入れても效がある。年久しき頭風もみな癒える。（普濟方）【鼻窒氣塞】苦壺盧子を末にして醇酒で浸し、夏は一日、冬は七日にして日日に少量づつを點ける。（聖惠方）【眼目の昏暗】七月七日に苦瓠の白瓤を取つて汁一合を絞り、酢二升、古錢七文と共に微火で半減するまで煎じ、毎日その沫を取つて眥中に納れる。神效がある。（千金）【弩肉、血瞖】秋期間に小柄壺盧、或は小藥壺盧を取つて陰乾し、小さく緊つた部分を鋸で斷つて內に眼孔大ほどの一小孔を窒け、この病があつた場合に、眼皮の上下を手で掙開して壺盧の孔に

合定する。初には甚だ痛苦を感ずるが、かくて瘀肉、血瞖いづれも漸次に下り、睛を傷めぬものである。（劉松石經驗方）【齒䘌口臭】苦瓠子を末にし、蜜で棗半箇大の丸にし、毎早朝口を漱いでから一丸を含み、それを齒齗に塗り、涎の出るを吐き去るが妙である。（聖惠方）【風蟲牙痛】壺盧子半升、水五升を三升に煎じて含漱する。莖、葉もよし。三回に過ぎぬ。（聖惠方）【惡瘡癬癩】十年瘥えぬには、苦瓠一箇の煮汁を一日三回搽る。（肘後方）【九瘻の孔あるもの】苦瓠の大いさ盞ほどのもの四箇に各〻指の太さほどの一孔を穿つて煮て十數沸し、長さ一尺の一竹筒を取つて一頭を瓠の孔中に揷み、一頭で瘡の孔上に注ぎ、冷えれば易へる。かくして瘡孔全部に用ゐて止む。（千金方）【痔瘡腫痛】苦壺盧、苦蕒菜を湯に煎じ、先づ熏じて後に洗ひ、そこで熊膽、密陀僧、膽礬、片腦末を貼るが良し。（摘玄方）【下部の懸癰】人神不在の日を擇び、空心に井華水で百藥煎末一椀を調へて服し、微し利して後に秋壺盧、一名苦不老の架上に生つてゐて苦いものを切片し、瘡上にそれを置いて二七壯灸する。蕭端式は毎年績いてこれを病んだが、一回の灸で癒えた。（永類鈐方）【卒中蠱毒】或は吐血し、或は下血し、いづれも爛肝の如きものを出すには、苦瓠一箇、水二升を

一升に煮て服す。立ろに吐して癒える。又ある方では、苦酒一升で煮て消かして服す。吐を取つて神驗がある。(肘後方)【死胎の下らぬもの】苦壺盧を燒いて性を存して研末し、一錢づつを空心に熱酒で服す。(海上名方)【聤耳の膿の出るもの】乾瓠子一分、黃連半錢を末にし、綿で豫め繳淨してから半字を吹き入る。一日二回。(聖惠方)【鼻中の息肉】苦壺盧子、苦丁香等分に麝香少量を入れて末にし、紙撚で點ける。(聖惠方)

花　主治　【一切の瘻瘡には、霜後に採收して曝し、研末して傅ける】(時珍)

蔓　主治　【麻瘡には、湯に煎じて浴すれば癒える】(時珍)　仇遠の稗史に記載がある。

附方　新一。【小兒の白禿】瓠藤を鹽を裹んだ荷葉と共に煎じた濃汁で三五回洗へば癒える。(總錄)

敗瓢 (綱目)

和名　ふるひさご
學名　Broken Gourd of Logenaria vulgaris, Scr.
科名　うり科 (葫蘆科)

〔一〕**集解** 時珍曰く、瓢とは匏壺のことで、破開して作つたものだ。近世の方薬にも時に用ゐる。苦瓠で作つたものを佳しとなすもので、年久しきものが就中妙である。

氣味 【苦し、平にして毒なし】 **主治** 【脹を消し、蟲を殺し、痔漏下血、崩中、帶下赤白を治す】(時珍)

附方 新六。【中滿鼓脹】三五年の陳い壺盧瓢一箇を用ゐ、糯米一斗で酒を作り、熟するを待ち、瓢を炭火の上で炙熱してその酒に入れて浸し、かく三五回繰返し、その瓢を燒いて性を存して研末し、三錢づつを酒で服す。神效がある(余居士選奇方)【大便下血】敗瓢を燒いて性を存し、黃連等分と研末し、空心に二錢づつを溫酒で服す。(簡便方)【赤白崩中】舊い壺盧瓢を炒つて性を存し、蓮房を煆いて性を存して等分を研末し、二錢づつを熱水で調へて服す。三服し、汗あるを度として止む。甚しきには五服で止む。最も妙である。房事、發動するもの、生、冷のものを忌む。(海上方)【腦漏で膿の流れるもの】破瓢、白雞冠花、白螺螄殼を各、燒いて性を存して等分、血竭、麝香各五分を末にし、好酒を洒ぎ濕した熟艾と藥とを共に揉んで餅

〔一〕木村(康)曰ク、〔原植物〕へうたん Lagenaria vulgaris, Ser. var. Gourda, Ser.

にし、頂門上に貼つて熨斗で熨す。癒えるを度とする。（孫氏集效方）『腋下の瘤癭』長柄茶壺盧を焼いて性を存し、研末して搽り、消するを度とする。ある（二）府校の老嫗は右腋に一瘤を生じ、漸次に長くなつて一尺ばかりになり、その狀態が長瓠子のやうで、久しくして潰爛したが、ある方士にこの方を敎へられて用ゐると、遂に水を出し、盡く消いて癒えた。（瀕湖集簡方）【湯火傷灼】舊壺盧瓢を灰に焼いて傅ける。（同上）

冬瓜（本經上品）

和名　とうぐわ、かもうり
學名　Benincasa hispida, Cogn.
科名　うり科（葫蘆科）

校正　本書には白瓜子を併せ入る。

釋名　白瓜（本經）　水芝（同上）　地芝（廣雅）　志曰く、冬瓜は、霜を經て後に皮上が粉を塗つたやうに白くなり、その子もやはり白い。故に白冬瓜と名けて子を白瓜子といふ。

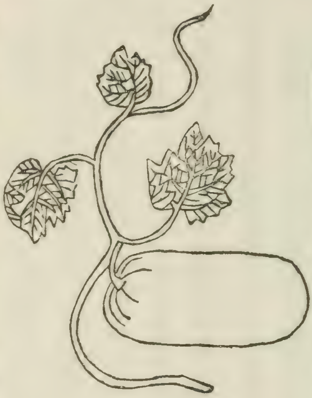
時珍曰く、冬瓜とはそのものが冬熟するからである。又、賈思勰が『冬瓜は正二三月に種ゑる。十月に種ゑたものなれば結瓜が肥好であつて春種ゑたものに勝る』

（二）府校ハ府ノ管轄ニ屬スル學校。老嫗ハソノ校ニテ使役セル者ナルベシ。

(一) 木村(康)曰ク、(原植物)たうぐわ かもうり とうがん Benincasa cerifera, Savi.=B. hispida, Cogn. (Cucurbitaceae)〔藥用〕かもうりノ種子ハ煎ジテ痔疾ノ腫痛ヲ去ラシムルニ用ヒ、果實ハ小便白濁ニ效アリ粉ニシテ用フ(植物成分研究)

といつたところを見ると、冬瓜なる名稱も或はまたそのためであらう。別錄の白冬瓜はもと本經の瓜子の條下に附載されてあつたが、宋の開寶本草では白瓜子として添加し、また白冬瓜を分けて別種の一種として記錄したところから、諸家の解釋、說明が混亂されることになつたものである。本書では一條に併記する。

〔集解〕(一)別錄に曰く、白瓜子は嵩高の平澤に生ずる。冬瓜の仁であつて、八月に採取する。



〔冬 瓜〕

頌曰く、今は處處の園圃で蒔いてある。その實は苗蔓下に生ずるもので、大なるは斗ほどあり、更に長く皮が厚くして毛があり、初生には正青綠色だが、霜を經ると白粉がつく。人家で多く貯藏し、幾年かに亙つて菜果にする。藥には霜後これを取つて置き、年を經て核を破出し、洗燥してから擂つて仁を取つて用ゐる。また單に服餌するにも堪へるものだ。

時珍曰く、冬瓜は三月に苗が生えて蔓を引き、葉は大きく圓くして尖があり、莖、葉いづれも刺毛があり、六七月に黄花を開いて實を結び、大なるは徑一尺餘、長さ三四尺あり、嫩い時は緑色で毛があり、老いると蒼色になつて粉があり、その皮は堅く厚く、その肉は肥白だ。その瓤をば瓜練といひ、白く虚にして絮のやうなもので、これは衣服の浣練に用ゐられる。その子をば瓜犀といひ、瓤中に在つて列を成す。霜後に取るものだ。その肉は煮て茹にもなり、蜜で果にもなる。その子仁はやはり食へるものだ。蓋し蔬、果の用を兼ねるものである。凡そ瓜を貯藏するには酒、漆、麝香、及び糯米を忌む。それに觸れると必ず爛れるものだ。

白冬瓜　〔氣味〕【甘し、微寒にして毒なし】　弘景曰く、冷利なり。〔主治〕【小腹水脹。小便を利し、渴を止める】（別錄）【擣汁を服すれば、消渴煩悶を止め、毒を解す】（弘景）【氣を益し、老に耐へ、心胸滿を除き、頭面の熱を去る】（孟詵）【熱毒癰腫を消す。切片して痱子を摩するが甚だ良し】（大明）【大、小腸を利し、丹石の毒を壓す】（蘇頌）

〔發明〕　詵曰く、熱するものはこれを食ふが佳し。冷えるものがこれを食へば

(二)練、不純ナルヲ去ルヲ練ルトイフ。

痩せる。煮て食へば五臟を(二)練る。このものは氣を下すが爲めである。身體を痩せて輕健ならしめやうとするものは長くこれを食ふがよし。肥えやうとするものは食つてはならぬ。

宗奭曰く、凡そ發背、及び一切の癰疽を患ふ者は、一大塊を削つて瘡上に置き、熱するときは易へる。熱毒氣を分散して甚だ良し。

震亨曰く、冬瓜は性の走つて急なるものだ。寇氏が、熱毒氣を分散するといつたのも、蓋しまたその走つて性の急なる點を取つたものだ。久病のもの、陰虛のものはこれを忌む。孫眞人は『九月食つてはならぬ。人をして反胃せしめる。必ず霜が被つてから食ふことにすれば佳し』といつた。

○詵曰く、瓜一顆を取り、桐葉と和して猪に與へて食はせると、一冬の間更に他の諸糧を與へる必要がなく、自然に饑ゑずして三四倍に成長する。

〔附方〕 舊八、新六。〔積熱消渴〕白瓜を皮を去り、毎食後に二三兩づつ喫ふ。五七回にして良し(孟詵食療)〔消渴の止まぬもの〕冬瓜一箇を皮を削り、濕地中に一個月間埋め、取出して破開し、淸水を取つて日毎に飲む。或は燒き熱し汁を絞つて飲

む（聖濟總錄）【消渇骨蒸】大冬瓜一箇を瓤を去り、黄連末を入れて塡滿して瓮中に置き、瓜が盡く消けるを待つて研つて梧子大の丸にし、三四百丸づつを冬瓜湯で服す。（經驗）【產後の痢渇】久病で津液が枯竭し、四肢浮腫し、口舌乾燥するには、冬瓜一箇を黄土で五寸厚さに泥り、煨熟して汁を絞つて飲む。また傷寒痢渇をも治す（古今錄驗）【小兒の渇利】冬瓜汁を飲む（千金）【小兒の魃病】寒熱して疳の如きには、冬瓜、萹蓄各四兩を水二升で湯に煎じて浴す（千金方）【嬰孩の寒熱】冬瓜を炮熟して汁を絞つて飲む（子母祕錄）【水病の危急なるもの】冬瓜を多少に拘らず任意に喫ふ。神效無比である（兵部手集）【十種の水氣】浮腫し、喘滿するには、大冬瓜一箇を蓋を切つて瓤を去り、赤小豆を塡滿して蓋を合せて簽定し、紙筋泥で固濟して日光で乾し、大籮に二箇の糯糠の中にその瓜を入れて煨き、火が盡きたとき取出して切片し、豆と共に焙じ乾して末にし、水糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを冬瓜子の煎湯で服す。一日に三服し、小便の利するを度とする。（楊氏家藏方）【發背で死せんとするもの】冬瓜を截り頭を去つて瘡上に合せ、瓜が爛れたときはその部分を截去つて更に合せる。瓜をまだ用ゐ盡さぬうちに瘡が已に小さく斂る。そこで膏を貼用する。

（附後方）【痔瘻腫痛】冬瓜の煎湯で洗ふ。（袖珍方）【馬汗の瘡に入りたるとき】乾冬瓜を焼いて研り、洗淨してから傅ける。【魚を食つた中毒】冬瓜汁を飲むが良し。（小品方）【顔の黒きを白くする】冬瓜一箇を竹刀で皮を去つて切片し、酒一升半、水一升で煮爛して滓を濾し去り、熬つて膏にして瓶に取收め、毎夜塗る（聖濟總錄）

瓜練　瓜の瓤である。［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【汁を絞つて服すれば煩躁熱渴を止め、小腸を利し、五淋を治し、丹石の毒を壓す】（甄權）【顔を洗ひ身體を澡へば䵟䵳を去り、人をして悅澤白皙ならしめる】（時珍）

［附方］　新二。【消渴煩亂】冬瓜瓤の乾けるもの一兩を水で煎じて飲む（聖惠方）

【水腫煩渴】小便少きには、冬瓜の白瓤を水で煮て、その汁を淡飲する（聖濟總錄）

白瓜子　別錄に曰く、冬瓜仁であつて、八月に採取する。

［正誤］　恭曰く、これは甘瓜であつて、甘の字は白の字に似てゐるので後人が誤寫したものだ。甘の字に改むべきものである。

志曰く、本草の註に、白瓜子は冬瓜仁なりとある。蘇氏の言ふところは甚しい孟浪だ。且つ甘瓜とは卽ち甜瓜であつて、やはり青、白の二種があり、その子の色は

黄であつて、主たる療功は冬瓜と全然異ふ。ただ冬瓜は霜を經ると白衣がつき、その子も白いものだから、白瓜なる名稱はそれに因つて得たものである。況や諸種の方に冬瓜子を用うとだけはあるが、甘瓜子を用うとあるものは見ないのである。蘇氏の說は憑るべきでない。

氣味　【甘し、平にして毒なし】別錄に曰く、寒なり。久しく服すれば中を寒する。

主治　【人をして悅澤にして顏色を好からしめ、氣を益し、饑ゑず、久しく服すれば身を輕くし、老に耐へる】（本經）【煩滿して不快活なるを除く。面脂となし得る】（別錄）【皮膚の風、及び黑䵟を去り、肌膚を潤ほす】（大明）【腸癰を治す】（時珍）

發明　頌曰く、冬瓜仁もやはり單に服餌をなすに堪へる。又、研末して湯にして飮み、また面脂藥とし、いづれも人をして顏色を好くして光澤ならしめる。宗懍の荊楚歲時記に『七月、瓜犀を采り、以て面脂とする』とあるは瓜瓣のことだ。やはり澡豆として用ゐられる。

宗奭曰く、服食の方ではやはりこれを用ゐることは稀だ。

附方

舊二、新五。【服食法】冬瓜仁七升を取つて絹袋に盛り、三沸した湯中に投じ、須臾にして取出して曝乾し、かく三回繰返してから、また清苦酒と二晝夜漬けて曝乾し、末にして一日方寸匕を服す。人をして肥悦ならしめ、目を明にし、天年を延べ、老衰せぬ。又ある法では、子三五升を取つて皮を去り、丸にして日毎に空心に三十丸を服す。人をして玉のやうに白淨ならしめる。(孟詵食療)【肝を補し、目を明にする】男子の五勞、七傷を治し、目を明にする。冬瓜仁を用ゐる。方は上に同じ。(外臺祕要)【面容を悦澤にする】白瓜仁五兩、桃花四兩、白楊皮二兩を末にし、一日三回、食後に方寸匕を飲で服す。白くせんとするには瓜仁を加へ、紅くせんとするには桃花を加へる。三十日にして顔が白くなり、五十日にして手、足倶に白くなる。ある方では橘皮があつて楊皮がない。(肘後方)【多年の損傷】瘥えぬには、瓜子末を溫酒で服す。(孫眞人方)【消渇の止まぬもの】小便多きには、乾冬瓜子、麥門冬、黄連各二兩を水で煎じて飲む。冬瓜は苗、葉倶に消渇を治す、新と乾とに拘はらぬ。(摘玄方)【男子の白濁】陳冬瓜仁を炒つて末にし、五錢づつを空心に米飲で服す。(救急易方)【女子の白帶】方は上に同じ。

瓜皮　主治　【丸にして服し、また面脂にも入れられる】（蘇頌）【驢、馬の汗の瘡に入つて腫痛するに主效がある。陰乾して末にして塗る。又、折傷損痛に主效がある】（時珍）

附方　新二。【跌撲傷損】乾冬瓜皮一兩、眞牛皮膠一兩を鍋に剉み込み、炒つて性を存して研末し、五錢づつを好酒で熱服し、かくて酒を一甌飲み、厚く寢具を被て微し汗を取る。その痛は止んで一夜にして初のやうになり、極效がある。（摘玄方）

【損傷の腰痛】冬瓜皮を燒いて研り、酒で一錢を服す。（生生編）

葉　主治　【腫毒を治し、蜂を殺し、蜂叮を療ず】（大明）【消渴、瘧疾の寒熱に主效があり、又、焙じ研つて多年の惡瘡に傅ける】（時珍）

附方　新一。【積熱瀉痢】冬瓜葉の嫩心に麪を拖いて煎餅にして食ふ。（海上名方）

藤　主治　【燒灰は(三)繡黥を出し得る。煎湯で黑䵟、幷に瘡疥を洗ふ】（大明）【擣汁を服すれば木耳の毒を解す。水で煎じて脫肛を洗ふ。燒灰は銅鐵を淬し、砒石を伏し得る】（時珍）

(三)繡黥ハイレズミ。

南瓜（綱目）

和名　ぼうぶら
學名　Cucurbita moschata, Duch.
科名　うり科（葫蘆科）

〔集解〕(一) 時珍曰く、南瓜の種は南番から出て轉じて閩浙に入つたもので、今では燕京、諸處にもある。三月に種を下し、沙沃の地に適し、四月に苗が生え、蔓を引いて甚だ繁り、一本の蔓が十餘丈ほども延び、節節に根があつて地に近いて著き、その莖は中が空で、葉の形狀は蜀葵のやうで太さが荷葉ほどあり、八九月に西瓜の花のやうな黄花を開き、正圓にして西瓜のやうな瓜を結ぶ。瓜の皮上には甜瓜のやうに稜があり、一本に數十顆を結ぶものだ。その色は、或は綠、或は黄、或は紅で、霜を經てから取收めて暖かな場所へ置けば春までそのまま保存される。その子は冬瓜子のやうで、その肉は厚く、


〔南　瓜〕

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕ぽんきん Cucurbita maxima, Duch. (Cucurbitaceae) なたうり C. pepo, L. (C. aurantia, Willd.) たうなす ひうがうり かぼちや なんばんなんくわ なんきんぼうぶら C. moschata, Duch. var. Toonas, Makino (C. pepo, var. Toonas, Makino.) ぼうぶら きくざのたうなす C. moschata, var. melonaeformis, Makino (C. pepo, var. melonaeform-

色は黄である。生では食へないが、ただ皮穰を去つて瀹(ゆで)て食ふ。味は山藥のやうだ。猪肉と共に煮て食ふが更に良し。また蜜煎にもなる」王禎の農書に「浙中の陰瓜なる一種は陰地に種ゑる(う)に適し、秋熟すると金のやうな黄色になり、皮膚はやや厚く、貯藏すれば春になつても新しいもののやうに食へる」とあるが、これは南瓜をいつたものではないかと思ふ。

(三)【氣味】【甘し、溫にして毒なし】時珍曰く、多く食へば脚氣、黄疸を發する。羊肉と共に食つてはならぬ、人をして氣壅(きよう)せしめるものだ。

【主治】【中を補し、氣を益す】(時珍)

越瓜（宋開寶）

和名　しろうり
學名　Cucumis Melo, L. var. Conomon, Makino.
科名　うり科(葫蘆科)

【釋名】稍瓜(食物)　菜瓜　時珍曰く、越瓜(ゑつくわ)とは地名に因つて名けたもので、俗に稍瓜と名け、南方の地では菜瓜と呼ぶ。

(一)【集解】藏器曰く、越瓜は越の地方に生ずる。大なるものは色が正白だ。越地

is, Makino.)

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕かぼちやノ種子ハ約三四%ノ脂肪油ヲ含有シ、其主成分ハ「リノール酸」、油酸、「パルミチン酸」「ステアリン酸」等ノ「グリセリド」ヨリ成ル。又ウレアーゼヲ含有ス。果肉ハ黄色素「カロチン」及「アデニン」、「アスパラギン」、「トリゴネリン」等ノ鹽基ヲ含有ス。

F. B. Power and A. H. Salway: J. Am. Ch. Soc. 1910 (32) 346.

今井三郎—滿醫一九二五(四)五五、安齊眞篤—北海醫大正一五(四)二五三、吉村淸尙、西田孝太郎—化誌大正一三(四五)四九

方では一般に果として食ふ。やはり糟で貯藏される。

○○時珍曰く、越瓜は南北いづれにもあつて、二三月に種を下すと苗が生え、地に就いて蔓を引き、葉は青く花は黄で、いづれも冬瓜の花、葉のやうだが小さく、夏、秋の間に瓜を結び、青、白の二色があつて、大いさは瓠子(こし)ほどだ。一種の長いものは二尺ばかりにもなる。俗に羊肉瓜と呼ぶ。その子の形狀は胡瓜子(こくわし)のやうで、大いさは麥粒ほどだ。その瓜は生で食ひ、果、蔬にもなり、醬、豉(し)、糖、醋で浸藏するもみな宜し。また菹(そ)にも作れる。



〔越　瓜〕
——菜　瓜——

(三)氣　味【甘し、寒にして毒なし】　○詵曰く、生で食へば多くは中を冷し、氣を動じ、人をして心痛し、臍下癥結(ちようけつ)し、諸瘡を發せしめる。又、人をして虛弱にして步行不能ならしめ、小兒に益せぬ。天行病後には食つてはならぬ。又、牛乳酪(ぎうにうらく)、及び鮓と共に食つてはならぬ。

〔藥用〕南瓜仁ハ絛蟲驅除藥ナリ。一回用量三〇瓦ヲ種皮ヲ除キ乳狀液トシテ服用ス。近緣種なたうり Cucurbita Pepy, L. ノ種子ハ同樣ノ目的ニ供ス。(米局方)(邦産藥用植物)

〔應用〕食用。

〔越瓜〕

(一) 木村(康)曰ク、(原植物)あさうり しろうり Cucumis Melo, L. var. conomon, Makino. (Cucurbitaceae)

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕三十三卷甜瓜ノ項瓜蔕ノ成分參照

時珍曰く、按ずるに、蕭子眞は『菜瓜は能く人の耳目を暗くする。驢、馬がこれを食ふと眼が爛れるを見ても判る』といつた。

【主治】【腸、胃を利し、煩渴を止める】（開寶）【小便を利し、煩熱を去り、酒毒を解し、熱氣を宣洩する。灰に燒いて口吻瘡、及び陰莖の熱瘡に傅ける】（藏器）【飯に和して鮓を作つて久しく食へば腸、胃を益す】（心鏡）

胡瓜（宋・嘉祐）

和名　きうり
學名　Cucumis sativus, L.
科名　うり科（葫蘆科）

【釋名】**黃瓜**　藏器曰く、北方では石勒の諱を避けて改めて黃瓜と呼び、現在でもそのまま呼んでゐる。

時珍曰く、張騫が西域に使して種を得て來たといふところから胡瓜と名けたのだ。按ずるに、杜寶の拾遺錄に『隋の大業四年、諱を避けて胡瓜を黃瓜と改めた』とあつて、陳氏の說と微し異ふ。今俗間では、月令に王瓜生ずとあるをこの物を指すとするは誤だ。王瓜は土瓜であつて、草部に記載してある。

(一) 木村(康)曰ク、
〔原植物〕きうり Cucumis sativus, L. (Cucurbitaceae)
〔藥用〕きうりノ果實ノ液汁ハ火傷ニ用フ(植、性、研)。民間ニテハ根ヲ利尿藥トナシ煎用ス。
〔應用〕食用。

(一)〔集解〕時珍曰く、胡瓜は處處にある。正二月に種を下し、三月に苗が生えて蔓を引き、葉は冬瓜の葉のやうでやはり毛があり、四五月に黄花を開いて瓜を結ぶ。瓜は圍二三寸で長さは一尺ばかりになり、青色で皮上に疣子のやうな瘖瘰があり、老いると黄赤色になる。その子は菜瓜子と同じである。一種の五月に種ゑるものは霜時に瓜を結び、白色にして短い。いづれも生でも熟しても食へて蔬蓏の用を兼ねるが、糟、醬で貯へては菜瓜に及ばない。



〔胡瓜〕

〔氣味〕〔甘し、寒にして小毒あり〕詵曰く、多く食つてはならぬ。寒熱を動じ、多く瘧病となり、瘀熱を積み、疰氣を發し、人をして虚熱し、上逆し、少氣し、陰血を損じ、瘡疥、脚氣、虚腫のあらゆる病を發せしめる。天行病後には食つてはならぬ。小兒は絶對に忌む。中を滑し、疳蟲を生ずるものだ。多く醋を用ゐてはならぬ。

〔主治〕〔熱を清し、渇を解し、水道を利す〕(寧原)

附方　舊二、新五。【小兒の熱痢】嫩い黄瓜十餘箇を蜜と共に食ふが良し。（海上名方）【水病肚脹】四肢の浮腫するには、胡瓜一箇を破開し、子のあるまま醋で煮て、半ば爛れたとき空心に倶に食ふ。須臾にして水を下す。（千金方）【小兒の出汗】香瓜丸——黄連、胡黄連、黄蘗、川大黄を煨熟し、鼈甲を醋で炙き、柴胡、蘆薈、青皮等分を末にし、大黄瓜の黄色なるもの一箇を割いて頭を下し、藥を塡滿し、蓋定して簽で仕め、慢火で煨熟して共に擣き爛らし、麪糊を入れて綠豆大の丸にし、毎服二三丸、大なる者には五七丸より十丸までを食後に新水で服す。（錢乙小兒方）【咽喉腫痛】老黄瓜一箇を子を去り、硝を入れて塡滿し、陰乾して末にし、少量づつを吹く。（醫林集要）【杖瘡の焮腫】六月六日に黄瓜を取り、甆瓶中に入れて水に浸し、その水で瘡上を掃ふ。立ろに效がある。（醫林集要）【火眼赤痛】五月に老黄瓜一條を取り、上に小孔を開いて瓤を去り、芒硝を塡滿して陰處に懸け、硝が透出するを待つて刮り下し、眼に留點する。甚だ效がある（壽域神方）【湯火傷灼】五月五日に黄瓜を搯んで瓶に入れ、封じて簷下に掛け、その水を取つて刷くが良し。（醫方摘要）

葉　氣味【苦し、平にして小毒あり】　主治【小兒の悶癖。一歲に對し

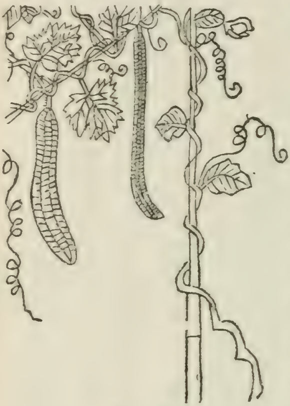
て一葉を用ゐ、揉み攪ぜて汁を取つて服す。吐下して良し】(藏器)

根【主治】【擣いて狐刺毒腫に傅ける】(大明)

絲瓜(綱目)

和名 へちま
學名 Luffa cylindrica, Roem.
科名 うり科(葫蘆科)

【釋名】**天絲瓜**(本事) **天羅**(事類合璧) **布瓜**(同上) **蠻瓜**(本事) **魚鰦** 時珍曰く、この瓜は老いると筋絲が羅み織られてゐるから絲、羅の名がある。昔はこれを魚鰦といひ、或は虞刺といつた。始は南方から來たものだから蠻瓜といふ。



〔絲瓜〕天羅

【集解】(一) 時珍曰く、絲瓜は唐、宋以前には聞かなかつたものだが、今では南北いづれにもあり、通常の蔬とされてゐる。二月に種

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕とかどへちま Luffa acutangula, Roxb. (Cucurbitaceae) へちま いとうり L. cylindrica, Roem. (L. petola, Ser.)

を下し、苗が生えて蔓を引き、木や竹に延び、或は棚架を作る。その葉は大いさ蜀葵ほどで丫尖が多く、細毛刺があり、汁を取つて物を綠に染められる。その莖には稜がある。六七月に黃花を開き、五出で胡瓜の花に微に似て蕊、瓣は俱に黃色だ。その瓜は太さ一寸ばかり、長さ一二尺で、甚しきは三四尺になり、深綠色で皺點があり、瓜頭は黿の首のやうなもので、嫩いときは皮を去つて烹ても曝してもよく、茶果子にもなる。老いると大いさ杵ほどになり、筋絡纏紐して織つて作つたやうな狀態になり、霜を經ると枯れて、それはただ靴の底の敷物にし、鍋釜類の器を滌ふに用ゐるだけのものだ。故に村落では洗鍋羅と呼ぶ。瓜の內部には隔があつて、子がその隔中にあり、形狀は苦蔞子のやうで黑色で扁い。その花苞、及び嫩葉の卷鬚いづれも食へる。

瓜(二) **氣味** 【甘し、平にして毒なし】 藥に入れるには老いたものを用ゐる。

主治 【痘瘡のはかばかしからぬには、枯れたものを燒いて性を存し、朱砂を入れて研末し、蜜水で調へて服するが甚だ妙である】(震亨) 【煮て食へば熱を除き、腸を利す。老いたものを燒いて性を存して服すれば、風を去り、痰を化し、血を涼し、

Trichosanthes Anguina, L. (Cucurbitaceae)

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕莖ヲ切斷シテ流出スル水卽所謂へちまのみづハ硝石ヲ含有スル他著シキ成分ヲ認メズ。
井上寬一郞—東北醫六二號

〔藥用〕絲瓜水ハ民間ニテ氷砂糖ヲ加ヘ鎭咳劑トシテ用フ。又利尿藥ナリ。
〔應用〕又絲瓜水ハ化粧水トナシ用フ。絲瓜纖維ハ種種ノ用途ニ供シ近年外國ニ本邦ヨリ輸出ス。

毒を解し、蟲を殺し、經絡を通じ、血脈を行らし、乳汁を下し、大、小便下血、痔漏、崩中、黃積、疝痛、卵腫、血氣で痛むもの、癰疽、瘡腫、齒䘌、痘疹、胎毒を治す】(時珍)【胃を暖め、陽を補し、氣を固くし、胎を和す】(生生編)

【發明】頴曰く、絲瓜は本草諸書には考證がない。ただ痘瘡、及び脚癰の方中に燒灰を用ゐてあるが、やはりその性の冷にして毒を解する點を利用しただけのものだ。

時珍曰く、絲瓜の老いたものは筋絡が貫串し、房隔が聯屬してゐるものだ。故に能く人の脈絡、臟腑を通じて風を去り、毒を解し、腫を消し、痰を化し、痛を祛り、蟲を殺し、また諸血病を治するものだ。

【附方】新二十八。【痘瘡のはかばかしからぬもの】初出、或は未出のものに、多きをば少からしめ、少きをば稀ならしめる。老絲瓜の蔕に近き部分三寸を皮のまま燒いて性を存して硏末し、砂糖水で服す。(直指)【癰疽の斂まらぬもの】瘡口が甚しく深きには、絲瓜を擣いて汁を頻りに抹する。(直指方)【風熱腮腫】絲瓜を燒いて性を存して硏末し、水で調へて搽る(嚴月軒方)【肺熱面瘡】苦絲瓜、牙皂莢をいづれ

も燒いて灰にし、等分を油で調へて搽る。(摘玄方)【玉莖瘡潰】絲瓜を子のまま擣いた汁で五倍子末を和して頻りに搽る。(丹溪方)【坐板瘡疥】絲瓜皮を焙じ乾して末にし、燒酒で調へて搽る。(攝生衆妙方)【天泡濕瘡】絲瓜汁で辰粉を調へて頻りに搽る。【手、足の凍瘡】老絲瓜を燒いて性を存し、臘猪脂で和して塗る。(海上方)【肛門酒痔】絲瓜を燒いて性を存して研末し、酒で二錢を服す。(嚴月軒方)【痔漏脫肛】絲瓜の燒灰、多年の石灰、雄黃各五錢を末にし、猪膽、雞子淸、及び香油で和し調へて貼り、收上すれば止める。(孫氏集效方)【腸風下血】霜後の乾絲瓜を燒いて性を存して末にし、空心に酒で二錢を服す。一名蠻瓜、一名天羅、一名天絲瓜といふがこの物である。(許叔微本事方)【下血危篤】絕望なるには、絲瓜、卽ち天羅一箇を燒いて性を存し、槐花半減と末にし、二錢づつを空心に米飮で服す。(普濟方)【酒痢便血】腹痛し、或は魚腦の如くにして五色のものを出すには、乾絲瓜一箇を皮のまま燒いて研り、二錢を空心に酒で服す。ある方では、煨いて食ふ。俗に魚鰦と名けるそのものである。(經驗良方)【血崩の止まぬもの】老絲瓜を灰に燒き、棕櫚を灰に燒き、等分を鹽酒、或は鹽湯で服す。(奇效良方)【經脈不通】乾絲瓜一箇を末にし、白鴿血で調

へて餅にし、日光で乾して研末し、二錢づつを空心に酒で服す。豫め四物湯を三服する。(海上名方)【乳汁不通】絲瓜を子のあるまま燒いて性を存して研り、酒で一二錢を服し、寢具を覆ふて汗を取れば通ずる。(簡便單方)【乾血氣痛】婦人の血氣が行らずして心膈に上衝し、變じて乾血氣となりたるには、絲瓜一箇を燒いて性を存し、空心に溫酒で服す。(壽域神方)【小腸氣痛】臍を遶つて衝心するには、蔕のついたままの老絲瓜を燒いて性を存して研末し、三錢づつを熱酒で調へて服す。甚しきも二三服に過ぎずして消する。【卵腫偏墜】絲瓜の棚の上に初めて結んだもの一箇だけを留め、瓜が盡く結實して葉が落ちるを待つて取下し、燒いて性を存して末にし、煉蜜で調へて膏にし、每晚好酒で一匙を服す。左卵のときは左にして睡り、右卵のときは右にして睡る。(劉松石保壽堂方)【腰痛の止まぬもの】天羅布瓜子仁を炒り焦して酒に擂つて服し、渣を傅ける。(熊氏補遺)【喉閉腫痛】天羅瓜の研末を灌ぐ。(普濟)【卒然の中風】防風、荊芥一兩、升麻半兩、薑三片、水一盞を半盞に煎じ、絲瓜子を研つて取つた漿半盞を和勻して灌ぐ。手、足が麻痺して痒きときは羌活の煎湯で洗ふ。(唐瑤經驗方)【痰を化し、嗽を止める】天羅、卽ち絲瓜を燒いて性を存して末に

し、棗肉で和して彈子大の丸にし、一丸づつを溫酒で化して服す。（攝生妙用方）【風蟲牙痛】霜を經た乾絲瓜を燒いて性を存し、末にして擦る。（直指方）【風氣牙痛】あらゆる藥の奏效せぬにこれを用ゐる。大いに能く風を去るものだ。蛀牙だけには效がない。天羅、即ち生絲瓜一箇を鹽を擦つて火で燒いて性を存し、研末して頻りに擦る。涎が盡きて癒える。腮腫には水で調へて貼る。馬敏叔は『これは嚴月軒家傳の屢〻奏效した方であつて、一たび試れば睡れる』といつた。【食積黃疸】絲瓜を子のあるまま燒いて性を存して末にし、毎服二錢を、麪で病となつたものは麪湯で服し、酒で病となつたものは溫酒で服し、數服を連進すれば癒える。（衞生易簡方）【小兒の浮腫】天羅、燈草、葱白等分を煎じた濃汁を服し、幷に洗ふ。（普濟方）【水蠱腹脹】老絲瓜を皮を去つて一箇を剪り碎いて巴豆十四粒と共に炒り、豆が黃になつたとき豆を去り、その瓜を陳倉米と共に再び炒り熟して瓜を去り、その米を研つて末にし、糊で梧子大の丸にし、百丸づつを白湯で服す。蓋し米は胃氣を收め、巴豆は水を逐ひ、絲瓜は人の脈絡に象るもので、その氣を借りて引くのであつて、これは元の時代の杭州の名醫宋會之の方である。（鮮于樞鈎玄）

葉

主治　【癬瘡には頻りに摻る。癰疽、丁腫、卵㿗を療ず】（時珍）

附方　新六。【蟲癬】淸晨に露水のある絲瓜葉七片を採り、一片づつ七回擦る。神の如き效がある。雞、魚、發物を忌む。（攝生衆妙方）【陰子偏墜】絲瓜葉を燒いて性を存して三錢、雞子殼を灰に燒いて二錢を溫酒で調へて服す。（余居士選奇方）【頭瘡の蛆を生じたるもの】頭皮内から時に蛆が出るには、刀で切破り、絲瓜葉を擠して汁を搽る。蛆が出盡きて根を絕つ。（小山怪證方）【湯火傷灼】絲瓜葉を焙じ研つて辰粉一錢を入れ、蜜で調へて搽る。生のものは搗いて傅ける。一日にして好し。（海上名方）【魚臍丁瘡】絲瓜葉、卽ち虞刺葉である。鬚のついた葱白、韮菜等分を共に石鉢に入れて研り爛らし、汁を取つて熱酒を和して服し、渣を腋下に貼る。病が左手に在るには左腋に貼り、右手には右腋に貼り、病の左脚に在るには左胯に貼り、右脚には右胯に貼り、中にあるには心、臍に貼り、帛で縛る。肉下の紅線のある部分を注視し、みな白くなつたときは散じたのである。潮熱がある場合の如きも、やはりこの法を用ゐて他人をして抱き支へしめる。それは顚倒する恐があり、倒れては救ひ難いからである。（危氏得效方）【刀瘡の神藥】古石灰、新石灰、絲瓜根葉の種ゑた當初

に二葉の出たばかりのもの、韭菜根各等分を一千回搗いて餅にし、陰乾して末にし、これを擦れば血が止まり、痛が定まり、肌を生ずること神の如き效がある。侍御蘇海峯の所傳である。(董炳集驗方)

藤根　【氣味】葉に同じ。【主治】【齒䘌、腦漏。蟲を殺し、毒を解す】(時珍)

【附方】　新七。【痘毒の預解】五六月に絲瓜の蔓上の卷鬚を取つて陰乾し、正月一日の子の時にその二兩半を用ゐて湯に煎じ、その事實を父、母の內の只一人だけに知らしめて小兒の身體、顏面、上、下を溫浴する。これで胎毒を去り、永く痘を出さず、たとひ出ても少くする。(體仁彙編)【諸瘡の久しくして潰れたるもの】絲瓜の老根を水で熬つて掃く。大いに涼にして癒える。(應驗方)【喉風腫痛】絲瓜根を瓦瓶に盛り、水に浸して飲む。(海上名方)【腦崩で汁の流れるもの】鼻中から時時に臭い黃水の流れて腦痛するものを控腦砂と名ける。蟲があつて腦中を食ふものである。絲瓜藤の根に近い部分三五尺を燒いて性を存し、一錢づつを溫酒で服し、癒えるを度とする。(醫學正傳)【牙宣露痛】海上妙方では、絲瓜藤を陰乾し、使用する時に臨んで火で煆いて性を存し、研つて搽れば止まる。最も妙である。○惠生堂方で

は、絲瓜藤一握、川椒一撮、燈心一把を水で煎じ、濃汁で漱いで吐く。その痛は立ろに住むこと神の如くである。【咽喉骨鯁】七月七日に絲瓜根を取つて陰乾し、燒いて性を存し、二錢づつをその鯁咽した物を煮た湯で服す。(筆峯雜興)【腰痛の止まぬもの】絲瓜根を燒いて性を存して末にし、溫酒で二錢づつを服す。神效甚だ捷だ。(鄧筆峯雜興)

【附錄】**天羅勒**(拾遺) 藏器曰く、江南の平地に生ずる。溪毒に主效があり、挼み碎いて傅ける。

時珍曰く、陳氏のこの物に對する註は詳でない。又、江南では絲瓜を天羅と呼んでゐるから、この物をいつたのではないかとも思はれるが、しかし的確な憑據がない。姑くこれを附錄して置く。

苦瓜(救荒)

和名 つるれいし
學名 Momordica Charantia, L.
科名 うり科(葫蘆科)

【釋名】**錦荔枝**(救荒) **癩葡萄** 時珍曰く、苦とは味を以て名けたもの、瓜、

及び茘枝、葡萄といふは、いづれも實、及び莖、葉の相似た點から名稱となつたものだ。

(一)【集解】周憲王曰く、錦茘枝、卽ち癩葡萄は、草木に蔓延し、莖の長さ七八尺、莖に毛澀があり、葉は野葡萄に似てゐるが花はまた黄花を開き、實の大いさは雞子ほどで、皺紋があつて茘枝に似てゐる。



〔苦瓜〕(二)
癩蘿蔔

時珍曰く、苦瓜はもと南蕃に產したものだ。今では閩、廣いづれも種ゑてゐる。五月に子を下し、苗が生えて蔓を引き、莖、葉、卷鬚はいづれも葡萄のやうで小さく、七八月に小さい黄花を開き、五瓣で椀のやうな形をなし、結ぶ瓜は長きは四五寸、短きは二三寸あり、青色で皮上が癩、及び茘枝殼の狀態のやうな疿癗になつてゐて、熟すれば黄色になつて自ら裂け、内部に紅

(一)木村(康)曰く、〔原植物〕Momordica Balsamina, L. (Cucurbitaceae) ながれいし　つるれいし M. Charantia, L.

(二)癩蘿蔔トアルハ癩葡萄ノ誤。

瓤があつて子を裹む。瓤は味が甘くして食へる。その子の形は瓜子のやうに扁く、やはり痱癗がある。南方地方では青皮で肉、及び鹽醤を煮て蔬にするが、苦く澀くして青臭い。按ずるに、費信の星槎勝覽に『蘇門荅剌國にある一種の瓜は、皮は茘枝のまだ剖けぬときのやうで、爛れた蒜のやうに甚だ臭く、剖開すると嚢のやうになつてゐる。味は酥のやうで香しく甘く、口當りがよい』とあるが、この物が卽ち苦瓜なのではないかと思はれる。

瓜 氣味 【苦し、寒にして毒なし】 主治 【邪熱を除き、勞乏を解し、心を淸し、目を明にする】（時珍） 記載は生生編にある。

子 氣味 【苦く甘し、毒なし】 主治 【氣を益し、陽を壯にする】（時珍）

菜の四　水菜類六種

紫菜（食療）

和名　あまのり、あさくさのり
學名　Porphyra tenera, Kjellm.
科名　うしけのり科

〔釋名〕紫䓴　音は軟（ナン）である。

〔集解〕(一)詵曰く、紫菜は南海中に生ずる。石に附いて正青色のものだが、取つて乾すと紫色になる。

時珍曰く、閩、越の海邊に悉くある。大葉にして薄いものだ。彼の地方では挼んで餅のやうな狀態にし、晒乾して賣出す。その色は正紫色だ。やはり石衣の屬である。



〔紫　　菜〕

〔氣味〕【甘し、寒にして毒なし】

(一) 木村（康）曰ク、〔原植物〕あさくさのり　あまのり　Porphyra lacinita, Ag. (Algae) (Porphyra tenera, Kjellm.)

藏器曰く、多く食へば人をして腹痛し、氣を發せしめ、白沫を吐かしめるが、熱醋少許を飲めば消する。

[主治]【熱氣が咽喉に煩塞するには煮汁を飲む】(孟詵)【癭瘤、脚氣を病むものは食ふが宜し】(時珍)

[發明] 震亨曰く、凡そ癭結、積塊の疾には紫菜を常に食ふが宜し、これは鹹は能く堅さを軟にするの關係である。

石蓴(拾遺)



〔石蓴〕

和名　あをさ
學名　Ulva pertusa, Kjellm.
科名　あをさ科

[校正] 草部より此に移し入る。

[集解](一) 藏器曰く、石蓴は南海に生じ、石に附いて生え、紫菜に似て色が青い。

[氣味]【甘し、平にして毒なし】

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕あをさ Ulva Lactuca, Le Jol. (Algae)

【主治】【水を下し、小便を利す】(藏器)　【風祕の不通、五膈氣、幷に臍下結氣に主效があり、煮汁を飲む。胡人はこれで痔疾を治す】(李珣)

石花菜（食鑑）

和名　てんぐさ、ところてんぐさ
學名　Gelidium Amansii. Lmx.
科名　てんぐさ科

【釋名】璚枝　時珍曰く、いづれも形を以て名けたものだ。

(一)【集解】時珍曰く、石花菜は南海の沙石の間に生ずる。高さは二三寸、狀態は珊瑚のやうで紅、白の二色があり、枝上に細齒がある。沸湯で泡けて砂屑を去り、薑、醋を沃いで食ふと甚だ脆だ。その根を沙中に埋めても再び枝が生ずるものだ。やや粗くして雞爪に似た一種を雞脚菜といひ、味は更に佳し。この二物は久しく浸せばみな化して膠凍となる。郭璞の海賦に所謂『水物は則ち玉珧、海月、土肉、石華』といふ


〔石花菜〕

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕てんぐさ Gelidium corneum, Lamr. (Algae) てんぐさ　ところてんぐさ　Gelidium Amansii Lamx.〔備考〕石花菜ナル漢字ヲ以テてんぐさニ充ツルト雖モ甚ダ其當ヲ得ザルモノノ如シ。(生藥學)

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕てんぐさヨリツクリタル寒天ハ主トシテ「ゲローゼ」ヨリ成リ其一部ハ硅酸ト結合セルモノノ如シ。「ゲローゼ」ヲ加水分解スレバ「ガラクトーゼ」ヲ生ズ。又ペントザンヲモ含

有ス。
〔藥用〕寒天ハ粘滑藥トシ又緩下ノ效モ有ス。其濃厚溶液ヲ肺出血等ニ服用セシム。寒天培養基ハ細菌學上鈌クベカラザルモノナリ。
〔應用〕菓子其他ノ製造ニ或ハ調理上ニ重要ナルモノナリ。

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕 Chondrus ocellatus, Holmes. とさかのり
(二) 登、萊、沂、密ハ山東省ノ東北部、沿海ノ諸州ナリ。

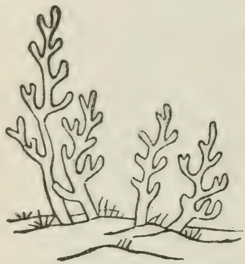
石華はこの物である。
(二)**氣味** 【甘く鹹し、大寒、滑にして毒なし】 **主治** 【上焦の浮熱を去り、下部の虚寒を發す】(寗原)

鹿角菜(食性)

和名 ふのり
學名 Gloiopeltis furcata, Post. et Rupr. var. intricata, Okam.
科名 ふのり科

釋名 **猴葵** 時珍曰く、按ずるに、沈懷遠の南越志に『猴葵、一名鹿角』とある。蓋し鹿角とは形を以て名けたもの、猴葵とはその性の滑なるに因んだものだ。

(一)**集解** 士良曰く、鹿角菜は(二)登、萊、沂、密諸處の海中に生ずる。
時珍曰く、鹿角菜は東南海中の石厓の間に生ずる。長さは三四寸、太さは鐵線ほど、鹿角のやうな形状に丫が分れて紫黄色のものだ。その地のものは採取して曝し、海錯として貢出す


〔鹿角菜〕

が、水で洗つて醋を拌ぜれば脹起して新しいもののやうになり、味は極めて滑かで美味である。久しく浸せば化して膠のやうになる。婦人がこれで髮を梳る(くしけづ)と粘つて亂れなくなる。

〔氣味〕【甘し、大寒、滑にして毒なし】詵曰く、微毒あり、男子は久しく食つてはならぬ。痼疾を發し、腰腎、經絡、血氣を損じ、人をして脚が冷痺し、顏色を少か(すくな)しめる。

〔主治〕【熱風氣を下し、小兒の骨蒸熱勞を療ず。丹石を服する人がこれを食へば能く石の力を下す】(士良)【薊熱を解す】(大明)

龍鬚菜（綱目）

和名　しらも
學名　Gracilaria compressa, Grev.
科名　たまみ科

(一)〔集解〕時珍曰く、龍鬚菜(りうしゆさい)は東南海濱の石上に生ずる。叢生して枝葉がなく、狀態は柳根の如く、鬚の長さは一尺餘あつて白色だ。醋で浸して食ひ、肉に和して蒸して食ふ。やはり佳味である。博物志に、一種の石髮とあるはこの物を指したも

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕きじかくし　さうちく　Asparagus schoberioides, Kunth. (Liliaceae) しらも

のらしい。石衣の石髪と名は同じである。

〔氣味〕【甘し、寒にして毒なし】〔主治〕【癭結、熱氣。小便を利す】(時珍)



〔龍鬚菜〕

睡菜（綱目）

和名　みつがしは
學名　Menyanthes trifoliata, L.
科名　りんだう科（龍膽科）

〔釋名〕**瞑菜**　瞑の音は眠（ミン）である。**綽菜**　**醉草**　**嬾婦蔵**　事由の記載は詳でない。

〔集解〕(一)時珍曰く、按ずるに、嵇含の南方草木狀に『綽菜は夏期に池沼の間に

(一)木村（康）曰ク、〔原植物〕みづがし

生ずる。薬は慈姑に類し、根は藕の條のやうなもので、南海地方ではこれを食ふ。人をして睡りたくならせるところから瞑菜と呼ぶ』とあり、段公路の北戸錄には『睡菜は五六月に田塘中に生ずる　土地の者は根を採つて鹽葅にする。これを食へば好く睡る』とある。郭憲の洞冥記に却睡草といふがあるが、これを食へば人をして睡らざらしめるといふからこの物と相反する。予(時珍)が按ずるに、苦菜、龍葵はいづれも能く人をして睡らざらしめるものだ。却睡なる草はこの類のものらしい。

(二)氣味【甘く微し苦し、寒にして毒なし】主治【心膈の邪熱で眠れぬもの】(時珍)

は　みづはんげ
Menyanthes trifoliale, L. (Gentianaceae)
〔生薬〕生薬睡菜葉(第三版日本薬局方)ハみづがしはノ葉ヲ採集乾燥セルモノナリ。

(二)木村(康)曰ク、〔成分〕葉ノ苦味成分ハ「メリアチン」ナル配糖體ニシテ「エムルジン」又ハ稀酸ニヨリ分解ス。
M. Briedel: J. Pharm. et Chim. (7) 4, 49; 97; 161; Ch. A. 1 11, 111; 769.
〔薬用〕獨、瑞、佛局方ニテハ睡菜葉ヲ健胃苦味薬ナリトシ、丸剤又ハ浸剤トシテ用フ。

菜の五　芝栭類十五種

芝（本經上品）

和名　れいし、まんねんたけ
學名　Fomes spp.
科名　多孔菌科

校正　本經の青、赤、黄、白、黒、紫の六芝を併せ入る。



〔諸　芝〕

釋名　茵　音は囚（シウ）である。時珍曰く、芝の字はもと之と書き、篆文は草が地上に生ずる形を形容したものだ。後世この之の字を借りて語辭としたところから、草冠を加へて區別したのである。爾雅には『茵は芝なり』とあり、註に『一歲三華の瑞草』とある。或は、剛處に生ずるを菌といひ、柔處に生ずるを芝といふともいふ。昔、四皓は芝を采り、羣仙は服食したといふから見ると、

芝とはやはり菌の屬で食へるものである。故に菜部に移し入れた。

(一)〔集解〕別錄に曰く、青芝は泰山に生じ、赤芝は霍山に生じ、黄芝は嵩山に生じ、白芝は華山に生じ、黑芝は常山に生じ、紫芝は高夏の山谷に生ずる。六芝いづれも六月、八月に採る。

弘景曰く、南嶽はもと衡山であつたのを、漢の武帝が始めて小霍山を以てそれに代へたものだ。此にいふ赤芝は衡山に生ずることをいつたものでなければならぬ。郡縣に高夏なる地名はないから恐らくこれは山の名であらう。この六芝はいづれも仙草の類である、俗には見ることの稀なもので、族類が甚だ多く、形や色の瓌異なもので、いづれも芝草圖中に記載がある。今俗間で用ゐてゐる紫芝なるものは、朽木の株上に生える木檽のやうな形狀のもので、名は紫芝といふが、ただ痔を療するに止り、諸種の補劑の丸藥には合はされない。凡そ芝草を得たならばそのまま食ふもので、他に一定した方法や分量のないものだ。故に服法の說明を下してないのである。

恭曰く、五芝經に『五色それぞれに五嶽に生ずる』とあるが、諸方から獻ぜられ

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕 Mushroom. Fomes lucidus, Fr. しば *Zoysia pungens*, Willd. (Gramineae)

るので、白芝は必しも華山と限らず、黒芝もまた常嶽と限らない。且つ黄と白とは多いが黒と青とは稀だ。しかし紫芝が最も多く、五芝の類のものでない。但し芝なるものは元來得難いものだ。たとひ一二を獲たにしても結局久しく服するといふわけに行くまい。

禹錫曰く、王充の論衡に、芝は土に生ず。土氣和するが故に芝草生ず。瑞命なり。禮に、王者仁慈なるときは則ち芝草生ずとある是なりとある。

時珍曰く、芝の類は甚だ多く、やはり花、實のあるものもある。本草にはただ六芝を以て名稱を標出してあるが、しかしその種屬を識つて置く必要がある。

神農經には、山川、雲雨、四時、五行、陰陽、晝夜の精は以て五色の神芝を生じ、聖王の休祥を爲すとある。

瑞應圖には、芝草は常に六月を以て生ず、春は青く、夏は紫に、秋は白く、冬は黒しとある。

葛洪抱朴子には、芝には石芝、木芝、肉芝、菌芝あつて凡そ數百種ある。石芝は石の象であつて海隅、石山、島嶼の涯に生じ、肉芝は狀肉の如くにして大石に附き、

頭尾を具へてゐる。乃ち生物である。赤きは珊瑚の如く、白きは截肪の如く、黒きは澤漆の如く、青きは翠羽の如く、黄なるは紫金の如く、いづれも光明洞徹して堅氷の如し。大なるは十餘斤、小なるは三四斤である。凡そ芝草を求めて名山に入るには、必ず三月、九月を以てする。乃ち山が開けて神藥を出すの月である。必ず(二)三輔の時を以て三奇の吉門を出て山に到り、六陰の日、明堂の時を須ち、靈寶を帶び、白犬を牽き、白雞を抱き、白鹽一斗、及び開山符檄を包み、大石上に著いて呉唐草一把を執つて山に入れば、山神喜んで必ず芝を見ることを得る。須く(三)禹歩して往いて采るべし。王相專和、支干相生の日を以て刻むに骨刀を以てし、陰乾して末にして服すれば乃ち功效がある。若し人至精久齋せずして穢を行し、德薄く、又、入山の術を曉らざれば、その圖を見ると雖も鬼神が以て人に與へず、終に見ることを得ない。

菌芝といふは、深山の中、大木の上、泉水の側に生じ、その狀或は宮室の如く、龍虎の如く、車馬の如く、飛鳥の如く、五色一定せず、凡百二十種あり、それぞれ圖がある。

(二) 三輔、本書ニハ天輔ニ作ル。

(三) 禹歩、抱朴子ニ禹歩ノ法アリ。

木威喜芝といふは、これは松脂が地に淪して千年にして化して茯苓となり、萬歳にしてその上に生ずる小木であつて、その狀は蓮花に似て夜視るに光あり、これを持てば甚だ滑にして、燒けども焦けず、これを帶れば兵を辟け、これを服すれば神仙となる。

飛節芝といふは、千歲の老松の上に生じ、皮中に脂があつて狀は飛形の如し。これを服すれば長生する。

木渠芝といふは、大木上に寄生し、狀は蓮花の如く、九莖一叢となり、味は甘くして辛い。

黃蘗芝といふは、千歲の黃蘗の根下に生じ、縷のやうな細根がある。これを服すれば地仙となる。

建水芝といふは、都廣に生じ、その皮は纓のやう、その實は鸞のやうだ。

參成芝といふは、赤色にして光があり、その枝、葉を扣けば金石のやうな音がある。

樊桃芝といふは、その木は籠の如く、その花は丹蘿の如く、その實は翠鳥の如し。いづれも服食される

千歳芝といふは、枯木下に生じ、根は坐せる人の如く、これを刻めば血があり、その血を兩足に塗れば水を行き形を隱し得る。又、病を治し得る。已上はいづれも木芝である。

獨搖芝といふのは、風なくして自ら動き、その莖は太さ手の指ほどあり、葉は莧に似て根に斗ほどの大魁があり、その周圍には十二箇の細子があつて、相去ること一丈ばかりにして圍遶するもので、高山、深谷に生ずる。これを服すれば神仙となる。

牛角芝といふは、虎壽山、及び吳陵の上に生じ、狀は葱に似て、ただ一本牛角の如くに出て長さ三四尺、色は青い。

龍仙芝といふは、昇龍相負ふ形に似たものだ。

案珠芝といふは、莖は黃で葉が赤く、實は李のやうで紫色である。

白苻芝といふは、梅に似て大雪に花さき、季冬に實る。

朱草芝といふは、九曲、三葉で、葉に實があり、その莖は針のやうなものだ。

五德芝といふは、狀は樓殿に似て五色各〻具はり、莖は方で紫氣がある。已上は

いづれも草芝であつて、百二十種あり、人がこれを得て服すれば神仙となる

玉脂芝といふは、玉のある山に生じ、狀は鳥獸に似て一定の色彩はなく、多くは山水の蒼玉に似て、また鮮明なる水晶のやでもある。

七孔九光芝といふは、水に臨んだ石厓の間に生じ、狀は盤、盌のやうで莖、葉があり、この芝の葉には七孔あつて夜間それを見ると光つてゐる。これを七箇まで食へば身體の七孔が洞徹する。一名螢火芝といふ。

石蜜芝といふは、少室の石戸中の石上に生ずる。終に得難いものだ。

桂芝といふは、石穴中に生じ、桂樹に似たものだ。乃ち石であつて、光明があり、味は辛い。

石腦芝、石中黄はいづれも石芝の類であり、千歳の燕、千歳の蝙蝠、千歳の龜、萬歳の蟾蜍、山中で見る小人はいづれも肉芝の類であつて、凡そ百二十種あるとある。

又、按ずるに、採芝圖には、鳳凰芝は名山の金玉の間に生ずる、一个年間服食すれば鳳凰と倶なふ。燕胎芝といふは、形は葵のやう、色は紫で、燕の象がある。黒

(四) 蠶耗トハ養蠶ノ收穫ノ減耗スルナイフナラン。

雲芝といふは、山谷の陰に生じ、蓋は黒く、理が赤く、莖は墨のやうで、味は鹹く苦い。又、五色龍芝、五方芝、天芝、地芝、人芝、山芝、土芝、石芝、金芝、水芝、火芝、雷芝、甘露芝、青雲芝、雲氣芝、白虎芝、車馬芝、太一芝等といふがあり、名狀は一ならざるものだとある。

張華の博物志には、名山に生ずる神芝は不死の草であつて、上芝は車馬のやうになり、中芝は人の形、下芝は六畜の形だとある。

又、按ずるに段成式の酉陽雜俎には、屋柱に故なくして芝の生じたるは、白きは喪を主り、赤きは血を主り、黒きは賊を主り、黄なるは喜を主る。形の人面の如くなるは財を亡ひ、牛馬の如くなるは遠く役し、龜、蛇の如くなる(四)蠶耗するとある。

時珍は常に疑を有ち、芝といふものは腐朽せる餘氣で生ずるもので、さながら人に生ずる瘤贅のやうなものだ。しかるに古今みなこれを瑞草とし、又、服食すれば仙となるといつてゐるは、誠に迂謬なものだと考へてゐたが、近頃成式の言を讀んで始めて、先づ我が言はんと欲する所とその揆を一にするを得たものと首肯いた。

又、方士は木を濕處に積んで、それに藥を傅ける。すると五色の芝が生える。嘉

靖年間に王金が嘗てこれを生ぜしめ、それを世宗皇帝に獻じたことがあつた。これは昔の人の未だ言はざるところのものであるが、知つて置く必要がある。

青芝　一名　**龍芝**（別錄）〔氣味〕【酸し、平にして毒なし】時珍曰く、五色の芝を五行の味に配してあるが、蓋しこれも理窟からいつただけのものだ。必ずしも事實その味だといふのではない。ただその色に隨つたので、卽ち五畜に於ては羊を以て火に屬し、五果に於ては杏を以て心に配し、いづれも味の苦なる意味をいつたやうなものである。

之才曰く、青、赤、黃、白、黑、紫の六芝は、いづれも薯蕷を以て使とし、髮を配合するが良し。麻子仁、白瓜子、牡桂を配合すれば甚だ人に益あり。常山を惡み、扁青、茵蔯蒿を畏る。

〔主治〕【目を明にし、肝氣を補し、精魂を安じ、仁恕ならしめる。久しく食すれば身を輕くし、老いず、天年を延べ、神仙となる】（本經）【忘れなくし、志を强くする】（唐本）

赤芝　一名　**丹芝**（本經）〔氣味〕【苦し、平にして毒なし】〔主治〕【胸中

の結するもの。心氣を益し、中を補し、智慧を增し、忘れなくなる。久しく食すれば身を輕くし、老いず、天年を延べ、神仙となる】(本經)

黃芝　一名　**金芝**(本經)　[氣　味]【甘し、平にして毒なし】[主　治]【心腹の五邪。脾氣を益し、神を安じ、忠信にして和樂ならしめる。久しく食すれば身を輕くし、老いず、天年を延べ、神仙となる】(本經)

白芝　一名　**玉芝**(本經)　**素芝**　[氣　味]【辛し、平にして毒なし】[主　治]【欬逆上氣。肺氣を益し、口、鼻を通利し、志意を强くし、勇悍ならしめ、魄を安ずる。久しく食すれば身を輕くし、老いず、天年を延べ、神仙となる】(本經)

黑芝　一名　**玄芝**(本經)　[氣　味]【鹹し、平にして毒なし】[主　治]【癃。水道を利し、腎氣を益し、九竅を通じ、聰察ならしめ、久しく服すれば身を輕くし、老いず、天年を延べ、神仙となる】(本經)

紫芝　一名　**木芝**(本經)　[氣　味]【甘し、溫にして毒なし】甄權曰く、平なり。[主　治]【耳聾。關節を利し、神を保し、精氣を益し、筋骨を堅くし、顏色を好くする。久しく服すれば身を輕くし、老いず、天年を延ぶ】(本經)【虛勞を療じ、

痔を治す」(時珍)

附方　新一。「紫芝丸」虚勞で呼吸が短く、胸脇が苦み傷み、手、足が逆冷し、ある時は煩躁し、口乾き、目が物を視るに䀮䀮となり、腹内が時に痛み、飲食慾の減退せるものを治す。この藥は神を安じ、精を保するものである。紫芝一兩半、山芋を焙じ、天雄を炮いて皮を去り、柏子仁を炒り、巴戟天を心を去り、白茯苓を皮を去り、枳實を瓤を去つて麩で炒つて各三錢五分、生地黃を焙じ、麥門冬を心を去つて焙じ、五味子を炒り、半夏を制して炒り、附子を炒つて皮を去り、牡丹皮、人參各七錢五分、遠志を心を去り、蓼實と各二錢五分、瓜子仁を炒り、澤瀉と各五錢を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、毎服十五丸から漸次に三十丸までを溫酒で服す。一日三服。(聖濟總錄)

木耳（本經中品）

和名　きくらげ
學名　Auricularia polytricha, Pat.
科名　きくらげ科

校正　桑根白皮の條下より分出す。

【釋名】 **木檽** 而(ジ)軟(ナン)の二音である。**木菌** 窘(キン)捲(ケン)の二音である。**木㙐** 音は縱(ショウ)である。**樹雞**(韓文) **木蛾** 時珍曰く、木耳は朽木の上に生じて枝、葉がない。これは濕熱の餘氣から生ずるものだ。耳といひ、蛾といふは形を象したものである。檽といふは軟く濕へるものを佳しとするからである。雞といひ、㙐といふは味の似てゐるに因んだものであつて、南楚地方では雞を㙐といふ。菌といふは蜠といふやうな意味であつて、やはり形を象したものだ。蜠とは貝子の名である。或は、地に生えたるを菌とし、木に生えたるを蛾とし、北方の地では蛾といひ、南方の地では蕈といふ。

【集解】(一) 別錄に曰く、五木耳は犍爲の山谷に生ずる。六月の雨の多き時に採つたものを暴乾する。

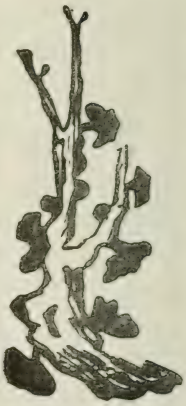
弘景曰く、此には五木耳といつて、顯にこれは何の木のものと指定してないが、ただ老桑樹に生ずる桑耳には青、黃、赤、白のものがあつて、軟で濕ふたものをば一般に采つて葅にする。一向に藥には用ゐない。

恭曰く、桑、槐、楮、楡、柳、これを五木といふ。耳の軟なものはいづれも啖へ

(一) 木村(康)曰く、(原植物)きくらげ(異名)みみたけ Auricularia auricula-Judae, Schr. (Hirneola auricula-Judae (L.) Berk.) あらげきくらげ(異名)きくらげ (Tremellinaceae) Auricularia polytricha (Mont.) Pat.

(Hirneola polytrica, Mont.) 日本菌類圖說 初版一九九、二〇四。

るもので、楮耳は一般に普通に食ふ。槐耳は痔を療する。漿粥を煮て諸木の上に置き、それを草で覆ふて置くと生えるその蕈のことだ。



〔木　耳〕
——諸耳も同じ——

時珍曰く、木耳は各木にいづれも生える。その良なると毒なるとは、やはり必ずその木の性に隨ふものだから審にする必要がある。しかし現に販賣されるものはやはり多くは雜木のものだが、桑、柳、楮、楡の耳が多いさうである。

[氣　味]【甘し、平にして小毒あり】權曰く、蕈、耳は古槐、桑樹上のものが良く、柘木のものがこれに次ぐ。その他の樹上のものは多くは風氣を動し、痼疾を發し、人をして肋下を急せしめ、經絡、背膊を損じ、人を悶せしめる。

藏器曰く、木耳は、惡蛇虫がその下を通り過ぎたものは毒がある。楓木上に生えたものは人をして笑つて止まざらしめる。採つて歸つたとき色の變じてゐるものは有毒である。夜中視て光のあるもの、爛れんとして蟲の生ぜぬもの、いづれも有毒

であるが、いづれも冬瓜蔓を生で擣いた汁がそれを解す。

時珍曰く、按ずるに、張仲景は『木耳は、赤色のもの、及び仰いで生えたものはいづれも食つてはならぬ』といつた。

主治　【氣を益し、飢ゑず、身を輕くし、志を强くする】（本經）【穀を斷ち、痔を治す】（時珍）

發明　頴曰く、ある痔を患ふて諸藥の效を奏せなかつたものが、木耳を羹に煮て食つて癒えた。極めて效驗がある。

時珍曰く、按ずるに、生生編に『柳蛾は胃を補し、木耳は精を衰へしめる』とある。それは、老柳の蛾は能く胃を補し、氣を理し、木耳は朽木から生ずるので、一陰の氣を得てゐるから精を衰へしめ、腎を冷すの害があることをいつたのだ。

附方　新六。【眼に冷涙を流すもの】木耳一兩を燒いて性を存し、木賊一兩と末にし、二錢づつを淸米泔で煎じて服す。（聖濟方）【血注脚瘡】桑耳、楮耳、牛屎菰各五錢、胎髮灰——男には女のもの、女には男のものを用ゐる——三錢を研末し、油で和して塗る。或は乾いたものを塗る。（奇效良方）【崩中漏下】木耳半斤を烟が出

るまで炒つて末にし、每服二錢一分、頭髮灰三分、共二錢四分を二十四氣に應じて好酒で調へて服し、汗を出す。(孫氏集效方)【新、久の洩痢】乾木耳一兩を炒り、鹿角膠二錢半を炒つて末にし、一日二回、三錢づつを溫酒で調へて服す。(御藥院方)【血痢、下血】木耳を炒り研つて五錢を酒で服するが良し。また井華水でも服す。或は水で煮て鹽醋で食ひ、汁で送下する。(普濟方)【一切の牙痛】木耳、荊芥等分を湯に煎じて頻りに漱ぐ。(普濟方)

桑耳〔釋名〕 **桑檽**(唐本) **桑蛾**(宋本) **桑雞**(綱目) **桑黃**(藥性) **桑臣**(藥性) **桑上寄生** 弘景曰く、斷穀の方に、桑檽をまた桑上寄生と呼ぶものとは同名異物である。

時珍曰く、桑檽以下はいづれも軟耳の名稱、桑黃以下はいづれも硬菰の名稱で、その功力、性能の點に至つては同一である。

〔氣味〕【甘し、平にして毒あり】 詵曰く、寒にして毒なし。大明曰く、溫にして微毒あり。權曰く、桑、槐の耳は甘く辛し、平にして毒なし。

〔主治〕【黑きものである。婦人の漏下赤白、汁血病、癥瘕積聚、陰痛、陰陽寒

熱、子無きものに主效がある】(本經)【月水不調を療ず。その黃熱し、陳白なるものは、久洩を止め、氣を益し、飢ゑず。その金色なるものは、癖飲、積聚の腹痛、金瘡を治す】(別錄)【婦人の崩中帶下、月閉血凝、產後血凝、男子の痃癖を治す】(甄權)【血衄、腸風瀉血、婦人の心腹痛を止める】(大明)【五臟を利し、腸、胃の氣を宣し、毒氣を排す。丹石を服する人の發熱を壓するには、葱、豉を和して羹にして食ふ】(孟詵)

附方　舊四、新十。

【少小の鼻衄】小し勞すると出るには、桑耳を熬り焦して末に擣き、發する時毎に杏仁大ほどを用ゐて鼻中を塞ぐ。數回にして斷ち得るものだ。(肘後方)【五痔下血】桑耳を羹に作つて空心に飽食し、三日に一回試み、孔だ卒に痛んで烏啄のやうな狀態になるを待ち、大、小豆各一升を合せ擣いて二箇の囊に入れ、蒸して熱したとき更互にそれに坐すれば瘥える。(聖惠方)【脫肛瀉血】止まぬには、桑黃一兩、熟附子一兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを米飲で服す。(聖惠)【血淋疼痛】桑黃、槲白皮各二錢を水で煎じ、一日一回服す。(聖惠方)【月水不斷】肉色が黃瘦し、血が竭くれば暫時止んで數日にしてまた發し、小し勞

すれば直ちに劇しくなり、久しき疾にして治期を失したるには、いづれもこれを服するがよし。桑黃を焙じて研り、二錢づつを食前に熱酒で服す。一日二服（普濟方）【崩中漏下】桑耳を黑く炒つて末にし、酒で方寸匕を服し、一日三服して效を取る。（千金方）【赤白帶下】桑耳を切碎いて酒で煎じて服す。（蘇頌圖經）【遺尿し、且つ澀るもの】桑耳を末にし、一日三回、酒で方寸匕を服す。（聖濟總錄）【留飮、宿食】桑耳二兩、巴豆一兩を皮を去り、五升の米の下で蒸してから、棗膏を和して擣いて麻子大の丸にし、一二丸づつを服して通じのついたとき止める（范汪方）【心下の急痛】桑耳を燒いて性を存し、熱酒で二錢を服す（集簡方）【瘰癧の潰爛せるもの】桑黃菰五錢、水紅豆一兩、百草霜三錢、青苔二錢、片腦一分を末にし、雞子白で調へて傅け、車前、艾葉、桑白皮の煎湯で洗ふ（纂奇方）【咽喉痺痛】五月五日に桑上の木耳の白くして魚鱗の如くなるものを採收し、使用せんとするに臨み、擣き碎いて綿で彈子大に包み、蜜湯に浸して含む。立ろに效がある（便民方）【顏面の黑斑】桑耳を焙じて研り、一錢づつを每食後に熱湯で服す。一个月にして癒える（摘玄方）【足趾の肉刺】先づ湯で浸して一層を刮り去り、黑木耳を貼る。自ら消爛して痛まなくな

る。(近效方)

槐耳【釋名】**槐檽**(唐本) **槐菌**(唐本) **槐雞**(蜀本) **赤雞**(綱目) **槐蛾**　恭。曰く、これは槐樹上の菌である。堅くして桑耳の如くなるものを取るべきものである。權曰く、煮た漿粥を槐木上に置き、草で覆ふて置いて生ずる蕈耳である。

【氣味】【苦く辛し、平にして毒なし】【主治】【五痔、脫肛、下血、心痛、婦人の陰中瘡痛】(蘇恭)【風を治し、血を破り、力を益す】(甄權)

【附方】舊二、新四。【腸痔下血】槐樹上の木耳を末にし、一日三回、方寸匕を飲で服す。(肘後方)【崩中下血】年月の遠近を問はず、槐耳を燒いて性を存して末にし、方寸匕づつを溫酒で服す。(産寶方)【産後の血疼】死せんとするには、槐雞半兩を末にし、酒で濃煎して飲服する。立ろに癒える(婦人良方)【蚘蟲の心痛】槐木耳を燒いて性を存して末にし、水で棗ほどを服す。若し止まぬときは熱水一升を飲む。蚘蟲は立ろに出る。(張文中備急方)【月水不斷】勞損し黃瘦し、暫時止んでまた發し、小し勞すると直ちに劇しくなるには、槐蛾を黃に炒り、赤石脂と各一兩を末にし、二錢を食前に熱酒で服す。桑黃でもよし(聖惠方)【臟毒下血】槐耳を燒いて二兩、乾

漆を燒いて一兩を末にし、一錢づつを溫酒で服す。(聖濟總錄)

楡耳 八月に採る。 主治 【人をして飢ゑざらしめる】(時珍)

附方 新一。【服食方】淮南萬畢術に『八月に楡檽を美酒に漬けて曝し、靑粱米、紫莧實と共に蒸熟して末にし、三指撮づつを酒で服すれば、人をして辟穀して飢ゑざらしめる』とある。

柳耳 主治 【胃を補し、氣を理す】(時珍)

附方 新一。【反胃吐痰】柳樹蕈五七箇を湯に煎じて服すれば癒える。(活人心統)

柘耳 釋名 **柘黃** 主治 【肺癰で、膿血を欬唾して腥臭なるには、膿の成りたると未だ成らざるとを問はず、一兩を研末し、百齒霜二錢と共に糊で梧子大の丸にし、米飲で三十丸を服す。效甚だ捷だ】(時珍)

楊、櫨耳 藏器曰く、(二)南山に產する。

氣味 【平にして毒なし】 主治 【老血結塊 血を破り、血を止める。煮て服す】(藏器)

(二) 南山、即チ終南山。

杉菌（宋圖經）

和名　すぎたけ
學名　Pholiota squarrosa, Fr.
科名　擔菌科

【集解】（一）頌曰く、杉菌は宜州に産する。積年の杉木上に生じ、菌のやうな狀態のものだ。採取に一定の時期はない。

【氣味】【甘く辛し、微溫にして毒なし】【主治】【心脾氣疼、及び暴心痛】（蘇頌）

皂莢蕈（綱目）

和名　さいかちたけ
學名　未詳
科名　きくらげ科

【集解】（二）時珍曰く、皂莢樹上に生える木耳であつて、食へないものだ。採收して焙じ乾して用に備へる。

【氣味】【辛し、毒あり】【主治】【積垢で痛むには、泡けて湯を飲む。微泄して效がある。なほ已まぬときは再服する。又、腫毒の初期を治するには、醋に磨

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕Polyporus arcularis, Fr.

（二）木村（康）曰ク、〔原植物〕Epiphyteon Gledit-schia chinensis, Lam. Armillaria mellea, Vahl.

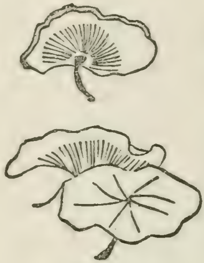
つて塗るが良し】（時珍）

附方　新一。【腸風瀉血】皂莢樹上の蕈を瓦で焙じて末にし、一錢づつを溫酒で服す（許學士本事方）

香蕈（日用）

和名　かうしん
學名　Agaricus Bretschneideri, Kalich et Thum.
科名　褶菌科

釋名　時珍曰く、蕈の文字は覃に從ふ。覃は延であつて、蕈は味が雋永にして覃延だといふ意味を含めたものだ。



〔香　蕈〕
——諸蕈菌蕈も同じ——

集解（一）　瑞曰く、蕈は桐、柳、枳椇の木上に生ずる。紫色のものを香蕈と名け、白色のものを肉蕈と名ける。いづれも濕氣の薰蒸に因つて發生するもので、山僻の場所に生えたものには人を殺す毒がある。

頴曰く、香蕈は深山の爛れた楓木上に生ずる。菌よりも小さくして薄く、黄黑色

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕Agaricus Bretschneideri, Kolich. et Thum.（Fungi）しいたけ

だ。味が甚だ香美であつて、最も佳品である。

時珍曰く、蕈の品種は一樣でない。宋の人陳仁玉の著した菌譜は甚だ詳にされてあるから、此にその略を錄して置かう。

芝、菌はみな氣茁なり、商山の茹芝より五臺の天花、亦た羣黄仙居の介に甲たるもの乎。天台、括蒼の間は叢山天に入り、仙靈の所宮にして爰に異菌を產し、林居、巖栖の者左右に之を芼む。乃ち蓁莧の至腴なり。近ごろ或は以て王公に羞め、玉食に登す。一に曰く、合蕈、又、台蕈と名く。台の韋羌山に生ず。寒極まり雪收まり、春氣動かんと欲して、土鬆にして芽活す。比れ菌候なり。其の質、外は褐色にして肌理玉潔。芳香、韻味、一たび釜鬲に發すれば百步に聞ゆ。山人の曝乾して以て售るものは、香味生なるものに減ず。他山にも產すと雖も、其の柄高くして香劣つて及ばず。二に曰く、稠膏蕈、孟溪の諸山に生ず。秋中、雨零ち露浸して山膏、木腴を釀し、發して菌花となり、絕頂の樹杪に生ず。初は蕊珠の如く圓く、瑩にして輕酥、滴乳に類し、淺黄白色にして味尤も甘し。已にして乃ち傘を張れば、大いさ掌の如くにして味頓に渝る。春時も亦た生ずれども、

而も膏液少し、これを食するの法は、鼎に下して以て沸し、漉起して衆味を參和す。而して特に酒を釜うす。切に攪動すること勿れ、則ち涎腥にして食ふべからざればなり。亦た蒸熟して遠きに致すべし。三に曰く、松蕈。松陰に生ず。采るに時なし。凡そ物の松より生ずるものは愛すべからざるものなし。四に曰く、麥蕈。溪邊、沙壤の中に生ず。味殊に美絶なり。蘑菰に類す。五に曰く、玉蕈。初寒の時に生ず。潔皙にして愛すべし。羹と作せば微に韌し。俗に寒蒲蕈と名く。六に曰く、黄蕈。山中に叢生す。黄色なり。俗に黄纘蕈と名け、又、黄猻と名く。七に曰く、紫蕈。赭紫色なり。山中に產す。下品たり。八に曰く、四季蕈。林木中に生ず。味甘くして肌理粗峭なり。九に曰く、鵞膏蕈。高山中に生ず。状鵞子に類し、久しくして繖開す。味殊に甘く、滑なること鵞膏に減せず。然れども杜蕈と相亂る。愼まずんばあるべからず。杜蕈は土菌なり。

氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【氣を益し、飢ゑず、風を治し、血を破る】(呉瑞)【松蕈は、溲の濁つて禁ぜざるを治す。これを食ふが有效である】

(菌譜)

葛花菜（綱目）

和名　くずたけ
學名　未詳
科名　未詳（菌類）

(一)［釋名］**葛乳**　時珍曰く、諸名山にいづれもあるが、ただ太和山で採取して、これは葛の精華だといつてゐる。秋霜が空に浮ぶとき芝菌のやうに地上に湧生する。その色は赤く、脆だ。蓋し蕈の類である。

［氣味］【苦く甘し、毒なし】［主治］【酒を醒し、酒積を治す】（時珍）太和志。

天花蕈（日用）

和名　ひらたけ
學名　Pleurotus ostreatus, Sacc.
科名　榻菌科

［釋名］**天花菜**

(二)［集解］瑞曰く、天花菜は山西の五臺山に出る。形は松花のやうで大きく、香氣は蕈のやうで色が白い。食つては甚だ美味である。

時珍曰く、五臺には蛇が多く、蕈はその氣を感じて生ずるから味は美いが益する

(一) 木村（康）曰く、〔原植物〕Agaricus sp.

(二) 木村（康）曰く、〔原植物〕Agaricus ostreatus, Jacq.

ところがない。その價格はかなり高い。段成式の酉陽雜俎に『代北に樹雞といふがある。柸棬(にいくわん)のやうなもので、俗に胡孫眼と呼ぶ』とあるがこの物の類かと思ふ。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、正要には『有毒』とある。

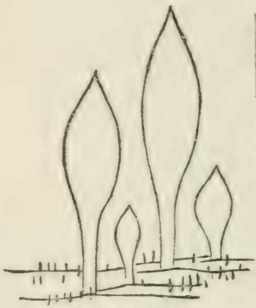
【主治】【氣を益し、蟲を殺す】（吳瑞）

蘑菰蕈（綱目）

和名　ふでたけ
學名　未詳
科名　未詳（菌類）

【集解】(一)時珍曰く、蘑菰(まこ)は山東、淮北の諸處に産する。桑、楮の諸木を土中に埋めて米泔を澆(そそ)ぎ、菰の生えるを待つて採るのであつて、長さ二三寸、本が小さく末が太く、色白く、柔軟なもので、その中は空虛だ。形狀はまだ開かぬ玉簪花(ぎよくさんくわ)のやうである。俗に雞腿蘑菰と名ける。

【釋名】肉蕈



〔蘑菰蕈〕

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕 Clavaria pistillarius, L. (Fungi) ひらたけ

それは味が雞のやうだといふ意味だ。形狀が羊肚のやうで蜂窠眼のある一種をば羊肚菜と名ける。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】正要に曰く、毒あり。氣を動じ、病を發す。

【主治】【腸、胃を益し、痰を化し、氣を理す】（時珍）記載は生生編にある。多食してはならぬ。

雞㙡（綱目）

和名　けいしよう
學名　Clavaria corniculata, Schaeff.
科名　はゝきたけ科

【釋名】雞菌　時珍曰く、南方では雞㙡といふ。いづれもその味が似てゐるからいつたものだ。

【集解】(一) 時珍曰く、雞㙡は雲南に產する。沙地の間に生える丁蕈であつて、脚が高く、頭が繖のやうに開いたものだ。土地の者は採取したものを烘いて遠方へ送り、方物に充てる。茶菓子や肉を烹るに用ゐていづれも宜し。氣味はいづれも香蕈に似たものだが、その風韻に及ばない。又、廣西の橫州に雷菌といふが出る。雷が

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Clavaria corniculata, Schaeff. (Fungi)

鳴り渡ると生えるもので、疾く采らねばならず、やや遅れると腐り、或は老いて了ふ。それ故にかく名けたのだ。羹にして甚だ美味なものだ。やはり雞𡎺の屬のやうなものである。この數種は値段がいづれも高い。

〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【胃を益し、神を清し、痔を治す】（時珍）

舵菜（綱目）

和名　かぢたけ
學名　未詳
科名　未詳

（一）〔集解〕時珍曰く、これは海上航行の船舶の舵上に生ずる菌であつて、やはり多く得られないものだ。

〔氣味〕【鹹く甘し、寒にして毒なし】〔主治〕【癭結氣、痰飲】（時珍）

土菌（拾遺）

和名　ごもくたけ
學名　未詳
科名　未詳（菌類）

〔校正〕草部より此に移し入る。

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕Mushroom

（一）仙人帽　きぬがさたけ

釋　名　**杜蕈**（菌譜）　**地蕈**（拾遺）　**菰子**（食物）　**地雞**（爾雅）　**獐頭**　藏器曰く、地生のものを菌といふ。木生のものを檽といひ、江東地方では蕈と呼ぶ。爾雅には『中馗は菌なり』とあり、孫炎の註に『地蕈子なり。或は地雞といひ、また獐頭ともいふ』とあり、郭璞の註には『地蕈は釘蓋に似たり。江東では土菌と名ける。喫へるものだ』とある。凡そ菌の地中から出るものはいづれも瘡疥に主效があり、牛糞上の黑菌が就中佳し。燒灰地上に秋雨が降つて生えた重臺の菌ならばそれは（一）仙人帽と名けるもので、大いに血病に主效がある。

時珍曰く、中馗とは神の名であり、槌の名であつて、この菌は釘上が繖のやうになり、その狀態が槌、及び中馗の帽のやうなところからかく名けたものだ。

氣　味　【甘し、寒にして毒あり】　詵曰く、菌子には數種あるが、槐樹上のものが良し。野田中のものは毒があつて人を殺し、又、多くは冷氣を發して人をして腹中が微微として痛ましめ、五臟の風を發し、經脈を擁し、痔病を動じ、人をして昏昏として多睡せしめ、背膊、四肢を無力ならしめる。

藏器曰く、菌は、冬、春には毒なく、夏、秋には毒がある。蛇虫がその下を通る

（三）原書ノ未爲不知味ノ不ノ字可疑。

ことがあるからだ。夜中光あるもの、爛れんとして蟲なきもの、煮ても熟せぬもの、煮てから人の姿を映して見て影なきもの、上に毛があつて下に紋のないもの、仰ぎ卷いて赤色のもののいづれも有毒で人を殺す。その毒に中つたきは、地漿、及び糞汁で解す。

○穎曰く、凡そ菌を煮るには、薑屑、飯粒を投じて見る。若し色が黑くなるものならば人を殺すが、黑くならぬときは毒がない。

○○時珍曰く、按ずるに、菌譜に『杜蕈は土中に生ずる。山中の鵝膏蕈と相亂るもので、俗に、毒蠚の氣から成るもので、これを食へば人を殺すといふ。甚だ美味だが惡毒があるので、肉を食つて馬肝を食はざれば、（三）未だ味を知らずとなさずといふやうなものだ。凡そその毒に中れば必ず笑つて止まぬ。これを解するには、苦茗、白礬を新水で勻ぜて併せて咽む。立ろに癒えぬといふことなし』とある。又、按ずるに、楊士瀛の直指方には『廣南地方では、毒蛇を殺して草で覆ひ、それに水を灑ぎ、數日經つて生える菌を採つて乾して末にし、それを酒に入れて人を毒する。その人が再び酒を飲む場合に毒が發して立ろに死ぬ』とある。又、陳氏の拾遺に『南夷で

(三) 鬼蓋　きつねのからかさ
學名 Dictyophora phalloidea, Desv.

は胡蔓草で人を毒し、その人が死んでから屍を樹に懸け、汁が地上に滴つて生ずる菌子を取収め、それを菌薬と名ける。人を毒することの至烈なものだ』とある。これはいづれも心得て置くべきことだから此に併記する。○馬勃も菌類だが草部に記載した。

【主治】〔灰に焼いて瘡疥に傅ける〕（藏器）

【附方】新一。〔疔腫〕黒牯牛が糞した石上に菌子の生えるを待つて焙じ乾し、豨薟草と等分を末にし、竹筒の兩頭を去つたものを疔上に合せて緊く縛り、水で末一錢を和してその筒中に入れる。少頃して沸起し、それで根が抜出する。なほ出ぬときは再び試み、二三回試みる。（醫學正傳）

【附録】(三)鬼蓋（別録）有名未用に曰く、味甘し、平にして毒なし。小兒の寒熱癇に主效がある。垣墻の下に叢生する赤色のもので、朝生えて暮に枯死する。一名朝生といふ。

弘景曰く、一名朝生といふ。今の鬼繖のことだ。

藏器曰く、一名鬼屋といふ。陰濕の場所に生じ、菌のやうなもので、その蓋が黒

(四) 地芩　あさたけ

(五) 鬼筆　きつねのゑかきふで
學名　Mutinus sp.

くして莖が赤い。醋で和して腫毒、惡瘡、馬脊腫に傅ける。

杜正倫曰く、鬼繖は小毒あり。夏日に雨が降つて糞堆に聚生するもので、日光に當ると消ける。黒いものだ。

時珍曰く、これもやはり土菌の類であつて、朝生えて夕に死するものだ。燒灰は疔腫を治す。鍼で四邊を刺し破つて灰を内に納れる。一夜經てば根が出る。

(四)**地芩**　別錄に曰く、味苦し、毒なし。主效は小兒の癇、邪を除き、胎を養ひ、風痺で洗洗として寒熱するもの、目中の青瞖、婦人の帶下。腐木、積草の處に生え、大雨があると生ずる。蓋は朝生のやうで黄白色である。四月に採る。

時珍曰く、これは鬼蓋にして色の黄白なるものである。その功も相近い。

(五)**鬼筆**(拾遺)　藏器曰く、鬼筆は糞穢の處に生ずる。頭は筆のやう、色は紫で、朝生えて暮に死する。朝生暮落花と名け、小兒は狗溺臺と呼ぶ。主治は瘡疽、䘌疥、癰瘻である。いづれも乾して研末し、油で和して塗る。凡そ菌にして地より出るものは、いづれも瘡疥に主效があり、牛糞上の黒菌が就中佳し。

時珍曰く、これもやはり鬼蓋の類だが繖のないもので、紅紫色で鬆かで虛し、花

のやうな狀態のものだ。故に花の名があるのである。研末して下疳瘡に傅ける。

竹蓐（食療）

和名　すずめのいひ、あかごろも
學名　Stereostratum corticioides, Magn.
科名　くろはしぶ病菌科

【校正】拾遺の竹肉を併せ入る。

【釋名】竹肉（拾遺）竹菰（綱目）竹蕈　時珍曰く、草から更に生えるものを蓐（にく）といふ。溽濕の氣を得て成るものだ。陳藏器の本草に竹肉としてあるはその味に因（ちな）んだのだ。

【集解】(一)詵曰く、慈竹の林には、夏期に雨に逢ひ、滴る汁が地に著いて鹿角に似た蓐が生える。白色で食へるものだ。

藏器曰く、竹肉は苦竹の枝上に生える。雞子のやう、肉臠（にくれん）に似たもので、大毒がある。灰汁で三回煮て煉り、然る後に普通の菜につけて茹（に）て食ふ。煉つて熟せぬものは人の喉を刺戟して出血し、手の爪が盡く脱ける。別に功用はあるであらうが、一般にまだ盡く識られない。

(一) 木村（康）曰ク、〔原植物〕すずめのたまごい　Puccinia corticioides, Berkl. et Br. (Fungi)

時珍曰く、これは卽ち竹菰(ちくこ)のことであつて、朽ちた竹根上に生じ、形狀は木耳のやうで紅色のものだ。段成式の酉陽雜俎に『江淮に竹肉といふがある。大いさは彈丸ほど、味は白樹雞(はくじゆけい)のやうだ』とあるがこの物だ。ただ苦竹に生えたものだけが有毒なのだ。



〔蓐　竹〕
——茲　竹——

〔氣味〕〔甘く鹹し、寒にして毒なし〕 藏器曰く、苦竹肉は大毒あり。〔主治〕【一切の赤、白痢には、薑醬で和して食ふ】(孟詵)【苦竹肉を灰汁で鍊つて食へば、三蟲の毒邪の氣を殺し、老血を破る】(藏器)

雚菌

音は桓郡(クワンギン)である。　(本經下品)　和名　なぎたけ　學名　未詳　科名　襴菌科？

〔校正〕 草部より此に移し入る。

【釋名】 **雚蘆**（本經） 時珍曰く、雚の字は萑と書くべきである。これは蘆、葦の屬であつて、この菌はその下に生ずるからかく名けたのである。萑ならば音は觀（クワン）であつて鳥の名である。萑、蘆とは無關係だ。

【集解】（一） 別錄に曰く、雚菌は東海の池澤、及び渤海、章武に生ずる。八月に採つて陰乾する。

弘景曰く、北來に出る。此にはやはりないもので、形狀は菌に似たものだ。鸛の屎から化生するものだといひ、一名鸛菌といふ。單に末にし、猪肉臛に和して食へば蚘蟲を遣り得る。

恭曰く、雚菌は今は渤海に出る。蘆、葦、澤中の鹹鹵の地には自然にこの菌があるものだ。鸛の屎から化生するものではない。その菌は色白く、輕虛なもので、表裏相似て多くの菌と同じくない。蚘を療ずるに效がある。

保昇曰く、今は滄州に產する。秋雨が順調に降るとあるもので、旱天や久しい霖雨の時には稀だ。日光で乾したものが良し。

【氣味】 【鹹し、平にして小毒あり】 別錄に曰く、甘く、微溫なり。權曰く、

（一） 木村（康）曰ク、
〔原植物〕Mushroom

苦し、酒と配合するが良し。雞子を畏る。【主治】【心痛。中を温め、長蟲、白癬、蟯蟲、蛇螫の毒、癥瘕諸蟲を去る】(本經)【疽蝸。蚘蟲、寸白、惡瘡を去る】(別錄)【腹内の冷痛を除き、白禿を治す】(甄權)

【附方】舊一。【蚘蟲の心を攻むるもの】刺すが如く、淸汁を吐くものには、雚菌一兩を末に杵き、羊肉臛に和して食ふ。一日一頓にして大いに效がある。(外臺祕要)

【附錄】(二)**蜀格** 別錄に曰く、味苦し、平にして毒なし。寒熱、痿痺、婦人の帶下、癰腫に主效がある。山陽に生ずる。雚菌のやうで刺がある。

(一)地耳(別錄)

和名 かもかはのり、はたけあなさ
學名 Nostoc commune, Vauch.
科名 ねんじゆも科

【校正】有名未用より此に移し入る。

【釋名】**地踏菰**(綱目)

(二)【集解】別錄に曰く、地耳は丘陵に生ずる。碧石靑のやうなものだ。

時珍曰く、地耳もやはり石耳の屬であつて地に生えるもので、形狀は木耳のやう

(二)蜀格　はりたけ

(一)本草綱目啓蒙ニくろこト云フ菌ニ充テアルハ非デアル、地耳ハ下ノモノニ充ツルヲ正當トスト牧野博士言ハル、

(二)木村(康)曰ク、〔原植物〕Mushroom

だ。春、夏に雨中に生えるもので、雨後に早く採る。日光を見ては採るに堪へなくなる。俗に地踏菰（ちたふこ）と名けるものがこれである。

［氣味］【甘し、寒にして毒なし】［主治］【目を明にし、氣を益し、人をして子あらしめる】（別錄）

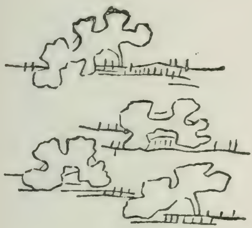
石耳（日用）

和名　いはたけ
學名　Gyrophora esculenta, Miyos.
科名　いはたけ科

［釋名］**靈芝**（靈苑方）

［集解］（一）瑞曰く、石耳は天台、四明、河南、宣州の黄山、巴西邊徼（にせいへんけう）の諸山の石崖上に生じ、遠望すると烟のやうだ。

時珍曰く、廬山にも多い。形狀は地耳のやうだ。山僧は採つて曝したものを遠方への贈物にする。沙土を洗ひ去つて茹（じよ）にするが、木耳に勝る佳品である。



〔石耳〕
——地耳も同じ——

（一）木村（康）曰く、〔原植物〕いはたけ Gyrophora esculenta, Miyoshi. Gyrophora rellea, Ach. (Lichnes) Leptogium fuliginosum, Mull. Umbilicaria esculenta, Mink.

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕いはたけハジロフォール酸及ビレカノール酸ヲ含有ス。朝比奈、九谷—藥誌一九二五(五一九)四二三。

(二)[氣味]【甘し、平にして毒なし】穎曰く、冷なり。段成式曰く、熱なり。

[主治]【久しく食すれば色を益し、老に至っても改らず、人をして飢ゑざらしめ、大、小便を少くする】(呉瑞)【目を明にし、精を益す】(時珍)

[附方]新一。【瀉血、脱肛(だつこう)】石耳五兩を炒り、白枯礬一兩、密陀僧(みつたそう)半兩を末にし、蒸餅で梧子大の丸にし、二十丸づつを米飲で服す。(普濟方)

本草綱目菜部第二十八卷 終

本草綱目果部　第二十九卷

本草綱目果部目錄第二十九

李時珍曰く、木の實を果といひ、草の實を蓏といふ。熟せるは食ふべく、乾かしては脯とすべく、(一)豐儉には以て時を濟ふべく、疾苦には以て藥に備ふべく、穀物の食料を輔助して以て民生の營養となるものだ。故に素問には『五果を助となす。五果は五味、五色を以て五臟に應ず。李、杏、桃、栗、棗是なり』とあり、古書には、五穀の收、否を知らんと欲せば但だ五果の盛、衰を看るとある。――李は小豆を主とし、杏は大麥を主とし、桃は小麥を主とし、栗は稻を主とし、棗は禾を主とする――禮記の內則には、果品、蔆椇、榛瓜の類を列してあり、周官の(二)職方氏は、五地の物を辨じ、山林は皁物――柞、栗の屬である――に宜く、川澤は膏物――蔆、芡の屬である――に宜く、丘陵は核物――梅、李の屬である――に宜しとあり、甸師は野果蓏を掌り、場人は果蓏珍異の物を樹ゑ、時を以てこれを藏むとある。これを觀れば、果蓏の土產には常に性、味、良、毒の異がある、嗜欲をば縱にするが、その物に就ての理をば知らぬといふことは容されない。是に於て草、木の實にして果、蓏としての名稱あるものを

(一) 豐儉ハ豐作ノ年ト凶作ノ年トヲイフ。

(二) 職方氏當作大司徒。

集めて果部として、凡そ一百二十七種を五果、山果、夷果、味、蓏、水の六類に分類記述した。舊本の果部は三品共五十三種であるが、本書では一種を移して菜部に入れ、四種を草部に入れ、木部より三十一種を移入し併記し、草部より四種を移し入れ、菜部より一種を移し入れ、外類より四種を移し入れた。

神農本草經十一種　梁の陶弘景註。　嘉祐本草二種　宋の掌禹錫。
名醫別錄十七種　同上。　圖經本草五種　宋の蘇頌。
唐本草十一種　唐の蘇恭。　日華本草二種　宋人大明。
本草拾遺二十種　唐の陳藏器。　食物本草一種　明の汪穎。
海藥本草一種　唐の李珣。　日用本草一種　元の吳瑞。
食性本草一種　唐の陳士良。　本草會編一種　明の汪機。
食療本草一種　唐の孟詵。　本草綱目三十三種　明の李時珍。
開寶本草十九種　宋の馬志。

第二十九巻以下新引用文獻

「ウ植」トシテ頁數ヲ示スモノハ「ヴエーマー」ノ植物成分第二版（上巻一九二九年下巻一九三一年發刊）C. Wehmer: die Pflanzenstoffe zweite Auflage ヲ略示ス。

「日食」トシテ略示スルモノハ佐伯矩他三氏共著ニナル新撰日本食品成分總攬（一九三一年南江堂發行）ヲイフ。

「滿大藥」トシテ略示スルモノハ久保田晴光、岡西爲人兩氏共編ノ滿洲醫科大學所藏和漢藥標本目錄（一九三一年）ヲイフ

「ド藥」トシテ略示スルモノハ「ドラーゲンドルフ」ノ藥用植物 (Dragendorf: Heilpflanzen, 1898)ヲイフ。

「準局方」トシテ略示スルモノハ日本藥學會編、日本準藥局方（一九三〇）ヲイフ。（木村康一）

附註

魏吳普本草　李當之本草　宋雷斅炮炙論　齊徐之才藥對

唐甄權藥性　孫思邈千金　唐蕭炳四聲　楊損之刪繁

蜀韓保昇重註　宋寇宗奭衍義　唐愼微證類　金張元素珍珠囊

元李杲法象　王好古湯液　朱震亨補遺　明寧原食鑑

周憲王救荒　陳嘉謨蒙筌

果の一　五果類十一種

李 別錄 徐李を附す。　杏 別錄　巴旦杏 綱目　梅 本經

榔梅 綱目　桃 本經　栗 別錄　天師栗 綱目

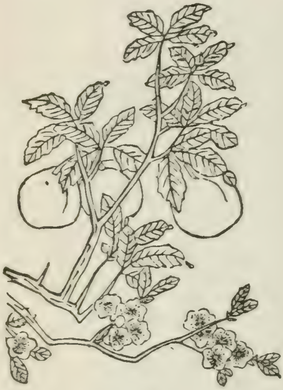
棗 本經　仲思棗 開寶　苦棗 食性

右附方　舊一百十三　新一百零八。

果の一　五果類十二種

李（別錄下品）

和名　すもも
學名　Drunus salicina, Lindl.
科名　いばら科（薔薇科）


〔李〕

釋名 **嘉慶子**　時珍曰く、按ずるに、羅願の爾雅翼に『李は木にして子の多いものだ。故に字は木と子とに從ふ』とあるが、竊に謂ふに、木にして子の多いものは多くある。何ぞ獨り李だけを木子と稱せねばならぬわけがあらうか。按ずるに、素問に『李は味酸し、肝に屬す。東方の果なり』とある。これで見ると、李は五果の中に於て木に屬するから、專らその名稱を得たものだ。今一般に乾李を嘉慶子と呼ぶが、按ずる

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕すもも　せいやうすもも Prunus communis, Huds. (P. domestica, L.) (Rosaceae)
〔備考〕滿洲産ハ P. trifolia, Roxb. var. salicina, Lindl. ヲ李トイヒ、牛家屯、董家屯、草河口、鶏冠山、土們嶺ニ産ス。(滿洲植物誌)

に、韋述の兩京記に『東都の嘉慶坊に美なる李があつた』とある。世間でそれを嘉慶子と稱し、その呼び名が久しく經つと深い慣はしになつて、出所の如何が一向に判らなくなつたものである。梵書には李の名を居陵迦といつてある。

(二)【集解】弘景曰く、李の類は甚だ多く、京口にある麥李は麥の秀る時に熟し、小さいが肥えて甜く、核は藥に入れない。姑熟にある南居李は核を解いて見ると杏の子のやうな形のもので、藥に入れて佳し。

志曰く、李には綠李、黃李、紫李、牛李、水李があつて、いづれも甘美にして食へるものだが、核は使用の役に立たぬ。野李といふ味の苦いものがあつて、核仁を藥に入れる。

頌曰く、李は處處にある。郭璞註爾雅に『休とは實のない李のことで、一名趙李といふ。痤——音は磋(サ)——とは接慮李のことで、一名を麥李といひ、細く熟して溝道があり、麥と同時に熟する。駁とは赤李のことだ』とある。陶氏の所謂南居李といふは今は一向に判らないが、醫家ではただ核の杏核のやうなものを用ゐる。

宗奭曰く、李樹は大なるは高さ一丈ばかりある御李子といふ一種は、大いさ櫻桃

ほどの紅黄色のもので、諸李に先じて熟する。醫家で用ゐることはやはり稀だ。

時珍曰く、李は、葉は綠で花は白く、樹は久しきに耐へ、その種類は百に近い。その子は大なるは杯ほど卵ほどあり、小なるは彈ほど櫻ほどのもので、その味には甘、酸、苦、澁の數種があり、その色には青、綠、紫、朱、黄、赤、縹綺、胭脂、青皮、紫灰の異ひがあり、その形には牛心、馬肝、柰李、杏李、水李、離核、合核、無核、匾縫の異ひがあり、その産地には武陵、房陵の諸李があり、早いものでは麥李、御李は四月に熟し、遲いものでは晩李、冬李は十月、十一月に熟し、又、季春李といふ冬花が咲いて春實るものがある。按ずるに、王禎の農書には『北方の御黄李といふ一種は、形が大きくして肉が厚く、核が小さく、甘香にして美味である。江南、建寧の均亭李といふ一種は、紫にして肥えて大きく、味は甘くして蜜のやうだ。擘李といふは熟すると自ら裂ける。餻李といふは肥えて餻のやうに粘る。いづれも李の嘉美なるものだ』とある。今は一般に鹽を用ゐて曝し、糖で貯藏し、蜜煎にして果にするが、ただ曝乾した白李だけが益あるものだ。その法は、夏期に李の色が黄になつたときに摘み取り、鹽で挼んで汁を去り、鹽を合せて晒し、萎えさし

て核を去り、復た晒して乾す。酒の下物とし、貯ひて置いて食ふ、いづれも佳し。

實(三)〔氣　味〕【苦く酸し、微溫にして毒なし】時珍曰く、李の味は甘く酸し、その苦澁なるものは食はれない。水に沈まぬものは毒があるから食つてはならぬ。

大明曰く、多食すれば人をして臚脹し、虛熱を發せしめる。

詵曰く、水に臨んで食へば痰瘧を發せしめる。雀肉と食合せてはならぬ。蜜と食合せれば五臟を損ずる。

宗奭曰く、漿水と食合せてはならぬ。霍亂を發し、氣を澀する。それゆゑに朮を服する人はこれを忌む。

〔主　治〕【曝して食へば痼熱を去り、中を調へる】(別錄)【骨節間の勞熱を去る】(孟詵)【肝の病にはこれを食ふが宜し】(思邈)

核仁〔氣　味〕【苦し、平にして毒なし】〔主　治〕【僵仆、踒折の瘀血、骨痛】(別錄)【人をして顏色を好からしめる】(吳普)【婦人の少腹腫滿を治し、小腸を利し、水氣を下し、浮腫を除く】(甄權)【面䵟、黑子を治す】(蘇頌)

〔附　方〕　舊一、新一。【婦人の面䵟】李核仁を皮を去つて細研し、雞子白で和して

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕すもも ノ果實ハ多量(凡ソ八二%前後)ノ水分ノ他轉化糖、蔗糖、葡萄糖、果糖、游離酸(主トシテ林檎酸)、單寧酸、含窒素物、粗纖維、灰分等ヲ含ム。種子中ニハ流動性ノ脂肪油(李仁油)三一—四二%ノ他アミグダリン、揮發油(苦扁桃油)等ヲ含ム。又樹幹ヨリ流出スルゴム質ハアラビノーゼ、ガラクトーゼヲ含ミ又一種プルノーゼト稱バルルペントーゼヲ有ス。樹皮特ニ根皮中ニハフロリチンヲ有ス。(ウ植、四七一)又(日食)ニヨレバ果實ノ可食部九六・四、水分九五・二七、總窒素〇・〇六

稀餳のやうにして塗り、翌朝漿水で洗ひ去つて後に胡粉を塗る。五六日に過ぎずして效がある。風に當ることを忌む。(崔元亮海上方)【蝎蠆の螫痛】苦李仁を嚼んで塗るが良し。(古今錄驗)

根白皮 [修治] 時珍曰く、李根皮は、(三)東行のものを取り、皺皮を刮り去つて黄に炙いて藥用に入れる。別錄には何種の李根を用ゐると指定せず、またその味をも説明してないが、但だ藥性論に『藥に入れるには苦李根皮を用ゐる。味鹹し』とある。しかし張仲景の奔豚湯中には、甘李根白皮を用ゐてあるところからすると、甘、苦の二種いづれも用ゐられるものと見える。

[氣味] 【大寒にして毒なし】 大明曰く、涼にして毒なし。[主治] 【消渴。心煩逆、奔豚氣を止める】(別錄)【瘡を治す】(吳普)【水で煎じて含漱すれば齒痛を治す】(弘景)【煎じた汁を飲めば、赤、白痢に主效がある】(大明)【黄に炙り湯に煎じて一日に二回これを飲めば、婦人の卒の赤、白下を治するに效驗がある】(孟詵)【小兒の暴熱を治し、丹毒を解す】(時珍)【苦李根皮は味鹹し、脚下氣を治し、熱毒煩躁に主效がある　煮汁を服すれば消渴を止める】(甄權)

二、蛋白質〇・三九、脂肪〇・二〇、含水炭素三・一〇、纖維〇・二〇、無機質〇・二一(内水溶性〇・一六、不溶性〇・〇五)、アルカリ價二・三(曾達及加里ニヨル一・五、石灰及苦土ニ依ル〇・八)、燐酸〇・〇三三、石灰〇・〇二五、鐵〇・〇〇五ニシテ(二二六頁)、ソノ六二五瓦ガ一〇〇カロリーニ相當ス。(四一頁)

(三) 東行トハ東方ニ向ツテ延ビルモノヲイフ。

【附方】新二。【小兒の丹毒】兩股から走つて陰頭に及ぶには、李根を燒いて末にし、田中の流水で和して塗る。（千金）【咽喉の卒塞】藥のない場所に在つては、皁角末を鼻に吹いて嚔を取り、かくて李樹に近い根皮を水に磨つて喉外に塗る。良驗がある。（菽園雜記）

花【氣味】【苦く香し、毒なし】【主治】【人の顏面をして澤かならしめ、粉滓䵟黯を去る】（時珍）

【附方】新一。【面黑粉滓】李花、梨花、櫻桃花、白葵花、白蓮花、紅蓮花、旋復花、秦椒各六兩、桃花、木瓜花、丁香、沈香、靑木香、鍾乳粉各三兩、珍珠、玉屑各二兩、蜀水花一兩、大豆末七合を細末にして瓶に收め、毎日（一）盥頮にこれを用ゐて手、顏を洗ふ。百日にして玉のやうに光潔になる（普濟方）

葉【氣味】【甘く酸し、平にして毒なし】【主治】【小兒の壯熱、痁疾、驚癇には、湯に煎じて浴するが良し】（大明）

【附方】新一。【惡刺瘡痛】李葉、棗葉の搗汁を點けるが效がある。（千金）

樹膠【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【目翳。痛を定め、腫を消

（一）盥頮トハ洗面ノコトナリ。

（一）木村（康）曰く、
〔原植物〕あんず Prunus armeniaca,

す』（時珍）

【附録】 **徐李**（別録） 有名未用に曰く、太山の陰に生ずる。樹は李のやうで小さく、その實は青色で核がない。熟したとき採つて食ふ。身を輕くし、氣を益し、天年を延べる。

時珍曰く、これは無核李のことだ。唐の崔奉國（さいほうこく）の家にこれがあつたといふ、異種であつて、龍の耳の血が地に墮ちて生じたものだなどとの謬說（びうせつ）がある。

杏（別錄下品）

和名 あんず
學名 Prunus Armeniaca, L. var. Ansu, Maxim.
科名 いばら科（薔薇科）

【釋名】 **甜梅** 時珍曰く、杏の字の篆文（てんもん）は、子が木の枝に在る形を象（あらは）したものだ。或は、口に從ひ、また可に從ふ文字だといふが、それはいづれも正しくない。江南錄には『楊行密が杏と改めて甜梅（てんばい）と名けた』とある。

【集解】（一）別錄に曰く、杏は晉、川の山谷に生ずる。五月に採る。

頌曰く、今は處處にある。數種あつて、黃にして圓きものを金杏と名ける。この

L. (Rosaceae) あんず P. Armeniaca L. var. Ansu Maxim. (P. Ansu Kom.)
〔生藥〕生藥杏仁 Semen Pruni armeniacae ハあんずノ種子ヲ採集シ乾燥シタルモノナリ。本邦ニ於テハ長野縣ハ昔ヨリ杏ノ名產地ニシテ特ニ上水內郡安茂里村最モ盛ナリ。梅雨前ニ果實ヲ收穫シ干杏、ジヤム、罐詰等ヲ製造ス。杏仁ハ即チ其副產物ナリ。杏仁ハ現今支那ヨリ多量ニ之ヲ輸入スルモ杏仁水製造原料トシテハ長野縣產杏仁遙カニ優良ナリ。(邦藥植,二〇五)

種は濟南郡の分流山から出たものだと言ひ傳へられ、彼の地ではこれを漢帝杏と呼び、漢の武帝の時の上苑に種ゑてあつたものといつてゐる。今は汴、洛の附近でいづれも栽培してあつて、熟することが最も早い。その扁くして青黄なるものを木杏と名けるが、味は酢くして及ばない。山杏は藥としては役に立たぬ。杏仁は現今では東方から來る人家で栽培したものを勝れたものとする。

○○宗奭曰く、金杏は深赭色で、核が大きくして扁い。これは接木したものに生つたもので、その味が最も勝れてゐる。又、白杏といふがあつて、熟したときに色が青白、或は微黄となり、味は甘く淡くして酢くない。生の杏を晒して脯にし、乾果として食へるものだ。山杏などの物はただ仁を取つて用ゐるだけのものである。

○○時珍曰く、諸杏は、葉はいづれも圓くして尖があり、二月に紅花を開く。やはり千葉のものもあつて、それは實を結ばない。甘くして沙あるものを沙杏といひ、黄にして酢を帶ぶるものを梅杏といひ、青くして黄を帶ぶるものを柰杏といふ。金杏といふそのものは、大いさ梨ほどあつて橘のやうに黄である。西京雜記に『蓬萊の杏花は五色あり』とあるは蓋し異種である　按ずるに、王禎の農書に『北方の肉杏

は甚だ佳なるもので、赤く大きくして扁い。金剛拳と呼ぶ。凡そ杏は、熟したときに濃汁を搾り、盤中に塗つて晒し乾し、手で摩り刮つて取収め、それを水で和して麨を調へて食ふ』とある。やはり五果は助となるの意味である。



〔杏〕

實

（二）氣味【酸し、熱にして小毒あり。生で食へば多くは筋骨を傷める】（別錄）

頌曰く、杏は、梅に類するものは味酢く、桃に類するものは味甘い。宗奭曰く、凡そ杏の性はいづれも熱である。小兒が多く食へば瘡、癰、膈熱を發す。扁鵲曰く、多く食へば宿疾を動じ、人をして目盲せしめ、鬚眉が落ちる。源曰く、多く食へば痰熱を生じ、精神を昏す。產婦は就中忌む。

主治【肺に曝して食へば、渴を止め、冷熱毒を去る。心の果であつて、心病にはこれを食ふが宜し】（思邈）

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕あんずノ果肉ノ成分ハ多量（凡ソ八五％前後）ノ水分ノ他蔗糖、轉化糖、林檎酸、枸櫞酸、單寧酸、含窒素物、粗纖維、灰分等ナリ。種子（杏仁）ハ脂肪油（杏仁油）三九％及ビアミグダリンチ含ム他ラクターゼ及ビエムルシンノ如キ酵

核仁【修治】別錄に曰く、五月に採る。弘景曰く、凡そ杏仁(きやうにん)を用ゐるには、湯で浸して皮、尖を去り、黄に炒る。或は麪、麸を用ゐて炒る。斅曰く、凡そ用ゐるには、湯で浸して皮、尖を去り、一斤毎に白火石一斤、烏豆(うづ)三合を入れ、東流水で共に煮て、午前十時から正午まで煮て取出し、晒し乾して用ゐる。時珍曰く、風寒肺病を治する藥の中には、やはり皮、尖のままのものを用ゐることがある。その發し散ずる點を取るのである。

【氣味】[甘く苦し、溫、冷利にして小毒あり　仁の二箇あるものは人を殺す。これで狗を毒し得る] 震亨曰く、杏仁は性熱である。寒に因するものに用ゐるがよし。思邈曰く、杏仁を湯に作るとき、もし白沫の解せぬものを食へば、人をして氣壅(よう)し、身熱せしめる。湯の一夜を經たものは冷氣を動ずる。時珍曰く、凡そ杏、桃の諸花はみな五出であつて、もし六出のものがあつたときは必ず仁が雙(ふた)つある。常態に反したものだから毒があるのだ。徐之才曰く、火を得て良し。黄芩(わうごん)、黄芪(わうぎ)、葛根を惡み、蘘草を畏れる。

【主治】【欬逆上氣、雷の如く鳴るもの、喉痺下氣、產乳、金瘡、寒心、賁豚(ほんとん)】

素、粘液、糖等ヲ有ス。樹幹ヨリ流出スルゴム質ハガラクターゼ、アラビノーゼヲ有シ又二種ノ酸化酵素、灰分ヲ含ム。(ウ植、四六九) 又「日食」ニヨレバ果實ハ可食部九四・一(〇〇)、水分八七、總窒素〇・〇九六、蛋白質〇・六〇、脂肪〇・三四、含水炭素一〇・二、纖維〇・九〇、無機質〇・六一(内水溶性〇・一五、不溶性〇・四六)、アルカリ價三・九(曹達及加里ニ依ル一・二、石灰及苦土ニヨル二・七)、燐酸〇・〇〇六、石灰〇・〇〇二、鐵(十)ニシテ(二二六頁)、ソノ二一二・七七瓦ガ一〇〇カロリーニ相當ス。(四頁)。
〔應用〕杏仁(局方)

（本經）【驚癇、心下の煩熱、風氣往來、時行頭痛、肌を解し、心下の急滿痛を消し、狗毒を殺す】（別錄）【錫の毒を解す】（之才）【腹痺不通を治し、汗を發し、溫病、脚氣、欬嗽上氣、喘促に主效がある。天門冬を入れて煎じたものは心、肺を潤ほす。蜜に和して湯に作つたものは聲氣を潤ほす】（甄權）【肺熱を除き、上焦の風燥を治し、胸膈の氣逆を利し、大腸の氣祕を潤ほす】（元素）【蟲を殺し、諸瘡疥を治し、腫を消し、頭面の諸風氣、皶皰を去る】（時珍）

【發明】元素曰く、杏仁は、氣は薄く、味は厚く、濁にして沈墜し、降であり陰であり、手の太陰の經に入る。その用途に三あつて、肺を潤ほし、食積を消し、滯氣を散ずる。

杲曰く、杏仁は、結を散じ、燥を潤ほし、肺中の風熱、欬嗽を除く。杏仁は喘を下し、氣を治し、桃仁は狂を療じ、血を治するもので、倶に大便祕を治するものだが、氣と血との區別を分ち、晝になると便難とあるには陽氣を行り、夜になると便難となるには陰血を行るべきものである。故に虛せる人の便閉は過泄してはならぬ。脈の浮なるは氣に屬する。杏仁、陳皮を用ゐる。脈の沈なるは血に屬する、桃仁、

ヲ壓搾シテ杏仁油 Oleum Pruni armeniacae（局方）ヲ採取シ其ノ粕ニ水ヲ加ヘテ蒸餾スレバ杏仁水 Aqua Pruni armeniacae（局方）ヲ得。杏仁水ハチアン水素〇・一%及ビベンツアルデヒドヲ含有シ水劑ニ配シテ鎮咳藥トス。一日用量三瓦。杏仁油ハオレーフ油ニ代用シ注射藥ノ溶劑、軟膏ノ基礎劑等ニ用フ。（邦藥植、二〇五。生藥學）

杏仁水ノ製造　杏仁ヲ粗ニ搗碎シ麻袋ニ入レ水壓器ニテ一夜壓搾スレバ冬期ニ於テハ二〇―二五%、夏期ハ二五―三〇%ノ杏仁油ヲ得、此壓搾粕ニ約倍量ノ水ヲ加ヘコヲ攪拌シ蒸ル

後水蒸氣ヲ通シテ蒸餾ス。餾液ニ三分一量ノ酒精ヲ加ヘチアン水素ヲ定量シ其ノ合量ノ〇・一%ニナルヤウ酒精一分水三分ノ混液ヲ以テ稀釋ス。原料一〇〇斤ヨリ杏仁水二五〇封度内外ヲ得。(邦藥植、二〇六)

陳皮を用ゐる。手の陽明と手の太陰とは表、裏であり、賁門（ふんもん）は往來を主（つかさど）り、魄門（はくもん）は收閉を主つて氣の通道である。故にいづれも陳皮を用ゐて佐とするのだ。

好古曰く、張仲景の麻黄湯（まわうたう）、及び王朝奉が傷寒の氣上喘逆を治するにいづれも杏仁を用ゐたのは、その氣を利し、肺を瀉し、肌を解するが爲めである。

時珍曰く、杏仁は能く散じ、能く降す。故に肌を解し、風を散じ、氣を降し、燥を潤ほし、積を消し、傷損を治する藥の中に用ゐる。瘡を治し、蟲を殺すにはその毒を用ゐるのだ。按ずるに、醫餘に『凡そ索麪（さうめん）、豆粉は杏仁に近けると爛れるものだ。この頃、一兵官が粉を食つて積となつたとき、醫師が積氣丸と杏仁と相半して研つて丸にし、熟水で數服すると癒えた』とある。又、野人閑話には『翰林學士辛士遜が青城山の道院中に在つたとき、夢に皇姑が現はれて「杏仁を服するがよい。汝を聰明にし、老いて健壯に、心力倦まざらしめる」といつた。その方を求めると「それは杏仁一味を用ゐ、盥漱（かんそう）し畢る毎に七箇を口中に納れ、良久して皮を脫去して細に嚼み、津液（しんえき）に和して頓に嚥むのである。日日にこれを食ふこと一年すれば、必ず血を換へ、人をして輕健ならしめる。これは申天師の方だ」といつた』とある。

又、楊士瀛の直指方には『何人も、水で杏仁五箇を浸し、五更に端坐して一粒づつを細に嚼み、全部を嚼んでから津に和して呑下せば、久しくして能く五臟を潤ほし、塵滓を去り、風を驅り、目を明にし、肝、腎の風虚、瞳人の靑を帶ぶるもの、眼翳、風痒の病を治す』とある。予(時珍)が按ずるに、杏仁は性が熱であつて氣を降す。やはり久しく服するの藥ではない。此には特にその咀嚼して津液を呑納する點で積穢を消するからよいのである。

古代に杏丹を服する法といふがあつて、それを左慈の方だといつてある。唐愼微はそれを本草に收載して『久しく服すれば壽千萬に至る』としてあるが、その說は妄誕、鄙むべきものである。本書にはその紕謬の辭を删つて下項に存し、讀者をしてその誣を信ずることなからしめる。

附方 舊三十五、新十八。【杏金丹】左慈の祕訣に『また草金丹とも名ける。方は渾皇子から出たものだ。これを服すれば、天年を長くして不死となる。夏姬はこれを服して壽年七百にして仙去した。世人の信ぜぬはみな背て精心修治せぬからである。その法は、必ず人の罕に到る處を擇び、寅の月に杏樹の地下を钁斸して陽氣

を通じ、二月に樹下の草を除き、三月に樹から五歩離れて畦壟を作つて水を通じ、亢旱なるときは泉を引いて灌漑し、霜雪あるときは樹下で火を焼いて花苞を救ひ、五月に至り、杏が熟して自から落ちたものから仁六斗を收め、湯で浸して皮、及び雙仁のものを去り、南流水三石と和し研つて汁二石八斗取つて滓を去り、新鐵釜で酥三斤を用ゐて、糠火、及び炭で釜を燃し、熱して少しづつ酥を磨り、酥全部を磨り盡してから先の汁をその釜に入れ、釜の上に盆を載せ、その盆に孔を鑽りあけ、弦を車轄に懸けて釜の底に屆かせ、紙で孔を塞いで氣の泄れしめぬやうにし、初に糠火を著けて一日三回車轄を動かしてその汁を衮ぜる。五日にして露液が生じ、十日にして白霜が起り、又二日にして白霜が盡き、卽ち金花が出て丹が出來上る。その時盆を開き、炙り乾して翎で掃き下し、棗肉で和して梧子大の丸にし、三丸づつを空心に煖酒で服す。七日に至れば宿疾がみな除け、瘖、盲、攣、跛、疝、痔、癭、癇、瘡、腫、萬病みな癒える。久しく服すれば靈に通じ、不死となる云云』とある。その他くどくどしい記事は載錄せぬ。

○頌曰く、古方に、杏仁を用ゐる修治の正確な方法として、朝から正午まで蒸し

てから、慢火で微炒して七日に至つて取收め、毎朝空腹に噉ふ。久しきに亙つて止まざれば顔色を駐め、天年を延べるとしてある。これは夏姫の法だといふことだ。しかし、杏仁は能く人をして血溢せしめるもので、少し誤れば必ず出血して止まず、或は委頓するに至るものだ。故に近代では一般に服するものが稀である。或は二三年までも服すれば、往往にして或は瀉し、或は臍中から物を出し、治療の方法なきに至るといふことである。

【杏酥法】頌曰く、風虚を去り、あらゆる病を除く。杏仁一石を搗き爛らし、好酒二石で研り濾して汁一石五斗を取り、白蜜一斗五升を入れて攪き匀ぜ、新甕中に入れて氣の洩れぬやうに封じ、三十日經つて酒上に酥の出るを見て掠め取り、瓷器中に納めて貯へ、その酒滓を取つて梨ほどの大いさに團にし、空屋中に格子を作つてそれを載せ、飴、脯のやうな狀態になるを候ち、朝一箇を服して前の酒で飲下す。

○藏器曰く、杏酪を服すれば五臟を潤ほし、痰嗽を去る。生で喫つても熟して喫つてもよいが、半生半熟で服すれば人を殺す。

【又ある法】宗奭曰く、肺燥喘熱、大腸祕を治し、五臟を潤ほす。杏仁を皮を去

つて研細し、每一升に水一升半を入れて稠き汁に搗き、生薑四兩、甘草一寸を入れ、銀、石器中で慢火で熬つて稀膏にし、酥二兩を入れて共に取收め、每夜沸湯に一匙を點てて服す。(衍義)

【萬病丸】　男女の五勞、七傷の一切の諸疾を治す。杏仁一斗二升を童尿で七回煮て、蜜四兩を拌勻し、再び童尿五升で椀內に入れて重蒸して取出し、日中晒し、夜間露すこと數日にして、任意に嚼んで食へば癒える。

【補肺丸】　咳嗽を治す。杏仁二大升——山中のものは用ゐず。雙仁のものを去る——を童尿二斗で春、夏は七日、秋、冬は二七日浸し、皮、尖の付いたまま砂盆中で研り、濾し取つた汁を煮て魚眼を沸かせ、麪糊のやうに軟になればそれで出來上つたのである。それを粗布の上に攤して丸になるまでに曝し、丸にして服す。食の前、後に總て三五十丸を服すべきもので、茶、酒の任意のもので服す。白水粥を忌む。(劉禹錫傳信方)

【欬嗽寒熱】　朝夕加重し、喜ぶこと少くして嗔ること多く、顏色が潤はず、忽ち進み忽ち退き、次第に少食となり、脈の弦緊なるものには、杏仁半兩を皮、尖を去つ

て童尿で七日間浸し、漉し出して溫水で淘洗(たうせん)し、砂盆內で研つて泥のやうにし、小便三升で煎じて膏のやうにし、一錢づつを熟水で服す。婦人、處女はこれを服するが尤も妙である。(千金方)【久患の肺氣】喘急(ぜんきふ)して欬の甚しきに至るものも二劑に過ぎずして永く瘥える。杏仁を皮、尖を去つて二兩を童尿に浸し、一日に一回換へ、夏期には三四回換へて滿半月にして取出し、焙じ乾して研細し、棗一箇ほどを、薄荷一葉、蜜を雞子一箇ほど、水一鍾で七分に煎じ、食後に溫服する。腥物(せいぶつ)を忌む。(勝金方)【欬逆上氣】大人、小兒に拘らず、杏仁三升を皮、尖を去り、黃に炒つて膏に研り、蜜一升を入れて杵(つ)き熟し、每食前にこれを含んで汁を嚥む。(千金)【上氣喘急】杏仁、桃仁各半兩を皮、尖を去つて炒つて研り、水で調へた生麪で和して梧子大の丸にし、十丸づつを薑蜜湯で服す。微し利するを度とする。(聖濟總錄)【喘促浮腫】小便淋瀝(りんれき)するには、杏仁一兩を皮、尖を去り、熬り研つて米を和して粥に煮、空心に二合を喫ふが妙である。(心鏡)【頭面の風腫】杏仁を搗いて膏にし、雞子黃で和して杵き、帛に塗つて厚く裹(つつ)み、乾けばまた塗る。七八回に過ぎずして癒える。(千金方)【風虛頭痛】破れんとするほど痛むには、杏仁を皮、尖を去つて晒し乾して研末

し、水九升で研つて濾した汁を煎じて庫腐のやうな狀態にし、取つて羹、粥に和して食ふ。七日の後には大いに汗が出て諸風は漸次に減ずる。この方は神妙なものだから深く祕すべきである。風冷、豬、雞、魚、蒜、醋を愼む。（千金方）【頭面の諸風】眼瞤し、鼻塞し、眼から冷涙を出すには、杏仁三升を研細し、水で煮て四五沸し、頭を洗つて冷汗の盡るを待つ。三回で癒える。（千金）【偏風不遂】失音不語には、杏仁七箇を皮、尖を去らずに呑み、逐日に增加して四十九箇まで呑み、一周して復た七箇から始め、食後にはかくて竹瀝を飲み、瘥えるを度とする。（外臺祕要）【破傷風腫】杏仁を膏に杵いて厚く塗り、燭を燃して遙に炙る。（千金方）【金瘡の風に中つたとき】角弓反張するには、杏仁を杵き碎き、蒸して氣を溜せしめ、脂を絞つて一小升を服し、兼て瘡上を摩するが良し（必效方）【溫病食勞】杏仁五兩、酢二升を煎じ、一升を取つて服す。汗を取つて癒える（類要）【心腹結氣】杏仁、桂枝、橘皮、訶黎勒皮等分を丸にし、三十丸づつを白湯で服す。忌むものなし。（孟詵食療）【喉痺痰嗽】杏仁を皮を去り黃に熬つて三分、桂末一分を和して泥に研り、裹んで含み、汁を嚥む。（陳藏器本草）【喉熱で瘡の生じたとき】方は上に同じ。【卒に音聲の出ぬもの】方

は上に同じ（文濤公藥準）【肺病咯血】杏仁四十箇を黄蠟で炒つて黄にし、研つて青黛一錢を入れて餅にし、柿餅一箇を破開してその藥を包み、濕紙で裹み、煨熟して食つて效を取る（丹溪方）【卒に小便不通のもの】杏仁十四箇を皮、尖を去り、黄に炒つて研末し、米飲で服す（古今錄驗方）【血崩の止まぬもの】諸藥の奏效せぬには、これを服すれば立ろに止む。甜杏仁の表面の黄皮を燒いて性を存して末にし、三錢づつを空心に熱酒で服す（保壽堂方）【五痔下血】杏仁の皮、尖、及び雙仁のものを去り、水三升で研つて汁を濾し、煎じて半減し、粥に煮て食ふ（食醫心鏡）【穀道の䘌痛】腫れ、痒きには、杏仁を膏に杵いて頻頻に傅ける（肘後方）【陰瘡爛痛】杏仁を黑く燒いて研つて膏にし、時時傅ける（鈐方）【産門の蟲疽】痛痒忍び難きには、杏仁を皮を去つて燒いて性を存し、杵き爛らして裹み、陰中に納入して效を取る（孟詵食療本草）【身體、面部の疣目】杏仁を黑く燒いて膏に研り、擦破つて日日に塗る。（千金方）【顏面皯皰】杏仁を皮を去つて搗き、雞子白で和して夜塗り、朝煖酒で洗ひ去る（孟詵食療）【兩頰の赤痒】その狀態が痱の如くなるをば頭面風と名ける。杏仁で頻頻と揩り、消風散を内服する（證治要訣）【耳の卒に聾閉せるもの】杏仁七箇を

皮を去り、拍ち碎いて三分し、綿で裹んで鹽を著け、小豆ばかりほどを器に入れて飯の上に盛つて蒸熟し、病人を側臥させ、一裹を油で捻つて耳中に滴し、良久してまた一裹を滴して效を取る。(外臺)【耳から膿汁を出すもの】杏仁を黒く炒つて膏に搗き、綿で裹んで納れる。一日に三四回易へるが妙である。(梅師方)【鼻中に生じた瘡】杏仁を研末し、乳汁で和して傅ける。(千金方)【疳瘡で鼻を蝕するもの】杏仁を燒き。油を壓取して傅ける。(千金方)【牙齒の蟲䘌】杏仁を燒いて性を存して膏に研り、髮で裹んで蟲孔中に納れる。蟲を殺し、風を去り、その痛が止む。重きものも再びするに過ぎない。(食療)【牙斷の痒痛】杏仁一百箇を皮を去り、鹽方寸匕、水一升で煮て汁を出させ、含漱して吐く、三度にして癒える。(千金方)【風蟲牙痛】杏仁を鍼で刺し、燈上で烟に燒き、熱に乘じて病牙上に搭し、また燒いて搭すること七回する。甚しくは疼かずして病牙が逐時に斷落する。(普濟方)【目中の赤脈】痒痛し、時に黒花を見るには、初生の杏子仁一升、古五銖錢七文を瓶に入れ、密封して門限下に埋め、百日經つて化して水となつたものを毎夕點ける。(聖濟總錄)【胎赤眼疾】杏仁を壓して取つた油を雞子殼へ半ほどと食鹽一錢を石器中に入れ、柳枝一握を緊

く束ねたもので研り、色が黒くなつたとき、熟艾一團を椀内に置いて燒烘して氣を透らせ、火が盡きれば出來上る。それを少量づつ兩眥に入れる。甚だ妙である。（聖濟總錄）【目中の瞖遮】但し瞳子の破れぬもの。杏仁三升を皮を去り、麪で裹んで三包にし、煻火で煨熟し、麪を去つて研り爛らし、油を壓し去り、一錢づつに銅綠一錢を入れて研勻して點ける。（同上）【目に生じた胬肉】或は痒く、或は痛み、漸次に瞳人を覆ふものには、杏仁を皮を去つて二錢半、膩粉半錢を研り勻ぜ、綿で筯の端を裹んで點ける（同上）【目を傷めて胬肉を生じたもの】廣利方では、生杏仁七箇を皮を去り、細に嚼んで掌中に吐き、熱に乘じて綿で筯の端を裹んで胬肉に點ける。四五回に過ぎずして癒える。○總錄では、杏仁を研つて膏にし、人乳で化開して一日三回點ける。【小兒の血眼】兒が當初出產の艱難で眦眶に血瘀し、それが睛に濺ぎ滲みて瞳人が見えず、輕きは外胞が赤腫して上下の弦爛するには、杏仁二箇を皮、尖を去つて嚼み、乳汁三五匙、それに膩粉少量を入れて蒸熟し、絹で裹んで頻りに點ける。重きには黃連、朴消を加へるが最も良し。（全幼心鑑）【小兒の臍爛】風となるものである。杏仁を皮を去り、研つて傅ける。（子母祕錄）【小兒の咽腫】杏仁を黑

く炒つて研り爛らし、含み嚥む。(普濟方)【鍼の肉中に入りたるもの】出ぬには、雙杏仁を搗き爛らし、車脂で調へて貼る。その鍼は自ら出る。(瑞竹堂方)【箭鏑の咽にあるもの】或は刀刃の咽膈、諸隱處に在るには、杏仁を杵いて傅ける(肘後方)【狐尿瘡痛】杏仁を研り爛らし、煮て一兩沸して熱したとき浸たす。冷えれば易へる。(必效方)【狗咬傷瘡】杏仁を爛嚼して塗る。(寇氏)【狗を食つて消化せぬとき】心下が堅脹し、口が乾き、發熱し、妄語するには、杏仁一升を皮、尖を去り、水三升で煎沸して滓を去り、汁を取つて三回に分服する。肉を下すを度とする。(梅師方)【猘、犬の毒を解す】杏仁を搗き爛らし、水で和して服す。(千金方)【一切の食停】氣滿し、膨脹するには、紅杏仁三百粒、巴豆二十粒を共に炒り、色の變つたとき豆をば去つて用ゐず、杏を研つて末にし、橘皮湯で調へて服す。(楊氏家藏方)【白癜風斑】杏仁を皮、尖のまま毎早朝十四粒を嚼んで揩り、赤色ならしめ、夜間就寢時に再び用ゐる(聖濟總錄)【諸瘡腫痛】杏仁を皮を去り、研り濾して膏を取り、輕粉、麻油を入れて調へて搽る。神效がある。大人、小兒に拘らず。(鮑氏)【小兒の頭瘡】杏仁を燒き研つて傅ける。(事林廣記)【蛆蟲の耳に入りたるとき】杏仁を泥に搗き、油を取つて滴入

する。出さねば死亡するものである（扶壽精方）

花　〔氣味〕【苦し、溫にして毒なし】〔主治〕【不足を補す。婦人の傷中、寒熱痺、厥逆】（別錄）

〔附方〕　新二。【婦人の子なきもの】二月の丁亥の日に杏花、桃花を取つて陰乾して末にし、戊子の日に井華水で和して方寸匕を服す。一日三服（衛生易簡方）【粉滓面䵟】杏花、桃花各一升を東流水に七日間浸して顏を洗ふ。三七回で極めて妙である（聖濟總錄）

葉　〔主治〕【一般に卒に腫滿して身體、面部の洪大するには、煮た濃汁を熱して漬ける。また少しづつ服す】（肘後）

枝　〔主治〕【墮傷には、一握を取つて水一升で煮て半減し、酒三合を入れ、和勻して分服する。大いに效がある】（蘇頌）

〔附方〕　舊一。【墜撲瘀血】瘀血が內に在つて煩悶するには、東に伸びた杏樹枝三兩を細剉し、微し熬つて好酒一升で煎じ、十餘沸して二回に分服する（塞上方）

根　〔主治〕【杏仁を多く食つて迷亂を起し、死せんとするには、切り碎いて湯

に煎じて服すれば解す】（時珍）

巴旦杏（綱目）

和名　あめんどう
學名　Prunus communis, Arcang.(P. Amygdalus, Batsch.)
科名　いばら科（薔薇科）

【釋名】八擔杏（正要）　忽鹿麻


〔巴旦杏〕
—西域—

【集解】(一) 時珍曰く、巴旦杏は回回の舊地に產し、今は關西の諸地方にもある。樹は杏のやうで葉がやや小さく、實はやはり尖小で肉が薄く、その核は梅核のやう、殼が薄くして仁が甘美だ。點茶にこれを食ふ　味は榛子のやうだ。西方の地ではこれを方物に充てる。

【氣味】(二)【甘し、平、溫にして毒なし】【主治】【欬を止め、氣を下し、心腹逆悶を消す】（時珍）　記載は飲膳正要にある。

(一) 木村(康)曰ク。〔原植物〕あめんどう（へんたう Prunus Amygdalus, Stok. (Amygdalus communis, L.) (Rosaceae) すもも(李)〔生薬〕生薬苦扁桃 Amygdalae dulces ハ P. Amygdalus, var. dulcis, Mill. ノ種子、甘扁桃 Amygdalae amarae ハ P. Amygdalus, var. amara, Hayne. ノ種子ヲ用フ。苦扁桃ハ已

ニ五百年代ヨリ醫用ニ供セラルルト雖モ苦扁桃水ハ千七百年代ニ至リ始メテ醫藥ニ入レリ。甘扁桃ハ夙ニ耶蘇紀元前小亞細亞ヨリ伊國ニ齎致シ當時已ニ同國ニ於テ甘扁桃油ヲ搾取セリトイフ。甘扁桃ト苦扁桃ヲ生ズル樹ハ互ニソノ形狀ニ差異ナク二樹ハ相交雜シテペルシアノ南部ニ野生ストイフ。苦扁桃ハ亞弗利加ノ北部、佛國ノ南部及カナリヤ島ヨリ輸出ス、就中亞弗利加產ヲ以テ最佳トシ、此ノ苦扁桃ハ比較的小ナリシ、シリヤ島ヨリモ輸出ス、該島ノ品ハ殊ニ大ナリ。甘扁桃ハ伊國、佛國ノ南部、西班牙及モロッコ等ノ諸國ヨリ最

梅（本經中品）

和名　うめ
學名　Prunus Mume, Sieb. et Zucc.
科名　いばら科（薔薇科）

【釋名】　時珍曰く、梅の字の古文は杲(ほう)と書いた。子が木の上に在る形を象(あらは)したものである。梅なるものは杏の類だから杏の字の反對に杲としたもので、書家は訛(あやま)つて甘木とし、後には梅と書いて毎に從ふ諧聲(かいせい)の文字となつたのである。或は『梅は媒であつて、衆味を媒合するものだ。故に書に「若し和羹を作らば、爾惟(なんぢこ)れ鹽梅たれ」とあつて、梅の字はやはり某に從ふのだ』ともいひ、陸佃の埤雅に『梅は北方に入つて變じて杏となる』といひ、郭璞註爾雅には柟(だん)を梅としてあるが、いづれも誤である。柟とは柟木のことで、荊地方で梅と呼ぶことが陸機の草木疏に記載されてある。



〔梅〕

(一)【集解】別錄に曰く、梅實は漢中の山谷に生ずる。五月に實を採つて火乾する。

頌曰く、今は襄漢、川蜀、江湖、淮、嶺いづれもある。

時珍曰く、按ずるに、陸機の詩疏に『梅は杏の類である。樹、葉はみな略ぼ杏に似て、葉に長尖があり、衆くの木に先つて花さき、その實は酢し、曝乾して脯にし、羹、臛、虀中に入れ、又、含めば口を香しくする。子の赤きものは材堅く、子の白きものは材脆し』とあり、范成大の梅譜に『江梅は野生のもので、栽、接を經ず、花は小さくして香しく、子は小さくして硬い。消梅は實が圓くして鬆く脆く、液が多くして滓がない。ただ生で噉へるだけで煎造するものには入れない。綠萼梅は枝、跗みな綠である。重葉梅は花、葉が重疊し、結實は多く竝んでゐる。紅梅は花の色が杏のやうだ。杏梅は色が淡紅で、實は扁くして斑があり、味は全く杏に似てゐる。鴛鴦梅といふは多葉紅梅のことで、一蔕に竝んで實る。あるひは、苦楝に梅を接げば花に黑色を帶びるといふ』とあり、譚子の化書には『李に桃を接いで本が强いものはその實に毛があり、梅に杏を接いで本が强いものはその實が甘い』梅實は、半黄のものを採つて烟で薰じたものを烏梅といひ、青きものを鹽で淹けて曝乾したも

モ多ク輸出ス。(生薬學)(ウ植、四六四)

(三) 木村(康)曰ク、(成分)成熟セルモノノ果肉中ニハ蔗糖、轉化糖及ビ痕跡ノ脂肪油ヲ含有ス。種子(扁桃)ハ甘扁桃ト苦扁桃トニヨリ成分ヲ異ニス。甘扁桃ハ脂肪油(扁桃油)ニ富ミソノ五七%ニ及ブ。ソノ他葡萄糖、蔗糖(二—三%)、澱粉、ゴム樣物質、ペントザン(三・一—三・八%)色素配糖體、酵素エムルシン(舊シナパーゼ)、纖維素、ラクターゼ、ヒヨレステリン、アスパラギン、プロテイドアマンヂン、ペプトントアルブモーゼ(共ニ〇・二五%)、灰分二・五—三・五%(苦扁桃ト同樣)ノ他ニ僅少ノ爾

酸、砒素等ヲ含ミ、又アミグダリンヲ極少量、凡ソ〇―〇・一%含ム。苦扁桃ハ苦味アルアミグダリン一・七五―三・三%ヲ多量ニ含ミ従テソノ香顕著ナル他、成分ハ大體甘扁桃ニ似タリ。蔗糖二・〇、轉化糖〇・一〇、酵素ラクターゼ、アスパラギン等ニシテ、脂肪油(扁桃油)ノ含量ハ甘扁桃ニ劣リ三八―四五%。(ウ植、四六四)〔生藥學〕樹幹ハガラクタン及ペントザン酸化酵素等ヲ含ムゴム質(單寧ヲ缺ク)ヲ産ス。葉ハフイリン酸ヲ含ム。(ウ植、四六五)「日食」ニヨレバあめんどう(甘扁桃)ハ可食分三三・六(%)、水分六・四、總窒素〇・〇二七、蛋白

のを白梅といふ。また蜜煎にし、糖で貯藏して果飣(くわてい)にもなる。熟したものを汁を笮(しぼ)り晒して取收めて梅醤といふ。ただ烏梅、白梅だけは藥に入れる。梅醤は夏期に調渇水として飲む』とある。

實 (三)〔氣味〕【酸し、平にして毒なし】 大明曰く、多く食すれば齒を損じ、筋を傷め、脾、胃を蝕し、人をして膈上の痰熱を發せしめる。黄精を服する人はこれを食ふことを忌む。梅を食つて齒が齼(いた)むときは胡桃肉を嚼めば解す。

○物類相感志に『梅子は韶粉(せうふん)と共に食へば酸くなく、牙を軟くせぬ』とある。

〔發明〕 宗奭曰く、梅を食ふと津液の泄するは水が木を生ずるのである。津液が泄すれば腎を傷める。腎は水に屬し、外に齒となるものだからである。

時珍曰く、梅は、花が冬に開いて實が夏に熟し、木としての全氣を得たものだからその味が最も酸いので、所謂『曲直酸を作(な)す』である。肝は乙木であり、膽は甲木であり、人の舌下にある四竅(しけう)の二竅は膽液を通ずるものだから梅を食へば津の生ずるので、類が相感應するのである。故に素問に『味酸に過れば肝氣以て津(しん)す』とあり、又『酸は筋に走る。筋病には多く酸を食ふなかれ』とある。右の關係に非ず

質二五・一七、脂肪五○・五○、含水炭素九・二○、纖維四・八三、無機質三・八九、アルカリ價三七・一、燐酸二・七一二、石灰○・一○五、鐵○・○五一ニシテカロリーハ六一○(二二七頁)卽チ一六・三九瓦ガ一○○カロリーニ相當ス(四頁)。
〔應用〕甘扁桃ハ食用トナシ又ソノ子皮ヲ去リ水ト共ニ搗碎シ更ニ水ヲ加ヘテ漉過スルトキハ乳狀ニ溷濁セル液卽チ乳劑ヲ得。故ニ藥ラ乳劑ヲ製スルニ用ユ。又甘扁桃油ヲ製スルノ原料タリ。而シテ其油ノ搾粕ハ蛋白質ニ富ミ汚物ヲ洗去スルノ力大ナリ、故ニ石鹼ニ代ヘ洗粉トナシ大ニ賞用セラル。又酵

とすれば、物には味の酸いものが多い。何ぞ獨り梅だけ能く津を生ずるわけがあらう。

烏梅【修治】弘景曰く、用ゐるには必ず核を去つて微し炒るべきものである。時珍曰く、造法は、青梅を取つて籃に盛り、竈突の上で黑く熏ずる。稻灰の淋汁で潤濕して蒸したものならば肥澤にして蠹がつかぬ。

【氣味】【酸し、溫、平、濇にして毒なし】杲曰く、寒なり。豬肉を忌む。

【主治】【氣を下し、熱、煩滿を除き、心を安じ、肢體の痛、偏枯不仁、死肌を止め、青、黑誌を去り、惡肉を蝕す】(本經)【痺を去り、筋脈を利し、下痢、好く唾し口乾くを止める】(別錄)【水に漬けて汁を飮めば、傷寒煩熱を治す】(弘景)【渴を止め、中を調へ、痰を去り、瘧瘴を治し、吐逆、霍亂を止め、冷熱痢を除く】(藏器)【虛勞骨蒸を治し、酒毒を消し、人をして睡ることを得せしめる。建茶、乾薑と和して丸にして服すれば、休息痢を止めるに大なる效驗がある】(大明)【肺を斂し、腸を澀し、久嗽、瀉痢、反胃、噎膈、蚘厥、吐利を止め、腫を消し、痰を涌し、蟲を殺し、魚毒、馬肝の毒、硫黃の毒を解す】(時珍)

白梅 【釋　名】 **鹽梅**　**霜梅** 【修　治】【大なる青梅を取つて鹽汁で漬け、日中は晒し夜間は漬けて十日にして成る。久しくすれば上に霜が生ずる。

【氣　味】【酸く鹹し、平にして毒なし】 【主　治】【藥に和して誌に點ける。惡肉を蝕す】（弘景）【刺の肉中に在るには、嚼んで傅ければ出る】（孟詵）【刀、箭傷を治し、血を止める。研り爛らして傅ける】（大明）【乳癰、腫毒には、杵き爛らして貼るが佳し】（汪頴）【痰を除く】（蘇頌）【中風、驚癇、喉痺、痰厥を治す。僵仆して牙關緊閉するものには、梅肉を取つて牙齦に揩擦すれば涎が出て開く。又、瀉痢、煩渴、霍亂吐下、下血、血崩を治するの功は烏梅と同じ】（時珍）

【發　明】 弘景曰く、生梅、烏梅、白梅の功應は相似てゐる。

好古曰く、烏梅は脾、肺の二經の血分の藥であつて、能く肺氣を收し、燥嗽を治す。肺は收を欲する。急に酸を食つて以て收する。

時珍曰く、烏梅、白梅の諸病に對する主效は、いづれもその酸、收の關係を取る。ただ張仲景の蚘厥を治する烏梅丸、及び蟲䘌の方中に用ゐたのは、蟲は酸を得れば止むの關係を取つたもので、やや同じからぬ點があるわけだ。醫說に、曾魯公が痢

素エムルシンヲ採ルニ用フ。苦扁桃ハ扁桃油及ビ苦扁桃水ヲ製スルノ原料トナス扁桃油ヲ絞リタル殘渣ハ又洗粉トシテ使用セラル。（生藥學）

〔梅〕

（一）木村（康）曰ク。〔原植物〕うめ Prunus Mume, S. et Z. (Rosaceae)

〔生藥〕烏梅ハ未熟ノ果實ヲ採集シ果皮ヲ剝離シ煤煙中ニ燻製シタルモノナリ。市販品ニハ往往燻製セズシテ乾燥後炭末ヲ塗附セルモノアリ不良品トス。本邦ニテハ三重縣及奈良縣下殊ニ月ヶ瀨ハ其產地トシテ有名ナリ。（邦藥植、二〇七）

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕うめノ果實ハ長井氏〔藥誌一〇六

（訓、二三）七九八）ニヨレバ枸櫞酸及林檎酸ヲ含有シ、又「日食」ニヨレバ果實ノ可食部ハ八二・一（〇〇）、水分八二・二八、總窒素〇・二六七、蛋白質一・六七、脂肪二・八四、含水炭素八・五一、纖維一・七一、無機質一・五七（內水溶性一・二九、不溶性〇・二八）、アルカリ價一五・二（曹達及加里ニ依ル一三・一、石灰及苦土ニ依ル二・二）、燐酸一・五八〇、石灰〇・〇七〇、鐵〇・〇二九ニシテ（二二六頁）ソノ一四七・〇六瓦ガ一〇〇カロリーニ相當ス（四五頁）。
〔藥用〕烏梅ハ止瀉、蛔蟲驅除藥トス。用量四瓦。又解熱。鎮咳、袪痰及鎮嘔藥ト

血で百餘日に及び、國醫も治療不能であつたとき、陳應之が鹽水で梅肉一箇を研り爛らし、臘茶に醋を入れたもので合せて服ませると、一啜りで平安になつたといふことや、大丞梁莊肅公も痢血したが、應之が烏梅、胡黃連、竈下土等分を末にして茶で服ませると、また奏效したといふことが記載してある。蓋し血は酸を得れば斂し、寒を得れば止み、苦を得れば澁るものだからである。惡瘡、弩肉を蝕するといふ事實は、それは酸、收に因るのではあるが、そこに物の理の妙がある。說は本經から出たもので、その法は劉涓子の鬼遺方に記載して、烏梅肉を燒いて性を存し、研つて惡肉上に傅ける。一夜にして立ろに盡きるとある。聖惠の烏梅に蜜を和して餅にして貼るものはその力が緩い。按ずるに、楊起の簡便方に『起は、臂に一疽が生じ、膿潰して百日ばかりで癒えたが、中に惡肉があつて蠶豆大ほどに突起し、一个月餘消せず、醫師の治療も奏效しなかつたが、因に本草を閱してこの方を得、それを試みると一晝夜にしてその大半を去り、再び試みると一日にして平癒した。そこで世にかやうな奇方のあることを知つたので、それから注意して廣く精細に研究して見るに、諸方はこの方が基源をなすものであつた』とある。

シテ有效ナレトモ未熟果實ハ枸櫞酸製造原料ニ供スルヲ得ベシ收量約五%ナリ。梅實ヲ乾燥スレバ二割ニ止リ、此內枸櫞酸一九%林檎酸一・五%ヲ含有ス。「井上仁吉─工化三（明、三三）五八〇」

〔附方〕 舊十三、新二十。【諸瘡の胬肉】方は前項を見よ。【癰疽瘡腫】已に潰れたもの、未だ潰れぬもの、いづれも用ゐる。鹽白梅を燒いて性を存して末にし、輕粉少量を入れ、香油で調へて四圍に塗る（王氏簡易方）【喉痺乳蛾】氷梅丸──青梅二十箇を鹽十二兩に五日間淹けて梅汁を取り、明礬三兩、桔梗、白芷、防風各二兩・豬牙皂角三十條を共に細末にして入れ、汁を拌ぜ梅を和して瓶に入れて取收め、一箇づつを噙んで津液を嚥む。凡そ中風、痰厥で牙關の開かぬには、これを用ゐて擦るが尤も佳し。〇總錄では、白梅で生礬末を包んで丸にし、含嚥し、或は納存する【消渴煩悶】烏梅肉二兩を微し炒つて末にし、二錢づつを水二盞で一盞に煎じて滓を去り、豉二百粒を入れて半盞までに煎じて溫服する（簡要濟衆方）【泄痢口渴】烏梅の煎湯を日毎に茶に代へて飲む（扶壽精方）【產後の痢渴】烏梅肉二十箇、麥門冬十二分を水一升で七合に煮て少しづつ呷ふ（必效方）【赤痢腹痛】直指では、陳白梅を眞茶、蜜水各半と共に煎じて飲む。〇聖惠では、烏梅肉を炒り、黃連と各四兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、一日三回、二十丸づつを米飮で服す【便痢膿血】烏梅一兩を核を去り、燒いて末にし、二錢づつを米飮で服す。立ろに止む（聖濟總錄）

【久痢の止まぬもの】腸垢の已に出たるには、肘後では、烏梅肉二十箇、水一盞を六分に煎じ、食前に二回に分服する。(○袖珍では、烏梅肉、白梅肉各七箇を搗き爛らし、乳香末少量を入れ、杵いて梧桐子大の丸にし、二三十丸づつを茶湯で服す。)一日三回。【大便下血】及び酒痢、久痢の止まぬには、烏梅三兩を燒いて性を存して末にし、醋で煮た米糊で和して梧子大の丸にし、每空心に二十丸を米飲で服す。一日二回。(濟生方)【小便尿血】烏梅を燒いて性を存して研末し、醋糊で梧子大の丸にし、四十丸づつを酒で服す。【血崩の止まぬもの】烏梅肉七箇を燒いて性を存して研末し、一日二回、米飲で服す。【大便不通】氣奔して死せんとするには、烏梅十顆を湯に浸して核を去り、棗の大いさほどに丸にして下部に納れる。少時して通ずる。(食療本草)【霍亂吐利】鹽梅の煎湯を少しづつ飲む。(如宜方)【蚘蟲の上行】口鼻から出るには、烏梅の煎湯を頻りに飲み、幷にこれを含めば平安を得る。(食鑑本草)【水氣滿急】烏梅、大棗各三箇、水四升を二升に煮て蜜を納れ、和勻して含嚥する。(聖濟總錄)【梅核膈氣】半青半黃の梅子を取り、每箇を鹽一兩に一晝夜淹けて晒し乾し、また浸してまた晒し、水が盡きたとき止め、青錢三箇で二梅を夾んで麻糸で縛り、

磁砵内に通裝して封じ、百日間地下に埋めて取出し、一箇づつを用ゐて含んで汁を嚥む。喉に入れば直ちに消する。一个年收藏したものは一人を治し、二年のものは二人を治す。その妙絶倫である。（龔氏經驗方）【心腹脹痛】短氣して絶せんとするには、烏梅十四箇を水五升で煮て一沸し、大錢十四枚を入れて二升半に煮て頓服する。（肘後）【勞瘧劣弱】烏梅十四箇、豆豉二合、桃、柳枝各一虎口、甘草三寸、生薑一塊を童尿二升で一半に煎じて溫服すれば止む。（圖經本草）【久欬の止まぬもの】烏梅肉を微し炒り、罌粟殼を筋膜を去つて蜜で炒り、等分を末にし、二錢づつを就寢時に蜜湯で調へて服す。【痰厥頭痛】破れる如きには、烏梅肉三十箇を鹽三撮、酒三升で一升に煮て頓服する。吐を取つて癒える。（肘後方）【傷寒頭痛】壯熱し、胸中煩痛して四五日解せぬには、烏梅十四箇、鹽五合、水一升を半升に煎じ、溫服して吐を取り、吐して後は風を避けるが良し。（梅師方）【折傷、金瘡】乾梅を燒いて性を存して傅ける。一夜にして瘥える。（千金方）【馬汗の瘡に入りたるもの】痛むには、烏梅を核のあるまま搗き爛らし、頭醋で和して傅け、かくして先づ瘡を刺し、紫血を出し去つてから傅けて縛つて置く。（經驗方）【狂犬の傷毒】烏梅末二錢を酒で服す。（千金）

【指頭の腫毒】痛甚しきには、烏梅肉に魚鮓を和し、擣いて封ずるが妙である。(李樓奇方)【傷寒䘌瘡】下部に生じたるには、烏梅肉三兩を炒つて末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、三十丸を石榴根皮の煎湯で食前に服す。(聖惠方)【小兒の頭瘡】烏梅を燒いて末にし、生油で調へて塗る(聖濟錄)【口を香しくし臭を去る】曝乾した梅脯を常時に含む【硫黃の毒發】人をして背膊疼悶し、目暗くして漠漠たらしめるものである　烏梅肉を焙じて一兩、沙糖半兩、漿水一大盞を七分に煎じて呷ふ(總錄)

核仁　【氣味】【酸し、平にして毒なし】【主治】【目を明にし、氣を益し、饑ゑず】(吳普)【煩熱を除く】(孟詵)【代指で忽然として腫痛するを治す　搗き爛らして醋に和して浸す】(時珍)　肘後方。

花　【氣味】【微し酸く濇し、毒なし】

【發明】時珍曰く、白梅花は古方には用ゐられなかつたものだが、近頃は梅花湯といふがあつて、半開の花を用ゐ、溶した蠟で花口を封じて蜜罐中に投じ、時を過ぎて一兩朶を蜜一匙と共に沸湯に點てて服す。又、蜜漬梅花の法があつて、白梅肉少量を浸した雪水に花を潤ほして一夜露し、蜜で浸して酒のつまみにする　又、梅

花粥の法は、落ちた花びらを熟米粥に入れ、再び煮て食ふ。故に楊誠齋に『蜜點の梅花、露を帶びて餐す』また『脫蕊を收め將つて粥を熬て喫す』の句がある。いづれもその雅致を助け、神思を淸うするを取つたものだ。

葉 〔氣味〕【酸し、平にして毒なし】〔主治〕【休息痢、及び霍亂には濃汁に煮て飮む】（大明） 藏器曰く、嵩陽子は『淸水で梅葉を採んで蕉葛の衣服を洗へば、夏を經て脆せぬことと實驗がある』といつた。時珍曰く、夏、衣に黴點の生じたとき梅葉の煎湯で洗へば、去ること甚だ妙である。

〔附方〕 舊一、新二。 【水毒に中つた病】初期に頭痛し、惡寒し、心煩し、拘急し、朝醒めて暮に劇しきには、梅葉の搗汁三升を飮むが良し。（肘後） 【下部の蟲䘌】梅葉、桃葉一斛を杵き爛らし、蒸して極熱して小器中に入れ、布を隔てて坐して蒸す。蟲は盡く死ぬ。（外臺祕要） 【月水の止まぬもの】梅葉を焙じ、棕櫚皮灰と各等分を末にし、二錢づつを酒で調へて服す。（聖濟總錄）

根 〔主治〕【風痺】（別錄） ○土から出てゐるものは人を殺す。【小兒の初生に、根を取つて桃、李の根と共に湯に煮て浴す。瘡熱の患がなくなる】（崔氏纂要） 【湯に

煎じて飲めば霍亂を治し、休息痢を止める」（大明）

榔梅（綱目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳



〔榔梅〕

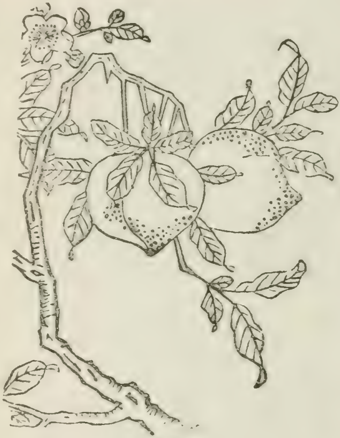
［集解］時珍曰く、榔梅は均州の太和山に出る。傳說に、眞武が梅の枝を折つて榔の樹に揷み「吾が道若し成らば花を開き果を結ばん」と誓つた。後に果してその言の如くであつたのだといふ。今でもその樹が五龍宮の北に在つて、木は榔、實は梅、形は杏、核は桃である。道士は每歲それを採つて蜜煎にして貢獻物に充てる。榔とは楡樹のことである。

實【氣味】〔甘く酸し、平にして毒なし〕【主治】〔津を生じ、渇を止め、神を淸し、氣を下し、酒を消す〕（時珍）

桃（本經下品）

和名 もも
學名 Prunus Persica, Sieb. et Zucc.
科名 いばら科（薔薇科）

【校正】木部にあつた拾遺の桃橛を此に併せ入る。


〔桃〕

【釋名】時珍曰く、桃は性花が早く、植ゑ易くして子が繁る。故に文字は木、兆に從ふので、十億を兆といひ、その多いといふことを言つたものだ。或は兆に從ふ諧聲の文字だともいふ。

【集解】(一)別錄に曰く、桃は太山の川谷に生ずる

(一) 木村（康）曰く。〔原植物〕もも Prunus, Persica, S.

et Z. var. vulgaris, Maxim. (Rosaceae)
〔生薬〕白桃花ハももノ白花ヲ半開時ニ採集シ乾燥セルモノナリ。市販品ハ屢々花蕾ヲ混有ス。又淡紅花ヲ亜硫酸瓦斯ニテ漂白シ僞和セラルル事アルヲ以テ注意ヲ要ス。本品ハ毎年新鮮ナルモノヲ貯フルモノトス。桃仁ハ種子ヲ採集セルモノナリ。本邦ニ於テ白桃花ハ奈良、石川、神奈川等ノ諸縣ニ産シ、桃仁ハ長野縣下ニ少量ノ生産アリ。(邦藥植、二〇八)

弘景曰く、今は處處にある。核仁を藥に入れるには、解核のものを種ゑて取つたものを佳しとすべきものだ。山桃仁は用ゐるに堪へない。

頌曰く、汴東、陝西のものは尤も大きくして美味である。概して果實の佳味にして肥美なるものは、いづれも栽培者が他の木に接いで作るもので、甚しく本性を失してゐる。藥に入れるには本から生えたものを佳しとすべきだが、現に市中で販賣するものは、多くは接核の仁を雜へてあるから役に立たぬ。

宗奭曰く、山中の一種の桃は正に月令の『桃始めて華さく』とあるに合致し、花が多くして子は少く、啗ふに堪へぬが、ただ仁を取つて藥に入れるに堪へる。汴中の油桃といふは、衆くの桃よりも小さくして油を塗つたやうに光り、脾、胃に益せぬ。太原の金桃といふは、色が深黃だ。洛中の崑崙桃といふは、肉が深紅紫色だ。又、餅子桃といふは香餅子のやうな狀態である。その味はいづれも甘い。

時珍曰く、桃は品種が甚だ多く、栽種に易く、且つ早く實を結ぶ。五年目には刀でその皮を劙いてその脂液を出すが宜し、かくすると多くは數年を延べるものだ。その花には紅、紫、白、千葉、二色の諸種があり、その實の紅桃、緋桃、碧桃、緗

桃、白桃、烏桃、金桃、銀桃、臙脂桃といふは、いづれも色を以て名けたものである。綿桃、油桃、御桃、方桃、匾桃、偏核桃といふのはいづれも形を以て名けたものである。五月早桃、十月冬桃、秋桃、霜桃といふはいづれも時を以て名けたものである。いづれも食品に供し得るものだ。ただ山中の毛桃は即ち爾雅に所謂褫桃といふもので、小さくして毛が多く、核は粘して味が悪く、その仁は充滿して脂が多く、藥用に入れ得る。蓋し外に不足にして內に餘あるものだ。冬桃は一名西王母桃、一名仙人桃、卽ち崑崙桃であつて、形は栝蔞のやうで表裏が微し赤く、霜に遭つて始めて熟する。方桃は形が微し方である。匾桃は南番に產し、形が匾で肉が澀く、核の形狀は盆のやう、その仁は甘美だ。番人はこれを珍とし、波淡樹と名ける。樹は甚だ高大なものだ。偏核桃は波斯に產し、形は薄くして尖り、頭が偏で、形狀が半月のやうだ。その仁は新羅桃子にさながら似たもので、食へるが性は熱である。又、楊維禎、宋濂の集の中にいづれも、元朝の御庫の蟠桃は核の大いさが盌ほどあり、神異なものとされてゐたといふことが記載してある。按ずるに、王子年の拾遺記の記載には「漢の明帝の時、常山から巨核桃を獻じた。霜が下りて始めて花さき、

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕ももノ葉ハニトリル配糖體ヲ含有シ之ヲ水蒸氣ト共ニ蒸餾スレバベンツア

隆著の時になつて熟する』とあり、玄中記の記載には『積石の桃は、大いさ斗斛の器ほどある』とあり、酉陽雜俎の記載には『九疑にある桃核は、半扇に米一升容れられた』とあり、又『蜀の後主が所有した桃核杯といふは、半扇に水五升容れられて、良久すると酒のやうな味に飲めた』とある。これ等はいづれも桃として極めて大なるものであつて、昔の人が桃を仙果といつたのはこれ等の類のものではなかつたかと思ふ。生の桃を切片し、瀹でて曝乾すれば脯になり、果として食へる。又、桃酢の法は、爛熟した桃を取つて甕中に納れ、口を蓋ふて七日置いてから、漉して皮、核を去り、二七日間密封して置くと酢が出來上り、香美な食品となる。種樹書には『柿に桃を接げば金桃になり、李に桃を接げば李桃になり、梅に桃を接げば脆い。桃の樹に蟲が生じたときは豬頭を煮た汁を澆げば止む。いづれも物の性の微妙な關係である。

實　（二）氣味　〔辛く酸く甘し、熱にして微毒あり。多食すれば人をして熱あらしめる〕詵曰く、能く丹石の毒を發する。生のものは尤も人を損ずる。思邈曰く、黄帝書に『桃を食ひ飽きて水に入つて浴すれば、人をして淋、及び寒熱の病と成ら

ルデヒド及ビ青酸ヲ含有スル餾液ヲ得。〔阿部勝馬、高比英雄—日本之醫界一一(大、一〇)四號〕葉ハ又單寧〔井貫耕平—藥物、四(昭、二)四四六〕ラウロツエラジン、苦扁桃油、デキストローゼ、蔗糖、葉綠素ノ他ニエリトロフイル、カロテン、フイリン酸、右旋マンデル酸ヲ生ズル酵素、アルブチン、灰分、單寧、グルコタンノイド、カリウム—マグネシウムノ蓚酸鹽等ヲ含ム。もも樹ノ諸部分(葉、材、果實等)ノ中ニ硼酸證明サル。樹枝ハゴム質ヲ產ス。ニ加水分解ニヨリアラビノーゼ、ガラクトーゼヲ生ズ。果實ハ轉化糖或ハ蔗糖、酒石酸、

しめる』とある。時珍曰く、生の桃を多食すれば、人をして膨脹せしめ、また癰、癤を生ぜしめ、損あつて益なし。五果に桃を下に列したのはこのゆゑである。○瑞曰く、桃は鼈と共に食へば心痛を患ふ。朮を服する人はこれを食ふことを忌む。

〔主治〕【脯にして食へば顏色を益す】(大明)【肺の果である、肺の病はこれを食ふが宜し】(思邈)【冬桃を食へば勞熱を解す】(時珍)記載は爾雅註にある。

核仁 〔修治〕別錄に曰く、七月に採り、仁を取つて陰乾する。斅曰く、凡そこれを使用するには、皮を去るべきものであつて、白朮、烏豆の二味と共に坩鍋中で二伏時煮て漉し出し、劈開して見ると心が金色の如く黃になる。それを用ゐる。

時珍曰く、桃仁は、血を行らすには、皮、尖の付いたまま生で用ゐるが宜く、燥を潤ほし血を活すには、湯で浸して皮、尖を去り、炒つて黃にして用ゐるが宜し。或は麥麩と共に炒り、或は燒いて性を存し、それぞれその用うる本方に隨ふ。雙仁のものは有毒だから食つてはならぬ。說は杏仁の條下を見よ。

〔氣味〕【苦く甘し、平にして毒なし】思邈曰く、苦く甘く辛し、平なり。詵

林檎酸、單寧酸素ヲ有ス。果實ノ細胞膜中ニハ不溶性ノプロトペクチンヲ含ミ、成熟スレバ可溶性ノペクチンニ變ズ。ペクチン酸或ハカルチウムペクタートヲ含マズ。又青酸或ハベンツアルデヒドモ無シ。種子（桃仁）ハ凡ソ四五％ノ脂肪油（桃仁油）ノ他アミグダリン、エムルシン、アマンヂン、ラクターゼヲ含ム。桃仁油中ニハ多量ノオレイン及ビ少量ノパルミチン、ステアリン並ビニ凡ソ二・七―三・二七％ノ游離酸存シ又揮發油（苦扁桃油ノ如シ）凡ソ〇・四％ヲ出ス。（ウ植、四六七）又前記ノ阿部、高比良兩氏ハ花ヨリ配糖體類似物質ヲ分

曰く、温なり。弘景曰く、桃仁で作つた酪は性冷である。○香附が使となる。

【主治】〔瘀血、血閉、癥瘕、邪氣。小蟲を殺す〕（本經）〔欬逆上氣を止め、心下の堅硬を消し、卒かの暴撃血を除き、月水を通じ、心腹痛を止める〕（別錄）〔心結、血祕、血燥を治し、大便を通潤し、畜血を破る〕（元素）〔三蟲を殺す。又、毎夜一箇を嚼み、蜜を和して手、顔に塗るが良し〕（孟詵）〔血滯、風痺、骨蒸、肝瘧寒熱、鬼注疼痛、産後の血病に主效がある〕（時珍）

【發明】杲曰く、桃仁は、苦が甘よりも重く、氣は薄く味が厚く、沈にして降る。陰中の陽であり、手、足の厥陰の經の血分の藥である。苦は以て滯血を泄し、甘は以て新血を生ずる。故に凝血を破るにはこれを用ゐる。その用途に四あつて、熱が血室に入るを治するが一、腹中の滯血を泄するが二、皮膚の血熱燥痒を除くが三、皮膚の凝滯の血を行るが四である。

成無已曰く、肝は血の源であつて、血聚すれば肝氣が燥く、肝は急を苦む、急に甘を食つて以てこれを緩にするものであつて、桃仁の甘は以て肝を緩にし、血を散ずる。故に張仲景の抵當湯には、これを用ゐて傷寒八九日にして內に畜血があり、

離シアルバミリセチント命名シ利尿作用顯著ナリトイフ。又刈米氏ハ白桃花中ニ營實及鼠李子ニモ存スルケンペロールチ檢出セリ。(衞生試驗所彙報、三七)
「日食」ニヨレバもものノ果實ハ可食部九二・三(%)、水分九三・五)、總窒素〇・〇九六、蛋白質〇・六〇、脂肪〇・〇五、含水炭素四・二、纖維一・五〇、無機質〇・三〇(內水溶性〇・一一、不溶性〇・一九)、アルカリ價二・六、石灰〇・〇〇二、鐵〇・〇〇二ニシテ(二三七頁)ソノ五〇〇瓦ガ一〇〇カロリーニ相當ス(二九頁)。
〔藥用〕白桃花ハ利尿、峻下藥トス。本品ハ其年ニ採集セル

發熱して狂の如く、小腹滿痛し、小便自利するを治す。又、汗すべくして汗がなく、熱毒が深く入つて吐血し、及び血が胸に結し、煩燥し、譫語するものがあるが、やはりこの湯を主とし、虻蟲、水蛭、大黄と共に用ゐる。

〔附方〕 舊十九、新十二。【天年を延べ、風を去る】人をして光潤ならしめる。桃仁五合を皮を去り、粳米飯漿と共に研つて汁を盡く絞り、それで溫にして顏を洗ふ。極めて妙である(千金翼)【偏風不遂】及び癖疾には、桃仁二千七百箇を皮、尖、雙仁を去り、好酒一斗三升に二十一日間浸し、取出して晒し乾して細かに杵き、梧子大ほどの丸にし、二十丸づつを服し、もと浸した酒で呑む。(外臺祕要)【風勞毒腫】攣痛し、或は牽引して小腹、及び腰痛するには、桃仁一升を皮、尖を去り、熬つて黑くして烟を出し、熱し研つて脂膏のやうにし、酒三升を攪ぜ和して服し、煖臥して汗を取る。二回に過ぎずして瘥える。(食醫心鏡)【癖疾寒熱】桃仁一百箇を皮、尖を去り、乳鉢で研つて膏にし、生水を犯さぬやうにし、黄丹三錢を入れて梧子大の丸にし、三丸づつを發せんとする日に北に向つて溫酒で呑下す。五月五日の午時に合せ、雞、犬、婦人に見られることを忌む(唐愼微本草)【骨蒸で熱を作すもの】桃仁一

百二十箇を尖を留めて皮、及び雙仁を去り、杵いて丸にし、早朝に井花水で頻りに服し、存分に酒を飲んで醉はせ、かくて任意に水を飲ます。隔日に一劑。百日間肉を食つてはならぬ。（外臺祕要）【上氣喘急】方は杏仁の條を見よ。【上氣欬嗽】胸滿し、氣喘するには、桃仁三兩を皮、尖を去り、水一大升で研り、その汁に粳米二合を和して粥に煮て食ふ。（心鏡）【卒に發つた欬嗽】桃仁三升を皮を去つて杵き、器に入れて密封し、蒸熟して日光で乾し、絹袋に盛つて二斗の酒に七日間浸して飲む。一日に四五合飲む。【尸疰、鬼疰】これは五尸の一であつて、また鬼邪を挾んで祟をなす。その病の變動には三十六種から九十九種まであるが、大略は人をして寒熱し、淋瀝し、沈沈默默として此處と苦しむ處は判らないが惡からぬ處がなく、年を累ね月を積んで死に至り、死後には更に傍人に傳染する。急に桃仁五十箇を泥に研り、水で煮て四升を取つて服し、吐を取る。吐し盡さぬときは三四日して再び吐する。（肘後方）【傳尸鬼氣】咳嗽し、痃癖し、注氣し、血氣が不通となつて日に漸次に消瘦する。桃仁一兩を皮、尖を去つて杵き碎き、水一升半で煮た汁に米を入れて粥に作り、空心に食ふ。【鬼疰心痛】桃仁一合を研り爛らし、湯に煎じて服す。（急救方）

モノヲ用ヒ陳舊品ハ薬用ニ堪ヘズ。用量三瓦・桃仁ハ杏仁ト同ジク鎮咳ノ目的ニ供ス。葉ヨリ桃葉水ヲ製シばくち水ニ代用シ鎮咳薬トナスヲ得。即チ新鮮葉二〇瓩ヨリ水蒸氣蒸餾ニヨリ餾液五立ヲトリ之ヲ青酸含量〇・一%ニ稀釋スレバ約七瓩ノ桃葉水ヲ得（城龍吉—薬誌三二五（明、四三）二一八、田部龜三郎—薬誌二一一（明、三二）八五五）。佛國局方ニハ桃花及ビ桃花舍利別ヲ收載ス。民間ニ汗泡及濕疹ニハ桃ノ枝ヲ葉付ノママ釜ニ入レテ水ヲ以テ煮出シ之ヲ以テ行水スレバヨシト。（邦薬植、二〇九）

(三) 憒憒ハ心ノ擾亂スル貌。

【卒然の心痛】桃仁七箇を皮、尖を去り、水一合に研り爛らして服す（肘後方）【一般に好く魘寐するもの】桃仁を熬つて皮、尖を去り、二十一箇を小便で服す（千金方）【下部の蟲䘌】病人の齒に色がなく、舌上が白く、喜く睡り、(三)憒憒として痛痒の部位が判らず、或は下痢する。これは下部に蟲が生じて肛を食ふのである。桃仁十五箇、苦酒二升、鹽一合を六合に煮て服す。（肘後方）【崩中漏下】止まぬには、桃核を燒いて性を存して研細し、一日三回、酒で方寸匕を服す（千金）【婦人の難產】數日出產せぬには、桃仁一箇を劈開し、一片には可の字を書き、一片には出の字を書いて呑む。直ちに生れる（删繁方）【產後のあらゆる病】千金桃仁煎――婦人產後のあらゆる病、諸氣を治す。桃仁一千二百箇を取つて皮、尖、雙仁を去り、熬つて極細に擣き、淸酒一斗半で研つて麥粥のやうにし、小瓶中に納れて麪で封じ、湯中に入れて一伏時の間煮て、一匙づつを溫酒で和して服す。一日二回（圖經本草）【產後の身熱】火の如く、皮が粟粒の如くなるには、桃仁を泥に研り、臘豬脂と共に傅け、日日に易へる（千金方）【產後の血閉】桃仁二十箇を皮、尖を去り、藕一塊と水で煎じて服するが良し（唐瑤經驗方）【婦人の陰腫】桃仁を燒いて傅ける。【婦人の陰癢】

桃仁を杵き爛らし、綿で裹んで塞ぐ。(肘後方)【男子の陰腫】痒きには、桃仁を香しく炒つて末にし、一日二回、酒で方寸匕を服し、同時に擣いて傅ける。(外臺)【小兒の卵癩】方は上に同じ。【小兒の爛瘡】初期に腫漿が火瘡に似たるには、桃仁を研り爛らして傅ける。(秘錄)【小兒の聤耳】桃仁を炒つて研り、綿で裹んで日日に塞ぐ。(千金方)【風蟲牙痛】桃仁を鍼で刺して燈上で燒き、烟が出ると吹き滅して痛む齒上に置いて咬む。五六回に過ぎずして癒える。(衛生家寶方)【脣が乾き裂けて痛むもの】桃仁を擣いて豬脂で和して傅ける。(海上)【大便の不快なるもの】裏急後重するには、桃仁三兩を皮を去り、呉茱萸二兩、食鹽一兩と共に炒熟して鹽、茱を去り、桃仁五七粒を嚼む。(總錄)【急勞欬嗽】煩熱するには、桃仁三兩を皮、尖を去り、猪肝一箇、童尿五升と共に煮乾し、木臼の中で擣き爛らし、蒸餅を入れて和して梧子大の丸にし、三五丸づつを溫水で服す。(聖惠方)【冷勞で食の減ずるもの】漸次に黑瘦するに至る。桃仁五百顆、呉茱萸三兩を共に鐵鐺中に入れ、微火で一炊の間炒り、桃仁を取り皮を去つて見て微黃色になつたとき漸次に火を加へ、微烟の出るを待つて熱に乘じて新しい瓶に入れ、氣の洩れぬやうに厚紙で封じ住め、每日空心に桃仁二

十粒を取つて皮を去つて嚼み、溫酒で呑下す。重きものも五百粒を服すれば癒える。（聖惠方）【瘴癘の豫防】桃仁一斤、吳茱萸、青鹽各四兩を共に炒熟し、新しい瓶に一七日間密封して取出し、茱と鹽とを揀り去り、桃仁を取つて皮、尖を去り、一二十箇づつを嚼む。山間の生活に尤も宜し。（余居士選奇方）

桃毛 毛桃の實の上の毛であつて、刮り取つて用ゐる。

［氣味］【辛し、平にして微毒あり】［主治］【血閉を破り、血瘕を下す。寒熱、積聚、子なきもの、帶下の諸疾】（別錄）【崩中を療じ、癖氣を破る】（大明）【惡鬼邪氣を治す】（孟詵）

桃梟 ［釋名］ **桃奴**（別錄） **桃景**（同上） **神桃** 別錄に曰く、これは桃の實の樹に著いたまま冬を經て落ちないもののことである。正月に採る。中の實したるものが良し。

時珍曰く、桃子が乾いて懸つたさまが、梟首を木に磔けたやうな狀態だから名けたものだ。奴とは實と成れないものの意味をいつたものだ。家寶方にこれを神桃といつてあるは、惡を辟けるといふ意味である。千葉桃花の結子が樹に在つて落ちぬ

ものを鬼髑髏と名け、雷斅炮炙論に修治の法があるが、方書には用ゐられたことのないものだ。

○斅曰く、鬼髑髏は十一月に採つて酒を拌ぜ、午前十時から午後二時まで蒸して焙じ乾し、銅刀で切つて焙じ、肉を取つて用ゐる。

【氣味】【苦し、微溫にして小毒あり】【主治】【百鬼精物を殺す】(本經)【精魅、五毒、不祥を殺し、中惡腹痛を療ず】(別錄) ○頌曰く、胡洽の中惡、毒氣、蠱疰を治する桃梟湯といふがある。【肺氣、腰痛を治し、血を破り、心痛を療ず。酒に磨つて煖めて服す】(大明)【吐血して諸藥效なきものに主效がある。燒いて性を存して研末し、米湯で調へて服すれば驗がある】(汪穎)【小兒の虛汗、婦人の妊娠下血を治し、伏梁結氣を破り、邪瘧を止める。烟に燒いて痔瘡を熏じ、黑く燒き油で調へて小兒頭上の肥瘡、軟癤に傅ける】(時珍)

【附方】舊三、新五。【伏梁結氣】心下に在つて散ぜぬには、桃奴三兩を末にし、二錢づつを空心に溫酒で服す。(聖惠)【鬼瘧寒熱】樹上で自ら乾いた桃子十四箇を末にし、水を滴して梧子大の丸にし、朱砂を衣にかけ、一丸づつを早朝に東に面して

井華水で服するが良し（聖濟總錄）【五種の癖疾】家寶通神丸――神桃、卽ち桃奴十四箇、巴豆七粒、黑豆一兩を研勻し、冷水で和して梧子大の丸にし、朱砂を衣にかけ、發する日の五更に、藥王菩薩を一遍念じて井華水で一丸を服す。立ろに瘥え、二回に過ぎず。妙言ふべからず。（王隱君養生主論）【妊娠下血】止まぬには、桃梟を燒いて性を存して研り、水で服して瘥を取る。（葛洪方）【盜汗の止まぬもの】樹上の乾桃子一箇、霜梅二箇、葱根七箇、燈心二莖、陳皮一錢、稻根、大麥芽各一撮、水二鍾を煎じて服す。（經驗方）【白禿頭瘡】乾桃一兩、黑豆一合を末にし、臘猪脂で調へて搽る（聖惠）【小兒の頭瘡】樹上の乾桃を燒いて研り、膩粉を入れ、麻油で調へて搽る（聖惠）【桃を食つて病となつたもの】桃梟の燒灰二錢を水で服して吐を取れば癒える。陸光祿の說に、ある人が桃を食つて消化せずして病となつたとき、林の中で槁桃を得て燒いて服すると、その場で吐出して癒えたといふ。これは類を以て相攻めるのである。（張文仲備急方）

花　【修治】　別錄に曰く、三月三日に採つて陰乾する。數曰く、桃花は千葉のものを用ゐてはならぬ。人をして鼻衄して止まず、目黃とならしめる。花を採收し

たならば、揀り淨めて絹袋に盛り、簷下に懸けて乾して用ゐる。

氣味　【苦し、平にして毒なし】**主治**　【疰、惡鬼を殺し、人をして顏色を好からしめる】(本經)【人の顏を悅澤にし、水氣を除き、石淋を破り、大、小便を利し、三蟲を下す】(別錄)【腫滿を消し、惡氣を下す】(蘇恭)【心腹痛、及び禿瘡を治す】(孟詵)【宿水痰飮、積滯を利し、風狂を治す。研末して頭下の肥瘡、手、足の瘑瘡に傅ける】(時珍)

發明　弘景曰く、肘後方に『三本の樹の桃花を服し盡せば顏色が紅潤、悅澤にして桃花のやうになる』といつてある。

頌曰く、太清草木方に『酒に桃花を漬けて飮めば、あらゆる痰を除き、顏色を益す』といつてある。

時珍曰く、按ずるに、歐陽詢の初學記の記載に『北齊の崔氏は、桃花、白雪を兒に與へて顏に靧けさせ「顏が妍華、光悅になる」といつた』とある。蓋し本草の『人をして顏色を好くし、人の顏を悅澤にする』とある意味を正解したものである。然るに陶、蘇二氏は桃花を服する法を引いて來たが、それは本草の言に因つて謬り

用ゐたものである。桃花は性走泄し、下降し、大腸を利することが甚だ快だ。これを用ゐて氣實の人の水飲腫滿、積滯、大、小便閉塞を病むものを治するには有功無害であるが、若し久しく服するならば、人の陰血を耗し、元氣を損ずるものである。能く顏色を悅澤にしさうなことはあるまい。按ずるに、張從正の儒門事親の記載に『ある婦人が數年に亙つて滑泄し、あらゆる治法も效がなかつたが、ある人が「これは傷飲で積があるのだ」といつて、桃花の落るとき、人の手を觸れぬやうに棘鍼で數十蕚を刺し取り、麪で和して餠にし、煨熟して食はせ、米飲で送下させると、一二時ならずして傾けるやうに瀉下し、六七日間に數百回通じがあつて昏困したが、ただ涼水を飲ませ、それで平癒した』とある。これで觀ると、桃花の峻く利するものなることは徵すべきである。又、蘇鶚の杜陽編の記載に『范純佑の女が夫を喪つて發狂したとき、一室中に監禁して置いたが、夜中窗櫺を破つて桃の樹に登り、桃花を殆ど食ひ盡して了つた。翌朝家人が發見して樹から抱へ下したが、それから遂に癒えて了つた』とある。時珍按ずるに、これはやはり驚怒で肝を傷め、痰に敗血を夾み、それで發狂したものであつて、偶々桃花の痰飲を利し、滯血を散ずる功力を

得たものであつた。張仲景が積熱發狂を治するに承氣湯を用ゐ、畜血發狂に桃仁承氣湯を用ゐた意味と同じものである。然るに陳藏器の說に、桃花は食へば淋を患ふといふは怪しいことだ。

附方　舊三、新十三。【大便艱難】桃花を末にし、水で方寸匕を服すれば通ずる。(千金)【產後の祕塞】大、小便不通なるには、桃花、葵子、滑石、檳榔等分を末にし、空心に二錢づつを葱白湯で服すれば利す。(集驗方)【心腹積痛】三月三日に桃花を採り、晒し乾して末に杵き、水で二錢匕を服するが良し(孟詵食療本草)【瘧疾の已まぬもの】桃花を末にして酒で方寸匕を服するが良し。(梅師方)【痰飲宿水】桃花散——桃花を採收して陰乾して末にし、溫酒で一合を服して利を取る。虛する傾向があるときは少し粥を食ふ。轉下藥のやうなものではない。(崔行功纂要方)【脚氣腫痛】桃花一升を陰乾して末にし、每に溫酒で少しづつ呷ふ。一夜にして消する。(外臺祕要)【腰、脊の痛むもの】三月三日に取つた桃花一斗一升、井華水三斗、麴六升、米六斗を炊熟し、善通のやうに酒に釀し、一日三回、一升づつを服す。神の如き良效がある。(千金)【膿瘻の止まぬもの】桃花を末にし、豬脂で和して傅ける。一日二回。

(千金)【頭上の禿瘡】三月三日に未開桃花を採收して陰乾し、桑椹の赤きものと等分を末にし、豬脂で和し、先づ灰汁を取つて痂を洗ひ去つてから塗る(食療)【頭上の肥瘡】一百五日の寒食の節に桃花を採收して末にし、食後に水半盞で方寸匕を調へて服す。一日三回。甚だ良し。(崔元亮海上方)【黃水面瘡】方は上に同じ。【足上の瘑瘡】桃花、食鹽等分を杵き勻ぜ、醋で和して傅ける。(肘後方)【雀卵面皰】桃花、冬瓜仁を研末して等分を蜜で調へて傅ける。(聖惠)【乾糞の塞腸】脹痛し、不通なるには、毛桃花の濕ほひるもの一兩と麪三兩とを和して餛飩にし、煮熟して空心に食ふ。正午頃に腹が雷のやうに鳴つて惡物を下すものである。(聖惠方)【顏面の粉刺】癗子が米粉の如くなるには、桃花、丹砂各三兩を末にし、一錢づつを空心に井水で服す。一日三服し、十日にして反應があり、二十日にして小便に黑汁を出すもので、顏色が瑩白になる(聖惠方)【顏に光華あらしめる】三月三日に桃花を採取り、七月七日雞血を取り、和して顏に塗る。二三日にしてそれが脫ちると顏色に光華が出る。(聖濟總錄)

葉 頌曰く、嫩きものを採る。桃心と名け、藥に入れて尤も勝れたものだ。

【氣　味】【苦し、平にして毒なし】【主　治】【尸蟲を除き、瘡中の小蟲を出す】（別錄）【惡氣、小兒の寒熱客忤を治す】（大明）【傷寒時氣、風痺で汗なきものを療じ、頭風を治し、大、小便を通じ、霍亂腹痛を止める】（時珍）

【發　明】頌曰く、桃葉蒸汗の法——張文仲備急方の天行病を治する支太醫の桃葉湯熏法は、水二石で桃葉を煮て七斗を取り、それを床簀下に置き、患者を厚く被を蓋ふて床上に臥さしめ、熱に乘じて熏ずる。少時して雨のやうに汗するものだ。汗が全身から出たとき湯を去つて速に粉し、幷に大推の穴に灸する。それで癒える。又、陳廩丘の小品方に阮河南の桃葉蒸法といふがあつて、それには、連りに汗を發する。汗の出ぬものは死ぬ。これを蒸すこと中風の法の如くするがよし。地を燒いて熱せしめ、火を去つて少し水を洒ぎ、乾桃葉をその上に厚さ二三寸に布き、その葉の上に席を置いて臥し、溫に覆ふて大いに汗を出し、被中に在つて粉を傅ける。極めて燥してそれで瘥える。凡そ栢葉、麥麩、蠶沙はいづれもこの法の如くにして用うべきものである。張苗は『曾てある人が疲極して汗を出し、簟に臥して冷を受け、但だ寒倦に苦しみ、四日に凡そ八回發汗しても汗が出なかつたが、この法を用

（四）九錫ハ帝位ニ亞グ最高ノ榮爵。

ゐて瘥えた』といつてある。

時珍曰く、按ずるに、許叔微の本事方に『傷寒は、醫者は必ず表、裏を顧みて次第に循ふべきものである。昔、范雲が梁の武帝の屬官であつたとき、時疫熱疾に罹り、徐文伯を召して診せしめた。時恰も武帝（四）九錫の命あり、盛儀の期が旦夕に迫つてゐたので、雲はそれに列席、干與することが不可能になりはせぬかを恐れて、速かに治癒を求めた。すると文伯は「それは甚だ造作ないが、事務を執ること恐らく二年の後は坐起し得ないであらう」といつたが、雲は「朝に道を聞いて夕に死すとも可なりである。二年とあれば猶更結構なことだ」といつた。文伯はそこで火で地を煆いてその上に桃、柏葉を布き、それに雲を臥させ、少頃して汗が出たとき粉すると、翌日にはそれで癒えたが、後二年にして雲は果して死亡した。汗を取ることが期に先じてさへかやうに壽命を促めるものである。況や表裏、時日を顧みずして速に癒やさんとするその結局はいふまでもあるまい。そもそも桃葉は發汗の妙法であるが、やはりかやうな危險があるのだから深く注意すべきことである』とある。

附方　萬十、新一。【風襲項强】顧視し得ぬには、地に坑を掘つて赤く煆き、水

を洒いて冷し、桃葉をその內に鋪き、席上に臥して項をその坑上に著け、汗の出るまで蒸す。良久して瘥える。(千金方)【小兒の傷寒】時氣には、桃葉三兩、水五升を煮て十沸して汁を取り、一日に五六回淋ぎ、後に雄鼠糞二箇を燒いて服するが妙である。(傷寒類要)【二便不通】桃葉の杵汁半升を服す。冬は桃皮を用ゐる。(孫眞人方)【霍亂腹痛】桃葉三升を切り、水五升で一升に煮て二回に分服する。(外臺)【三尸蟲を除く】桃葉の杵汁一升を服す。(外臺祕要)【腸痔出血】桃葉一斛を杵き、小口器中に納れて坐蒸する。蟲があつて自ら出る。(肘後方)【婦人の陰瘡】蟲に咬まれるやうに痒痛するには、桃葉を生で擣き、綿で裹んで納れ、一日に三四回易へる。(食療本草)【足上の瘑瘡】桃葉を搗き、苦酒に和して傅ける。(肘後方)【鼻中に生じた瘡】桃葉の嫩心を杵き爛らして塞ぐ。葉のないときは枝を用ゐる。(簡便方)【身體面部の癬瘡】眞晝の午時に桃葉を擣いて汁を取つて搽る。(千金)【諸蟲の耳に入りたるとき】桃葉を挼み熟して塞ぐ。或は搗汁を滴す。或は枕に作つて枕すれば一夕にして自ら出る。(梅師方)

莖　及び　**白皮**　【修治】　時珍曰く、樹皮、根皮、いづれも用ゐられるが、根

皮が尤も良し。いづれも東行のものを取り、粗皮を刮り去り、白皮を取つて藥に入れる。

【氣味】【苦し、平にして毒なし】【主治】【邪氣、中惡の腹痛を除き、胃中の熱を去る】(別錄)【疰忤の心腹痛を治し、蠱毒を解し、疫癘を辟け、黃疸で身、目の金の如くなるを療し、諸瘡蟲を殺す】(時珍)

【附方】舊十四、新五。【天行疫癘】常に東行桃枝を煎熬した湯で浴するが佳し。(類要)【黃疸で金の如くなるもの】晴明の時の晴れた早朝に、雞、犬、婦人に見られないやうにして、東に引いた桃根の筯のやうに細く釵股ほどのものを一握取つて細かに切り、水一大升で一小升に煎じ、空腹に頓服する。後三五日にしてその黃が離離として薄雲の如くに散開し、百日にして平復する。黃が散じて後は、時時に清酒一盃を飲むがよし。それで眼中が散じ易い。さなくば散ずることが遲い。熱麪、豬、魚等の物を忌む。これは徐之才の家の祕方である。(初虞世必效方)【肺熱喘急】集驗では、肺の熱悶、喘急、客熱往來で死せんとし、服藥に堪へぬものを治するに、桃皮、芫花各一升を水四升で一升に煮取り、故布をその汁の中に納れて取つて胸口に薄し、

四肢を溫める。かくて數刻の間試むれば止む。（圖經）【喉痺塞痛】桃皮の煮汁三升を服す。（千金翼）【心虛の健忘】耳、目を聰明ならしめる。戊子の日に取つた東引桃枝三寸を枕にする。〇又ある方では、五月五日の日出前に東引桃枝を取り、三寸の人形に刻み、衣帶を著けて領中に佩びる。（千金翼）【卒かの心痛】東引桃枝一把を切り、酒一升で半升に煎じて頓服する。大效がある。（肘後方）【鬼疰心痛】東引桃枝一握を粗皮を去つて切り、水二升で半升に煎じて頻りに服す。（崔氏）【中蠱毒を解す】東引桃白皮を烘き乾し、大戟、斑蝥を足、翅を去つて熬り、三物等分を末にし、冷水で半方寸匕を服すれば出る。出ぬときは更に服す。或は酒に因つて中つたものは酒で服し、食物に因つて中つたものは食物で服す。初虞世は『これは李饒州の法であつて、また米泔で丸にして服するもよし』といつた。（蘇頌圖經）【卒に生じた惡瘡】何瘡なるや識るものなきには、桃皮を取つて屑にして納れる。（孫眞人方）【卒に瘰癧を患ふもの】痛まぬには、桃樹白皮を取つて瘡上に貼り、二七壯灸するが良し（孫眞人方）【熱病の口瘡】䘌を成すには、桃枝の濃煎汁を含む。下部に瘡あるには納入する。（類要）【下部の䘌瘡】桃白皮を煮て稀餳のやうな濃汁を取り、熊膽少量を入れ、

綿にその藥を蘸けて下部の瘡上に納入する。(梅師)【五痔で痛むもの】桃根を水で煎じた汁で洗ふ。蟲があつて出るものである。【小兒の濕癬】桃樹青皮を末にし、醋で和して頻りに傅ける。(子母祕錄)【狂犬の咬傷】桃白皮一握、水三升を一升に煎じて服す。(梅師方)【水腫し尿の短きもの】桃皮三斤を内外皮を去り、秫米一斗、女麴一升を用ゐ、水二斗で桃皮を煮て取つた汁一斗の一半で麴を漬け、一半で秫飯を漬け、普通のやうに釀して酒にし、一合づつを一日三回服し、體中に熱あるを以て奏效の徵とする。小便の多きは病が去るのである。生、冷、一切の毒物を忌む。(聖濟總錄)【婦人の經閉】數年不通で顏色萎黃し、唇口が青白となり、腹中に塊を成し、肚上に筋起し、腿、脛が或は腫れるには、桃根を煎煮する。桃樹根、牛蒡根、馬鞭草根、牛膝、蓬虆各一斤を剉み、水三斗で一斗に煎じて滓を去り、更に慢火で煎じて餳のやうな狀態にして取收め、一匙づつを熱酒で調へて服す。(聖惠)【牙疼、頰腫】桃白皮、柳白皮、槐白皮等分を酒で煎じて熱漱し、冷えれば吐く。(聖惠方)【小兒の白禿】桃皮五兩を煎じた汁に白麪を入れて沐し、幷に服す。(同上)

桃膠【修治】時珍曰く、桃の茂盛する時、刀で樹皮を割いて置くと久しくし

て膠が溢出する。それを採收して桑灰湯に浸して曝乾して用ゐる。服食に用ゐる場合には、その本方の方法に依つて修錬すべきものである。

氣味　【苦し、平にして毒なし】　**主治**　【錬つて服すれば、中を保し、飢ゑず、風寒を忍ぶ】(別錄)【石淋を下し、血を破り、中惡、疰忤を治す】(蘇恭)【惡鬼邪氣に主效がある】(孟詵)【血を和し、氣を益し、下痢を治し、痛を止める】(時珍)

發明　頌曰く、本草には『桃膠を錬つて服すれば、中を保し、飢ゑず』とあるが、按ずるに、仙方服膠法には、膠二十斤を取つて絹袋に盛り、櫟木灰汁一石の中で煮て三五沸し、取つて高處に掛けて乾くを候つて再び煮る。かく三回繰返して曝乾し、研り篩つて蜜で和して梧子大の丸にし、二十丸づつを空腹に酒で服す。久しく服すれば身輕く、老いずとある。

時珍曰く、按ずるに、抱朴子に『桃膠を桑灰汁で漬けて服すれば、あらゆる病を除き、數月にして穀を斷ち、久しくすれば暗い夜間に物を見て月の如き光がある』とある。又、列仙傳には『高丘公は桃膠を服して仙たるを得た』とある。古方には桃膠を仙藥としたものだが、後世一般には一向に用ゐない。その功果に必しも右の

やうな特異な事實がないからであらうと思ふ。

【附方】舊二、新三。【虚熱で渇するもの】桃膠を彈丸大ほど含むが佳し（外臺）

【石淋の痛むもの】桃木膠を棗大ほど、夏は冷水三合で、冬は湯三合で和して服す。一日三服。石を下すものである。石が盡きたならば止める（古今錄驗）【血淋の痛むもの】桃膠を炒り、木通、石膏と各一錢、水一盞を七分に煎じ、食後に服す（楊氏家藏方）【產後の下痢】赤、白を痢し、裏急後重し、腹痛するには、桃膠を焙じ乾し、沈香、蒲黃を炒り、各等分を末にし、二錢づつを食前に米飲で服す（婦人良方）【痘黶發搐】黑陷せるものには、桃膠の煎湯を飲み、或は水で熬つて膏にし、酒で化して服するが大いに效がある（總微論）

桃符【主治】【中惡、精魅の邪氣には、水で煮て汁を服す】（孟詵）

【發明】時珍曰く、典術に『桃なるものは西方の木、五木の精なる仙木であつて、味辛く氣惡し、故に能く邪氣を厭伏し、百鬼を制す。今一般に門上に桃符を用ゐるはこれに因つたものだ』とある。玉燭寶典に『戶上に桃板を著けて邪を辟けるは、山海經の神荼、鬱壘は東海蟠桃樹下に居り、衆鬼を主領するとある意味を取つ

たものだ』とある。許愼は『羿は桃棓に死す。棓は杖である。故に鬼は桃を畏るので、今一般に桃梗を(五)杙橛に作つて鬼を辟けるのだ』といつた。禮記には『王弔すれば巫祈り、桃茢を以て前引して以て不祥を辟く』とある。茢とは桃枝で作つた帚のことだ。博物志には『桃根で印を作れば鬼を召し得る』とあり、甄異傳には『鬼は但だ東南枝を畏れるだけだ』とある。これ等の諸説に據れば、本草の、桃の枝、葉、根、核、桃梟、桃橛に、みな鬼祟、(六)産忤を辟けるとしてあるは、蓋し出て來るところがあるのだ。錢乙の小兒方に、積熱、及び結胸を疎取するに、巴豆、硇、汞の藥を用ゐ、桃符煎湯で服すとあるが、やはりこれも禁厭の意味である。

桃橛(拾遺)　時珍曰く、橛の音は掘(クツ)であつて、杙のことである。世間で多く地下に釘して家宅の鎭めとし、三年のものが良しとしてある。

主治　【卒心腹痛、鬼疰。血を破り、邪惡氣を辟ける。脹滿には煮汁を服す。桃符と同功である】(藏器)

附方　新一。【風蟲牙痛】門下の桃橛を燒いて汁を取り、少しづつ孔中に納れ、蠟で固める。(聖惠方)

(五)杙橛トハ畜類ヲ繫グ杭ナリ。

(六)産、或ハ客ニ作ル。

桃寄生　木部を見よ。

桃蠹蟲　蟲部に移し入れた。

栗（別錄上品）

和名　しなぐり
學名　Castanea sp.
科名　ぶな科（殼斗科）

〔釋名〕 時珍曰く、栗の字は、說文には㮚と書いて肉——音は條（デフ）——に從ひ、花、實の下垂した狀態を象（あらは）してある。梵書には篤迦（とくか）と名けてある。



〔栗〕

〔集解〕（一） 別錄に曰く、栗は山の陰に生ずる。九月に採る。

弘景曰く、今は會稽、諸曁（しよき）の栗は形は大きいが皮が厚くして美味でない。剡（えん）、及び始豐の栗は皮が

（一）木村（康）曰く、〔原植物〕くり Castanea pubinervis, Schneid. (Fagaceae) C. sinensis.

薄くして甜い。これが佳いのである。

頌曰く、栗は處處にあるが、兗州、宣州のものが最も勝れてゐる。木は、高さ二三丈、葉は極めて櫟に類し、四月に花を開き、青黄色の長條で胡桃の花に似てゐる。實には房彙があつて、大なるは拳ほどあつて中に子が二三箇あり、小なるは桃、李ほどで中の子は惟だ一箇か二箇だ。將に熟せんとするとき(二)罅折して子が出る。栗は類のやはり多いもので、按ずるに、陸機の詩疏には『栗は五方いづれにもある。周秦、吳揚は特に饒いが、ただ濮陽、及び范陽の栗が甜美で味が長く、他の地方のものは及ばない。倭、韓國、諸島地の栗は、大いさ雞子ほどで、味が短くして美味でない。桂陽にある莘栗は叢生するもので、實の大いさは杏仁ほど、皮、子の形色は栗と異らないが、ただ小さいだけである。又、奧栗といふがあつて、いづれも栗と同じだが子が圓くして細く、ただ江、湖だけにある。或はこれは莘といふものだともいふ。莘は音榛(シン)であつて、詩に『莘、栗を樹う』とあるそのものだ。

恭曰く、板栗、錐栗の二樹はいづれも大きく、茅栗は板栗に似て細く、橡子ほどのもので、その樹は小さいけれども葉はやはり異はない。但だ春生じ、夏花さき、

(二)罅折ハサケワレルコト。

秋實り、冬枯れるだけの異ひである。
宗奭曰く、湖北の旋栗といふ一種は、頂が圓くして末が尖つてゐる。卽ち榛栗であつて榛子の形に象たものだ。栗は乾して貯へんとするには曝すに如くはなく、生で貯へんとするには潤すに如くはなく、沙に貯藏すれば夏初に至つてもなほ新しいもののやうだ。
時珍曰く、栗はただ種から成長せしめるもので、移栽することは出來ぬものだ。按ずるに、事類合璧に『栗の木は高さ二三丈、蝟毛のやうに刺の多い苞が生り、枝毎に四五箇を下らず、苞には青、黃、赤の三色がある。中の子は或は單に一箇のもの、或は二箇雙んだもの、或は三箇、或は四箇のものがあり、その殼は生では黃だが熟すれば紫になり、殼の內部に膜があつて仁を裹む。九月霜が降ると熟してその苞が自ら裂け、子が墜ちたものは久しく貯藏し得るが、苞がまだ裂けぬものは腐り易い。その花は條をなし、太さ筯頭ほど、長さ四五寸で、點燈に用ゐられる。栗の大なるものをば板栗といひ、中心の扁子をば栗楔といひ、やや小さきものをば山栗といひ、山栗の圓くして末の尖つたものをば錐栗といひ、圓く小さくして橡子のやうなもの

をば莘栗といひ、小さくして指頭ほどのものをば茅栗といひ、卽ち爾雅の所謂栭栗であつて、一名栵栗といひ、炒つて食へるものだ』とある。劉恂の嶺表錄には『廣中には栗がない。ただ靳州の山中に石栗といふがある。一年にして熟するもので、彈子のやうに圓く、皮が厚くして味は胡桃のやうだ。栗は水果であつて(三)炎方の土地には適しないからではあるまいか』とある。

實　(四)氣味　【鹹し、溫にして毒なし】　詵曰く、吳の栗は大きいけれども味が短く、北方の栗に及ばない。凡そ栗は日中に曝乾して食へば氣を下して補益するが、さなくばやはり木氣があつて補益しない。火で煨いて汗を去つても木氣を殺す。生で食へば氣を發し、煮蒸し、炒熱して食へば氣を壅する。凡そ風、水を患ふ人は食ふべきものでない。味の鹹は水を生ずるものだ。

恭曰く、栗は、粉にして食へば菱、芡に勝る。但し孩兒に食はせると齒が生えなくなる。

宗奭曰く、小兒は多食してはならぬ。生では消化し難く、熟したものは滯氣し、膈食し、蟲を生じて往往にして病を起す。

(三) 炎方ハ南方ナリ。

(四) 木村(康)曰ク、〔成分〕「日食」ニヨレバ可食部八五・五(%)水分六〇・一〇、總窒素〇・五六〇、蛋白質三・五〇、脂肪〇・四一、含水炭素三三・六〇、纖維〇・九〇、無機質〇・八八(內水溶性〇・三二、不溶性〇・五六)、アルカリ價九・二、燐酸〇・一八二、鐵分〇・〇二二ニシテ(二三一頁)、ソノ六四・一〇瓦ガ一〇〇カロリーニ相當ス(二五頁)。又 C. sinensis

ノ果實ハ水分一七(%)含水炭素六二・二、含窒素物七・二、脂肪三・四、粗纖維二・九、灰分二・六ヨリナル(ウ植、二一七)。又南歐、北米ニ産スル C. vesca, Gaertn. (C. vulgaris, Lam., C. sativa, Mill.)ノ成分ヲ参考ニ記セバ、葉ハ單寧九%ノ他蔗糖、葡萄糖、配糖體、脂肪、ペクチン質等ヲ含ム。樹皮ハ單寧ヲ七—一二—一六%含有ス。粗單寧ハ混合物ニシテエラグ酸(一五—二〇%)、クエルツエチン、葡萄糖(一・二%)及ビ沒食子酸(痕跡)ヲ得。材モ亦單寧ニ富ム。又キシラン、澱粉、糖等ヲ含ム。果實ハ子殻八%、仁九二%ニ

【主治】【氣を益し、腸、胃を厚くし、腎氣を補し、人をして飢に耐へしめる】(別錄)【生で食へば腰脚不遂を治す】(思邈)【筋骨の斷碎、腫痛瘀血を療ずるには、生で嚼んで塗るが有效だ】(蘇恭)

栗楔 音は屑(セツ)である。時珍曰く、一毬に三顆あつてその中の扁いものが栗楔である。

【主治】【筋骨風痛】(士良)【血を活すに尤も效がある】頌曰く、現に衡山で活血丹を合せるに用ゐる。【毎日生で七箇を食へば冷痃癖を破る。又、生で嚼んで惡刺を署ひ、箭頭を出し、瘰癧、腫毒痛に傅ける】(大明)

【發明】思邈曰く、栗は腎の果であつて、腎病にはこれを食ふが宜し。

弘景曰く、腰脚弱を患ふある人が、栗の樹の下へ往つて數升を食つたところが、起つて歩めたといふ語り傳ひがある。これは補腎の關係であつて、かく生で噉ふべきものであるが、服餌するには蒸し曝して食ふが宜し。

宗奭曰く、栗の腎を補するはその味の鹹なるがためであつて、又、その氣を滯らすものである。

時珍曰く、栗は五果に於ては水に屬し、水潦の年には栗が熟せぬ。それは類の相

シテ仁中ニ水分二九・三四、澱粉及ビ糖ニ非ル抽分三二・六四、糖（蔗糖）二二・六、蛋白質一〇・九、脂肪一・八四、灰分二・二五及ビ痕跡ノ硅素（一〇〇瓦ノ物質中〇・〇〇五瓦）ヲ有ス。（ウ植、二一五）

〔應用〕クレーマーノ生藥學ニヨレバC. vesca ノ葉ヲ民間ニ鎮咳殊ニ百日咳ニ用フルアリト。

應ずるものである。ある者は内寒で注くが如くに暴洩したが、煨栗二三十箇を食はせると頓に癒えた。腎は大便を主り、栗は能く腎に通ずるものだといふことはこれで判明する。經驗方では、腎虚の腰脚無力を治するに、袋に生栗を盛つて懸けて乾し、毎朝十餘顆を喫し、次に豬腎粥を喫してこれを助け、久しくして必ず强健になる。蓋し風乾した栗は日光で曝したものに勝るのであつて、火で煨き油で炒つたものは煮蒸したものに勝り、それを細かに嚼んで液と共に呑嚥すれば益があるのであるが、若し飽くまで頓食しては反つて脾を傷める結果となるものだ。按ずるに、蘇子由の詩に『老い去つて自ら添ふ腰、脚の病、山翁栗を服す舊傳の方。客來つて爲に說く晨興晩く、三たび咽して徐に收む白玉漿』とあるが、これは栗を食ふの訣を得たものだ。王禎の農書には『史記の記載に「秦飢ゆ、應侯請ふて五苑の棗、栗を發す」とある。これで見ると本草の『栗は腸、胃を厚くし、腎氣を補し、人をして飢に耐へしめる』とある說は虛說でないやうだ』とある。

附方　舊三、新五。【小兒の疳瘡】栗子を生で嚼んで傅ける。（外臺）【葦刺の肉に入りたるとき】方は上に同じ。【馬汗の肉に入りたるとき】瘡と成るものである。

方は上に同じ（勝金方）【馬咬の瘡】獨顆の栗子を燒き研つて傅ける（醫說）【熊、虎の爪傷】方は上に同じ。【小兒の口瘡】大栗を煮熟して日日に與へて食はせる　甚だ效がある。（普濟）【衄血の止まぬもの】宣州の大栗七箇を刺し破り、皮のまま燒いて性を存し、火毒を出し、麝香少量を入れて研匀し、二錢づつを溫水で服す（聖濟總錄）【金刃斧傷】獨殼の大栗を研つて傅ける。或は倉卒に嚼んで傅けるもよし（集簡方）

栗荴　音は孚（フ）である。恭曰く、栗の内側の薄皮である。

［氣　味］【甘し、平にして濇く、毒なし】［主　治］【散に擣き蜜を和して顏に塗れば、光あらしめ、急に皺文を去る】（蘇恭）

［附　方］　新一。【骨鯁の咽に在るもの】栗子の内の薄皮を燒いて性を存して研末し、咽中に吹入れれば下る　○聖濟總錄では、栗子の肉上の皮半兩を末にし、鮎魚肝一箇、乳香二錢半と共に擣いて梧子大の丸にし、鯁の在る遠、近を看て、綿で一丸を裹んで絲で繫ぎ、水で潤して呑み、殼を取つて釣り出す。

栗殼　栗の黑殼である。

［氣　味］　荴に同じ。［主　治］【反胃、消渴には煮汁を飮む】（孟詵）【煮汁を飮

めば瀉血を止める】（大明）

【附方】新一。【鼻衄の止まぬもの】槩(しきり)に醫療しても效なきには、栗殼を燒いて性を存して研末し、二錢を粥飲で服す（聖惠方）

毛毬　栗の外部の刺包である。【主治】【煮汁で火丹毒腫を洗ふ】（蘇恭）

花【主治】【瘰癧】（吳瑞）

樹皮【主治】【煮汁で沙蝨(しやしつ)、溪毒を洗ふ】（蘇恭）【瘡毒を療ず】（蘇頌）【丹毒の五色一定せぬを治す】皮の刺あるものを剝ぎ、水で煎じて洗ふ】（孟詵）記載は肘後方にある。

根【主治】【偏腎氣には、酒で煎じて服す】（汪穎）

天師栗（綱目）

和名　しなとち
學名　Aesculus chinensis, Bunge.
科名　とちのき科（七葉樹科）

【集解】(一)　時珍曰く、按ずるに、宋祁の益州方物記に『天師栗(てんしりつ)は、ただ西蜀の青城山中だけにあつて他の地にはない。これは張天師がこの山で道教の修行をした

(一)　木村（康）曰ク、〔原植物〕ながみとちのき Aesculus chinensis, Bge. (Hippocastanaceae)

時に遺したものだからかく名けたものだといふ。栗に似て味が美い。ただ獨房で椽のやうな點が異ふだけだ』とある。現に武當山から賣出してゐる娑羅子といふは恐らくこの物である。

(二)【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【久しく食すれば風攣を已む】(時珍)記載は益州記にある。



〔天師栗〕——娑羅子——

棗（本經上品）

和名　なつめ
學名　Zizyphus Sativa, Gaertn.(Z. vulgaris, Lam.)
科名　くろうめもどき科（鼠李科）

【釋名】時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『大なるを棗といひ、小なるを棘といふ。棘は酸棗である。棗は性の高いものだから朿を重ね、棘は性の低いものだ

(二) 木村(康)曰ク、(成分)ながみとちのきノ果實ノ仁中ニハ脂肪三一・八(%)、澱粉類三六、纖維一四・七、粗プロテイン一一、抽出分五、灰分二・八、水分八・四五ヲ有ス。脂肪中ニハ(工業的ニ)七〇%ノトリオレイント二〇%ノトリステアリンヲ含有ス。(ウ植、七二五)

から束を並べたのだ。朿の字の音は次(シ)であつて、棗、棘いづれも刺があるからの會意の文字である。

〔集解〕　別錄に曰く、棗は河東の平澤に生ずる。

弘景曰く、河東の猗氏縣の棗が特に異れたものと傳へられてゐるが、今では青州の産が形が大きくして核が細く、多く味つて見ると甚だ甜い。鬱州の互市のものも好いが、小さいだけ及ばない。江東、臨沂、金城の棗は、形が大きくして虛して脂が少いが、好きものはやはり用ゐられる。南棗は大いに惡く、喫ふに堪へない。

頌曰く、近北の州郡にいづれも棗を産するが、ただ青州の種が特に佳く、晉州、絳州のものは大きいけれども青州のものの肉の厚きに及ばない。江南に産するものは堅く燥して脂が少い。現に園圃に種蒔するものにはその種類が甚だ多く、美なるものには水菱棗、御棗の類があるが、いづれも藥に入れるに堪へない。蓋し肌肉が輕虛だからだ。南郡地方で煮て曝乾するものは、皮が薄くして皺み、味は更に他の棗よりも甘い。これを天蒸棗と呼んでゐる。やはり藥には入れない。按ずるに、郭

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕なつめ Zizyphus sativa, Gaertn. (Z. vulgaris, Lam.) いぬなつめ (Rhamnaceae) Zizyphus Jujuba, Lam. (Rhamnaceae) なつめ Z. vulgaris, Lam. var. inermis Bunge.

璞註爾雅には壺棗は大にして鋭し、猶ほ壺、瓠のごとし。邊は腰棗なり、細腰なり。今はこれを鹿盧棗と謂ふ。櫅は白棗なり、子は白くして乃ち熟す。洗は大棗なり、河東猗氏縣に出づ、大いさ雞卵の如し、遵は羊棗なり、實小さくして紫黑なり、俗に羊矢棗と名く。樲は酸棗なり、木小さくして實酢し、還味は稔棗なり、その味短し。蹶泄は苦棗なり、その味苦し、晳は無實棗なり」とある

宗奭曰く、大棗は先づ青州にして次は晉州である。いづれも晒曝して藥に入れるもので、脾、胃を益す。その他



〔棗〕

のものはただ食用に充てるだけだ。青州地方では、皮、核を去つて焙じ乾した棗を棗圈といひ、奇しい果子としてゐる。御棗といふがあつて、甘美にして輕脆である。衆くの棗に後れて熟するもので、蟲が生じ易い。今世間で所謂撲落酥といふはこの物だ。又、牙棗といふがある。衆くの棗に先じて熟し、やはり甘美なもので、微し

酸くして尖長である。この二棗はいづれも噉へるが、取收めて曝して置くわけに行かぬ。

○○時珍曰く、棗は心が赤くして刺があり、四月に(二)尖觥にして光澤がある小葉を生じ、五月に白色にして微し青い小花を開く、南、北いづれにもあるが、ただ青、晉に產するものだけが肥大であり甘美であつて、藥に入れて良品である。その種類は甚だ繁多で、爾雅に記載してある外、郭義恭の廣志には、狗牙、雞心、牛頭、羊角、獼猴、細腰、赤心、三星、駢白の名があり、又、木棗、氐棗、桂棗、夕棗、灌棗、墟棗、蒸棗、白棗、丹棗、棠棗、及び安邑、信都の諸棗がある。穀城の紫棗は長さ二寸あり、羊角棗は長さ三寸ある。密雲に產する小棗は脆く潤ひ、核が細くして味はやはり甘美である。いづれも果子としての食品になるが、藥に入れるに堪へない。藥に入れるには青州、及び晉地の晒乾した大棗を用ゐるに限るを良しとする。按ずるに、賈思勰の齊民要術には『凡そ棗は、赤い時に日日に搣つて取收めて曝すれば紅く皺むが、半赤にして取收めたものは、肉がまだ充滿せぬので乾せば色が黃になる。(三)赤くして取收めたものは味がやはり佳くない』とある。食經の乾棗を作る

(二)尖觥、觥ハ兕ノ角ニテ作ル酒器ノ名ナリ、ソノ器ノ如ク尖レルトノ形容ナリ。

(三)綱目原文ニ『赤收者味亦不佳』トアレドモ、齊民要術ニハ『將赤味亦不佳』トアリテ、將ノ字ヲ幾

及ノ意味ニ用キタルガ如シ。果シテ然ラバ、時珍ノコノ文ハ赤收ノ上ニ『比』ノ一字ヲ誤リ脱セルモノノ如ク、隨テ此ノ譯文モ『赤くして取收めたるものに比し』トスルヲ正シトセン。

(四)胖潤トハ肥エ潤ヒルコトナリ。

法は、必ず地を治淨して菰箔の類を鋪き、それに棗を承けて日に晒し夜に露し、(四)胖潤なるを擇り去り、曝乾して取收める」とある。切つて晒乾したものを棗脯といふ。煮熟して搾出したものを棗膏といひ、また棗瓤といふ。蒸熟したものを膠棗といふ。加ふるに糖蜜を拌ぜて蒸せば更に甜く、麻油葉と共に蒸せば色が更に潤澤になる。棗膠を搗いて晒乾したものを棗油といふ。その方法は、紅く軟かな乾棗を取つて釜に入れ、水で僅に淹けて平にして煮沸し、漉し出して砂盆で研細し、生布で汁を絞り取り、盤上に塗つて晒し乾し、その狀態が油のやうになつたものを手で摩つて刮り、末にして取收め、一匙づつを湯盌中に投ずれば酸、甜の味が完全なる美漿となる。それを米麨に和したものは、最も飢渴を止め、脾、胃を益する。盧諶の祭法に『春祀に棗油を用う』とあるはこの物だ。

生棗

[氣味] 【甘く辛し、熱にして毒なし。多食すれば人をして寒熱せしめる。凡そ羸瘦せるものは食つてはならぬ】思邈曰く、多食すれば人をして熱渴、膨脹せしめ、臟腑を動じ、脾元を損じ、濕熱を助ける。

大棗

【釋　名】 **乾棗**（別錄） **美棗**（別錄） **良棗** 別錄に曰く、八月に採つて曝乾する。瑞曰く、これは晒乾した大棗のことで、味が最も良美だから藥に入るに宜し。今世間では膠棗（れうさう）の肥大なるを用ゐるものもある。

（五）【氣　味】 『甘し、平にして毒なし』 思邈曰く、甘く辛し、熱、滑にして毒なし。杲曰く、溫なり。大明曰く、齒病、疳病、蟲䘌（ちうちく）ある人は棗を啖（く）つては宜くない。小兒は就中食つては宜くない。又、葱と共に食ふことを忌む。人の五臟をして不和ならしめる。魚と共に食へば人をして腰、腹を痛ましめる。

時珍曰く、今は一般に棗を蒸すに多くは糖蜜を拌（ま）ぜるので、久しく食へば最も脾を損じ、濕熱を助ける。棗を啖へば多くは人をして齒が黃になり、䘌を生ぜしめる。故に嵇康の養生論に「齒は晉に處（を）りて黃に、蝨（しつ）は頭に處りて黑し」とある。

【主　治】 『心腹の邪氣。中を安じ、脾氣を養ひ、胃氣を平にし、九竅（きうけう）を通じ、十二經を助け、少氣、津液少きもの、身中不足、大驚で四肢重きを補し、百藥を和す。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べる』（本經） 宗奭曰く、煮て取つた肉は脾、胃

五） 木村（康）曰ク、〔成分〕 Z. sativa, Gaertn. (= Z. vulgaris, Lam.) ノ果實中ニハ粘液質、糖、單寧（一〇%）ヲ樹皮中ニハ七・二%ノ單寧ヲ含有ス。Z. Jujuba, Lam. ノ樹皮ニハ四・一%ノ單寧ヲ、根ニハ二・六―九・三〇%ノ單寧ヲ含有ス。（ウ植、七四一）

なつめ Z. vulgaris, Lam. var. inermis, Bge. ノ果實中ニハ糖分及粘液質ヲ含有ス。（邦藥

植、一四五）又なつめノ一種ニ苦味配糖體ヲ含有スルモノアリ。（ウ植、七四一）二種ノ蜜棗ニツキ検シタルニ、甲、可食部九二・八、水分二三・八四、總窒素○・六三二、蛋白質一・三七、脂肪○・八○、含水炭素六九・[illegible]、纖維二・六九、無機質○・七四、燐酸（十）、石灰○・○六八、鐵○・○三二、食鹽○・一○六、アルカリ價九・三、温量二九六カロリー、乙、可食部八八・七、水分四九・三五、總窒素○・二三四、蛋白質一・四六、脂肪○・一六、含水炭素四二・六四、纖維三・二六、無機質一・七九、燐酸○・二三○、石灰○・○一八、鐵○・○一五、食鹽

の藥を和するに甚だ佳し。【中を補し、氣を益し、志を堅くし、力を强くし、煩悶を除き、心下懸を療じ、腸澼を除く。久しく服すれば饑ゑず、神仙となる】（別錄）【心肺を潤ほし、嗽を止め、五臟を補し、虛損を治し、腸、胃の癖氣を除く。光粉を和して焼いたものは疳痢を治す】（大明）【小兒の秋痢を患ふには、蛀棗を與へて食はすが良し】（孟詵）【烏頭、附子、天雄の毒を殺す】（之才）【陰陽を和し、榮衞を調へ、津液を生ずる】（李杲）

【發　明】弘景曰く、道家でも方藥でも棗は佳餌となつてゐる。その皮は利し、肉は虛を補す。それゆゑに湯に合せるにはみな擘くのである。

杲曰く、大棗は氣、味俱に厚く、陽であつて、温にして不足を補し、甘にして陰血を緩にする。

成無已曰く、邪の榮衞にあるものは辛、甘にて解す。故に薑、棗を用ゐて榮衞を和し、脾、胃の升騰の氣を生發する。張仲景が奔豚を治するに大棗を用ゐたのは、脾土を滋して腎氣を平にしたのである。水飲脇痛を治する十棗湯は、土を益して水に勝つのである。

〇・四四八、アルカリ價一〇・八、温量一八二カロリー。(日食、二二八)
〔應用〕果實ハ生食スベク又諸種ノ砂糖菓子(蜜棗ノ如シ)等トナシテ愛用サル。和漢藥トシテモ重要ナルモノニシテ、民間ニハ解熱劑、强壯藥或ハ緩下劑トス。

〇震亨曰く、棗は土に屬して火を有し、味は甘く、性は緩であつて、甘は先づ脾に入る。脾を補するものとしては未だ嘗て甘を用ゐぬはない。故に現に一般に甘を食ふことの多いものは、脾に必ず病を受ける。

時珍曰く、素問に『棗は脾の果である。脾の病にはこれを食ふが宜し』といつてある。これ病を治するに藥を和することをいつたもので、脾の經の血分の藥である。若し故なくして頻りに食へば、蟲を生じ、齒を損じ、害を貽すことが多いものである。按ずるに、王好古は『中滿のものは甘を食つてはならぬ。甘は人をして滿せしめるものだ。故に張仲景の建中湯は、心下の痞する者に餳、棗を減ずること甘草と同例にした。これは棗を用ゐる方法の適正を得たものだ』といつてある。又、按ずるに、許叔微の本事方には『ある婦人は臟燥を病み、悲泣して止まず、祈禱に手を盡したのであつたが、予は、古方ではこの證を治するに大棗湯を用ゐて治癒せしめたことの記憶を喚び起し、これを與へて服ませると、一劑にして癒えた。古人はかやうに病の認識と治方とに妙絶なところがあつた』とあり、又、陳自明の婦人良方には『程虎卿の內人は、妊娠四五个月にして、晝になると慘戚悲傷して涙を流

し、憑き物があるやうなことも數回あつたので、醫と巫と同時に試みて治療を加へてゐたが、全然效果がなかつた。そのとき管伯周が、大棗湯を用ゐて治すると癒えるものだといふことを先人がいつてゐると話したので、虎卿はその方に從つて治療することにし、一同藥を投ずるとそれで癒えた』とある。方は次項に揭げる。又、摘玄方では『この證を治するに、紅棗を燒いて性を存し、酒で三錢を服す』とある。やはり大棗湯の變法である。

【附　方】　舊七、新十二。　【胃氣を調和する】乾棗を核を去り、煖火で逼燥して末にし、多少を量つて少量の生薑末を入れ、白湯に點てて服す。胃氣を調和するに甚だ良し。（衍義）【反胃吐食】大棗一箇を核を去り、斑蝥一箇を頭、翅を去つてその內に入れ、煨熟して蝥を去り、空心に食つて白湯で呑下すが良し。【小腸氣痛】大棗一箇を核を去り、斑蝥一箇を頭、翅を去つて棗內に入れ、紙で包んで煨熟して蝥を去り、棗を食つて桂心畢澄茄湯で服す。（直指）【傷寒熱病】後に口が乾き、咽が痛み、喜んで唾するには、大棗二十箇、烏梅十箇を搗き、蜜を入れて丸にし、一杏仁ほどを含んで汁を嚥む。甚だ效がある。（千金方）【婦人の臟燥】悲傷して哭せんとし、神

祟がある やうな狀態で數〻欠伸するには、大棗湯を主とする。大棗十箇、小麥一升、甘草二兩を用ゐ、毎服一兩を水で煎じて服す。また脾氣を補す。【妊娠腹痛】大紅棗十四箇を燒き焦して末にし、小便で服す（梅師）【大便燥塞】大棗一箇を核を去り、輕粉半錢を入れて縛定し、煨熟して食ひ、それを棗湯で送下する（直指）【棗を呪して瘧を治す】棗一箇を執つて『吾有棗一枚、一心歸大道、優他或優降、或劈火燒之』と七遍呪を念じて棗の上を吹き、それを病人に與へて食はすれば癒える（岣嶁神書）【煩悶不眠】大棗十四箇、葱白七莖、水三升を一升に煮て頓服する（千金）【上氣欬嗽】傷中で筋脈が急し、上氣咳嗽するを治す。棗二十箇を核を去り、酥四兩を微火で煎じて棗肉中に入れ、泣して酥が盡きてから取收め、常に一箇を含んで微しづつ嚥んで瘥を取る（聖惠方）【肺疽吐血】辛辣の物、熱物を喫つたために傷んだものには、紅棗を核のまま燒いて性を存し、百藥煎を煆き、等分を末にし、二錢づつを米飮で服す。（三因）【耳聾、鼻塞】音聲も香臭も聞えぬには、大棗十五箇を皮、核を去り、蓖麻子三百箇を皮を去り、和し擣いて綿で裹んで耳、鼻を塞ぐ。一日三回、三十餘日にして聲、及び香臭を聞くやうになる。先に耳を治して後に鼻を治す。同時

に塞いではならぬ。(孟詵食療)【久しく服して身體を香しくする】大棗肉に桂心、白瓜仁、松樹皮を和して丸にし、久しく服す。(食療本草)【走馬牙疳】新棗肉一箇を黄蘗と共に燒き焦して末にし、油で和して傅ける。砒少量を加へるならば更に妙である。(王氏博濟)【諸瘡の久壞】癒えぬには、棗膏三升を水で煎じ、頻りに洗つて癒を取る。(千金)【痔瘡疼痛】大肥棗一箇を皮を剝き去り、水銀を取つて掌中で唾で極めて研り熟し、棗瓤に傅けて下部に納入するが良し。(外臺)【下部の蟲癢】大棗を蒸して膏を取り、水銀を和して長さ三寸に捻り、綿で裹んで夜間下部に納れる。翌日蟲がみな出る。(肘後)【卒急心疼】海上方訣に『一箇の烏梅、二箇の棗、七箇の杏仁を一處に搗き、男は酒、女は醋で送下する。心疼を害せずして老に到る』とある。【椒を食して氣閉するもの】京棗を食へば解す。(百一選方)

三歲の陳棗核中の仁 [氣味]【燔けば苦し、平にして毒なし】[主治]【腹痛邪氣】(別錄)【惡氣、卒疰忤】(孟詵)【核を燒き研つて脛瘡に摻るが良し】(時珍)

[發明] 時珍曰く、按ずるに、劉根別傳に『道士陳孜は痴人の如くであつた。江夏の袁仲陽はこれに敬事してゐたが、あるとき孜は「今春は疾に罹るはずだが、

棗核中の仁二十七箇を服するがよい』といつた。後に果して大病に罹つたが、これを服して癒えた』とあり、又『常に棗仁を服すれば百邪が一向に犯さない。仲陽はこれを服して效があつた』とあるところを見ると、棗には果して治邪の說があるのだ。又、道書には『常に棗核を含めば氣を治す。口に津液を行らしめるにはこれを嚥むが佳し』とある。謝承の後漢書にも『孟節は能く棗核を含み、物を食はずして十年ばかりにも達した』とある。これはいづれも棗の津を生じ氣を受ける點を利用したもので、これを嚥むはまた能く「黃宮は以て離坎に交る」の義に達したものだ

葉　氣味　【甘し、溫にして微毒あり】別錄に曰く、散にして服すれば、人をして瘦せしめ、久ければ嘔吐する。　主治　【麻黃を覆ひ、能く汗を出さしめる】（本經）【葛粉に和して熱疿瘡に揩るが良し】（別錄）【小兒の壯熱を治するには、煎湯で浴する】（大明）

附方　新二。【小兒傷寒】五日已後に熱が退かぬには、棗葉半握、麻黃半兩、葱白、豆豉各一合、童尿二鍾を一鍾に煎じ、二回に分服して汗を取る（總錄）【反胃嘔噦】乾棗葉一兩、藿香半兩、丁香二錢半を用ゐ、每服二錢を薑三片、水一盞で煎

じて服す。(聖惠方)

木心 〔氣味〕【甘く澁し、溫にして小毒あり】〔主治〕【中蠱腹痛、面目青黄にして淋露骨立するには、剉んで一斛を取り、水に淹けること三寸にして煮て二斗にし、澄淸して五升に煎じ、早朝五合を服して吐を取れば癒える。又、煎じた紅水を服すれば能く經脈を通ずる】(時珍) 記載は小品方にある。

根 〔主治〕【小兒の赤丹の脚趺より起りたるには、煎湯で頻りに浴する】(時珍) 記載は千金にある。

〔附方〕 舊一。【髮を長くし易い】東行棗根三尺を取つて甑上に横に置き、蒸して兩頭から出る汗を取收めて髮に傅ける。長くし易い。(聖惠方)

皮 〔主治〕【老桑樹皮と共にいづれも北向のものを取り、等分を燒いて研り、一合づつを井水で煎じて澄して淸を取り、目を一个月に三囘洗ふ。昏きものは明を復す。葷、酒、房事を忌む】(時珍)

仲思棗（宋開寶）

和名　未詳
學名　Zizyphus? sp.
科名　くろうめもどき科（鼠李科）?

【釋名】仙棗　志(一)曰く、北齊の時、仙人の仲思といふ者がこの棗を得て種ゑた。それに因んで名としたものである。

【集解】志曰く、仲思棗は、形は大棗のやう、長さ二寸、正紫色で文が細く、核は小さく、味は甘い。今はやはり稀にあるものだ。

時珍曰く、按ずるに、杜寶の大業拾遺記に『隋の時、信都郡から仲思棗を獻じた。長さ四寸、圍五寸、肉肥え、核小さく、味があつて靑州の棗に勝る。また仙棗とも名ける』とある。これで觀ると、廣志の西王母棗、穀城の紫棗はみなこの物の類である。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【虛を補し、氣を益し、五臟を潤ほし、痰嗽、冷氣を去る。久しく服すれば、人をして肥健ならしめ、顏色を好くし、神仙となり、飢ゑず】（開寶）

（一）木村（康）曰く、〔原植物〕Zizyphus sp. Z. Jujuba, Lam. ?

苦棗（食性）

和名　にがなつめ
學名　Zizyphus sativa, Gaertn. var. ?
科名　くろうめもどき科（鼠李科）

【釋名】蹶泄（爾雅）名稱の意義は詳でない

【集解】士良曰く、苦棗は處處にある。色は青くして小さく、味は苦くして使用に堪へぬ。一般にも多く食はない

實【氣味】【苦し、大寒にして毒なし】【主治】【傷寒熱が伏して臟腑に在り、狂蕩し、煩滿し、大、小便が閉澀するものには、肉を取つて煮て硏り、蜜を和して丸にして服す】（士良）

（一）木村（康）曰く、〔原植物〕Zizyphus vulgaris, Lam.

本草綱目果部第二十九卷　終

本草綱目果部

第三十卷

本草綱目果部目錄第三十卷

果の二　山果類三十四種

梨 別錄　鹿梨 圖經　棠梨 綱目　海紅 綱目
木瓜 別錄　樝子 食療　榠樝 圖經　榲桲 開寶
山樝 唐本 即ち山查。　菴羅果 開寶　柰 別錄
林檎 開寶　柹 別錄　椑柹 開寶　君遷子 拾遺 即ち牛奶柹。
安石榴 別錄　橘 本經　柑 開寶　橙 開寶
柚 日華　枸櫞 圖經 即ち香櫞。　金橘 綱目
枇杷 別錄　楊梅 開寶　櫻桃 別錄　山嬰桃 別錄
銀杏 日用 即ち白果。　胡桃 開寶　榛子 開寶
阿月渾子 拾遺　櫧子 拾遺　鉤栗 拾遺　橡實 唐本 即ち櫟子。
槲實 唐本 即ち槲若。

右附方　舊五十二　新一百七十四

果の二　山果類三十四種

梨（別錄下品）

和名　なし
學名　Pirus sinensis, Lindl.
科名　いばら科（薔薇科）

〔釋名〕 **快果　果宗　玉乳　蜜父**　震亨曰く、梨とは利である。その性の下行（かかう）し流利するものだ。弘景曰く、梨は種類は甚だ多いが、いづれもみな冷利であつて、多食すれば人を損ずる。故に俗間ではこれを快果といふ。藥には入れて用ゐない。

〔集解〕(一) 頌曰く、梨は處處にいづれもあるが、種類はそれぞれ異ふもので、醫方では相承（さうしよう）して乳梨、鵞梨を用ゐることになつてゐる。乳梨は宣城に產し、皮が厚くして肉が實し、その味は極めて長い。鵞梨は黃河南北の州郡にいづれもあつて、皮が薄くして漿多く、味はやや短いが、香氣ではよく過ぎてゐる。その他、水梨、消梨、紫糜梨（こびり）、赤梨、青梨、茅梨（ばうり）、甘棠梨（かんだうり）、御兒梨（ぎよじり）など種類は甚だ多いが、いづれも藥に入れない。桑梨なる一種は、ただ蜜で煮て食へば口乾を止め得るが、生で食

(一) 木村（康）曰く、〔原植物〕なし、ありのみ Pirus sinensis, Lindl. var. culta, Makino (Rosaceae)

つては人を益せず、中を冷すものである。又、紫花梨といふがあつて、これは心熱を療ずる。唐の武宗がこの病に罹つて、あらゆる藥も奏效しなかつたとき、青城山の邢道人がこの梨を絞つた汁を進めた。帝の疾はそれで癒えたので、またそれを求めたが得られなかつた。ところが常山郡で忽ち一株を發見して、それを緘封して進獻したので、帝は多くこれを食つたが、煩燥を解するに甚だ效があつた。歲月久しくして木は枯れ、一向に栽植するものもないので、今世間ではそれを得て用ゐるわけに行かなくなつた。

○時珍曰く、梨の樹は高さ二三丈、葉は尖り、光膩にして細齒があり、二月に雪のやうな六出の白花を開く。上巳に風が無いときは結實が必ず佳い。故に古語に『上巳に風あれば梨に蠹あり、中秋に月なければ蚌に胎なし』といふ。賈思勰は『梨は核が每顆に十餘子あるが、これを種ゑるとただ一二子だけ梨が生えてその他はみな杜が生える』といつた。これまた一異である。杜とは棠梨のことだ。梨は品種が甚だ多いが、必ず棠梨、桑樹に接いだものは結子が早くして佳味なのである。梨には青、黃、紅、紫の四色があり、乳梨とは卽ち雪梨、鵝梨とは卽ち綿梨、消梨とは卽

（一）悁ハ怒ナリ。

ち香水梨のことであつて、倶に上品として治病に用ゐられる。禦兒梨とは卽ち玉乳梨の訛であつて、或は、禦兒は一には語兒と書き、蘇州の嘉興縣にある地名で、漢書註に記載があるともいふ。その他、靑皮、早穀、半斤、沙糜の諸梨は、いづれも



〔梨〕

粗濇なもので問題にならぬ。ただ蒸煮し、及び切り烘いて脯にするだけのものである。醋梨なる一種は、水を易へて煮熟すれば甜美であつて人を損じない。昔は一般に、梨はいづれも常山、眞定、山陽、鉅野、梁國、睢陽、齊國、臨淄、鉅鹿、弘農、京兆、鄴都、洛陽を以て代表されたといふ。蓋し好き梨は多くは北土に產し、南方ではただ宣城のものを勝れたものとするだけだ。故に司馬遷の史記に『淮北、滎南、河濟の間、千株の梨、其の人千戶侯と等し』とある。又、魏の文帝の詔に『眞定の御梨、大いさ拳の如し、甘きこと蜜の如く、脆きこと菱の如し、以て煩を解し、（一）悁

を釋くべし』とある。辛氏の三秦記には『含消梨は大いさ五升の器ほどあり、地に墜ちると破れるので、嚢で承けて取らねばならぬ。漢の武帝が嘗て上苑に種ゑた』とある。これまた梨の奇品である。物類相感志には『梨と蘿蔔と相間へて貯藏するか、或は梨の蔕を削り、蘿蔔の上に(三)種ゑて貯藏すれば、いづれも年を經て爛れずにある』とある。現に北方の地では一箇毎に樹上で包裹し、冬を過ぎてから摘み取るが、やはり妙である。

實

(四)氣味　【甘く微し酸し、寒にして毒なし。多食すれば人をして寒中し、萎困せしめる。金瘡、乳婦、血虛の者は尤も食つてはならぬ】志曰く、別本に『梨は甘し、寒なり。多食すれば冷痢と成る。桑梨は生で食へば中を冷し、人に益あらず』とある。

主治　【熱嗽。渇を止める。切片して湯火傷に貼れば、痛まず、爛れぬ】(蘇恭)【客熱、中風不語を治し、傷寒熱發を治し、丹石熱氣、驚邪を解し、大、小便を利す】(開寶)【賊風を除き、心煩、氣喘、熱狂を止める。漿に作れば風痰を吐す】(大明)【卒暗風不語には、生で擣いて汁を頻りに服す。胸中痞塞、熱結には多くこれを食

(三) 種ハ重ノ寫誤ニハアラザルカ。

(四) 木村(康)曰ク、(成分)なしノ葉ニハアルブチン(配糖體)(〇・三〇%内外、單寧三%内外ヲ含有ス。(刈米、木村―藥誌四九四(大・一二)二四七)「日食」ニヨレバ、なしノ果實ハ可食部九四・〇(〇%)、水分三六・七〇、總窒素〇・〇六四、蛋白質〇・四〇、脂肪〇・〇二、含水炭素一二・四〇、纖維〇・六〇、無機質

〇・五五、アルカリ價一・八、燐酸〇・〇六三、石灰〇・〇二二、鐵分〇・〇一四、食鹽〇・〇〇六、温量(カロリー)五三ナリト(二二七頁)。〔應用〕葉ハアルブチンヲ含有スルヲ以テウワウルシ葉ニ代用シ尿道消毒藥ニ供用スルヲ得ベシ。一日用量一〇瓦、煎劑トス。民間梨ノ實ヲ其儘火鉢ノ中ニ埋メテ燒キ中ノ軟カニナリタルヲ取出シ布ニテ搾リテ得タル汁ハ鎭咳ノ效アリ、殊ニ百日咳ニ效アリトイフ。(邦藥植、二〇四)

ふが宜し】(孟詵) 【肺を潤ほし、心を涼し、痰を消し、水を降し、瘡毒、酒毒を解す】(時珍)

【發明】 宗奭曰く、梨は、多食すれば脾を動じ、少ければ病に功力を及ぼさない。梨を用ゐるにはこの點を斟酌すべきものである。ただ酒のための病で煩渇する人は、これを食ふが甚だ佳いのであるが、結局病を却けるといふわけには行かぬ。

愼微曰く、孫光憲の北夢瑣言に『朝廷の一官吏を奉御の梁新が診て「風疾が已に深くなつてゐるから、速く辭し歸られるがよい」といつた。復た鄜州の馬醫趙鄂に會つたとき診てもらふと、その言ふところは梁と同じであつたが、ただ「多く消梨を喫ひ咀齕して汁を絞るに及ばずして飮まれるがよい」といつた。そこで家に歸著してから、十日ばかりただ消梨だけを喫つてゐると、頓に爽になつた』とある。

時珍曰く、別錄の梨の記述には、ただその害を指摘するだけでその功を說明せず、陶隱居の說では、梨は藥に入れないとあるが、蓋し古代には病を論ずるに、多く風寒を主とし、用ゐる藥はいづれも桂、附だつたから、梨に風熱を治し、肺を潤ほし、

心を涼し、痰を消し、火を降し、毒を解する功力のあることを知らなかつたのだ。今は一般に痰病、火病が十中の六七に相當する位だから、梨の益あること蓋し少しとなさぬのである。但だ過食してはならぬだけだ。按ずるに、類編に『ある紳士が疾があるらしく、厭厭として無聊の狀態であつたので、楊吉老を訪ねて診てもらふと、楊は「あなたは熱證が已に極つて、氣、血が消鑠してゐる。これから三年經つたならば疽のために死ぬだらう」といつた。紳士は怏怏として立去つたが、茅山に醫術神に通ずる人で、自ら世間に知られることを欲しないある道士がゐるといふことを聞き、そこで下僕の用ゐる衣服を身に裝ひ、山に登つてその道士に謁見し、薪水の役に服して弟子たらんことを哀願すると、道士はそのままその紳士を弟子の中に加へてくれたので、久しくしてから目的の事實を道士に告白した。すると道士は診察して、笑つていつた「其方は山を下つて、但だ日日に好き梨一顆を喫ふがよい。生の梨がなくなつたならば乾いたものを取つて湯に泡け、滓を食ひ汁を飲むのだ。それで疾は平安になるに相違ない」と。紳士はその戒の如くにして一个年を經てから、復び吉老を訪ねて見た。吉老はその顏貌の腴澤にして脈、息の和平なるを一見

し、驚いて「君は必ず異人に遇はれたに相違あるまい。さもなくば痊える筈はない」といつた。紳士は備に右の次第を吉老に告げたので、吉老は衣冠を具し、茅山を望んで禮拜し、自らその學の未だ至らざることを懺悔した』とある。これは北夢瑣言の説と彷彿たるもので、この二个條の説に據つて觀れば、梨の功は少かな補ひ位とはいふわけに行くまい。然し惟だ乳梨、鵞梨、消梨だけが食へるので、その他の梨ではやはり病を去る功能はない。

附方 舊六、新三。【消渇飲水】香水梨、或は鵞梨、或は江南の雪梨を用ゐていづれもよし 汁を取り、蜜湯で熬成して瓶に取収め、時に拘らず熱水、或は冷水で調へて服す。癒えれば止める(普濟方)【卒に起つた欬嗽】頌曰く、崔元亮の海上方では、好き梨を核を去つて搗いた汁一椀に椒四十粒を入れ、煎じて一沸して滓を去り、黑餳一大兩を納れて消け訖つてから少しづつ含んで嚥む。立ろに定まる。○詵曰く、梨一顆に五十の孔を刺しあけ、毎孔に椒一粒を納れて麪で裹み、灰火で煨熟し、停めて冷して椒を去つて食ふ。又ある方では、核を去つて酥、蜜を納れ、麪で裹んで燒き熟し、冷して食ふ。又ある方では、切片して酥で煎じて食ふ。又ある

方では、搗汁一升に酥、蜜各一兩、地黄汁一升を入れ、煎成して含み嚥む。凡そ嗽を治するには、喘急の定まる時を待つて冷して食ふべきものであつて、若し、熱食するならば反つて肺を傷め、嗽をして更に劇しからしめ、救ふべからざらしめる。その場合には、羊肉湯餅を作つて飽食すれば佳し。【痰喘氣急】梨を剜りあけて小黒豆を塡滿し、取つてある蓋を當てて合せて縛り、糠火で煨熟し、搗いて餅にし、日毎に食ふ。至つて效がある。（摘玄）【暗風失音】生梨の搗汁一盞を飲む。一日二回服す。（食療本草）【小兒の風熱】昏憒し、躁悶して食事不能なるには、消梨三箇を切り破り、水二升で煮て汁一升を取り、粳米一合を入れて粥を煮て食ふ。（聖惠方）【赤目弩肉】晝夜痛むには、好き梨一顆を取り、搗いて汁を絞り、綿で黄連片一錢を裹んでその汁に浸し、仰臥して點ける。（圖經）【赤眼腫痛】鵞梨一箇の搗汁に、黄連末半兩、膩粉一字を和勻して綿で裹んで浸し、日日に點ける。（聖惠）【反胃轉食】藥物の下らぬには、大雪梨一箇の中に丁香十五粒を刺し入れ、濕紙で四五重に包んで煨熟して食ふ。（總錄）

花　主治　【面黒粉滓を去る】（時珍）方は李花の條下にある。

葉【主治】【霍亂吐利の止まぬには煮汁を服す。煎にしたものは風を治す】(蘇恭)【小兒の寒疝を治す】(蘇頌)【搗汁を服すれば菌の中毒を解す】(吳瑞)

【附方】舊三、新一。【小兒の寒疝】腹痛して大いに汗の出るには、梨葉の濃煎七合を數服に分けて飲む。大いに良し。これは徐玉が經驗の方である。(圖經本草)【水中毒の病】初期に頭痛し、惡寒し、拘急し、心煩するには、梨葉一把を搗き爛らし、酒一盞で攪ぜて飲む。(篋中方)【蠷螋尿瘡】黃水を出すものには、梨葉を一回塗つて乾けば易へる。(篋中方)【梨の過食傷】梨葉の煎汁が解す。(黃記)

木皮【主治】【傷寒時氣を解す】(時珍)

【附方】新四。【傷寒溫疫】已に發せるもの、未だ發せぬもの、梨木皮、大甘草各一兩、黃秫穀一合を末にし、鍋底煤一錢とを用ゐ、一日二回、三錢づつを白湯で服して瘥を取る。これは蔡醫博の方である。(黎居士簡易方)【霍亂吐利】梨枝の煮汁を飲む。(聖惠)【氣積鬱冒】氣が臍の左右から起つて上衝し、胸滿し、氣促し、鬱冒し、厥する人がある。それには、梨木灰、雞が抱いて孵出した卵殼の白皮、紫菀、麻黃を節を去り、等分を末にして糊で梧子大の丸にし、十丸づつを酒で服す。また

末にして方寸匕を服し、或は湯に煮て服するもよし。(總錄)【結氣欬逆】三十年のものもこれを服すればやはり瘥える。方は上に同じ。

鹿梨（圖經）

和名　つぶなし
學名　Pirus Callergana, Decne.
科名　いばら科（薔薇科）

【校正】もとは梨の條下に附してあつたが、本書には一條を分出した。

【釋名】**鼠梨**（詩疏）**山梨**（毛詩）**陽遂**（爾雅）**羅**　時珍曰く、爾雅に『檖は羅なり』とあつて、その木には羅のやうな紋があるからかく名けたのだ。詩に『隰に樹檖あり』とあり、毛萇の註に『檖、一名赤羅、一名山梨、一名樹梨、今世間では陽檖といふ』とある。陸機の詩疏には『檖、即ち鹿梨であつて、一名鼠梨といふ』とある。

(一)【集解】頌曰く、江寧府、信州の一種の小梨を鹿梨と名ける。葉は茶のやう、根は小拇指ほどのものだ。彼の地では皮を取つて瘡を治す。八月に採る。近き地方

(一)　木村(康)曰ク、〔原植物〕いぬなし Pirus Calleryana,

Decne.(Rosaceae) ななかまど P. Aucuparia, Gaertn. var. まめなし、いぬなし P. dimorphophylla Makino.

にもあるが、ただ實を採つて乾物にするだけで藥に入れることをば知らない。

時珍曰く、山梨は野梨であつて處處にある。梨の大いさは杏ほどで食へるものだ。その木は文が細密で、赤きものは文が急であり、白きものは文が緩である。按ずるに、陸機は『鹿梨は、齊郡、堯山、魯國、河內いづれにもある。人家でやはり栽培してあつて、實は梨に似て酢く、美味で脆いものがある』といつた。

實 〔氣味〕【酸く澁し、寒にして毒なし】〔主治〕【煨いて食へば痢を治す】（蘇頌）

根皮 〔氣味〕 實に同じ。 〔主治〕【瘡疥。煎じた汁で洗ふ】（蘇頌）

〔附方〕 新二。【一切の瘡】鹿梨散——鹿梨根、蛇牀子各半斤、眞剪草四兩、硫黃三錢、輕粉一錢を末にし、麻油で調へて傅ける。小兒の場合には、絹衣に塗りつけ、それを著せて七日間解かずに置く。自ら癒える。（仁存方）【一切の癬】鹿梨根を皮を刮つて搗き爛らし、醋で和して麻布で包んで擦る。乾いたものは末にして水を和して搗く。（唐瑤經驗方）

棠梨（綱目）

和名　しなまめなし
學名　Pirus betulaefolia, Bunge.
科名　いばら科（薔薇科）

【釋名】時珍曰く　爾雅に『杜は甘棠なり』とあり、赤きものは杜、白きものは棠だといひ、或は牝を杜といひ、牡を棠といふといひ、或は澀いものが杜、甘いものが棠であつて、杜とは澀をいひ、棠とは餹の意味だといふ。この三種の説はいづれも通ずるが、第三説の方が正しきに近い。

【集解】（一）時珍曰く、棠梨とは野梨のことで、處處の山林にある。樹は梨に似て小さく、葉は蒼朮の葉に似たもので、やはり團なるものと三叉あるものとあり、葉は邊にいづれも鋸齒があり、色は頗る黪白である。二月に白い花を開き、結實は小さい楝子の大いさほどのもので、霜の下りた後に食へる。その樹に接いだ梨は甚だ嘉いもので、甘酢、赤白の二種ある。按ずるに、陸機の詩疏には『白棠は甘棠であつて、子が多く、酸美にして滑だ。赤棠子は澀くして酢く、木の理もやはり赤い。弓の材料になる』とあり、救荒本草には『その葉は味微し苦く、嫩いときに

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕Pirus betulaefolia, Bge. (Rosaceae) たいわんいぬなし、せいばんずみ P. Koehnei, Schn. (P. Kawakamii Hayala.)



〔棠　梨〕

煠熟して水に浸し、淘淨して油、鹽で調理すれば食へるものだ。或は蒸し晒して茶の代りになる。花もやはり煠て食へる。或は晒し乾して麪に磨り、燒餅にして食ふ。それで飢饉が凌げる』とある。又、楊愼の丹鉛錄には『尹伯奇は楟花を採つて飢を凌いだ』とあり、註釋者は『楟とは山梨のこと、乃ち今の棠梨のことだ』といふが、その是、否のほどは判らぬ。

實 [氣味] 【酸く甘く澁し、寒にして毒なし】 [主治] 【燒いて食へば滑利を止める】（時珍）

枝葉 [氣味] 實に同じ。 [主治] 【霍亂吐瀉の止まぬもの、轉筋腹痛には、一握を取つて木瓜二兩と共に煎じ、汁を少しづつ呷ふ】（時珍） 聖惠方。

[附方] 新一。 【反胃吐食】 棠梨葉を油で炒り、刺を去つて末にし、毎早朝酒で一錢を服す。（山居四要）

(一) 木村(康)曰く、
〔原植物〕かいだう
Pirus spectabilis,
Ait. (Rosaceae)
おほながさきずみ、
おほながさきりんご
Malus spectabilis,
Bork. (Rosaceae)
Malus floribunda,
Sieb.

海紅（綱目）

和名　みかいだう
學名　Malus micromalus, Makino.
科名　いばら科（薔薇科）

〔釋名〕**海棠梨**　時珍曰く、按ずるに、李德裕の花木記に『凡そ花木の名に海の字を付けて呼ぶものはみな海外から來たもので、海棠の類の如きがそれだ』とある。又、李白の詩の註に『海紅とは花の名である。新羅國に甚だ多く出る』とあるところを見ると、海棠が海外から來たといふことに根據がある。

〔集解〕(一) 時珍曰く、飲膳正要の果類に海紅があつて出處が明にされてないが、これは海棠梨の實のことで、形狀は木瓜のやうで小さく、二月に紅花を開き、實は八月になつて熟するものだ。鄭樵の通志には『海棠子を海紅と名ける。卽ち爾雅の赤棠である』とあり、沈立の海棠譜には『棠に甘棠、沙棠、棠梨があるが、いづれも海棠ではない。海棠は蜀中に盛である。その江南に産するものをば南海棠と名け、大體に於て相類するが花がやや小さい。棠は性多く梨に類し、その核は生では長いものだ。緩慢なもので、數十年にして花が咲く。枝を以て梨、及び木瓜に接いだも

(二) 木村(康)日ク、「成分」かいだうノ幼條、樹皮、幼芽等ヨ

のは茂り易い。その根は色が黄で蟠つて勁く、且つ木堅にして節が多く、外は白くして中が赤い。その枝は柔密にして條が暢び、その葉は杜に類して大なるは縹緑色、小なるは淺紫色である。二月に五出の花を開き、初は色が臙脂のやうで點點然と愛



〔海紅〕

くるしいが、開くと漸次に纈つたやうに暈け、落ちたときは宵の化粧のあさましい名殘を見るやうだ。その蔕は長さ一寸餘、淡紫色で、或は三萼、五萼が叢をなし、その蕊は金粟のやうで中に紫鬚がある。その實の形狀は梨のやう、大いさは櫻桃ほどで、秋になると食へる。味は甘く酸い。大體に於て海棠花は紫綿色のものを正とし、その他はみな棠梨である。海棠の花は香くないが、ただ蜀の嘉州のものだけは香があつて木が大きい。黄海棠といふ花の黄なるもの、貼幹海棠といふ花が小さくして鮮なもの、垂絲海棠といふ花が粉紅で下に向くものがあるが、いづれも子がなく、

眞の海棠ではない』とある。

子　(二)〔氣味〕【酸く甘し、平にして毒なし】〔主治〕【洩痢】（時珍）記載は正要にある。

木瓜（別錄中品）

和名　ぼけ
學名　Chaenomeles lagenaria, Koidz.
科名　いばら科（薔薇科）

〔釋名〕**楙**　音は茂（ボ）である。時珍曰く、按ずるに、爾雅に『楙は木瓜なり』とあり、郭璞の註に『木の實である。小さい瓜のやうで、酢くして食へるものだ』とあつて、木瓜なる名稱はこの意味を取つたものだ。或は『木瓜とは味が酸く、木の正氣を得たものだから名けたものだ』ともいふが、やはり通ずる。楙の字は林、矛に従ふ諧聲である。

(一)〔集解〕弘景曰く、木瓜は山陰、蘭亭に尤も多く、彼の地ではこれを良果としてある。又、榠樝といふ大きくして黄なるものがあり、樝子といふ小さくして澁いものがある。禮記に『樝、梨、之を鑽す』とあつて、古代にはやはり樝を果とした

り青酸ヲ含ム餾液ヲ得ベシ。（ウ植、四五一）

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕くわりん Cydonia chinensis, Thouin. (Rosaceae) ぼけ C. japonica, Pers.

〔備考〕本邦ニテくさぼけ Chenomeles japonica, Lindl. ノ果實ヲ和木瓜トイフ。

ものだが、今ではしなくなつた。

保昇曰く、その樹は枝が柰のやうで花は房をなし、生る子の形は苦樓に似たもので、火で乾せば甚だ香しい。樝子は梨に似て酢いものだ。江外では普通に果として食ふ。



〔木瓜〕

頌曰く、木瓜は處處にあるが、宣城のものが佳い。木の狀態は柰のやうで、春末に深紅色の花を開く。その實は大なるは瓜ほど、小なるは拳ほどで、表面が黃で粉を著けたやうだ。宣州地方ではこれを非常に大切にして栽培し、山にも谷にも一面にある。始めて實が成つたとき、花型に刻んだ紙をその實の上に粘り纏へて置くと、夜露され晝日光に烘けて漸次と紅花色に變ずるその文が自然に生じたもののやうになる。宣州ではそれを土貢に充てるので、宣城の花木瓜なる名稱がある。榠樝は木瓜に酷似したものだが、ただ蔕の部分を看て、別に乳のやうな重蔕のある

水分七八・七九、總窒素〇・〇六二、蛋白質〇・三九、脂肪〇・一九、含水炭素一八・二一、纖維一・九九、無機質〇・六六、燐酸〇・〇三九、石灰〇・〇五八、鐵〇・〇〇二ニシテ温量二〇カロリーナリ(二二七頁)ぼけハ葉ニハアミグダリンヲ含ム。成熟果實ノ組成ハ乾燥物質中、轉化糖三四・八%蔗糖九・二、ペクチン一六・三、林檎酸一四、含窒素物二・三、灰分五・六%。種子ハアミグダリン及エムルシンヲ有シ青酸ヲ生ジ又乾燥物質中一七・八%ノ脂肪油ヲ含ム。(ウ植、四四一)くさぼけノ果實ハ林檎酸二—三%ヲ含有ス。堀鐵之丞、黑野島吉—藥誌一三四(明、

【主治】【濕痺脚氣、霍亂の大いに吐下するもの、轉筋の止まぬもの】(別錄)【脚氣衝心を治するに、嫩きもの一箇を取つて子を去り、煎じて服するが佳し。筋骨を强くし、冷氣を下し、嘔逆、心膈の痰唾を止め、食を消し、水を止める。利後に渴して止まぬには飮にして服す】(藏器)【營衞を調へ、穀氣を助ける】(雷斅)【吐瀉、奔豚、及び水腫、冷熱痢、心腹痛を止める】(大明)【濕を去り、胃を和し、脾を滋し、肺を益し、腹脹して善く噫するもの、心下煩痞を治す】(好古)

【發明】杲曰く、木瓜は手、足の太陰の血分に入り、氣脫には能く收し、氣滯には能く和す。

弘景曰く、木瓜は最も轉筋を療ずるもので、轉筋した場合、ただその名を呼び、また上に『木瓜』の字を書いてもみな癒えるが、その關係は一向に解らない。俗間では、木瓜の杖をつき、それで筋脈を利するといつてゐる。

宗奭曰く、木瓜は木としての正を得たもので、酸は能く肝に入るものだから筋と血とを益するのだ。腰腎、脚膝無力を病むものに取ては、いづれも缺くべからざるものである。世間で、鉛霜、或は胡粉を塗り、それで酢味が失せ、且つ滓がなくな

二六)三六〇、一六一(明、二八)五六〇。

るが、蓋し金の制を受けるのだ。

時珍曰く、木瓜の主とする所の霍亂吐利、轉筋、脚氣はいづれも脾、胃の病であつて、肝の病ではない。肝は筋を主るものではあるけれども、しかし轉筋の場合は濕熱、寒熱の邪が襲ふて脾、胃を傷めるために起るものだ。故に筋の轉ずるは必ず足腓から起るのであつて、腓、及び宗筋はいづれも陽明に屬する。木瓜の轉筋を治するは筋を益するのではなく、脾を理して肝を伐つのである。土病は金が衰へて木が盛なるものだから、酸、溫を用ゐて脾、肺の耗散を收めて、その筋に走つて肝の邪を平にする作用を利用し、それで土中に木を瀉して金を助けるのであつて、木が平なれば土が令を得て金が蔭を受けるのである。素問に『酸は筋に走る。筋病には酸を多く食ふこと無れ』といひ、孟詵は『木瓜を多く食へば齒、及び骨を損ずる』といつた。いづれも肝を伐つの明驗であつて、木瓜の手、足の太陰に入り、脾、肺の藥であつて肝の藥でないことは益す徵すべきである。又、鍼經に『酸を多食すれば人をして癃せしめる』とあつて、酸は胃に入るとその氣が濇にして收し、兩焦の氣が出入不能となり、胃中に流入して膀胱に下注する。胞は薄くして軟なもので、

酸を得れば縮り、卷約して不通となる。故に水道が利せずして癃濇するのだ。羅天益の寶鑑に『太保劉仲海は蜜煎の木瓜三五箇を日日に食つてゐたが、同樣にしてゐた數人がいづれも淋疾を病んで天益に相談があつたので、天益は「これは酸を食つたために起つたもので、但だ奪食すれば已む。陰の生ずるところは本づくところ五味にあり、陰の營むところは傷ること五味にある。五味太だ過ぐればみな能く人を傷るので獨り酸のみではない」といつた』とある。又、陸佃の埤雅には『俗に梨は百損一益、楙は百益一損といふ。故に詩に「我に投ずるに木瓜を以てす」といつたのはその益あることを取つたものだ』とある。

【附方】　舊二、新十。【項强筋急】轉側し得ぬは、肝、腎に風を受けたのである。宣州の木瓜二箇を用ゐ、蓋にするだけを切り取つて置いて瓤を去り、沒藥二兩、乳香二錢半の二味をその木瓜の中に入れて縛定し、飯の上で三四回蒸し、研り爛らして膏にし、三錢づつに生地黃汁半盞を入れ、無灰酒二盞で煖め化かして溫服する。許叔微は『ある人がこれを患つて、午後に發して夕刻になると定るのであつた。予が謂ふに、この容體を見るに必ず先づ足から起るのであるが、少陰の筋は足から項

に至るものであり、筋は肝の合である。この病は日中から夕刻までで、これは陽中の陰、肺である。離の刻から兌の刻までは陰が旺にして陽が弱い時だ。故に靈寶畢法に「離より乾に至り、腎氣絶して肝氣弱し」とある。肝、腎の二臟に邪を受けるからこの時刻に發するのだ。そこで予がこの方、及び都梁丸を與へて服ませると、それで癒えた」といつた。(本事)【脚氣腫急】木瓜を切片して囊に盛り、それを踏む。廣德の顧安中が脚氣を患ひ、筋急し、腿腫したが、たまたま舟を傭ふて出發し、舟の中で足を一箇の袋上に閣いてゐると、漸次に痛を覺えなくなつた。そこで船夫にその袋の中に何物が入れてあるかと訊ねて見ると、それは宣州の木瓜だといつた。歸着してから木瓜袋を作つて用ゐると、頓て癒えた。(名醫錄)【脚筋攣痛】木瓜數箇を酒、水各半で煮爛し、膏に搗いて熱に乘じて痛處に貼り、帛で裹む。冷えれば換へて一日三五回試みる。(食療本草)【臍下絞痛】木瓜三片、桑葉七片、大棗三箇、水三升を半升に煮て頓服すれば癒える。(食療)【小兒の洞痢】木瓜の搗汁を服す。(千金方)【霍亂轉筋】木瓜一兩、酒一升を煎じて服す。酒を飲まぬものは湯に煮て服す。かくて煎湯に靑布を浸してその足を裹む。(聖惠)【霍亂腹痛】木瓜五錢、桑葉三片、棗

肉一箇を水で煎じて服す。（聖惠方）【四蒸木瓜圓】肝、腎、脾の三經が氣虛し、風寒のために暑溼相搏つて經絡に流注し、凡そ氣化の更變に遇へば七情和せずして必ず發動するに至り、或は腫滿し、或は、頑痺し、憎寒壯熱し、嘔吐し、自汗し、霍亂吐利するを治す。宣州の大木瓜四箇を用ゐ、蓋を切り取つて剜り空けて聽用し、一箇には黃芪、續斷末各半兩を入れ、一箇には蒼朮、橘皮末各半兩を入れ、一箇には烏藥、黃松節末各半兩を入れ、——黃松節とは伏神の中心の木である——一箇には威靈仙、苦葶藶末各半兩を入れ、先に切り取つてある蓋をして簪定し、酒を用ゐてそれに浸透し、甑に入れて蒸熟し、三回晒して三回浸し、三回蒸して三回晒して末に搗き、楡皮末と水で和した糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを溫酒、鹽湯の任意のもので服す。（御藥院方）【腎臟の虛冷】氣攻して腹、脇が脹滿し、疼痛する。大木瓜三十箇を皮、核を去つて剜り空け、甘菊花末、靑鹽末各一斤を塡滿し、籠中に入れて蒸熟して搗いて膏にし、新艾茸二斤を入れて搜和して梧子大の丸にし、一日二回、三十丸づつを米飮で服す。（聖濟總錄）【髮の槁れて澤なきもの】木瓜を浸した油で頭を梳る。（聖惠方）【反花痔瘡】木瓜を末にし、鱓魚身上の涎で調へて貼り、紙

で護作する。（醫林集要）【壁蝨の辟除】木瓜を切片して席下に鋪く（臞仙神隱）

木瓜核 〔主治〕【霍亂の煩躁、氣急には、七粒づつを嚼んで溫水で嚥む】（時珍）

記載は聖惠にある。

枝 葉 皮 根 〔氣味〕【いづれも濇し、溫にして毒なし】〔主治〕【煮汁を飮む。いづれも霍亂の吐下、轉筋を止め、脚氣を療ずる】（別錄）【枝を杖にすれば筋脈を利す。根、葉を煮た湯を足に淋すれば蹷が已むものだ。木を材料として作つた桶で足を濯ふが甚だ人を益する】（蘇頌）【枝、葉の煮汁を飮めば熱痢を治す】（時珍）

花 〔主治〕【面黑粉滓】方は李花の條を見よ。

記載は千金にある。

樝子

音は渣（サ）である。（食療）

和名 くさぼけ
學名 Chaenomeles japonica, Lindl.
科名 いばら科（薔薇科）

〔校正〕 もとは木瓜の條下に附錄してあつたが、本書では一條を分出した。

【釋名】 **木桃**（埤雅） **和圓子**　時珍曰く、木瓜は酸く香くして性は脆いが、木桃は酢く澀くして渣が多い。故にこれを樝といふ。雷公炮炙論に和圓子とあるがこの物だ。

【集解】 藏器曰く、樝子は中都に生ずる。榲桲に似て小さい。江外では常に果として食ふが、北方の地にはない。

頌曰く、處處にあるが、孟州に特に多い。

弘景曰く、禮に『樝梨はこれを鑽る』とあるは核を鑽り去るといふ意味だ。鄭玄はそれを識らずして、これを梨の臧からぬものだからとし、郭璞はこれを梨に似て酢く澀いものとした。古代にはこれを果としたものだが、今では果になるものとして扱はなくなつた。

時珍曰く、樝子とは木瓜にして酢澀なるもののことで、木瓜よりも小さく、色は微黄、蔕、核みな粗く、核中の子は小さくして圓いものだ。按ずるに、王禎の農書に『樝は小さい梨に似たもので、西川、唐、鄧地方で多く種ゑてゐる。味は梨と木瓜とに比して劣るが、蜜煮湯に入れるとそれ等よりも香美になる。莊子に「樝、梨、

橘、柚、いづれも口に可し」とあり、淮南子に「樝、梨、橘を樹ゑ、これを食へば則ち美なり、これを嗅げば則ち香し」とあるは、いづれもこの物を指したのだ』とある。

【氣味】【酸く濇し、平にして毒なし】詵曰く、多食すれば氣を傷め、齒、及び筋を損ふ。【主治】【痢を斷つ】(弘景)【惡心咽酸を去り、酒痰黃水を止める】(藏器)【煮汁を飲めば霍亂轉筋を治す。功は木瓜と相近し】(孟詵)

榠樝

音は冥渣(メイサ)である。（宋圖經）

和名　くはりん
學名　Chaenomeles sinensis, Koehne.
科名　いばら科(薔薇科)

【校正】もとは木瓜の條下に附錄してあつたが、本書には一條を分出した。

【釋名】蠻樝(通志)　瘙樝(拾遺)　木李(詩經)　木梨(埤雅)　時珍曰く、木李は呉越に生ずる。故に鄭樵の通志にこれを蠻樝といひ『俗に木梨と呼ぶ』といつたのだ、これで見ると榠樝といふは蓋し蠻樝の訛である。

【集解】頌曰く、榠樝の木は、葉、花、實が酷だ木瓜に類してゐるが、但だ木瓜に比し大きくして色が黄だ。これを辨別するには、ただ蒂の部分を看て別に重蒂が乳のやうになつてゐるものは木瓜であり、それのないものは榠樝である。これを浸した酒は痰を去る。道家では生で壓して汁を取り、甘松、玄參末を和して濕香を作る。甚だ神を爽にするものだといふ。



〔榠樝〕
――樝子も同じ――

詵曰く、榠樝の氣は辛香であつて、これを衣箱中に入れて置けば蠹、蟲を殺す。

時珍曰く、榠樝とは木瓜の大きくして色黄に、重蒂のないもののことであつて、樝子とは木瓜の短小にして味の酢く澁いもののことだ。榲桲といふは樝の類にして北方の土に生ずるもののことだ。この三物は木瓜といづれも一類中のそれぞれの種別である。故にその形狀、功用は甚だ遠くはない。ただ木瓜が木の正氣を得てゐる

ので貴ばれるだけのことだ。

【氣味】【酸し、平にして毒なし】【主治】【酒を解し、痰を去る】(弘景)【これを食へば惡心を去り、心中の酸水を止める】(藏器)【煨いて食へば痢を止め、油に浸して頭を梳れば白髮、赤髮を治す】(大明)【煮汁を服すれば霍亂轉筋を治す】(吳瑞)

榲桲 音は温孛(チンホツ)である。 (宋開寶)

和名 まるめろ
學名 Cydonia vulgaris, Pers.
科名 いばら科(薔薇科)

【釋名】時珍曰く、榲桲は性温にして氣が馞しい。故にかく名けたのだ。馞の字は孛(ホツ)と發音し、香氣である。

(一)【集解】志曰く、榲桲は北方の地に生ずる樝子に似て小さい。

頌曰く、今は關陝にあり、沙苑に産するものが更に佳し。その實は大體に於て樝に類してゐるが、ただ膚が慢にして毛が多く、味が尤も甘い。その氣は芬馥たるもので、衣笥の中に置くとやはり香しくなる。

藏器曰く、樹は林檎のやうで花は白綠色だ。

(一) 木村(康)曰く、[原植物] まるめろ Cydonia vulgaris, Pers. (Rosaceae)

宗奭曰く、これを食ふには浮毛を淨去すべきもので、去らねば人の肺を損ずる。花は白色でやはり香しい。最も多く蟲を生ずるもので、蛀のつかぬものは少(まれ)である。時珍曰く、榲桲は蓋し樝樝の類であつて、北方の地に生ずるものだ 故にその形狀、功用はいづれも彷彿たるものである。



〔榲桲〕

李珣の南海藥錄には『關中では林檎を榲桲といふ』といつたが、按ずるに、述征記には『林檎は佳美である。榲桲は微(すこ)し大きくして形狀が醜く、毛があり、その味は香しい。關輔にはあるが江南では甚だ稀だ』とある。これで觀ると、林檎、榲桲は蓋し相似てゐるが二物なのであつて、李氏の説は誤だ。

〔氣味〕(二)【酸く甘し、微溫にして毒なし】 士良曰く、毒熱を發し、大、小腸を祕し、胸中の痰を聚し、血脈を壅澀(ようじふ)する。多食すべきものでない。瑞曰く、車螯(しやがう)と共に食へば疝氣を發する。

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕まるめろノ幼芽幼條、樹皮ヨリ青酸ヲ生ズル餾液ヲ得ラル。葉ハアルブチンヲ含マズニトリルグリコシド（プルラウラシン）ヲ含ム。果實ハ糖分（果汁ノ九・六％）ニ及ビレビユローゼヲ主トシデキストローゼ及ビ少量ノ蔗糖ヨリナル）林檎酸、ペクチン、プロトペクチン及少量ノ單寧質、ガラクトアラバンヲ含有ス。灰分中ニハ硼酸ヲ有ス。果殼中ニハエナントエーテルヲ認ム。種子ハ配糖體アミグダリン、酵素エムルジン、單寧質、脂肪油（一四・一五

%)、粘液(二二%ニ及ブ)灰分等ヲ有ス。コノ脂肪油ハ主トシテミリシン酸(多クグリセリドトシテ)ヨリナル。(ウ植、四四〇)
[應用]果實ハ腹薬ナリト稱シテ食用トシ種子ノ發液ハ酒ニ浸シテ凍傷ニ用ノ。(植成研)

【主治】【中を溫め、氣を下し、食を消し、心間の酸水を除き、臭を去り、衣魚を辟ける】(開寶)【胸膈の積食を去り、渴を止め、煩を除く。將さに臥さんとする時に一兩箇を噉ふ。生でも熟でも宜し】(蘇頌) 宗奭曰く、臥す時にこれを甚だ多く噉へば、やはり胃脘を痞塞する。【水瀉、腸虛、煩熱に主效があり、酒氣を散ず。いづれも生で食ふが宜し】(李珣)

木皮 【主治】【末に搗いて瘡に傅ける】(蘇頌)

山樝 音は渣(サ)である。(唐本草)

和名 さんざし
學名 Crataegus cuneata, Sieb. et Zucc.
科名 いばら科(薔薇科)

【校正】唐本草木部の赤爪木、宋圖經外類の棠毬子、丹溪補遺の山樝はみな一物である。本書には一條に併記し、但だ山樝を以て標題とした。

【釋名】**赤爪子** 爪は側巧の切(ソウ)である(唐本) **鼠樝**(唐本) **猴樝**(危氏) **茅樝**(日用) **杭子** 音は求(キウ)である。**檕梅** 音は計(ケイ)である(いづれも圖

雅）　**羊梂**（唐本）　**棠梂子**（圖經）　**山裏果**（食鑑）　時珍曰く、山樝は味が樝子に似てゐるからやはり樝と名けたので、世俗にみな查の字に書くが、誤だ。查の音は槎（サ）であつて、これは水中の浮木のことだ。樝と何の關係があらう。郭璞註爾雅に『朹――音は求（キウ）――は、樹は梅のやう、その子は大いさ指頭ほどで、色赤く、小さい柰に似たもので、食へる』とあるそのものが山樝であつて、世俗に梂の字に書くはやはり誤である。梂とは櫟の實のことだ、朹とは何の關係があらう。樝、朹なる名稱は爾雅に見えてあるが、晉、宋以來その原由が判らなくなつて、ただ查、梂を用ゐるとだけ心得るやうになつた。この物は山原の茅林中に生じ、猴、鼠が喜んで食ふところから、また諸種の名稱がある。唐本草に赤爪木とあるは赤棗と書くが正しい。蓋し棗、爪の音の訛だ。樝の形狀が赤棗に似てゐるからのことであつて、范成大の虞衡志に赤棗子とあり、王璆の百一選方に『山裏の紅果で、俗に酸棗と名け、又、鼻涕團と名ける』とあるは正にその意味が合致する。

（一）【集解】　恭曰く、赤爪木は赤樝であつて、山南の申、安、隨の諸州に產する。小さい樹で、高さ五六尺、葉は香薷に似ゐる。子は虎掌に似て、大いさは小さい林檎

（一）木村（康）曰く、
〔原植物〕さんざし。
〔山查子〕Crataeg-

us cuneata, Sieb. et Zucc. (Rosaceae) おほさんざし (會査) C. pinnatifida, Bge. りうきうさんざし C. pentagyna, Waldst. et Kit.

ほどで赤色だ。

藏器曰く、赤爪草、卽ち鼠樝の梂であつて、高原に生ずる。梂は小さい樝に似て赤い。世人はこれを食ふ。

頌曰く、棠梂子は滁州に生ずる　二月に白花を開き、隨つて實を結ぶ。採取に一定の時期はない。彼の地ではそれを下痢、及び腰疼を治するに用ゐ、效がある。他の地方にもあるが藥用には入れない。


〔山樝　棠梂〕

時珍曰く、赤爪、棠梂、山樝は一物であつて、古方には用ゐたことが罕である。故に唐には赤爪として記載があつたけれども、後世一般にはそれがこの物だといふことが判らなくなり、丹溪朱氏が始めて山樝の功を著錄してから、後に遂に要藥となつたものである。その類に二種あつて、いづれも山中に生ずる。一種の小なるものは、山地では棠梂子、茅樝、猴樝などと呼び、藥用に入れ得る。樹

は高さ數尺、葉は五尖があつて椏間に刺があり、三月に五出の小さい白花を開き、實には赤、黄の二色があり、肥えたものは小さい林檎ほどあり、小さいものは指頭ほどで、九月になると熟し、小兒がそれを採り、賣つてもゐる。閩地方では、熟したものを取つて皮、核を去り、糖、蜜を搗き和し、楂糕といふものに作つて果物に充てる。その核の形狀は牽牛子ほどで色が黒く、甚だ堅いものだ。一種の大なるものは、山地では羊朹子と呼び、樹は高さ一丈餘、花、葉はいづれも同じだが、ただ實がやや大きくして色が黄綠であり、皮が澁く、肉が虛してゐるだけが異ふ。初めには甚だ酸澀で、霜を經ると食へる。その功力、效果は同じものだが、採藥者は採らない。

實【修治】時珍曰く、九月霜後に熟を帶ぶるものを取り、核を去つて曝乾し、或は蒸熟して皮、核を去り、搗いて餅子に作つて日光で乾して用ゐる。

(三)【氣味】【酸し、冷にして毒なし】時珍曰く、酸く甘し、微温なり。生で食へば多くは人をして嘈煩せしめ、飢ゑ易く、齒を損ずる。齒齲の人には就中宜くない。

【主治】【煮汁を服すれば水痢を止める。頭を沐し、身を洗へば瘡癢を治す】(唐

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕C. pentagyna ノ花ニハアムモニア、トリメチルアミン及ビ青酸チ認

メラル』(ウ植、四四〇)

〔藥用〕さんざし(山査子)ハ食物ノ消化ヲ助クルニ用フ。用量五瓦。民間ニ魚類ヲ煮ル時ニ山査子ノ實一個ヲ入ルレバ骨軟カニナル。(邦藥植二〇一)

本)【煮汁で漆瘡を洗へば多くは瘥える】(弘景)【腰痛を治するに有效である】(蘇頌)【食積を消し、脾を補し、小腸疝氣を治し、小兒の瘡疹を發する】(吳瑞)【胃を健にし、結氣を行り、婦人産後の兒枕痛、惡露の盡きぬものを治す。煎じた汁に沙糖を入れて服すれば立ろに效がある】(震亨)【飲食物を消化し、肉積、癥瘕、痰飲痞滿、呑酸、滯血痛脹を消す】(時珍)【血塊、氣塊を化し、血を活す】(寗原)

〔發明〕震亨曰く、山樝は大いに能く飲食を尅化するものだが、胃中に食積なき場合や、脾虚の運化不能で食思なきものがこれを多く服すれば、反つて脾、胃の生發の氣を尅伐する。

時珍曰く、凡そ脾弱で食物が尅化せず、胸腹が酸刺し脹悶するものは、毎食後に二三箇を嚼むが甚だ佳し。但し多く用ゐてはならぬ。反つて尅伐する恐があるものだ。按ずるに、物類相感志に『老雞の硬肉を煮るに山樝數顆を入れると爛れ易い』とあるを見ると、この物の肉積を消する功力が益ゝ推知される。予(時珍)の隣家の一小兒が、食積が原因で黃腫し、鼓のやうに腹脹したが、偶ま羊杭樹の下へ往つて飽くまで食ひ、歸つてから大いに痰水を吐いてその病が遂に癒えた。羊樝とは山樝

と同類のもので、醫家では用ゐないが、かかる效果があつたところを見るとその功力效果は同じものである。

【附　方】　新六。【偏墜疝氣】山棠梂肉、囘香を炒つて各一兩を末にし、糊で梧子大の丸にし、一百丸づつを空心に白湯で服す。（衛生易簡方）【老人の腰痛】及び腿痛には、棠梂子、鹿茸を炙いて等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、一日二回、百丸づつを服す。【腸風下血】寒藥、熱藥、及び脾弱の藥を用ゐていづれも效なきものには、ただ山裏果だけを用ゐる。それは俗に酸棗と名け、又、鼻涕團と名けるものである。乾いたものを末にし、艾湯で調へて服す。手に應じて愈える（百一選方）【痘疹のはかばかしからぬもの】乾山樝を末にし、湯に點てて服す。立ろに出て紅活する。又ある法では、猴樝五箇を酒で煎じ、水を入れて溫服すれば出る。（危氏得效方）【痘瘡の乾いて黑くなるもの】危困なるには、棠梂子を末にし、紫草を煎じた酒で一錢を調へて服す。（全幼心鑑）【肉食の不消化】山樝肉四兩を水で煮て食ひ、幷にその汁を飮む。（衛便方）

核　【主　治】【これを呑めば食を化し、積を磨し、癩疝を治す】（時珍）

【附方】新二。【難産】山樝核四十九粒に百草霜を衣にかけて酒で呑下す。（海上方）【陰腎癩腫】方は橄欖の條に記載する。

赤爪木【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【水痢、頭風、身痒】（唐本）

根【主治】【積を消し、反胃を治す】（時珍）

莖葉【主治】【煮汁で漆瘡を洗ふ】（時珍）記載は肘後にある。

菴羅果（宋開寶）

和名 まんごう
學名 Mangifera indica, L.
科名 うるし科（漆樹科）

【釋名】**菴摩羅迦果** 記載は佛書にある。**香蓋** 時珍曰く、菴羅は梵語で、二音を合せた發音、菴摩羅は梵語で三音を合せた發音であつて、中國語の淸淨の意味である。

（一）【集解】志曰く、菴羅果は樹に生るもので、林檎のやうで極めて大きい。宗奭曰く、西洛に甚だ多い。梨の類であつて、その狀態はやはり梨に似たもので、

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕あんころく、ゆかん Phylla-

nthus Emblica, L. (Euphorbiaceae) (Emblica officinalis, Gästn.)

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕果實ハ單寧質、樹脂(油脂「ミロバラニン」)ヲ含ム。葉ハ一八%、樹皮ハ一二・六%ノ單寧質ヲ有ス。(ウ植、六六九)



〔菴羅果〕

諸梨に先つて熟し、七夕前後には已に啖ふに堪へなくなる。色は鵞梨のやうに黄で、纔に熟すると鬆軟になる。藥に入れることはやはり希だ。

時珍曰く、按ずるに、一統志に『菴羅果は俗に香蓋と名ける。これは果中の極品であつて、種は西域から出た。やはり柰の類であつて、葉は茶の葉に、實は北梨に似て五六月に熟する。多食しても無害である。今は安南の諸番にもある』とある。

(二) 氣味 【甘し、溫にして毒なし】 士良曰く、酸し、微寒なり。志曰く、風疾を動ずる。凡そ天行病、及び食飽後にはいづれも食つてはならぬ。大蒜、辛物と共に食へば人をして黄病を患はしめる。

主治 【これを食へば渴を止める】(開寶) 【婦人の經脈不通、男子の營衛中の血脈不調に主效がある。久しく食へば人をして飢ゑざらしめる】(士良)

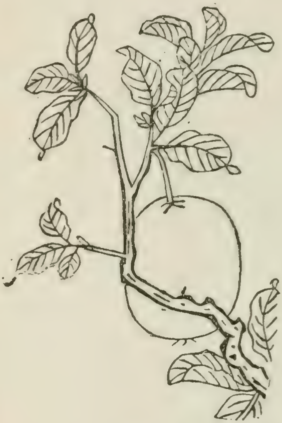
葉 主治 【渇疾には湯に煎じて飲む】(士良)

柰 (別錄下品)

和名 おほりんご
學名 Malus pumila., Mill.(Malus communis, DC.)
科名 いばら科(薔薇科)

釋名 **頻婆** 音は波(ハ)である。時珍曰く、篆文(てんもん)の柰の字は子が木に綴られてある形を形容してある。梵語ではこれを頻婆(ひんは)と謂ふ。現に北方の地で端好と呼ぶが、やはりさういつた意味である。

(一)集解 弘景曰く、柰は江南にも有るけれども、北國に最も豊富にあつて、脯(ほ)にして食ふ。人體には宜くない。林檎に似てゐるが小さく、いづれも人體に益せぬ。



〔禽林・柰〕
——林禽は圓くして小さし——

(一) 木村(康)日ク、〔原植物〕りんご(苹果)せいやうりんご Malus pumila, Mill. var. domestica, Schneid. (Rosaceae)

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕葉、樹皮及根皮中ニハ配糖體フロリツチンヲ含有ス。果實中ノ成分ハ葡萄糖、果糖、蔗糖、ペントザン、ペクチン、ガラクトアラバン、ソルビツド、林檎酸、枸櫞酸等ニシテ、果皮ノ蠟物質ハトリアコンタン、ヂミリスチールカルピノール、マロール等ヨリナル。而シテマロールハウルソント同一物ナリ。又種子中ニハアミグダリン及脂肪

士良曰く、この物には三種あるので、大きくして長いものをば柰といひ、圓いものをば林檎といひ、いづれも夏熟する。小なるもので味の澀きをば椄といひ、秋熟し、一名楸子といふ。

時珍曰く、柰と林檎とは一類の二種であつて、樹、實いづれも林檎に似て大きい。西方の地に最も多く、種から栽培するもよく、壓木法に依るもよし。白、赤、青の三色があつて、白きをば素柰といひ、赤きをば丹柰、また朱柰といひ、青きをば綠柰といふ。いづれも夏熟する。涼州には冬柰といつて冬熟し、子の碧色を帶びたものがある。孔氏の六帖には『涼州の白柰は大いさ兎頭の如し』とあり、西京雜記には『上林苑の紫柰は大いさ升ほどあり、核は紫、花は青、その汁は漆のやうで、衣服に著くと浣つても脫ちぬ。脂衣柰と名ける』とある。これはいづれも異種である。郭義恭の廣志には『西方には概して柰が多く、家家で採收して切つて暴乾し、脯にして數十百斛を蓄積し、それを頻婆粮と呼んでゐる』また柰汁を取つて豉を作るが、その法は、熟柰を取つて瓮中に納れ、蠅の入らぬやうにして六七日間置き、爛れるを待つて酒に醃け、快速に拌ぜて粥のやうな狀態にし、水を入れて更に拌ぜ

油ヲ含有ス。（邦藥植二〇三）
「日食」ニヨレバ、りんごノ果實ハ可食部九五・〇（％）ニシテ水分八九・八〇、總窒素〇・四八、蛋白質〇・三〇、脂肪〇・〇七、含水炭素八・三〇、纖維〇・七〇、無機質〇・二四、燐酸〇・〇四九、石灰〇・〇〇三、鐵〇・〇〇七、食鹽〇・〇一四ナリ（二二七頁）。
〔藥用〕果實ヨリ林檎鐵越幾斯（局方）、林檎鐵丁幾（局方）、林檎鐵舍利別（局方）ヲ製シ強壯藥トシテ貧血症ニ用フ。フロリッヂンヲ動物ニ注射スレバ尿中ノ糖分ヲ増加セシムル作用アル爲メ藥理學上ノ研究ニ用ヒラル。（邦藥植、二〇三）

て皮子を濾し去り、良久して清汁を去り、布上に傾け出し、その下に灰を置いて汁を盡く引かせ、それを幾箇に劃し取り、日光で乾して末にするのである。それを調味料に用ゐて甘、酸を適度にする』とある。劉熙の釋名には柰油の記載があつて、柰の擣汁を繒上に塗り、暴燥して取下すと、色が油のやうになるといつてある。現に關西地方で、赤柰、楸子から取つた汁を器中に塗つて暴乾し、果單と呼んでゐるがそのものだ。味は甘く酸く、遠方への贈物になる。杜恕の篤論に『日給の花は柰に似てゐるが、柰は實つて日給は零落する。虛僞と眞實とは相似たものだ』とあるを見れば、日給とは柰にして實らぬものといふことになるが、王義之の帖には『來禽、日給、いづれも囊に盛り、佳果と爲す』とあるを見ると、また柰を指して日給といつたもののやうでもある。木槿花もまた日及と名けるが或は名だけの同じいものであらう。

實 （三）氣味 【苦し、寒にして小毒あり。多食すれば人をして肺寒し、臚脹せしめる。病ある人には尤も甚しい】（別錄） 思邈曰く、酸く苦し、寒、濇にして毒なし。時珍曰く、按ずるに、正要に『頻婆は甘し、毒なし』とある。

主治　【中焦の諸不足の氣を補し、脾を和し、卒の食飽で氣壅して通ぜぬものを治す。擣汁を服す】（孟詵）【心氣を益し、飢に耐へる】（千金）【津を生じ、渇を止める】（正要）

林檎（宋開寶）

和名　りんご、わりんご
學名　Malus asiatica, Nakai.
科學　いばら科（薔薇科）

校正　拾遺の文林郎果を併せ入る。

釋名　**來禽**（法帖）　**文林郎果**　藏器曰く、文林郎は渤海地方に生ずるその樹が河中から浮んで來たのを、ある文林郎が拾ひ取つて種ゑたので、それに因んで名としたものだといふ。

珣曰く、文林郎は南方の地で楹棒と呼ぶそのものだ。

時珍曰く、按ずるに、洪玉父は『この果は味が甘くして能く衆くの禽をその林に來らしめる。故に林檎、來禽の名があるのだ』といひ、又『唐の高宗の時、紀王李謹が五色の林檎を得て、その朱柰に似たものを朝廷に貢進した。帝は大いに悦んで

謹(きん)に文林郎の官を賜つた。世人はそれに因んで林檎を文林郎果と呼ぶ』といつた。又、逑征記には『林檎の實は佳美なるものだ。その榲桲といふは、微し大きくして形が醜く、毛があつて香しい。關輔(くわんぽ)にはあるが江南には甚だ稀だ』とある。これに據ると林檎が文林郎で、榲桲ではない。

〔集解〕(二) 志曰く、林檎は在處にある。樹は柰に似て、いづれも二月に粉紅色の花を開き、子もやはり柰のやうだがやや圓く、六月、七月に熟する。

頌曰く、やはり甘、酢の二種あつて、白きものは早く熟して味が脆美(ぜいび)であり、酢きものはやや晩(おそ)く、爛熟するを須(ま)つて噉(く)へるやうになるものだ。現に醫家ではこれを乾して傷寒を治する藥に入れ、林檎散と呼んでゐる。

時珍曰く、林檎は柰の小さくして圓いもののことであつて、その味の酢いものは卽ち楸子(しうし)である。その類には金林檎、紅林檎、水林檎、蜜林檎、黑林檎などあるが、いづれも色、味に因つて名稱を與へたものだ。黑きものには色が紫柰に似て、冬期に再び實(みの)るものがある。林檎は熟した時に晒乾、研末して湯に點(た)てて服すると甚だ美味なもので、それを林檎麨といふ。僧贊寧の物類相感志に『林檎の樹に毛蟲が生

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕わりんご Malus pumilla, Mill. var. dulcissima, Koidz. (Rosaceae) M. pumilla, Mill. var. dasyphylla, Koidz. Malus baccata, Borckn. Pirus baccata, L. P. Malas, L.

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕Pirus Malus ノ葉ハフロリツチン及フロレチン、脂肪、マロール酸ヲ含ム。樹皮ハ殊ニ根皮ハ苦味配糖體フロリツチンヲ有ス。果

實ニハソノ果汁中ニ糖分總量一一—一四%(ソノ五—八・五%ハレブローゼ、〇・四—三・九%ハ蔗糖、〇・五—三・五ハデキストローゼナリ)酸化酵素、單寧、ペントザン、ペクチン質等ヲ含ム。ソノ含有スル有機酸ハ林檎酸、枸櫞酸、少量ノ琥珀酸及乳酸等ナリ。果皮ハクエルツエチン、痕跡ノ揮發油(成熟セル果實ノ香ハアツペロールニヨル)結晶性物質、蠟、單寧質、ピチン類似物等ヲ含有ス、フロリツチンハ之ヲ缺ク。種子ハアミグダリン、脂肪油、エムルシン、ラクターゼ等ヲ含ム。(ウ植、四四二)

じたときは、蠶蛾をその下に埋め、或は魚を洗つて水を澆げば止む』とある。いづれも物の性の微妙な點である

(三) 氣味　【酸く甘し、溫にして毒なし】。思邈曰く、酸く苦し、平、濇にして毒なし。多食すれば人をして百脈を弱からしめる。志曰く、多食すれば熱、及び冷痰を發し、氣を澀し、人をして好く唾せしめ、或は瘡癤を生じ、百脈を閉ぢ、その子を食へば人をして煩心せしめる。

主治　【氣を下し、痰を消し、霍亂肚痛を治す】(大明)　【消渇のものはこれを食ふが宜し】(蘇頌)　【水穀痢、洩精を療ず】(孟詵)　【小兒の閃癖】(時珍)

附方　舊三。【水痢の止まぬもの】林檎の半熟のもの十箇を水二升で一升に煎じ、林檎と併せて食ふ。(食醫心鏡)　【小兒の下痢】林檎、構子を共に杵いて汁を任意に服す。(子母祕錄)　【小兒の閃癖】頭髮が竪黃となり、瘰癧、瘦弱するには、乾林檎脯を硏末し、醋で和して傅ける。(同上)

東行根　主治　【白蟲、蚘蟲、消渇、好く唾するもの】(孟詵)

柹

音は士(シ)である。（別錄中品）

和名　かき
學名　Diospyros Kaki, L. fil.
科名　かき科(柹樹科)

【釋名】時珍曰く、柹は𠂔——音は滓(シ)——に從ふ諧聲であつて、俗に柿と書くは正しくない。柹は音胏であつて、削木片のことである。胡地方では鎮頭迦と名ける。



〔柹〕

(一)【集解】頌曰く、柹は南、北いづれもある。その種はやはり多いもので、紅柹は所在いづれにもあり、黄柹は汴洛の諸州に產し、朱柹は華山に產し、紅柹に似て圓く小さく、皮が薄く、味は更に甘くして珍なるものだ。椑柹は色青く、生で啖へる。諸柹は食つてはいづれも美味だが人に益せぬ。又、一種の柹で軟棗と呼ぶものがあつ

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕かき Diospyros Kaki, L. f. (D. Chinensis, Bl.) かき D. Kaki, L. var. domestica Makino.

て、俗に牛奶柹と呼ぶ。世の語り傳ひに、柹には七絶があつて、一には多壽、二には多陰、三には鳥巣なく、四には蟲蠹なく、五には霜葉が面白く、六には嘉實であり、七には落葉が肥滑にして物を書けるといふ。

宗奭曰く、柹に數種あつて、著蓋柹といふは蔕下に別に一重ある。又、牛心柹といふがあつて、形狀は牛心のやうだ。蒸餅柹は形狀が市中で賣つてゐる蒸餅のやうだ。華州の朱柹は小さくして深紅色である。塔柹は諸柹より大きく、皮を去つて木上に挂け、風日で乾したものが佳し。火で乾したものは味が甚だ佳くない。その生のものは溫水で養へば澀味を去れる。

時珍曰く、柹は樹が高く、葉が大きく、圓くして光澤があり、四月に小さい黃白色の花を開き、結實は青綠色で、八九月になると熟する。生柹を器に入れて置いて自ら紅くなつたものを烘柹といひ、日光で乾したものを白柹といひ、火で乾したものを烏柹といひ、水に浸して貯藏したものを醂柹といふ。その核は形が扁く、木鼈子仁のやうな形態で硬堅だ。その根は甚だ固い、これを柹盤といふ。按ずるに、事類合璧に『柹は朱果であつて、大なるは楪ほどあり、八稜にしてやや扁く、それに

次ぐは拳ほどに小さく、或は雞子、鴨子、牛心、鹿心のやうな形狀である。一種の小さくして折二錢ほどのものを猴棗といふ。いづれも核の小なものを佳しとする』とある。

烘柹　時珍曰く、烘柹とは火で烘つたものを謂ふものではなく、青綠の柹を器中に收置して自然に紅けたやうに紅熟し、澀味が盡く去つて蜜のやうに甘くなつたものをいふのである。歐陽修の歸田錄に『襄、鄧地方では、榠樝、或は榲桲、或は楺葉を中に置いて、それで熟する』とあるが、やはり必ずしもさうではない。

〔氣味〕[二]〔甘し、寒、澀にして毒なし〕 弘景曰く、生柹は性冷である。鹿心柹は就中食つてはならぬ、人をして腹痛せしめる。宗奭曰く、凡そ柹はみな涼であつて、大寒には至らない。これを食へば痰を引く、その味の甘きがためである。日光で乾したものを食へば多くは風を動ずる。凡そ柹と蟹とを共に食へば人をして腹痛し、瀉を作さしめる。二物は倶に寒なるものだ。

時珍曰く、按ずるに、王璆の百一選方に『ある者が蟹を食つて多く紅柹を食ひ、夜に入ると大いに吐し、繼いで血を吐くやうになり、昏昏として人事不省となつたと

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕果實ニ附着セル蔕片即チ柹蔕ヨリ融點二七五度ノ無窒素性結晶物質ヲ得〔桂田角太郎、間庭秀夫―千藥誌―(大、一二)〕。果肉ハ轉化糖一四%內外、遊離酸〇・三%(主トシテ林檎酸)、單寧、變化酵素等ヲ含有ス。種子ノ胚乳中ニハ多量

ノマンナンチ含有ス。乾柿ノ表面ニ生ズル白粉ハマンニットナリ。柿澁液ニハシブオールナル單寧様物質チ含有ス。(邦藥植、九五)(ウ植、九四三)尙「日食」(二二八頁)ニ柿七種(禪寺丸、蜂屋、身不知、花御所、百日、次郎、富有)チアゲテソノ分析チ示ス、例ヘバ富有ハ可食部八三(％)水分八七・〇〇、總窒素〇・一〇一、蛋白質〇・六三、脂肪〇・一〇、含水炭素一二・五〇、纖維〇・一二、無機質〇。四八、燐酸〇・〇六四、石灰〇・〇一〇、鐵〇・〇一八食鹽〇・〇一九、アルカリ價五・七、熱量五五カロリーナリ。
〔應用〕果實ノ甘キモノハ食用トシ澁キモ

き、一人の道者が「木香だけで解するものだ」といつて、磨汁を灌ぐと漸くにして甦醒して癒えた」とある。

［主治］「耳、鼻の氣を通じ、腸、胃の不足を治し、酒毒を解し、胃間の熱を壓し、口乾を止める」(別錄)「經脈の氣を續く」(詵)

［發明］藏器曰く、酒を飲んで紅柿を食へば人をして醉ひ易からしめ、或は心痛して死せんとする。別錄に「酒毒を解す」とあるは失だ。

白柹　柹霜　［修治］時珍曰く、白柹とは乾柹の霜を生じたもののことである。その法は、大柹を皮を去り、扁く捻つて日に晒し夜露し、乾いてから瓮中に入れ、白霜の生ずるを待つてそれを取り出すのである。今一般にこれを柹餅と呼び、また柹花ともいひ、その霜を柹霜と呼ぶ。

［氣味］「甘し、平、濇にして毒なし」弘景曰く、日光で乾したものは性冷であり、生柹はいよいよ冷である。火で熏したものは性熱である。

［主治］「虛勞、不足を補し、腹中の宿血を消し、中を濇し、腸を厚くし、脾、胃の氣を健にする」(詵)「胃を開き、腸を澀し、痰を消し、渇を止め、吐血を治し、

ノハ柿澁液ヲ取ルノ原料トス。柿蔕ハ民間吃逆止ニ煎用ス。

心、肺を潤ほし、肺痿、心熱の欬嗽を療じ、聲喉を潤ほし、蟲を殺す」(大明)「溫補する。多食すれば面皯を去る」(藏器)「反胃、咯血、血淋、腸澼、痔漏下血を治す」(時珍)「霜は上焦、心、肺の熱を淸し、津を生じ、渴を止め、痰を化し、嗽を寧くし、咽喉、口舌の瘡痛を治す」(時珍)

【發明】震亨曰く、乾柿は金に屬して土を有し、陰に屬して收の作用がある。故に血を止め、欬を治するにはやはり助となすがよし。

時珍曰く、柿なるものは脾、肺の血分の果であつて、その味は甘くして氣は平、性は濇して能く收する。故に脾を健にし、腸を澀し、嗽を治し、血を止めるの功があるのだ。蓋し大腸は肺の合にして胃の子である。眞正の柿霜ならばその精液は肺に入る。上焦を病むものの藥に就中佳し。按ずるに、方勺の泊宅編に『外兄劉椽は「臟毒下血を病むこと凡そ半月に及び、自ら死ぬものと覺悟してゐたが、ただ乾柿の燒灰を二錢づつ飲で服するといふ一方を得て遂に癒えた」といつた』とあり、又王璆の百一方に『曾通判の子が十年間下血を病んだが、やはりこの方を用ゐて一服にして癒えた。散にし、丸にし、いづれもよし。本草に腸澼を治し、宿血を消し、

熱毒を解すとある意味と合致する』とあるを見ると、柹の太陰の血分の藥になることがますます徵すべきである。又、經驗方には『ある人は三代續いて反胃の病で死んだが、孫の代に、乾柹餅を乾飯と共に日日に食ひ、絶えて水飲を用ゐぬといふ一方を得て、法の如くにして食つたので、その病は遂に癒えた』とある。これまた一徵である。

附方　舊四、新十。【腸風臟毒】方の說明は前項を見よ。【小便血淋】葉氏は、乾柹三箇を燒いて性を存して硏末し、陳米飮で服す。○經驗方では、白柹、烏豆、鹽花を湯に煎じ、墨汁を入れて服す。【熱淋澁痛】乾柹、燈心等分を水で煎じて日每に飮む。（朱氏方）【小兒の秋痢】粳米で粥を煮て、熟する時に乾柹末を入れ、再び煮て、二三沸して食ふ。乳母もそれを食ふ（食療）【反胃吐食】乾柹三箇を蔕のあるまま擣き爛らして酒で服す。甚だ效がある。絶對に他の藥を雜へてはならぬ。【腹薄食減】凡そ男、女の脾虛腹薄で食物が消化せず、顏面に黑點のあるものには、乾柹三斤、酥一斤、蜜半斤を用ゐ、酥と蜜を煎じ勻ぜて柹を投じ、煮て十餘沸し、津の洩れぬ器に貯へ、每日空腹に三五箇を食ふが甚だ良し（孟詵食療）【痰嗽帶血】靑州

の大柹餅を飯の上で蒸熟して批開し、一箇づつに眞青黛一錢を摻つて就寝時に食ひ、薄荷湯で飲下す。(丹溪纂要) 【産後の欬逆】氣亂心煩するには、乾柹を切り碎き、水で煮て汁を呷ふ。(產寶) 【婦人の蒜髮】乾柹五箇、茅香を煮熟し、枸杞を酒に浸して焙じ研り、等分を擣いて梧子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを茅香湯で服す。(普濟) 【顏面に生じた皯䵳】乾柹を日日に食ふ。(普濟方) 【鼻窒で通ぜぬもの】乾柹を粳米と共に粥に煮て日日に食ふ。(聖濟) 【耳聾、鼻塞】乾柹三箇を細切し、粳米三合、豆豉少量で粥に煮、日日に空心に食ふ(聖惠) 【痘瘡の目に入りたるもの】白柹を日日に食ふが良し。【臁脛爛瘡】柹霜、柹蒂等分を燒き、研つて傅けるが甚だ效がある。(筆峯雜興) 【桐油の毒を解す】乾柹餅を食ふ。(普濟)

烏柹　火で熏じ乾したものである。 氣味 【甘し、溫にして毒なし】

主治 【蟲を殺し、金瘡、火瘡を療じ、肉を生じ、痛を止める】(別錄) 【狗齧瘡を治し、下痢を斷つ】(弘景) 【服藥して口の苦きもの、及び嘔逆するものは、少量を食へば止まる】(藏器)

醂柹　醂の音は覽(ラン)である。 修治 瑞曰く、水で藏つたものは性冷で

ある。鹽で藏つたものは毒がある。時珍曰く、醂とは柹を藏ふことで、水で收藏し、鹽で浸して藏ふの外、又、熟柹を灰汁で三四度澡して汁を盡さしめ、器に入れて十餘日經つてから食へるもあるが、病を治するには適當でない。

【主治】〔下焦を濇し、脾、胃を健にし、宿血を消す〕（詵）

柹餻【修治】時珍曰く、按ずるに、李氏の食經に『糯米を洗淨して一斗、大乾柹五十箇を用ゐ、共に擣いて粉にし、蒸して食ふそのものである。乾くときは煮た棗泥を入れて和拌する。

【主治】〔餅、及び餻に作り、小兒に與へて食はすれば秋痢を治す〕（詵）〔黃柹を米粉に和して糗蒸に作り、小兒に與へて食はすれば、下痢、下血を止めるに有效である〕（藏器）

柹蔕【氣味】〔濇く平にして毒なし〕【主治】〔欬逆、噦氣には煮汁を服す〕（詵）

【發明】震亨曰く、人の陰氣は胃に依つて養を爲すもので、土が傷めば木に相火を挾み、直ちに淸道に冲して上つて欬逆となる。古代には一般にこれを胃寒と考

へて丁香、柹蒂を用ゐてゐたのであるが、實は孰が虛を補するやら、孰れが火を降すやら判らない。氣を淸し痰を利することが不能で、ただ火を助ける結果があるだけだ。

○○時珍曰く、欬逆なるものは、氣が臍下から脈に沖して直ちに上り、咽膈に至つて呃忒、蹇逆の聲を作すそのものである。朱肱の南陽書には噦を欬逆とし、王履の溯洄集には欬嗽を欬逆としてあるが、いづれも誤である。噦とは乾嘔で、聲を出すもののことであつて、欬逆には、傷寒吐下の後、及び久病、產後、老人、虛せる者にして陰氣が大いに虧け、陽氣が暴逆し、下焦から逆し、上焦に至つて出ること能はぬためのものがあり、傷寒の失下、及び平人にして痰氣が抑遏してさうなるものもある、これはその虛實、陰陽、或は溫、或は補、或は泄熱、或は降氣、或は吐、或は下等を確めてこそ然るべきものなのである。古方に、柹蒂を單用して煮汁を飮ませたのは、その苦、溫にして逆氣を降す功能を取つたものだ。濟生の柹蒂散は、それに丁香、生薑の辛、熱を加へ、それで痰を開き鬱を散じたのである。蓋し從治の法であつて、昔の人も常にこれを用ゐて效を收めたのであつた。易水の張氏に至つ

て、また益すに人參を以てして、病後、虛人の欬逆を治し、やはり有功な實績を擧げた。丹溪朱氏は、ただ寒を以て熱を治するの理を執り、從治の法に及ばなかつたのは矯枉に過ぎてゐる。陳氏の三因に、また良薑の類を加へた如きは、これこそ眞に胃寒と考へてその邪火を助けるものである。

附方　新一。【欬逆の止まぬもの】濟生の柹蔕散——欬逆胸滿を治す。柹蔕、丁香各二錢、生薑五片を水で煎じて服し、或は末にして白湯に點てて服す。○潔古は人參一錢を加へて虛人の欬逆を治した。○三因では、良薑、甘草等分を加へる。○衞生寶鑑では、靑皮、陳皮を加へる。○王氏の易簡では、半夏、生薑を加へる。

木皮　**主治**　【下血には、晒し焙じて研末し、米飮で二錢を服す。二服で止まるものだ】(頌)【湯火瘡には、燒灰を油で調へて傅ける】(時珍)

根　**主治**　【血崩、血痢、下血】(時珍)

椑柹

音は卑士(ヒシ)である。(宋開寶)

和名　こがき
學名　Diospyros Kaki, L. fil. forma.
科名　かき科(柹樹科)

【釋名】漆柹（日華）綠柹（日用）青椑（廣志）烏椑（開寶）花椑（日用）赤棠椑　時珍曰く、椑とは柹の小さくして卑なるものだ。故にこれを椑といふのである。他の柹は熟してからは黃赤になるが、この物だけは熟してもやはり青黑色だ。擣き碎いて浸した汁を柹漆といふ。翣扇や諸種の物を染め得るところから漆柹なる名稱がある。



〔椑柹〕—漆柹—

【集解】志曰く、椑柹は江淮以南に生ずる。柹に似て青黃なものだ。潘岳の閑居賦に所謂『梁侯烏椑の柹』とはこの物である。

頌曰く、椑柹は宣、歙、荊、襄、閩、廣の諸州に產する。柹の大いさ杏ほどのものだ。ただ生で啖へるだけで、乾物にはならない。

【氣味】【甘し、寒、濇にして毒なし】弘景曰く、椑は生で啖へば性冷であつ

て、服石家に宜し。藥用には入れない。蟹と共に食つてはならぬ。

【主治】『丹石藥の發熱を壓し、水を利し、酒毒を解し、胃中の熱を去る。久しく食へば人をして中を寒せしめる』(開寶)『煩渴を止め、心、肺を潤ほし、腹臟の冷熱を除く』(日華)

君遷子(拾遺)

和名　しなのがき
學名　Diospyros Lotus, L.
科名　かき科(柹樹科)

【釋名】**梬棗** 千金には軟棗と書いてある **㮕棗**(廣志)音は逞(テイ)である。**牛奶柹**(名苑) **丁香柹**(日用) **紅藍棗**(齊民要術) 時珍曰く、君遷なる名は左思の吳都賦に始めて見れて、その形狀は劉欣期の交州記に記載されてあるが、名稱の意味は判らない。梬棗とはその形が棗に似て軟だからである。司馬光の名苑に『君遷子は馬奶に似たもので、今の牛奶柹である。形を以て名けられたものだ』とあり、崔豹の古今注に「牛奶柹、卽ち梬柹は、葉は柹のやう、子も柹のやうで小さい』とある。唐、宋の諸家は、君遷、梬棗、牛奶柹、いづれも一物なることを知らなかつ

たのだ、故に詳證して置く。

(一)【集解】藏器曰く、君遷子は海南に生ずる。樹は高さ一丈餘、子は中に乳汁のやうな汁があつて甜美(てんび)だ、吳都賦に『平仲君遷』とあるはこのものである。

時珍曰く、君遷、卽ち㮕棗であつて、その木は柹に類して葉が長く、ただ結實が小さくして長く、牛奶のやうな狀態で、乾熟すれば紫黑色になる。一種の小さく圓くして指頂の太さほどのものをば丁香柹(ちやうかうし)と名け、味が尤も美である、救荒本草にこれを羊矢棗(やうしさう)としたのは誤である、その樹は大柹に接ぐが最も佳し



〔君遷子〕
——牛奶柹・丁香柹は圖し——

廣志に『㮕棗は小柹なり。肌細にして厚く、核少し。御に供すべし』とあるはこの物だ。

(二)【氣味】【甘く澁(しぶ)し、平にして毒なし】【主治】【消渴を止め、煩熱を去り、人をして潤澤ならしめる】(藏器)【心を鎭(しづ)める 久しく服すれば人の顏色を悅(よ)く

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕まめがき Diospyros Lotus, L. (Ebenaceae) D. Lotus, L. var. glabra, Makino.

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕Diospyros Lotus, L. ノ果實ハ轉化糖(約一一・二五%)林檎酸(〇・三八)單寧酸、オキシダーゼ、フロログルコタンニドチ有シ、蔗糖ハ含マズ。(ウ植、九四三)

し、人をして輕健ならしめる』(頌)

安石榴（別錄下品）

和名　ざくろ
學名　Punica Granatum, L.
科名　ざくろ科（安石榴科）

【釋名】**若榴**（廣雅）　**丹若**（古今注）　**金罌**　時珍曰く、榴とは瘤の意味で、丹い實が垂垂として贅瘤のやうなものだ。博物志に『漢の張騫が西域に出使したとき塗林、安石國の榴種を得て持ち歸つた。故に安石榴と名ける』とあるが、又按ずるに、齊民要術に『凡そ榴を植ゑるには、僵石、枯骨を根下に安くべきもので、すると花、實が繁茂する』とあるを見ると、安石なる名稱の意味は或は此から取つたのであらう。若木といふは扶桑の名で、榴の花は丹頳でこれに似てゐる。故に丹若なる名稱もある。傅玄の榴賦に所謂『灼として旭日の若く、扶桑に栖む』とはこれをいつたのだ。筆衡には『五代の吳越王錢鏐は榴を改めて金罌とした』とあり、酉陽雜俎には『榴の甜きものを天漿と名ける』とあり、道家の書には榴を三尸酒といつてある。その意味は、三尸の蟲はこの果を得ると醉ふといふのである。故に范成大

(一)木村(康)曰ク、
(原植物)ざくろ
Punica Granatum, L. (Lythraceae)
(生薬)石榴皮ハ幹枝及根ノ皮ヲ剝取乾燥シタルモノナリ。(生薬學)果皮モ和漢生薬タリ。

の詩に『玉池、清肥に咽び、三彭、跡埽ふが如し』といつたのだ。

(一)**集解** 弘景曰く、石榴の花は赤くして愛すべきものだ。故に世間で多く植ゑてある。就中外國で珍重する。甜と酢との二種あるが、醫家ではただ酢きものの根殼を用ゐる。榴の子は服食する者の忌むものだ。


〔安石榴〕

頌曰く、安石榴はもと西域に生じたもので、今は處處にある。木は甚だ高大ではなく、枝柯は幹に附いて地から生えて叢になる。これを栽培するには極めて息え易いもので、その條を折つて土中にまるめて置けばそれで生える。花に黄、赤の二色あり、實に甘、酢の二種あつて、甘きものは食へる。酢きものは藥に入れる。又、山石榴なる一種は、形は頗る相類するが甚だ小さく、房を作さぬ。青、齊地方に甚だ多く、藥には入れないが、ただ蜜漬にして果にすると甚だ

美味だ。

宗奭曰く、石榴には酸、淡の二種あつて、順順に單葉の花を開いて順順に實を結び、實は中が紅い。孫枝が甚だ多く、秋後に霜を經ると自ら坼裂する。一種の子が白くして水晶のやうに瑩澈なものは味がやはり甘い。これを水晶石榴といふ。酸石榴だけが藥に入れるもので、老木に結んだものを採つて貯へた陳久なものを用ゐることにするが佳し。

時珍曰く、榴は五月に花を開き、紅、黄、白の三色あつて、單葉のものは實を結ぶが、千葉のものは實を結ばず、或は結んでもやはり子がない。實には甜、酸、苦の三種あつて、抱朴子には『苦いものは積石山に出る』といつた。或は、これは山石榴だともいふ。酉陽雜俎には『南詔の石榴は皮が紙のやうに薄い』といひ、瑣碎錄には『河陰の石榴の三十八と名けるものは、その中に三十八だけの子がある』といつてある。又、南方の地にある四季榴といふは、四時花を開いて秋期に實を結び、實が綻びると直ぐまた花を開く。火石榴といふ火のやうな赤色のものがあり、海石榴といふは高さ一二尺で實を結ぶ。いづれも怪異な種類である。按ずるに、事類合璧

には『榴の大いさは盃ほどで、赤色で黒斑點があり、皮の中は蜂窠のやうに黄膜があつて隔たり、子の形は人の齒のやうで淡紅色だ。また潔白にして雪のやうなものもある。潘岳の賦に「榴は天下の奇樹、九州の名果にして、千房膜を同うし、千子一の如く、飢を禦ぎ、渇を療じ、酲を解し、醉を止む」といつてある』とある。

甘石榴 （三）〔氣味〕【甘く酸し、溫、濇にして毒なし。多食すれば人の肺を損ずる】（別錄） 詵曰く、多食すれば齒を損じて黑からしめる。凡そ藥物を服食する人はこれを食ふことを忌む。震亨曰く、榴は留である。その汁は酸く、性は滯戀であつて痰を成す

〔主治〕【咽喉の燥渇】（別錄）【能く乳石の毒を理す】（孟詵）【三尸蟲を制す】（時珍）

酸石榴 〔氣味〕【酸し、溫濇にして毒なし】〔主治〕【赤、白痢、腹痛には、子のまま汁に搗いて一箇を頓服する】（孟詵）【瀉痢、崩中、帶下を止める】（時珍）

〔發明〕 時珍曰く、榴は少陽の氣を受けて四月に榮し、五月に盛になり、盛夏に實り、深秋に熟し、花は丹く、實は赤く、その味は甘、酸、その氣は溫、濇であり、木、火の象を具へたものだ。故に多食すれば肺、齒を損じて痰涎を生ずる。酸

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕ざくろノ根皮ハ概シテ〇・三―〇・七%ノ液狀アルカロイド即チペレチエリン、イソペレチエリン、メチールペレチエリン、プソイドペレチエリン、メチールグラナトニン及イソメチルペレチエリンノ如キモノヲ含ム。其他マンニツト、多量ノ配糖體狀鞣酸ヲ有シ、單寧ノ含量二〇―二二%ニ及ビソノ分解物トシテ沒食子酸、エラグ酸及糖ヲ生ズ。又澱粉、

蓚酸カルチウム、樹脂、黄色素、林檎酸等ヲ含ム。樹皮モ同様ノアルカロイド（根皮ニ比シ約半量）ヲ含ム。果實ハ轉化糖（一一・六%ニ及ブ）酵素インベルチン、枸櫞酸、林檎酸ヲ含有シヴイタミンCニ富ム。組成（%）ハ水分七五―七八、轉化糖一〇―一一、蔗糖〇・六―一、脂肪一―二、含窒素物一・三―一・六、粗纖維二・六―二・八、灰分〇・五〇・六ニシテ果實ノ二八―四二%ハ核ニシテ三六―六一%ハ果汁ナリ。果皮ハ水分三二・八、無窒素越幾斯四〇、粗纖維一五・三、含窒素粗物〇・九、脂肪〇・五、灰分一（灰分中ニ硼酸存在ス）ニシテ、單寧

なるは收斂の氣を兼ねるので斷下、崩中の藥に入れる。或は、白榴皮は白痢を治し、紅榴皮は紅痢を治すといふが、やはり通ずる。

【附　方】　新五。【腸滑久痢】黒神散——酸石榴一箇を烟が盡きるまで煆き、一夜火毒を出して研末し、それを酸榴一塊を煎じた湯で服す。神效無比である。【久瀉の止まぬもの】方は上に同じ。（いづれも普濟方）【痢血五色】或は膿、或は水を痢し、冷熱不調なるには、酸石榴五箇を子も共に搗いた汁二升を、五合づつ服す。神の如き妙效がある。（聖濟）【小便の禁ぜるもの】酸石榴を燒いて性を存し——榴のないときは枝の燒灰を代用する——二錢づつを、栢白皮を切り焙じて四錢の煎湯一盞に入れて再び八分までに煎じ、空心に溫服し、晩に再服する。（聖惠）【鬚に撚つて黒からしめる】酸石榴の結成するときに東南の枝から大なるもの一箇を捩り取り、頂上に一孔を開けて中に水銀半兩を入れ、先に取つてある皮で封じて麻で札定し、牛屎で封護して霜が下りるまで置いて売内の水を傾け出し、指に魚鰾を箝めてその水を蘸けて鬚に撚る。久しくして自ら黒くなる。（普濟）

酸榴皮【修　治】斅曰く、凡そ榴の皮、葉、根を使ふには鐵を犯してはならぬ。

ハ二八%ニ及ビ根皮樹皮ニ於ケルト同様ニ配糖體狀單寧酸（エラグ及エラゲン酸ヲ得沒食子酸ハナシ）ヲ含ム。又多量ノ粘液（三四%）ト少量ノ樹脂ヲ有ス。未熟ノ果皮ニハ苦味鹽基性グラナチンヲ含有ス、コノモノハ根皮ニ於ケルクラナザントハ異ナルモノノ如シ。花ハアントチアン「プニチン」ヲ含有ス。（ウ植、八一七）（日食、二二八）（邦藥植、一二八）（生藥學）〔藥理〕ペレチエリンノ中毒ハ最初脊髓ノ興奮性亢進ヲ來シ次デ呼吸及運動麻痺ニ陷ル。家兎ノ體重一瓩ニ付靜脈內注射ノ致死量ハ〇・三瓦ナリ。プソイドペレチエリンハ其作用ペレ

いづれも乾、濕に拘らず、みな漿水で一夜浸して取出して用ゐる。その水は墨汁のやうになるものだ。

〔氣　味〕實に同じ。〔主　治〕【下痢、漏精を止める】（別錄）【筋骨風、腰脚不遂、行步に攣急し疼痛するものを治し、腸を澀する。汁を取つて目に點ければ泪下を止める】（權）【煎じて服すれば蚘蟲を下す】（藏器）【瀉痢、下血、脫肛、崩中帶下を止める】（時珍）

〔附　方〕舊六、新四。【赤、白痢下】腹痛し、食物の消化せぬには、食療本草では、醋榴皮を黃に炙いて末にし、棗肉、或は粟米飯で和して梧子大の丸にし、一日三回、空腹に三十丸づつを米飮で服し、知を以て度とする。もし寒滑するには、附子、赤石脂各一倍を加へる。○肘後方では、皮を燒いて性を存して末にし、一日三回、方寸匕づつを米飮で服し、效があつたときは止める。【糞前に血あるもの】人をして顏色を黃ならしめる。酢石榴皮を炙いて研末し、二錢づつを茄子枝の煎湯で服す。（孫眞人方）【腸滑久痢】神妙無比の方である。石榴一箇を劈破し、炭火を簇めて燒いて性を存し、火毒を出して末にし、一錢づつを、別に酸石榴一瓣、水一盞

の煎湯で調へて服す。(經驗方)〔久痢、久瀉〕陳石榴皮の酢きものを焙じて細末に研り、二錢づつを米飮で服す。發病後二三年、或は二三月にしてあらゆる方の奏效せぬものもこれを服すれば止まる。輕忽にしてはならない。(普濟方)〔小兒の風癇〕大なる生石榴一箇を頂を割き去つて刳り空け、全蠍五箇を入れて黃泥で固濟し、煆いて性を存して末にし、半錢づつを乳汁で調へて服す。或は防風湯で服するもよし。(普濟錄)〔卒病耳聾〕八九月の間に石榴一箇を取つて上に毬子大ほどの孔をあけ、米醋を入れ滿て原の皮で蓋ひ、麪を水で和して裹んで煨熟し、取起して蓋を去り、少量の黑李子、仙沼子末を入れ、その水を取つて耳中に滴らす。動いてはならぬ腦中が若し動じても驚いてはならぬ。かくして三夜に二回試みれば必ず通ずる。〇按ずるに、唐愼微の本草にこの方を收採して『孫眞人から出たものだ。しかし黑李子とは何物か判らない。仙沼子とは預知子のことだ』とある。〔榴を食つて齒を損したもの〕石榴の黑皮を黃に炙いて研末し、棗肉で和して梧子大の丸にし、一日二回、每日空腹に三丸を白湯で服す。(普濟)〔丁腫惡毒〕針で四畔を刺し、榴皮を瘡上に著けて麪で四畔を圍んで灸し、痛むを度とする。かくて榴末を入れ上に傅けて急

チエリント同樣ナルモ作用著シク弱シ。鹽酸ペレチエリンハ〇・〇〇二%溶液ニ於テ絛蟲ノ興奮作用著シキモ鹽酸プソイドペレチエリンニテハ〇・〇二%溶液ニ於テ初メテ自發運動明カナリ。

〔藥用〕石榴皮(局方)ハ各種絛蟲ヲ驅除スルニ用フ、用量三〇—六〇瓦、煎劑トス。藥局方ニテハ石榴皮越幾斯ヲ製スルニ用フ。タンニン酸ペレチエリン(米國局方)モ亦同樣ノ目的ニ用ヒラル、用量〇・四瓦。民間ニ扁桃腺炎或ハ咽喉ノ加答兒ニハ石榴ノ實一個ニ付水一—二合ヲ以テ煎ジタル汁ヲ以テ含嗽ス。又口臭ヲ除クニ用フ。(生藥學)(邦藥

植、一二九）

に裹む。一夜經てば根を連ねて自ら出る（肘後百一方）【脚肚に生じた瘡】初期には粟ほどで、搔けば漸次に開いて黃水が浸淫し、痒痛し、潰爛し、遂に脛を遶つて痼疾となるものには、酸榴皮の煎湯を冷してから日日に搨き、瘥を取つて止める（醫學正宗）

酸榴東行根 氣味 皮に同じ。主治【蚘蟲、寸白】（別錄）【青きものを髮を染める材料とする】（權）【口齒の病を治す】（頌）【瀉痢、帶下を止澀する。功は皮と同じ】（時珍）

附方 舊三、新二。【金蠶蠱毒】白礬を吮つて見て味が甘く、黑豆を嚼んで見て腥くなければ、それは中蠱である。石榴根皮を煎じて濃汁を服す 活蠱を吐出して瘥えぬものなし（丹溪摘玄方）【寸白、蚘蟲】酢石榴の東引根一握を洗つて剉み、水三升で半盌に煎じ取り、五更に溫服し盡す。翌日蟲一大團を取下して永く根本を絕つ。粥を食つて補ふ。○崔元亮海上方では、榴皮を煎じた水と米で粥に煮て食ふ。やはり良し。【女子の經閉】通せぬには、酢榴根の東に生えたもの一握を炙り乾し、水二大盞で一盞に濃煎し、空心に服す。なほ通ぜぬときは再服する（斗門）

【赤、白下痢】方は上に同じ。

榴花　主治　【陰乾して末にし、鐵丹を和して服すれば、一年にして白髮を漆のやうに變ずる】（藏器）　鐵丹とは飛鐵の丹となつたもので、やはり鐵粉の屬である。【千葉のものは心熱、吐血を治す。又、研末して鼻に吹けば衄血を止めるに立ろに效がある。また金瘡出血にも傅ける】（蘇頌）

附方　舊一、新二。　【金瘡出血】榴花半斤、石灰一升を搗き和して陰乾し、少量づつを傅ければ立ろに止まる。（崔元亮方）　【鼻に出る衄血】酢榴花二錢半、黄蜀葵花一錢を末にし、一錢づつを水一盞で煎じて服す。效があつたときは止める。（聖濟錄）　【九竅の出血】石榴花を揉んで塞いで效を取る。葉もよし。

橘　（本經上品）

和名　きつ
學名　Citrus sinensis, Osbeck.
科名　へんろうだ科（芸香科）

校正　志曰く、木部より此に移し入る。

釋名　時珍曰く、橘の文字は矞——音は鷸（イツ）——に從ふ諧聲である。又、

雲の五色なるを慶といひ、二色なるを矞といひ、矞雲は外赤く内黄にして、烟に非ず、霧に非ず、郁郁紛紛たるの象があり、橘實は外赤く内黄に、これを剖けば香霧紛郁として矞雲に似たところがある。橘の字の矞に從ふは、またこの意味を取つたものだ。

〔一〕 集解　別錄に曰く、橘、柚は江南、及び山南の山谷に生ずる。十月に採收する。

恭曰く、柚の皮の厚く味甘きは橘皮の味の辛苦なるに及ばない。その肉も橘のやうで甘きと酸きとあり、酸きをば胡柑と名ける。今俗に橙を柚といふは正しくない。按ずるに、郭璞は『柚は橙に似て實が酢く、橘よりも大きい』といひ、孔安國は『小なるを橘といひ、大なるを柚といふ。いづれも柑である』といつた。



〔橘〕

頌曰く、橘、柚は今は江浙、荊襄、湖嶺、いづれもある。木は高さ一二丈、枳と見判けがつかぬやうで、刺が莖間に出てゐる。夏初に白花を生じ、六七月に實が成

〔一〕 木村(康)曰ク、〔原植物〕たちばな Citrus nobilis, Lour. var. Tachibana, Makino. (Rutaceae) C. nobilis, Lour. C. sinensis, Cesbeck.

り、冬に至つて黃熟する。舊說には、小なるを橘とし、大なるを柚とした。今醫家では黃橘、靑橘を用ゐて柚とはいはないが、靑橘といふは柚の類ではあるまいか。

宗奭曰く、橘、柚は本來兩種のものだ。本草に『一名橘皮』とあり、後世のものがそれに誤つて柚字を加へてから妄りに分別を生じたのである。且つ靑橘、黃橘さへ治療上では殊うのだ。況んや柚の別種なるをやである。ただ郭璞の言ふところだけは眞に橘、柚を正確に知るものである。若し郭璞の言ふやうに分別せずして誤つて柚皮を橘皮とするならば、それは無窮の患を貽すものだ。

時珍曰く、橘、柚は、蘇恭の說が甚だ正しい。蘇頌は靑橘とは橘のまだ黃にならぬものだといふ事實を知らずして柚としたので、誤である。そもそも橘、柚、柑の三者は相類してゐるが同物でない。橘の實は小さく、その瓣は味が微し酢く、その皮は薄くして紅く、味は辛くして苦い。柑は橘よりも大きく、その瓣は味が甘く、その皮はやや厚くして黃に、味は辛くして甘い。柚は大小はいづれも橙ほどで、その瓣は味が酢く、その皮は最も厚くして黃に、味は甘くして甚だしく辛くはない。かやうに區別すれば誤らぬのである。按ずるに、事類合璧に『橘樹は高さ一丈ばか

り、枝に多く刺が生え、その葉は兩頭が尖り、綠色で表面が光り、太さ一寸餘、長さ二寸ばかりのもので、四月に小さい白花を著けて甚だ香しく、結實は冬に至つて黃熟し、大なるものは盃ほどあり、包中に瓣があつて瓣中に核がある』とある、宋の韓彥直の著した橘譜三卷は甚だ詳だから、その略を載せる。

柑、橘は蘇州、台州に產し、西は荊州に產し、南は閩、廣、撫州に產するが、いづれも溫州のものの上等なるに及ばない。柑の品種に八種、橘の品種に十四種あつて、多くは接木法に依るが、種から成つたものは氣味が就中勝れてゐる。黃橘は扁小にして香霧が多い。乃ち橘としての上等品である。朱橘は小さくして色が火のやうに赤い。綠橘は紺碧愛すべく、霜後を待たずして色、味が已に佳くなり、眞冬に採つても新たなもののやうに生意がある。乳橘は形狀が乳柑に似たもので、皮が堅く、瓤が多く、味が甚だ酸芳だ。塌橘は形狀が大きくして扁く、外は綠で心が紅く、瓣が巨きくして液が多く、春を經ると甘美になる。包橘は外が薄くして內が盈ち、その脈瓣は皮を隔てて數へられる。綿橘は微小なもので、極めて軟美にして愛すべきものだが、多く結ばない。沙橘は細小で甘美だ。油橘は皮

が油で飾つたやうなもので、中が堅く外が黒く、乃ち橘としての下等品である。早黄橘は秋の半に已に丹くなる。凍橘は八月に花を開き、冬結實し、春採る。穿心橘は實が大きくして皮が光り、心が虚してゐて穿てるものだ。荔枝橘は横陽に産する。膚理が皺密で荔子のやうだ。俗間の語り傳ひに、橘の下に鼠を埋めると實を結ぶことが倍加するといふ。故に物類相感志に『橘は尸を見て實繁し』とあり、涅槃經に『橘の鼠を見てその果實多きが如し』とある。周禮に『橘は淮を踰えて自ら變じて枳となる』とあるは地氣の關係である。

その他は柑の條下を見よ。

橘實　(三)【氣　味】【甘く酸し、溫にして毒なし】弘景曰く、これを食へば痰を多くする。恐らく益あるものでない。原曰く、多食すれば膈に戀して痰を生じ、肺氣を滯らす。瑞曰く、螃蟹と共に食へば人をして軟癱を患はしめる。

【主　治】【甘きものは肺を潤ほし、酸きものは痰を聚める】(藏器)【消渇を止め、胃を開き、胸中の膈氣を除く】(大明)

【發　明】時珍曰く、橘皮は氣を下し痰を消し、その肉は痰を生じ飲を聚める。

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕C. nobilis, Lour. 果皮揮發油ヲ含ム、ソノ九二%ハリモーネン、〇・五ハ脂肪酸、〇・三ハステアロプテン(溶點一一六—一一七)及フエノール痕跡等ナリ、果汁ハ蔗糖四—七%轉化糖二—四・六、枸

櫞酸〇・三五―一・二灰分等ヲ含ム。花ハ少量ノインドールヲ有ス。(ウ植、六三四)

表と裏とでかやうの差異のあることは、凡ての物のみな然るところである。今一般に蜜煎の橘を果に充てて食ふが、甚だ佳味だ。また醬、菹にするもよし。

黄橘皮【釋名】**紅皮**(湯液) **陳皮**(食療) 弘景曰く、橘皮は氣を療ずるに大いに勝れたもので、東橘を好しとする。西江のものはそれに及ばない。陳久なるものに限るを良しとする。好古曰く、橘皮は色紅くして日久しきものを佳しとする。故に紅皮、陳皮といふ。白を去つたものを橘紅といふ。

【修治】斅曰く、凡そ使ふには桔皮、鰦子皮を用ゐてはならぬ。この二物は用ゐられないものだ。凡そ修治するには、白膜一重を去つて剉細し、鯉魚皮で裹んで一夜置き、翌日取つて用ふべきものである。

宗奭曰く、本草に橘柚を一條に記載してあるが、蓋し誤りを傳へたものだ。後世ではそれに氣づかずして柚皮を橘皮とするが、これは無窮の患を貽すものだ。この物は六陳の一として、天下日用に須ゐられるもので、今は一般にまた多く乳柑皮を以て僞亂するから、擇び用うることに注意を要する。柑皮は甚しく苦くはなく、橘皮は極めて苦く、熟しても苦いものだ。或は皮の緊なると慢なるとに因つて區別す

るが、又、産地の不同に因つてもやはりそれぞれ緊、慢がある

時珍曰く、橘皮は紋が細かく、色は紅くして薄く、内側に筋脈が多く、その味は苦く辛い。柑皮は紋が粗く、色は黄にして厚く、内側に白膜が多く、その味は辛く甘い。柚皮は最も厚くして虚し、紋が更に粗く、色は黄で内側には膜が多くして筋がなく、その味は甘が多くして辛が少い。ただかやうに區別すれば差はない。橘皮は性温であり、柑、柚皮は性冷である、これを心得て置かねばならぬ。現に全國で多く廣中から來るものが勝れ、江西のものがそれに次ぐとしてあるが、しかしやはり多くは柑皮を雜へてある。柑皮ならばまだ用ゐられるが、柚皮では遙かに違ふものである。凡そ橘皮は、中を和し胃を理する藥に入れるには白を留め、氣を下し痰を消する藥に入れるには白を去る。その說は聖濟經から出たものだ。白を去るものは、白湯に鹽を入れたもので洗ひ、潤透して筋膜を刮り去り、晒し乾して用ゐる。また煮、焙ずるものもあつて、それぞれその方に隨ふ。

【氣味】「苦く辛し、温にして毒なし」【主治】「胸中の瘕熱、逆氣。水、穀を利す。久しく服すれば、臭を去り、氣を下し、神に通ずる」(本經)「氣を下し、嘔

欬を止め、胸中に氣衝するもの、吐逆、霍亂を治し、脾の穀を消する能はぬを療じ、洩を止め、膀胱の留熱で停水し、淋を起すを除き、小便を利し、寸白蟲を去る」(別錄)「痰涎を消し、上氣欬嗽を治し、胃を開き、氣痢に主效があり、癥瘕痃癖を破る」(甄權)「嘔噦、反胃、嘈雜して時に淸氣を吐するもの、痰痞、痎瘧、大腸閟塞、婦人の乳癰を療する。食料に入れば魚腥毒を解す」(時珍)

【發明】○杲曰く、橘皮は氣薄く味厚く、陽中の陰であつて、升によく降によく、脾、肺の二經の氣分の藥である。白を留めれば脾、胃を補し、白を去れば肺氣を理し、白朮と共にすれば脾、胃を補し、甘草と共にすれば肺を補し、獨用すれば肺を瀉し、脾を損ずる。その體は輕浮であつて、一には能く胸中の寒邪を導き、二には滯氣を破り、三には脾、胃を益し、靑皮を半減して加へて用ゐれば滯氣を去り、陳を推して新を致す。但し多く用ゐ、久しく服しては能く元氣を損ずる

原曰く、橘皮は能く散じ、能く瀉し、能く溫め、能く補し、能く和し、痰を化し、嗽を治し、氣を順にし、中を理し、脾を調へ、膈を快にし、五淋を通じ、酒病を療ずる。その功は諸藥の上位に在るものだ

時珍曰く、橘皮の苦は能く泄し、能く燥し、辛は能く散じ、溫は能く和す。その あらゆる病を治するはすべてその氣を理し、濕を燥する功用を利用するのであつて、補藥と共にすれば補し、瀉藥と共にすれば瀉し、升藥と共にすれば升し、降藥と共にすれば降する。脾は元氣の母、肺は攝氣の籥である。故に橘皮は二經の氣分の藥となるので、但し配合するものに隨つて補とも瀉とも升とも降ともなる。潔古張氏がいつた『陳皮、枳殼はその氣を利して痰自ら下る』のは蓋しこの關係であつて、杏仁と共にすれば大腸の氣閟を治し、桃仁と共にすれば大腸の血閟を治するは、いづれもその滯を通ずる作用を取つたものだ。詳細は杏仁の條下に記載してある。按ずるに、方勺の泊宅編に『橘皮は膈を寬にし、氣を降し、痰飮を消し、極めて殊功がある。他の藥は新しさを貴ぶが、この物だけは陳きを貴ぶ。外舅の莫强中が豐城の令を奉職中に疾に罹り、凡そ食事を攝ると胸滿して下らず、あらゆる方も效がなかつたが、偶ゝ家人が橘紅湯を合せたので、それを取つて飮んで見ると、具合がよいやうに覺えたので、連日飮んで見た。するとある日忽ち胸中に物があつて墜下するやうに覺え、大いに驚いて目を瞪り、雨の如くに自汗し、少時すると腹痛して鐵彈

子の如きもの數塊を下した。それは鼻を向けられぬほどに臭いものであつた。それ以來胸の邊がからりとして、その疾は頓に癒えた。蓋し脾の冷積だつたのだ。その方は、橘皮を穰を去つて一斤、甘草、鹽花各四兩、水五椀を慢火で煮乾し、焙じ研つて末にし、白湯に點てて服するのであつて、二賢散と名け、一切の痰氣を治するに特驗がある』世間の醫師は徒に半夏、南星の屬をば知つてゐるが、この藥の偉功に比しては語るに足るものでない』とある。予（時珍）が按ずるに、二賢散は丹溪が變じて潤下丸としてある。これは痰氣を治するに有效だが、ただ氣の實する人だけが服するに宜いので、氣の不足のものは用ゐるに適しない。

附方　舊七、新二十一。【潤下丸】濕痰が火に因つて泛上して胸膈に停滯し、欬唾の稠粘するを治す。陳橘皮半斤を砂鍋に入れ、鹽五錢を下して化した水に淹けて煮乾し、粉甘草二兩を皮を去つて蜜で炙き、各淨末を取り、蒸餅で和して梧桐子大の丸にし、百丸づつを白湯で服す。（丹溪方）【寬中丸】脾氣が和せず、冷氣が中に客し、壅遏して通ぜぬを治す。これは脹滿するものである。橘皮四兩、白朮二兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、毎食前に木香湯で三十丸を服す。一日三服（是齊指迷

方）【橘皮湯】男、女の傷寒、幷に一切の雜病で嘔噦し、手、足の逆冷するものを治す。橘皮四兩、生薑一兩を水二升で一升に煎じ、徐徐に呷へば止まる。（仲景方）【嘈雜吐水】眞橘皮を白を去つて末にし、五更に五分を掌心に載せ、それを舐めて睡る。三日にして必ず效がある。皮が眞物でなければ效驗がない（怪證奇方）【霍亂吐瀉】男、女に拘らず、ただ一點胃氣の存するものならば、これを服すれば再生する。廣陳皮を白を去つて五錢、眞藿香五錢、水二盞を一盞に煎じ、時時に溫服する。記載は百一選方にある。○聖惠では、陳橘皮末二錢を湯に點てて服す。人事不省なるには灌ぐ。かくて磚を燒いて醋を沃ぎ、その磚を布で裹み、心下に置いて熨すれば活きる。【反胃吐食】眞橘皮を日に照された西壁の土で香しく炒つて末にし、毎服二錢を生薑三片、棗肉一箇、水二鍾で一鍾に煎じて溫服する。（直指方）【卒然の食噎】橘皮一兩を湯に浸して瓤を去り、焙じて末にし、水一大盞で半盞に煎じて熱服する。（食醫心鏡）【諸氣の呃噫】橘皮二兩を瓤を去り、水一升で五合に煎じて頓服する。或は枳殼を加へるが尤も良し。（孫尙藥方）【痰膈氣脹】陳皮三錢を水で煎じて熱服する。（楊氏簡便方）【卒然の失聲】橘皮半兩を水で煎じて徐に呷ふ。（肘後方）【年を經

た氣嗽】橘皮、神麴、生薑を焙じ乾して等分を末にし、蒸餅で和して梧子大の丸にし、三五十丸づつを食後と夜就寢時とに各一服する。ある人がこの病でこれを服し、兼ねてもと患つた膀胱氣までみな癒えた。(寇氏衍義)【食を化し、痰を消す】胸中の熱氣である。橘皮半兩を微し熬つて末にし、水で煎じて茶に代へて細呷する。(心鏡)【下焦の冷氣】乾陳橘皮一斤を末にし、蜜で梧子大の丸にし、毎食前に三十丸を溫酒で服す(食療本草)【脚氣衝心】或は心下に結硬し、腹中の虛冷するには、陳皮一斤と杏仁五兩を皮、尖を去つて熬り、少し蜜を加へて搗き和し、梧桐子大の丸にし、毎日食前に三十丸を米飲で服す。(食療)【老人の氣閟】方は上に同じ。(濟生)【大腸閟塞】陳皮を白のあるまま酒で煮て焙じて研末し、二錢づつを溫酒で服し、米飲で送下する。(普濟)【途中の心痛】橘皮を白を去り、湯に煎じて飲むが甚だ良し。(談埜翁方)【魚、蟹を食つた中毒】方は上に同じ。(肘後)【風痰で麻木するもの】凡そ手、及び十指の麻木、大風の麻木はいづれも濕痰死血である。橘紅一斤を逆流水五碗で煮爛して渣を去り、再び一盌までに煮て頓服し、吐を取る。これは吐痰の聖藥である。吐せぬときは瓜蒂末を加へる。(摘玄方)【脾寒諸瘧】老人、小兒、妊婦に拘らず、た

だ二服で止む。眞橘皮を白を去つて切り、生薑の自然汁で一夜浸し、銀器に入れて重湯で煮乾し、焙じて研末し、毎服三錢を、隔年の青州棗十箇を水一盞で半盞に煎じたもので發作前に服し、棗で下す。（適用方）【小兒の疳瘦】久しく服すれば食を消し、氣を和し、肌、肉を長ずる。陳橘皮一兩、黄連一兩半を米泔水に一日浸して研末し、麝三分を入れ、猪膽にその藥を盛つて漿水で煮熟して取出し、粟米飯で和して綠豆大の丸にし、一二十丸づつを米飮で服す。（錢氏小兒方）【產後の尿閟】通ぜぬには、陳皮一兩を白を去つて末にし、空心に二錢づつを溫酒で服す。一服で通ずる。これは張不愚の方である。（婦人良方）【產後の吹奶】陳皮一兩、甘草一錢を水で煎じて服すれば散ずる。【婦人の乳癰】まだ成らぬものは散じ、已に成つたものは潰れ、忍び難く痛むものは疼まなくなる。神驗喩ふべからざるものだ。眞陳橘皮を湯に浸し、白を去つて晒し、麪で炒つて微し黄にして末にし、二錢づつを射香を調へた酒で服す。初發のものは一服で效が現れる。これを橘香散と名ける。（張氏方）【聤耳の汁の出るもの】陳皮を燒き研つて一錢、麝香少量を末にし、日日に摻る。これを立效散と名ける。【魚骨鯁咽】橘皮を常に含み、汁を咽んで下す。（聖惠方）【嵌

甲で痛むもの】歩行不能なるには、濃煎陳皮湯に浸し、良久して甲と肉の自ら離れたとき輕く剪り去り、虎骨末を傅ければ平安を得る。(醫林集要)

青橘皮　［修　治］　時珍曰く、青橘皮とは橘のまだ黄にならずして青色なるもので、薄くして光り、その氣が芳烈である。今世間では多く小柑、小柚、小橙で僞物を作るから愼重なる吟味が必要だ。藥に入れるには湯で浸して瓤を去り、切片して酢を拌ぜ、瓦で炒つて用ゐる。

［氣　味］【苦く辛し、溫にして毒なし】［主　治］【氣滯。食を下し、積結、及び膈氣を破る】(頌)【堅癖を破り、滯氣を散じ、下焦の諸濕を去り、左脇、肝經の積氣を治す】(元素)【胸膈の氣逆、脇痛、小腹疝氣を治し、乳腫を消し、肝、膽を疏し、肺氣を瀉す】(時珍)

［發　明］元素曰く、青橘皮は氣味倶に厚く、沈にして降り、陰であつて、厥陰、少陽の經に入り、肝、膽の病を治す。

杲曰く、青皮なるものは足の厥陰、引經の藥で、能く食を引いて太陰の倉に入り、滯を破り、堅を削り、いづれも下に在るの病を治す。滯氣があれば滯氣を破り、滯

氣がなければ眞氣を損ずる。

好古曰く、陳皮は高きを治し、青皮は低きを治す。枳殼の胸膈を治し、枳實の心下を治すると同じ關係である。

震亨曰く、青皮なるものは肝、膽二經の氣分の藥である。故に一般に、多く怒つて滯氣があり、脇下に鬱積があり、或は小腹の疝疼するにこれを用ゐて二經を疏通し、その氣を行らすのである。二經の實するものの場合には、先づ補して後にこれを用うべきものだ。又、肝氣を疏するには青皮を加へる。黑く炒れば血分へ入るといふ

時珍曰く、青橘皮は、古代には用ゐなかつたもので、宋時代の醫家に至つて始めて用ゐたのである。その色は青く、氣は烈しく、味は苦くして辛い。これを修治するに醋を以てするは、所謂『肝は散を欲す。急に辛を食つて以て散じ、酸を以て泄し、苦を以て降す』である。陳皮は浮にして升り、脾、肺の氣分に入り、青皮は沈にして降り、肝、膽の氣分に入る。一體二用であつて物理の自然である。小兒の積を消するに、多く青皮を用ゐて最も能く汗を發するが、汗あるものには用ゐてはならぬ。その說は楊仁齋の直指方に出てゐるが、一般には知るものが稀だ。

嘉謨曰く、久瘧で熱が甚しければ必ず癖塊を結する。これは淸脾湯を多く服するが宜し。その湯は內に靑皮があつて、肝の邪を疏利するから癖が自ら結せない。

附方 舊二、新七。【快膈湯】冷膈氣、及び酒食後の飽滿を治す。靑橘皮一斤を四分にし、四兩をば鹽湯で浸し、四兩をば白沸湯で浸し、四兩をば醋で浸し、四兩をば酒で浸し、各三日にして取出し、白を去つて絲に切り、鹽一兩で炒つて微し焦して硏末し、二錢づつを茶末五分を水で煎じたもので溫服する。點てて服してもよし。【脾を理し氣を快くする】靑橘皮一斤を日光で乾し、焙じて硏末し、甘草末一兩、檀香末半兩を和勻して取收め、一二錢づつを鹽少量を入れた白湯に點てて服す。【法制靑皮】常に服すれば、神を安じ、氣を調へ、食を消し、酒を解し、胃を益す。老人、小兒に拘らず。宋の仁宗は每食後に數片を咀んでをられた。それは邢和璞眞人が獻じた方であつて、萬年草と名けたが、劉跂が改めて延年草と名けた。仁宗はそれを呂丞相に賜はつた。靑皮一斤を浸して苦味を去り、瓤を去つて揀淨し、白鹽花五兩、炙甘草六兩、舶茴香四兩を甜水一斗で煮て、底に著かぬやうに手を住めずに攪きまぜながら、水が盡きるを候つて慢火で焦げぬやうに焙じ乾し、甘草、

茴香を去り、ただ青皮だけを取つて密收して置いて用ゐる。（王氏易簡方）【瘧疾寒熱】青皮一兩を燒いて性を存して研末し、發作前に一錢を溫酒で服し、發作時に臨んで再服する。（聖惠方）【傷寒呃逆】聲が四隣に聞えるには、四花青皮の全きものを研末し、二錢づつを白湯で服す（醫林集要）【產後の氣逆】青橘皮を末にし、二錢を葱白、童尿で煎じて服す。（經驗後方）【婦人の乳嵒】久積憂鬱が原因で、乳房内に指頭ほどの核があり、痛まず痒からず、五七年にして癰となるを乳嵒と名ける。治し得ないものだ。青皮四錢を水一盞半で一盞に煎じ、徐徐に服す。一日一服。或は酒を用ゐて服す。（丹溪方）【聤耳の汁の出るもの】青皮を燒いて研末し、綿で包んで塞ぐ。【脣が燥いて瘡を生ずるもの】青皮を燒いて研り、猪脂で調へて塗る。

橘瓤上の筋膜　主治　【口渴　酒を吐す。炒熟して湯に煎じて飲む。甚だ效がある】（大明）

橘核　修治　時珍曰く、凡そ用ゐるには、新瓦で香しく焙じて殼を去り、仁を取つて研碎して藥に入るべきである。

氣味　【苦し、平にして毒なし】　主治　【腎疰腰痛、膀胱氣痛、腎冷に

は、炒り研つて一錢を溫酒で服す。或は酒で煎じて服す】（大明）【酒皶、風鼻赤を治す。炒り研つて一錢づつを、胡桃肉を酒に擂つたもので服し、知あるを以て度とする】（宗奭）【小腸疝氣、及び陰核腫痛には、炒り研つて五錢を煮酒で煎じて服す。或は酒糊で丸にして服す。甚だ效がある】（時珍）

【發明】時珍曰く、橘核は足の厥陰に入り、靑皮と同功である。故に腰痛、㿗疝、下に在るの病を治す。これは獨り核に象る意味を取るだけのものではない。和劑局方の諸疝痛、及び內㿗卵腫、偏墜で或は石のやうに硬く、或は腫が潰するに至るものを治する橘核丸に用ゐてあつて、有效なものだ。その方は品味が頗る多い。詳細はその本方を見よ。

【附方】新一。【腰痛】橘核、杜仲各二兩を炒つて研末し、二錢づつを鹽酒で服す。（簡便方）

葉【氣味】【苦し、平にして毒なし】【主治】【胸膈の逆氣を導き、厥陰に入り、肝氣を行らし、腫を消し、毒を散ず。乳癰、脇痛にこれを用ゐ、經を行らす】（震亨）

【附方】新一。【肺癰】絲橘葉を洗つて擣き、汁を絞つて一盞を服す 膿血を吐出して癒える。(經驗良方)

柑（宋開寶）

和名 みかん
學名 Citrus nobilis, Lour.
科名 へんるうだ科(芸香科)

【釋名】**木奴** 志曰く、柑はまだ霜を經ぬうちは酸いけれど、霜の後には甚だ甜い 故に柑子と名けたのである。時珍曰く、漢の李衡は柑を武陵の洲上に種ゑて木奴と呼んだ

【集解】(一)頌曰く、乳柑は西戎に產するものが佳し。志曰く、柑は嶺南、及び江南に生ずる 樹は橘に似たもので、實もやはり橘に似て圓く大きく、皮の色は生では青く熟すれば黃である。ただ乳柑皮は藥に入れ、山柑皮は咽痛を療ずるだけで、その他のものはいづれも用ゐるに堪へない。又、沙柑、青柑といふ體性の相類するものがある。藏器曰く、柑には朱柑、黃柑、乳柑、石柑、沙柑があり、橘には朱橘、乳橘、塌

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕みかん 蜜柑 Citrus Ausantium, L. subsp. nobilis, Makino. (Rutaceae)
〔生藥〕陳皮(和產) Cortex Fructus Auranti nobilis ハみかんノ果皮ヲ剝離シ乾燥シタルモノナリ。

橘、山橘、黄淡子があり、これ等の物の皮はいづれも氣を去り、中を調へ、實はいづれも食へるが、就中乳柑を上とする

時珍曰く、柑は南方の果であつて、閩、廣、溫、台、蘇、撫、荊州が盛である。川蜀にはあるけれどもそれ等に及ばない。その樹は橘と異らないが、ただ刺が少いだけだ。柑皮は橘に比し色が黄でやや厚く、理がやや粗くして味が苦くない。橘は久しく貯へ得るが、柑は腐敗し易い、柑の樹は氷雪を畏れるが、橘樹はさほどに差間ない。これが柑と橘との相異點である。柑と橘の皮は今は一般に多く混用されてゐるが、明な區別を要するものだ。詳細は橘の條下に記載した。按ずるに、韓彦直の橘譜には、


〔柑〕

乳柑は溫州の諸邑に産するが、泥山のものを最とする。その味が乳酪に似てゐるところからかく名けたもので、彼の地方では眞柑と呼んでゐる。それは他の柑

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕果皮ハ精油及ヘスペリヂン（配糖體）ヲ含有ス。精油ハ九〇％以上ノ右旋リ

を假僞のものとするらしい。その木は婆娑として、その葉は纖長く、その花は香韻がある。その實は圓く正しく、膚理は澤かな蠟のやうで、その大いさは六七寸、その皮は薄くして味が結構だ。脈が瓣に粘らずして食つても滓が留まらぬ。一顆に核が僅に二三箇で、また全くないものもある。擘いて見ると香霧が人に噀くものは柑中での絶品である。生枝柑といふは形が圓くなく、色は青く、膚が粗く、味に微酸を帶びたもので、枝に留つて久しきに耐へる。味が甘く變ずるを俟つて葉を付けて折り取るところからかく名けたのだ。海紅柑といふは樹が小さくして顆が極めて大きく、周圍一尺に及ぶものがあり、皮が厚く、色が紅く、久しく貯藏し得る。今の獅頭柑といふはやはりこの物の類である。洞庭柑といふ種類は洞庭の山に產し、皮は細かく、味が美で、その熟することが最も早い。甜柑といふは洞庭に類して大きく、毎顆が必ず八瓣で、霜を待たずして黃になる。木柑といふは洞庭に類し、膚が粗頑で瓣が大きく、液が少いから木といつたのである。朱柑といふは洞庭に類して大きく、色が甚だ嫣かに紅く、その味が酸く、一般に珍重されない。饅頭柑といふは蒂に近く饅頭のやうな尖が起つてゐて、味は香美である。

と記載してある。

(三)〔氣味〕『甘し、大寒にして毒なし』頌曰く、冷なり。志曰く、多食すれば人をして肺冷して痰を生じ、脾冷して痼癖を發し、大腸が瀉利し、陰汗を發する。

〔主治〕『腸、胃中の熱毒を利し、丹石を解し、暴渴を止め、小便を利す』(開寶)

〔附方〕新一。『難産』柑橘瓤を陰乾し、燒いて性を存して研末し、二錢を溫酒で服す。(集效)

皮 〔氣味〕『辛く甘し、寒にして毒なし』時珍曰く、橘皮は苦く辛く、溫である。柑皮は辛く甘く、寒である。外形は似てゐるけれども氣味は同じくない。詵曰く、多食すれば肺を燥せしめる。

〔主治〕『氣を下し、中を調へる』(藏器)『酒毒、及び酒渴を解す。白を去り焙じて研末し、湯に點て鹽を入れて飲む』(大明)『產後の肌浮を治す。末にして酒で服す』(雷斅)『傷寒の飲食、勞復には、濃煎汁を服す』(時珍)『山柑皮は咽喉痛を治するに效がある』(開寶)

核 〔主治〕『塗面藥に作る』(蘇頌)

モーネンチ含有ス。(谷井專太郎、藥誌、二〇四(明、三二)一二九)(朝比奈泰彥、大伏元太郎—藥誌五五三(昭、三)二〇七)蜜柑(溫州)ハ可食部七六・四(%)水分八七・一〇、總窒素〇・一四四、蛋白質〇・九〇、脂肪〇・二五、含水炭素九・九〇、纖維〇・四〇、無機質〇・三八、燐酸〇・〇五〇、石灰〇・〇四一、鐵〇・〇〇三、アルカリ價四・〇、熱量三四カロリー(日食、二二七)果實中ニ酸性物質(枸櫞酸トシテ)一—三%。

(藥用)陳皮ハ芳香性健胃藥トス。又新鮮ナル果皮ハ橙皮油(局方)ノ原料トス。(藥誌、四一九(大、六)六六六)

葉　【主治】〔聤耳で水、或は膿血の流れるには、嫩頭七箇を取り、水數滴を入れて杵き、汁を取つて滴せば癒える〕（藺氏）

橙（宋開寳）

和名　ゆず
學名　Citrus Junos, Sieb.
科名　へんるうだ科（芸香科）

【釋名】**金毬**　**鵠殼**　時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『橙は柚の屬であつて、登て之を成すべし。故に文字は登に從ふ。また諧聲の文字だ』とある。

（一）【集解】志曰く、橙は、樹は橘に似て葉が大きく、その形は圓く、橘より大きくして香しく、皮は厚くして皺んでゐる。八月に熟する。

時珍曰く、橙は南方の地に產し、その實は柚に似て香しく、葉には二つの刻缺があつて、兩段になつたやうに見える。また一種の氣の臭いものもある。柚は柑の屬にして大なるもので、早く黃になり、留め難く、橙は橘の屬にして大なるもので、晩く熟し、久しきに耐へる。いづれも大、小の二種ある。按ずるに、事類合璧には『橙は樹が高く、枝、葉は橘に甚しくは類せぬが、やはり刺がある。その實は大な

牧野博士ハ橙ヲゆずトセラレタ

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕Citrus Aurantium, L.（C. fusca, Lour）（C. bigaradia, Risso.）（C. Daidai, Sieb.）（Rutaceae）だいだい　臭橙 C. Aurantium, L. subsp. amara, Engl. なつみかん C. Aurantium, L. subsp. Natsudaidai, Hayata.

〔生藥〕未熟橙實 Fructus Aurantii immaturi ハだいだいノ果實ヲ未熟ノトキニ採集シ乾燥セルモノナリ、本邦ニテハ專ラ伊豆地方ヨリ出ス。橙皮 Cortex Aurantii Fructus ハだいだいノ熟果ノ皮ヲ尖楕圓形等ニ剝截乾燥セルモノナリ。凡テ橙樹ハ前印度ノ東北部ニ天生シ地中海濱ノ各地其他溫暖ノ地方ニ汎ク培植セル常綠樹ニシテ殊ニ臭橙ハ本邦及支那ニ培植セリ。(生藥學)

夏皮 Cortex Aurantii Natsudaidai ハ稔熟セルなつみかんノ果皮ヲ剝離シ乾燥セルモノナリ。(邦藥植、一六七)

るものは盌ほどあり、頗る朱欒に似たもので、霜を經て早く熟し、色は黄に、皮は厚く、蹙衄して沸くが如く、香氣は馥郁たるものだ。その皮は衣類を熏ずるもよく、鮮魚の芼にもよく、葅、醢を和するにもよく、醬、虀を作るにもよく、蜜煎にするもよく、糖で製して橙丁とするもよく、蜜で制して橙膏とするのもよく、これを嗅げば香しく、これを食へば美味である。誠に佳果である』とある。



〔橙〕

宗奭曰く、橙皮は、今はただ果にし、或は湯に合はせて客に出す位のことで、藥には入れられないが、宿酒の解せぬものはこれを食へば速に醒める。

(三)氣味 【酸し、寒にして毒なし】士良曰く、暖なり。多食すれば肝氣を傷め、虛熱を發する。猵肉と共に食へば頭旋、惡心を發する。時珍曰く、猵とは水獺の屬である。諸家の本草にいづれも檳榔としたのは誤である。

【主治】【酸汁を洗ひ去つて切り、鹽、蜜を和して煎成して貯へ、それを食へば惡心を止め、能く胃中の浮風、惡氣を去る】(開寶)【風氣を行り、瘻氣を療じ、瘰癧を發し、魚、蟹の毒を殺す】(士良)

皮　【氣味】【苦く辛し、溫にして毒なし】【主治】【醬酢に作れば香美であつて、腸、胃の惡氣を散じ食を消し、氣を下し、胃中の浮風氣を去る】(開寶)【鹽を和して貯て食へば、惡心を止め、酒病を解す】(孟詵)【糖で橙丁に作れば甘美であつて、痰を消し、氣を下し、膈を利し、中を寛にし、酒を解す】(時珍)

【附方】新二。【香橙湯】中を寛にし、氣を快にし、酒を消す。橙皮二斤を切片し、生薑五兩を切り、焙じて擂り爛らし、炙甘草末一兩、檀香末半兩を和して小餅に作り、一餅づつを嚼んで、沸湯に鹽を入れたもので送下する。(奇效良方)【痔瘡腫痛】年を隔てて風乾した橙子を桶の中で燒き、その烟で熏ずるが神效がある。(醫方摘要)

核　【主治】【面皯粉刺には、濕研して夜夜に塗る】(時珍)

【附方】新一。【閃挫腰痛】橙子核を炒つて研り、酒で三錢を服すれば癒える。

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕Citrus Aurantium, Risso ノ葉ハスタヒドリン(アルカロイド)、ヘスペリヂンヲ含ム。枝葉幼條ハ大部分テルペン(主トシテ右旋カンフエン少量ノリモーネン)ヨリナル揮發油ヲ含ム。花ハ〇・一五四%ノ揮發油(右旋カンフエン、右旋リモーネン、右旋リナロール、アントラニール酸メチルエステル等ヲ含有)ヲ有ス。果皮ハ右旋リモーネン(九〇%前後)ヲ主トスル揮發油其他ヘスペリヂン、脂肪(リノレイン。リノレネイン、オレイン、ステアリン、パルミチン等ヲ含ム)、フイトステリン類、少量ノ樹脂、カ

ロチン、ペクチン、酵素（ペロキシダーゼ、カタラーゼ等）ヴイタミンA及B等ヲ含ム。果肉ハヘスペリヂン、葡萄糖、蔗糖、轉化糖、枸櫞酸、林檎酸、ヴイタミンA、B、C等ヲ含ム。種子中ニハ苦味質リモニン存ス。（ウ植、六二三）

だいだいノ果皮ハ約〇・一五％ノ精油ヲ含有シ、主トシテ右旋リモーネンヨリ成ル。配糖體ヘスペリヂンハ特ニ未熟果皮中ニ多量ニ含有シ、芽ニハスタヒドリン（アルカロイド）ヲ含有ス。葉ハ〇・二三％ノ精油ヲ含有シ、主成分ハ醋酸リナロールニシテ其他シトロネロール、ゲラニオール等ノカプロン酸

（攝生方）

柚 音は又（イウ）である。（日華）

和名 じやほん
學名 Citrus decumana, L.
科名 へんるうだ科（芸香科）

［釋名］ 櫾 柚と同じ。 條（爾雅） 壺柑（唐本） 臭橙（食性） 朱欒 時珍曰く、柚とは色の油然たることだ その形狀が（一）卣（いう）のやうなところから壺と名ける



〔柚〕
―欒―

やはり象形で、今一般にその黄にして小なるものを蜜筩（みつよう）と呼ぶは正にその意味である。その大なるものを朱欒（しゆらん）といふは、やはり團欒の象を取つたもので、最も大なるものを香欒といふ。爾雅にはこれを櫠――音は廢（ハイ）――といひ、又、椵――音は賈（カ）――といつ

又ハシトロネル酸エステル（エステル總計六（〇・〇）、纈草酸、テルペン等ヲ含有ス。花ハ約〇・一五%ノ精油（橙花油）ヲ含有シ主成分ハ左旋ピネン、左旋カンフェン、ヂペンテン、アントラニル酸メチル、インドール、左旋リナロール、醋酸リナロール、ネロール、ネロリドール（セスキテルペン）等ナリ。（ウ植、六三〇）（邦藥植、一六六）

だいだいノ果實ハ可食部（汁）六・三（%）果汁ハ水分九二・八五、總窒素〇・〇四〇蛋白質〇・二五、脂肪〇・一七、含水炭素六・二一、無機質〇・四八、燐酸〇・〇一九石灰〇・〇四六、食鹽〇・〇一八、アルカリ

てある。廣雅にはこれを鐳柚といつてあるが、鐳もやはり壺である。桂海志はこれを臭柚といつてある。いづれも一物であつて、ただ大、小を以て古今の方に稱呼を異にするだけである。

（三）【集解】恭曰く、柚皮は厚くして味が甘く、橘皮やうに薄くして味の辛く苦いものでない。その肉はやはり橘のやうで、甘きがあり酸きがあり、酸きものを壺柑と名ける。今俗間で橙を柚といふが、誤つてゐる。按ずるに、呂氏春秋に『果の美なるものは江浦の橘、雲夢の柚』とあり、郭璞は『柚は江南に產し、橙に似て實が酢く、大いさは橘ほどのものだ』といひ、禹貢には『揚州、厥の包は橘柚』とあつて、孔安國は『小なるを橘といひ、大なるを柚といふ』といつたが、これはいづれも柑である。

頌曰く、閩中、嶺外、江南にいづれも柚があつて、橘に比して黄白色で大きい。襄、唐地方の柚は色が靑黄で實が小さい。その味はいづれも酢く、皮は厚く、藥に入れるに堪へない。

時珍曰く、柚は樹、葉いづれも橙に似て、その實は大、小の二種あり、小なるも

價七・六、溫量二八カロリー。（日食、二二四）

なつみかんノ果實ハソノ二—五%ノ酸（主トシテ枸櫞酸）及〇・三—〇・五%ノ精油ヲ含有ス。又果皮ハナリンギンヲ含有ス。〔辻村みちよ—理研、六（昭、二）一一五〕

なつみかんノ果實ハ可食部五七・五（%）、水分九〇・五〇、總窒素〇・一六〇、蛋白質一・〇〇、脂肪〇・二〇、含水炭素六・八〇、纖維〇・三〇、無機質〇・八八、燐酸〇・〇六〇、石灰〇・〇五八、鐵〇・〇一二、アルカリ價一〇・一、溫量三四カロリー。（日食、二二六）

〔藥用〕夏皮ハ芳香料トシテ多ク浴劑ニ使

のは柑ほど、橙ほどで、大なるものは瓜ほど、升ほどあり、周圍一尺餘に及ぶものもある。やはり橙の類であつて、今は一般に朱欒と呼ぶ。形色は圓正で柑、橙に類し、ただ皮が厚くして粗く、その味は甘く、その氣は臭く、その瓣は堅くして酸惡で食はれない。その花は甚だ香しい。南方の地ではその核を種ゑて成長したものに柑、橘を接ぐ。甚だ良い具合に行くさうだ。蓋し橙は橘の屬だから、その皮が皺み、厚くして香しく、味は苦くして辛い。柚は柑の屬だから、その皮が粗く、厚くして臭く、味は甘くして辛いのだ。かく區別すれば柚と橙とは自ら明瞭である。郭璞は『櫾は大柚である。實は大いさ盞ほど、皮は厚さ二三寸、子は枳に似て、食つては味が少い』といひ、范成大は『廣南の臭柚は大いさ瓜ほどのもので、食へる。その皮は甚だ厚く、氈刷の代用として墨を染めて碑の石刷に使用され、且つ紙を損じない』といつてある。列子に『吳越の間、木あり焉。その名を櫾と爲す。碧樹にして冬青く、實は丹にして味酸し。その皮汁を食へば憤厥の疾を已す。淮を渡つて北すれば化して枳と爲る』とあるが、これは地氣がかやうに不同だといふことを言つたのだ

（三）**氣　味**　【酸し、寒にして毒なし】　**主　治**　【食を消し、酒毒を解し、酒を

飮む人の口氣を治し、腸、胃中の惡氣を去り、妊婦の食思なくして口の淡きを療ずる】(大明)

皮

氣味 【甘く辛し、平にして毒なし】

正誤 時珍曰く、按ずるに、沈括の筆談に『本草に「橘皮は苦し、柚皮は甘し」とあるは誤だ。柚皮は極めて苦くして口にも入れられぬもので、甘いのはそれは橙である』とあるが、この說は今の柚と同じくないやうである。これは沈氏自らの誤であつて、據とはならない。

主治 【氣を下すに食ふが宜し。藥には入れない】(弘景) 【食を消し、膈を快にし、憤懣の氣を散じ、痰を化す】(時珍)

附方 新一。【痰氣欬嗽】香欒を核を去つて切り、砂餅内で酒に浸して一夜封固し、煮爛して蜜を拌ぜ、時時に含咽する。

葉 主治 【頭風痛には、葱白と共に擣いて太陽穴に貼る】(時珍)

花 主治 【蒸麻油で香澤面脂にすれば、髮を長くし、燥を潤ほす】(時珍)

用ス。又成熟前ニ自然ニ落下スル未熟果(俗ニ落チ蜜柑ト稱ス、)ハ枸櫞酸及蜜柑油ノ製造原料トス。和歌山縣湯淺町及山口縣萩町ニソノ製造工場アリ。(邦藥植、一六七)

橙皮(局方)ハ芳香性健胃苦味藥トシテ苦味丁幾(局方)ニ配合シ又橙皮舍利別、橙皮丁幾(局方)ヲ製ス。未熟橙實モ健胃苦味藥トシテ用フ、獨逸藥局方ニテハ苦味丁幾ノ配合藥タリ。(生藥學)

〔柚〕

(一) 卣ハ古ノ酒器ノ名ナリ。

(二) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Citrus Aurantium, L. var. decumana, Bonav. (C. decumana, L.)

C. ichangensis, Swingle. ゆず C. Aurantium L. sub-sp. Junos Makino.

(三) 木村(康)曰ク、[成分]ゆずノ果實ハ可食部四七・三(%)水分八二・八〇、總窒素〇・二八八、蛋白質一・八〇、脂肪〇・一九、含水炭素一一・三〇、纖維一・六五、無機質〇・七七、燐酸〇・〇九七、石灰〇・〇八〇、鐵〇・〇〇四、食鹽〇・〇三四、アルカリ價一・七、溫量五五カロリー(日食、二二七)

[枸櫞]

(一) 木村(康)曰ク、[原植物]ぶつしゆかん、でぶしゆかん Citrus medica, L. var. sarcodactylis, Swingle. (Rutaceae)

枸櫞 音は矩員(クヱン)である。 (宋圖經)

和名 ぶしゆかん
學名 Citrus medica, L. var. chirocarpus, Lour.
科名 へんるうだ科(芸香科)

校正 もとは荳蔻の條下に附してあつたが、本書では分出した。

釋名 **香櫞** 俗に圓と書く。**佛手柑** 時珍曰く、意味は詳でない。佛手とはその形象を取つたものだ。



〔枸櫞〕
—香櫞は長大にして一尺に近し—

集解 (一) 藏器曰く、枸櫞は嶺南に生ずる。柑、橘の屬であつて、その葉は大きく、その實は大いさ盞ほどあり、味は辛く酸い。 頌曰く、今は閩、廣、江南いづれにもあり、彼の地方では香櫞と呼ぶ。子の形は長くして小瓜のやうな狀態をなし、その皮は橙のやうで愛すべき光澤があり、肉は甚だ

厚く、蘿蔔のやうに白くして鬆く虚し、味は短いけれども香芬は大いに勝れたもので、衣笥中に置けば數日經つても香がなくならぬ、北方へ贈つて遣ると甚だ貴重される。古代には五和糝を作るにこれを用ゐたものだ。

時珍曰く、枸櫞は閩、廣地方に産する。木は朱欒に似て葉が尖つて長く、枝間に刺があり、水に近い場所へ植ゑると生きるものだ。その實の形狀は人の手に指があるやうな形で、俗に佛手柑と呼ぶ。長さ一尺四五寸のものもあり、皮は橙、柚のやうで厚く、皺んで光澤があり、その色は瓜のやうで、生では綠、熟すれば黃である。その核は細かく、その味は甚だ佳くないが、淸香が人を襲ふ。南方の地では花鳥を雕刻して蜜煎果として食ひ、それを机の上などに置いて玩賞に供する。芋片を蒂に著け、濕紙で圍護して置けば久しきを經ても瘺びず、或は蒜を擣いてその蒂上を罨ふて置くと香が更に充溢するものだ。異物志には『浸した汁は葛紵の布を浣ふに酸漿より勝る』とある。

皮瓤

(二)氣味　【辛く酸し、毒なし】弘景曰く、性は溫である。恭曰く、性は冷である。陶氏の說は誤だ。藏器曰く、性は溫であつて冷ではない。

主治

〔生薬〕生薬枸櫞皮ハれもん C. medica, L. subsp. Limonum, Hook. ノ果皮ヲ用フ。

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕枸櫞皮(れもん)ノ主要ナル成分ハ揮發油即チ枸櫞油ニシテ此枸櫞油ハリモーネント稱スルテルペンノ他フエランドレンノ少量ヲ含ム。其特異ノ氣味ヲ代表スル成分ハチトラールト稱スルアルデヒド及チトロネラールトス。其他少量ノリナロール又酢酸ゲラニオールヲ含有スルモノノ如シ。(生薬學)(ウ植、六三六)〔應用〕汁液ヲ調味料又ハ矯臭薬トシテ用フ。(植成研一一八)

「氣を下し、心頭の痰水を除く」(藏器)「酒で煮て飲めば痰氣欬嗽を治す。煎湯は心下氣痛を治す」(時珍)

根　葉　主治　【皮に同じ】(橘譜)

金橘(綱目)

和名　きんかん
學名　Fortunella japonica, Swingle.
科名　へんるうだ科(芸香科)



〔金　橘〕

釋名　**金柑**(橘譜)　**盧橘**(漢書)　**夏橘**(廣州志)　**山橘**(北戸錄)　**給客橙**(魏王花木志)　時珍曰く、この橘は生る時は青盧色で、黄熟すると金のやうだから金橘、盧橘の名があるので、盧とは黒色のことである。或は、盧とは酒器の名であつて、その形が肖てゐるからだともいふ。文選の註者が枇杷を盧橘としたのは誤であつて、司馬相如の

上林賦の本文を調べて見ると『盧橘夏熟、枇杷、燃、柹』と、二物を並列してあるを見ると一物でないことは明だ。この橘は夏、冬相繼ぐものだから夏熟すといつたのであるが、裴淵の廣州志にはこれを夏橘いつてある。給客橙とは、その芳香が橙のやうで、客に供給されるといふのだ。

〔集解〕(一) 時珍曰く、金橘は吳、粤、江、浙、川、廣地方に生ずる。或は、營道の產を第一とし、江浙のものは皮が甘く、肉が酸くしてこれに次ぐともいふ。その樹は橘に似て甚だ高大ではなく、五月に白花を開いて實を結び、秋、冬に黃熟する。大なるは徑一寸、小なるは指頭ほどで、形は長くして皮が堅く、肌理は細瑩で、生では深綠色だが熟すれば金のやうに黃になり、その味は酸く甘くして愛すべき芳香がある。糖で造り、蜜煎にしていづれも佳し。按ずるに、魏王の花木志に『蜀の成都、臨邛、江源の諸處に給客橙といふがある。一名盧橘といひ、橘に似て橘ではなく、柚のやうで香しく、夏も冬も花、實が相繼ぎ、或は彈丸ほど、或は櫻桃ほどのもので、一年を通じてそれを食ふ』とあり、又、劉恂の嶺表錄に『山橘子は、大なるは土瓜ほど、次ぎは彈丸ほどのものだ。樹は小さく、葉は綠で、夏結んで冬熟し、

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕きんかん Citrus japonica, Th. = C. nobilis, Lour. var. microcarpa, Hassk. (C. madurensis, Lour.) (C. margarita, Lour.)

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕きんかんノ果實ハ可食部八七・五(%)、水分八四・三〇、總窒素〇・一九二、蛋白質一・二〇、脂肪〇・二〇、含水炭素八・二〇、纖維三・七〇、無機質〇・五一、石灰〇・〇八八、鐵〇・〇〇八、アルカリ價六・〇、溫量四〇カロリー。(日食、二二六)
〔應用〕食用。

金色で皮が薄く、味が酸く、偏に能く氣を破る。容廣地方では枝付きのまま貯藏して膾醋に入れ、尤も香美を加へる』とあり、韓彦直の橘譜には『金橘は江西に產し、北方の地では識らない。景祐年間に始めて汴都へ送られて、溫成皇后がこれを嗜まれ、それがために價が貴重になつた。綠豆中に貯藏すると時を經ても變らずにある。蓋し橘は性が熱であり、豆は性が涼なるものだ。又、山金柑といふがある。一名山金橘といひ、俗に金豆と名け、木は高さ一尺ばかり、實は櫻桃のやうで、內にただ一箇の核がある。倶に蜜で漬けるがよし、香味が淸美である』とある。已上の諸說はいづれも今の金橘を指したので、但し一類にある數種の異だけのことだ。

(三)〔氣味〕〔酸く甘し、溫にして毒なし〕〔主治〕〔氣を下し、膈を快にし、渴を止め、酲を解し、臭を辟ける。皮が尤も佳し〕(時珍)

枇杷(別錄中品)

和名 びは
學名 Eriobotrya japonica, Lindl.
科名 いばら科(薔薇科)

〔釋名〕宗奭曰く、その葉の形が琵琶に似てゐるから名けたものだ

〔一〕集解　頌曰く、枇杷は、舊來の本草には産地の州名、地名を記錄されてないが、今は襄、漢、吳、蜀、閩、嶺、江の西、南、湖の南、北いづれにもある。木は高さ一丈餘、枝が肥え、葉は長くして大いさ驢の耳ほどあり、背に黃毛があり、陰密、婆娑として愛すべく、四時凋まぬ。盛冬に白花を開き、三四月に至つて實を成し、梂に作つて生り、大いさは彈丸ほどで、熟すると色が黃杏のやうになり、微に毛があつて、皮、肉が甚だ薄く、核は大いさ芋、栗ほどあり、黃褐色である。四月に葉を採つて暴乾して用ゐる。



〔枇　杷〕

時珍曰く、按ずるに、郭義恭の廣志に『枇杷は種ゑ易く、葉は微に栗に似て、冬花さき春實る。その子は簇り結んで毛があり、四月に熟し、大なるは雞子ほど、小なるは龍眼ほどのもので、白きを上とし、黃なるがそれに次ぐ。核なきものをば焦子と名け、廣州に産する』とある。又、楊萬里の詩に『大葉長耳を聳え、一枝盤に

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕びは Eriobotrya japonica, Lindl. (Rosaceae) (Mespilus japonica, Thnbg.)

満つるに堪へたり。荔支にして核を分與し、金橘にして却て酸なし」とあるは頗るその狀態を言ひ盡してゐる。文選の註者が枇杷を盧橘としたのは誤である。金橘の條下に詳記した

實〔氣　味〕(三)【甘く酸し、平にして毒なし】○志曰く、寒なり。○詵曰く　溫なり。多食すれば痰熱を發し、脾を傷める。炙肉、及び熱麪と共に食へば、人をして熱黄疾を患はしめる。

〔主　治〕【渇を止め、氣を下し、肺氣を利し、吐逆を止め、上焦の熱に主效があり、五臟を潤ほす】(大明)

葉〔修　治〕○恭曰く、凡そ用ゐるには、火で炙り、布で拭つて毛を去るべきものである。かくせねば人の肺を射て欬して止まざらしめる。或は粟稈で作つた刷子で刷けば尤も潔淨になり易い。

斆曰く、凡そ採收したならば、秤つて濕葉の重さ一兩、乾したもの三葉で重さ一兩のものならば、氣が十分にあつて用ゐるに堪へる。粗布で拭つて毛を去り、甘草湯で一回洗ひ、綿で再び拭ひ、毎一兩に酥二錢半を塗り、炙つて用ゐる。

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕びはノ葉ハサポニン、青酸或ハ青酸ヲ發生スル配糖體、少量ノ蔗糖、砒素等ヲ含ム。果實中ニハ轉化糖、蔗糖、枸櫞酸、林檎酸、ペクチン、ペントザン、オキシダーゼ、アミラーゼ、エムルシン、インベルチン等存ス。種子中ニハ少量ノ青酸（一〇〇瓦中四〇瓱）、アミグダリン、ラウロワエラジン、脂肪（アラヒン酸、パルミチン酸及ビ波狀脂肪酸）ヲ含ム（ウ植、四三九）〔藥用〕枇杷葉ノ煎汁

ハ枇杷葉湯ト稱シ古來清涼飲料トシテ用ヒラル。枇杷葉湯ハ枇杷葉、肉桂、甘草、甘茶、莪朮等ヲ細切混合セルモノノ煎汁ナリ。ヨク口渇ヲ止メ暑氣ヲ拂ヒ霍亂、痢病等ヲ防グノ效アリトセラレタリ。又枇杷葉ハ浴湯料トシテ皮膚ヲ滑カニシ夏時汗泡ヲ發セズトイフ。（邦藥植、二〇二）

時珍曰く、胃病を治するには薑汁を塗つて炙り、肺病を治するには蜜水を塗つて炙れば良し。

［氣味］【苦し、平にして毒なし】 權曰く、甘く微し辛し。弘景曰く、煮た汁を飲めば少し冷である。

［主治］【卒啘の止まぬものに氣を下す。煮汁を服す】（別錄） 弘景曰く、もし煮るだけの暇のないときは、ただ嚼んで汁を咽んでも瘥える。【嘔噦の止まぬもの、產後の口乾】（大明）【煮汁を飲めば渴疾に主效があり、肺氣熱嗽、及び肺風瘡、胸、面上の瘡を治す】（詵）【胃を和し、氣を下し、熱を淸し、暑毒を解し、脚氣を療ず】（時珍）

［發明］ 時珍曰く、枇杷葉は、氣は薄く味は厚く、陽中の陰である。肺、胃の病を治するは、概してその下氣の功を取るだけである。氣が下れば火が降り、痰が順になつて逆せるものは逆せず、嘔するものは嘔せず、渴するものは渴せず、欬するものは欬せぬのである。

宗奭曰く、肺熱を治するに甚だ有功なものだ。ある婦人は肺熱久嗽を患ひ、身は火で炙くやうに覺え、肌瘦して勞と成らんとしたが、枇杷葉、木通、欵冬花、紫菀、

杏仁、桑白皮各等分、大黃を減半し、普通のやうに調治してから末にし、蜜で櫻桃大の丸にし、食後と就寢時と各一丸を含み化したところ、一劑を服し終らずして癒えた。

【附方】新七。【溫病發噦】水を多く飲んだために發つたものには、枇杷葉を毛を去つて香しく炙き、茅根と各半斤を水四升で一升に煎じ、少しづつ飲む。（龐安常方）【反胃嘔噦】枇杷葉を毛を去つて炙き、丁香と各一兩、人參二兩を用ゐ、每服三錢を水一盞、薑三片で煎じて服す。（聖惠）【衄血の止まぬもの】枇杷葉を毛を去り、焙じて研末し、茶で一二錢を服す。一日二回（同上）【酒齄赤鼻】枇杷葉、梔子仁等分を末にし、二錢づつを溫酒で調へて服す。一日三服（本事）【顏面の風瘡】方は上に同じ。【痔瘡腫痛】枇杷葉を蜜で炙き、烏梅肉を焙じて末にし、先づ烏梅湯で洗つて貼る（集要）【痘瘡潰爛】枇杷葉の煎湯で洗ふ。（摘玄）

花【主治】【頭風で鼻に淸涕を流すには、辛夷と等分を研末し、酒で二錢を服す。一日二服】（時珍）

木白皮【主治】【生で嚼んで汁を咽めば、吐逆して食物を下らぬを止める。煮

汁を冷服するが尤も佳し】(思邈)

楊梅（宋開寶）

和名　やまもも
學名　Myrica rubra, Sieb. et Zucc.
科名　やまもも科(楊梅科)

【釋名】 **朹子** 音は求(キウ)である。時珍曰く、その形が水楊子のやうで、味が梅に似てゐるから名けたものだ。段氏の北戸錄には朹子と名けてあり、楊州地方では白楊梅を聖僧と呼ぶ。

【集解】(一)志曰く、楊梅は江南、嶺南の山谷に生ずる。樹は荔枝の樹のやうだが、葉が細くして陰が青い。子は形が水楊子に似て、生では青く熟すれば紅くなり、肉が核上にあつて皮殼がない。四月、五月に採る。南方地方では醃藏して果にし、それを北方の地へ送つて來る。

時珍曰く、楊梅樹は、葉は龍眼、及び紫瑞香のやうで、冬期にも凋まない。二月に花を開き、結實は形が楮實子のやうで五月に熟し、紅白紫の三種があつて、紅は白よりも勝れ、紫は紅よりも勝れ、顆が大きくして核が細かい。鹽で貯藏し、蜜で

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕やまもも Myrica rubra, S. et Z. (M. sapida, Wall.) (Myricaceae)

漬け、餹で收藏し、いづれも佳し。東方朔の林邑記に『邑に楊梅があり、その大いさは盃、椀ほどで、青い時は極めて酸く、熟すれば蜜のやうになる。これで釀した酒を梅香酎と呼び、甚だ珍重してゐる』とある。贊寧の物類相感志に『桑上に楊梅を接げば酸くない。楊梅樹に癩が生じたときは、甘草を釘にしてさせばなくなる』とある。いづれも物の理の妙である。

藏器曰く、張華の博物志に『地に瘴ある處には楊梅が多く生える』といつたが、實地を調べて見るにいかにもその通りだ。



〔楊　梅〕

實

〔氣味〕(二)【酸く甘し、溫にして毒なし】詵曰く、熱にして微毒あり。久しく食すれば人をして發熱せしめ、齒、及び筋を損ずる。生葱と共に食ふことを忌む。瑞曰く、瘡を發し、痰を致す。

〔主治〕【鹽藏して食へば、痰を去り、嘔噦を止め、食を消す。酒を下して乾し

(二) 木村（康）曰ク、〔成分〕やまもも ノ樹皮ハ單寧一五%及ミリセチンヲ含有ス。（邦藥植、二九四）〔藥用〕楊梅皮ハ民間ニ收斂藥トシテ下痢

ニ用ヒ又打撲症ニ效アリ、又殺蟲、解毒藥トス。
〔應用〕樹皮或ハソノ越幾斯ヲ染料ニ供シ漁網ヲ染メ或ハ明礬、錫鹽等ノ媒染劑ヲ用ヒ黄色、鐵媒染劑ニヨリ焦茶色ノ染料トス。此越幾斯ハ鹿兒島縣徳之島ニテ製造ス。同地ニテハ之ヲ澁木越幾斯トイフ。(邦藥植、二一九四)

て屑にし、飲酒の時に臨んで方寸匕を服すれば吐酒を止める」(開寶)「渇を止め、五臓を和し、能く腸、胃を滌ひ、煩憒惡氣を除く。燒灰を服すれば下痢を斷つに甚だ效驗がある。鹽したものを常に一箇含んで汁を咽めば、五臓を利し、氣を下す」(詵)

附方　舊一、新三。【下痢の止まぬもの】楊梅を燒いて研り、一日二回、二錢づつを米飲で服す。(普濟)【頭痛の止まぬもの】楊梅を末にし、少量を鼻に嗃いで嚔を取るが妙である。【頭風で痛むもの】楊梅を末にし、毎食後に二錢づつを薄荷茶で服す。或は消風散と共に煎じて服し、或は共に擣いて末にし、白梅肉で和して彈子大の丸にし、毎食後に一丸を嚼んで葱茶で送下する。(朱氏集驗)【一切の損傷】血を止め、肌を生じ、瘢痕をなくする。鹽藏した楊梅を核と共に泥のやうに搗き、挺子に作つて竹筒に收め、凡そ破傷のあつた場合に研末して傅ける。神聖絶妙なものである。(經驗方)

核仁　主治　【脚氣】時珍曰く、按ずるに、王性之の揮麈錄に『會稽の楊梅は天下第一等のものだ。童貫が脚氣に苦しんだとき、ある者が「楊梅仁で治癒するものだ」といつたので、郡守の王凝が五十石を贈呈した。貫はそれを用ゐて癒えた。

仁を取る法は、柹漆を核に拌ぜて暴せば自ら裂けて出る』とある。

樹皮 及び **根** 【主治】 【湯に煎じて惡瘡、疥癬を洗ふ】（大明） 【水で煎じて牙痛を漱ぐ。これを服すれば砒毒を解す 燒灰を油で調へて湯火傷に塗る】（時珍）

【附方】 新二。

【砒の中毒】 心腹絞痛し、吐かんと欲して吐かず、顏青く、手、足の冷えるには、楊梅樹皮の煎湯二三盌を服すれば癒える（王碩易簡方） 【風蟲牙痛】 普濟方では、楊梅根皮の厚きものを焙じて一兩、川芎藭五錢、麝香少量を研末し、半錢づつを鼻內に嗃ぎ、口中に水を含む。涎が出て痛が止む。○摘要方では、楊梅根皮、韭菜根、料理臺の油泥等分を擣き勻ぜ、兩腮上に貼る。半時ほどにしてその蟲は眼角中から出るものだ。屢〻用ゐて效を擧げた方である。

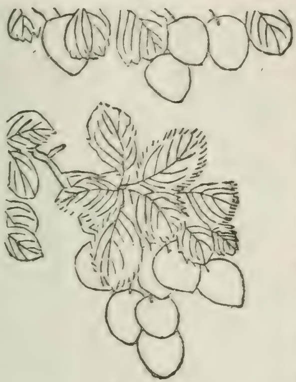
櫻桃（別錄上品）

和名 みざくら
學名 Prunus pseudo-Cerasus, Lindl.
科名 いばら科（薔薇科）

【釋名】 **鶯桃**（禮註） **含桃**（月令） **荊桃** 宗奭曰く、孟詵の本草に『これは櫻であつて桃ではない』とあるが、桃の類ではないけれども、その形が桃に肖てゐるか

ら櫻桃といふので、一向怪むことはない。沐猴梨、胡桃の類の如き、いづれもその形の相似たるを取つただけのものだ。禮記に『仲春、天子含桃を以て宗廟に薦む』とあるはこの物である。故に王維の詩に『纔に是れ寢園春薦の後、御苑の鳥の啣殘に予むるに非ず』とある。藥の中には甚だ用ゐない。

時珍曰く、その顆が瓔珠のやうだから櫻といつたのだ。しかし許愼は鸎桃と書いて『鸎が含んで食ふものだ』といつた。故にまた含桃といふもやはり通ずる。按ずるに、爾雅には『楔——音は戛(クワツ)——は荊桃なり』とあり、孫炎の註に『卽ち今の櫻桃である。最も大にして甘きものを崖蜜と謂ふ』とある。



〔櫻　桃〕

【集解】(一)頌曰く、櫻桃は處處にあるが、洛中のものが最も勝れてゐる。その木は陰多く、あらゆる果に先つて熟する。故に古代には多く貴ばれたのだ。その實

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕からのみざくら Prunus pau-

ciflora, Bge. (P. pseudocerasus, Lindl.) (Rosaceae) 〔備考〕みざくら(さくらんぼ) Prunus Cerasus, L. ニ櫻桃ヲ當ツルモノアレドモ穩當ナラズ。

(三) 木村(康)曰ク、「成分」さくらんぼ(果實)ハ可食部八

は、熟した時に深紅色なるものをば朱櫻といふ。紫色にして皮裏に細黃點のあるものをば紫櫻といひ、味が最も珍重される。又、正黃で明に澈るものもあつて、これは蠟櫻といふ。小さくして紅なるものをば櫻珠といふ。味はいづれも極めて大なるものには及ばない。彈丸ほどで、核が細くして肉の厚いものもあるが、これは就中得難いものだ。

時珍曰く、櫻桃は、樹は甚だ高くなく、春初に白花を開き、英が繁盛で雪のやうだ。葉は團くして尖、及び細齒があり、一枝に數十顆の子を結び、三月に熟するが、その時には見張りを嚴にする必要がある。見張らねば鳥が一つも遺らず食つて了ふものだ。鹽藏し、蜜煎していづれもよし。或は蜜と共に擣いて餻にして食ふ。唐時代には酪を添へて食卓に上せた。林洪の山家清供に『櫻桃は雨を經ると蟲が內部から生ずる。人には見えないが、水で浸して良久すると蟲がみな出るものだ。そこで食ふがよし』とある。試驗して見ると果してその通りだ。

(三)「氣 味」【甘し、熱、澀にして毒なし】大明曰く、平にして微毒あり、多食すれば人をして吐かしめる。詵曰く、食つても多くは損ずることはないが、ただ虛

八・七(%)、水分八五・五〇、總窒素〇・一一七六、蛋白質一・一〇、脂肪〇・四八、含水炭素一一・二〇、纖維〇・四〇、無機質〇・六〇、石灰〇・〇二四、鐵〇・〇三、アルカリ價四・九、温量五五カロリー(日食、二二七)

熱を發するだけである。暗風のある人は食つてはならない。食へば立ろに發するものだ　李廷飛曰く、筋骨を傷め、血、氣を敗る。寒熱病のある人は食つてはならぬ。

【主　治】【中を調へ、脾氣を益し、人をして顔色を好からしめ、志を美ならしめる】(別錄)【洩精、水穀痢を止める】(孟詵)

【發　明】宗奭曰く、小兒がこれを過多に食へば熱を作さぬものはない。この果は三月の末、四月の初に熟し、正陽の氣を得たもので、諸果に先じて熟する　故に熱なのである。

震亨曰く、櫻桃は火に屬し、性は大熱であつて溼を發する。もと熱病、及び喘嗽あるものは、これを得れば立ろに病み、且つ死するものがある。

時珍曰く、按ずるに、張子和の儒門事親に『舞水の一富家は二人の子持ちであつたが、好んで紫櫻を食ひ、毎日一二升を喫つて、半月後に年上の子が肺痿を發し、年下の子は肺癰を發して相繼いで死亡した。嗚呼あらゆる果の生るは人を養ふ所以であつて、人を害せんと欲するものではないのであるが、富貴の家ではその嗜欲を縱にして死を取るのである。それ何ぞ天か命か。邵堯夫の詩に「口に爽なる物多

くは終に疾を作(な)す」とあるは眞に格言なる哉』とある。これで觀ると、寇、朱二氏の言ますます證すべきである。王維の詩に『飽食するも内熱を愁ふることを須(もち)ゐざれ、大官還つて蔗漿(しよしやう)の寒あり』とあるが、蓋し寒物を共に食へば、やはりその熱を解し得るといふ意味だ。

葉 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】老鵞(らうが)を煮るに軟熟し易い。〔主治〕【蛇咬には、擣汁を飲み、幷に傅ける】（頌）

東行根 〔主治〕【煮汁を服すれば、立ろに寸白、蚘蟲を下す】（大明）

枝 〔主治〕【雀卵斑對(はうかん)には、紫萍、牙皂(げさう)、白梅肉と共に研り和し、日日に用ゐて顏を洗ふ】（時珍）

花 〔主治〕【面黑粉滓】方は李花の條下を見よ。

山鸎桃（別錄上品）

和名 未詳
學名 Prunus sp.
科名 いばら科（薔薇科）

〔校正〕唐本では退けて有名未用の部に入れたが、本書で

は此に移し入れた。

【釋名】 **朱桃**（別錄） **麥櫻**（吳普） **英豆**（別錄） **李桃** 詵曰く、この嬰桃は俗に李桃と名け、又、柰桃と名ける。前の櫻桃は櫻であつて桃ではない

【集解】(一) 別錄に曰く、嬰桃は實の大いさ麥ほどで毛が多い 四月に採つて陰乾する。

弘景曰く、櫻桃とは即今の朱櫻のことで、煮て食へるものだ。嬰桃は形は相似てゐるが實は全く異ふ。山間に時にあるが、方藥には用ゐない。

時珍曰く、樹は朱櫻のやうだが、ただ葉が長く尖つて團くなく、子は小さくして尖り、生では青く熟すれば黄赤になり、また光澤がなくして味が惡く、食ふに堪へない。

實 【氣味】【辛し、平にして毒なし】 【主治】【洩腸澼を止め、熱を除き、中を調へ、脾氣を益し、人をして顏色を好からしめ、志を美ならしめる】（別錄） 【洩精を止める】（孟詵）

（一） 木村（康）曰く、〔原植物〕ゆすらうめ Prunus tomentosa, Th. (Rosaceae) ひざくら P. campanulata, Maxim.

銀杏（日用）

和名　いちやう
學名　Ginkgo biloba, L.
科名　いちやう科（公孫樹科）

【釋名】**白果**（日用）**鴨脚子**　時珍曰く、原は江南に生じたものだ。葉が鴨の掌に似てゐるから、それで鴨脚と名けたのである。宋の初めに始めて入貢したもので、改めて銀杏と呼んだ。それはその形が小杏に似て、核の色が白いに因つたものである。今は白果と名ける。梅堯臣の詩に『鴨脚は綠李に類し、その名は葉に因つて高し』とあり、歐陽修の詩に『絳囊初めて入貢し、銀杏中州に貴し』とあるはこの物である。



〔銀杏〕
——白果——

【集解】(一)　時珍曰く、銀杏は江南に生じ、宣城のものを勝れたものとする。樹は高さ二三丈、葉は薄くして縱理があり、さながら鴨掌の形のやうで刻缺があり、表

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕いちやう、ぎんなん　Ginkgo biloba, L. (Ginkgoaceae)

面は綠で裏面は淡い。二月に花を開き、簇つた青白色の花で、二更に花が開き隨つて直ぐに卸落するので、人がこれを見ることは罕だ。一枝に百十の子を結び、形狀は楝子のやうで、霜を經ると熟する。それを爛して肉を去り、核を取つて果とする。その核は兩頭が尖つて三稜のあるものが雄であり、二稜あるものは雌であつて、その仁は嫩いときは綠色だが、久しくすると黃になる。雌雄を共に種ゑるもので、その樹は互に相望んで實を結ぶ。或は雌樹を水に臨ませるもよし。或は一孔を鑿つて雄木を一塊入れ、それを泥で封じて置いても實を結ぶ。かやうに陰陽相感の妙があるものだ。その樹は久しきに耐へ、肌理が白膩なもので、術家では取つて符印を刻し、能く鬼神を召び使ふものだといつてゐる。文選の吳都賦の註に『平仲果はその實銀の如し』とあるが、この果のことをいつたものかどうか判然しない。

核仁（二）

〔氣味〕【甘く苦し、平、濇にして毒なし】時珍曰く、熟して食へば少し苦く微甘なり、性は溫にして小毒あり。多食すれば人をして臚脹せしめる。瑞曰く、多食すれば氣を壅し、風を動ずる。小兒が多食すれば昏霍し、發驚し、疳を引く。鰻鱺魚と共に食へば軟風を患ふ。

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕種子ハ六%ノ糖及ビ少量ノヒスチヂンヲ含有ス。乾燥物ノ一般組成ハ澱粉六七・九、プロテイン一三・一、脂肪二・

九、ペントザン一・六、纖維一、灰分三・四等ヲ含ム。材ハ凡ソ二・五％ノキシランヲ、葉ハカロテン(カロチン)ヲ含有ス。(ウ植、一)又葉ハフラボン或ハフラボノールナラント思ハルル物質及シキミン酸ヲ、種子ハギンコール酸(飽和オキシ酸)、ギンノール、ビロボール(アルコール)、アスパラギン等ヲ含ム。(ウ植、一二九〇)

〔薬用〕銀杏ハ鎭咳ノ效アリトス、又葉ヲ書籍ノ間ニ挿入シテ蠹魚ヲ防グ效アリトイフ。(邦藥植、三五七)

［主　治］【生で食へば痞を引き、酒を解す。熟して食へば人を益する】(李延飛)

【熟して食へば肺を温め、氣を益し、喘嗽を定め、小便を縮し、白濁を止める。生で食へば痰を降し、毒を消し、蟲を殺す。嚼んで漿にして鼻面、手、足に塗れば、皶皰、䵟黯、皴皺、及び疥癬、疳䘌、陰虱を去る】(時珍)

［發　明］　時珍曰く、銀杏は宋の初に始めて名が著れたものだが、本草を編修したものはそれを收載しなかつた。近時の方藥にはやはり時時用ゐる。その氣は薄く、味は厚く、性は濇にして收し、色は白く、金に屬する。故に肺の經に入り、肺氣を益し、喘嗽を定め、小便を縮するのであつて、生で擣けば能く油膩を浣ふに見れば、その痰濁を去るの功は類推すべきである。その花が夜開いて人に見られないのは、蓋し陰毒のものである。故にまた能く蟲を殺し、毒を消するのだ。されば食ふこと多ければ、收の令が太だ過ぎて人をして氣壅し、臚脹し、昏頓せしめる。故に物類相感志に『銀杏は能く人を酔はしむ』といつたので、三元延壽書には『白果は、食ふこと千箇に滿つれば死す』といひ、又『昔、ある饑ゑたものが、一同で白果を飯の代りにして飽食し、翌日みな死んだ』といつてある。

附方

新十七。【寒嗽痰喘】白果七箇を煨熟し、熟艾を七丸に作り、白果一箇毎に艾一丸を入れ、紙で包んで再び煨いて香しくし、艾を去つて喫ふ。（秘韞方）【哮喘痰嗽】鴨掌散——銀杏五箇、麻黄二錢半、甘草を炙いて二錢を水一鍾半で八分に煎じ、就寢時に服す。〇又、金陵のある藥鋪の哮喘を治する白果定人湯——これを服すれば奏效せぬものなし。その人はこの方を賣出して家産を起した。その方は、白果二十一箇を黄に炒り、麻黄三錢、蘇子二錢、欵冬花、法制半夏、桑白皮を蜜で炙き各二錢、杏仁を皮尖を去り、黄芩を微し炒つて各一錢半、甘草一錢を水三鍾で二鍾に煎じ、隨時に二服に分けて服す。薑を用ゐない。（いづれも攝生方）【欬嗽で發聲し得ぬもの】白果仁四兩、白伏苓、桑白皮二兩、烏豆半升、沙蜜半斤を煮熟して、日光で乾して末にし、乳汁半盌を拌ぜて溼し、九蒸九晒して綠豆大ほどの丸にし、二三十丸づつを白湯で服す。神效がある。（余居士方）【小便頻數】白果十四箇を、七箇をば生、七箇をば煨いて食ひ、效を取つて止める。【小便白濁】生白果仁十箇を水に擂つて飲む。一日一回。效を取つて止める。【赤、白帶下】下元の虛憊である。白果、蓮肉、江米各五錢、胡椒一錢半を末にし、烏骨雞一羽を腸を去つて藥を盛り

込み、瓦器で煮爛して空心に食ふ。(集簡方)【腸風下血】銀杏を煨熟し、火氣を出して食ひ、米飲で送下する。【腸風臓毒】銀杏四十九箇を殻を去つて生で研り、百藥煎末を入れて和して彈子大の丸にし、二三丸づつを空心に細嚼して米飲で送下する。(戴原禮證治要訣)【牙齒の蟲䘌】生銀杏を毎食後に一二箇を嚼むが良し。(永類鈐方)【手、足の皴裂】生白果を嚼み爛らして夜夜に塗る。【鼻面の酒皶】銀杏、酒醅糟を共に嚼み爛らし、夜塗つて朝洗ふ。(醫林集要)【頭面の癬瘡】生白果仁を切斷して頻りに擦つて效を取る。(邵氏經驗方)【下部の疳瘡】生白果を杵いて塗る。(趙原陽)【陰蝨の痒きもの】陰毛際の肉中に、蝨のやうな或は紅く或は白き蟲が生じ、忍び難く痒きには、白果仁を細かに嚼み、それを擦つて效を取る。(劉長春方)【狗咬の瘡となりたるもの】白果仁を細かに嚼んで塗る。【乳癰潰爛】銀杏半斤を用ゐ、四兩をば酒に研つて服し、四兩をば研つて傅ける。(救急易方)【水疔、暗疔】水疔は色が黄で麻木し、痛まぬものである。暗疔は瘡が凸起して色が紅く、人をして昏狂せしめるものである。いづれも四畔を刺して後、銀杏を殻を去り、油の中に浸して年久しきものを用ゐ、搗いて盦ふ。(普濟方)

胡桃（宋開寶）

和名　てうちぐるみ
學名　Juglans regia, L. var. sinensis, Cas. DC.
科名　くるみ科（胡桃科）

釋名　**羌桃**（名物志）　**核桃**　頌曰く、この果の原産は羌胡であつて、漢の時に張騫が西域に使し、始めて種を得て還つて秦地方に植ゑた。それが漸次に東方の地に及んだものだ。故にかく名けたのである。時珍曰く、この果は外部を青い皮肉があつて包まれ、その形が桃のやうになつてゐるものだ。胡桃とはその核のことであつて、羌族は核を胡といふやうに發音する。胡桃なる名稱は或は此から作つたものであらう。梵書では播羅師と名けてある。

（一）**集解**　頌曰く、胡桃は北土に生じ、今は陝、洛地方に甚だ多い。大株で葉が厚く、陰が多く、實はやはり房がある。秋、冬に熟したとき採る。陳倉に産するものは、皮が薄く、肌が多く、陰平に産するものは、大きくして皮が肥え、急に强く捉れば碎ける。汴州にはあるけれども實が佳くない。江表にも時にあるが、南方にはない。

（一）木村（康）曰く、〔原植物〕てうちぐるみ、てうせんぐるみ Juglans regia, L. var. sinensis, Cas. (Juglandaceae)

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕てうちぐるみニツイテノ成分ノ研究ニ乏シ、近緣ノ菩亜細亜、ペルシアヨ

時珍曰く、胡桃は、樹は高さ一丈ばかり、春初に葉が生えて長さ四五寸になり、微に大青の葉に似て兩兩相對し、頗る惡臭氣がある。三月に栗の花のやうで穗になつた蒼黄色の花を開いて實を結び、秋になると青桃のやうな狀態になる。熟した時に皮肉を漚け爛らして核を取つて果とする。一般に多くは欅、柳の樹にこれを接ぐ。按ずるに、劉恂の嶺表錄に『南方にある山胡桃といふのは、底が平で檳榔のやうだ。皮は厚くして大いに堅く、肉が多くして穰が少く、その殼が甚だ厚いので椎で打つて始めて破れる』とある。して見ると南方にもやはりあるので、ただ佳くないだけのことだ。



〔胡　桃〕

核仁　(三)〔氣　味〕【甘し、平、溫にして毒なし】頌曰く、性熱である。多食してはならぬ。思邈曰く、甘し、冷、滑である。多食すれば痰飲を動じ、人をして惡心して水を吐き、食つた物を吐かしめる。志曰く、多食すれば風を動じ、人の眉を脫

リヒマラヤニカケテ産スル J. regia, L. ノ成分ヲ參考ニ舉グレバ、ソノ葉ハイノシット、揮發油、單寧、ニグロン、脂肪油等ヲ含ミ、果實ノ綠皮（未熟ノ假果皮）ハX及BノヒドロユグロンエムルシンハX及Bノヒドロユグロン、エムルシン、枸櫞酸、林檎酸、糖、燐酸カルチウム、蓚酸カルチウム等ヲ有シ、堅果皮（眞正ノ果皮）ハ凡ソ五・九二%ノペントザン（主トシテキシラン）、灰分トシテ鐵、マンガン等ヲ含ム。又種子（仁）ハ四〇—五〇ノ脂肪油（主トシテリノール酸ノグリセリドヨリ成リ少量ノリノレン酸及油酸グリセリドヲ混ズ）蔗糖、デキストローゼ、デキストリン、澱粉、

す。酒と共に食へば、多くは人をして咯血(かくけつ)せしめる。○穎曰く、多食すれば痰を生じ、腎火を動ずる。

【發明】震亨曰く、胡桃は土に屬して火を有し、性熱である。本草に『甘し平なり』とあるは熱なしいふことであるが、然し又『風を動じ、人の眉を脱す』といつてある。熱に非ずしていかで肺を傷(やぶ)めるわけがあらうか。

時珍曰く、胡桃仁は味は甘、氣は熱であつて、皮は澁(しぶ)く、肉は潤する。孫眞人が『冷、滑である』といつたのは誤だ。近世の醫方に、痰氣、喘嗽、醋心、及び癘風(れいふう)の諸病を治するに用ゐ、而して酒家が往往に醉後にこれを嗜むを見ると、食すれば多くは水を吐し、食を吐し、眉を脱し、及び酒と共に食すれば咯血するなどいふ說も、やはり必ずしも盡くその通りとはいへない。但し胡桃は性熱であつて、能く腎、肺に入り、虛寒のものだけには宜いが、痰火積熱のものが多食するは宜くないだけだ。

【主治】【これを食へば人をして肥健ならしめ、肌を潤ほし、鬚髮(しゆはつ)を黑くする。多食すれば小便を利し、五痔を去る。胡粉と擣き和し、白き鬚髮を拔いてその孔中に

ユグランジン（クロプリン）等ヲ含ム。子殼ハ單寧及蓚酸ヲ含有ス。材ハ六・三%ノキシラン、根皮ニハパルミチン酸、ステアリン酸ヲ含ム脂肪様物質、パラフィン、單寧、フロバフエン、ユグロン、グリチリチン（?）等ヲ含ム。
（ウ植、二〇八）
〔藥用〕胡桃仁ハ滋養強壯ノ效アリ、又咳嗽ヲ止ム。胡桃油ハ諸種ノ皮膚病ニ用フ。胡桃靑皮（假果皮）ハ染髮劑トナセリ。又 J. regia ノ葉ハ瑞、獨局方、葉、假果皮及油ハ佛國局方ニ收載セラル。葉ハ煎劑（一〇：一〇〇）トシテ瘰癧ニ内用シ、毒蟲ノ刺傷ニ貼用ス。又濃厚ナル煎劑（一〇：一〇〇）

納れると黒毛を生ずる。燒いて性を存して松脂を和して研り、瘰癧瘡に傅ける】（開寶）【これを食へば人をして能く食せしめ、血脈を通潤し、骨肉が細膩になる】（詵）方は下文を見よ。【損傷、石淋を治す。破故紙と共に蜜で丸にして服すれば下焦を補す】（頌）【氣を補し、血を養ひ、燥を潤ほし、痰を化し、命門を益し、三焦を利し、肺を温め、腸を潤ほし、虛寒喘嗽、腰脚重痛、心腹疝痛、血痢腸風を治し、腫毒を散じ、痘瘡を發し、銅毒を制す】（時珍）

油胡桃 氣味 【辛し、熱にして毒あり】 主治 【蟲を殺し、毒を攻め、癰腫、癘風、疥癬、楊梅、白禿の諸瘡を治し、鬚髮を潤ほす】（時珍）

發明 韓懋曰く、破故紙は火に屬して能く心包をして命門の火と相通ぜしめ、胡桃は水に屬して血を潤ほし血を養ふことを主る。血は陰に屬し、陰は燥を惡むものだから、油で潤ほして破故紙を佐とするは木火相生の妙がある。故に古の言葉に『黃蘗に知母がなく、破故紙に胡桃がなければ、恰も水母に蝦がないやうなものだ』といつてある

時珍曰く、三焦なるものは元氣の別使であり、命門なきものは三焦の本原であつ

ハ毛生藥トス。新藥・グリーンハ本科植物ノ未熟ノ果實ヨリ製セル製劑ニシテ、汗疱、凍瘡、苔癬、腋臭等ニ賞用セラル。(邦藥植、二九三)

て、蓋し一は原、一は委である。命門とは居る所の府を指して名けたもので、精を藏し胞に係るの物であり、三焦とは分治の部を指して名けたもので、出納腐熟の司であつて、蓋し一は體を以て名け、一は用を以て名けたものだ。その體は脂でもなく、肉でもなく、白膜に裹まれて七節の旁、兩腎の間に存り、二系が脊に著いて、下に二腎に通じ、上に心、肺に通じ、貫いて腦に屬し、生命の原、相火の主、精氣の府であつて、人間にはみなこれがあり、生人、生物はみなこれに由つて出るのである。靈樞の本臓論に已にその厚薄、緩結の狀を記載されてあるが、扁鵲の難經では、原委、體用の分を知らずして、右腎を以て命門とし、三焦を名あつて狀なきものと謂ひ、高陽生僞譔の脈訣はその謬説を承けて以て後人を誤つた。朱肱の南陽活人書、陳言の三因方論、戴起宗の脈訣に至つて始めて説明を加へてその謬を開き正してあるが、しかしそれを知るものはやはり尠い。

胡桃仁は頗るその物の狀態に類して、外皮、水汁がみな青黑である。故に能く北方に入り、命門に通じ、三焦を利し、氣を益し、血を養ひ、破故紙と共に同じく下焦、腎、命の藥であつて、かの命門の氣と腎とは、通じて精血を藏するもので、燥を惡む。若

（一）玉堂トハ侍中ノ

し腎、命が燥せねば、精氣が内充するから飲食が自ら健になり、肌膚は光澤になり、腸腑は潤ほひ、かくて血脈が通ずるのである。これが胡桃が藥を佑けて、人をして肥健にして能く食せしめ、肌を潤ほし、髮を黒くし、精を固くし、燥を治し、血を調へるの功である。命門が旣に通ずれば三焦が利する。故に上に肺に通ずるので虚寒喘嗽の者に宜く、下に腎に通ずるので腰脚虚痛の者に宜く、内にしては心腹の諸痛が止むべく、外にしては瘡腫の毒が散じ得るのである。洪氏の夷堅志に、ただ胡桃の痰嗽を治し、能く肺を斂めることを言つたに止まるは、蓋しその命門、三焦の藥なることをば知らなかつたのだ。油胡桃は有毒で人の咽、肺を傷めるものだが、瘡科にこれを採用するはその毒を用ゐるのである。胡桃が銅を制するといふは物の理の曉り難い點である。

洪邁は『邁は痰疾があつたが、ある時、參内が晩れて主上に拜謁すると、御沙汰があつて、胡桃肉三顆、生薑三片を就寢時に嚼んで服し、直ぐに湯を二三回呷つて飲み、また再び桃、薑を嚼み、數回同樣に試みて靜に就寢せよ。必ず癒えるとの仰があつたので、（一）玉堂に還つてから御沙汰の通りにして服すると、翌朝には痰が

居ル官署ナリ。

消して嗽が止んだ』といひ、又『溧陽の洪輯の幼子が痰喘を病み、凡そ五晝夜に亙つて乳食せず、醫師は危篤と宣告したのであつたが、その妻が夜夢に觀音に、人參胡桃湯を服ませよとの方を授けられたので、輯は急に新羅人參一寸ばかり、胡桃肉一箇を湯に煎じ、一蜆殼ばかりを灌ぐと喘が定まつた。翌日湯で胡桃皮を剝去して用ゐると喘がまた作つたので、そこで皮のまま用ゐると二晝夜で瘳えた。この方は書冊には記載されてないが、蓋し人參は喘を定め、胡桃の皮を連ねたものは能く肺を斂るものだからだ』といつた。

附方　舊五、新二十八。

【胡桃を服する法】詵曰く、凡そ胡桃を服するには、一時に食つてはならぬ。漸次に食ふべきもので、初日に一顆を服し、五日毎に一顆づつ增加して二十顆までに達して止め、再び始めて復する。常に服すれば人をして能く食せしめ、骨、肉が細膩にして光潤になり、鬚髮が黑く澤かになり、血脈が通じ潤ひ、一切の老痔を養ふ。【青娥丸】方は草部補骨脂の條を見よ。【胡桃丸】血を益し、髓を補し、筋を強くし、骨を壯にし、天年を延べ、目を明にし、心を悅ばしめ、肌を潤ほし、能くあらゆる病を除く。胡桃仁四兩を擣いて膏にし、破故紙、杜

仲、萆薢末各四兩を入れ、杵き匀ぜて梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に溫酒、鹽湯の任意のもので服す。(御藥院方) 【消腎溢精】胡桃丸――消腎病を治す。これは房慾の無節制、及び丹石を服するが原因で、或は志を失し、腎を傷め、遂に水弱火强の狀態を惹起し、口舌乾き、精が自ら溢し、或は小便が赤黃となり、大便が燥實し、或は小便が大いに利して甚だ渴せぬものである。胡桃肉、白茯苓各四兩、附子一箇を皮を去つて切片し、薑汁、蛤粉と共に焙じて末にし、蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを米飮で服す。(普濟方) 【小便頻數】胡桃を煨熟し、就寢時に嚼んで溫酒で服す。【石淋の痛楚】便中に石子のあるものには、胡桃仁一升、細米で煮た漿粥一升を相和して頓服すれば瘥える。(崔元亮海上方) 【風寒の汗なきもの】發熱し、頭痛するには、核桃肉、葱白、細茶、生薑等分を搗き爛らし、水一鍾で七分に煎じて熱服し、寢具を被て汗を取る。(談埜翁方) 【痰喘欬嗽】方は發明の項を見よ。【老人の喘嗽】氣促し、睡臥し得ぬは、これを服すれば立ろに定る。胡桃肉を皮を去り、杏仁を皮、尖を去り、生薑と各一兩を研つて膏にし、煉蜜少量を入れて和して彈子大の丸にし、毎就寢時に一丸を嚼んで薑湯で服す。(普濟方) 【產後の氣喘】胡桃肉、人參

各一錢、水一盞を七分に煎じて頓服する。【久嗽の止まぬもの】核桃仁五十箇を煮熟して皮を去り、人參五兩、杏仁三百五十箇を麩で炒り、湯に浸して皮を去り、研り勻ぜて煉蜜を入れて梧子大の丸にし、毎空心に一丸を細かに嚼んで人參湯で服し、就寢時に再服する。(蕭大尹方)【物を食つて醋心するもの】胡桃を嚼み爛らして生薑湯で服すれば立ろに止む。(傳信適用方)【酸きものを食つて齒の齼むもの】胡桃を細かに嚼めば解す。(日華本草)【誤つて銅錢を呑みたるとき】胡桃を多く食へば自ら化けて出る。胡桃を銅錢と共に食へば粉に成るので證し得る。(李樓方)【齒に揩つて鬚を烏くする】胡桃仁を燒き、貝母と各等分を散にして日日に用ゐる。(聖惠)【眼目の暗昏】四月の内に風で落ちた小胡桃を取り、毎日午時に飽くまで食つて無根水で呑下して、偃臥する。鼻孔中に泥腥氣あるを覺えるを度とする。(衛生易簡方)【赤痢の止まぬもの】胡桃仁、枳殼各七箇、皂角の蛀なきもの一挺を新瓦上で燒いて性を存し、研つて細末にして八服に分け、毎就寢時に一服、二更に一服、五更に一服し、荊芥茶で送下する。(總錄)【血崩の止まぬもの】胡桃肉五十箇を燈上で燒いて性を存し、研つて一服とし、空心に溫酒で調へて服す、神效がある。【急心氣痛】核桃一箇、棗

子一箇を核を去り、それで桃を夾んで紙で裹んで煨熟し、生薑湯一鍾を以て細かに嚼んで送下する。永久に發らない。これを蓋落湯と名ける。(趙氏經驗)【小腸氣痛】胡桃一箇を灰に燒いて研末し、熱酒で服す。(奇效良方)【便毒の初起】子和の儒門事親では、胡桃七箇を燒き研つて酒で服す。三服に過ぎずして效が現れる。楊氏經驗では、胡桃三箇を用ゐ、銅錢を夾み、一箇を食へば癒える。【魚口毒瘡】端午の日の午の刻に樹上の青胡桃を取り、筐中で陰乾し、使用するときに全燒して末にし、黃酒で服す。(四)少行一二次にして膿が大便から出る。膿がなければ消し、二三服で平癒する。(楊氏經驗)【一切の癰腫】背癰、附骨疽のまだ膿を成さぬには、胡桃十箇を煨熟して殼を去り、槐花一兩を研末し、杵き勻ぜて熱酒で調へて服す。(古今錄驗)【疔瘡惡腫】胡桃一箇を平破して仁を取り、嚼み爛らして殼內に入れ、それを瘡上に置き頻りに換へる。甚だ效がある。(普濟)【痘瘡倒陷】胡桃肉一箇を燒いて性を存し、乾胭脂半錢と研り勻ぜ、胡荽煎酒で調へて服す。(儒門事親)【小兒の痘瘡】久しく癒えぬには、胡桃を皮のまま燈上で燒いて性を存し、盌で蓋ふて火毒を出し、輕粉小量を入れて生油で調へ、一二回塗れば癒える。(保幼大全)【酒皶鼻赤】方は橘核を見よ。

(四) 原書ニ少行トアルハ恐ラク少許ノ寫誤ニテ、少許チ服スト讀ムベキモノナラン。

【聤耳の汁の出るもの】胡桃仁を燒いて研り、狗膽汁で和して挺子にし、綿で裹んで塞ぐ。(普濟方)【耳を傷めて瘡と成つたもの】汁の出るには、胡桃を杵いて取つた油を納入する。(同上)【火燒で瘡と成つたもの】胡桃仁を黑く燒き、研つて傅ける。【壓撲傷損】胡桃仁を擣き、溫酒で和して頓服すれば瘥える。(圖經本草)【疥瘡瘙痒】油核桃一箇、雄黃一錢、艾葉を杵き熟して一錢を擣き勻ぜ、綿で包んで夜臥すときに陰囊を裹む。效を歷ても洗つてはならぬ。(集簡方)

胡桃青皮　〔氣味〕【苦く濇し、毒なし】〔主治〕【髭、及び帛を染めていづれも黑くなる】志曰く、仙方に、青皮を取つて油を壓取し、詹糖香を和して毛髮に塗る、色が漆のやうになる。

〔附方〕新四。【髭髮を烏くする】胡桃皮、科蚪等分を泥に擣いて塗る。一回染めると黑くなる。○總錄では、青胡桃三箇を皮のまま擣細し、人乳汁三盞と銀石器中で調勻し、三五回鬚髮に搽る。日毎に胡桃油で潤ほすが良し。【癧瘍風】青胡桃皮を泥に擣き、醬淸少量、硇砂少量を入れて合勻し、豫め泔で洗つてから傅ける。(外臺)【白癜風】青胡桃皮一箇、硫黃を皂子一箇ほどを研り勻ぜ、日日に摻つて

五）斤ハ升ノ誤。

效を取る。【嵌甲】胡桃皮を灰に焼いて貼る。

皮 主治 【水痢を止める。春期に斫つた皮の汁で頭を沐すれば至つて黒くなる。煎じた水で褐を染め得る】（開寶）

附方 新一。【鬚髮を染める】胡桃根皮一秤、蓮子草十斤を切つて瓮に盛り、水五斗を入れて一箇月浸して滓を去り、熬つて五（五）斤までにして芸薹子油一斗を入れ、慢火で煎じて五升にして取收める。凡そ用ゐるには、先づ炭灰汁で洗つてからその油を塗り、外部を牛蒡葉で包住して絹で裹み、一夜にして洗ひ去る。七日間使用すれば黒くなる。（總錄）

殼 主治 【焼いて性を存して下血、崩中の藥に入れる】（時珍）

榛（宋開寶）

和名 はしばみ
學名 Corylus heterophylla, Fisch.
科名 かばのき科（樺木科）

釋名 **亲** 古の榛の字である。時珍曰く、按ずるに、羅氏の爾雅翼に『禮記の鄭玄の註に「關中に甚だ此の果多し」とある。關中とは秦の地であつて、榛の字

が秦に從ふわけは蓋しこの意味を取つたものだ」とある。左傳に『女の贄は榛栗棗修に過ぎず。以て虔を告ぐるなり』とあるを見ると、榛には臻至の意味も含んでゐるので、その名を以て己の虔を告げたものだ。古代には亲と書いて辛に從ひ木に從つた。俗に莘と書くは誤である。莘の音は詵(セン)である。

(一)【集解】志曰く、榛は遼東の山谷に生ずる。樹の高さ一丈ばかり、子は小さい栗のやうなもので、軍行には糧に當ててこれを食ふ。中部地方にもある。鄭玄のいふ關中、鄜坊に甚だ多い。

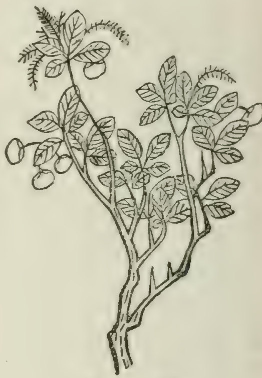
頌曰く、桂(二)楊に亲栗といふがある。叢生で、實は大いさ杏子ほどあり、中の仁、皮子の形色は栗と異がかく、ただ小さいだけである。

大明曰く、新羅の榛子が肥白で最も良し。

時珍曰く、榛は樹が低く小さく、荊のやうで叢生する。冬の末期に櫟の花のやうで、條を成し、下垂した長さ二三寸の花を開き、二月に葉が生え、初生の櫻桃の葉のやうで、皺多くして細齒、及び尖がある。その實は苞を作して三五箇相粘著し、一箇の苞に一箇の實があり、實は櫟實のやで下が壯で上が銳く、生では靑くして熟

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕はしばみ、おほはしばみ Corylus heterophylla, Fisch. (Cupuliferae)
(二) 楊ハ陽ノ誤カ。

すれば褐になる。その殼は厚くして堅く、その仁は白くして圓く、大いさは杏仁ほどでやはり皮尖がある。しかし空のものが多いところから、諺に『十榛九空』といふ。按ずるに、陸機の詩の疏に『榛には兩種あつて、一種は大小、枝葉、皮樹いづれも栗のやうだが子は小さく、形は


〔榛子〕

橡子のやうだ。味はやはり栗のやうである。枝莖は燭に用ゐられる。詩に所謂「樹之榛栗」とあるそのものだ。一種は高さ一丈餘、枝葉は水蓼のやうで、子には胡桃の味がある。遼、代、上黨に甚だ多い。久しく置けばやはり油壞し易いものだ』とある。

仁 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【氣力を益し、腸、胃を實し、人をして飢ゑずして歩行を健ならしめる】(開寶)【飢を止め、中を調へ、胃を開き、甚だ效驗がある】(大明)

阿月渾子（拾遺）

和名　ふすだす
學名　Pistacia vera, L.
科名　うるし科（漆樹科）

〔校正〕　木部より此に移し入れて、海藥の無名木皮を併せ入れた。

〔釋名〕　**胡榛子**（拾遺）　**無名子**（海藥）

〔集解〕[一]　藏器曰く、阿月渾子は西國の諸番に生ずる、胡榛子と同じ樹であつて、一歳が胡榛子、二歳が阿月渾子である。

珣曰く、按ずるに、徐表の南州記に『無名木といふが嶺南の山谷に生ずる。その實の狀態は榛のやうなもので、子を無名子といつてゐる。外國商人達は阿月渾子と呼ぶ』とある。

仁　〔氣味〕[二]　【辛し、溫、濇にして毒なし】　〔主治〕　【諸痢、冷氣を去り、人をして肥健ならしめる】（藏器）　【腰冷、陰腎の虛痿弱を治す。房中術に多くこれを用ゐる。木香、山茱萸と配合するが良し】（李珣）

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕 Pistacia vera, L. (Nyctaginaceae)

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕蔗糖（二三・二六）、脂肪油、プロテイン等ヲ含有ス。（ウ植、七〇六）

無名木皮（海藥）【氣味】【辛し、大温にして毒なし】【主治】【陰腎の萎弱、嚢下の溼痒には、いづれも汁を蘸けて小浴するが極めて妙である】（珣）

櫧子（拾遺）

和名 かし一種
學名 Quercus sp.
科名 ぶなのき科（殼斗科）

【校正】原は鈎栗に附錄してあつたが、本書では一條を折出した。

【集解】（一）藏器曰く、櫧子は江南に生ずる。皮樹は栗のやうで冬期にも凋まず、子は橡子よりも小さい。

頴曰く、櫧子には苦と甜との二種あつて、修治して粉食にし餻食にする。褐色で甚だ佳味なものだ。

時珍曰く、櫧子は處處の山谷にある。その木は、大なるは數抱にして高さ二三丈、葉は長大にして栗の葉の如く、稍尖つて厚く堅く、光澤があり、鋸歯が峭利だ。冬を凌いで凋まない。三四月に白色の花を開き、穗になつて栗の花のやうになり、結

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕あらかし、くろがし、ならばがし Quercus glauca, Th.

實は槲子ほどの大いさで外に小さい苞があり、霜後にその苞が裂けて子が墜ちる。子は圓く褐色で尖があり、大いさは菩提子ほどで內の仁は杏仁ほどだ。生で食ふと苦澀だが、煮、炒すれば甘を帶びる。やはり粉に磨れるものだ。甜櫧子は粒が小さく、木の文が細かく白い。俗に麪櫧と名ける。苦櫧子は粒が大きく、木の文が粗く赤い。俗に血櫧と名け、その色の黒いものをば鐵櫧と名ける。按ずるに、山海經に『前山、木あり、その名を櫧といふ』とあり、郭璞の註に『櫧は子が柞子に似て食へるものだ。冬期に採る。木は屋柱、棺材にすると容易に腐朽せぬものだ』とある。



〔櫧子〕

仁　氣味　【苦く澀し、平にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、正要に『酸く甘し、微寒なり。多く食つてはならぬ』とある。　主治　【これを食へば飢ゑず。人をして步行を健ならしめ、洩痢を止め、惡血を破り、渴を止める】(藏器)

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Castanopsis chinensis, Hce. (Cupuliferae) おほくりがし、くりがしは C. taiwaniana, Hayat.

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕Castanopsis sinensis ノ樹皮中ニハ單寧一三・三%ヲ含ム。(ウ植、二一五) C. taiwaniana, Hay. ハ材中ニピロガロール單寧、二・四%(水分六・

皮葉　〔主治〕【煮汁を飲めば産婦の血を止める】(藏器)【嫩葉を瘰瘡に貼り、一日三回換へるが良し】(吳瑞)

鉤栗(拾遺)

和名　くりもどき(牧野)
學名　Castanopsis chinensis, Hance.
科名　ぶなのき科(薔薇科)

〔釋名〕 **巢鉤子**(拾遺) **甜櫧子**　瑞曰く、鉤栗、卽ち甜櫧子である。時珍曰く、鉤、櫧の二字は、地方音では相近い。その狀態は櫟のやうなものだ。鉤櫟と書くべきであらう。

〔集解〕(一) 藏器曰く、鉤栗は江南の山谷に生ずる。木は太さ數圍あつて、冬期にも凋まぬ。その子は栗に似て圓く小さい。又、雀子といふこれに似て圓く黑いものがある。久しく食すれば飢ゑず。詳細は櫧子の條下にある



鉤〕芽——
〔栗——栗

七)樹皮中ニ八・五%(水分七・七)ヲ含ム。(ウ植、一二八一)

仁

(二)**氣味** 【甘く、平にして毒なし】 **主治** 【これを食すれば飢ゑず。腸、胃を厚くし、人をして肥健ならしめる】(藏器)

橡實

音は象(ソウ)である。(唐本草)

和名　くぬぎ
學名　Quercus acutissima, Carr.
科名　ぶなのき科(殻斗科)

校正 木部より移し入る。

釋名 **橡斗**(説文) **皁斗**(同) **櫟梂** 音は歷求(レキキユウ)である。 **柞子** 音は作(サク)である。 **芧** 杼と同じ。序(ジヨ)・著(ジヨ)の二音がある。 **栩** 音は許(キヨ)である。(一)禹錫曰く、按ずるに、爾雅に『栩は杼なり』とある。又『櫟、その實は梂』とあつて、孫炎の註に『栩、一名杼といふ』。櫟は樗に似た木であつて、梂とは實を盛つてある房である。その實は橡と名け、梂彙あつて自らそれを裹んでゐる。詩の唐風に「集于苞栩」とあり、秦風に「山有苞櫟」とあり、陸璣の註に「卽ち柞櫟であつて、秦地方ではこれを櫟といひ、徐地方ではこれを杼といふ。或はこれを栩といひ、その子をば皁といひ、皁斗ともいふ。その殼の煮汁で物を皁く染め得るもの

だ。今は京洛、河内でもやはりこれを杼といふ』とあり、いづれの地にでも通ずる名稱だ』とあつて、いづれも一物である。

○○時珍曰く、櫟は柞木であつて、實を橡斗、皂斗と名ける。斗といつたわけは、剜り剜られてゐて、斗に象てゐるからだ。黒染めの染料となるもので、南方の地では皂如と呼び、柞の音と近く發音する。



〔橡　實〕
——橡　斗　子——

〔一〕〔集解〕頌曰く、橡實は櫟木の子であつて、所在の山谷にいづれもある。木は高さ二三丈、三四月に黄色の花を開き、八九月に實を結ぶ。その實を皂斗といふ。槲、櫟いづれも斗があるが、櫟が勝れてゐる。

○○宗奭曰く、櫟は葉が栗の葉のやうなもので、所在にある。木は堅くして材に充るに堪へない。やはり木の性であつて、炭にすると他の木ではいづれもこれに及ばな

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕 Quercus Bungeana, Forbes. (Q. chinensis, Bge) (Cupuliferae)

い。その殼は物を黒く染め得るものだが、雨水に會つたことのあるものではその色が淡い。槲にもやはり殼はあるが、但し小さいので櫟に及ばない。

時珍曰く、櫟には二種ある。一種は實を結ばないものであつて、その名を棫といひ、その木は心が赤い。詩に『瑟彼柞棫』とあるがその物だ。一種は實を結ぶもので、その名を栩といひ、その實を橡といふ。二者は樹が小さいときは聳枝し、大なるときは偃蹇する。その葉は櫧葉のやうで文理がみな斜に勾つてゐる。四五月に栗花のやうな黄色の花を開き、結實は荔枝の核ほどで尖があり、その蔕に斗があつてその半分ほどを包む。その仁は老た蓮肉のやうなものだ。山間の住民は凶作の歳に採つて飯にし、或は擣き浸して粉を取つて食料にする。豊作の歳にはこれを食はせて猪を肥えしめるに用ゐる。北方地方でもやはりこの木を種ゑる。その木は高さ二三丈、堅く實して重く、斑文點があり、點の大なるものは柱棟に用ゐられ、小なるものは薪炭になる。周禮の職方氏に『山林。皂物、柞、栗の屬に宜し』とあるはこの木を指したのだ。その嫩葉は煎飮にして茶代りになる。

實

【修治】雷曰く、霜後に採收し、殼を去つて午前十時から午後二時まで蒸

し、五片に剉んで日光で乾して用ゐる。周憲王曰く、子を取り、十五回水を換へ浸して澀味を淘り去り、蒸して極熟して食へば飢を濟ひ得るものだ

【氣　味】【苦し、微溫にして毒なし】

【主　治】【下痢。腸、胃を厚くし、人を肥健にする】（蘇恭）【腸を澀し、瀉を止める。煮て食へばを飢を止め、兇作歳の飢餓を禦ぐ】（大明）

【發　明】思邈曰く、橡子は果でもなく穀でもないが、最も人を益する。服食を試みて、まだ穀食を斷ち能はぬ場合にはこれを啖ふが尤も佳し。氣無くして氣を受け、味無くして味を受け、食物を消化し、痢を止め、人を强健ならしめ、飢ゑざらしめる。

時珍曰く、木實を果とするのだから橡も蓋し果である。凶作歳には一般に皆取つて飢を禦ぐ。昔、摯虞が南山に入つて飢甚しかつたとき、橡實を拾つて食ひ、唐の杜甫が秦州に流浪したとき、橡、栗を採つて自給したといふはこれである。

【附　方】新五。【水穀下利】一晝夜に百餘回も下るには、橡實二兩、楮葉を炙いて一兩を末にし、一錢づつを食前に烏梅湯で調へて服す。（聖惠方）【血痢の止まぬ

もの】前記の方に縮砂仁半兩を加へる。【下痢脫肛】橡斗子を燒いて性を存して研末し、猪脂で和して傅ける。（直指方）【痔瘡出血】橡子粉、糯米粉各一升を黃に炒り、滾つた湯で調へて果子に作り、飯の上で蒸熟して食ふ。四五回に過ぎずして效がある。（李樓奇方）【堅硬なる石癰】石の如くにして化膿せぬには、橡子一箇を醋で青石の上で汁に磨つて塗り、乾けば易へる。十回に過ぎずして平安になる。（千金方）

斗殼〔修治〕大明曰く、藥に入れるには、いづれも細かに擣き、炒焦すが宜く、或は燒いて性を存して研つて用ゐる。

〔氣味〕【澀し、溫にして毒なし】〔主治〕【散にし、及び煮汁を服すれば、下痢を止める。幷に物を黑く染め得る】（恭）【腸風、崩中帶下、冷、熱瀉痢を止め、幷に鬚髮を染める】（大明）

〔附方〕新四。【下痢脫肛】橡斗殼を燒いて性を存して研末し、猪脂で和して搽り、幷に煎汁で洗ふ。（直接方）【腸風下血】橡斗子殼に白梅肉を塡滿して二箇を合定し、鐵線で縛り付けて煆いて性を存して研末し、二錢づつを米飮で服す。ある方では、硫黃を塡滿して煆き、研つて酒で服す。（余居士選奇方）【走馬牙疳】橡斗殼に鹽

を塡滿し、合定して燒き透し、火毒を出して硏末し、麝香少量を入れ、先づ米泔で漱(くちそそ)いでからそれを搽る。(全幼心鑑)【風蟲牙痛】橡斗五箇の中に鹽を入れ、皂莢(さうけふ)一條の中に鹽を入れ、共に煆いて硏末し、一日三五囘擦つて荊芥湯で漱ぐが良し。(經驗良方)

木皮　根皮(拾遺)　氣味　【苦し、平にして毒なし】　主治　【惡瘡。風に因り、露を犯したために腫れたものには、煎汁で日日に洗ひ、膿血を洗ひ盡せば止む。また痢を治す】(藏器)　【水痢を止め、瘰癧を消す】(大明)

附方　新一。【癰腫を蝕爛する】及び疣、贅、瘤、痣。柞櫟木(さくれきもくくわい)灰四斗、桑柴灰四斗、石灰一斗五升を沸湯で調へ溼し、甑中で一日蒸し、釜中の沸湯七斗と甑中の灰とで淋汁を取り、再び熬(い)つて一升までになつたとき、亂頭髮を雞子一箇ほどその中に投(と)じて消かし盡し、又、五色の綵(いろいと)を剪つて投入して消かし盡し、餅(へい)に盛り密封して取收め、少量づつを用ゐ、挑破して點(つ)ける。煎じる時、雞、犬、婦人、小兒に見せてはならぬ。(普濟方)

槲實

音は斛(コク)である。(唐本草)

和名　かしは
學名　Quercus dentata. Thunb.
科名　ぶなのき科(殼斗科)

【校正】木部より此に移附する。

【釋名】**槲樕**　音は速(ソク)である。**樸樕**(いづれも爾雅)　**大葉櫟**(俗)　**櫟橿子**

時珍曰く、槲樕とは(一)觳觫といふやうな意味で、栗は子が綻びて懸つたときに顫慄するやうな有樣があるから栗といひ、槲は葉が搖り動いて觳觫たる有樣があるから槲樕といつたのだ。樸樕とは婆娑たり蓬然たる貌をいふのであつて、その樹が偃蹇し、その葉が芃芃たるものだからである。俗に衣服を著けて整はぬ姿を指して樸樕といふはこの意味からしたものだ。その實は木彊なものだから俗に櫟橿子といふ。史に『武后は赦書を槲樹に挂けたところから、世間で金雞樹と呼ぶやうにな



〔槲實〕
櫟子

(一)觳觫ノ觫ハ悚ニ作ルベシ恐懼ノ貌ナリ。

(二) 木村(康)曰ク、〔原植物〕かしは、ははそ、もちがしは Quercus dentata, Th. (Cupuliferae)

つた』といつてある。

(二)[集解] 頌曰く、槲は處處の山林にある。木は高さ一丈餘、櫟と相類する。やはり斗があるが、但し小さくして使用に堪へぬものだ。時期に拘らずその皮、葉を採つて藥に入れる。

宗奭曰く、槲もやはり斗がある。木は堅いけれども用材とするに堪へない。ただ柴にするだけで、炭にしては櫟木に及ばない。

時珍曰く、槲に二種ある。一種は叢生する小さいもので、枹――音は孚(フ)と名け、爾雅に記載がある。一種は高いもので、大葉櫟と名ける。樹、葉倶に栗に似て、長く大きく、粗く厚く、冬期には凋落する。三四月にやはり栗のやうな花を開き、八九月に實を結ぶ。その實は橡子に似てゐるがやや短小で、その蔕にはやはり斗がある。その實は僵く澀くして味が惡い。凶歳にはやはり一般にこれを食ふ。その木理は粗くして橡木に及ばない。所謂『樗櫟の材』とはそれを指していつたものだ

仁 [氣味] 【苦く澀し、平にして毒なし】 [主治] 【蒸煮して作つた粉は、腸を澀し、痢を止め、橡子の功と同じ】(時珍)

槲若　【修治】　頌曰く、若とは葉を呼ぶ名稱である。藥に入れるには微し炙いて焦がすべきものである。

【氣味】　【甘く苦し、平にして毒なし】　【主治】　【痔を療じ、血、及び血痢を止め、渇を止める】（恭）【血を活し、小便を利し、顔面の皶赤を除く】（時珍）

【附方】　舊五、新三。　【突然の吐血】　槲葉を末にし、二錢づつを水一盞で七分に煎じ、滓を和して服す。（簡要濟衆）　【鼻衄の止まぬもの】　槲葉の擣汁一小盞を頓服すれば止まる。（聖惠方）　【腸風血痔】　熱多きものに就中佳し　槲葉を微し炙いて研末して一錢、槐花を炒つて研末して一錢を米飲で調へて服す。なほ止まぬときは再服する。（寇氏衍義）　【冷淋莖痛】　槲葉を研末し、三錢づつを水一盞、葱白七寸とで六分に煎じて滓を去り、食前に溫服する。一日二回。　【孩子の淋疾】　槲葉三片を湯に煎じて雞子殼に一箇を服す。小便が卽時に下る。（孫眞人方）　【螻蛄漏疾】　槲葉を燒いて性を存して研り、米泔に別の槲葉を浸して取つた汁で瘡を洗つて後、その灰少量を瘡中に納れる。（聖惠方）　【鼻上の皶皰】　膿血を出すものには、泔水で槲葉を煮て取つた汁で洗ひ、拭ひ乾してから槲葉灰少量を中に納れるが良し。（聖惠）　【腋下の胡臭】　槲

葉三升を切つて水で煮た濃汁で洗ひ、洗ひ畢ると白苦瓠を煙に燒いて熏じ、後に辛夷、細辛、杜衡の末を醋に一夜浸して傅ける。(千金方)

木皮　俗に赤龍皮と名ける。〔氣味〕【苦く澀し、毒なし】〔主治〕【煎じて服すれば、蟲、及び漏を除くに甚だ效がある】(恭)【湯に煎じて惡瘡を洗ふに良し】(權)【能く瘰癧を吐し、五臟を澀する】(大明)【赤、白痢、腸風下血を止める】(時珍)

〔附方〕舊四、新五。【赤龍皮湯】諸種の敗爛瘡、乳瘡を治す。槲皮を切つて三升、水一斗を五升に煮取り、春、夏は冷して用ゐ、秋、冬は溫めて用ゐ、それで洗ひ、洗ひ畢つてから諸膏を傅ける。(肘後)【附骨疽瘡】槲皮を燒いて研り、米飮で方寸匕づつを服す(千金方)【下部に瘡の生じたるもの】槲皮、櫸皮の煮汁を熬つて飴餹のやうにし、それで下部を導く。(肘後方)【一切の瘻疾】千金では、槲樹の北側の陰になつた部分の白皮三十斤を剉み、水一石で一斗に煮て滓を去り、煎じて飴のやうにし、又、通都厠上の雄鼠屎、雌鼠屎各十四箇を取つて燒いて汁を盡したものと研り和し、溫酒一升を納れて和勻し、瘦せた人は五合を食する。蟲があつて出るものである。〇崔氏纂要では、槲白皮を切つて五升、水八升を煮て沫し盡させてから

滓を去り、再び煎じて膏にし、一日に棗ほどを服し、幷に瘡上に塗る。苜蓿鹽飯を食つてその藥力を助けるが宜し。瘥えるを度とする。【小兒の瘰癧】槲樹皮を粗皮を去つて切り、湯に煎じて頻りに洗ふ。（聖惠方）【蠱毒下血】槲木の北陰の白皮一大握、長さ五寸を水三升で一升に煮取り、空心に分服する。直ちに毒を吐出する。

【赤、白久痢】大人、小兒に拘らず、新槲皮一斤を黑皮を去つて切り、水一斗で五升に煮じ取り、滓を去り膏に煎じて酒に和して服す。【久痢の止まぬもの】槲白皮を薑汁で五回炙つて一兩、乾薑を炮いて半兩を末にし、二錢づつを米飲で調へて服す。（聖濟總錄）【久瘡の已えぬもの】槲木皮一尺、闊さ六寸に切り、水一斗で五升に煮取り、白沙餹十挺を入れて一升に煎じ取り、三回に分服する。直ちに吐して癒える。（肘後方）

本草綱目果部第三十卷　終

本草綱目果部

第三十一卷

本草綱目果部目錄第三十一卷

果の三　夷果類三十一種

荔枝 開寶　龍眼 別錄　龍荔 綱目　橄欖 開寶

木威子 拾遺　菴摩勒 唐本　毗梨勒 唐本　沒離梨 拾遺

五斂子 綱目 即ち陽桃。　五子實 綱目　榧實 別錄

海松子 開寶　檳榔 別錄　大腹子 開寶　椰子 開寶

無漏子 拾遺 即ち波斯棗。　桄榔子 開寶　莎木麪 海藥

波羅蜜 綱目　無花果 食物 文光果、天仙果を附す。　阿勃勒 拾遺

沙棠果 綱目　棎子 拾遺　麂目 拾遺　都桷子 拾遺

都念子 拾遺　都咸子 拾遺　摩廚子 拾遺 齊墩果、德慶果を附す。

韶子 拾遺　馬檳榔 會編　枳椇 唐本

右附方　舊二十一　新四十一。

果の三　夷果類三十一種

荔枝（宋開寶）

和名　れいし
學名　Nephelium Litchi, Camb.
科名　むくろじ科（無患樹科）



〔荔　枝〕

釋名　**離枝**（綱目）　**丹荔**　○頌曰く、按ずるに、朱應の扶南記に「この木が實を結ぶときは、枝が弱くして蔕が牢く、摘取り惜い。取るには必ず刀斧でその枝を劙り取らねばならぬ。故にその意味を名としたもので、劙は利と發音し、劦と同じである。

○○時珍曰く、司馬相如の上林賦には離支と書いてある。按ずるに、白居易は『若し本枝を離れると一日にして色が變じ、三日にして味

が變ずるものだ」といつた。これで見ると、離支なる名は、また或はこの意味を取つたものであらう。

(一)［集解］頌曰く、荔枝は嶺南、及び巴中に生じ、今は閩の泉、福、漳州、興化軍、蜀の嘉、蜀、渝、涪州、及び二廣の州郡にいづれもあり、その品質は閩中のものを第一とし、蜀州のものがこれに次ぎ、嶺南のものを下とする。その木は高さ二三丈、徑一尺から兩手を廻して一抱へまでのもので、桂木、冬青などの屬に類し、葉は緑で蓬蓬然として、四季共に繁茂して凋まない。その木は性至つて堅勁なもので、土地の者はその根を取つて(二)阮咸槽、及び彈碁局に作る。その花は青白で、その形狀は冠の蕤綏のやうだ。その子は喜く雙んでゐるもので、實の狀態は初生の松毬のやうだ。殼は皺紋があり、羅のやうで初は青く漸次に紅くなる。肉は色が淡白で肪玉のやうだ。味は甘くして汁が多い。正確に夏至の時になると子が翕然としてみな赤くなるので、その時が食ふに適當の時である。大樹下には子が百斛ほども生るものだ。五六月の盛熟期に、彼の地では一般にその下で宴會を開いてそれを賞翫する。一定量を取つて喫ふには多くとも一向人體を傷めぬもので、少し過ぎた場合には蜜

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕れいし Nephelium Litchi, Camb. (Sapindaceae)れいし Litchi chinensis, Sonn.

(二) 阮咸槽トハ三味線ノ胴ナリ。

漿を飲めばそれで解す。

茘枝は漢の時代から始めて傳はつたもので、當初は嶺南だけに產したのだが、後には蜀中に產するやうになつた。故に左思の蜀都賦に『旁に龍目を挺し、側に茘枝を生ず』とあり、唐の白居易の圖序に詳に論じてある。今は閩中の四郡に產するものはすばらしいもので、蔡襄の譜にその種類が三十餘品ほども擧げてあるが、肌肉が甚だ厚く、甘く香しく、瑩白であつて、廣、蜀のものとは比較にならない。(三)福唐から毎歳貢納する。白曝茘枝、蜜煎茘枝の肉はいづれも都で珍果とされてゐるもので、白曝は精良な實を用ゐねば出來ないものだ。市中で販賣されてゐるものは、多くはよい加減な茘枝を用ゐ、鹽梅を入れて曝成してあるので、皮の色が深紅で味もやはり少し酸く、甚だ本眞を失つてゐる。一旦曝し上げると歳を經ても保てるものだから、各地に廣く販賣されて、中國の到る處に行渡つてゐるが、味はやはり無くならない。あらゆる果物が盛に賞美されるが、いづれもこれに及ぶものはないのである。

又、焦核茘枝といふがあつて、これは核が雞舌香のやうで、味が更に甜美だ。或

(三)福唐ハ唐ノ縣名、今ノ福建省福清縣ノ東南ニ治ス。

はこれは木の日光に背いた方に生るもので、結實が完全でないものなのだともいふ。又、綠色、蠟色のものもあつて、いづれもこの果としての特異なものだ。中國本土にはやはり得難いものである。蜀、嶺の茘枝は初生には小さく酢く、肉が薄くして核が大きく、白曝すには堪へない。花、及び根も藥に入れる。

藏器曰く、顧微の廣州記に『茘枝は冬、夏常に青く、その實は大いさ雞卵ほど、殼が朱く肉が白く、核は黃黑色、半熟の蓮子のやうだ。精良なものの核は雞舌香のやうで、甘美にして汁多く、極めて人を益するものである。

時珍曰く、茘枝は炎方の果であつて、性最も寒を畏れる。種植し易くして根が浮き、その木は甚だ久しきに耐へ、數百年經つても實を結ぶものがある。その實は生の時は肉が白いが、乾いたときは肉が紅くなる。日光で晒し、火で烘り、鹵に浸し、蜜煎にしていづれも遠方まで送れるものだ。朶を成したまま晒し乾したものをば茘錦と謂ふ。按ずるに、白居易の茘枝圖の序には『茘枝は巴峽の間に生ず。樹の形は團團として帷蓋の如く、葉は冬青の如し。花は橘の如くにして春榮え、實は丹の如くにして夏熟す。朶は蒲桃の如く、核は枇杷の如く、殼は紅繒の如く、膜は紫綃の

如く、瓤肉は潔白にして氷雪の如く、漿液は甘酸にして醴酪の如し。大略彼の如く、その實は之に過ぐ。若しその本枝を離れば、一日にして色變じ、二日にして香變じ、三日にして味變じ、四五日にして外色、香味盡く去る』とある。又、蔡襄の茘枝譜には『廣、蜀に出す所は、早く熟して肉薄く、味甘酸にして閩中の下等の者に及ばず。閩中は惟だ四郡に之れ有り、福州最も多く、興化最も奇に、泉、漳之に次ぐ。福州は原野に延亙し、一家甚しきは萬株に至る。興化の上品は大いさ徑寸餘、香氣清遠、色紫にして殼薄く、瓤厚くして膜紅く、核は丁香母の如くにして、これを剝げば水精の如く、之を食へば絳雪の如し。茘枝は甘を以て味となし、百千樹と雖も同き者あることなし。甘と淡とに過ぐるは皆中を失す。若夫れ厚皮尖刺、肌理黃色、核に附いて赤く、之を食つて滓あり、食し已つて澀るは、酢味なしと雖も亦た自ら下等なり。最も麝香を忌み、之に觸れば花實盡く落つ』とある。又、洪邁の夷堅志には『莆田の茘枝は名品にして、皆天成に出づ。その核を以て之を種ゆるも亦た本體を失し、形狀百出、理を以て求む可らず』とある。沈括は、筆談に『焦核茘子といふは、その地の者がその大根を去つて燔き焦して種ゑるとさう成るのだ』といつ

(頭) 木村(康)曰ク、〔成分〕果實〔藥用〕子衣〔食用〕、無毒、アルカロイド、サポニン、脂肪等ヲ含マズ、タダ粗纖維、無窒素越幾斯、枸櫞酸、糖(主トシテ轉化糖)ヲ含ム。(ウ植、七三二)
〔應用〕果實ハ强壯劑トシテ食用ニ供シ、種子ハ止咳劑トス。(植成研)

てあるが、大いにさうでない。
珣曰く、茘枝樹は青木香に似たもので、熟したとき、人がまだ採らなければあらゆる蟲も近づかないが、人が纔に採ると、鳥、烏や蝙蝠の類がめちやめちやに食荒して了ふ。故に茘枝を採るには必ず日中に多人數で採る。一日にして色が變じ、二日にして味が變じ、三日にして色、味倶に變ずるものだ。故に古詩に『色味三日を踰えずして變ず』とある。

實 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】珣曰く、甘く酸し、熱なり。多食すれば人をして虛熱を發せしめる。李延飛曰く、生茘枝を多食すれば、發熱し、煩渇し、口乾き、衄血する。頴曰く、多食しても人を傷めぬ。少し過度であつたときは蜜漿一盃を飲めばそれで解す。
時珍曰く、茘枝は、氣味は純陽であり、その性は熱を畏れる。新鮮なものを食つて多ければ齦腫し、口痛し、或は衄血する。齒䘌、及び火病を病む人は就中これを忌む。開寶本草にその性を平なりといひ、蘇氏が多食しても傷めることが無いと謂つたのはいづれも謬說である。按ずるに、物類相感志に『茘枝を食つて多ければ醉

ふ。殼を水に浸して飲めばそれを解す』とある。これは食物不消化の場合には還て
その原物を用ゐれば消化するの關係である。

【主治】【渴を止め、人の顏色を益す】(開寶)【これを食へば、煩渴の頭重、心躁、背膊の勞悶を止める】(李珣)【神を通じ、智を益し、氣を健にする】(孟詵)【瘰癧、瘤贅、赤腫、疔腫を治し、小兒の痘瘡を發す】(時珍)

【發明】震亨曰く、荔枝は陽に屬し、主として形質なきの滯氣を散ずる。故に瘤贅、赤腫の者にこれを用ゐる。苟もこの關係が明でなければ、これを用ゐても反應がない。

【附方】新六。【痘瘡の發せぬもの】荔枝肉を酒に浸して飲み、幷に食ふ。生、冷のものを忌む。(聞人規痘疹論)【疔瘡惡腫】普濟方では、荔枝五箇、或は三箇――偶數を用ゐてはならぬ――を用ゐ、狗糞中の米を淘淨して末にし、糯米粥と共に研つて膏にし、それを紙に攤して貼り、一箇の孔を殘して置いて毒氣を出す。○濟生祕覽では、荔枝肉、白梅肉各三箇を擣いて餅子にし、瘡上に貼る。根が出る。【風牙疼痛】普濟では、荔枝を殼付きのまま燒いて性を存し、研末して牙に擦れば止む。こ

れは諸藥の奏效せぬものを治する仙方である。○孫氏集效方では、大茘枝一箇を剔り開けた殼に鹽を塡滿し、煆き研つて搽れば癒える。【呃逆の止まぬもの】茘枝七箇を皮、核のあるまま燒いて性を存し、末にして白湯で調へて服す。立ろに止む。（楊拱醫方摘要）

核　［氣　味］【甘し、溫、濇にして毒なし】［主　治］【心痛、小腸氣痛には、一箇を煨いて性を存して研末し、新酒で調へて服す】（宗奭）【癩疝氣痛、婦人の血氣刺痛を治す】（時珍）

［發　明］時珍曰く、茘枝核は、厥陰に入り、滯氣を行散する。その實は二箇雙んで結び、その核が睾丸に肖たものだ。故にそれが癩疝、卵腫を治するので、述類、象形の意味がある。

［附　方］新六。【脾痛の止まぬもの】茘枝核を末にし、醋で二錢を服す。數服にして癒える。（衞生易簡方）【婦人の血氣】刺痛するには、茘枝核を燒いて性を存して半兩、香附子を炒つて一兩を末にし、二錢づつを鹽湯、米飮の隨意のもので服す。これを蠲痛散と名ける。（婦人良方）【疝氣癩腫】孫氏では、茘枝核を炒つて黑色にし、

大茴香を炒り、等分を末にして一錢づつを溫酒で服す。○皆效方では、玉環來笑丹——茘枝核四十九箇、陳皮を白を連ねて九錢、硫黄四錢を末にし、鹽水で作つた麪糊で綠豆大の丸にし、痛む時に空心に九丸を酒で服し、良久して再服する。三服に過ぎずして甚だ神の如き效がある。また諸氣痛を治す。【陰腎腫痛】茘枝核を燒いて研り、酒で二錢を服す。【腎が斗ほどに腫れたるもの】茘枝核、青橘皮、茴香等分を各炒つて研り、一日三囘、酒で二錢を服す。

殼　主治　【痘瘡が出ても發することの爽快ならぬには、湯に煎じて飮む。又、茘枝熱を解するには水に浸して飮む】（時珍）

附方　新一。【赤、白痢】茘枝殼、橡斗殼を炒り、石榴皮を炒り、甘草を炙いて各等分を用ゐ、半兩づつを水一盞半で七分に煎じて溫服する。一日二服。（普濟方）

花　及び　**皮**　**根**　主治　【喉痺腫痛には、水で煮た汁を少しづつ含んで嚥み、痺を取つて止める】（蘇頌）記載は崔元亮海上方にある。

龍眼（別錄中品）

和名 りゆうがん
學名 Nephelium Longana, Camb.
科名 むくろじ科（無患樹科）

【校正】 本部より此に移し入る。宗奭曰く、龍眼は專ら果とするものだ。藥には入れられたことがない。本草に木部に編入したのは正しくない。

【釋名】 **龍目**（吳普）**圓眼**（俗名）**益智**（別錄）**亞茘枝**（開寶）**茘枝奴** **驪珠** **燕卵** **蜜脾** **鮫淚** **川彈子**（南方草木狀） 時珍曰く、龍眼、龍目といふは形に象つたものだ。吳普の本草にはこれを龍目といひ、又、比目といふ。曹憲の博雅にはこれを益智といつてある。弘景曰く、廣州に龍眼といふがあるが、益智ではない。恐らく彼の地方での別名なのであらう。志曰く、甘味は脾に歸するもので、能く人の智を益する。故に益智と名けるので、今の益智子そのものではない。

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕りゆうがん Nephilium Longana, Camb. = Euphoria longana, Lam. (Sapindaccae)
〔生藥〕龍眼肉(福肉)ハ假果皮ヲ剝離セルモノナリ。本邦ニテハ臺灣殊ニ嘉義、臺南、南投、臺中ノ各地ニ產ス。(邦藥植、一四七)

頌曰く、茘枝の時期が少し過ぎると同時に龍眼が熟する。故に南方の地ではこれを指して茘枝奴といふ。また木彈と名け、晒し乾して遠方への贈物にする。北方の地ではこれを佳果とし、亞茘枝と呼んでゐる。

〔集解〕(一) 別錄に曰く、龍眼は南海の山谷に生ずる。一名益智といふ。その大なるものは檳榔に似てゐる。



〔龍眼〕

恭曰く、龍眼は、樹は茘枝に似て、葉は林檎のやう、花は白色、子は檳榔のやうで鱗甲があり、大いさは雀卵ほどである。

頌曰く、今は閩、廣、蜀道の茘枝を產する地方にいづれもある。嵇含の南方草木狀に『木は高さ一二丈、茘枝に似て枝、葉が微し小さく、冬を凌いで凋まぬ。春末、夏初に細かい白花を開き、七月に實が熟し、殼は青黃色で文が鱗甲を作し、形は圓く大きくして彈丸ほどのもの

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕市販龍眼肉中ノ組成ハ水分〇・八五(%)、可溶性物質七九・七七、不溶性物質一九・三九、灰分三・三六、可溶性物質中葡萄糖二六・九一、蔗糖〇・二二、酸類(酒石酸トシテ)一・二六、含窒素物六・三〇九。〔村山長之助、伊藤禎次郎—藥誌、一五〇(明、二八)四〇四〕又新鮮ナルモノハ水分七七・一五(%)、灰分〇・六一、脂肪〇・一三%、蛋白質一・四七、可溶性窒素物二〇・五五、蔗糖一二・二五〔奥村音三郎—化誌、四〇(大、三)八九九〕。果實ハ果殼ソノ一三(%)、果肉六〇、種子二七ニシテ、澱粉、脂肪、プロテイン、サポニ

だ。核は木梡子(もくくわんし)のやうだが堅くなく、肉は荔枝より薄く、白くして漿があり、甘いことは蜜のやうだ。實は極めて繁るもので、枝毎に二三十生(な)り、穗を作して蒲桃のやうだ。漢の時代には南海から常にこれを貢納したが、大いに民の害を爲すところから、陳武の長唐羌が上書してその狀況を陳述したので、和帝がその言に感じ、詔を下してこれを止められた』とある。

時珍曰く、龍眼は正圓なものだ、別錄と蘇恭とがこれを檳榔に比してあるが、一向に類似せぬものである。その木は性寒を畏れる。白露の後になつて摘(つ)み採つて晒し焙じて乾すもので、朶を成して乾いたものをば龍眼錦と名ける。按ずるに、范成大の桂海志に『山龍眼といふが廣中に產する。色は靑く、肉は龍眼のやうなもので、夏期に實が熟する。啖へるものだ』とあるが、これはやはり龍眼の野生のものを指したのであらう。

實

(二)【氣味】【甘し、平にして毒なし】恭曰く、甘く酸し、溫なり。李廷飛曰く、生のものを沸湯で瀹(ゆ)でて食すれば脾を動ぜぬ。

【主治】【五臟の邪氣に志を安じ、(二)厭食すれば蠱毒を除き、三蟲を去る。久しく服すれば魂を强くして聰明にし、

ン等ヲ含ム。(ウ植、七三三)
〔應用〕假種子ヲ煎ジテ滋養强壯劑トナシ心臟脾臟ヲ治シ花ヲ腎臟病及ビ婦人赤帶病ニ用ヒ根ハ淋病及ビ糖尿病ニ用ヒ葉ハ外傷ニ用フ。果實ハ食用ニ供ス。(植成研)
(三) 厭食ハマヂナフテ食フノ意。

身を輕くし、老いず。神明に通ずる】(別錄)【胃を開き、脾を益し、虛を補し、智を長ずる】(時珍)

發明　時珍曰く、食品としては茘枝を貴しとするが、資益するには龍眼を良しとする。蓋し茘枝は性熱であるが、龍眼は性和平である。嚴用和の濟生方の思慮で心、脾を勞傷したるを治するものとしての歸脾湯は、甘味は脾に歸して能く人智を益するの關係を利用したものだ。

附方　新一。【歸脾湯】思慮の過度で心、脾を勞傷したる健忘、怔忡(しやうちう)、虛煩、不眠、自汗、驚悸を治す。龍眼肉、酸棗仁を炒り、黃芪(わうぎ)を炙き、白朮(びやくじゆつ)を焙じ、伏神と各一兩、木香半兩、炙甘草(しやかんざう)二錢半を㕮咀し、毎服五錢を薑三片、棗一箇、水二鍾で一鍾に煎じて溫服する。(濟生方)

核　**主治**　【胡臭には、六箇を胡椒十四箇と共に研り、汗の出たとき擦る】(時珍)

龍茘（綱目）

和名　りゅうれい
學名　Nephelium sp.
科名　むくろじ科（無患樹科）

〔釋名〕　下文を見よ。

(一)〔集解〕　時珍曰く、按ずるに、范成大の桂海志に『龍茘は嶺南に產する。形狀は小さい茘枝のやうだが肉の味は龍眼のやうだ。その木の身、葉はやはり右の二果に似てゐる。故に名を龍茘といふのである。三月に小さい白花を開き、茘枝と同時に熟する。生では啖へないもので、但だ蒸してだけ食へるものだ。



〔龍茘〕

實

〔主治〕【甘し、熱にして小毒あり。生で食へば人をして癇を發せしめ、或は鬼物を見る】（時珍）　記載は桂海志にある。

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕不明 Nephelium sp. (T. ung) Raw fruits poisonous.

橄欖（宋開寶）

和名　かんらん
學名　*Canarium album*, Raeusch.
科名　かんらん科（橄欖科）

【釋名】**青果**（梅聖兪集）　**忠果**（記事珠）　**諫果**（記載は農書にある）　時珍曰く、橄欖なる名稱の意味は詳でない。この果は熟してもその色がやはり青いから俗に青果と呼ぶ。色の黄なるものもあるが、役に立たぬ。それは病物である。王禎は『その味は苦く澀いが、久しくして甘味を呼び出す』といつた。王元之は詩を作つてこれを忠言耳に逆ひ、亂れてこれを思ふに比したところから、世間で諫果と呼ばれる。



〔橄　欖〕
——木威子も同じ——

【集解】（一）志曰く、橄欖は嶺南に生ずる。樹は木槵子の樹に似て高く、端直にし

（一）木村（康）曰く、〔原植物〕かんらん、

りよくらん Canarium album, Raeusch. (Burseraceae)
〔備考〕オレーフ樹 Oleum europaea, L. (Oleaceae)ヲ橄欖トスルハ誤ナリ。かんらんノ果實ハソノ形ノ稍オレーフ實ニ類スルヲ以テ Chinese Olive ト稱セリ。是ヲ以テ舊約全書ニオレーフヲ橄欖ト誤譯セリ。(邦薬植九一)

て風情のあるものだ。結子の形は生訶子のやうで稜瓣がない。八月、九月に採る。又、波斯橄欖といふ一種があつて、邕州に生ずる。色類は相似たものだが、ただ核が兩瓣になつてゐる。蜜で漬けて食ふ。

○詵曰く、その樹は太さ數圍あり、實は長さ一寸許りのもので、先に生つたものが下に向ひ、後に生るものは漸次に高くなる。熟したときに生で食ふ。味は酢いが、蜜漬にすると極めて甜い。

○珣曰く、按ずるに、南州異物志に『閩、廣の諸郡、及び緣海浦嶼の間にいづれもある。樹は高さ一丈餘、葉は櫸、柳に似て、二月花を開き、八月實が成り、形狀は長い棗のやうで兩頭が尖つて靑色だ。核も兩頭が尖つて稜がある。核の内部に三箇の竅があつて、竅中に仁があり、食へるものだ。

○頌曰く、按ずるに、劉恂の嶺表錄異に『橄欖は樹枝が皆高く聳え、その子は秋深くして熟する。南方では一般に珍重し、生で咀嚼する。味が苦澀であるが、芬香は雞舌香を含むに勝るものだ。野生のものもあつて、子は澤山生るが樹が峻高で攀登るわけに行かぬ。けれどもただ根下を一寸四方ほど刻んで鹽を納れて置くと一夜に

してその子が皆自ら落ちる。木はやはりそれで損じない。その枝節の間には桃膠のやうな脂膏があつて、南方の地ではそれを採取し、皮、葉と和して煎じた汁を熬つて黒餳のやうにし、それを欖糖と呼ぶ。それを船の罅隙に泥ると膠漆のやうに牢く、水に著けて益〻乾くものだ』とある。

時珍曰く、橄欖は樹が高いので、將に熟せんとする時、木釘を釘し、或は鹽少量をその皮の内部に納れると、一夜にして自ら落ちる。やはり物の理の妙なる點だ。その子は生で食つて甚だ佳味である。蜜漬にし、鹽藏し、いづれも遠隔の地に送れる。その木脂の黒膠のやうな狀態のものを土人が採取する。爇くと淸烈なもので、それを欖香といふ。牛皮膠を雜へたものは佳くない。又、綠欖といふ色の綠なるものがあり、烏欖といふは色が青黑で、肉が爛れて甘い。肉を取つて搥碎いて乾して置くと、自然に白鹽のやうな霜が生ずる。それを欖醬といふ。青欖は核内の仁が乾いて小さいが、ただ烏欖だけは仁が最も肥大であつて、層疊した文があり、海螵蛸のやうな狀態で味が甘美だ。これを欖仁といふ。又、方欖といふ一種があつて、廣西の(二)兩江の峒中に產する。橄欖に似て三角、或は四角があるものだ。これは波斯橄

(二) 兩江峒中ハ左右

欖の類である。

實

氣味　【酸く甘し、溫にして毒なし】宗奭曰く、味澀く、良久しく甘し。震亨曰く、味澀くして甘し、醉飽せるに宜し、しかし性熱であつて、多食すれば能く上壅を致すものだ。

時珍曰く、橄欖は鹽を用ゐたものは苦澀でない。栗子と共に食へば甚だ香しい。按ずるに、延壽書に『凡そ橄欖を食ふには、必ず兩頭を去る。その性は熱なるものだ。白露の節が過ぎてから摘んで食へば大抵痁を病まない』とある。

主治　【生で食ひ、煮て飮み、いづれも酒毒を消し、鯸鮐魚の毒を解す】(開寶)【嚼んで汁を嚥めば魚鯁を治す】(宗奭)【生で咬ひ、煮汁を用ゐ、能く諸毒を解す】(蘇頌)【胃を開き、氣を下し、瀉を止める】(大明)【津液を生じ、煩渴を止め、咽喉痛を治す。咀嚼して汁を嚥めば能く一切の魚鼈の毒を解す】(時珍)

發明　志曰く、鯸鮐魚、卽ち河豚である。人が誤つてその肝、及び子を食へば、必ず迷悶して死に至るものだが、ただ橄欖、及び木の煮汁が能くそれを解す。その木で作つた舟艭で撥著すると魚は皆浮出すものだ。故に物にはかやうな相畏の關

江附近ノ蠻族ノ居住地。

(三) 木村(康)曰ク、(成分)皮部ヨリ滲出スル樹脂ハ精油七―八%ヲ含有ス。樹脂ハ酒精ニ難溶性ノモノト易溶性ノモノトニ分ツベク、ソノ中ヨリ種々ノ結晶性樹脂(プレイン、プリオイヂン、ブレイヂン、アミリン)ヲ含有ス。(ウ植、六五五)
(應用)果實ヲ鹽漬、砂糖漬等トシテ食用トス。

係のあることが首肯される。

時珍曰く、按ずるに、名醫錄に『呉江の一富人が鱖魚を食つて骨鯁し、骨が胸中に横はつて上にも下にも通らず、痛み叫ぶ聲が近隣にまで聞え、半月餘に亙つて殆ど死に垂たる有樣だつたとき、ふと張九といふ漁人がそれを聞いて、橄欖を取つて食はせるがよいといつた。時恰もその果がなかつたので、核を研末し、急流水で調へて服すると、遂に骨が下つて癒えた。張九は「我が父老の言ひ傳ひに、橄欖木で魚を取る棹篦を作り、それで魚に觸著すると浮いて出るといふから、それで魚は橄欖を畏れるものだといふことを心得てゐるのだ」といつた』とある。これで橄欖の能く一切の魚鼈の毒を治することが判る

附方　新四。「初生兒の胎毒」小兒が生れ落ちたとき、橄欖一箇を燒き研り、珠砂末五分を和匀し、生脂麻一口を嚼んで吐いた唾でその藥を和し、棗核ほどの大いさに絹で包み、それを兒の口中に置いて一時ほどの間啜はせてから乳を與へる。この藥は腸、胃の穢毒を取下し、兒をして疾を少からしめ、また痘の出ることを稀少ならしめる。（孫氏集效方）「唇が裂けて瘡の生じたるもの」橄欖を炒つて研り、豬脂

で和して塗る。【牙齒の風疳】膿血を出し、蟲のあるには、橄欖を燒いて研り、麝香少量を入れて貼る。(聖惠方)【下部の疳瘡】橄欖を燒いて性を存して研末し、油で調へて敷く。或は孩兒茶等分を加へる。(乾坤生意)

欖仁　【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【唇吻の燥痛には、研り爛らして傅ける】(開寶)

核　【氣味】【甘く濇し、溫にして毒なし】【主治】【磨汁を服すれば、諸魚の骨鯁、及び鱠を食つて積となつたものを治す。又、小兒の痘瘡倒黶を治す。燒き研つて服すれば下血を治す】(時珍)

【附方】　新三。【腸風下血】橄欖核を燈火の上で燒いて性を存して研末し、二錢づつを陳米飮で調へて服す。(仁齋直指方)【陰腎の癩腫】橄欖核、荔枝核、山樝核等分を燒いて性を存して研末し、二錢づつを空心に茴香湯で調へて服す。【耳、足の凍瘡】橄欖核を燒いて研り、油で調へて塗る。(乾坤生意)

木威子（拾遺）

和名　くろかんらん
學名　Canarium Pimela, Koenig.
科名　かんらん科（橄欖科）

【釋名】　未詳。

(一)【集解】　藏器曰く、木威は嶺南の山谷に生ずる。樹は高さ一丈餘、葉は楝葉に似て、子は橄欖のやうで堅く、また棗にも似てゐる。皮を削り去つて粽にして食ふに宜し。

時珍曰く、木威子は橄欖の類である。陳氏の説は顧微の廣州記中に出てゐることだ。而るに梁の元帝の金樓子には『橄欖は、樹の南向に生つたものを橄欖といひ、東向に生つたものを木威といふ』とあるが、これはやはり傳聞の謬説である。

實　【氣味】　【酸く辛し、毒なし】　時珍曰く、按ずるに、廣州記には『苦く澀し』とある。

【主治】　【心中の惡水、水氣】（藏器）

(一) 木村(康)曰く、〔原植物〕Canarium Pimela, Koenig. (Burseraceae)

菴摩勒（唐本）

和名　あんもれ
學名　Phyllanthus Emblica, L.
科名　たかとうだい科（大戟科）

〔校正〕　木部より此に移し入る。

〔釋名〕　**餘甘子**（唐本）　**菴摩落迦果**　藏器曰く、梵書には菴摩勒（あんまろく）、又は摩勒落（まろくらく）迦果（かくわ）と名けてある。その味は初め食つたときは苦く澀いが、良久して更に甘くなる。故に餘甘といつたのだ。

〔集解〕（一）恭曰く、菴摩勒は嶺南の交、廣、愛等の諸州に生ずる。樹の葉は細くして合昏（がふこん）に似てゐる。その花は黄色で、實は李（り）、柰（ない）に似て靑黄色だ。核は圓くして或は六稜、或は七稜があり、その中の仁はやはり藥に入れて用ゐる。

珣曰く、西國に生ずるものは、大小枳橘子（ききつし）のやうな狀態である。

頌曰く、餘甘子は、今は二廣の諸郡、及び西川の戎、瀘の蠻界の山谷にいづれもある。木は高さ一二丈、枝條は甚だ軟く、葉は靑くして細く、密生し、朝開いて暮に斂（をさ）まり、夜合のやうだが葉が微し小さく、春生えて冬凋（しぼ）む。三月花があつて、條（えだ）に

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕あんまろく　ゆかん　Phyllanthus Emblica, L. (Euphorbiaceae)

著いて生じ、粟粒ほどのもので微し黄である。花に隨つて實を結び、莖になつて毎條に二三子が著き、冬になつて熟し、李子のやうな形狀で青白色だ。核に連つて五六瓣を作し、乾けば核がいづれも裂ける。俗間で果子として啖ふ。



〔菴摩勒〕

時珍曰く、餘甘は泉州の山中にもある。その形狀は川楝子のやうで、味は橄欖に類する。やはり蜜漬、鹽藏にし得るものだ。その木は器物に作れる。

按ずるに、陳祈暢の異物志に『餘甘の樹は、葉は夜合、及び槐葉のやう、その枝は柘のやう、その花は黄色だ。その子は圓く、大いさは彈丸ほど、色は微黄で定陶瓜のやうな文理があり、核には五六稜あつて、初め口に入れたばかりには苦澀だが、良久して水を飲むと更に甘くなる。鹽で蒸すが就中美味だ』とあつて、その說は蘇恭、蘇頌兩氏の說と合致するが、臨海異物志に『餘甘子は梭のやう形で、大いさは梅子ほど、その核は兩頭が鋭い。橄

欖と一物にして名を異にするものだ』とある。しかし橄欖の形は長く尖り、餘甘の形は圓くしてやや不同があり、葉の形も異ふ。蓋し二物である。又、蘇恭は、その仁は藥に入れて用ゐられるといつたが、その主治の何病なるかを示してない。やはり果と同功なのかも知れぬ。

實

氣味[三] 〔甘し、寒にして毒なし〕 珣曰く、苦く酸く甘し、微寒にして濇(しよく)する。

主治 〔風虛熱氣〕(唐本) 〔補益し、氣を强くする。鐵粉一斤に合せて用ゐれば、白髮を變じ、老いず。子を取つて壓搾した汁を油に和して頭に塗れば髮を生じ、風痒(ふうやう)を去り、髮を生じて漆の如く黑からしめる〕(藏器) 〔丹石で肺を傷めて上氣欬嗽するに主效がある。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べ、長生する。乳石を服する人は常にこれを食ふが宜し〕(李珣) 〔末にし湯に點(た)てて服すれば金石の毒を解す〕(宗奭) 〔硫黃の毒を解す〕(時珍) 記載は益部方物圖にある。

發明 宗奭曰く、黃金は餘甘を得れば體が柔になる。やはり物類の相感、相伏である。故に能く金石の毒を解するのだといふ。

仁

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕ゆかんノ果實ハ單寧、樹脂(オレオレジン「ミロバラニン」)ヲ、又葉ハ一八%ノ、皮ハ一二・六%ノ單寧ヲ含有ス。(ウ植、六六九)

毗梨勒（唐本草）

和名　はりら
學名　Terminaria Chebula, Retz.
科名　しくんし科（使君子科）

〔校正〕 本部より此に移し入る。

〔釋名〕 **三果** 珣曰く、木は訶梨勒に似て子も相似てゐるが、ただ圓くして毗があるからかく名けたのだ。毗とは臍のことである。



〔毗梨勒〕
——三果——

〔集解〕(一) 恭曰く、毗梨勒は西域、及び南海の諸國、嶺南の交、愛等の州に產する。蠻民間ではこれを三果と呼んでゐる。樹は胡桃に似て、子の形もやはり胡桃に似たものだが、核は訶梨勒に似て圓く短く、稜がない。使用方も同樣である。蠻民間でこれを用ゐて作る漿は甚だ熱である。

實 〔氣味〕(二) 〔苦し、寒にして毒なし〕 珣曰く、味苦くして澀を帶び、微溫に

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Terminalia Chebula, Retz. (Combretaceae) (Myrobalanus chebula Gärtn.)

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕果實ハ二〇—

して毒なし、漿に作れば性熱である。【主治】「風虚熱氣。功は菴摩勒に同じ」（唐本）「腸腹を暖め、一切の冷氣を去る。漿にして鬚髮を染めれば黒色に變ずる」（甄權）「氣を下し、瀉痢を止める」（大明）「燒灰は乾血に有效である」（李珣）

【發明】時珍曰く、毗梨勒は古方には用ゐたことが罕で、ただ千金方の補腎鹿角丸に三果、漿を吞むとし『無い場合には酒をこれに代へる』とある　これで見ると、この果はやはり餘甘の類であるが、性がやや温、濇なるものだ。

【附方】新一。「大風で髮の脱つるもの」〔三〕毗梨勒の燒灰を頻りに擦るが有效である。（聖惠方）

五斂子（綱目）

和名　これんし
學名　Averrhoa Carambola, L.
科名　かたばみ科（酢漿草科）

【釋名】五稜子（桂海志）　陽桃　時珍曰く、按ずるに、嵆含の草木狀に『南方の地では稜を斂と呼ぶ。故にかかる名を呼ぶのだ』とある。

〔一〕【集解】時珍曰く、五斂子は嶺南、及び閩中に産し、閩地方では陽桃と呼ぶ。

四〇%ノ單寧ヲ含ミ、エラク酸、沒食子酸、ルテオ酸、ヒエブリン酸等ヲ出ス。種子ハ脂肪油（ヒエブラ油）ヲ含ム。樹皮ハ二七—三五%ノ單寧ヲ含ム。而シテ葉ノ蟲癭モ鞣劑トナシ得。（ウ植、八二二）

〔三〕毗梨勒ノ次ニ本書ノ目錄ニハ沒離梨ガアルガ本文ニハ脱シテ居ル、此レハ未詳ノ品デアル。

〔一〕木村（康）曰ク、〔原植物〕これんし。Averrhoa Carambola, L. (Geraniaceae)

その大いさは拳ほど、その色は青黄にして潤緑である。形は甚だ奇異なもので、その狀態は農家で使ふ(二)碌碡(ろくぞく)のやうで、上に五稜が刻んだやうにあつて劍脊の形が起ち、



〔五斂子〕
——羊桃——

皮、肉は脆軟(ぜいなん)である。その味は初は酸く久して甘くなる。その核は柰のやうで、五月に熟する。一本の樹から數石(こく)收れるもので、十月に再び熟する。蜜で漬けると甘く酢くして美味である。俗間ではまた晒し乾して果として食ふ。又、三廉子(さんれんし)といふがあるが、蓋しこれもこの物の類であつて、陳祈暢の異物志に『三廉は熙(き)安の諸郡に產する。南方の地では稜を廉と發音するのだ。三廉とはいふが、或は五六稜のものもある。食へば汁多くして味甘く、且つ酸い。就中さまざまの果物と共に參(まじ)へて食ふがよし』とある。

實(三) 〔氣味〕【酸く甘し、濇、平にして毒なし】 〔主治〕【風熱に津を生じ、渇を止める】(時珍)

(二) 碌碡、一ニ磟碡、磈碡ニ作ル。或ハ曳轉シテ平圃ヲ壓シ、或ハ禾麥ヲ碾ルニ用ユル農具ニシテ、石ニテ圓筒ヲ作リ、中ニ軸ヲ貫キ、外廓ニ木匡ヲ施セルモノナリ。

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕果實ハ果肉中ニ五・六%ノ葡萄糖、三・七%ノ果糖、〇・八二%ノ蔗糖ヲ含有ス。(ウ植、五九二)

五子實（綱目）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

〔集解〕(一) 時珍曰く、五子樹は今は潮州にある。按ずるに、裴淵の廣州記に『五子實とは、大いさ梨ほどで內に五核があるから名けたものだ』とある。

實〔氣味〕【甘し、溫にして毒なし】〔主治〕【霍亂、金瘡にこれを食ふが宜し】（時珍）潮州志。

榧實（別錄下品）

和名　かや
學名　Torreya nucifera, Sieb. et Zucc.
科名　いちゐ科

〔校正〕時珍曰く、別錄には木部に榧實があり、また桃華があり、神農本草には魚蟲部に柀子がある。宋の開寶本草では柀子を退けて有名未用に入れたが、本書では蘇恭の說に據つて下記に合併した。

(一) 木村（康）曰ク、〔原植物〕不明

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕かや、かへ Torreya nucifera, S. et Z. (Coniferae)

釋名　**柀子**　音は彼（ヒ）である。（神農）　**赤果**（日用）　**玉榧**（日用）　**玉山果**

時珍曰く、柀は棑にも書く。その木は文木と名け、斐然として章采（しやうさい）があるところから榧（ひ）と謂ふ。信州玉山縣のものを佳しとする。故に東坡の詩に『彼の美なる玉山果、粲（さん）として金盤に實てり』とある。柀子なる名稱に



〔榧實〕
——野杉——

就ては下文を見よ。瑞曰く、地方人は赤果と呼び、また玉榧ともいふ。

集解（一）　別錄に曰く、榧實は永昌に生ずる。彼子は永昌の山谷に生ずる。弘景曰く、彼子、また羆子（ひし）と名づける。從來用ゐたことのないもので、古今の諸醫も一向にこれを記述してゐない。榧實は東陽の諸郡に產する。恭曰く、彼子とあるは木に從つて柀と書くべきである。誤つて蟲部に入れてあるが、爾雅に『柀、また煔（てん）と名く。その葉は杉に似て、木は栢のやうで微し軟い。子

を榧子と名ける』とあつて、果部に入るべきものである。又、榧實に註して云く、卽ち蟲部の彼子である。その木は太さ幾抱へ、高さ數仭あり、その葉は杉に似て、その木は柏のやう、その理は松に似て肌が細く軟く、器物を作る材として用ゐられる。

宗奭曰く、榧實は大いさ橄欖ほど、殼の色は紫褐で脆い。その中の子には一重の黑粗衣があり、その仁は黃白色だ。嚼めば久しくして漸次に甘美になる

藏器曰く、棑華とは榧子の華のことであつて、棑は榧と同じである。榧は、樹は杉に似て、子は長い檳榔のやう、食へば肥美である。本經には蟲部に彼子があり、陶氏は復た木部に榧實、棑華を揭げたが、いづれも一物である。

頌曰く、榧には粗榧なる一種があつて、その木は榧と似てゐるが、ただ理が粗く、色が赤いだけだ。その子はやや肥大であつて僅に圓く、尖らない。神農本草に彼子とあるは粗榧のことだ。

時珍曰く、榧は深山中に生ずる。一般に野杉と呼ぶものだ。按ずるに、羅願の爾雅翼に『柀は杉に似てゐるが杉とは異ふ。柀には美實があつて木に文采があり、そ

の木は桐に似て葉は杉に似てゐる。絶だ成長し難いものだ。木には牝牡があつて、牡に華があつて牝に實が生る。冬期に黄色の圓い花を開き、結實の大小は棗ほどで、その核は長くして橄欖のやう、核には尖つたものと尖らぬものとあり、稜がなくして殻が薄く、黄白色である。その仁は生でも啖へればまた焙じて收藏する。小さくして心の實せるものを佳しとする。一本の樹で數十斛を下らぬ』とある。陶氏は榧子を識らなかつたが、ただ蘇恭が能くその一物なることを明にした。

榧實（別錄）

［氣　味］(二)【甘し、平、濇にして毒なし】 瑞曰く、性熱である。鵞肉と共に食へば斷節風を生じ、また人をして上壅せしめる。火氣を忌む。

時珍曰く、按ずるに、物類相感志に『榧で素羹を煮れば味が更に甜美になる。猪脂で榧を炒れば黑皮が自ら脱ちる。榧子と甘蔗と共に食へばその渣が自ら軟になる』とあり、又『榧子皮は菉豆と反し、能く人を殺す』といつてある。

［主　治］【常に食すれば五痔を治し、三蟲、蠱毒、鬼疰、惡毒を去る】(別錄) 【これを食へば寸白蟲を療ず】(弘景) 【穀を消し、筋骨を助け、營衛を行らし、目を明にし、身を輕くし、人をして能く食せしめる。一二升まで多食してもやはり病を發せ

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕かやノ種子ハ多量ノ脂肪油(榧油)ヲ含ム。脂肪油ハパルミチン酸及ステアリン酸九%、油酸一九%、リノール酸(又ハソノイソメア)七二%ヨリ成ル。材ハキシラン二・七%ヲ含有ス。(ウ植、(三)葉ハ精油ヲ含有シソノ主成分ハリモーネン(約六〇%)ニシテ其他カムフエン、ピネン、カヂネン、トレコ

ぬ】（孟詵）【多食すれば腸を滑する。五痔の人に宜し】（宗奭）【咳嗽、白濁を治し、陽道を助ける】（生生編）

柀子（本經）　舊本には彼と書いてある。

【氣　味】【甘し、溫にして毒あり】

【主　治】【腹中の邪氣。三蟲、蛇螫、蠱毒、鬼疰、伏尸を去る】（本經）

【發　明】震亨曰く、榧子は肺家の果であつて、火で炒つて食へば香酥にして甘美であるが、但し多食すれば火を引いて肺に入り、大腸に傷を受けるものだ。原曰く、榧子は腹間の大小蟲を殺す。小兒の黃瘦し、蟲積あるものはこれを食ふが宜し。蘇東坡の詩に『三彭蟲を驅除し、我が心腹の疾を已す』とあるはそのことだ。

時珍曰く、榧實、柀子の治療上の效果は同一である。一物として取扱ふべきものなることは疑ない。但だ本經に『柀子有毒』とあつて同じくない點があるやうだが、それはやはりその蟲、蠱を殺す功能があるからのことである。汪穎は粗榧を柀子だといつたが、結局は一類のものであつて、甚だ相違いものではないのである。

【附　方】舊一、新五。【寸白蟲】詵曰く、日に榧子七顆を食つて七日に滿つれば、

ールヲ含有ス。〔篠崎英之助―工化、二五（大、一一）七六八〕〔藥用〕榧實ハ十二指腸蟲驅除ノ效アリ〔安藤一郎―治療及處方二〇號〕トイヒ又ナシ〔武藤昌知、垣内弘―治療及處方、六（大、一四）三六八〕トイフ。新藥カヤノールハ榧實ヨリ精製セル油ニシテ無害ナル十二指腸蟲驅除藥トス。民間枝葉ヲ燻ベテ蚊遣リニ用フ。（邦藥植、三五六）

蟲はみな化して水となる。○外臺秘要では、榧子一百箇を皮を去り、火で燃いて喫ふ。一夜經てば蟲が消けて下る。胃弱の者は五十箇を喫ふ。【好んで茶葉を食ふもの】顏色の黃なるには、毎日榧子七箇を食ひ、癒えるを度とする。(楊起簡便方)【髮を落ちなくする】榧子三箇、胡桃二箇、側栢葉一兩を擣いて雪水に浸し、それで頭髮を梳れば永く落ちずして且つ潤ふ。(聖惠方)【卒に血を吐出するもの】先づ蒸餠二三箇を食ひ、榧子を末にして三錢づつを白湯で服す。一日三服。(聖濟總錄)【尸咽痛痒】言語を出し得ぬには、榧實半兩、蕪荑一兩、杏仁、桂各半兩を末にし、蜜で彈子大の丸にして含み嚥む。(聖濟總錄)

排華(別錄) 春期に生じたものを採る。藏器曰く、卽ち榧子の華である。【氣味】【苦し】【主治】【水氣。赤蟲を去る。人をして色を好からしめる。久しく服してはならぬ】(別錄)

海松子（宋開寶）

和名 テウセンマツ
學名 Pinus koraiensis, Sieb. et Zucc.
科名 まつ科(松杉科)

新羅松子

【釋名】

【集解】（一）〇志曰く、海松子は、形狀は小栗のやうで三角あり、その中の仁は香美なものだ。東夷では果として食ひ、また麻腐に代へて食ふ。中國の松子とは同じくない。

〇炳曰く、五粒松は一叢に五葉があり、釵ほどである。道家ではこれを服して穀食を絕つ。子は巴豆ほどのもので、新羅から往往これを進獻する。

〇頌曰く、五粒の字は五鬣と書くべきで、發音の傳訛である。五鬣が一叢をなし、或は二鬣、七鬣のものもある。松であつて、歲久く經てば實が繁生する。中國の地にもあるけれども、小さいので國境外部のものの佳好なるに及ばない。

〇瑞曰く、松子には、南松、北松があり、華陰松は形が小さくして殼が薄く、斑があり、極めて香しい。新羅のものは肉が甚だ香美である。



〔海松子〕
——五鬣子——

（一）木村（康）曰ク、（原植物）てうせんまつ、てうせんごえふ Pinus Koraiensis, S. et Z. (Coniferae)

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕種仁ハ水分一一・二〇リ、乾燥物質中粗脂肪七三・八八、粗蛋白一四・七八、灰分二・五六ヲ含有ス。（ウ植、二七）蛋白質ハ加水分解ニヨリアルギニン、ヒスチヂン、リジン、チロジン、ロイチン、グルタミン酸等ノアミノ酸

○○時珍曰く、海松子は遼東、及び雲南に産する。その樹は中國の松樹と同じだが、ただ五葉一叢のものだ。毬内に結ぶ子で、大いさ巴豆ほどだが、三稜があつて一頭が尖つてゐる。久しく收藏してもやはり油がある。馬志は小栗に似てゐるといつたが、甚だその實物の實狀と違つてゐる。中國の松子は大いさ栢子ほどで、やはり藥用になるが、果として食ふには堪へない。詳細は木部松の條下を見よ。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『予は五鬣松を二株植ゑたが、根が碗ほどの太さになつた。結實は新羅、南詔のものと差異がない。その三鬣のものをば俗に孔雀松と呼ぶ。また七鬣のものもある。或は三鍼のものを栝子松、五鍼のものを松子松といふ』とある

仁（二）【氣味】【甘し、小溫にして毒なし】○珣曰く、新羅松子は甘美にして大溫である。皮を去つて食ふと甚だ香しく、雲南松子と同じくない。雲南松子は巴豆に似てその味が及ばない。卑古國の偏桃仁と似てゐる。多く食へば熱毒を發する

○○時珍曰く、按ずるに、醫說に「胡羊肉を食つて松子を食つてはならぬ」とあるが、物類相感志に『凡そ雜色の羊肉は松子を入れば毒がない』とあり、その說の異なるは如何なるわけであらうか

チ生ズ。(邦藥植、三五四)
〔藥用〕海松子ハ滋養强壯藥トス。新藥プロチモールハソノ種子ヨリ抽出セル成分チ特殊ノ脂肪油ニ溶解セシメタルモノニシテ癌疾患ニ效アリトイフ。(邦藥植、三五四)

【主　治】【骨節風、頭眩。死肌を去り、白髮を變じ、水氣を散じ、五臟を潤ほし、饑ゑず】(開寶)【風痺、寒氣を逐ひ、虛羸少氣に不足を補し、皮膚を潤ほし、五臟を肥す】(別錄)【諸風に主效があり、腸、胃を溫め、久しく服すれば身を輕くし、天年を延べ、老いず】(李珣)【肺を潤ほし、燥結咳嗽を治す】(時珍)【栢子仁と共にして虛祕を治す】(宗奭)

【發　明】時珍曰く、服食家が用ゐる松子はみな海松子であつて、中國の松子は肌が細かくして力が薄く、ただ藥用になるだけだといつてゐる。按ずるに、列僊傳に『偓佺は好んで松實を食ひ、體毛數寸あつて、走つて奔馬に追ひつけた』とあり、又『犢子は少くして黑山に在り、松子、茯苓を食ひ、壽數百歲であつた』とあり、又『赤松子は好んで松實、天門冬、石脂を食ひ、齒が落ちて更生し、髮が落ちて更に出た。終焉の地は判らない』とある。いづれもこの松子を指したものだ。

【附　方】舊一、新三。【松子を服する法】七月に松實を取る。時期が過ぎては落ちて貯藏することが困難になる。木皮を去つて擣いて膏のやうにして取收め、一日三回、雞子大ほどづつを酒で調へて服す。百日にして身が輕くなり、三百日にして三

百里を歩行し得、穀食を絶てるやうになる。久しく服すれば神仙となる。渇するときは水を飲む。また錬過した松脂と共に服するもよし。（聖惠方）【肺燥欬嗽】蘇遊鳳髓湯――松子仁一兩、胡桃仁二兩を膏に研り、熟蜜半兩を和して取收め、二錢づつを食後に沸湯に點てて服す。（外臺祕要）【小兒の寒嗽】或は壅喘するには、松子仁五箇、百部を炒り、麻黃と各三分、杏仁四十箇を皮、尖を去り、少量の水でやや煮て三五沸し、白砂糖を化したもので芡子大の丸にし、毎食後に十丸を含み化す。大いに妙である。（錢乙小兒方）【大便虛祕】松子仁、栢子仁、麻子仁等分を泥に研り、溶した白蠟で和して梧子大の丸にし、五十丸づつを黃芪湯で服す。（寇宗奭）

檳榔（別錄中品）

和名　びんらうじ
學名　Areca Catechu, L.
科名　しゆろ科（椶櫚科）

【校正】木部より此に移し入る。

【釋名】**賓門**（李當之藥對）**仁頻**　音は賓（ヒン）である。**洗瘴丹**　時珍曰く、賓と郞とはいづれも貴客の稱であつて、嵇含の南方草木狀に「交、廣では、一般に

貴い勝れた族客には、必ず先づこの果を差出すことになつてゐて、どうかしてこの果を供へないことがあると、甚だ禮を盡さぬものとして感情を害する」とあるところを見ると、檳榔なる名稱の意味は蓋し此に取つたものであらう　雷斅の炮炙論に「尖なるを檳といひ、圓なるを榔といふ」とあるが、やはりこじつけらしい。又、顏師古が上林賦に註して「仁頻、卽ち檳榔なり」とある。

○詵曰く、閩中では橄欖子と呼ぶ。

〔二〕集　解　別錄に曰く、檳榔は南海に生ずる。

○弘景曰く、この物には三四種あつて、交州に產するものは形が小さくして味が甘く、廣州以南のものは形が大きくして味が澀い。又、大なるもので豬檳榔と名けるものがある。いづれも藥となる。小なるものは蒳子と名け、俗に檳榔孫と名ける。やはり食へるものだ。

○恭曰く、交州、愛州、及び崑崙に生ずる。

○頌曰く、今は嶺外の州郡にいづれもある。木は太さ桄榔ほどで、高さ五七丈、正直にして枝なく、皮は青桐に似て節は桂枝に似てゐる　葉は木の頂顚に生じて大いさ

〔一〕木村(康)曰ク、(原植物)びんらうじ　びんらう　Areca Catechu, Willd. (Palmae)
〔生藥〕檳榔子ハ古ク漢藥ニ於テ收斂藥トシテ應用セラレ又馬來人ノ間ニハ咀嚼性嗜好品トシテ檳榔子ノ切片、阿仙藥及石灰チきんま (Piper Betle, L.)ノ葉ノ一片ニ包ミ口中ニ啣ミ咀嚼スルノ習慣ア

リ。歐洲ニ於テハ千八百六十年ヨリ驅蟲藥及止瀉藥トシテ用ヒラル。檳榔子ハ馬來群島ニ產シ熱帶亞細亞殊ニ其東南部ニ汎ク培植セラルびんらうじノ種子ニシテ纖維性ノ果肉（漢藥ニ所謂大腹皮）ニ掩ハレ之ヲ剝離シテ出ダス。（生藥學）

楯頭ほどあり、また芭蕉の葉に似てゐる。その實は葉の中から房をなして出て、旁に棘針のやうな刺があり、重疊して生るもので、その下の一房には數百の實がある。



〔檳榔〕

その實は雞子のやうな形狀で、みな皮殼がある。春生つて夏になると熟し、肉は殼中に滿ちて正白色である。蘇恭は『その肉は極めて爛れ易く、數日を經ない。今北方の地に來てゐるものは、いづれも豫め灰で煮熟し、焙じ熏じて乾かしてあるから、それで久しきに亙つて保存し得るのである。小さくして味甘きものを山檳榔と名け、大きくして味澀く、核も大なるものを豬檳榔と名け、最小なるものを蒳子と名ける』といひ、雷氏は『尖長にして紫文あるものを檳と名け、圓く大きくして矮なるものを榔と名ける。榔は力が大きいが檳は力が小さい』といつたが、今の醫家はやはり詳細な區別はつけず、ただ雞心のやうな狀態で正穩な、心が

虛せず、破つて見て錦文をなせるものを以て佳しとするだけだ　嶺南地方でこれを噉つて果食に當てるそのわけは、南方の地は濕であつて、これを食はねば瘴癘を祛けられぬからだといふ。生で食へばその味が苦澁であるが、扶留藤と瓦屋子灰とを得て共に咀嚼すると柔滑で甘美になる。劉恂の嶺表錄に『眞檳榔は舶上から來る。現に交、廣に生ずるものはみな大腹子であつて、彼の地では悉く檳榔と呼んでゐる』とあるが、或は、檳榔は眞物は得難いもので、現に商人の賣つてゐるものはみな大腹檳榔だ。檳榔と似てゐるが、ただ莖、葉、幹に小異があるだけで、皮を連ねて取收めるものだといふ。

◯◯時珍曰く、檳榔の樹は、初生には筍竿のやうに積硬で、莖を引いて直上し、莖、幹は頗る桄榔、椰子に似てゐるが、節があつて旁に枝がなく、柯條は心から生え、端頂に甘蕉のやうな葉があつて條派し開破し、風が吹くと羽扇で天空を掃ふやうな狀態である。三月に葉の中から一房が腫起し、それが自ら拆裂して穗を出し、その穗には大いさ桃李ほどの實が凡そ數百顆生り、また刺がその下に重累して生えて護衞してゐる。その實は五月に成熟するもので、その皮を剝ぎ去り、その肉を煮て乾

す。皮はみな筋絲で、大腹子と同じである。按ずるに、漢の喩益期が韓康伯に與へた牋に

檳榔子は既に常木に非ず、亦た特に異り。大なる者は三圍、高き者は九丈。葉は樹端に叢り、房は葉下に棲し、華は房中に秀で、子は房外に結す。その穗を擢くは黍に似て、その實を綴るは穀に似たり。その皮は桐に似て厚く、その節は竹に似て概なり。その內空に、その外勁く、その屈するや伏虹の如く、その申ぶるや縋繩の如く、本大ならず、末小ならず、上傾かず、下斜ならず、調直亭亭として千百一の如し。その林に歩すれば則ち寥朗たり、その陰に芘すれば蕭條たり。信に長吟遠想す可し。但だ性霜に耐へず、比植するを得ず。必ず當に遐に海南の遼然たるに樹ゆべし。萬里長者の目に遇はず、人をして恨深からしむ。

とある。又、竺法眞の羅山疏には『山檳榔は一名蒳子といふ。日南に生じ、樹は栟櫚に似て小さく、檳榔と同じ狀態で、一叢に十餘幹あり、一幹に十餘房あり、一房に數百子あつて、子の長さ一寸餘、五月にこれを採る。味は苦甘に近い』とある。

これで觀ると、山檳榔、即ち蒳子、豬檳榔、即ち大腹子であつて、蘇頌が、味甘きを山檳榔とし、澀きを豬檳榔としたのは明確を缺くやうである。

檳榔子　修治　斅曰く、頭圓くして矮（二）毗あるものを榔といひ、形尖つて紫文あるものを檳といふ。檳は力小にして榔は力大である。凡そ使用するには、白檳、及び形が正しく坐りの好きもので、心が堅く錦文あるものを用うるを妙とする。半白、半黑、幷に心の虛せるものは藥用に入れない。刀で底を刮り去つて細かに切る。火に當ててはならぬ。恐らく力が無くなるものだ。若し熟して使用するならば使用せぬがましである。

時珍曰く、近時の方藥には、やはり火で煨き焙じて用ゐるものがある。然し初生の白檳榔は、必ずその產地に就いてこそ手に入るもので、產地以外で手に入るものは必ず煮薰を經てゐる。いかで生のものを手に入れ得やうか。又、檳榔は生で食ふには必ず扶留藤、古賁灰を使とし、相合して嚼んで紅水一口を吐き去れば滑美で澀くなく、氣を下し、食物を消化する。この三物は相去ること甚だ遠く、物として各異るものだが、相成相合すること此の如きはまた奇異なる現象である。俗に檳榔を命

（二）毗ハ臍デアル。

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕びんらうじノ種子(檳榔子)ハアルカロイド(アレコリン、アレカイン、アレカイヂン、グバチン、ヒヨリン、プバチン類似ノアルカロイド等)脂肪、揮發油、赤色素、ゴム質、沒食子酸等ヲ含有ス。其他胚乳中ニハ蔗糖、轉化糖、マンナンガラクタン、脂肪油(ラウリン約五〇%、ミリスチン約二一%、オレイン二九%)其他パルミチン、ステアリン、カプリン、カプリール酸及カプロン酸ノグリセリド等ヲ含ム。(ウ植、一二三)

賴扶留といふはこれがためである。古賁灰とは蠣蚌灰のことで、賁とあるは蚌の字の訛である。瓦屋子灰もやはり用ゐられる。

〔三〕**氣味** 【苦く辛し、溫、澀にして毒なし】甄權曰く、味甘し、大寒なり。大明曰く、味澀し。弘景曰く、交州のものは味甘し、廣州のものは味澀し。珣曰く、白きものは味甘し、赤きものは味苦し。元素曰く、味辛くして苦し。純陽である。毒なし。詵曰く、多く食へばやはり發熱する。

主治 【穀を消し、水を逐ひ、痰澼を除き、三蟲、伏尸、寸白を殺す】(別錄)【腹脹を治す。生で擣いて末にして服すれば水穀道を利す。瘡に傅ければ肌肉を生じ、痛を止める。燒灰を口吻白瘡に傅ける】(蘇恭)【五臟、六腑の壅滯を宣利し、胸中の氣を破り、水腫を下し、心痛、積聚を治す】(甄權)【一切の風を除き、一切の氣を下し、關節を通じ、九竅を利し、五勞、七傷を補し、脾を健にし、中を調へ、煩を除き、癥結を破る】(大明)【賁豚、膀胱の諸氣、五膈氣、風冷氣、脚氣、宿食不消に主效がある】(李珣)【衝脈の病となつて氣逆、裏急するを治す】(好古)【瀉痢後重、心腹諸痛、大小便の氣祕、痰氣喘急を治し、諸瘧を療じ、瘴癘を禦ぐ】(時珍)

發明

元素曰く、檳榔は、味は厚く、氣は輕く、沈にして降る。陰中の陽である。苦は以て滯を破り、辛は以て邪を散じ、胸中至高の氣を泄してそれを下行せしめ、性鐵石の沈重なるが如く、能く諸藥を墜して下極に至るものだ。故に諸氣、後重を治して神の如きものである。

時珍曰く、按ずるに、羅大經の鶴林玉露に『嶺南地方では、檳榔を茶の代にして瘴を禦ぐ その功に四あり、一には、醒めたるには能くこれをして醉はしめる。——蓋しこれを食ふこと久しければ、熏然として酒を飲んだやうに頰が赤くなるので、蘇東坡の所謂「紅潮頰に登つて檳榔に醉ふ」である。——二には、醉へるには能くこれをして醒めしめる。——蓋し酒後にこれを嚼めば氣を寛にし、痰を下し、餘醒が頓に解するので、朱晦庵の所謂「檳榔收得するは祛痰の爲めなり」である。——三には、饑ゑたるには能くこれをして飽かしめる。四には、飽けるには能くこれをして饑ゑしめる』とあるが、蓋し空腹にこれを食へば充然として飽けるが如く氣盛し、飽きて後にこれを食へば飲食したものが快然として消化し易いのである。又、賦性が疏通して氣を洩さず、禀味が嚴正にして更に餘味あるもので、この德あるが故に

〔藥理〕檳榔子アルカロイド中著シキ生理作用ヲ有スルモノハアレコリンノミナリ。アレコリンハ其生理作用ピロカルピン及ニコチンニ類シ其中樞神經系及末梢臟器ニ作用略々兩者ノ中間ニ位ス。（井上力之助—臺醫、一三八號）

〔藥用〕檳榔子ハ絛蟲驅除ノ效アリ（獨局方）。一回用量四—五瓦。醫療上ニハ往時赤痢等ニ對スル止瀉藥トシテ用ヒラレタレドモ今ハ行ハレズ現今ハ專ラ家畜ノ蛔蟲驅除劑トナス。又同樣ノ目的ニ供用セラルルアレコリン（獨逸藥局方ニハブロム水素酸アレコリンヲ揭グ）ヲ製スルノ原料タリ。其主要

ナル應用ハ南洋土人ノ間ニ行ハルル所ノ咀嚼料トナスニ在リ。(生藥學)又收斂藥トシテ齒磨粉ニ加フルコトアリ。(準局方、七五)

(四) 嶠南ハ嶺南ニ同ジ。

この功があるのだ。又、按ずるに、吳興の章傑の瘴說に『嶺表の俗として多く檳榔を食ひ、日に十數に至る』とあるが、そもそも瘴癘の發病するのは、大體飲食の過度で、氣痞、積結するが原因をなすものだ。檳榔は最も能く氣を下し、食を消し、痰を去るところから、一般に近き利に狃れて遠き患に闇いのである。かの(四)嶠南の地は熱帶で四季共に汗を出し、人は多く黄痩してゐて、これを食へば臟器が疏洩するのであるが、一旦瘴を病めば敢て發散、攻下せぬのである。いかで盡く氣候の致す所といへようぞ。檳榔は蓋し亦た患と爲るであらうが、それには氣が付かずにゐるのである。又、東陽の盧和は『閩廣地方では、檳榔を常服して能く瘴を祛るといつてゐる。瘴があつたとき服するは差閊ないが、瘴なくしてこれを服するは、寧ろ正氣を損じ、門を開いて寇を延くの禍がないだらうか』といつた。南方では一般に喜んでこの果を食ふから、竝に備に諸說を參考してその功過を揭げて置く。又、朱晦庵の檳榔の詩に『憶ふ昔南遊の日、初て嘗て面に紅を發せることを。藥囊用あるを知る、茗盌詎ぞ能く同うせん。蠲疾に殊效を收め、修眞に異功を錄す。三彭如し避けずんば、糜爛し亡して中に非ず』とあつて、やはりその疾を治し蟲を殺すの功に

は與したが、その茶の代りにするの習俗には不潔であつた。

〔附　方〕　舊十三、新十四。【痰涎の害をなすもの】檳榔を末にし、一錢づつを白湯で服す。（御藥院方）【痰水を嘔吐するもの】白檳榔一顆を煨熟し、橘皮二錢半を炙いて末にし、水一盞で半盞に煎じて溫服する。（千金）【醋心吐水】檳榔四兩、橘皮一兩を末にし、方寸匕づつを空心に生蜜湯で調へて服す。（梅師方）【傷寒痞滿】陰病で下すことが早かつたために痞となり、按じて見ると虛軟で痛まぬには、檳榔、枳實等分を末にし、二錢づつを黃連の煎湯で服す。（宣明方）【傷寒結胸】已に汗、下して後の者には、檳榔二兩を酒二盞で一盞に煎じ、二回に分服する。（龐安時傷寒論）【蛕厥腹痛】方は上に同じ。【心、脾の痛むもの】雞心檳榔、高良薑各一錢半、陳米百粒を共に水で煎じて服す。（直指）【膀胱諸氣】檳榔十二箇を、一は生、一は熟して末にし、酒で煎じて服するが良し。これは太醫秦鳴鶴の方である。（海藥本草）【本臟の氣痛】雞心檳榔を小便で半箇だけ磨つて服す。或は熱酒で末一錢を調へて服す。（斗門方）【腰重くして痛むもの】檳榔を末にし、酒で一錢を服す。（斗門方）【脚氣壅痛】沙牛尿一盞で檳榔一箇を磨り、空心に暖服する。（梅師脚氣論）【脚氣衝心】悶亂して人事不

省なるには、白檳榔十二箇を末にして二服に分け、空心に暖めた小便五合で調へて服す。一日二服。或は薑汁、温酒を入れて共に服す。(廣利)【脚氣脹滿】冷でもなく、熱でもなく、或は老人、弱き人のこれを病むには、檳榔仁を末にし、檳榔殼の煎汁、或は茶飲、蘇湯、或は豉汁で調へて二錢を服す。甚だ利す。(外臺祕要)【乾霍亂病】心腹脹痛し、吐せず、利せず、煩悶して死せんとするには、檳榔末五錢、童子小便半盞、水一盞を煎服する(聖濟總錄)【大腸濕閟】腸、胃に濕があり、大便の閟塞するには、大檳榔一箇を麥門冬の煎湯で汁に磨つて温服する。或は蜜湯で末二錢を調へて服するもよし(普濟)【大、小便閟】檳榔を末にし、二錢を蜜湯で調へて服す。或は童尿で葱白と共に煎じて服するも良し(普濟方)【小便淋痛】麪で煨いた檳榔、赤芍藥各半兩を末にし、毎服三錢に燈心を入れて水で煎じ、空心に服す。一日二回。(十便良方)【血淋で痛むもの】檳榔一箇を麥門冬の煎湯で細かに磨り、その濃汁一盞を頓に熱して空心に服す。一日二回。【蟲痔で裏急するもの】檳榔を末にし、毎日空心に白湯で二錢を調へて服す。【寸白蟲病】檳榔十四箇を末にし、先づ水二升半で檳榔皮を煮て一升に煮取り、空心にそれで末方寸匕を調へて服す。日を經て蟲が

盡く出る　なほ出盡きぬときは再服し、盡くるを度とする。(千金方)【諸蟲の臟に在るもの】久しく瘥えぬには、檳榔半兩を炮いて末にし、毎服二錢を葱、蜜の煎湯で調へて(五)一錢を服す(聖惠方)【金瘡惡心】白檳榔四兩、橘皮一兩を末にし、二錢づつを空心に生蜜湯で服す(聖惠方)【丹の臍より起るもの】檳榔末を醋で調へて傅ける。(本事方)【小兒の頭瘡】水に檳榔を磨つて晒して粉を取り、生油で和して塗る。(聖惠方)【口吻に生じた瘡】檳榔を燒いて研り、輕粉末を入れて傅けるが良し。【聤耳の膿の出るもの】檳榔末を吹く。(鮑氏方)

大腹子（宋開寶）

和名　だいふくし
學名　Areca Dicksonii, Roxb.
科名　しゆろ科(椶櫚科)

【校正】木部より此に移し入る。

【釋名】大腹檳榔(圖經)　豬檳榔　時珍曰く、大腹とは形を以て名けたもので、雞心檳榔と區別するためである。

(一)【集解】志曰く、大腹は南海に生ずる。諸國に出す所のものは、檳榔と似てゐ

(五) 一錢ノ二字剩字ナルガ如シ。

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Areca Di-

cksonii, Roxb. (Palmae)
〔備考〕生藥ニ所謂大腹皮ハ檳榔子(Areca Catechu ノ種子)ノ纖維性ノ果肉ヲ言フ。(生藥學)

るが、莖、葉、根、幹に小異がある。

弘景曰く、陽に向ふものを檳榔といひ、陰に向ふものを大腹といふ。

時珍曰く、大腹子は嶺南、滇南に産する。卽ち檳榔中の一種であつて、腹が大きく形が扁くして味の澀いものだ。檳榔のやうに尖長で味が良くないだけであつて、所謂豬檳榔といふはこの物である。蓋しこれも産地に因る差異である。今は一般に甚しき區別はつけてない。陶氏が陰陽で分けた說はやはり臆見である。按ずるに、劉珣の嶺表錄に『交、廣に生ずるものは舶來する檳榔とは異ひ、みな大腹子である。彼の地では悉く檳榔と呼んで、嫩いときから老いるまで實を採つて喫ひ、扶留藤、瓦屋灰と共に食つてそれで瘴癘を祛ける。その皮を取收めて藥に入れるが、皮は外部は色黑く、內部はみな筋絲で椰子の皮のやうだ』とあり、又、雲南記には『大腹檳榔は枝每に二三百顆ある。青い時に剖いて一片を蔞葉、及び蛤粉で卷き和して食へば澀味が減ずる』とある。この二說を觀ると、大腹子と檳榔とはいづれも通用し得るもので、ただ力が檳榔に比してやや劣るだけのものだ。

大腹子　〔氣　味〕【辛く澀し、溫にして毒なし】〔主　治〕【檳榔と同功であ

る】（時珍）

大腹皮　［修治］　思邈曰く、鴆鳥は多く檳榔樹上に集るものだ。凡そ使用するには、檳榔皮を用ゐ、先づ酒で洗ふべきもので、後に大豆汁で再び洗ひ、晒し乾し、灰火に入れて燒煨し、切つて用ゐる。

［氣味］【辛し、微溫にして毒なし】［主治］【冷熱氣の心腹を攻むるもの、大腸蠱毒、痰膈醋心、いづれも薑、鹽と共に煎じ、疏氣の藥に入れて用ゐるが良し】（開寶）【一切の氣を下し、霍亂を止め、大、小腸を通じ、脾を健にし、胃を開き、中を調へる】（大明）【逆氣を降し、肌膚中の水氣浮腫、脚氣壅逆、瘴瘧痞滿、胎氣惡阻、脹悶を消す】（時珍）

［附方］　新二。【漏瘡惡穢】大腹皮の煎湯で洗ふ（直指）【烏癩風瘡】大腹子の生のもの、或は乾いたものを全皮を連ねたまま傷動せずに酒一升に浸し、慢火で熬り乾して末にし、臘豬脂で和して傅ける。（聖濟總錄）

椰子（宋開寶）

和名　やし
學名　Cocos nucifera, L.
科名　しゆろ科（棕櫚科）

【校正】　木部より此に移し入る。

【釋名】　**越王頭**（綱目）　**胥餘**　時珍曰く、按ずるに、嵇含の南方草木狀に『傳說には、林邑王が越王に怨があつて、刺客を放つて越王の醉ひに乘じてその首を取り、それを樹に懸けたのが化して椰子となつたもので、その核には今でもやはり兩眼がある。故に俗に越王頭と呼ぶのであつて、それでその漿がやはり酒のやうなのだといふ』とある。この說はでたらめだが、俗間には口碑として實しやかに傳へられ



〔椰子〕

てゐる。南方の地ではその君長を稱して爺といふところを見ると、椰なる名稱は蓋し爺の意味を取つたものであらう。相如の上林賦に胥餘と書いてあり、或は胥耶と書く。

〔集解〕(一) 志曰く、椰子は安南に生ずる。樹は棕櫚のやうなもので、子中にある漿を飲むと醉ふものだ。

頌曰く、椰子は嶺南の州郡にいづれもある。郭義恭の廣志に『木は桄榔に似て枝條がなく、高さは一丈餘、葉は木の末にあつて束蒲のやうだ。その實は瓠ほどの大いさで枝間に垂れ、物を掛けたやうに見える。實は外部に椶包皮のやうな粗皮があり、内部に圓くして微し長い堅殼があり、殼の内部に豬膚のやうに白く厚さ半寸ばかりの膚があり、その味は胡桃のやうだ。膚の内部に裹まれてある漿は四五合あつて、乳のやうである。飲めば冷であつて氣を動じ、人を醺はしめる。殼は器になり、肉は糖煎にして遠方へ送れる。果として甚だ佳いものだ。

珣曰く、按ずるに、劉欣期の交州記に『椰樹の狀態は海椶のやうで、實は大いさ椀ほどあり、外部に粗皮があつて、大腹子、荳蔻などの類のやう、内部に漿があつて、

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕やし、こゝやし、やしほ、やぎ。Cocos nucifera, L. (Palmae)

(二) 瓠或ハ瓢ノ誤ナラン。

(三) 青田核　未詳

(四) 木村(康)曰ク、〔成分〕やしノ葉ハ樹脂狀物質其他ココシ

酒に似てゐるが、醉はない。雲南に生ずるものも好し。

宗奭曰く、椰子を開くと汁があり、乳のやうに色白く、酒のやうで極めて香しいが、それは別に一種の氣味であつて、强(しひ)て酒と名けるのだ。中に白（三）瓤があり、形は圓くして栝樓(くわつろう)のやうだ。上に細壠(さいろう)が起つてゐて、やはり白色で微し虛なるものだ。その紋は婦人の裙褶(くんしふ)のやうで、味はやはり汁のやうである。殼に著いた一重の白肉と共にいづれも糖煎にして菓となる。その殼は酒器になるもので、もし酒中に毒があると酒が沸起し、或は裂破する。今世間ではその裏面に漆を塗るが、椰子を用ゐる本來の意義を失つたものだ。

時珍曰く、椰子は果類中での大なるものだ。その樹は初め栽ゑた時に根の下に鹽を置くと發し易い。その木が斗ほどの太さになつて始めて實を結ぶもので、大なるは三四圍、高さ五六丈になる。木は桄榔、檳榔の屬に似て、通身に枝がなく、その葉は木の頂にあつて長さ四五尺、直(なほ)く聳えて天を指し、棕櫚のやうな狀態で、鳳尾のやうな姿勢をしてゐる。二月に花を開き、穂を成して葉の間から出る。長さは二三尺、太さは五斗入りの器ほどあり、それに實が連(つらな)り著いて一穗に數箇生(な)り、小なる

ツト（イノシツトノイソメア）ノ如キモノヲ含ム。樹幹ヨリ出ヅルヤシゴムハバツソリン（七〇―九〇％）ノ他デキストリン、ゴム質、糖、水分（約一二・五％）、灰分等ヲ含ム。樹幹ノ液汁ハ糖ニ富ミ（三―六％）ソノ中八八・二％ハ蔗糖、三・三％ハ葡萄糖ナリ。又灰分二・九二％ヲ有ス。果實ハソノ約三〇―五七・三％ハ纖維質ノ果皮（中果皮、外果皮モ含ム）約一一・六―一九・六％ハ硬キ内果皮、約一八・五―三七・八％ハ内胚乳之ヲ含ム。中ニ果漿部ヲ椰子乳（殊ニ未熟ノモノハ多ク一二―一三％ヲ有ス）ヲ藏ス。内胚乳ハ糖、アミドノ他種

種ノ蛋白質（約四・六三%）ヲ有ス、即結晶性グロブリン（エデスチン）、コングルチン、アルブミン、アルブモーゼ等ナリ。尚ソノ水分ハ四六%、粗織維三・三九%、灰分一%、椰子油（固形脂肪）約三七・三%ニシテ市販ノコプラ（胚乳ヲ乾燥シタルモノ椰子油ノ原料トス）中椰子油六〇—七〇%存シ約五四—六一%ノ收量アリト椰子乳ハ水樣澄明ノ糖溶液ニシテソノ一〇〇瓦中水分九二・二五—九四・二（瓦）ニ對シ可溶性物質五・八—七・七五、灰分〇・六六五—一、含窒素物〇・三—〇・八脂肪〇・〇一四—〇・〇一五、無水燐酸〇・〇五一—〇・一八二、

は栝樓ほど、大なるは寒瓜ほど、長さ七八寸、徑四五寸で樹端に懸り著く。六七月に熟し、粗皮があつて包まれ、皮の内部にある核は圓くして黒く潤ほひ、甚だ堅硬で、厚さ二三分ある。殼内に凝雪のやうな白肉瓤があつて、味は甘美にして牛乳のやうだ。瓤内の空處に數合の漿があつて、蔕を鑽つて傾け出して見ると清美にして酒のやうだ。しかし久しく經つたものでは混濁してゐて佳味でない。その殼を光やかに磨くと斑纈の點紋があり、横に破れば壺爵等の酒器になり、縱に破れば瓢杓になる。又、唐史には『番人はその花で酒を造る。それを飲むとやはり醉ふ』とあり、類書には、青田核、樹頭酒、嚴樹酒があり、いづれも椰酒、椰花の類のものだから、竝に左に附錄する。

附錄

青田核 崔豹の古今注に『烏孫國に青田核といふがある。形狀は桃核のやうなものだが、その樹は判らない。核の大いさは數斗ほどあるもので、それを割いて水を盛ると、酒の味に變じて甚だ醇美である。飲み盡したときはまた水を注げば幾度でも出來る。但し久くはいかぬもので、久ければ苦澀になる。これは青田酒と呼び、漢末に蜀王劉璋が嘗てこれを手に入れたといふことだ』とある。

食鹽〇・一五八—〇・二二一。可溶性物質ハ主トシテ蔗糖ニシテ少量ノコヽシツトヲ含ム。其他酵素インベルチン、オキシダーゼ、カタラーゼヲ含ミ又液汁中ニ溶含セラルル氣體ハ炭酸瓦斯九八%、酸素〇・二%、窒素〇・三%ナリ。內果皮ハキシランヲ含ム。外中果皮ノ纖維ハリグニン四一・六%ヲ含ム。椰子油ノ成分(%)ハラウリン酸四八—四九、ミルシン酸一七・五、オプリン酸九・五—一〇・七、カプリール酸七・二—七・四、パルミチン酸四・三—五・四、油酸九—一〇・三、ステアリン酸〇・八—一・二、カプロン酸〇・二等ノグリセリドヲ包有ス。

樹頭酒　寰宇志に『緬甸は滇南に存る。樹頭棧といふがあり、高さ五六丈で椰子のやうな實を結ぶ。土人はその實の下に麴を盛つた罐を懸けて置いてその實を劃つける。すると汁が罐中に流れてそれで酒になる。それを樹頭酒と名ける。或は麴を用ゐないでただ汁のみを取り、熬つて白糖にする。その樹は卽ち貝樹であつて、緬甸人はその葉を取つて字を書寫する』とある。

嚴樹酒　一統志に『瓊州に嚴樹といふがある。その皮、葉を搗いて清水に浸し、梗を和して釀し、或は石榴の花、葉を入れて數日經つと酒に成り、能く人を醉はしめる』とある。又、梁書に『頓孫國に酒樹といふがある。安石榴に似たもので、花汁を取つて盃中に貯へると數日にして酒になる』とある。蓋しこれも同じ類のものだ。又、文章草といふ酒になるものがある。

椰子瓤　(附)　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【氣を益す】(開寶)　【風を治す】(汪穎)　【これを食へば饑ゑず、人の顏を澤かならしめる】(時珍)　記載は異物志にある。

椰子漿　氣味　【甘し、溫にして毒なし】　珣曰く、多食すれば冷にして氣を

動ずる　時珍曰く、その性は熱である。故にこれを飲めば多く昏然として醉ひゐやうな狀態となるのだ　異物志に『その肉を食へば饑ゑず、その漿を飲めば渴を增す』とある。

［主　治］【消渴を止める。頭に塗れば髮を益して黑からしめる】（開寶）【吐血、水腫を治し、風熱を去る】（李珣）

［發　明］震亨曰く、椰子は海南の極熱の地に生じ、土人はこれに賴つて夏期の毒渴を解す　天の物を生ずるは各その材に因るものだ。

椰子皮［修　治］頌曰く、時期に拘らずその根皮を採り、藥に入れるには炙いて用ゐる。あるひはその實の皮も用ゐられるといふ。［氣　味］【苦し、平にして毒なし】［主　治］【血を止める。鼻衄、吐逆、霍亂を療するには煮汁を飲む】（開寶）【卒心痛を治す。燒いて性を存して硏り、新汲水で一錢を服す。極めて效驗がある】（時珍）記載は龔氏方にある。

殼［主　治］【楊梅瘡の筋骨痛には、燒いて性を存し、用ゐんとする時に臨んで炒熱し、一二三錢を滾酒で泡けて服し、暖に覆ふて汗を取る。その痛が直ちに止んで

椰子油ヲ搾取シタル粕ノ胚乳ハ脂肪一〇—一三(%)、粗蛋白二〇—三〇、粗纖維一四—二八、灰分六—九、水分一〇—二〇ナリ。（ウ植、一二六）

〔應用〕果實ハ生食シテ滋養ノ效アリ。胚乳ヲ乾晒セルコプラヨリ椰子油ヲ採ル。椰子油ハ石鹼、蠟油人工牛酪ノ原料トナリ軟膏ノ基礎劑トシ又食用油トナシバルミン、ラクチン、ベゲタリーネ等ノ名ニテ市場ニ出ヅ。油ノ搾粕ハ蛋白質ニ富ムヲ以テ飼料トナス。果漿ハ飲料トナシ又糖ニ富ムヲ以テ椰子酒ヲ釀造ス。椰子材、果殼ハ家具細工物ノ材料トナス。（ウ植、一二六）

本草綱目啓蒙ニ之レヲそてつのみトスルハ非デアル

神驗がある】（時珍）

無漏子（拾遺）

和名 なつめやし
學名 Phoenix dactylifera, L.
科名 しゅろ科（棕櫚科）



〔無漏子〕
——波斯棗・金果・海椶——

【釋名】 **千年棗**（開寶） **萬歳棗**（一統志） **海棗**（草木狀） **波斯棗**（拾遺） **番棗**（嶺表錄異） **金果**（輟耕錄） 木を**海椶**と名ける（嶺表錄） **鳳尾蕉**

時珍曰く、無漏なる名稱の意味は判らない。千年、萬歳はその樹の性が久しきに耐へることをいつたもの、海といひ、波斯といひ、番といふはその種が外國から來たことをいつたもの、金果は貴いものとした意味、椶といひ、蕉といふはその幹、葉の形を形容したものである。番人は

その木を名けて窟莽といひ、その實を名けて苦魯麻棗、苦麻窟莽といふ。いづれも番人の發音で、相近い。

【集解】藏器曰く、無漏子、卽ち波斯棗は波斯國に生ずる。形狀は棗のやうなものだ。

珣曰く、樹は栗木のやう、その實は橡子のやうで三角がある。

頌曰く、按ずるに、劉恂の嶺表錄に『廣州に一種の波斯棗といふがある。木は旁枝がなく、直上に三四丈聳え、頂巓に四面共に十餘枝を生じ、葉は椶櫚のやうなものだ。彼の地では海椶木と呼ぶ。三五年にして一回子を著け、毎朶に約二三十顆生る。大體北方の青棗に類するが、ただ小さいだけである。船舶で來る外國商人がやはり本國から中國へ持つて來るが、色は沙糖に類し、皮、肉は軟爛し、味は極めて甘い。北方の地の天蒸棗に似てゐるが、その核は全く別で、兩頭が尖らず、雙び卷いて圓く、小塊の紫礦のやうだ。種ゑても生えぬ。蓋し蒸熟したものだ』とある。

時珍曰く、千年棗は、棗なる名種はあるが全然別物で、南番諸國にいづれもある。卽ち杜甫が詩賦に詠んだ海椶である。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『波斯棗は波

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕なつめやし、なつめじゆう Phoenix dactylifera, L. (Palmae)

（三）木村（康）曰ク、〔成分〕なつめやしノ果肉中ニハ蔗糖（總糖ノ八七・九七％）非結晶糖、葡萄糖及果糖（轉化糖）、少量ノマンニツト其他ペクチン質、少量ノクマリン、單寧、ゴム質、脂肪油等ヲ含ム。種子（仁）ハ胚乳及胚中ニチターゼヲ含ム。樹幹ヨリ出ヅル汁液ハマンニツト五・六

斯國に生ずる。彼の地では窟莽樹と呼び、長さ三四丈、圍五六尺、葉は土藤に似て凋まないものだ。二月に花を生じ、その花は蕉花のやうな形狀で兩脚があり、漸次に開き罅けると中に十餘房があつて、子の長さは三寸、黃白色で形狀は楝子のやうで核がある。六七月に熟すると子が黑くなつて、乾いた棗に類した狀態となり、食へば味が飴のやうに甘い』とあり、又、陶九成の輟耕錄には『四川の成都に金果樹が六株あつて、漢の時の物だと傳へられてゐる。高さは五六十丈、圍三四尋あり、矢のやうに挺直で、木には枝柯がなく、頂上に椶櫚のやうな葉があり、皮は龍鱗のやう、葉は鳳尾のやう、實は棗のやうで大きい。每歲仲冬に有司が祭を具へてから採取し、醫者をして刀で青皮を剝き去つて石灰湯で瀹で、冷熟蜜に入れて四回浸し換へさせ、それを瓶に封じて進獻する。かかる方法に依らねば生澀で食へないのだ。番地では苦魯麻棗と名ける。蓋し鳳尾蕉であつて、一名萬歲棗といふ。泉州にある萬年棗は卽ちこの物だ』とあり、又、稽含の草木狀には『海棗は杯、椀ほどの大いさのものだ。これは安期生が賣つた海上の「瓜のやうな棗」であらう』といふやうにいつてあるが、事實は明確でないやうだ。巴旦杏も忽鹿麻なる名稱があるが、そ

%、林檎酸(〇・五四%ヲ含ム。葉ハクマリンヲ有ス。
〔應用〕果實ハ滋養料トナリ、榾液ヨリ酒ヲ醸ス。(ウ植、一一九)

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕そてつじろ Phoenix Hancea, Naud. (Palmae)

れは別物である。

實 (二)〔氣味〕【甘し、温にして毒なし】〔主治〕【中を補し、氣を益し、痰嗽を除き、虚損を補し、顏色を好くし、人をして肥健ならしめる】(藏器)【食を消し、欬を止め、虚羸を治し、人を悅ならしめ、久しく服して損ずることなし】(李珣)

桄榔子 (宋開寶)

和名　くわうらうし
學名　Caryota ochlandra, Hance.
科名　しゆろ科(棕櫚科)

〔校正〕木部より此に移し入る。

〔釋名〕木を**姑榔木**と名ける(臨海異物志) **麪木**(伽藍記) **董椶**(楊愼卮言) **鐵木** 時珍曰く、その木は檳榔に似て光利である。故に桄榔と名けたので、姑榔はその音の訛である。麪とはその粉をいつたもの、鐵とはその堅きをいつたものだ。

(一)〔集解〕頌曰く、桄榔木は嶺南二廣の州郡にいづれもあつて、人家でも庭院の間に植ゑてある、その木は栟櫚に似てゐるが堅硬で、その内部を斫つて麪を取ると、

(P. humilis, L. var. Hanceana, Becc.) づく、くろづく Arenga Engleri, Becc. (Didyosperma, Engleri, Warb.)

大なるは數石あり、それを食へば饑ゑない。その皮は至て柔くして堅靱綆を作る材料となる。その子は穗になつて木の端に生るもので、時期に拘らず採る。按ずるに、劉恂の嶺表錄に『桄榔木は枝、葉いづれも著しく茂り、檳榔と小し異つてゐるもので、それは葉下に粗い馬尾のやうな鬚がある。廣地方ではそれを採つて巾子を織るが、鹹水で浸すと粗脹して靱くなるものだ。彼の地ではこれで海船を縛り釘線は用ゐない。木の性は竹のやうで紫黑色、文理があつて堅い。工人はこれを截ち割つて博奕局を製する。その樹皮中には麪のやうな屑があつて、餅にして食へる』とある。



〔桄榔子〕
—董棕—

藏器曰く、按ずるに、臨海異物志に『姑榔木は牂牁の山谷に生ずる。外皮には棕櫚のやうな毛があつて散生し、その木は剛利にして鐵の如く、鏟鋤に作れるもので、

濕に中ると更に利くなるが、ただ焦に中ると敗れ易いものだ。物にはかやうに相伏する關係がある。皮中に稻米麪、及び麥麪のやうな白粉があつて、餅にして餌へる。それを桄榔麪と名け、彼の地では穀物の缺乏したとき、常に牛酪でこれを食ふ』とある。

○時珍曰く、桄榔は二廣、交、蜀にいづれもある。按ずるに、郭義恭の廣志に『木は大なるは四五圍、高さ五六丈あり、拱直にして旁枝なく、巓頂に葉が生え、數十に破れて棕葉に似てゐる。その木は肌が堅く、數寸に斫り入れると粉が取れる、それは赤黃色で食へるものだ』とあり、又、顧玠の海槎錄には『桄榔の木は杉のやうに直く、又、棕櫚、椰子、檳榔、波斯棗、古散などの諸樹のやうでやや異ふ。大竹に似た節があつて、樹杪に數枝を挺出して穗に成つた綠色の花を開き、青珠のやうな子を結ぶ。毎條に百顆を下らない。一樹に百餘條近くあつて、團團として懸かつた樣は傘のやうにうつくしいものだ。その木は最も重く、色は花梨に類して紋の多いものだ。番人の船舶ではこれを鐵鎗の代用にするが、鋒鋩が甚だ利い。○古散といふもやはり木の名で、杖になるものだ。また虎散と名ける。

子 〔氣味〕【苦し、平にして毒なし】〔主治〕【宿血を破る】（開寶）

麪 〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【餅にして炙いて食へば腴美であつて、人をして饑ゑざらしめ、虚羸、損乏、腰脚無力を補益する。久しく服すれば身を輕くし、穀を辟け得る】（李珣）

莎木麪

莎の音は梭（サ）である。（海藥）

和名 さとうやし
學名 Arenga sucharifera, Labill.
科名 しゆろ科（椶櫚科）

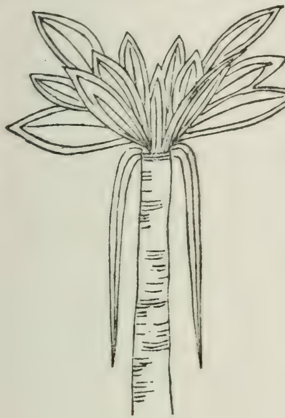
〔校正〕 木部より此に移し入る。

〔釋名〕 **𣝕木** 音は襄（ジヤウ）である。時珍曰く、莏の字は韻書には記載がないが、ただ孫愐の唐韻の莎の字の註に『樹は桄榔に似たり』とあるを見ると、莏の字は莎衣の莎の字に書くべきもののやうである。その葉が離披として莎衣のやうな狀態だから、これを莎といつたのだ 張勃の吳錄地理志に『交趾の𣝕木は皮中に米屑のやうな白粉があり、乾して末に搗き、水で淋過すると麪に似たものになり、餅にして食へる』とあるは卽ちこの木であつて、後世になつて音が近いので𣝕を莎と訛つ

たのだ。楊愼の卮言に『欀木、卽ち桄榔といつたのは誤である。按ずるに、左思の呉都賦に『麪は桄榔に有り』といひ、又『文欀(ぶんじやう)、楨(てい)、橿(きやう)』といつてあるのだから、元來一物ならば二个處に擧げる筈はない。

(二)〔集解〕珣曰く、按ずるに、蜀記に『莎木は南中の八郡に生ずる。樹は高さ十丈ばかり、闊(ひろ)さ四五圍、峯頭に葉が生え、兩邊が行列して飛鳥の翼のやうだ。皮中に一石ばかりの白麪があつて、搗き篩(ふる)つて餅にし、或は磨屑して飯にして食ひ、彼の地では莎麪(さめん)と呼んでゐる。輕滑にして美好なること桄榔麪に勝る』とある。

藏器曰く、莎木は嶺南の山谷に生ずる。大なるものは木皮の内部から黄白色の麪數斛を出す。



〔莎　木　麪〕

時珍曰く、按ずるに、劉欣期の交州記に『都勾樹(とこうじゆ)は椶櫚に似たもので、木中から

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕さごべい、さとうやし。Arenga saccharifera, Labill. (Palmae) Metraxylon Rumphii, Kön. (Palmae)

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕A. saccharifera ノ樹液ノ三—六%ハ蔗糖ニシテ少量ノデキストローゼ、レブローセヲ含ム。(ウ植、一二四)〔應用〕A. saccharifera ノ樹幹中ノ澱粉ヲ精製シセイゴウ、サアゴ、サゴ又ハサゴベイ莎麪ト稱シ食物殊ニ病人ノ食用トシ又糊トス。又樹液ヨリ糖ヲ製シ、酒ヲ釀ス。(ウ植、一二四) Metroxylon Rumphii 及同屬ノ數種ノ樹幹ノ髓中ノ澱粉

屑を出し、桄榔麪のやうで餅にして餌へる』とあるが、恐らくこれは檳木のことだ。

菰麪 ［氣味］(二)【甘し、平、溫にして毒なし】［主治］【虛冷を補益し、食を消す】(李珣)【溫補する。久しく食すれば餓ゑず、長生する】(藏器)

波羅蜜（綱目）

和名　はらみつ
學名　Artocarpus integrifolia, L.
科名　くは科（桑科）

［釋名］ **曩伽結**　時珍曰く、波羅蜜とは梵語で、この果は味が甘いところから、それに因んで名けたのだ。安南人が曩伽結と名け、波斯人が婆那娑と名け、拂林人が阿薩嚲と名けるは、いづれも一物である。

(一)［集解］ 時珍曰く、波羅蜜は交趾、南番の諸國に生じ、現に嶺南、滇南にもある。樹の高さは五六丈、樹は冬青に類して、黑く潤ほへることはそれに倍し、葉は極めて光淨で、冬、夏共に凋まず、樹が三斗ほどの太さになると實を結ぶ。花が咲かずして實が枝間に出る。多きは十數箇、少きは五六箇生り、大いさは冬瓜ほどで、外を厚皮があつて栗毬のやうに裹み、上に軟刺、礧砢がある。五六月に熟したとき

ヲ精製シサゴ粉トス。（ウ植、一二二）（植成研二三二）

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕はらみつ、ながみぱんのき Artocarpus integrifolia, L. f. (Moraceae)〔備考〕今日普通支那ニ於テハパイナップル(あななす Ananas sativus, Schult. f. ノ果實) 波羅蜜(ポーローミー)ト稱ス。混雜ヲ來ス。

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕ながみぱんのきノ材ハ黄色色素モリン及ビアノマクルリンヲ、樹皮中ニハ單寧ヲ含有ス。果肉

は顆の重さ五六斤ある。外皮を剝き去ると殼肉の肉が層層として橘囊のやうだ。食へば味が至つて甜美にして蜜の如く、香氣が室に滿つる。一實に凡そ數百の核があり、核の大いさは棗ほどで、その中の仁は栗のやうで黃色だ。煮、炒つて食へば甚だ佳味である。果中での大なるものはただこの物と椰子とだけである。



〔波羅蜜〕

瓤（三）　氣味　【甘く香しく微し酸し、平にして毒なし】　主治　【渴を止め、煩を解し、酒を醒し、氣を益し、人をして悅澤ならしめる】（時珍）

核中仁　氣味　【瓤に同じ】　主治　【中を補し、氣を益し、人をして饑ゑざらしめ、輕健ならしめる】（時珍）

中ニハ蔗糖一三・一(%)、葡萄糖六・四二、プロテイン一・二四、粗纖維〇・九九、灰分〇・九四、水分七一・二五ヲ有シ澱粉ハナシ。乳液ハカウチユツクヲ含ム。(ウ植、二四五)

〔成分補〕ぱんのきノ果實ハ水分六三(%)澱粉四〇、蛋白三ニシテペプシン類似ノ酵素及アルトカルピンヲ含ム。乳液中ニハカウチユクヲ鈌ク。(ウ植、二四四)

〔應用〕果實ハぱんのきA. incisa, L. ノ果實ト同樣ニ食用トナル。樹皮ノ單寧ハ鞣用タリ。

〔應用補〕心材ヨリ黃色ノ染料ヲ製シ、僧侶ノ法衣ヲ染ムルニ用フ。(植成研、一九七)

無花果（食物）

和名　いちぢく
學名　Ficus Carica, L.
科名　くは科（桑科）

釋名　**映日果**（便民圖纂）　**優曇鉢**（廣州志）　**阿駔**　音は楚（ソ）である。時珍曰く、無花果には凡そ數種あるが、此にいふは映日果のことで、即ち廣中の所謂優曇鉢、及び波斯に所謂阿駔である。



〔無花果〕

集解　(一)時珍曰く、無花果は揚州、及び雲南に產し、今は吳楚、閩越の人家で、或は折つた枝を挿して木に成してゐる。枝柯は枇杷の樹のやうで、三月に花構の葉のやうな葉を發し、五月の內に花なくして實り、實は枝の間に出る。狀態は木饅頭のやうで、その內部は虛軟である。採つて鹽漬にしたものを厭し實して扁くし、それを日光で乾して果に充てて食ふ。熟すると紫色になつて軟爛し、甘味は柹のやうで核

(一) 木村（康）曰ク、〔原植物〕いちぢく Ficus Carica, L. (Moraceae) 〔生藥〕生藥トシテハ無花果ハ花時採集乾燥セルモノナルヲ見ル（上海市場）。

(二) 文光果　未詳

(三) 天仙果　未詳　いぬびはニ充ツルハ穩デナイ

(四) 古度子　未詳　いぬびはニ充ツルハ穩デナイ

(五) 木村（康）曰ク、〔成分〕莖葉及果實中ニハペプトン化酵素ヲ含ム。而シテコノ酵素ハパパヤ Carica papaya ニ於ケルモノト相似タリ。葉ニハプロテオーゼ、アミノ酸、チロヂン、少量ノ單寧存シ、又恐ラクハアルタミンモ存セン。但ヒヨ

リン、ベタイン、アルギニン、ヒスチヂンハ無シ。灰分ハ葉ノ八・二六%ヲ占メ、ソノ三八%ハ酸化カルチウム、一八・一六%ハ硅酸、一三・二二ハ酸化マグネシウムナリ。果實(擬果)中ニハ糖分果汁ノ一二%、乾ノ二〇―四五%存ス。而シテ枸櫞酸、林檎酸、酒石酸等ヲ含ム。未熟果實ノ乳液中ニハカウチユク、ツエリン等ヲ含ム。いちぢく樹ノ乳液ハ水分六六(%)、カウチユク一二・八六、クラダン(ペプトン化酵素)、アルプミン三・五、ツエリン二・七九、非溶性物二・四三、樹脂一・五、エキス分一・二三、糖一・二九、林檎酸〇・四七、ゴム質〇・〇

がない。按ずるに、方輿志に『廣西の優曇鉢は花がなくて枇杷のやうな狀態の實が生る』とあり、又、段成式の酉陽雜俎には『阿駔は波斯に產する。拂林人は底珍と呼ぶ。樹は長さ一丈餘、枝、葉が繁茂し、蓖麻のやうな丫があつて、花なくして實る。實は色赤くして椑柹に類し、一月にして熟する。味はやはり柹のやうだ』とある。右二書の說くところはいづれもこの果をいふのである。又、文光果、天仙果、古度子といふがあり、いづれも無花の果だから左に附錄する。

【附錄】 (一)**文光果**　景州に產する。形は無花果のやうで肉の味が栗のやうだ。五月に成熟する。

(二)**天仙果**　四州に產する。樹は高さ八九尺、葉は荔枝に似て小さく、花なくして實る。子は櫻桃のやうで、纍纍として枝間に綴り、六七月に熟する。その味は至て甘い。宋祁の方物贊に『子孫枝あり、花あらずして實る。薄言にこれを采る、味蜂蜜に埒し』とある。

(四)**古度子**　交、廣の諸州に產する。樹、葉は栗のやうで、花なくして實り、枝柯の間に子を生じ、大いさ石榴、及び楂子ほどで色赤く、味は酸い。煮て粽にして食ふ。

もし數日煮ないで置けば化して飛蟻となり、皮を穿つて飛び去る。

實 (五)「氣　味」【甘し、平にして毒なし】「主　治」【胃を開き、洩痢を止める】(注顆)【五痔、咽喉痛を治す】(時珍)

葉 「氣　味」【甘く微し辛し、平にして小毒あり】「主　治」【五痔腫痛には、湯に煎じて頻りに熏じ洗つて效を取る】(震亨)

阿勃勒（拾遺）

和名　なんばんさいかち
學名　Cassia Fistula, L.
科名　まめ科（荳科）

「校　正」　木部より此に移し入る。

「釋　名」　**婆羅門皂莢**（拾遺）　**波斯皂莢**　時珍曰く、婆羅門とは西域の國名、波斯とは西南夷の國名である。

(二)「集　解」　藏器曰く、阿勃勒は拂林國に生ずる。形狀は皂莢に似て圓く長く、味は甘くして喫へるものだ

時珍曰く、これは卽ち波斯皂莢である。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に「波斯皂

七、灰分〇・七六ナリ。(ウ植二、三八)
〔藥用〕乾果ハ緩下ノ效アリ。用量三瓦。米國準藥局方ハ乾果及複方無花果舍利別ヲ載ス。民間ニ莖若クハ葉柄ノ傷面ヨリ分泌スル乳液ハ痔ニ塗布シテ效アリト。又米國ニテハ蛔蟲驅除ノ效アリトシテ煎用セラル。大量ハ暴瀉ヲ來スヲ以テ注意ヲ要ス。葉ノ數枚ヲ便壺ニ入レ置クニ臭氣ヲ防ギ蛆ヲ發生セズトイフ。生果ヲ食スレバ消化ヲ助ク。(邦藥植、二八六)

〔阿勃勒〕
(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕なんばんさいかち Cassia Fistula, L. (Leguminosae)

（二）羅望子　未詳
わにぐちもだまニ充ツルハ穩デナイ
（三）木村（康）曰ク、
〔成分〕果實ハ蔗糖ニ富ミ乾果ノ五三—六六、〇ヲ占ム。其他轉化糖、枸櫞酸、單寧、黃色及褐色ノ色素、灰分等ヲ含ム。皮ハ九・五—一二・九ノ單寧ヲ含ム。（ウ植、五〇四）
〔應用〕花及果實ハ藥用ニ、樹皮ハ鞣用トス。

莢を彼の地の者は忽野簷と呼び、拂林の地では阿梨と呼ぶ。樹は長さ三四丈、圍四五尺、葉は枸櫞に似て、短小で寒を經て凋まず、花なくして實り、莢の長さ二尺、中に隔があり、隔內に各一子あつて、子の大いさは指頭ほどで色赤く、至つて堅硬にして中が墨のやうに黑い。味は飴のやうに甘い。食ふもよく、また藥にも入れる』とある。

【附錄】（二）**羅望子**　時珍曰く、按ずるに、桂海志に『廣西に產する。殼は長さ數寸、肥皂、及び刀豆のやうで色は正丹色、內に二三子あつて、煨いて食へば甘美だ』とある。

子　（三）【氣味】【苦し、大寒にして毒なし】【主治】【心膈間の熱風、心黃、骨蒸寒熱。三蟲を殺す】（藏器）【黃に炙いて藥に入れ、熱病を治し、痰を下し、經絡を通じ、小兒の疳氣を療ず】（李珣）

沙棠果（綱目）

和名　しやたうくわ
學名　Malus sp.
科名　いばら科（薔薇科）

〔一〕木村（康）曰ク、
〔原植物〕Pirus sp.

〔二〕木村（康）曰ク、
〔原植物〕Pirus sp.

〔一〕【集解】時珍曰く、按ずるに、呂氏春秋に『果の美なるものは沙棠（さたう）の實（み）』とあり、現に嶺外の寧郷、瀧水（らうすゐ）、羅浮の山中にいづれもある。木の狀態は棠のやうで、花は黄、實は赤く、その味は李のやうだが核がない。

實　【氣味】【甘し、平にして毒なし】

【主治】【これを食へば水病を却ける】（時珍）山海經。



〔沙棠果〕

棎子　音は蟾（セン）である。（拾遺）

和名　未詳
學名　Malus sp.
科名　いばら科（薔薇科）

〔二〕【集解】藏器曰く、棎子は梨に似たもので、江南に生ずる。左思の呉都賦に『棎留（せんりう）霜を禦ぐ』とはこの物を指したのだ。

時珍曰く、棎、留は二種の果の名である　按ずるに、薛瑩の荊陽異物志に『棎子

の樹は南越、丹陽の諸郡の山中にいづれもある。その實は梨のやうで冬熟し、味は酢い。劉子樹は交廣、武平、興古の諸郡の山中に生ずる。三月に花を著けて實を結ぶ。實は梨のやうで、七八月に熟し、色は黄で、味は甘く酢く、核が甚だ堅い』とある。

實　[氣味]【甘く澀し、平にして毒なし】[主治]【生で食へば水痢を止め、熟して蜜を和して食へば嗽を去る】(藏器)

麂目（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

[校正]　木部より此に移し入る。

[釋名]　**鬼目**　藏器曰く、この物は嶺南に產する。狀態が麂の目のやうだから名けたもので、陶氏が荳蔻の註に引いて『麂目小冷』といつたのは即ちこの物だ。後世では鬼目と訛つてゐる。

(一)[集解]　時珍曰く、鬼目は草と木とに三種ある。これは木生のものをいふの

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕ぎしぎし、

しぶくさ Rumex japonicus, Meisn. ?(Polygonaceae)?

（二） 木村（康）曰ク、〔成分〕羊蹄ヲ見ヨ。

で、その草の鬼目は別に草部白英の條下に記載した。又、羊蹄菜をも鬼目と名けるが、いづれも異物同名である。按ずるに、劉欣期の交州記に『鬼目は交趾、九眞、武平、興古の諸處に産する。樹は高く太く、棠梨に葉は楮に似て、皮が白い。二月に花を生じてから子が連つて著き、大なるは木瓜ほど、小なるは梅、李ほどだが、小し斜で正圓でない。七八月に熟し、色は黄で味は酸い。蜜に浸して食へば佳味だ』とある

〔氣味〕（二）【酸く甘し、小冷にして毒なし。多く食へば冷痰を發する】（藏器）

都桷子（拾遺）

和名 とかくし
學名 Genipa americana, L.
科名 あかね科（茜草科）

〔釋名〕**構子** 時珍曰く、桷の音は角（カク）である。太平御覽に桷子と書いてあるが、桷の音は同（ドウ）の上聲だから、蓋し傳寫の訛である。また楮構の構とも名は同じだが實物は異ふ。陳祁暢の異物志の賛に『構子の樹は、枝葉四に布く。名同じくして種異り、實の味甜酢なり。果にして核なく、裏面素の如し 酒を拆て醒を止

む。更に遺賂と爲す』とある。

〔一〕〔集　解〕珣曰く、按ずるに、徐表の南州記に『都桷子は廣南の山谷に生ずる。樹は高さ一丈餘、二月に花を開き、連著する實の大いさは雞卵ほどで、七月に熟する』とある。

時珍曰く、按ずるに、魏王の花木志に『都桷の樹は九眞、交趾に產し、野生する。二三月に赤色の花を開き、子は木瓜に似たもので八九月に熟する。里民は取つて食ふが、味は酢い。鹽、酸で漚して食ひ、或は蜜藏して食ふ、いづれもよし』とある。あるひは青梅のやうな狀態だともいふ。

實　〔二〕〔氣　味〕〔酸く澀し、平にして毒なし〕〔主　治〕〔久しく食へば氣を益し、洩を止める〕(藏器)〔神を安じ、腸を溫め、痔を治す。久しく服しても損ずるところはない〕(李珣)〔酒を解し、煩渴を止める〕(時珍)

都念子（拾遺）

和名　まんごすたん
學名　Garcinia Mangostana, L.
科名　おとぎりさう科(金絲桃科)

〔一〕木村(康)曰ク、〔原植物〕Genipa americana, L.

〔二〕木村(康)曰ク、〔成分〕樹皮及果實ハゲニピン、單寧、マンニツトヲ含ム。葉ハマンニツトニ富ム。(ウ植、一一六九)

〔釋名〕倒捻子　下文に詳記する。

〔集解〕藏器曰く、杜寶の拾遺錄に『都念子は嶺南に生ずる。隋の煬帝の時、百株を進獻したので西苑に植ゑた。樹は高さ一丈餘、葉は白楊のやうで枝柯が長く細く、花心は金色で花は赤く、蜀葵のやうで大きい。子は小棗のやうだ。蜜に漬けて食へば甘美であつて人を益する』とある。



〔都念子〕
——倒捻子——

時珍曰く、按ずるに、劉恂の嶺表錄に『倒捻子は窠叢で大きくない。葉は苦李のやう、花は蜀葵に似て、小さくして深紫色だ。南方の地の婦人は多くこれで物の色を染める。子は軟柹のやうで、外が紫、内が赤くして核がなく、頭上に四葉があつて柹の蔕のやうになつてゐる。食ふには必ずその蔕を捻り取ることになつてゐるところから、倒捻子とこれをいつたので、それが訛つて都念子となつたのだ。味が甚だ甘くして軟だ』とある。

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕マンゴスタン Garcinia Mangostana, L. (Guttiferae) Buckleya lanceolata, Miq. (Quadriala lanceolata, Sieb. et Zucc. (Santalaceae)

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕マンゴスタンノ果殼ハ單寧、黃色樹脂(結晶性黃色苦味質マンゴ、チンナ含ム)ヲ含ミ、果肉ハ蔗糖一〇・八〇%、デキストローゼ一〇%、レヴローゼ一・二〇%(存在セザル事アリ)ヲ有ス。(ウ植、七八八)〔應用〕果實ヲ食用トス。

實 (二)〔氣味〕【甘く酸し、小溫にして毒なし】〔主治〕【痰嗽、噯氣】(藏器)【腹臟を暖め、肌肉を益す】(時珍) 嶺表錄。

都咸子（拾遺）

和名 とかんし
學名 Anacardium occidentale, L.
科名 うるし科（漆樹科）

〔校正〕木部より此に移し入る。

(一)〔集解〕藏器曰く、都咸子は廣南の山谷に生ずる。按ずるに、徐表の南州記に『その樹は李のやう、子の大いさは指ほどのもので、子、及び皮、葉を取つて曝乾し、飲に作ると極めて香美だ』とある。

時珍曰く、按ずるに、嵇含の南方草木狀に『都咸の樹は日南に產する。三月花が咲いてから連り著き、實の大いさは指ほどで、長さ三寸、七八月に熟し、その色は正黑だ』とある。

子 及び **皮** **葉** (二)〔氣味〕【甘し、平にして毒なし】〔主治〕【火で乾して飲に作つたものは、渴を止め、肺を潤ほし、煩を去り、痰を除く】(藏器)【傷寒清

下ノ如ク充テアレドモ是レ或ハ正シカラヌモノデアラウトモ思ハレル

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕アカジユバ Anacardium occidentale, L. (Anacardiaceae)

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕果殼ハ沒食子酸、不透明刺戟性ノ油、カルドール(毒)、アナカルド酸、澱粉、アカジユ樹脂肪等ヲ含ム。種子ヨリハ脂肪油(アカジユ油、食用)四〇—五〇%ヲ得。種子ノ組成ハ

(〇%)水分三・八、脂肪油四七・一五、澱粉八・九、含窒素物九・七、無窒素物一四・五二、粗蛋白二八・八三等ナリ。アカジユ油ハ油酸(七三・八%)、リノール酸(七・七)、パルミチン酸(六・四)、ステアリン酸(一一・二四)、リグノツエリン酸等ノグリツエリドヨリ成ル、ソノ内飽和酸一八・二%不飽和酸八一・八%、又不鹼化物ハ主トシテステジトステリント思ハル。樹幹ヲ傷ツクレバ所謂アカジユゴムヲ出ス、アカシアゴムニ似、アラビン、デキストリンヲ含ミ、糖一・五%。水分一七・三%、灰分一・二%、材中ニハカテヒンヲ含ム。(ウ植、七、三)

涕、欬逆上氣を去る。煎じて服するが宜し』(李珣)

摩厨子(拾遺)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

〔一〕集解 藏器曰く、摩厨子は西域、及び南海、幷に斯調國に生ずる。子は瓜のやうで茹にし得る。その汁は香美であつて、中國で油を用ゐるやうにこれを用ゐるので、陳祈暢の異物志贊に『木に摩厨あり、斯調に生ず。厥の汁肥潤、其の澤膏の如し。馨香馥郁、以て煎熬すべし。彼の州の人、以て嘉殽となす』とある。

珣曰く、摩厨は二月に花を開き、四五月に瓜のやうな狀態の實を結ぶ。

時珍曰く、又、齊墩果、德慶果といふがあつて、やはりその類のものだから、左に附錄して置く。

〔附錄〕〔一〕**齊墩果** 酉陽雜俎に『齊墩の樹は波斯、及び拂林國に生ずる。高さ二三丈、皮は靑白、花は柚に似て極めて香しく、子は陽桃に似て五月に熟する。西域地方では壓搾して油を取り、それで餅や果子を煎じる。中國で巨勝を用ゐるやう

〔摩厨子〕
(一) 木村(康)曰ク、
〔原植物〕えごのき、ちしやのき、ろくろぎ Styrax japonicum, S. et Z. (Styracaceae)
(二) 齊墩果
和名 おりーぶ
學名 Olea europaea, L.
科名 ひらぎ科
從來コレヲえごのきニ充テシハ非デアル
(三) 德慶果 未詳
(四) 木村(康)曰ク、
〔成分〕果皮ハ結晶性ノエゴサポニンヲ含有ス。種子ニハ約四五%ノ脂肪油約四五%ヲ含ム。主トシテパルミチン酸、ステアリン酸、リノール酸等ノグリセリドヨリナリ、又不鹼化性物質及ビエゴノールヲ含ム。(ウ植、九四

なものだ」とある。

(三)**德慶果** 一統志に『廣の德慶州に產する。その樹は冬榮え、子の大いさは盃ほどのもので、炙いて食ふと豬肉のやうな味だ』とある。

實 (四)〔氣味〕【甘く香し、平にして毒なし】〔主治〕【氣を益し、五臟を潤ほす。久しく服すれば人をして肥健ならしめる】(藏器)【神を安じ、血を養ひ、饑を生ずる。久しく服すれば輕健になる】(李珣)

韶子(拾遺)

和名 とげれいし
學名 Nephelium lappaceum, L.
科名 むくろじ科(無患樹科)

(一)〔集解〕藏器曰く、韶子は嶺南に生ずる。按ずるに、裴淵の廣州志に『韶は、葉は栗のやうで色赤く、子は栗ほどの大いさで棘刺があり、その皮を破ると內部に豬肪のやうな肉があり、核が著いてゐて離れない。味は甘く酢く、核は茘枝ほどだ』とある。

時珍曰く、按ずるに、范成大の虞衡志に『廣南に山韶子といふがある。夏熟して

色紅く、肉は荔枝のやうだ。又、藤詔子といふがあり、秋熟して大いさ梟の卵か柿ほどのものである』とある。

實 (二)〔氣味〕【甘し、温にして毒なし】〔主治〕【暴痢、心腹冷氣】(藏器)

馬檳榔（會編）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

〔釋名〕**馬金囊**（雲南志）**馬金南**（記事珠）**紫檳榔**（綱目）

(一)〔集解〕時珍曰く、馬檳榔は滇南の金歯、沅江の諸蠻夷地に生ずる。蔓生で、結實は大いさ葡萄ほど、紫色、味は甘く、内に核があり、頗る大楓子に似てゐるが殼がやや薄く、團き長き斜なる扁なる等一定せぬ。核内にある仁もやはり甜い。



〔馬檳榔〕

實 (二)〔氣味〕【甘し、寒にして毒なし】

八)(邦藥植、九四)
〔用途〕新鮮ナル果皮ヲ洗濯ニ用ヒ又溪流中ニ搾液ヲ流シテ魚ヲ捕フルニ用フ。花モ亦サポニンヲ含有スルヲ以テ小兒ハ之ヲ水ニ浸シ石鹼玉ヲ作リテ遊ブ。又材ニテ傘ノ轆轤ヲ製ス故ニろくろぎノ名アリ。(邦藥植、九四)

〔詔子〕
(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Durio Zibethinus, DC. (Malvaceae) Nephelium Lappaceum, L. (Sapindaceae)
(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕Nephelium Lappaceum ノ種子ハ三五%ノ脂肪油(ハムブタンダルク)ノ他アラヒン、ステアリン、オレイン、不鹼化性物質、糖、

澱粉、灰分等ヲ含ム。果肉中(%)蔗糖七・八、デキストローゼ二・二五、レヴローゼ一・二五ヲ有シ、果殼中ニハ有毒ナルネフエリウムサポニント單寧ヲ含ム。(ウ植、七三二)

Durio Zibethinus ノ果肉ハ糖分トシテ蔗糖八・〇七%、デキストローゼ一・八%、レヴローセ二・二%等ヲ含ム。(可食)(ウ植、七六七)

〔馬檳榔〕

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕これんし、からんぼら Averrhoa Carambola, L.

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕果實(可食)ハ果肉(果實ノ約六六%)中水分九〇・六(%)、葡萄糖五・二、

核仁〔氣味〕【苦く甘し、寒にして毒なし】機曰く、凡そこれを嚼んだならば冷水一口を送下する。その甜きこと蜜のやうで、やはり人體を傷はない。〔主治〕【產難。臨產時に數箇を細かに嚼んで井華水で送下すれば、須臾にして立ろに產する。再び四箇を殼を去り、兩手に各二箇を握れば惡水が自ら下るものだ。斷產せんとするものは常に二箇を嚼んで水で嚥下す。久しくすれば子宮が冷えて自ら孕まなくなる】(汪機)【傷寒熱病には、數箇を食つて冷水で嚥下す。又、惡瘡腫毒を治するには、內には一箇を食つて冷水で嚥下し、外には嚼んで塗る。それで所傷がない】(時珍)

枳椇

音は止矩(シク)である。(唐本草)

和名　けんぽなし
學名　Hovenia dulcis, Thunb.
科名　くろうめもどき科(鼠李科)

〔校正〕木部より此に移し入れ、拾遺の木蜜を併せ入れた。

〔釋名〕**蜜檳橄** 音は止矩(シク)である。**蜜屈律**(廣記) **木蜜**(拾遺) **木餳**(同上) **木珊瑚**(廣志) **雞距子**(蘇文) **雞爪子**(俗名) 木を**白石木**と名ける。(唐註) **金鉤木**(地志) **枅栱** 音は雞拱(ケイキョウ)である。**交加枝** 時珍曰く、枳椇の字は

蔗糖二・九五、含窒素物〇・三九、粗纖維〇・六三、灰分〇・四チ含有ス。（ウ植、五九二）

徐鍇註說文には積椈と書き、また枳枸と書いてある。いづれも屈曲して伸びぬの意味である。この樹は枝が多くして曲り、その子もまた卷曲してゐるからかく名けたものだ。蜜といひ、餳といふはその味に因み、珊瑚といひ、雞距といひ、雞爪といふはその形を形容し、交加といひ、枅栱といふはその實の紐屈せるをいつたもので、枅栱とは枋梁の名である。按ずるに、雷公炮炙の序に『弊箄の鹵を淡くするは酒の交を霑すが如し』とあり、註に『交加枝、卽ち蜜積椈なり』とある。又、詩話に『子は枝端に生じ、橫折岐出して狀枅栱の如し。故に土人これを枅栱といふ』とあるが、予（時珍）が考へるに、枅栱といふ名稱、及び俗に呼ぶ雞矩、蜀地方で呼ぶ桔枸、棘枸、滇地方で呼ぶ雞橘子、巴地方で呼ぶ金鈎、廣地方で呼ぶ結留子など書籍、記載に散見するものは、いづれも枳椇、雞距の字が地方音に轉じて異つたもののやうに思はれる。俗間ではまた雞爪を訛つて曹公爪といひ、或はこれを梨棗樹といひ、或は癩漢指頭といふ。崔豹の古今



〔枳　椇〕
——木蜜・雞爪子——

注に一名樹蜜、一名木石とあるはいづれも同一物である。

（一）［集　解］　恭曰く、枳椇子は、その樹は徑尺ほどのもので、木を白石と名ける。葉は桑、柘のやう、その子は房をなして珊瑚に似たもので、核がその端にある。一般にみなこれを食ふ。

○頌曰く、これは詩の小雅に所謂『南山に枸あり』といふその物で、陸機の疏義に『積枸の樹は高大で白楊のやうだ。所在にいづれもある。枝柯は直からず、子は枝端に著く　これを噉へば甘美にして飴のやうだ。八九月に熟する。江南では特に美なるものとしてこれを木蜜といふ。能く酒の味を敗るもので、もしこの木を柱とすればその屋内の酒はみな薄くなる』とある。

○詵曰く、昔、ある南方の人が住宅を修繕するにこの木を用ゐ、誤って一片を取落して酒甕の中へ入れたところ、その酒が化して水となつたさうだ。

○藏器曰く、木蜜樹は南方に生ずる。その地では一般に白石木と呼ぶ。枝、葉倶に甜く、嫩葉を生で噉へるもので、味が蜜のやうだ。老枝を細破して煎じた汁は蜜になり、ますます甜い。渇を止め、煩を解す。

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕けんぽなし Hovenia dulcis, Th. (Rhamnaceae) けんぽなし H. dulcis, Th. var. glabra Makino. 〔薬用〕果實ヲ煎用シ酒毒ヲ解シ嘔吐ヲ止ムトイフ。（邦藥植、一四七）又果實ハ利尿劑トモナス。（植成研）

時珍曰く、枳椇の木は高さ三四丈、葉は圓く大きくして桑、柘のやう、夏期に枝頭に花を開き、結實は雞爪の形のやうで、長さ一寸ばかりで紐曲し、開いて二三岐を作し、さながら雞の足距のやうである。嫩いときは青色だが霜を經ると黄になり、嚼めば蜜のやうに味が甘い。岐が開き盡きる處に蔓荊子のやうな狀態の一二の小子を結び、その内部に扁い核があり、色赤く、酸棗仁のやうな形をなしてゐる。飛鳥が喜んでその上に巢ふものだ。故に宋玉の賦に『枳枸來巢』とある。曲禮に『婦人の贄は椇、榛、脯修』とあるは卽ちこの物だ。鹽藏し荷裹して置けば冬期の儲に備へられる。

實 [氣味] 【甘し、平にして毒なし】 詵曰く、多く食へば蛕蟲を發する。

[主治] 【頭風、小腹拘急】(唐本) 【渇を止め、煩を除き、膈上の熱を去り、五臟を潤ほし、大、小便を利する功用は蜂蜜と同じ。枝、葉の煎膏もまた同じ】(藏器) 【嘔逆を止め、酒毒を解し、蟲毒を辟ける】(時珍)

[發明] 震亨曰く、ある男子は、年三十餘にして飲酒が原因で發熱し、又、房勞虚乏を兼ねた。そこで氣血を補する藥に葛根を加へ服して酒毒を解すと、微汗が

出入して反つて惓怠を感じ、熱は故の通りであつた。これは氣血が虛して葛根の散に禁へないのであつた。必ず雞距子を用ゐてその毒を解すべきものだから、そこで煎藥中に加へて服ませるとそれで癒えた。

時珍曰く、枳椇は、本草にはただ木が能く酒を敗ることを言つたに止るが、丹溪朱氏は酒病を治するに往往その實を用ゐた。その功はやはり同じかるべき筈である。按ずるに、蘇東坡集に『眉山の揭穎臣は消渴を病み、日に水を飲むこと數斗、飯も常に倍し、小便が頻數にあつて、消渴の藥を服すること年を逾えたが、疾は日に甚しく、自ら到底助らぬものと考へたのであつた。そのときその子息が蜀醫張肱を迎へて診察を請ふと、肱は笑つて「あなたは危ふく誤死するところだつた」といつて、麝香、當門子を取り、酒で濡濕して十丸ばかりを作り、棘枸子の煎湯でそれを吞ませた。遂にそれで癒えたのであつた。そこでその故を詢ねて見ると、肱は「消渴、消中はいづれも脾弱、腎敗で土が水を制せぬために疾となるものだ。今穎臣の場合は、脾脈が極熱して腎氣が衰へない。これは果實、酒物の過度が原因で積熱が脾に在るものと推定される。所以に食多くして水を飲む。水を飲むことが多いのだから尿の

多からざるを得ぬのであつて、消でもなければ渇でもないのである。麝香は能く酒、果、花木を制し、棘枸もまた酒に勝つもので、屋外にこの木があれば、屋内で醸す酒が多くは佳くなくなるものだ。故にこの二物を以て藥として、その酒、果の毒を去つたのだ」といつた。棘枸の實は雞距のやうなものだから俗に雞距といふ。また癩漢指頭ともいふ。これを食へば牛乳のやうなものだ。本草では枳椇と名けてある。小兒が喜んで食ふものだ。吁、古人は格物の智識を重要されたものだが、肱の如きは蓋しその理を得たるものだ。醫と一口にいつて了はれやうか』とある。

木汁 〔氣味〕 枳椇に同じ。

〔附方〕 新一。【腋下の狐氣】 桔枸樹に孔を鑿つて汁一二碗を取り、青木香、東向きの桃、西向きの柳、姓氏を異にする七軒の家の嫁の乳で一處に煎じ、一二沸して熱したまま、五月五日の雞の鳴く時に腋下を洗ひ、洗ひ了つた水を十字路頭に捨て置いて急いで歸る。顧みてはならぬ。それで癒える。この方法は、その捨て置いた水に眞先に遇つた他人が必ず狐臭を帶び去るのだ。桔枸樹、卽ち梨棗樹である。（胡濙衞生易簡方）

木皮 【氣味】〔甘し、溫にして毒なし〕【主治】〔五痔。五臟を和す〕（唐本）

本草綱目果部第三十一卷 終

本草綱目果部

第三十二卷

本草綱目果部目錄第三十二卷

果の四　味類一十三種

秦椒 本經　蜀椒 本經　崖椒 圖經　蔓椒 本經

地椒 嘉祐　胡椒 唐本　畢澄茄 開寶 山胡椒を附す。

吳茱萸 本經　食茱萸 唐本 即ち辣子。

鹽麩子 開寶 咸平、酸角、鹹草を附す。　酢林子 圖經　茗 唐本 即ち茶。

皐盧 拾遺

右附方　舊五十四　新九十六。



果の四　味類十三種

秦椒（本經中品）

和名　ふゆざんせう？
學名　Zanthoxylum alatum, Roxb. ?
科名　へんるうだ科（芸香科）

【校正】木部より此に移し入る。

【釋名】**大椒**（爾雅）**樧**　毀（キ）である。**花椒**

(一)【集解】別錄に曰く、秦椒は泰山の山谷、及び秦嶺上、或は瑯琊に生ずる。八月、九月に實を採る。

弘景曰く、今は西方から來る。形は椒に似て大きく、色は黃黑、味も頗る椒の氣がある。或は、これは今の樛樹子だといふが、樛とは豬椒のことだから恐らくは謬であらう。

恭曰く、秦椒は、樹、葉、及び莖、子は都て蜀椒に似てゐるが、ただ味が短く、實が細なものだ。藍田、秦嶺の地方に大いにある。

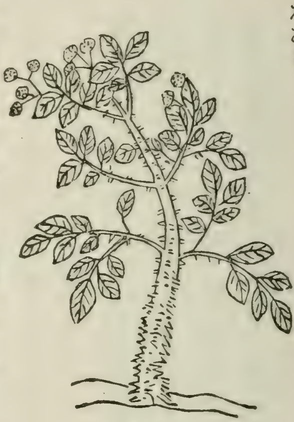
(一) 木村（康）曰ク、〔原植物〕てんぢくまもり、たうがらし Capsicum annum, L. (var. fasciculatum, Irioh.)(Solanaceae)

○頌曰く、今は秦、鳳、明、越、金、商の諸州にいづれもある。秋初に花を生じて秋末に實を結び、九月、十月に採る。爾雅に『椒は大椒なり』とあり、郭璞の註に『椒は叢生であつて、實の大なるものを檓といふ』といひ、『詩の唐風に「椒聊の實、繁衍して升に盈つ」とあるに對し陸機の疏義に「椒樹は茱萸に似て針刺があり、葉は堅くして滑澤、味はやはり辛く香しい。蜀地方で茶を作り、吳地方で茗を作るに、いづれもその葉を合せ煮て香をつける。現に成皐の諸山に竹葉椒といふがあるが、その木はやはり蜀椒のやうなもので、小毒あり熱であつて藥に合せるわけに行かない。飯食中、及び雞、豚を蒸すに入れて用ゐられる。東海の諸島上にも椒があつて、枝、葉はみな似てゐるが、子は長くして圓くなく、甚だ香しく、その味は橘皮に似てゐる。島上では麞、鹿がその葉を食ふので、その肉は自然に椒、橘の香がある」』とある。今南北に生ずる椒にしてその實の蜀椒より大なる一種は、陶氏、及び郭、陸の說と正に合致する。實の大なるものを以て秦椒となすべきものであらう。

○○宗奭曰く、これは秦地に產したものだから秦椒といふのである。概して椒株はみな相似たもので、ただ秦椒は葉がやや大きく、粒も大きくして紋が低く、蜀椒の皺

（二）木村（康）曰ク、〔成分〕本種ニハ種々ノ栽培變種アリ。本種ノ果實中ニハ辛味成分トシテハ結晶性含窒フエノール性物

紋のやうに高くして特異なところがないのである。しかし秦地にもやはり蜀椒の種がある。


〔椒〕

時珍曰く、秦椒は花椒である。始は秦に產したのだが、今は處處で種ゑられて最も蕃衍し易い。その葉は對生し、尖つて刺があり、四月に細花を生じ、五月に實を結び、生では青く、熟すれば紅く。蜀椒よりも大きいが、その目はやはり蜀椒目の光黒なるに及ばない。范子計然に『蜀椒は武都に出づ、赤色なるものを善しとす。秦椒は隴西、天水に出づ、粒細かきものを善しとす』とある。蘇頌はこの物を秋初に花を生ずるといつたが、蓋しさうではない。

〔修治〕蜀椒に同じ。

椒紅（二）〔氣味〕【辛し、溫にして毒あり】別錄に曰く、生では溫、熟すれば寒である。毒あり。權曰く、苦く辛し。之才曰く、栝樓、防葵を惡み、雌黄を畏る。

主治 『風邪氣を除き、中を温め、寒痺を去り、齒、髮を堅くし、目を明にする。久しく服すれば身を輕くし、顏色を好くし、老に耐へ、天年を增し、神に通ずる』（本經）『喉痺、吐逆、疝瘕を療じ、老血、產後の餘疾、腹痛を去り、汗を出し、五臟を利す』（別錄）『上氣欬嗽、久風濕痺』（孟詵）『惡風の遍身、四肢𤸷痺、口齒の浮腫、搖動、婦人の月閉不通、產後の惡血痢、多年の痢を治し、腹中冷痛を療じ、毛髮を生じ、癥を滅す』（甄權）『能く腫、濕氣を下す』（震亨）

附方 舊六。 『膏痺で尿多きもの』その人の飲少きには、秦椒二分を汗を出し、瓜蒂二分と末にし、一日三回、水で方寸匕を服す。（傷寒類要）『手、足の心の腫れたるもの』これは風である。椒、鹽末等分を醋で和して傅けるが良し（肘後方）『損瘡中風』麪で餛飩を作つて秦椒を包み、灰中で燒いて熟せしめ、斷つて口を開けて瘡上を封じ、冷えれば易へる。（孟詵食療）『口瘡の久患』大椒を口の閉ぢたものを去つて水で洗ひ、麪を拌ぜて煮て粥にし、空腹にそれを吞んで飯で壓下する。重きものは再服するがよし。瘥えるを度とする。（食療本草）『牙齒の風痛』秦椒を醋で煎じて含嗽する。（孟詵食療）『あらゆる蟲の耳に入りたるとき』椒末二錢を醋半盞に

質カプサイチン（カプサクチン、カプシチン、カプサイチチン）ヲ含ミ普通胎座、種子、果壁ニ存ス。果皮ニハ赤色素（番椒赤色素）ヲ含ム。古クハ果實中ニコニイン類似ノ又ソラニンノ如キ液狀アルカロイドヲ發見セリトイフ。又枸櫞酸、パルミチン酸、揮發油、脂肪油、樹脂樣物質ヲ含ムトイフ。又ペントザン、ペクチン、蛋白質、アミド、アムモニアクヲ含ム。又蓚酸カルチウムノ結晶ニ富ム。種子ハペントーゼ、デキストローゼ、レチチン及脂肪油（一四・九—三二%）、パルミチン酸、ステアリン酸、油酸等）ヲ含ミカプサイチンヲ有セズ。

(ウ植、一一〇二、一一〇四、一三二二)
(生藥學)
〔應用〕一般ニ辛味性調味料タル他、藥用トシテ皮膚ヲ引赤スルノ目的ヲ以テ僂麻質斯ニ用ユルコトアレドモ稀ナリ。專ラ熱帶地方ニ行ハルル藥品ニシテ、消化不良、間歇熱、猩紅熱等ニ用ヒ、又含嗽料トナスコトアリ。製品ハ番椒丁幾ナリ。
(生藥學)

〔蜀椒〕
一　木村(康)曰ク、
〔原植物〕さんせう
Xanthoxylum piperitum, DC. (Rutaceae)

浸し、良久しく少しづつ滴入すれば自ら出る。(續千金方)

蜀椒 (本經中品)

和名　さんせう
學名　Zanthoxylum piperitum, DC.
科名　へんるうだ科(芸香科)

〔校正〕木部より此に移し入る。

〔釋名〕**巴椒**(別錄)　**漢椒**(日華)　**川椒**(綱目)　**南椒**(炮炙論)　**蓎藙**　唐毅(タウキ)である。**點椒**　時珍曰く、蜀は古の國名、漢は川の名であつて、今の川西の成都、廣漢、潼川の諸處を指す。巴といふも國名、又、川の名であつて、今の川東の重慶、夔州、順慶、閬中の諸處を指す。川といふときは巴、蜀の總稱で、岷、沱、黑、白の四大水が東、西、南、北に分れてゐるから四川といふのである。

〔集解〕別錄に曰く、蜀椒は武都の山谷、及び巴郡に生ずる。八月に實を採つて陰乾する。

弘景曰く、蜀郡、北部の人家でこれを種ゑてある。皮、肉は厚く、腹の裏が白く、氣味が濃い。江陽、晉康、及び建平地方にもあるが、細く赤く、辛くして香しくな

く、力勢が巴郡のものに及ばない。

恭曰く、今は金州、西域から出るものが最も佳し。

頌曰く、今は歸、峽、及び蜀川、陜洛地方の人家で多く園圃を作つてこれを種ゑる。木は高さ四五尺、茱萸に似て小さく、針刺があり、葉は堅くして滑で、飲食を煮るによし。四月に子を結ぶ。花がなくてただ枝、葉の間に生ずるもので、顆は小豆ほどで圓く、皮は紫赤色だ。八月に實を採つて焙じ乾す。江淮、北方地方にもあつて、莖葉は都て相類するが、ただ蜀中のものの良きに及ばないが、皮が厚く、裏が白く、味は烈しい。

時珍曰く、蜀椒は肉厚く、皮皺み、その子は光黑で人の瞳人のやうだ。故にこれを椒目といふ。他の椒子は光黑ではあるがやはりこの椒のやうなわけにゆかぬ。土椒などになると子に光彩がない。

【修治】斆曰く、凡そ南椒を使ふには、必ず目、及び閉口のものを去るべきもので、酒を拌ぜて濕し、午前十時から正午まで蒸し、放冷して密に蓋ひ、氣がなくなつて後に取出し、それを甕器中に入れる。風に傷められぬやうにする。

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕果實ハ約三・六%ノ芳香性精油(山椒油)ヲ含有ス、ソノ主成分ハヂトロネラール、ヂペンテン、左旋ベタフエランドレン、ゲラニオール、ヂトロネロール等ニシテ、ヂトロネル酸及パルミチン酸等ヲ含ム。又少量ノキサントキシリント稱スル無窒素結晶成分ヲ含有スルトイフステノハウゼノ報告ハ X. alatum, Roxb. ニヨレルモノニシテ本種ニアラ

宗奭曰く、凡そ秦椒、蜀椒を用ゐるには、いづれも微し炒つて汗を出させ、熱に乘じて竹筒中に入れ、梗で搗いて裏面の黄殼を去り、紅なるを取つて用ゐる。なほ黄の盡きぬときは再び搗く。或はただ炒り熱し、紙を隔て地上に鋪き、椀で覆ふて冷えるを待つて碾り、紅なるを取つて用ゐる。

椒紅 (二)〔氣味〕【辛し、溫にして毒あり】別錄に曰く、大熱なり。多く食へば人をして乏氣、喘促せしめる。口の閉ぢたものは人を殺す。詵曰く、五月に椒を食へば氣を損じ、心を傷め、人をして多く忘れしめる。李廷飛曰く、久しく食へば人をして失明せしめ、血脈を傷めしめる。之才曰く、杏仁が使となる。鹽味を得て佳し。款冬花、防風、附子、雄黄を畏れる。水銀を收し得る。その毒に中つたときは涼水、麻仁漿で解す。

〔主治〕【邪氣、欬逆。中を溫め、骨節、皮膚の死肌、寒熱痺痛を逐ひ、氣を下す。久しく服すれば頭白からず、身を輕くし、天年を增す】(本經)【六腑の寒冷、傷溫瘧、大風で汗の出ぬもの、心腹の留飮、宿食、腸澼下痢、洩精、婦人の產乳の餘疾を除き、風邪、瘕結、水腫、黄疸、鬼疰、蠱毒を散じ、蟲、魚の毒を殺す。久し

ズ。〔ウ植、六〇六。邦藥植、一七六。朝比奈、今野—藥誌四一五（大、五）八〇一。内田壯—工化、一五（明、四五）九四一、一〇六六、三一（昭、三）三九六〕溝口氏ハ無窒素結晶性ノキサントキシン及無晶形ノキサントキシン酸ナル二物質ヲ記載スルモ其性狀明カナラズ〔衞生試驗所彙報一九（大、一二）一六七〕山椒ノ辛味ハサンシヨールニヨル（村山、篠崎—日本藥學會第四八回講演）根及皮ニハベルベリンヲ含有スルモノノ如シ。（ド藥、三五〇）〔應用〕香味料トシ又蛔蟲驅除ノ效アリ。一日量五—八瓦、粉末ヲ用ヒ又ハ浸劑トス。（準局方、二八）新

く服すれば心腠理を開き、血脈を通じ、齒髮を堅くし、目を明にし、關節を調へ、寒暑に耐へる。膏藥に作るがよし』（別錄）『頭風で淚の下るもの、腰脚不遂、虛損、留結を治し、血を破り、諸石水を下し、欬嗽、腹內の冷痛を治し、齒痛を除く』（甄權）『癥結を破り、胸を開き、天行時氣、產後の宿血を治し、陽を壯にし、陰汗を療じ、腰膝を暖め、小便を縮し、嘔逆を止める』（大明）『神を通じ、老を去り、血を益し、五臟を利し、乳汁を下し、瘢を滅し、毛髮を生ずる』（孟詵）『寒を散じ、濕を除き、鬱結を解き、宿食を消し、三焦を通じ、脾、胃を溫め、右腎命門を補し、蚘蟲を殺し、泄瀉を止める』（時珍）

【發明】頌曰く、服食方で、椒紅を單服して下を補するには、蜀椒を用ゐることにするが佳し。段成式は『椒の氣は下に達し、これを餌へば下を益して上衝せぬ』といつてある。

時珍曰く、椒は純陽の物であつて、手、足の太陰、右腎命門の氣分の藥である。その味は辛くして麻し、その氣は溫にして熱する。南方の陽を稟け、西方の陰を受けたものだ。故に能く肺に入つて寒を散じ、欬嗽を治し、脾に入つて濕を除き、風

鮮ナル葉ハ魚類ニ有毒ナリ。(ウ植、六〇六)

寒濕痺、水腫、瀉痢を治し、右腎に入つて火を補し、陽衰へて尿の數々あるもの、足弱、久痢の諸證を治するのである。ある婦人が七十餘で瀉を病むこと五年、あらゆる藥も奏效しなかつたとき、予が感應丸五十丸を投ずると、大便が二日間なかつたが、再び平胃に椒紅、茴香、棗肉を摻加し、丸にして與へて服ませると遂に瘳えた。怒と食とに因つて再發したが、毎にそれを服ませると止んだのである。これはこの物の濕を除き、食を消し、脾を温め、腎を補するの驗證である。按ずるに、歲時記に『歲旦に椒柏酒を飲んで疫癘を辟ける。椒なるものは玉衡星の精であつて、これを服すれば人をして體健にして老に耐へしめ、柏なるものはあらゆる木の精なる仙藥であつて、能く邪鬼を伏するものだからだ』とある。吳猛眞人の服椒訣には『椒は五行の氣を稟けて生じ、葉は青く、皮は紅く、花は黃に、膜は白く、子は黑い。その氣は馨香にしてその性は下行し、能く火熱をして下達せしめ、上薰を致さしめない。芳艸の中では功がいづれもこれに及ばない』とある。その方は下に掲げる。

予(時珍)が竊に謂ふに、椒紅丸は胃を補すとはいふものの、水、火を明に區別せねば、人を誤る虞がないといへない。大體に於て、この方はただ脾、胃、及び命門の虛寒

に濕鬱あるものには適するが、元來、肺、胃の熱する者の場合には大いに遠ざくべきものである。故に丹溪朱氏が『椒は火に屬し、下達の能がある。これを服すること既に久しければ、火が水中に生ずる。故に世間一般に椒を服するものにしてその毒を被らぬものはない』といつたのだ。又、上淸訣には『凡そ人が飯を喫つて傷飽し、氣の上衝を覺え、心胸の痞悶するものは、水で生椒一二十顆を呑めば散ずる』とある。これはその能く三焦を通じ、正氣を引き惡氣を下し、宿食を消する點を取つたものだ。又、戴原禮は『凡そ人が嘔吐して服藥の納まらぬものは、必ず膈間に蚘があつて、蚘は藥の香を聞くと動き、動くと藥が出て蚘は出ないものである。ただ嘔吐の藥の中に炒川椒十粒を加へるが良し。蓋し蚘は椒を見ると頭を伏せるものだ』とある。これで觀ると、張仲景の蚘厥を治する烏梅丸中に蜀椒を用ゐたのはこの意味であつたのだ。許叔微は『大凡そ腎氣上逆は、必ず川紅を以て引いて經に歸すべきもので、かくすれば平安を得る』といつた。

附方　舊十二、新二十三。【椒紅丸】元臟の傷憊で目暗く耳聾するを治す。これを服すること百日にして身輕く、睡少く、足に力あるを覺ゆるはその效驗である。

服すること三年に及べば心智が爽悟となり、目の明なること常に倍し、顔色は紅悦となり、髭髪は光黑となる。蜀椒を目、及び合口のものを去り、炒つて汗を出して暴乾し、擣いて紅一斤を取り、生地黄を擣いた自然汁を銅器中に入れて一升までに煎じ、稀稠の度が適當になるを候つて椒末を和して梧子大の丸にし、空心に三十丸づつを暖酒で服す。藥を調合する時には、婦人、雞、犬に見られぬやうにする。詩に『其の椒五行に應じ、其の仁六義に通ず。先づ功あることを知らんと欲せば、夜間に夢寐なく、四時に煩勞を去り、五臟は元氣を調へ、目を明にし腰痛まず、身輕く心健記す。別に更に異能あり、三年にして精自ら祕し、老を回らして嬰童に返し、康强にして睡を思はざらしめ、九蟲頓に消忘し、三尸自ら逃避す。若し能く久しく之を餌はば、神仙應に冀ふ可し』とある。【心、腎の補益】仙方椒苓丸 ― 心、腎を補益し、目を明にし、顔色の衰へを駐め、氣を順にし、風を祛り、天年を延べる。川椒一斤を炒つて汗を去り、白茯苓十兩を皮を去り、末にして煉蜜で梧子大の丸にし、毎服五十丸を空心に鹽湯で服す。鐵器を忌む。（邵眞人經驗方）【虛冷短氣】川椒三兩を目、幷に合口のものを去り、生絹袋に盛つて無灰酒五升の中に三日

間浸し、隨意に飲む　【腹内の虚冷】生椒を拆けぬものを擇り去つて四十五粒を用ゐ、漿に一夜浸して口を合せしめ、空心に新汲水で呑下す。久しく服すれば臟腑を暖め、顏色を駐め、髮を黑くし、目を明にし、人をして飲食を思はしめる。(斗門方)【心腹の冷痛】布で椒を裹んで痛處に置き、熨斗で熨して椒から汗を出させれば止む。(孫眞人方)【冷蟲心痛】川椒四兩を炒つて汗を出し、酒一椀を淋いでその酒を服す。(壽域神方)【陰冷の腹に入りたるもの】陰冷で漸次に冷氣が陰囊に入り、腫滿して日夜疼悶し、死せんとするものがある。布で椒を裹んで囊下を包み、熱氣を大いに通ぜしめる。一日に二回易へ、消するを度とする。(千金)【呃噫の止まぬもの】川椒四兩を炒つて研り、麪糊で梧子大の丸にし、十丸づつを醋湯で服す。神效がある。(邵以正經驗方)【傳尸勞疰】最も勞蟲を殺すものである。眞川椒の紅色なるものを用ゐ、子、及び合口のものを去り、黃草紙二重を隔て炒つて汗を出し、地上に放出して砂盆で蓋定し、火灰で密に四旁を遮つて約一時ばかりして細末にし、殼を去り、老酒に浸した白糕で和して梧子大の丸にし、四十丸づつを食前に鹽湯で服す。椒を用ゐること一斤に至ればその疾が自ら癒える。この藥は兼て諸痺を治するもので、

それには肉桂の煎湯で服す。腰痛には茴香湯で服す。腎冷には鹽湯で服す。昔、ある者がこの病で、異人に遇つてこの方を授かり、二斤まで服して、蛇のやうな一蟲を吐出して平安を得た。そこで神授丸と名ける。(陳言三因方)【歴節風痛】白虎歴節風痛で甚しく肉理が枯虚し、蟲を生じ、遊走して痒痛するもの、兼て痺疾の半身不遂を治す。卽ち前記の勞疰を治する神授丸の方。【寒濕脚氣】川椒二三升を疎布囊に盛り、日日に脚で踏む。これは貴人の用ゐる方法である。(大全良方)【諸瘡中風】生蜀椒一升を用ゐ、少量の麪を和し捜ぜて椒を裹んで氣の漏れるやうにし、二裹に分けて煻灰火中で燒熟し、頭を刺して孔をあけ、それを瘡上に當てて罨ひ、椒の氣を瘡中に射入せしめ、冷えれば易へる。須臾にして瘡中から水を出し、また全身から冷汗を出して瘥える(韋宙獨行方)【瘡腫の痛むもの】生椒末、釜下土、蕎麥粉等分を硏り、醋で和して傅ける。(外臺祕要)【囊瘡痛痒】紅椒七粒、葱頭七箇を煮た水で洗ふ。ある人が旅行中にこの病で苦んだとき、湘山寺の僧がこの方を授け、數日にして癒えた。驅風散と名ける(經驗方)【手、足の皴裂】椒四合を水で煮て、渣を去つて漬け、半食頃にして取出して燥し、須臾にして再び浸し、乾くを候つて豬、羊の腦髓を塗る。

極めて妙である。（肘金方）【漆瘡の痒きもの】譚氏方では、漢椒の煎湯で洗ふ。○相感志に『凡そ漆のある場所へ往くには、川椒を嚼んで鼻上に塗れば漆瘡を生じない』とある。【飧瀉で不消化のもの】及び久痢には、小椒一兩を炒り、蒼朮二兩を土で炒り、碾つて末にし、醋糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飲で服す。（普濟）【久冷下痢】或は痢せず、腰腹が冷えるものならば、蜀椒三升を一夜酢に漬け、麴三升と椒一升を共に拌ぜて粥に作つて食ふ。三升に過ぎずして癒える。（千金方）【老人、小兒の洩瀉】小兒の水瀉、及び年五十以上の人の瀉を患ふには、椒二兩、醋二升を用ゐ、煮て醋が盡きてから慢火で焙じ乾し、末に碾つて甆器に貯へ、二錢匕づつを酒、及び米飲で服す。（譚氏）【水瀉奶疳】椒一分を目を去つて漠に碾り、酥で少量を調へて腦上に塗る。一日三回。（姚和仲延齡方）【茶を食ひ、顏色の黃なるもの】川椒紅を炒つて漠に碾り、糊で梧子大の丸にし、十丸づつを茶湯で服す（簡便方）【傷寒齒衄】傷寒で嘔血し、繼で齒縫から出血して止まぬには、開口川椒四十九粒を醋一盞に入れて共に煎じ熟し、白礬少量を入れて服す。（直指方）【風蟲牙痛】總錄では、川椒紅の漠を用ゐ、水で和した白麪で皂子大の丸にし、燒熱して咬む。數度にして

癒える（ ）ある方では、花椒四錢、牙皁四十九箇を醋一椀で煎じて漱ぐ。【頭上の白禿】花椒漠を豬脂で調へて傅ける。三五度で癒える。（普濟方）【婦人の禿髮】漢椒四兩を酒に浸し、密室內で日日に搽る。自然に長くなる。（聖惠方）【蠍螫で痛むもの】川椒を細かに嚼んで塗る。微し痲して止む。（杏林摘要）【あらゆる蟲の耳に入りたるとき】川椒を細かに碾り、醋に浸して灌げば自ら出る。（危氏方）【毒蛇の咬螫】閉口椒、及び葉を擣いて封ずるが良し。（肘後方）【蛇が人の口に入りたるとき】暑熱の時、涼を取るために地上に臥すと蛇が口に入ることがある。出すことを得ぬときには、刀で蛇の尾を破り、生椒二三粒を納れて裹定する。須臾にして自ら退出するものだ。（聖惠方）【小兒の暴驚】啼哭して絕死せるには、蜀椒、左顧牡蠣各六銖を酢漿水一升で五合に煮取り、一合づつを灌ぐ。（千金方）【舌が塞つて語の吃るもの】川椒を生麪で包んで丸にし、十粒づつを醋湯で送下する。（救急方）【痔漏脫肛】每日空心に川椒一錢を嚼んで涼水で送下する。三五回で收まる。（同上）【腎風の囊痒】川椒、杏仁を研つて膏にし、掌の心に塗つて陰囊に合せて臥す。甚だ效がある。（直指方）

椒目【氣味】【苦し、寒にして毒なし】權曰く、苦く辛し、小毒あり。

【主治】【水腹脹滿。小便を利す】(蘇恭)　【十二種の水氣、及び腎虚で耳が卒に鳴聾し、膀胱の急するものを治す】(甄權)　【氣喘を止める】(震亨)

【發明】權曰く、椒の氣は下達するものだ。故に椒目は能く腎虚耳鳴を治す。巴豆、菖蒲と共に細かに碾り、松脂、黄蠟で溶和して挺にし、それを耳中に納れて抽く。腎氣が虚して耳中が風、水のやうに鳴り、或は鐘、磬を打つやうな聲があつて卒に暴聾するものを治す。一日一回易へる。神驗あるものだ。

宗奭曰く、椒目は盗汗を治するに有功なもので、目を微し炒つて細かに碾り、半錢を生豬の上唇の煎湯一合で睡る時に調へて服す。奏效せぬといふことなし。蓋し椒目は能く水を行るものだ。又、水蠱を治す。

震亨曰く、諸喘の止まぬには、椒目を炒つて碾り、二錢を白湯で調へて服す。二三服以上で劫し、その後に痰火に隨つて藥を用ゐる。

時珍曰く、椒目は下達して能く滲道を行り、穀道を行らぬ。所以に能く水を下し、濕を燥し、喘を定め、蠱を消するのである。

【附方】新五。【水氣腫滿】椒目を炒り搗いて膏のやうにし、方寸匕づつを酒

で服す。(千金方)【留飲腹痛】椒目二兩、巴豆一兩を皮、心を去り、熬り搗いて棗膏で和して麻子大の丸にし、二丸づつを呑み下す。その痛が止まる。○又ある方では、椒目十四箇、巴豆一箇、豉十六箇を合せ搗いて二丸にし、それを服して吐利を取る。(肘後方)【痔漏腫痛】椒目一撮を細かに碾り、空心に三錢を水で服す。神の如き效がある。(海上方)【崩中帶下】椒目を炒つて細かに碾り、一匀を溫酒で服す。(金匱鈎玄)【眼に黑花を生ずるもの】年久しくして治し得ぬには、椒目を炒つて一兩、蒼朮を炒つて一兩を末にし、醋糊で梧子大の丸にし、二十丸づつを醋湯で服す。(本事方)

葉 氣味 【辛し、熱にして毒なし】 主治 【奔豚、伏梁の氣、及び內外腎鈎、幷に霍亂轉筋。艾、及び葱を和して碾り、醋で拌ぜて罨ふ】(大明)【蟲を殺す。脚氣、及び漆瘡を洗ふ】(時珍)

根 氣味 【辛し、熱にして微毒あり】 主治 【腎と膀胱との虛冷、血淋の色の瘀るものには、煎湯を細飮する。色の鮮なるものは服してはならぬ】(時珍)證治要訣に記載がある。

崖椒（宋圖經）

和名　いぬさんせう?
學名　Fagara schinifolia, Engl. ?
科名　へんるうだ科（芸香科）

【釋名】**野椒**

【集解】頌曰く、施州の一種の崖椒は葉が蜀椒より大きい。彼の地では一般に四季に皮を採つて藥に入れる。

時珍曰く、これは俗に野椒と名けるものだ。甚だ香しくはないもので、子は灰色で黑くなく、光がない。野人はこれで雞、鴨を炒つて食ふ。



〔崖　椒〕

椒紅　【氣味】【辛し、熱にして毒なし】鹽を忌む。時珍曰く、毒あり。【主治】【肺氣上喘に兼て欬嗽するには、野薑と幷せて末にし、酒で一錢匕を服す】（蘇頌）

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕ふゆざんせう Xanthoxylum planispinum, Sieb. et Zucc. (Rutaceae) X. schinifolium, Sieb. et Zucc.

蔓　椒（本經下品）

和名　つるざんせう
學名　Zanthoxylum Bungei, Planch.
科名　へんるうだ科（芸香科）

【校正】木部より此に移し入る。

【釋名】**豬椒**（別錄）　**豕椒**（別錄）　**彘椒**（別錄）　**豨椒**（弘景）　**狗椒**（別錄）　**金椒**（圖經）　時珍曰く、この椒は蔓生で、狗、彘（てい）のやうな氣臭があるところからかかる諸名で呼ばれたのだ。


〔蔓　椒〕

【集解】（一）別錄に曰く、蔓椒は雲中の山谷、及び丘冢（きうちよう）の間に生ずる。莖、根を採り、煮て酒に釀す。

弘景曰く、山野處處にある。俗に樛子（きうし）と呼ぶ。椒、欓（たう）に似たもので、小さくして香しくない。一名豨椒（きせう）といふ。病を蒸して汗を出すに使用される。

時珍曰く、蔓椒は林や竹籔などの中に野生する。枝は軟で蔓のやう、子、葉はい

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕Xanthoxylum Bungei, Pl. (Rutaceae)

づれも椒に似てゐる。山間の住民はやはりこれを食ふ。爾雅に「椒、樧の醜は(一)梂」とあるは、その子の叢生するといふ意味である。陶氏の所謂欙子は梂子と書くべきであつて、これは諸椒の通稱である。蔓椒を呼ぶに限つたことはない。

實根莖　〔氣味〕(三)【苦し、溫にして毒なし】〔主治〕【風寒濕痺、歷節疼、四肢厥氣、膝痛を除く。湯に煎じて蒸し浴して汗を取る】(本經)【根は痔に主效がある。燒いて末にして服し、幷に煮汁に浸す】(藏器)【賊風攣急】(孟詵)【通身の水腫には、(四)煎じて汁のやうにし、熬つて餳のやうな狀態にし、空心に一匙づつを服す。一日三服】(時珍)　記載は千金にある。

地椒（宋嘉祐）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

〔校正〕草部より此に移し入る。

〔集解〕(一)禹錫曰く、地椒は上黨郡に產する。その苗は地を覆ふて蔓生し、莖、葉は甚だ細く、花は小朶をなして紫白色である。舊莖から生えるものだ。

(一) 梂、爾雅ニ茉ニ作ル。

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕葉(十月)ハ精油〇・〇九五%ヲ含ム。

(四) 原文煎如汁トアリ、如ノ字ハ剩字ナラン。

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕Xanthoxylum sp. (Rutaceae)

時珍曰く、地椒は北地に産する。即ち蔓椒の小なるもので、地に貼り付いて形の小さい葉が生える。味は微し辛い。その地方の者はこれで羊肉を煮て食ふ。香美なものだ



〔地椒〕

實　【氣味】【辛し、溫にして小毒あり】

【主治】【淋渫腫痛　蛀蟲を殺す藥の材料となる。(嘉祐)

【附方】新一。【牙痛】地花椒、川芎藭尖等分を漠にして擦る。(海上名方)

胡椒（唐本草）

和名　こせう
學名　Piper nigrum, L.
科名　こせう科(胡椒科)

【校正】木部より此に移し入る。

【釋名】**昧履支**　時珍曰く、胡椒はその辛辣なることが椒に似てゐるから椒なる名稱を呼ばれるが、實は椒ではない。

（一）集解　恭曰く、胡椒は西戎に生ずる。形は鼠李子のやうなもので、食物の調理にこれを用ゐると味が甚だ辛辣だ。

慎微曰く、按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『胡椒は摩伽陀國に產し、味履支と呼ぶ。その苗は蔓生で、莖は極めて柔く弱く、葉は長さ一寸半、葉と齊しい細條があつて、條條に兩兩相對して子を結ぶ。その葉は早朝に開いて暮に合し、合したときはその子をその葉の中に裹む。子の形は漢椒に似て至つて辛辣だ。六月に採る。現に食料に用ゐてゐる』とある。


〔胡　椒〕

時珍曰く、胡椒は、今は南番諸國、及び交趾、滇南、海南の地にいづれもある。蔓生で樹に附著し、また棚を作つて引き絡ませる。葉は扁豆、山藥などのやうで、正月に黃白の花を開き、結ぶ椒は纍纍として纏藤して生る。形狀は梧桐子のやうでやはり核がない。生では青く、熟すれば紅くなる。青いものは更に辣である。四月に熟し、五月に採收する。曝乾すると皺む。現に中

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕こせう Piper nigrum L. (Piperaceae)（生藥）胡椒（黑胡椒）ハこせうノ果實ノ稔熟前ニ採集セシモノナリ。白胡椒ハこせうノ果實ノ稔熟スルヲ待チ採集シ摩擦浩洗シテ果壁ノ半層ヲ除去セルモノナリ。故ニ白胡椒ハ黑胡椒ノ黑褐色ヲ呈スルニ比シ頗灰色或ハ帶黃白色ヲ有シソノ外面モ前者ノ皺縮アルニ比シ滑澤ナリ。而シテ黑胡椒ヨリ肥大ナルモノアリ。氣味モ前者ニ比シ佳快ナリ。（生藥學）

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕黒胡椒ハピペリン(アルカロイド殆ド無味)五―九%、油狀ノカピチン(ピペリンノ異性體)、メチルピロリン、樹脂、脂肪油(凡ソ一二・五%ニ及ブ)、脂肪分解力盛ナル酵素、揮發油(一―二、三%)、多量ノ澱粉(約三六%)ヲ含有ス。果皮ノ色素ハピロガロール誘導體ナリ。又果皮中ニ炭酸カルチウム。果實ノ灰分ハ四・五%(普通七%ヲ最高トス)。本品ニ特異ナル芳香性ノ氣味ハ樹脂ト揮發油トニ基因ス。揮發油ハフェランドレン、一牛テルペン、カリオフイレン等ヲ含ム。白胡椒

國到る處で食品として日用されてゐる物である。

實 (三)〔氣味〕【辛し、大溫にして毒なし】時珍曰く、辛し、熱である。純陽であつて、氣を走し、火を助け、目を昏くし、瘡を發する。珣曰く、多く食へば肺を損じ、人をして吐血せしめる。

〔主治〕【氣を下し、中を溫め、痰を去り、臟腑中の風冷を除く】(唐本)【胃口虛冷の氣で宿食不消のもの、霍亂氣逆、心腹卒痛、冷氣上衝を去る】(李珣)【五臟を調へ、腎氣を壯にし、冷痢を治し、一切の魚肉、鼈、蕈の毒を殺す】(大明)【胃寒吐水、大腸寒滑を去る】(宗奭)【腸、胃を暖め、寒濕の反胃、虛脹、冷積、陰毒、牙齒の浮熱で痛むを除く】(時珍)

〔發明〕宗奭曰く、胡椒は、胃中の寒痰で食し已ると水を吐するを去るに甚だ效驗があり、大腸寒滑にも用ゐるが、他藥を必ず佐とすべきもので、劑を過せば氣を走する。

震亨曰く、胡椒は火に屬して性が燥である。これを食へば膈を快くするので喜むものが衆いが、積久すれば脾、胃、肺の氣を大いに傷める。凡そ氣疾を病むものは

ハピペリン(五―九%)、樹脂、揮發油、脂肪油、デキストローゼ、澱粉(約五四・四%)等ヲ含ミ灰分ハ〇・八―二・九%(普通一・五%)ナリ。種子ハ脂肪油二五・七%(?)ヲ含ミ内六八(%)ハ固形、三二ハ流動性脂肪酸、七・五ハグリセリン、二・一三ヒレステリン、二・七四ハ不鹼化性物質ヨリ成ル。(ウ植、一九三)(生藥學)(局方)

〔應用〕本品ハ最モ嗜好セラルル香味料ニシテ廣ク調理ニ用ヒラル。醫藥トシテハ間歇熱ニ用ヒ或ハ健胃藥トスル事アレドモ稀ナリ。其他舌部ノ痲痺ニ咀嚼藥トナスコトアリ。(生藥學)

益とその禍を大にするものだ。牙齒痛に必ず胡椒、蓽茇(ひはつ)を用ゐるは、その中の浮熱を散ずるのである。

◎時珍曰く、胡椒は大いに辛く熱であつて、純陽の物である。腸、胃の寒濕の者には適するが、熱病の者が食へば火を動じ、氣を傷め、陰にその害を受ける。予(時珍)は少(わか)い時からこれを嗜み、歳歳目を病んでも一向それと考へつかず、後に漸くその弊に氣づいて、遂に絶對にこれを絶つと、目病がやはり止んだ。しかし纔(わづか)に一二粒を食ふと直ぐに目が昏澀した。これは昔の人には試みられぬことであつたが、蓋し辛口齒をは氣を走し、熱は火を助けるもので、この物は氣味倶(とも)に厚いからであつた。咽喉、病む者もやはりこれを忌むべきものである。近頃の醫師は毎(つね)にこれと共に綠豆を治病に用ゐて效を擧げてゐるが、蓋し豆は寒、椒は熱で、陰陽の配合が宜しきを得、且つ豆を以て椒の毒を制するからである。按ずるに、張從正の儒門事親に『噎(いつ)膈(かく)の病は、或は酒に因つて發(おこ)り、或は氣に因つて發り、或は胃火に因る。醫師はそれを察せずして火裏燒薑湯中で桂、丁香(ちやうかう)を煮て用ゐ、それでなほ已(た)えぬときはそれに繼ぐに荳蔻(づく)を以てし、蓽茇を以てし、なほ已えぬときはそれに繼ぐに胡椒を以て

してゐる。胃を和するのだといふが、胃は元來寒してゐるのではない。胃を補するのだといふが、胃は元來虛してゐるのではない。況や三陽が既に結し、食すれば必ず上潮するのだから、ただ湯、丸で少しづつ潤ほすを適當とすべきものだ」といつたが、予（時珍）が竊に謂ふに、この說はもつともである。しかし、また食が入ると反て出る無火の證もあり、又、痰氣鬱結して、辛熱を得て暫く開くの證もあるのだから。一方に偏執すべきものではない。

【附方】舊二、新二十一。【心腹冷痛】胡椒二十一粒を淸酒で呑む。或は一歲に一粒の割合にするともいふ。（孟詵食療）【心下大痛】壽域方では、椒四十九粒、乳香一錢を研り勻ぜ、男は生薑を用ゐ、女は當歸酒を用ゐて服す。○又ある方では、椒五分、沒藥三錢を研細し、二服に分けて溫酒で服す。○又ある方では、胡椒、綠豆各四十九粒を研り爛らして酒で服す。神效がある。【霍亂吐利】孫眞人は、胡椒三十粒を飮で呑む。○直指方では、胡椒四十九粒、綠豆一百四十九粒を研り勻ぜ、木瓜湯で一錢を服す。【反胃吐食】戴原禮の方では、胡椒を醋で浸して日光で乾すこと七回にして漠にし、酒糊で梧子大の丸にし、三四十丸づつを醋湯で服す。○聖惠方で

は、胡椒七錢半、煨薑一兩を水で煎じ、二回に分服する。○是齋百一方では、胡椒、半夏を湯泡して等分を澱にし、薑汁糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを薑湯で服す。【夏期の冷瀉】及び霍亂には、胡椒を碾つて澱にし、飯で梧子大の丸にし、米飲で四十丸づつを服す（衞生易簡方）【赤、白下痢】胡椒、綠豆を各一歲に一粒の割合で澱にし、糊で梧子大の丸にし、赤痢には生薑を用ゐ、白痢には米湯を用ゐて服す。（集簡方）【大、小便閉】關格不通で脹悶するは二三日で死亡する。胡椒二十一粒を打碎き、水一盞で六分に煎じて滓を去り、芒硝半兩を入れて煎化して服す。（總錄）【小兒の虛脹】塌氣丸——胡椒一兩、蠍尾半兩を澱にし、麪糊で粟米大の丸にし、五七丸づつ陳米飲で服す。一には萊菔子半兩を加へる。（錢乙方）【虛寒積癖】背膜の外に在つて兩脇に流れ、氣逆し喘急するは、久しくすれば營衞が凝滯し、潰して癰疽となり、多くは不治に陷る。胡椒二百五十粒、蠍尾四箇、生木香二錢半を澱にし、粟米飯で綠豆大の丸にし、二十丸づつを橘皮湯で服す。これを磨積丸と名ける。（濟生方）【房勞陰毒】胡椒七粒、葱心二寸半、麝香一分を擣き爛らし、黃蠟で溶和し、條子に作つて陰內に挿入する。少頃して汗が出て癒える。（孫氏集效方）【驚風內釣】胡椒、

木鼈子仁等分を末にして醋で調へ、黑豆末を和して杵いて綠豆大の丸にし、三四十丸づつを荊芥湯で服す。（聖惠）【寒邪の發散】胡椒、丁香各七粒を碾り碎き、葱白を搗いて膏にして和して兩手の心に塗り、その掌を握定して大腿の内側に夾み、溫に覆ふて汗を取れば癒える。（傷寒蘊要）【傷寒欬逆】日夜止まず、寒氣が胃を攻むるものである。胡椒三十粒を打碎き、麝香半錢、酒一鍾で半鍾に煎じて熱服する。（聖惠方）【風蟲牙痛】衞生易簡方では、胡椒、華茇等分を末にし、蠟で麻子大の丸にし、一丸づつで蛀孔中を塞ぐ。○韓氏醫通では、風蟲客寒、三種の牙痛で呻吟して止まぬを治す。胡椒九粒、綠豆十一粒を布で裹んで搥き碎き、絲綿で包んで一粒となし、患む處で咬みしめ、出る涎を吐き去る。立ろに癒える。○普濟方では、胡椒一錢半を羊脂を拌ぜて打つて四十丸にし、それを擦つて涎を追ふ。【阿伽陁丸】婦人の血崩を治す。胡椒、紫檀香、鬱金、茜根、小蘗皮等分を末にし、水で梧子大の丸にし、二十丸づつを阿膠湯で服す。○時珍曰く、按ずるに、酉陽雜俎に『胡椒は摩伽陁國に產する』とある。この方の名稱はそれから訛つたものだ。【沙石淋痛】胡椒、朴硝等分を末にし、一日二回、二錢づつを白湯で服す。これを二拗散と名ける。（普濟方）

【蜈蚣の咬傷】胡椒を嚼んで封ずれば痛まない。（多能鄙事）

畢澄茄（宋開寶）

和名　ひつちようか
學名　Piper Cubeba, L. fil.
科名　こせう科（胡椒科）

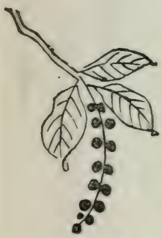
【校正】草部より此に移し入る。

【釋名】**毗陵茄子**　時珍曰く、いづれも番語である。

(一)【集解】藏器曰く、畢澄茄は佛誓國に生ずる。狀態は梧桐子、及び蔓荊子に似て微し大きいものだ。

珣曰く、胡椒は南海の諸國に生ずる。陰に向ふものをば澄茄といひ、陽に向ふものをば胡椒といふ。按ずるに、顧微の廣州志に『澄茄は諸海國に生ずる。これは嫩い胡椒であつて、青いとき樹から摘み採るものだ。柄が粗くして蒂が圓い』とある。

頌曰く、今は廣州にもある。春、夏に葉が生え、青く滑で美しく、結實は梧桐子に似て微し大きい。八月、


〔畢澄茄〕

(一) 木村（康）曰ク、〔原植物〕Piper Cubeba, L. f. (Piperaceae)〔生藥〕畢澄茄ハ Piper Cubeba ノ果實ヲ成熟前ニ採集セルモノナリ。

九月に採る。

時珍曰く、海南の諸番にいづれもある。蔓生で、春白花を開いて夏黑實を結ぶ。胡椒と一類の二種であつて、正に大腹と檳榔と相近いやうなものである。

〔修治〕 斅曰く、凡そ採取したならば、柄、及び皺皮を去つてから酒で浸し、午前十時から午後六時まで蒸し、細かに杵いて晒し乾して藥用に入れる。

實

〔氣味〕(二) 【辛し、温にして毒なし】 珣曰く、辛く苦し、微温なり。

〔主治〕 【氣を下し、食を消し、皮膚風、心腹間の氣脹を去り、人をして能く食せしめ、鬼氣を療じ、能く髮を染め、また身を香しくする】(藏器) 【一切の冷氣、痰澼、幷に霍亂吐瀉、肚腹痛、腎氣、膀胱冷を治す】(大明) 【脾、胃を暖め、嘔吐、噦逆を止める】(時珍)

〔附方〕 舊一、新五。 【脾、胃の虛弱】 胸膈が不快で飮食が進まぬには、畢澄茄を濱にし、薑汁で打つた神麴糊で梧子大の丸にし、薑湯で七十丸づつを服す。一日二服(濟生方) 【噎して食物の納まらぬもの】畢澄茄、白豆蔻等分を濱にし、乾いたものを舐める。(壽域神方) 【反胃吐食】黑汁を吐出し、治療しても瘥えぬには、畢澄

(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕P. Cubeba ノ果實（畢澄茄）ハ(%) クベーベン酸(一・七)、樹脂狀クベビン(二・五)、樹脂(三)、脂肪油(一・五)澱粉(一・八)、ゴム質(八)、色素(七)、アムモニアク鹽、カルチウム及マクネシウムノマラート、蓚酸カルチウム、燐酸カルチウムヲ含ム。畢澄茄油ハ果實ノ一〇—一八%ニシテ、テルペン、ヂペンテン、カヂーネン、二種ノ未知ノ一半テルペン、クベベンカンフアヲ含ム。又油中ニハアヅレン(〇・〇三%)證明サル。最近ノ研究ニヨレバ畢澄茄油(印度産、果實ノ七・

茄を末にし、米糊で梧子大の丸にし、一日一回、三四十丸づつを薑湯で服し、癒えて後に平胃散三百帖を服す。（永類鈐方）【傷寒欬逆】呃噫して日夜定らぬには、蓽澄茄、高良薑各等分を末にし、毎服二錢を水六分で煎じて十沸し、酢少量を入れて服す。（蘇頌圖經）【痘瘡の目に入りたるもの】羞明し、瞖を生ずるには、蓽澄茄を末にし、少量を鼻中に吹入れる。三五回にして效がある。（飛鴻集）【鼻塞で通ぜぬもの】肺氣の上攻から發るものだ。蓽澄茄丸――蓽澄茄半兩、薄荷葉三錢、荊芥蕙一錢半を末にし、蜜で芡子大の丸にし、時時に含嚥する。（御藥院方）

附錄　(二)山胡椒（唐本草）恭曰く、所在にある。胡椒に似て色黑く、顆粒の大いさは黑豆ほど、味は辛く、大熱にして毒なし。心腹冷痛に主效があり、滯氣を破る。俗間で用ゐて效を擧げてゐる。

吳茱萸（本經中品）

和名　ほんごしゆゆ
學名　Evodia officinalis, Dode.
科名　へんるうだ科（芸香科）

校正　木部より此に移し入る。

五%）ハサビーネン三三(%)、カーレン及チネオール合シテ一二、テルピネオール一一、カヂーネン、セスキテルペン一四、セスキテルペンアルコホル一七、未決定一三ナリト。（ウ植、一九七）

〔應用〕蓽澄茄ハ淋病ニ應用セラルルノミ。（生藥學）又蓽澄茄油ヲ製ス。

(二)山胡椒　未詳
やまかうばしニ充ツベキ根據ハ殆ンドナイ

（一）木村（康）曰ク、〔原植物〕ごしゆゆ (Boymia rutaccarpa, A. Juss.) Evodia rutacarpa, Hook. f. et Thoms.

【釋名】 藏器曰く、茱萸は南、北すべてあるが、薬に入れるには呉の地のものを好しとする。それが呉なる名稱のあるわけである。時珍曰く、茱萸二字の意味は判らないが、萸の字には俞（ユ）由（ユウ）の二種の發音がある。

（一）【集解】 別錄に曰く、呉茱萸は上谷、及び寃句に生ずる。九月九日に採つて陰乾する。陳久なるものが良し。



〔呉茱萸〕

頌曰く、今は處處にあるが、江淮、蜀漢が多いやうである。木は高さ一丈餘、皮は青綠色、葉は椿に似て潤く厚く、紫色である。三月に紅紫の細花を開き、七月、八月に實を結ぶ。椒子に似て、嫩いときは微黄だが熟すれば深紫になる。或は、顆粒が小さく緊り、久しく經て色の青綠なるものが呉茱萸、顆粒が大きく、久しく經て色の黄黑なるものが食茱萸だといふが、恐らくはやはりさうでない。按ずるに、周處の風土記に「俗に九月九日を尚んで上九と稱へ、茱萸がこの日になると氣が烈しく、熟

して色が赤くなる。その房を折つて頭に挿すもので、それで惡氣を辟け、冬を禦ぐものだとしてある』とある。又、續齊諧記には『汝南の桓景は費長房に隨つて道を學んだ。長房が「九月九日に汝の家に災厄があるから、急に除去の方法を講ぜしめるのがよい。家人各箇にもみの嚢を作つて茱萸を盛り入れ、それを臂上に繋けて高い山に登り、そこで菊花の酒を飲めばその禍がなくなる」といつたので、景がその言葉の通りに一家擧つて高い山へ登り、その夕方還つて見ると、雞、犬、牛、羊が一時に暴死してゐた。長房はそれを聞いて「それは家人の身代りになつたのだ」といつた』とある。故に一般にこの日になると、高い山に登つて酒を飲み、茱萸嚢を戴く。それはこの物語から始まつたものだ。

時珍曰く、茱萸は、枝は柔にして肥え、葉は長くして皺み、その實は梢頭に結び、累累として簇をなし、核がない。椒とは同じくないものだ。一種は粒が大きく、一種は粒が小さく、小さいものが藥に入れて勝るものだ。淮南萬畢術に『井の上に茱萸を種ゑるがよし。葉が井中に落ち、人がそれを飲めば瘟疫がなくなる。その子を屋根に懸けて置けば鬼魅を辟ける』とあり、五行志には『舍の東に白楊、茱萸を種

ゐれば、天年を增し、害を除く』とある。

〔修治〕 斅曰く、凡そこれを使用するには、葉、梗を去り、毎十兩を鹽二兩を投じた東流水四斗の中に入れ、一百回に分けて洗ひ、自然に涎がなくなつたとき日光で乾し、それを丸、散に入れて用ゐる。若し醋煮のものを用ゐるならば、毎十兩に醋一鎰を用ゐ、醋を煮て十沸して後に茱萸を入れ、熬り乾して用ゐる。

宗奭曰く、凡そ呉茱萸を用ゐるには、深湯中に浸して苦烈なる汁を去ること七回、かくて始めて焙じて用うべきものである。

(三)〔氣味〕 【辛し、溫にして小毒あり】 權曰く、辛く苦し、大熱にして毒あり。好古曰く、辛く苦し、熱なり。氣、味倶に厚く、陽中の陰であつて、半は浮し、半は沈し、足の太陰の經の血分、少陰、厥陰の經の氣分に入る。思邈曰く、陳久なるものが良し。口の閉ぢたものは毒がある。多く食すれば神を傷め、人をして伏氣を起し、咽喉不通ならしめる。時珍曰く、辛し、熱である。氣を走し、火を動じ、目を昏くし、瘡を發する。○之才曰く、蓼實が使となる。丹參、消石、白堊を惡み、紫石英を畏る。

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕果實ノ香氣ハ鎖狀テルペンノ一種エボデンニ基因ス。其他結晶性成分トシテエボヂン、二種ノアルカロイドエボヂアミン及ルテカルピンヲ含有ス。
慶松勝左衞門・薬誌、二四八(明、三五)九七九。
朝比奈、石尾—薬誌、四〇四(大、四)

【主治】【中を溫め、氣を下し、痛を止め、濕、血痺を除き、風邪を逐ひ、腠理を開く。欬逆寒熱】(本經)【五臟を利し、痰冷逆氣、飮食不消、心腹の諸冷、絞痛、中惡、心腹痛を去る】(別錄)【霍亂轉筋、胃冷の吐瀉、腹痛、產後の心痛。遍身の𤸷痺、刺痛、腰脚軟弱を治し、大腸の壅氣、腸風、痔疾を利し、三蟲を殺す】(甄權)【惡蟲の毒、牙齒の蟲䘌、鬼魅、疰氣を殺す】(藏器)【產後の餘血を下し、腎氣、脚氣水腫を治し、關節を通じ、陽を起し、脾を健にする】(大明)【痢に主效があり、瀉を止め、腸、胃を厚くし、人を肥健にする】(孟詵)【痞滿塞胸、咽膈不通を治し、肝を潤ほし、脾を燥す】(好古)【鬱を開き、滯を化し、呑酸、厥陰の痰涎、頭痛、陰毒、腹痛、疝氣、血痢、喉舌口瘡を治す】(時珍)

【發明】頌曰く、段成式は『椒の氣は好く下り、茱萸の氣は好く上る』といつた。それはこの物は膈を衝き、服食の藥となすわけに行かぬといふことだ。故に多く食へば眼を衝き、また髮を脫すものである。

宗奭曰く、この物は氣を下すことが最も速だ。腸虛の人が服すればいよいよ甚しい。

一一四八。朝比奈、柏木—藥誌(四〇五(大、四)一二七三。朝比奈、前田—藥誌(四一六(六、五)七八一。朝比奈、藤田—藥誌(四七六(大、一〇)七六三。朝比奈泰彥—藥誌五〇三(大、一三)一。朝比奈泰彥—Acta Phytochimica(九二四)六七。

〔應用〕苦味芳香性健胃藥トシテ粉末又ハ丁幾ヲ用フ。粉末ハ一日量〇・五—一・〇瓦。(準局方、二七)民間ニ葉ヲ浴湯料トスルアリ。

〔備考〕吳茱萸ハ本邦ニ於テ奈良、熊本諸縣ニ產スルモノヲ一名眞吳茱萸ト稱シ、

支那産ハ唐呉茱萸ト稱シテ日本産ヨリモ氣味緩和ナリ。（準局方、一二七）

元素曰く、氣、味倶に厚く、浮にして降る。陽中の陰であつて、その效用に三あり、胸中の逆氣滿塞を去り、心腹感寒の疞痛を止め、宿酒を消する。白豆蔻の使となる。

杲曰く、濁陰が降らずして厥氣上逆し、咽膈通ぜず、食すれば人をして口を開き目を瞪り、陰寒隔塞して氣が上下し得さらしめる。この病は已えねば人をして寒中し、腹滿し、膨脹し、下利せしめる。これは呉茱萸の苦、熱を以てその逆氣を泄すべきものである。これを使用すれば神の如きもので、諸藥はこれに代へることを得ぬものだ。元氣を損する恐があるから多く用ゐるは宜くない。

好古曰く、衝脈の病となり、逆氣裏急するには、この物を主とするが宜し。震と坤とが合することはその色の綠に現れてゐる。故に仲景の呉茱萸湯、當歸四逆湯の方は厥陰の病を治し、及び脾、胃を溫めるもので、いづれもこれを用ゐてある。

時珍曰く、茱萸の辛熱は能く散じ、能く溫め、苦熱は能く燥し、能く堅くする。故にその治するところの症はいづれもその寒を散じ、中を溫め、濕を燥し、鬱を解くの功を取るだけのものである。案ずるに、朱氏集驗方に『中丞常子正は痰飲に苦

しみ、毎に十分に食物を攝つたとき、或は天候の變化に際し、殆ど一定して十日に一回發り、頭疼し、背寒し、酸汁を嘔吐するので、數日間は枕に伏し、物を食はずに藥をし服しても效がなかつたが、宣和の初年、順昌の司祿を奉職中、太守蔡達道と會した席上、呉仙丹の方を得てそれを服し、遂に再び作らなくなり、飮食過多で腹滿する際には、五七十丸を服するとそれで已え、少頃して小便が茱萸の臭氣をなし、酒や飮はいづれも小水に隨つて去つた。前後に用ゐた痰藥は甚だ衆かつたが、これに及ぶものはなかつた。呉茱萸を七囘湯に泡け、茯苓と等分を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを熟水で服す。梅楊卿の方では、ただ茱萸を酒に三夜浸し、茯苓末を拌ぜて日光で乾し、百粒づつを溫酒で呑下す。又、咽喉口舌に瘡を生じたるには、茱萸末を醋で調へて兩足の心に貼る。一夜經てば癒える』とある。その性は熱ではあるが、能く熱を引いて下行するので、蓋しこれも從治の關係である。而るに茱萸の性は上行して下らぬものだといふが、それはさうでないらしい。ある人が小兒の痘瘡で口噤するものを治するに、茱萸一二粒を嚼んで抹すると開いたといふ。やはりその辛散を利用したものである。

附方 舊二十五、新二十一。【風瘙痒痺】茱萸一升、酒五升を一升半に煮取り、温めて洗ふ。立ろに止む。（孟詵食療）【賊風口偏】言語不能なるには、茱萸一升、薑豉三升、清酒五升を和煎して五沸し、冷えるを待つて半升を服す。一日三服。少し汗を得れば瘥える。（同上）【冬期の感寒】呉茱萸五錢を湯に煎じて服し、汗を取る。【頭風の痛み】茱萸を煎じた濃湯を綿に染め、頻りに髮根を拭ふが良し。（千金翼方）【嘔涎頭痛】呉茱萸湯——茱萸一升、棗二十箇、生薑一大兩、人參一兩を水五升で三升に煎じ取り、一日三回、七合づつを服す。（仲景方）【嘔吐胸滿】方は上に同じ。【脚氣冲心】呉茱萸、生薑の擂汁を飲むが甚だ良し。（孟詵方）【腎氣上噦】腎氣が腹中から起つて上に咽喉に築き、逆氣連屬てし出ること能はず、或は數十聲に至つて上下に喘息し得ぬものは、寒で胃脘を傷めたるに因るもので、腎が虛して氣逆し、上に胃に乘じ、氣と相併するものだ」難經にはこれを噦といひ、素問には『病深き者はその聲噦す』といつてある。この方を服するが宜し。もし止まぬときは期門關元腎兪の穴に灸する。呉茱萸を醋で炒り熱し、橘皮、附子を皮を去り、各一兩を末にし、麪糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを薑湯で服す。（孫氏仁存方）【陰毒

傷寒】四肢逆冷するには、茱萸一升に酒を拌ぜて溼し、絹袋二箇に包んで蒸し、極熱して更互に足心を熨す。氣の透るまで試みる。痛もまた直ちに止まる。累りに效驗があつた。（聖惠方）【中惡心痛】呉茱萸五合、酒三升を煮沸し、三回に分服する。（楊氏產乳）【心腹冷痛】方は上に同じ。（千金）【冷氣腹痛】呉茱萸二錢を擂り爛らして酒一鍾で調へ、香油一盃を鍋で煎じ、熱した中にその茱酒を入れて煎じ、一回滾らして取つて服す。立ろに止む。（唐瑤經驗方）【脾元氣痛】發歇して忍び難きには、茱萸一兩、桃仁一兩を和して炒り、茱が焦げたとき茱を去つて桃仁を取り、皮、尖を去つて研細し、葱白三莖を煨熟して酒に浸したもので溫服する。（經驗方）【寒疝往來】呉茱萸一兩、生薑半兩を淸酒一升で煎じ、溫めて分服する。（肘後方）【小腸疝氣】奪命丹——遠年、近日の小腸疝氣で偏墜し搐疼し、臍下が撮痛して悶亂するもの、及び外腎が腫硬して日に漸次に滋長するもの、及び陰間が溼痒して瘡となるものを治す。呉茱萸を梗を去つて一斤を四分し、四兩をば酒に浸し、四兩をば醋に浸し、四兩をば湯に浸し、四兩をば童尿に浸し、一夜經つて共に焙じ乾して澤瀉二兩と末にし、酒糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に鹽湯、或は酒で呑下す。如宜方では星

斗丸と名ける。(和劑局方)【小兒の腎縮】これは初生時に寒を受けて發るものである。呉茱萸、硫黃各半兩を大蒜と共に研つてその腹に塗り、かくて蛇牀子の烟で熏ずる。(聖惠方)【婦人の陰寒】十年子なきには、呉茱萸、川椒各一升を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、綿で裹んで陰中に納れ、一日に二回易へる。但し子宮が開いて妊娠する。(經心錄)【子腸脫出】茱萸三升を酒五升で二升に煎じ、三回に分服する。(兵部手集)【醋心上攻】濃酸の如きには、茱萸一合を水三盞で七分に煎じて頓服する。近代のこと、ある人が心を蜇破されるやうであつたが、これを服して二十年發らなかつた。累りに用ゐて效を奏した。(同上)【食後の呑酸】胃氣の虛冷である。呉茱萸を七回湯に泡けて焙じ、乾薑を泡けて等分を末にし、湯で一錢を服す。(聖惠方)【轉筋の腹に入りたるもの】茱萸を炒つて二兩を酒二盞で一盞に煎じ、二回に分服する。下つて平安を得る(聖濟錄)【霍亂乾嘔】止まぬには、呉茱萸を泡けて炒り、乾薑を炮いて等分を水で煎じて服す。(同上)【多年の脾泄】老人にこれが多い。これを水土同化といふ。呉茱萸三錢を炮過して水に入れて煎じ、その汁に鹽少量を入れて通口に服す。蓋し茱萸は能く膀胱を暖め、水道が淸するので大腸が自ら固くなるの

である。他の藥では熱であつても清濁を分け解することが不可能だ。（孫氏仁存方）【臟寒泄瀉】倦怠し、減食するには、吳茱萸を湯で泡過して炒り、猪臟半條を脂を去つて洗淨し、裝滿し紮定して文火で煮熟し、擣いて梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。一日二服。（普濟）【滑痢の止まぬもの】方は上に同じ。【下痢水泄】吳茱萸を泡けて炒り、黃連を炒り、各二錢を水で煎じて服す。なほ止まぬときは再服する。（聖惠方）【赤白下痢】和劑局方の戊己丸――脾、胃が溼を受けて下痢し、腹痛し、米穀の不消化なるを治す。吳茱萸、黃連、白勺藥各一兩を用ゐ、共に炒つて末にし、蒸餅で梧子大の丸にし、二三十丸づつを米飮で服す。○百一選方の變通丸――赤、白痢で日夜度なきもの、及び腸風下血を治す。川黃連二兩、吳茱萸二兩を湯泡すること七回にして共に香しく炒り、揀り別けて各別に末にし、粟米飯で梧子大の丸にし、各別に取收め、三十丸づつを、赤痢には甘草湯で黃連丸を服し、白痢には乾薑湯で茱萸丸を服し、赤白痢には各十五丸を米湯で服す。これは浙西河山の純老が蘇韜光に傳へたもので、一般人を救治して甚だ效があつた。○鄧筆峯雜興方の二色丸――痢、及び水泄、腸風を治す。吳茱萸二兩、黃連二兩を香しく炒り、各別に末

にし、百草霜末二兩と共に黄連を丸にし、白芍藥末二兩と共に茱萸を丸にし、各飯で梧子大にして各別に取收め、五十丸づつを赤痢には烏梅湯で連、霜の丸を服し、白痢には米飮で茱、芍の丸を服し、赤白痢には各半づつを服す。【赤痢臍痛】茱萸と黒豆とを合せた湯を呑む。（千金方）【腸痔で常に血の出るもの】下部が蟲に咬まれるやうに痒痛するものである。地を掘つて坑を作り、それを赤く燒いて酒を沃ぎ、茱萸二升を擣いてその坑に入れ、熱に乘じて孔のある板を置いてそれに坐つて孔から熏じ、冷えればやめる。三四回に過ぎずして癒える（肘後方）【腹中の癥塊】茱萸三升を擣いて酒を和して煮熟し、布で裹んで癥上を熨し、冷えれば更に炒り熱して更る更る熨す。癥が移動するときはそれを逐ふて熨す。消したならば止める（姚僧垣集驗方）【產後の盜汗】嗇嗇として惡寒するには、茱萸を雞子一箇ほどを酒三升に半日漬け、煮て服す。（千金翼）【口瘡、口疳】茱萸末を醋で調へて足心に塗る。一夜にして癒える。（集簡方）【咽喉の痛み】方は上に同じ。【牙齒の疼痛】茱萸を酒で煎じて含漱する。（孟詵本草）【小兒の頭瘡】吳茱萸を炒り焦して末にし、汞粉少量を入れて猪脂、醋で調へて塗る。（聖惠方）【小兒の瘭瘡】一名火灼瘡、一名火爛瘡、茱萸を

酒で煎じて拭ふが良し。（兵部手集）【老人、小兒の風疹】方は上に同じ。（千金）【癰疽發背】及び發乳諸毒には、呉茱萸一升を擣いて末にし、苦酒で調へて帛に塗つて貼る。（外臺祕要）【陰下の濕痒】呉茱萸を湯に煎じ、頻に洗つて效を取る。（同上）【骨の肉中にあるもの】出ぬには、茱萸を咀んで封ずる。骨は腐つて出るものである。（孟詵食療）【魚骨の腹に入りたるもの】刺痛し、出し得ぬには、呉茱萸を水で煮て一盞を溫服する。その骨は必ず軟になつて出る。なほ出ぬときは再服する。（同上）【蛇咬毒瘡】呉茱萸一兩を末にし、冷水で和して三回に服す。立ろに平安を得る。（勝金方）【肩疽、白禿】いづれも呉茱萸を用ゐ、鹽に淹けて炒つて研り、醋で和して塗る。（活幼口議）【寒熱怪病】寒熱して止まず、數日にして四肢が石のやうに堅くなり、これを擊てば鐘、磬のやうな聲が出來るやうで、日日に漸次に痩惡するものである。茱萸、木香等分の煎湯を飲めば癒える。（夏子益方）

葉　氣味　【辛く苦し、熱にして毒なし】　主治　【霍亂。氣を下し、心腹痛、冷氣、內外腎の釣痛を止めるに、鹽で碾つて罨ふが神驗がある。乾けば易へる。轉筋するものには、艾と共に擣いて醋で和して罨ふ】（大明）【大寒が腦を犯して

頭痛するを治す。葉に酒を拌ぜて袋に盛り、蒸熱して更互に枕熨する。痛の止むを度とする】(時珍)

枝 [主治] 【大、小便が卒に關格して通ぜぬには、南に伸びた枝の手の第二指の中節ほどのものを取つて含む。立ろに下る】(蘇頌) 記載は姚僧坦集驗方にある。

根 及び **白皮** [氣味] 葉に同じ。 [主治] 【三蟲を殺す】(本經) 【蟯蟲、喉痺、欬逆を治し、洩注、食物不消化、婦人經產の餘血を止め、白癬を療ず】(別錄) 【牙齒の蟲を殺し、痛を止める】(藏器) 【中惡の腹中刺痛、下痢の禁ぜぬものを治し、漆瘡を療す】(甄權)

[附方] 舊二、新二。 【寸白蟲】 茱萸の東北陰の細根、太さ指ほどのものを洗はずに土を去つて四寸に切り、水、酒各一升に一夜漬け、早朝に二回に分服する。蟲を取り下すものである。(千金方) 【肝勞で蟲の生じたるもの】 眼中に赤脈が出る。呉茱萸根を末にして一兩半、粳米半合。雞子白三箇、化した蠟一兩半を和して小豆大の丸にし、三十丸づつを米湯で服す。蟲を取り下すものである。【脾勞發熱】 蟲が脾中に在るために病となれば、人をして好く嘔せしめるものである。東行茱萸根の

太きもの一尺、大麻子八升、橘皮二兩を取り、この三物を㕮咀して酒一斗に一夜浸し、微火で薄く暖め、絞つて滓を去り、早朝空腹に一升を服す。蟲を取下すもので、蟲が或は死し、或は半ば爛れ、或は黃汁を下す。凡そ藥を作る時には絕對に言葉を發することを忌む。（删繁方）【腎熱で四肢の腫れるもの】拘急するには、茱萸根一合半、桑白皮三合、酒二升を一升に煮取り、一日二回服す（普濟方）

食茱萸（唐本草）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

校正 木部より移して此に入れ、拾遺の欓子を併せ入る。

釋名 **樧** 音は殺（サツ）である。**藙** 音は毅（キ）である。**艾子**（圖經）**越椒**（博雅）**欓子**（拾遺）**辣子** 弘景曰く、禮記には藙と名けてある。しかるに俗中で欓子と呼んでゐるが、これは藙の字を識らなかつたからであらう。

恭曰く、爾雅に『椒樧醜梂』とあり、陸機の詩疏に『椒、樧の屬なり』とあつて、

いづれも穢なる名があるのだ。陶氏の說は誤である。

時珍曰く、この物は卽ち欓子であつて、蜀地方では艾子と呼び、楚地方では辣子と呼ぶ。古代にこれを藙、及び欓子といつたのは、その辛辣なることが口を螫し、腹を慘し、人をして殺、毅、黨然なるの狀あらしめるからで、故にそれ等の諸名があるのだ。蘇恭は、茱萸にして口の開いたものが食茱萸だといひ、孟詵は、茱萸にして口の閉ぢたものが欓子だといひ、馬志は、粒が大きくして色の黃黑なるが食茱萸、粒が緊つて小さく、色の青綠なるが吳茱萸だといひ、陳藏器は、吳、食の二茱萸は一物であつて、藥に入れるには吳地のものを用ゐるを良しとする。この一條は重複して記載すべきものでない。ただ漢と吳といふならば差閊なく、食と不食といふはよくないといつてあるが、予（時珍）が竊に謂ふに、これ等の數說は、いづれも茱萸の二字に拘泥したために相混じてかやうな誤に陷つたのだ。



〔食茱萸〕

は呉茱、食茱といふは一類の二種であつて、茱萸は呉地のものを取つて藥に入れる實から呉茱萸と名け、欓子は形、味が茱萸に似てただ食用となるだけだから食茱萸と名けるのである。陳藏器が食茱萸、即ち欓子なることを知らずして欓子の一條を重複掲載したのは正に彼自らの誤である。按ずるに、曹憲の博雅に『欓子、越椒は茱萸なり』とある。鄭樵の通志には『欓子、一名食茱萸。これは呉茱萸と區別したので、禮記には「三牲藙を用う」とあるは食茱萸だ』とある。この二說は前記諸氏の謬を正すに十分である。

(一)**集解**　藏器曰く、欓子は閩中、江東に產する。その木は高く大きく、樗に似たもので、莖間に刺があり、その子は辛辣で椒のやうだ。南方の地では淹藏して果品とし、或は遠方への贈物にする。呉越春秋に『越は甘蜜、丸欓を以て呉の增封の禮に報いた』とあるから、欓が贈答品として用ゐられたことは尙いものだ。

頌曰く、食茱萸は南北いづれにもある。その木はやはり甚だ高大で、長さ百尺に及ぶものがある。枝、莖は靑黃で上に小さい白點があり、葉は油麻に類し、その花は黃色だ。蜀地方では艾子と呼ぶ。禮記に所謂藙とはこの物である。藙と艾とは聲

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕からすざんせう Xanthoxylum ailanthoides, S. et Z. = Fagara ailanthoides, Engl. (Rutaceae)

が相近い。食養中に入れるに宜きもので、能く辛香を發する。

時珍曰く、食茱萸、欓子、辣子は一物であつて、木は高く、葉は長く、花は黄、子は綠で、枝上に叢簇し、味は辛くして苦い。その地の者は八月に採り、搗き濾して汁を取り、石灰を入れて攪ぜて作つたものを艾油といひ、また辣米油ともいふ。始めは辛辣で口を螫すものだ。食物中に入れて用ゐる。周處の風土記に、椒、欓、藙を三香としてあるところを見ると、これは古くから尙ばれたものである。しかし今では上流の人にはこれを用ゐることが罕だ。

實 〔氣味〕(三)【辛く苦し、大熱にして毒なし】時珍曰く、小毒あり。脾火を動ずる。目を病むものはこれを忌む。頴曰く、瘡痔、浮腫、虛恚を發する。之才曰く、紫石英を畏る。

〔主治〕【功は吳茱萸と同じく、力が少し劣るだけだ。水氣を療ずるにこれを用ゐるが佳し】(蘇恭)【心腹の冷氣痛、中惡。欬逆を除き、臟腑の冷を去り、中を溫むるに甚だ良し】(孟詵)【蠱毒、飛尸が喉口に著くものを療ず。刺し破つて子で揩り、血を出さしめる。涎沫を下すものである。煮汁を服すれば暴冷腹痛、食物の不消化

(三) 木村(康)曰ク、〔成分〕葉ハ〇・五%ノ精油ヲ有ス。主成分ハメチールノルマルノニルケトン、メチルノルマルヘプチルケトン、テルペン、フエノール、(一・五%)等ナリ。(篠崎―工化、一八(大、四)一〇七七)

を去り、腥物を殺す」（藏器）【冷痢、帶下を治し、胃を暖め、濕を燥す】（時珍）

〔附方〕新二。【赤白帶下】欓子、石菖蒲等分を末にし、毎日鹽酒で二錢を溫服する。（經驗方）【久瀉虛痢】腹痛するには、欓子丸で治す。欓子、肉豆蔻各一兩、陳米一兩半を用ゐ、米の一半を二味と共に黃に炒つて末にし、一半を生で碾つて末にし、粟米粥で梧子大の丸にし、一日三回、五十丸づつを陳米飲で服す。（普濟方）

鹽麩子（開寶）

和名　ふしのき、ぬるで
學名　Rhus javarica, L.
科名　うるし科（漆樹科）

〔校正〕木部より此に移し入る。

〔釋名〕**五楠** 音は倍（バイ）である。**鹽膚子**（綱目）**鹽梅子**（同）**鹽梂子**（同）**木鹽**（通志）**天鹽**（靈草篇）**叛奴鹽**（拾遺）**酸桶**（拾遺）藏器曰く、蜀地方ではこれを酸桶といひ、また酢桶ともいふ。呉地方ではこれを鹽麩といふ。戎地方ではこれを木鹽といふ。

時珍曰く、その味が酸く鹹いところから、かかる諸名があるのだ。山海經に『橐山、

楠木多し』とあり、郭璞の註に『楠木は蜀中に産する。七八月に穗を吐き、成つた時は鹽粉があるやうなもので、酢を用ゐて羹になる』とあるがこの物である。後世では訛つて五倍となつた。



〔鹽麩五倍子〕

(一)〔集　解〕藏器曰く、鹽麩子は吳、蜀の山谷に生ずる。樹の狀態は椿のやうで、七月に穗に成つて子が生り、粒は小豆ほどで上に雪のやうな鹽があり、羹を作るに用ゐられる。嶺南地方では、子を取つて末にして食ふ。酸鹹にして渴を止める。これで瘴を防ぐ。

時珍曰く、膚木、即ち楠木は東南の山原に甚だ多い。木の狀態は椿のやうで、その葉は兩兩對生し、長くして齒があり、表面は青く裏面は白く、細毛があり、味は酸い。正葉の下の節節の兩邊に直葉があつて、箭羽のやうな狀態に莖に貼りついてゐる。五六月に青黄色の花を開き、穗に成つて一枝に纍纍と著き、七月に子を結ぶ。

(一)木村(康)曰ク、〔原植物〕ふしのき、ぬるで。Rhus javanica, L. (R. semialata, Murr.) (R. semialata var. Osbeckii DC.) (Anacardiaceae) 〔生薬〕昆蟲ノ刺傷ニヨリぬるでノ稚芽又ハ葉柄ニ生ジタル嚢狀贅生物ヲ五倍子トス。本邦ニテハ山口、岡山、鳥取諸縣ヨリ産出シ又支那ヨリ輸

子は大いさ細豆ほどで扁(ひら)く、生では青く熟すれば微紫色になり、その核は淡綠色で、腎の形のやうな狀態をなし、核外の薄皮上に薄鹽があつて、小兒がそれを食ふ。滇(てん)、蜀地方では採つて木鹽とする。葉上に蟲があつて結成する五倍子は八月に取る。それは蟲部に詳記してある。後魏書に『勿吉國(こうきつこく)は水の氣が鹹く、凝つて樹上に鹽が生ずる』とあるは卽ちこの物である。別に咸平樹、鹹草(かんさう)、酸角などいふがあり、いづれもその類のものである。左に附錄する。

【附　錄】 (二)**咸平樹**　眞臘國人(しんらふこくじん)は酸を作れない。ただ平樹の葉、及び莢と子とで作る。

(三)**酸角**　雲南臨安の諸處にある。猪牙皂莢のやうな狀態のもので、水に浸して羹に和すれば、酸く美味で醋のやうになる。

(四)**鹹草**　扶桑の東に女國があつて鹹草を產する。葉は邪蒿(じやかう)に似て氣が香しく、味は鹹い。彼の地ではこれを食ふ。

子　(五)【氣　味】【酸く鹹し、微寒にして毒なし】　鹽霜は汞(こう)、硫を制す。【主　治】

【痰飮、瘴瘧、喉中の熱結、喉痺を除き、渴を止め、酒毒黃疸、飛尸蠱毒、天行寒

入ス。但シ支那產ハ本邦產ノモノト形狀ヲ異ニス。恐ラクハ昆蟲ヲ異ニスルモノナラン。支那產ノ一種ニ梨子形五倍子ト稱シ全ク突起ヲ有セザルモノアリ、鞣酸ノ含量大ニシテ頁好ノ品ナリ。

(二)　咸平樹　未詳

(三)　酸角　未詳

(四)　鹹草
和名　あしたば?
學名　Angelica utilis, Makino.?
科名　繖形科

(五)　木村(康)曰ク、
〔成分〕邦產五倍子ハ

五〇—五八%ノ單寧酸ヲ含有ス。(瀧野勇「藥誌」五六三(昭、四)一)又鞣酸ノ含量七〇%ニ超ユルモノアリ、然レドモ實際五倍子ヨリ六〇%以上ノ鞣酸ヲ製出スルコト容易ナラズ。此鞣酸ハ沒食子ニ含有スル鞣酸ト同一質ナリ、其他五倍子ハ他ノ鞣酸及沒食子酸ノ少量ヲ含有ス。(生藥學)

(鷹川)單寧酸ヲ製出スル最良ノ原料ナリ。(生藥學)

熱咳嗽を解し、白髮を變じ、毛髮を生じ、頭上の白屑を去る。末に擣いて服す」(藏器)「津を生じ、火を降し、痰を化し、肺を潤ほし、腎を滋くし、毒を消し、痢を止め、汗を收め、風濕眼病を治す」(時珍)

【發明】時珍曰く、鹽麩子は、氣は寒、味は酸くして鹹い。陰中の陰である。鹹は能く耎にして潤ほすものだから、火を降し、痰を化し、毒を消し、酸は能く收して澀するものだから、津を生じ、肺を潤ほし、痢を止めるのである。腎の主る五液は、肺に入つて痰となり、脾に入つて涎となり、心に入つて汗となり、肝に入つて涙となり、それ自らの臟に入つて唾となる。その本はいづれも水である。鹽麩、五倍は先づ腎、肝に走り、水を救ふの功がある。所以に痰涎、盜汗、風濕、下涙、涕唾の證はみなこれを用ふべきものなのである。

樹白皮【主治】「血を破り、血を止める。蠱毒血痢、蚘蟲を殺すには、幷に煎じて服す」(開寶)

根白皮【主治】「酒疸には、擣き碎いて米泔に一夜浸し、早朝空腹に一二升を溫服する」(開寶)「諸骨鯁には、醋で煎じた濃汁を時時に呷ふ」(時珍)

【發明】時珍曰く、按ずるに、本草集議に『鹽麩子根は能く雞骨を軟にする。岑公は「ある人が雞骨哽で項が腫れ、危險な狀態に陷つたが、この根を醋で煎じて三椀まで啜ると吐出した」といつた　又、彭醫官は、骨哽を治するにこの根を用ゐ、擣き爛らして鹽少量を入れ、綿で裹み線で繋いで呑み込み、上下にそれを牽引し、やはり骨を釣り出した』とある。

醋林子（圖經）

和名　かなめもち
學名　Photinia glabra, Thunb. ?
科名　いばら科（薔薇科）

【校正】外類より此に移し入る。

【釋名】時珍曰く、味から呼ばれた名である。

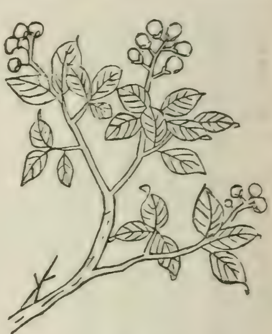
(一)【集解】頌曰く、醋林子は、四川卭州の山野の林や竹藪の中に生ずる。木は高さ一丈餘、枝、葉が繁茂するもので、三月に四出の白い花を開き、九月、十月に子が熟し、纍纍として數十箇が朶を成し、生では青く熟すれば赤くなり、ほぼ櫻桃に類して蔕が短い。熟したとき採つて陰乾し、核を連ねて用ゐる。その地の者は鹽、醋

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕かなめもち　かなめがし、あかめ、かなめのき　Photinia glabra, Maxim.

で收藏して果に充てて食ふ。その葉も味が醋い。蠻夷地方では採つて鹽を入れ、魚鮓（ぎよさん）を和して食ふ。醋を用ゐるに勝るといふことだ。

實　【氣味】【酸し、溫にして毒なし】

【主治】【久痢（くわいり）の瘥えぬもの、及び痔漏下血、蚘咬心痛（かいかうしんつう）、小兒の疳蚘、心痛、脹滿、黄瘦。寸白蟲を下すには、單に擣いて末にし、酒で一錢匕を服するが甚だ效がある。鹽、醋で貯藏したものを食へば津液を生じ、酒を醒し、渴を止める。多食すれば人をして口舌粗拆（こうぜつそたく）せしめる】（蘇頌）



〔醋林子〕

茗（唐本草）

和名　ちや
學名　Thea sinensis, L.
科名　つばき科（山茶科）

【校正】木部より此に移し入る。

【釋名】**苦𣘻**　𣘻（ト）　途（ト）の二音がある（唐本）　**檟**（爾雅）　**蔎**　音は設（セ

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕ちや Camellia Thea, Link. =Thea sinensis, L. (Ternstroemiaceae)

ツ)である。**荈** 音は舛(セン)である。頌曰く、郭璞は『早く採つたものを茶といひ、晩く採つたものを茗、一名荈といふ。蜀地方ではこれを苦茶といふ』といひ、陸羽は『その名に五あり、一には茶、二には檟、三には蔎、四には茗、五には荈』といつた。

時珍曰く、楊愼の丹鉛錄に『茶、卽ち古の茶の字であつて、音は途(ト)である。詩に「誰か謂ふ茶苦しと、其の甘きこと薺の如し」とあるはそれである。顏師古は「漢の時に茶陵を始めて轉じて途の音を宅加の切(タ)としたのだ」といつた』とある。或は、六經には茶の字がないといふが、まだ深く調べて見ない。

(一)〔集解〕 神農食經に曰く、茶茗は益州、及び山陵、道旁に生ずる。冬を凌いで死れず 三月三日に採つて乾す。

恭曰く、茗は山南の澤中、山谷に生ずる。爾雅に『檟は苦茶なり』とあり、郭璞の註に『樹は小さく、巵子に似て冬葉を生ずる。煮て羹に作つて飲める』とある。

頌曰く、今は閩、浙、蜀、江、湖、淮南の山中にいづれもあり、通じてこれを茶といふ。春中に始めて生えた嫩葉を蒸し焙じて苦水を去り、末にして飲むべきもの

〔二〕掇ハ摘ミ取ルナリ。

で、古代に食した方法と甚だ異ふ。陸羽の茶經に『茶は南方の嘉木であつて、一尺、二尺から數十尺のものがあり、その巴、川の峽山のものには、二人で合せて一抱ほどのものがあつて、伐つて〔二〕掇る。木は瓜蘆のやう、葉は梔子のやう、花は白薔薇のやう、實は栟櫚のやう、蔕は丁香のやう、根は胡桃のやうなものだ。その上なるものは爛石に生じ、中なるものは礫壤に生じ、下なるものは黄土に生ずる。栽培法は瓜を種ゑるやうなもので、三歳にして採れる。陽崖陰林の紫なるものが上であり、綠なるものはそれに



〔茶　茗〕

次ぎ、筍なるものが上であり、芽なるものがそれに次ぎ、葉の卷けるものが上であり、舒びたるものはそれに次ぎ、二月、三月、四月の間に生えるものだ。茶の筍なるものは爛石の間に生じ、長さ四五寸、蕨の始めて抽き出たときのやうである。それを露を凌いで採る。茶の芽なるものは叢薄の上に發し、三枝、四枝、五枝あつて、

枝の顚から採る。採つたものは蒸し焙じ封じて乾す。千類萬狀であるが、大體に就いていふと、胡人の靴のやうなるもので蹙縮然たるあり、犎牛の臆のやうなるもので廉襜然たるあり、山に出るものは輪囷然たり、水を拂ふものは涵澹然たり、これ等はいづれも茶としての精好なるものだ。竹籜の如く、霜荷の如きものはいづれも茶としての瘠せたものである。それ等とは別なものに、楠芽、枸杞芽、枇杷葉と名け、いづれも風疾を治するものがあり、又、皂莢芽、槐芽、柳芽といふがある。これは春の初にそれ等の樹の芽を摘んで茶に和して作るものだ。故に現に南方の地から官に輸する茶は、往往にしてさまざまの葉を雜ぜてあるが、茅、蘆、竹筍の類だけは入れられない。その他山中の草木の芽、葉はいづれも和し合せられるもので、椿、棘が就中面白いものだ。眞茶は性が冷であるが、ただ雅州蒙山に産するものは溫であつて、疾に主效がある』とある。毛文錫の茶譜には『蒙山には五頂があり、上に茶園があつて、そのうちの中頂を上清峯といふ。昔、ある僧徒が冷を病み、久しくする間に一老翁に遇つた。翁がいふには「蒙の中頂の茶は、春分の先後に多數の人手を集めて、雷鳴の起るを俟つて一時に擇り採り、三日間で止めねばならぬことに

なつてゐる。もし一兩を獲てその地の水で煎じて服すれば能く宿疾を祛り、二兩あれば眼前に疾がなくなり、三兩で能く肌骨を固くし、四兩で地仙となる」といふのであつた。その僧はその話の通りにして、一兩餘を採つて服すると、全部を服し盡さずして疾が瘳えたといふ。その蒙山の四頂の茶園は相變らず摘み採られてゐるが、ただ中峯だけは草木が密生繁茂し、雲霧が深く蔽ひ、猛惡な鳥獸が時に現れるところから、人間が近寄らない。近年やうやくこの地の品が高價になつた。その製作はやはり他の土地に比して精良である』とある。

陳承曰く、近世の蔡襄の說では閩茶が極めて備つてゐるが、ただ建州北苑の數个處に產するものは、性、味が諸地方のものとほぼ同くなく、今はやはりこれだけが臘茶と名けられて宮廷の御料となつてゐる。碾治し餅にして日光で晒すもので、火を得ればいよいよ良し。他の地のものは、或は芽にし或は末にして取收めるが、微しでも火氣に觸れると硬くなつて久しく收藏し得なくなり、色、味も俱に敗れるものだ。ただ鼎州の一種の芽茶だけは性味ほぼ建茶に類する。旣に汴中、及び河北、京西等の地で磨つて末にし、また冒臘茶ともいふものがそれであるといふ。

宗奭曰く、苦茶、卽ち今の茶であつて、陸羽に茶經があり、丁謂に北苑茶錄があり、毛文錫に茶譜があり、蔡宗顏に茶對があり、いづれも甚だ詳である。しかして古人は茶を雀舌、麥顆と呼んだが、その意味はその物の至つて嫩かいといふことである。又、新芽にして一たび發すると長さ一寸餘になり、その粗くして針の如きものがあつて、これが最上品だ。その根、幹に水、土の力がみな餘あるものだからである。雀舌、麥顆は下級品であるのだが、前代の人人はそれを知らなかつたのだ。

時珍曰く、茶には野生と種生とあつて、種ゑるには子を用ゐる。その子は大いさ指頭ほど、正圓にして色黑く、その仁を口に入れると初は甘くして後に苦く、最も人の喉を刺戟するものだ。しかし閩地方ではそれで油を搾つて食用としてゐる。二月に種を下し、一つの坎に百顆を蒔くとそれで一株が生ずるものだ。蓋し空殼のものが多いからである。水と日とを畏れ、最も坡地、蔭處に適する。清明の前に採つたものが上であり、穀雨の前のものはそれに次ぎ、その後のものはみな老茗である。採つたならば蒸し揉み焙じて修治するので、それぞれ製造方法があり、詳細は茶譜に記載がある。茶の税の始は唐の德宗のときで、宋、元、及び我が明朝に盛になり、

西番との互市で交易してゐる。そもそも茶なるものは一の木であるが、下は民生日用の資となり、上は朝廷賦税の助となり、その經濟的價値はいかにもすばらしいものである。

既往に於けるその道の人人の稱揚したものの大體に就いていへば、唐の時代が一般に茶を好尙されたので、茶の品級もますます衆くあつて、雅州、蒙頂の石花、露芽、穀芽が第一とされ、建寧の北苑龍鳳團は上供となり、蜀の茶には、東川の神泉獸目、硤州の碧澗明月、夔州の眞香、卬州の火井思安、黔陽の都濡、嘉定の峨眉、瀘州の納溪、玉壘の沙坪があり、楚の茶には、荊州の仙人掌、湖南の白露、長沙の鐵色、蘄州、蘄門の團面、壽州、霍山の黄芽、廬州の六安英山、武昌の樊山、岳州の巴陵、辰州の溆浦、湖南、寶慶の茶陵があり、呉越の茶には、湖州、顧渚の紫筍、福州、方山の生芽、洪州の白露、雙井の白毛、廬山の雲霧、常州の陽羨、池州の九華、丫山の陽坡、袁州の界橋、睦州の鳩坑、宣州の陽坑、金華の擧岩、會稽の日鑄があり、いづれも產茶の有名なものである。その他にもなほ多いが、それを列擧しては更に甚だ繁雜になる。

按ずるに、陶隱居は苦茶に註して『西陽、武昌、廬江、晉陵にいづれも好茗がある。これを飲めば人に宜し。凡そ飲むところの物に、茗、及び木葉、天門冬苗、菝葜葉があつて、いづれも人を益す。餘物はいづれも冷利である。又、巴東縣にある眞茶は火煏して作る卷結したもので、飲にすればやはり人をして眠らざらしめる。俗中では多く檀葉、及び大皂、李葉を煮て茶にして飲むが、いづれも冷利である。南方にある瓜蘆木も茗に似たものだ。今は一般に櫧、櫟、山礬、南燭、烏藥の諸葉を採り、いづれも飲として茶にまがひ得るものだ』といつてある。

葉

〔三〕［氣味］【苦く甘し、微寒にして毒なし】藏器曰く、苦し、寒なり。久しく食すれば人をして痩せしめ、人の脂を去り、人をして睡らざらしめる。これを飲むには熱するが宜く、冷なれば痰を聚めるものである。

胡洽曰く、榧と共に食すれば人の身をして重からしめる。

李廷飛曰く、大渴、及び酒後に茶水を飲めば腎の經に入り、人をして腰脚、膀胱を冷痛せしめ、兼て水腫、攣痺の諸疾を患はしめる。大抵茶を飲むには熱するが宜く、少きが宜く、飲まぬが尤も佳し。空腹には最も忌む。

〔三〕木村（康）曰ク、〔成分〕茶葉ハカフェイン（テイン或ハ茶素）、三メチルキサンチン、キサンチン、テオフイリン、ヒポキサンチン、アデニン、モノメチルキサンチン、テオブロミン等ノアルカロイド、一—二%或ハ二五%ニ及ブ單寧、其他クウエールチトリ

ン、クウェールツェチン、メチルアルコール、精油、サポニン、蓚酸、ゴム質、樹脂、蠟質、糖分等ノ少量ヲ含ム。又乾燥セル茶葉ノ中ニハアデニンヌクレオチツド、グアニンヌクレオチツド、チトシンヌクレオチツド等ヲ、緑茶ノ中ニハヴイタミンCヲ含有セリ。〔市販茶葉中カフェインノ含量ハ平均一・七%最高三%内外ナリ。岩崎—藥誌、一四四(明、二七)一一九〕ちやノ花ハカフェイン、酸化酵素テアーゼ等ヲ含ム。種子ハ脂肪油(茶油)二二・九(%)、蛋白質八・五、澱粉三二・五、其他ノ含水炭素一九・九、サポニン九・一、粗纖維三・八、無機質

時珍曰く、威靈仙、土茯苓を服するものは茶を飲むことを忌む。

【主治】【瘻瘡】小便を利し、痰熱を去り、渇を止め、人をして睡を少からしめ、力ありて志を悅からしめる】(神農食經)【氣を下し、食を消す。飲に作つて茱萸、葱、薑を加ふるが良し】(蘇恭)【熱氣を破り、瘴氣を除き、大、小腸を利す】(藏器)【頭、目を淸し、中風で昏憒し、多く睡つて醒めざるを治す】(好古)【傷暑を治す。醋で合せて泄痢を治するに甚だ效あり】(陳承)【炒り煎じて飲めば熱毒赤白痢を治す。芎藭、葱と共に煎じて飲めば頭痛を止める】(吳瑞)【濃煎は風熱痰涎を吐す】(時珍)

【發明】好古曰く、茗茶は、氣は寒、味は苦であつて、手、足の厥陰の經に入る。陰證を治する湯藥中にこれが入れてあれば格拒の寒を去り、及び伏陽を治す大意は相似たるものだ。經に「苦は以て之を泄す」とあつて、その體が下行するものであるところから、能く頭、目を淸するのである。

機曰く、頭、目の淸ならざるは、熱が上に熏するからであつて、苦を以てその熱を泄すれば上が淸する。且つ茶の體は輕浮なるもので、採摘する時は芽蘗の初萠であつて、正に春、升の氣を得てゐる。味は苦ではあるが、氣は薄いので、乃ち陰中

三・三等ヲ含ム。茶油ハ又仁ノ二四—二六%トイヒ或ハ一八%ニ過ギズトイフ。〔種子一斗ヨリ五合ノ茶油ヲ得ベシ。内田壯—工化、一九(大、五)八三〇〕果皮ハ少量ノカフェイン及サポニンヲ有ス。枝及莖皮ハ痕跡ノカフェイン及サポニン(一・五%)、根ハカフェインヲ缺キサポニン四%ヲ有ス。(ウ植、七七八)(生藥學)

〔應用〕茶葉ハ飯料トシテ洽ク用ヒラレ本邦中古以來唯一ノカフェイン含有性嗜好品トシテ行ハレ、又興奮藥タリ。本邦ニ於テハ屑茶ヲカフェイン製造原料トシ、又茶ノ出シカラヲ乾燥シテ貯ヘ置キタルモノハ蚊イブシニ妙

の陽であり、升によく、降によし、頭、目を利するは蓋し此に本づくのである。

汪穎曰く、ある人は燒鵞が好きで、毎日缺かさず炙煿(しやせん)して常食してゐたので、それを知つてゐる人人は、いづれも癰疽を生じはせぬかと懸念してゐた。けれどもその後卒(つ)い病を生じなかつたので、その人に就いて種種訊ねて見ると、毎夜必ず涼茶一碗を啜(すす)つてゐるといふことであつた。成る程、茶は能く炙煿の毒を解するものだといふことが首肯(うなづ)かれる。

楊士瀛曰く、薑茶は痢を治す。薑は陽を助け、茶は陰を助け、いづれも能く暑を消し、酒食の毒を解し、且つ一は寒、一は熱であつて陰陽を調平するのである。赤、白、冷、熱を問はず、これを用ゐるがいづれも良し。生薑を細切し、眞茶と等分を新水で濃煎して服す。蘇東坡はこれを以て文潞公を治療して效があつた。

時珍曰く、茶は苦くして寒であり、陰中の陰であつて、沈であり降であり、最も能く火を降す。火に因るあらゆる病は、火が降れば上が淸する。しかし火には五火あり、虚、實があつて、少壯にして胃の健なる人の場合には、心、肺、脾、胃の火が多く盛であるから茶と相宜しく、溫飮すれば火が寒氣に因て下降し、熱飮すれば茶

ナリ。又便所ニ撒布スレバ臭氣ヲ止メ或ハ之ヲクスベテ臭氣ヲ消ス。(生藥學)(邦藥植、一三八)

(成分補)

茶名	百分中茶素ノ含有量
川柳	一・三八〇
相生	一・九〇〇
若葉	一・八〇〇
喜代葉	二・五〇〇
鷺ノ峯	二・四四〇
千代ノ友	二・四〇〇
清壽	二・八八〇
花橘	二・八六〇
玉峯	二・九六〇

右ハ明治十九年ノ實驗ニヨル(下山生藥學)

玉露	一・八六
綾鷹	二・〇五
蒼雪	二・〇八
梅衣	二・三五
露花	二・九七

右ハ市販ノ最上等ノ茶ニツキ明治四三年十二月東京醫科大學

は火氣を借りて升散する。又、兼ねて酒食の毒を解し、人をして神思闓に爽にして昏せず睡らざらしめる。これは茶の功である。虛寒、及び血弱の人の場合には、これを飲むこと久しくすれば脾、胃が惡寒し、元氣が暗に損じ、土が水を制し得ず、精血が潛虛し、痰飲を成し、痞脹を成し、痿痺を成し、黄瘦をなし、嘔逆を成し、洞瀉を成し、腹痛を成し、疝瘕を成し、種種なる內傷をなす。これは茶の害である。一般民衆の日日に用ゐてこの弊害を承け積むものは、往往にしてみなこの害の方を受けてゐるのであるが、中年以上の婦人は害を受けることが更に多い。一般俗間の習慣となつてゐるから自らそれを自覺せぬだけである。況や眞茶は元來少く、雜茶の方が更に多いのだから、その患害たるや、また勝げて言ふべからざるものだ。世間には茶を嗜んで癖となるものがあり、時時に咀啜して止まず、久しくして營を傷め、精を傷め、血の色が淸淨ならず、黄瘁し、痿弱し、かくて病に臥してもなほその害を後悔せぬといふは尤も嘆かはしいことである。

晉の干寶の搜神記の記載に『武官は、時、因に時病後に茗を啜り、一斛二升まで啜ると止み、纔に升合を減ずるとそれでは不足であつたが、ある人が更に五升を進めて飲

藥學教室（現、東京帝大醫學部藥學科教室）ニ於テ定量セル結果。（生藥學）

	カフエイン％（平均）	單寧（平均）
印度茶	2.78—4.91(3.45)	13.32—14.98(14.33)
錫蘭茶	2.34—4.14(3.25)	10.13—13.91(12.29)
支那茶	2.62—3.75(3.04)	7.27—10.94(9.50)

（ウ植、七七九）

（註）原文「周時病後」トアルハ「因時病後」ノ誤ナルガ如シ。

ませると、忽ち一物を吐出した。その狀態は牛脾のやうなもので、口がある。茗を澆いで見ると一斛二升まで飲み盡した。そこで更に五升を澆いで見ると、その時は溢出した。そこで世人はこの病を斛茗瘕と呼んだ』とある。茶を嗜むものはこれを觀て戒となすべきである。陶隱居の雜錄に『丹丘子、黃山君は茶を服して身輕く、骨を換へた』といひ、壺公の食忌に『苦茶は、久しく食すれば羽化する』といつてあるは、いづれも方士の謬言であつて、世を誤るものである。按ずるに、唐の補闕母炅の序に『滯を釋き、壅を消するは、一日の利にして暫く佳きなり。瘠氣し、精を侵すは、終身の累にして斯れ大なり。益を獲れば功を茶力に歸し、患を貽せば茶災を謂はず。豈福は近くして知り易く、禍は遠くして見難きに非ずや』といひ、又、宋の學士蘇軾の茶說には『煩を除き、膩を去る。世故に茶なかるべからず。然れども暗中に人を損ずること少からず、空心に茶に鹽を入れて飲めば、直ちに腎の經に入り、且つ脾、胃を冷す。乃ち賊を引いて室に入るなり。惟だ飲食後に濃茶にて口を漱げば、旣に煩膩を去るものであつて、脾、胃は知せぬ。且つ苦は能く齒を堅くし、蠹を消する』といつたのは、深く飲茶の妙を得たものだ。古人は茗を呼んで酪

奴といつたが、やはりこれを賤しんだのである。予（時珍）は若くして氣盛な頃、毎に新茗を飲み、必ず數椀まで飲んだ。それで輕汗を發して肌骨が淸く、頗る痛快を覺えたが、中年には胃の氣が稍損じ、これを飮むの害を爲すことを覺え、痞悶、嘔惡せねば腹冷し洞泄した。故に備に諸說を述べて同好の人人に警告する。又、濃茶は能く人をして吐せしめる。これは酸、苦は涌泄して陰たりの義であつて、その性は能く升るものではないのである。

【附方】 舊六、新十三。【氣虛頭痛】 上春茶末を調へて膏にし、瓦盞內に置いて覆轉し、巴豆四十粒を二回に用ゐて烟に燒いて熏じ、晒乾して乳細し、一字づつを別の好茶末に入れて食後に煎じて服す。立ろに效がある（醫方大成）【熱毒下痢】孟詵曰く、赤、白下痢には、好茶一斤を炙いて末に擣き、濃煎して一二盞を服す。久患の痢にもこれを服するが宜し。○直指では、臘茶を用ゐ、赤痢には蜜水で煎じて服す。白痢には連皮自然薑汁と水とで煎じて服す。二三服で癒える。○經驗良方では、蠟茶二錢を用ゐ、湯に點ること七分にして、麻油一蜆殼を入れて和して服す。須臾にして腹痛し、大いに下して止む。一少年にこれを用ゐて有效であつた。○あ

る方では、蠟茶末を白梅肉で和して丸にし、赤痢には甘草湯で服し、白痢には烏梅湯で服す。各百丸。○ある方では、建茶に醋を合せて煎じ、熱服すれば止む。【大便下血】營衞が氣虛し、或は風邪を受け、或は生、冷のものを食し、或は炙煿のものを啖ひ、或は飮食過度で腸間に積熱し、脾、胃に傷を受けて糟粕を聚らざらしめ、大便に淸血を下利し、臍腹に痛を作し、裏急後重するもの、及び酒毒一切の下血、いづれも治す。細茶半斤を碾つて末にし、百藥煎五箇を燒いて性を存したものを用ゐ、毎服二錢を米飮で服す。一日二服。（普濟方）【產後の祕塞】葱涎で蠟茶末を調へて丸にし、百丸を茶で服す。自ら通ずる。大黃の利藥を用ゐてはならぬ。利すれば百に一も生きない。（郭稽中婦人方）【久年の心痛】十年、五年のものには、湖茶を煎じ、頭醋で和勻して服するが良し。（兵部手集）【腰痛で轉じ難きもの】煎茶五合に醋二合を投じて頓服する。（孟詵食療）【茶を嗜んで癖と成つたもの】ある人がこれを病んだとき、一方士が、新鞋に茶を盛り滿して任意にそれを食し盡させ、再び一鞋に盛つて食はせ、かく三回試みれば自ら喫しなくなる。男には女の鞋を用ゐ、女には男の鞋を用ゐよといつた。それを服すると果して瘉えた。（集簡方）【諸中毒を解す】芽茶、

白礬等分を末に碾り、冷水で調へて服す。(簡便方)【痘瘡の痒きもの】室内で茶を焼き、その烟で恒に熏ずるが宜し。【陰囊に瘡を生じたるもの】蠟面茶を末にし、先づ甘草湯で洗つて後に貼るが妙である。(經驗方)【脚椏の濕爛】茶葉を嚼み爛らして傅けるが效がある。(攝生方)【蠼螋尿瘡】初には糝粟ほどで、次第に大きくなつて豆ほどになり、更に大きくなつて火烙漿炮のやうになり、疼痛して甚しきに至るものである。速に草茶、幷に蠟茶を倶に生油で調へて傅藥にするがよし。至つて痛むものもそれで止む。(勝金方)【風痰顚疾】茶芽、巵子各一兩を煎じ、濃汁一椀を服し、良久して探吐する。(摘玄方)【霍亂煩悶】茶末一錢を水で煎じ、乾薑末一錢を調へて服すれば平安になる。(聖濟總錄)【月水不通】茶淸一瓶に炒餹少量を入れ、一夜露して服す。三个月の胎でも通じる。輕視してはならぬ(鮑氏)【痰喘欬嗽】睡臥し得ぬには、好末茶一兩、白殭蠶一兩を末にし、盌内に入れて蓋定し、沸湯一小盞を傾け入れ、就寢時に再び湯を添へて點服する。(瑞竹堂方)

茶子 氣味 【苦し、寒にして毒あり】 主治 【喘急欬嗽 痰垢を去る。仁を擣いて衣を洗へば油膩を除く】(時珍)

〔附方〕 新三。【上氣喘急】時に欬嗽あるには、茶子、百合等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、七丸づつを新汲水で服す。(聖惠方)【喘嗽齁鮐】大人、小兒に拘らず、糯米泔少量で茶子を磨り、鼻中に滴入して吸はしめ、口に入れて服し、口に竹筒を咬む。少頃して涎が線のやうに出る。二三回に過ぎずして根を絶つ。屢〻效驗を得た(經驗良方)【頭腦の鳴響】蟲蛀のやうな狀態のものを大白蟻と名ける。茶子を末にし、鼻中に吹入れて效を取る。(楊拱醫方摘要)

皐蘆(拾遺)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

〔校正〕 木部より此に移し入る。

〔釋名〕 茗蘆(弘景) 苦䕷 藏器曰く、南越志に『龍川縣に皐蘆といふがある。一名を瓜蘆といひ、葉は茗に似たものだ。その地では過羅といひ、或は物羅といふ。いづれも蠻夷語である』とある。

(一)〔集解〕 弘景の苦菜の註に曰く、南方に瓜蘆といふがある。やはり茗苦に似た

皐蘆ナたうちやニ充ツルハ非デアルト思ハル

(一) 木村(康)曰ク、〔原植物〕たうちや

Thea sinensis, L. var. macrophylla, Sieb. T. macrophylla, Makino. (Theaceae)
〔備考〕本邦ニ於テハ土佐、高知山中ニ自生ストイフ。東京附近ニ於テモ栽培シ製茶スルモノアリ、椿茶ト稱シテ販賣ス。(生藥學)
(二) 木村(康)曰ク、〔成分〕本茶ノ水分、灰分、越幾斯、鞣酸、カフェイン等ハ普通茶ト大差ナシ。カフェインノ含量ハ二・一五%ニ在ル、本茶ニ關シテハ藥劑誌一三八號(明、四三)ニ藥學士山科樵作及榊原讓吉兩氏ノ研究記事アリ。(生藥學)
〔用途〕普通茶用ニ供セラル。今ハ產額少シ。(邦藥植、一三九)

ものので、その葉を摘み取つて屑にし、煮て飲めば徹宵睡れない。鹽を煮る職業の者はただこれだけを飲む。而して交、廣ひは最も貴重視され、客があると先づこれを馳走し、それに香芼などの物を加へて出す。

李珣曰く、按ずるに、この木は卽ち皐蘆である。南海の諸山中に生じ、葉は茗に似て大きく、味は苦く澀い。新平縣に產する。南方の地では取つて茗として飲み、極めて重んずること蜀地方で茶を飲むやうなものである。


〔皐　蘆〕

時珍曰く、皐蘆は、葉の狀態は茗のやうで、大いさは手掌ほどある。挼み碎いて泡けて飲む。最も苦くして色は濁り、風味は北茶の及ばぬこと遠い。現に廣地方でこれを用ゐ、苦䔲と名けてゐる。

葉(二)〔氣味〕【苦し、平にして毒なし】時珍曰く、寒である。胃冷のものは用ゐてはならぬ。〔主治〕【煮て飲めば渇を止め、目を明にし、煩を除き、人をして睡らざらしめ、痰を消し、水を利す】(藏器)【小腸を通じ、淋を治し、頭痛煩熱

を止める】（李珣）【噙み嚥めば上膈を淸し、咽喉を利す】（時珍）

本草綱目果部第三十二卷　終

昭和八年二月十七日印刷
昭和八年二月二十日發行

頭註國譯本草綱目（第八冊）菜・果部

非賣品

翻譯者　鈴木眞海
東京市日本橋區通三丁目八番地

發行者　和田利彥
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者　氣賀林一
東京市日本橋區通三丁目八番地

刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行

東京
春陽堂
出